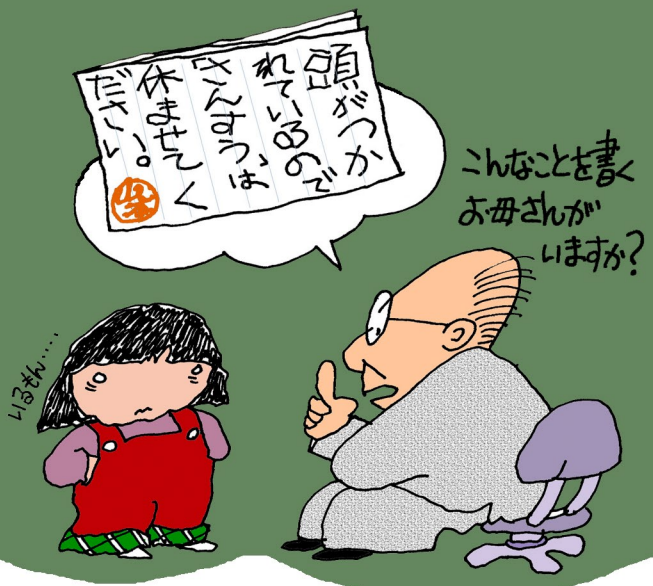
連載専門誌

対人援助学マガジン



vol. 12 No. 1

第45号

June 2021

対人援助学会

NO. 45　MOKUJI

目次		002-003
ハチドリの器	見野　大介	004
執筆者@短信	執筆者全員	005-018
障害者福祉援助論	千葉　晃央	019-022
臨床社会学の方法(33)	中村　正	023-032
人を育てる会社の社長が、今考えていること	団　遊	033-036
カウンセリングのお作法(27)	中島　弘美	037-042
集団精神療法について(6)	藤　信子	043-045
エア絵本-ビジュアル系子ども・家族の理解と支援(12)-	岡田　隆介	046-052
「Family history」(4)	団　士郎	053-057
社会的養護の新展開　14	浦田　雅夫	058-059
幼稚園の現場から　45	鶴谷　主一	060-064
福祉系対人援助職養成の現場から45	西川　友理	065-071
ああ、相談業務	河岸　由里子	072-075
生殖医療と家族援助	荒木　晃子	076-078
ドラマセラピーの実践・研究・手法(5)	尾上　明代	079-084
対人援助学＆心理学の縦横無尽(30)	サトウタツヤ	085-099
きもちは言葉をさがしている(44)	水野　スウ	100-107
ノーサイド(35)	中村　周平	108-110
路上生活者の個人史(3)	竹中　尚文	111-114
男は痛い！(39)	國友　万裕	115-122
役場の対人援助論(37)	岡崎　正明	123-127
臨床のきれはし(13)	浅田　英輔	128-131
発達検査と対人援助学(4)	大谷　多加志	132-134
講演会＆ライブな日々(27)	古川　秀明	135-144
家族と家族幻想(6)	坂口　伊都	145-149
周辺からの記憶　―東日本大震災家族応援プロジェクト―(31)	村本　邦子	150-190
対人支援　点描(26)	小林　茂	191-192
精神科医の思うこと(21)	松村　奈奈子	193-195
馬渡の眼	馬渡　徳子	196-198
東成区の昭和　やぶにらみ日記	柳　たかを	199-206
心理コーディネーターになるために	山下　桂永子	207-209
そうだ、猫に聞いてみよう(22)	小池　英梨子	210-215
マガジン執筆者訪問記(2)ねこから目線。	大谷　多加志	216-230

先人の知恵から （32）	河岸　由里子	231-235
うたとかたりの対人援助学 （18）	鵜野　祐介	236-239
あぁ結婚 （18）	黒田　長宏	240-242
PBLの風と土（17）	山口　洋典	243-248
接骨院に心理学を入れてみた（16）	寺田　弘志	249-253
現代社会を『関係性』という観点から考える（16）	三浦　恵子	254-258
マイクロアグレッションと私たち（最終回）	朴　希沙	259-262
保育と社会福祉を漫画で学ぶ（13）	迫　共	263-266
「余地」―相談業務を楽しむ方法ー（15）	杉江　太朗	267-270
統合失調症を患う母とともに生きる子ども（番外編③）	松岡　園子	271-274
生体肝移植ドナーをめぐる物語（13）	一宮　茂子	275-289
こころ日記「ぼちぼち」 partⅡ	脇野　千惠	290-292
母のものがたり	高名　祐美	293-296
原田牧場 Note（6）	原田　希	297-298
かけだ詩（5）	川畑　隆	299-303
ブルーグレーの肖像（5）	天川　浩	304-308
応援、母ちゃん（5）	玉村　文	309-313
HITOKOMART	篠原ユキオ	314-317
キャリアと文化の心理学	土元　哲平	318-322
フランスのソーシャルワーク	安發　明子	323-380
コロナ禍の中「幾度となく会い、語りあうことの意味」を考える	本間　毅	381-387
この世界で生きるあなたへ -国境なき医師団の活動をふりかえって-	河野　暁子	388-390
2 回目　川下の風景	米津　達也	391-392
2 回目　一語一絵	畑中　美穂	393-395
2 回目　福祉教育への挑戦	高井　裕二	396-398
新連載　対人援助実践をリブートするこの一冊（1）	渡辺　修宏　他	399-406
新連載　対人援助実践をリブートするこの一冊（2）	渡辺　修宏　他	407-413
新連載　中国のセクシャルマイノリティ支援	劉　強	414-416
新連載　島根の中山間地から Work as Life	野中　浩一	417-421
新連載　夫の腎臓と笑う私	両角　晴香	422-424
新　対人援助学マガジン読書会報告＆第 2 回読書会告知	編集部	425-426
編集後記	編集長＆編集員	427-428

ハチドリの器 28

見野 大介

Mino Daisuke





右上：蒼天釉菓子鉢
右下：樫灰釉浅鉢
左上：樫灰釉波紋角皿
左下：鳥ノ子釉勾玉鉢





第 45 号
執筆者
@短信

両角　晴香　新連載

2018年3月に夫から腎臓を一つわけてもらう手術を受けました。

腎臓病と出会った 10 代も、夫と、死産した息子と出会った 20 代も、腎移植医療と出会った 30 代も、すべてが思い出深く、わたしの宝物です。40 代早々、幸先のよいスタートをきれたなと思っているのは、植物の魅力を発見できたからです。わたしも夫もいつか土にかえるけれど、植物はこの先何十年、何百年も地上で生き続けます。あなたたちにはとても敵わないよ、と敬意を込めて植物のお世話をするのが今のわたしのしあわせです。

夫の腎臓と、笑うわたし
P422～

渡辺　修宏　新連載

初めまして、渡辺修宏と申します。2020年度の対人援助学会年次大会の企画ワークショップ、『対人援助実践をリブートするこの 1 冊』』を企画させていただいた三人（私と小幡知史、二階堂哲）で、なぜその企画が生まれたのか？どんなワークショップだったのか？それが私たちにとってどんな意味や機能を、そして未来をもたらしてくれるのかについて、雑多に語らせていただきたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

対人援助実践をリブートする
この一冊
p399～

劉　強（リュウ　キョウ）新連載

私は現在、中国人男性同性愛者の家族へのカミングアウトを中心に、研究を取り組んでいます。調査活動を行う中、さまざまなバックグランドを持つ方と出会えました。その人らが経験したことや中国のセクシャルマイノリティに対する支援などについて書いてみたいです。お読みいただければ嬉しいです。

中国のセクシャルマイノリティ支援
p414～

野中　浩一　新連載

15 年前に島根県に移住し、以来、フリースクールの運営をしています。近年は中学校にスクールカウンセラーとして入らせてもらったり、評議員として養護学校に関わらせてもらったりもしています。

わが家の窓に目を向けると眼下には新緑の田畑が広がり、周辺の木々が風にそよいでいます。子どもの頃に父の転勤のため全国各所の街中を転々としてきた私は、自然が感じられる田舎に憧憬を求めて、妻とともに島根県に移住しました。

とはいえ、実際に暮らしてみれば良いこと半分、そうでもないこと半分。わが家の周りの雑草や竹はやんちゃに伸び放題。放っておくと家が草と竹で覆われます。光回線が通っておらず、Wifi も地域制限のため 30GB まででストップ。冬は家や車が雪に埋まり、出勤前に雪かき必須の日もあります。こうした自分ではどうにもできない不便さを受け入れつつ生活することも悪くないなと思いながら 15 年間過ごしてきました。

このマガジンでは、島根の中山間地での暮らしや地域との関わり、フリースクールやカウンセラーの仕事について、ぼちぼち連載できたらと思っています。ご一読いただけると喜びます。

「島根の中山間地から Work as Life」
P417～

畑中美穂　第二回

新聞に「マスク越しでも心は近く　初対面、顔全体を見せる工夫を」（5 月 24 日付朝日新聞）の記事をみつけた。「あ！　私、やっています！」と挙手したくなった。元々、講義を受け持つ心理学の第一回目の授業では、“実験”として、教室に入室して名前だけを名乗り、直後にその声と姿だけを頼りに「畑中先生はどんな人だと思うか？」をレポートさせ、導入にしていたほどである、マスクがどのような効果を持つかには関心があった。小学校の性教育の折には、「マスクを外した顔はこんなです～！」とマスクを外してにか一っと笑ってみる。すると子どもたちは喜び、かなり恥ずかしい気持ちを押してもやってみてよかったと思うのである。

今、心理学を教える学生は再びオンラインでの授業。4月からの対面授業ではくだんの登場に加え、講義スライドの隅っこに顔写真を貼り付けて顔をちらちらと見せてはいたが、初めてのオンライン授業の際のレポートに、「先生の笑っている顔が見えてうれしかった」「いつもよりいきいきとしていて、楽しそうだった」との感想が記されていた。そう、私も大好きな授業である。学生の方は、オンラインでもざっと 4 分の 3 の学生はマスクをしたままであり、さみしい気がした。学生同士もまだ、お互いの顔を見たことがないのだ、多分。それは外すことにも不安があろう。「ハタナカセンセイ、みなさんと笑い合いながら、授業ができる日を楽しみにしています。みんな、元気でいてね！」 そのように願うばかりである。

一語一絵
p393～

米津達也　第二回

10 年程前からマウンテンバイクにはまり、許される範囲で山々で遊ばせてもらっている。



そして、5～6 年前から山歩きにはまり、近年はブームに乗って、トレイルランニングの真似事も楽しむようになった。ソロキャンブームだが、今年は是非 3,000m級でテント泊を、とコツコツ一式揃えてみたものの、早々に梅雨入りの報道を見て落胆。ただでさえ狭いクローゼットに並んだ大小バックパックの数々を見て妻が一言。「背

負う背中はひとつしか無いんやで」。しかし、こちらも負け時の一言を。「登る山はひとつじゃない」

川下の風景
p391～

高井裕二　第二回

連載 2 回目にも関わらず、原稿がなかなか完成しませんでした。連載をずっと続けている皆さまを心から尊敬します。今回は、教科「福祉」について自分の経験も混ぜなら記述しています。

福祉教育への挑戦
P396～

本間　毅

今回から私が研究と併行し続けている「リハビリテーション医療」について話します。

私の勤務する病院は、赤穂浪士随一の剣客「堀部安兵衛」の故郷として知られる城下町新発田にあります。のちの堀部安兵衛こと中山武庸は生後すぐに母を亡くし、13 歳の時に城で起きた櫓の失火の責任を負わされた父とともに脱藩します。程なくして父弥次右衛門は亡くなり、安兵衛は親類縁者を転々としながら剣の腕を磨き、江戸は堀内道場の四天王と呼ばれるまでになりました。同門の菅野六郎左衛門の果たし合いを安兵衛が助太刀したエピソードが「決闘高田馬場」です。その武勲を聞いた播州赤穂の浅野家家臣「堀部金丸」に請われて婿養子になり、安兵衛は馬廻り役として上司の警護や吏僚の役を果たしました。武芸のみならず、彼が残した『堀部武庸日記』は当時の歴史を知る上で重要な資料とされています。享年 34 歳といわれる安兵衛の生涯は、文武（研究と実践）成就を目指し、進むかと思えば行き詰まり、思わぬ助力を得ると次なる難題が待ち受ける、対人援助の遙かなる地平の先を目指す我々のそれと似通っているような気が致します。

追伸、ナラティブ・心理関連の遠見書房から 3 月末に拙著、『患者と医療者の退院支援実践ノート』を出版しました。私自身が本学会で発表したテーマに関する考察も記述しました。初版で 500 冊に到達しないと文字通り「一巻の終わり」とのこと。今のところ、第二巻を書く予定はありませんが、興味のある方はお買い求め下さい。



「幾度となく会い、
語りあうことの意味」
P381～

河野暁子

冬の間放置していた畑から、野菜やハーブの芽が出始めました。あんなに雪が降ったのに、土の中で生き延びていたのかと、とても驚きました。畑を耕すと、大きなミミズがうじゃうじゃ出てきました。三つ葉や青じそは、元々は庭に勝手に生えていたのですが、私は雑草かと思い、特に気にしていませんでした。昨年、新型コロナウイルスが発端となり、自給自足生活を目指したい知人とともに、畑づくりにチャレンジしました。その時、「これは食べられる」と聞き、三つ葉や青じそを畑に植え替えたのでした。

私の住んでいる家の庭は、私の知らぬ間に鉢植えが置かれていったり、花が植えられていったりします。ペパーミントやアップルミントなどは、こうしてやってきました。仲間うちでは、「どうやら笠地蔵が来たらしい」「笠地蔵してきました」「笠地蔵に行きます」などとやりとりしています。

三つ葉はぐんぐん育ち、おすそ分けするほどになりました。これから夏に向かって、ミントや青じそが育つのが楽しみです。

この世界で生きるあなたへ
～国境なき医師団の活動～
P388～

土元　哲平

【庭の研究をはじめました。】

文化心理学という観点から見ると、「庭」はとても面白いテーマです。文化心理学では、自然と文化との関係を考えています。その関係が直接的に表れるのが庭です。庭は、権力の象徴とされたり（ヴェルサイユ宮殿、日本だと大名庭園など）、宗教的（枯山水、密教思想など）・神話的（エデンの園など）な意味合いと結びついたりと、集合的文化に関わっています。一方で、お気に入りの庭や、思い出の庭など、個人的文化としての庭もあります。癒やしや人との交流という意味でも、庭は大切ですね。個人的文化と集合的文化を結びつける「庭」を文化心理学ではどのように理解していくのか、考えているところです。



個人的な庭といえば、最近、「京阪園芸」さんに遊びにいく機会があり、ついついバラを衝動買いしてしまいました。敷地全体がバラ園のようになっており、オープンカフェもあります。見るだけでも楽しめる場所でした。

キャリアと文化の心理学
P318～

安發明子

新型コロナウイルスでフランスでは既に 10 万人を超す死者を出している。先週調査先の 30 代の在宅支援を担うワーカーが亡くなった。コロナにかかり休むと連絡があった数日後のことだった。在宅支援ワーカーは毎日家庭訪問をして親子全員をサポートしている。親子を分離する保護をなるべく減らすためワーカーが家庭に通う形の支援は増える一方だ。支援している家族と一緒に家事をしたり休日子どもを連れ出したりしている。外出禁止中も活動をやめることなく家庭に通い続けた。ワーカーは3年間の専門学校か大学に通い 1450 時間の理論と 2100 時間もの現場実習を経て国家資格を受験している。フラ

ンス国立工芸院のソーシャルワーク研究科修士課程には 70 人もの実務者が通っていた。しかし経営学の修士課程を卒業し銀行に就職し月 70 万円の給料を得る同級生がいる横でソーシャルワーカーたちは修士を卒業しても 19 万円ほどの給料しか受け取らない。パリ市内の 50 平米のアパート家賃平均と同額である。多くのワーカーは遠い郊外から通う。

フランスではストがさかんで、労働者が戦って権利を得てきた歴史がある。しかし子どもや困っている人を相手に仕事をするソーシャルワーカーたちは滅多にストをしない。公務員が大がかりなストをしていても彼らはいつも仕事をしていた。「給料が低いことでこの職業選ぶのを迷わなかった？」と聞くと「昔は修道士やボランティアがしていたのにこんな素晴らしいことを仕事としてできて生活できるなんてありがたい」など真顔で答える。親族全員ソーシャルな仕事をしているという人も多くいる。「ミリタン」という言葉がよく使われるが「社会を良くする活動をライフワークとする」という意味合いだ。熱い仲間がたくさんいるからこそ、ミリタンを生き方として選択し続けているようにも感じられる。誇りを持ち元気に柔軟に仕事をしているフランスの福祉の現場の人たちに会いに行くのが楽しみでずっとこのフィールドにいるが、とても悔しい。

フランスのソーシャルワーク
P323～

玉村　文

2021 年 4 月に産休に入り、予定日より早く 4 月 22 日に第二子を出産しました。今回は、コロナ禍での出産について、わたし自身の体験をまとめてみました。出産の過程で、出産の経過は毎回違うこと、でも経験が活きることもあると身を以て体験しました。今年度は、産休育休を取得し、子育てがメインの生活が始まります。社会問題になっている「産後鬱」。コロナ禍でますます孤立した育児を余儀なくされることもあるかもしれません。自分を孤立させないこと、応援し合える状態を作っておきたいと思っています。

応援　母ちゃん！（1）
P309～

川畑　隆

「他府県に行っちゃいけないのに、このあいだ行ったのよね。車のナンバー見られないように駐車場の奥のほうに入れたけど。こんなこと言わないほうがいいのかしら」…でも、言いたいのよね。府県境に線が引かれてるわけでもないし、引かれてたとしても地続きのこっちとむこうで何が違うのよね。実質じゃなくて名目で動かなくちゃならないことって、何か溜まるよね。

こんなやりとりを何度かした今日この頃。やっぱり昨今のしんどさの根源は、ウィルスが目に見えないことなんじゃないでしょうか。どこかで可視化実験をやってる人がいたりして…。でも、もしウィルスが見えたりしたら大パニックでしょうね。自粛どころじゃなく避難です。ふと思ったのですが、戦争やテロを経験している人たちと、そうでない人たちとの間で、ウィルスに対抗する姿勢も何か違ったりするんでしょうか。見えてなくても見えたときの残像がかなり残っているみたいな…。でも、鉄砲の弾とウィルスはだいぶ違いますかね。ウィルスは見えないから「ない」みたいなのと、府県境と同じように見えないけどまるで見えるかのように「ある」のとの間にいろんな感覚や認識があって、ここらへんでみんなで構えとこうかというちょうどいいところが、なかなか定まりませんね。

「かけだ詩⑤」に過去に書いた歌詞を載せましたが、オンラインストレージの firestorage にその「歌」をアップしました。よかったら URL を入力して聴いてやってください。

「かけだ詩　④」
p299～

天川　浩

梅雨って頭ガンガンに痛くなるのでめちゃくちゃ嫌なのですが、皆様はいかがお過ごしでしょうか？五月に梅雨なんてもう日本は亜熱帯から、熱帯性の機構になってきているのではないでしょうか？季節感も失われつつあり、そのうち雨期、乾期の二区分になってしまうのではないでしょうか。冬にスコールが降ったり、ゲリラ豪雨が頻繁に起こったり、まさに熱帯になるのではないでしょうか。なのに二酸化炭素は地球温暖化の最重要要因ではないとか聞くと、冷房を 28℃に設定して涙ぐましい努力をしているのが切なくなってきますよね。まあ、何が言いたいかと言うと、山芋やニラを食べて、梅雨バテを乗り切れば、夏バテもしにくくなるということをお伝えしたかった次第でございます。

ブルーグレーの肖像
P304～

篠原ユキオ

ずっと外出を控え、古い日本映画を見まくっている。　　。



昔から小津安二郎は大好きだったが、成瀬巳喜男、溝口健二といった巨匠たちの作品にも唸らされている。幼少期から祖母に連れられ頻繁に映画館に通っていた僕だが、リアルタイムでそういう作品を見る機会が少なかったのはやはりその作品が小さな子供には不向きな内容だったからかもしれない。

しかし今、見直してみると芸術性も高く、それぞれに一貫した監督の社会的メッセージが込められているのに感心する。

昨今の映画に目立つ過激な暴力や残虐シーンも性表現も用いないが、巧みに全てを表現して見せる品格の高さが心地良い。

そして演じる役者たちがみんな個性的で主役も脇役も輝いている。

昭和の巨匠たちが残した名作映画は半世紀を過ぎて今の私に新鮮な感動を与え続けてくれている。

HITOKOMART
p314～

原田　希

アニメに登場しそうなマシーンで削蹄をしてもらいました。春は爪や皮膚が柔らかくなるため、トラブルが出る前に手入れをします。削蹄後の牛さんは、皆びっくりして

不機嫌顔ですが、爪がシャッキリして歩行は軽快。乳量も1割アップしました。人間も同じで、足は全身を支える生命線です。私も筋力アップのスクワットと、ときどきネイルで充足したおうち時間を過ごしています。

原田牧場 Note
p297～

工藤　芳幸

今号は休載させていただきます。職場の大学では、新年度になってからひたすらオンデマンド配信の授業が続き、その録画のために普段の 2，3 倍程度の時間を準備に費やしています。オンデマンド制作することで、いつもはその場の雰囲気や学生さんの反応から構成していた部分を一つずつ見直していることから、多分…完成度は高くなっているかも知れませんが、とにかく毎週のように深夜までかかって作り、配信のセットをして朝から出勤を繰り返しているような 2 か月でした。

学生の反応も知りたいので、一応コメントや感想を書いてもらっているものの、今一つ様子がつかめない中の暗中模索が続きます。見ている方もオンデマンド配信ばかりの授業ではきついだろうなあ…と思い（私ならば頭痛が発生してとても長時間配信動画を見ることはできない）、できるだけシンプルで、見やすくしようと細かな工夫を凝らしていると長時間の作業に、「教材屋」になったような気分です。

もう 1 つの気がかりは、私が所属している言語聴覚学専攻では、今まさに逼迫している医療現場での臨床実習があり、その受け入れの可否をめぐってさまざまな調整をしている日々でもあることです。昨年度は医療系の実習はほとんど実施できない状態でした。今年も難しい状況が続きます。昨年に比べると多少は状況が変化してきているので、今年の学生はできるだけ実習ができるようにと願っています。

テレビで新人の看護師がコロナ病棟に配属された様子を取材したドキュメンタリーを放映していました。学生時代にほとんど医療現場での実習ができなかったこともあり、現場での対応への不安感の高さが見てとれました。恐らく今年度の 4 月は、どの対人援助の現場でも同様のことが起こっているのだと思います。臨床実習教育も、現場での OJT も、あるいは働き方も、十分にできない中でどのように学生や新人を迎え入れるのか？次につなぐのか？という社会の包容力が問われている時期かも知れません。

私が関わっている福祉の現場でも、この 3 月に所長が退職して非常勤として関わるようになりました。多少時間的に余裕が出たからなのか、私に子どもや親子の「見立て」について、これまで以上に話してくれているような気がします。次の世代につないでいくということ、前の世代から受け取るということを、今更ではありますがだいぶ考えるようになりました。

みちくさ言語療法
休載

高名祐美

この原稿を書いている今日は、「母の日」。いつも何を書くかを決めるまでに時間がかかってしまう。今回もあれこれ悩んだ。決め手は「母の日」だった。そうだ、母のことを書いてみよう、母を中心に私の家族のものがたりを書いてみようと思い立った。前回までは、現役の MSW として出逢った事例を振り返り、「バイステックの 7 原則」を再考してきた。退職を機に、テーマを「家族理解」に変更しようと思う。

毎日、新型コロナウィルスに関するニュース。緊急事態宣言やまん延防止。自粛生活を強いられて、家で家族と静かに過ごすしかない日々。今一度、自分の家族をみつめていこうと思う。

MSWという仕事
P293～

岡田隆介

声高にステイホームが叫ばれる時代に、嘱託・パート・フリーランスとして県内4箇所で働く日々。

しんどいとか辛いと感じたことはない、むしろ楽しい。生き甲斐ではないし大層な使命感もない、だから楽だ。人間関係は煩わしく新しい知識も身につかない、それでも楽しむコツはわかっている。

とはいえ車の運転同様、プシの仕事を辞める日は確実にやってくる。それでも、パワポ芸人だけは最期までやめないだろうな。



エア絵本
ビジュアル系子ども・家族の理解と支援
P46～

一宮　茂子

【MLB Angels SHOHEI OHTANI】

新型コロナの影響で世界全体が閉塞しているような現在、ベーブ・ルースと比較される大谷翔平選手の「100 年に 1 度」の活躍が人々の励みになっているとの記事に同感。彼は身長 193 ㎝、体重 102㎏。26 歳。メジャーリーガーにひけをとらない堂々たる体格。ユニホーム姿だとわかりにくいけど、上半身も下半身も筋肉隆々に鍛えあげて、投打の二刀流のみならず、外野手としても活躍する三刀流。バッターのときは、初球からフルスイング、いつも全力疾走。長い足で力強い疾走は速くて美しい。印象深いのはホームランを打ったときの打撃音。彼は感触でホームランを確信してボールの軌道を見上げてから歩き出す。メディアはこれを「確信歩き」とネーミング。ピッチャーのときは、初回から 100 マイルの剛速球。強打者を三振に打ち取りマウンドで吠え、ガッツポーズを見せ、感情をあらわにする。自信みなぎる 100%出力の姿にファンは声援を送り、チームはサポートしている。エンジェルスのマドン監督は「彼のプレーにはものすごいエナジーがある。エキサイトし、よく笑い、熱中している」と評価。結果が出なくても監督は「ありのままでいい」と背中を押し続けている。

前例のない二刀流の道。彼は「周りの人が協力してくれて、流れに乗ってここまで来た」といつも謙虚な発言。小顔でイケメンの大谷選手の活躍と笑顔。いつも届けてくれてありがとう。今年はどうかケガなく活躍できますように日本から応援しています。

生体肝移植ドナーをめぐる物語
P275～

松岡　園子

年明けからの生活変化も、すっかり自分のスタイルになりました。夫は家事のほとんどをこなし、子ども達に関する用事も引き受けてくれています。

私は仕事を楽しんでいます。運ぶ、届けるお仕事は面白くて、今ハマっているの

がウーバーイーツや出前館などデリバリーのお仕事です。軽トラックでもしてきましたし、最近はバイクで走ることが増えてきました。

時給や月給ではなく、1 件あたりの配達報酬を積み上げていく形の契約で働きます。自分の空いた時間で、好きなだけ働く。効率よく仕事をするために、頭も体もよく使います。じっとしているのが苦手な私にぴったりのお仕事で、没頭している間に夫の以前の月収を超えてしまいました。

母に仕事の話をすると、「やっぱりあんたやね」と言います。「やっぱり私やわ」と自分でも思います。何でもする、とことんする、楽しんでする――今号で描いた「ゆり」ともつながる部分があります。

自分ではそのつもりはなくても、人生の岐路において選択することが周りの人とあまりにもかけ離れていたり、それまで過ごしてきた世界とは全く違う世界に飛び出していくと、周りにいる人をビックリさせてしまうことがあります。でも私の恵まれているところは、そのような選択を面白がって、応援してくれる人が周囲にたくさんいることです。

統合失調症を患う母とともに生きる子ども(番外編)
P271～

杉江　太朗

児童福祉の現場で働く杉江と言います。前回の短信で書いた駐車場ですが、今まで白線等もなく自由に駐車されていたのですが、この度、コインパーキング化されることになり、前回書いたときにも増して、駐車されている車が減りました。



今まで駐車されていた車はどこに行ったのでしょうか。別の場所を見つけて同じように駐車されているのでしょうか。今まで自由に出来ていたことでも、別の角度から見ると他者にとっては迷惑かもしれず、その状況が続いたり、度を越えたりしてしまうとルールが設定され厳格化に繋がります。今まで秩序を守っていた人にもそのルールは適応され、自由度を奪うきっかけになるかもしれません。私の周りを見渡してみても細分化が図られ、それぞれのルールが厳格になり、そのルールに縛られてしまうことで結果的に自由度を奪われたという領域があるような気がします。一定のルールは必要だと思いますが、そのルールの中で主体的に決定できる裁量は持ち続けたいものです。

「余地」−相談業務を楽しむ方法−
P267～

迫　共

緊急事態宣言下のゴールデンウィークに、静岡県が世界に誇る劇団 SPAC のギリシャ悲劇「アンティゴネ」(宮城聰演出)を観に行きました。2017 年「アヴィニョン演劇祭」からの招聘を受けた作品です。

駿府城公園の野外広場に巨大な足場が組まれ、何が起こるのだろうとワクワクして開演を待ちました。足場はなんと演者の影が投影される仕掛け。民謡や盆踊りのような群舞、精霊流しに打楽器バンドの生演奏が添えられ、日本文化を通して普遍的なテーマを解釈しなおすチャレンジが感じられました。

演劇を行う側、鑑賞する側の双方がリスク回避を求められる状況に適応し、変化する演劇の可能性も垣間見ることができました。

「アンティゴネ」はオイディプス王の次の世代が繰り広げる悲劇です。権力者の命じる人の法と、「かくあるべし」と信じられる神の法との間で引き裂かれる人間のあり方が描かれます。正義を通そうとして人の法に敗れ、命を奪われるアンティゴネですが、彼女を排斥した王にも悲劇が訪れます。

この物語が古典でありながらも現代性を失わないのは、ことの大小はともあれ、同じような出来事が多くの人の身に起こるからでしょう。チャレンジがあれば挑むのが人間、しかし全ての結果は、人間の願望やそれによる操作から離れた側面をもって出現するものだと思います。

コロナ禍の経験は、私たちにどんな結果をもたらすのだろう。古典からそんなことを考えた休日でした。

保育と社会福祉を漫画で学ぶ
P263～

朴　希沙(Kisa　Paku)

出産にともないお休みしていた連載ですが、子どもの保育園入園が決まり、無事再開できることになりました。そしてマイクロアグレッションについて 3 年半に渡り紹介してきた私の連載も、翻訳書(『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション−人種、ジェンダー、性的指向:マイノリティに向けられる無意識の差別』)の出版を機にここでいったん終えることにしました。連載開始当初はまだマイクロアグレッションという言葉がほとんど知られておらず、手探りでのスタートでしたが、この数年の間に少しずつ日本でも取り上げられるようになり、連載を読んでくださる方からのメッセージもいただくようになりました。マイクロアグレッションの紹介は詳しくは翻訳書に譲りますが、今後も引き続きこのテーマについて私なりに考え続けていきたいと思います。

そして次号からは新しいテーマで連載をリスタートする予定です。現在、私は子育て中ですが、私たちの暮らしは少し変わっています。どのように？我が家には実の家族(私や夫の親など)ではなく、かわるがわる近所の友人たちがやってきて、時には一生懸命、時にはのんびりと、子育てを一緒に担ってくれているからです。この取組みについて、面白いのでぜひ記録を残しておきたい、多くの方と共有したいと考え、「コミュニティが育つ、子どものいる暮らし(仮)」と題し、連載を始めていきたいと思っています。家族って何？家族以外の人にどうやって子育て手伝ってもらうの？子どものいる暮らしって？現代のコミュニティとは…？友人たちにも協力を得ながら、私達のリアルな生活、試行錯誤の日々をお伝えできたらと思いますので、どうぞご注目を！

マイクロアグレッションと私たち
P259～

浅田　英輔

去年、娘が大学落ちてしまったので、年子の息子とともにこの４月に大学生が二人になった。４月生まれの娘は、寮生活でバースデイケーキを顔にどーんとやられる動画を送ってきた。一人暮らしの息子は、さっそく友達もできて、夜中３時ごろに心霊スポットに行っている写真を送ってきた。二人とも大学生らしい生活をしていて何よりである。５人家族が突然３人になり、「さみしいでしょ」と言われるが、なによりも静かでよい。送迎もだいぶ少ない。洗濯物が少ない。学校からのプリント類が少ない。こんなもんでしょ。

臨床のきれはし
P128～

三浦　恵子

三度目の警戒事態宣言に加え東北では 2 月以降地震が続いています。遠距離介護や義実家の修復など個人的にも課題が山積していますが，医療現場の逼迫などを思うと自分の苦労などまだまだ･･･と思っています。もし私が，「仕事だけ」「家庭だけ」に集中していれば，コロナ禍の中で子どもや地域社会を支えるために奮闘している方々の姿に触れることもなく，その活動の端に連なることによって学びや勇気をいただくこともなかったでしょう。幅広に「見ようとする」ことで，自己や自分の家庭が抱えている課題だけに目を向けてそれに押しつぶされることなく過ごすことができているのだと実感しています。

職能団体の会議や各種の研修も全てオンラインで行うことが「当たり前」になりました。私の父方の菩提寺では Zoom による法要も開始されています。

対人援助職は日々自己の能力をアップデートしていく必要があり，こうした会議や研修の場に参加することはとても貴重です。その一方で，会議・研修を終えて Zoom の会議室から退出する時際に感じる一抹の「物足りなさ」はなんだろうかと感じるようになりました。会議では十分協議できたし，研修では質問もできたのに何故？と考えていたのですが，ある会議で，終了後有志が残ってざっくばらんに近況報告や身近な課題について話をする中でふと気付きました。

お互い働いている職域は異なっていても，会議の前後のこうした時間が実は貴重だったのだと改めて実感しています。

更生保護護官署職員
（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

現代社会を『関係性』という
観点から考える
P254～

黒田　長宏

私の連載は日記なので短信か本文か違いが無いのかも知れない。ヤングケアラーという言葉も聞くようになったが、母の日に私は、某世界一の通販大企業から注文した電気バリカンを母に与えて、整髪をしてもらった。母は喜んでいた。こんなことをしたら理髪店も大変だろうと思いながら。母には職場用の弁当も作ってもらっていたり、食事もそうである。母は75歳になるのだが、なにかがおかしいだろうか。いいや。再婚がとても難しいからである。

https://konnankyuujotai.jimdofree.com/

あぁ結婚
P240～

尾上明代

ちょうど一年前、コロナ禍によって私の散歩コースになった山道で、キンランという山野草に出会ったことを短信に書いた。そして、それがすぐに誰かに持ち去られ、根こそぎなくなっていたというとても残念な経緯があった。その山道には今でも頻繁に通っている。4 月には、見事すぎる大木の山桜を鑑賞できた。



そして 5 月初めのある日。何とあの「キンラン」の姿がそこにあった！ぽっかりと鮮やかな金色のような黄色と繊細な作りの花。

誰かに持って行かれたはずなのに、その根っこの一部が 1 年間ちゃんと土の中で生きて、今年も現れてくれたのだ。本当に嬉しい再会だった。道で生きている植物とのこのような再会に、文字通り心が躍る体験は初めてだった。

しかし！残念なことにすぐに誰かに持って行かれたのは、今年も同じであった。山道にいるお花は、そこを通る人たち皆で大切に鑑賞したいのに。毎年、1 日だけの出会いなのが悲しい。来年こそ、皆の良心に期待したい。

ドラマセラピーの実践・手法・研究
P79～

松村奈奈子

今年の梅雨入りは早かったー。

コロナもあって、雨で自宅で過ごす時間がさらにたっぷり。お恥ずかしいですが、本を読むというよりは YouTube で動画を見る時間が増えました。その結果、テレビを見る時間がどんどん減っています。

仕事では、数年前から若い患者さんの多くが余暇に動画サイトを見て、ほとんどテレビを見ないと聞いていました。

私も含めて、これがいい事なのか悪い事なのか、考えてしまう今日この頃です。

精神科医の思うこと
P193～

柳　たかを

ワクチン接種の申込書

新型コロナウィルスワクチン接種の申込書が送られてきた。2 通、我が家は妻と私の二人暮らし、共に前期高齢者だ。

大阪でもワクチン接種用の大規模会場の準備が急ピッチで進んでいる。「ワクチンを接種すれば感染リスクは大幅に減る」と接種を待望している人も少なくないと聞くが、接種後の副反応を心配する声も消えてないと思う。しかしながらもう世の中は 2 年あまりも緊急事態・自宅待機の日々。一刻も早く元の生活を取り戻したいと誰もが願っている。

いろいろ懸念はあるが、ワクチン接種でこの異常事態が終息に向かうならそれも

道なのかなと思いたいが、自分は全く楽観できないぞと思っている人だ。

テレビや新聞は行政からの情報が通り過ぎるのみで、本当に知りたいポイントは立ち止まって自分で調べるしかない。

以前から気になっていること、、、1980年にアメリカのジョージア州に建てられた石板モニュメント“ジョージア・ガイドストーン“(テレビでも紹介されていたと記憶)。このモニュメントの本当の発注者は誰だか分からないようだ。

6 枚の石板で組み立てられ高さは 5～6m、石板を建てた者が人類へむけたと思われる 10 のメッセージが複数の各国語で刻まれている。そのトップに「大自然と永遠に共存し、人類は **5 億人以下**を維持する」とある。1980 年の世界人口はおよそ 50 億人だったそうでつまり 45 億人を削減しなければならないと言っていることになる、率直に言って気味悪いというか悪魔的なメッセージではないだろうか？モニュメントはいまも悠然とジョージア州のその場所にあるという。

コロナウィルスの本当の目的はワクチンを人びとに接種させるためではないかという声を耳にした。多くの若者にはコロナは普通の風邪のようなものでさほど恐れるほどのものではないとも聞く。
ただ接種した人にどんな影響が出るか時間をかけた安全性の確認を大幅に省略して、このコロナワクチンは緊急性を最優先して認可された。しかも世界中の人への接種を目指している。

なんともうさんくさい話だなぁと思う。直近のアメリカの情報ではワクチン接種者から未接種者への感染のほうがより懸念されるとの記事もあった。

考え過ぎかもしれないが、“ジョージア・ガイドストーン”のプランが冗談ではなく本当に始まっているのでは？というザワザワしたものを感じている、考えすぎだろうか？

東成区の昭和　思い出ほろほろメモ
P199～

小林茂

北海道でも緊急事態宣言が再び出された。明らかに GW の人の往来から予想された結果であった。GW ということもあり、北海道内の旅行も前々から計画を立てていたり、せっかくの連休だから行こうという気持ちが働いたのだろう。連休中は道内外の人の旅行者が目立っていた。新コロナ・ウイルス自体は自然災害ともいえるが、拡散するのは現代社会の人のなせる業と思う。政治に関心のある人は、時の政権を批判するが、現行法制のなかで、与党だろうが、野党だろうが、どこの誰が政治をしようと大差ない政策しかできないだろう。

先日、京都の鴨川で野外飲みの人たちが飲み食いした後のゴミの不始末の話題がニュースで流れていたが、個々の人の人心やモラルまでは法で規制できるわけではない。新コロナは、そういった今の日本の社会と人の有様を違った角度から浮かび上がらせている。

まったくの個人的なことだが、緊急事態宣言が出されたことで、思わぬことである週の土日の仕事が空くことがあった。体を休め、掃除、洗濯、雑事をこなしても、まだ時間が残っている。久しく、そんな生活をしてこなかったので、週休 2 日で働いていると、こんな日常が毎週続くのかと驚いた。もうあと15年くらいは働きづめを覚悟しなければならないが、できること、できないこともあるので、取捨選択は仕方ないかな、と感じている。

対人支援　点描
P191～

藤　信子



この 1 月から香川県の病院に、月に 2 度ほど行っている。瀬戸大橋を渡るのは初めてだったので、毎回瀬戸内海を見るのを楽しみにしている。2 月の冬型の気圧配置の強い日、各地で雪のニュースもあり、東海道新幹線は遅れるのではないかと思っていると、家族から瀬戸大橋線の運行状況を見たほうが良いと言われ調べた。すると、私が乗る岡山発の快速マリンライナーは、強風のため運行を停止することがわかった。その日は行くのを止めたのだけれど、後で聞くと年 2-3 回は、そんなことがあるそうだ。

以前、橋の途中で電車が止まったことがあると聞いた、そんな目に会うと 2 度とその電車に乗りたくないと思うのではないかしら。それ以後は風の強い日は無いので、穏やかな瀬戸内海を楽しんでいる。

対人援助学との出会い（1）
P43～

団遊

連日、大谷が楽しみで仕方ない。投げる時はもちろん、打つだけの時もワクワクして観る。もともと、野球がそれほど好きなわけではない。では何に心が動いているのかと言えば、自分がやりたいと思ったことを全力で頑張っている、その姿に、である。同時に、齢を重ねたからだろうが、マドン監督に思いをはせることも多い。こんな部下を持てば、マネジメントが楽しくて仕方がないだろう。

同じような気持ちに、チームメイトはもちろん、日本のみならず、全米中がなっている。だから話題になる。「今日もあの子は頑張ったかしら」と、誰もが親のような気持ちでまなざしを向けている。

こんな風に、周囲を良い形で巻き込めるのは、才能がなせる業なのか、と言えば、必ずしもそうとは言えない。というのも、仕事で幼稚園や保育園に行くと、同じようなまなざしに出会うからだ。ある意味、幼児と大谷は、同じ力を持っている。逆説的に言えば、多くの人が幼児期から社会人になる過程で失ってしまう力が「それ」だということだ。果たして今自分は「それ」を持てているのだろうか。皆さんはどうですか？

人を育てる会社の社長が、
今考えていること
P33～

村本邦子

新学期、今年度は対面授業と強く言われ、気合を入れていたのに、ほんの 2 週間で元に戻ってしまった。それでも、最初に学生たちと直接顔を会わせることができたのは良かった。GW は両親に緊急事態があり帰省、県外人にはコロナの心配

があるので直接手助けすることはできないが、さまざまな現実対応に追われつつ、合間の時間に、戦争関連施設を訪れ、温泉を巡った（K県はどこの銭湯も温泉で、100円代のところも結構ある）。大変だったと言えるのか、のんびりしていたと言えるのか、自分でもよくわからない。両親共に長くさまざまな病気を抱えながら、二人でよく頑張ってきてくれたと思う。いつどうなるかわからないが、穏やかに天寿を全うしてくれることを願う。そうなると、いよいよ自分の代の話になってくる。私も今年、還暦を迎える。あっという間の人生だ。50代後半になって、意識的に働き方を変え、余裕のある暮らしを心掛けているが、コロナ禍では、時に退職後の練習をしているような気分になる。いろんなことが起きる。周到に計画を立てていても、何が起きるかわからない。起こってくることに合わせて人生を考えていく。

周辺からの記憶　―東日本大震災

家族応援プロジェクト―
P150～

國友万裕

最近になってZaimというアプリを使って、毎日の出費を記録しています。この3月ごろ、お金がなくて、ついに借金までしてしまいました。あと3年で還暦。高齢になってくると仕事もそうそうたくさんはできなくなるでしょうし、病気になる可能性も高くなっていきます。年金などの他に2000万円くらいなければ、老後を過ごすことはできないと言われますし、人生100年時代だから、いくつまで生きるか分からないので、これからはお金を大事にしなくてはなりません。

考えてみると国民年金、国民年金基金、健康保険、生命保険、積立金、老後や健康のことを考えて払っているお金だけで、収入の4分の1くらいを使っているのです。お金がないのも仕方がありません。

しかし、お金のことよりも心配なのは、孤独が待っていること。今でも構ってもらえないのに（笑）、あと20年くらいたった時に構ってくれる人がいるのか？　深刻に考えると暗くなります。

僕みたいな人は信仰をして、神様に手を引いてもらうしかありません。今年はクリスチャンになろうと思います。この頃、日曜日の礼拝が習慣となってきました。

男は痛い！
P115～



古川秀明

みなさんの短信を読ませて頂くと、短信というよりは中信か長信くらいある方もおられます（笑）。まぁそこは字数制限のない、自由な対マガの良いところでもあるのでしょう。

そこで今回はちょっとだけ長く書きます。先日、焼肉味の納豆というのが売り出されていて、「まるで焼肉を食べているみたい！」というキャッチコピーの広告が、美味しそうな本物の焼肉の写真と一緒に張り付けられていました。

珍しいものや新しいものが好きなので、即お買い上げ。早速翌朝、食べてみました。私の感想は「二度と買わない！」でした。

教訓→焼肉と納豆は別物と肝に銘じるべし。

講演会＆ライブな日々

P135～

西川友理

京都西山短期大学を3月に退職し、この4月から奈良県にある白鳳短期大学総合人間学科こども教育専攻に勤務先を移しました。引き続き、保育士や幼稚園教諭の養成、さらには小学校教諭の資格を目指す学生たちの教育に携わることになります。社会福祉士養成やその他、様々な対人援助の養成にも引き続きかかわっていきます。

これに伴い、奈良県出身者である私は約20年ぶりに奈良県民に戻りました。奈良盆地に住んでいると、東西南北どちらを向いても低く連なる山々が視界に入りこみます。てれんと寝そべったような、穏やかな山々が、生活に寄り添ってくれているように見えます。そうだった、こんなだった、と思い出します。

福祉系専門職養成の拠点を生まれ育った土地で行うのは初めての経験です。思いのほか、独特の文化がありそうで、でも大切なことは変わらないようで、毎日ちいさな気づきと躓きを繰り返しながら、ぼちぼち日々を進めていきたいと思います。

福祉系対人援助職養成の現場から
p65～

坂口伊都

高齢者施設職員の夫が、コロナのワクチン接種を受けました。2回目の接種後に症状が出る人が多いそうで、夫も翌日は大丈夫だったのですが、接種から2日目に悪寒と38℃程度の発熱し仕事を休んでいました。体力がある方だと思われる夫にも症状が出ているのだと驚きました。高齢者の方が副反応は出にくいようですが、母親が接種する時はこちらの家に泊まってもらう方がいいのかなと思案しています。

高齢の母達の会話を聞かせれると、呆れるほど好き放題だなと感じます。接種券が届く前は、副反応が怖いから打ちたくないと騒ぎ、接種券が届くと、打ちたくないと言っていた友人が個人病院でのワクチン接種予約が取れて嬉しそうにしているそうで、予約の取れていない母は「もう疲れた、もう打たなくてもいい、打てないのではないか」と愚痴をこぼしまくります。少々接種会場が遠くても送っていくから、そちらを優先するようにするからと宥めました。さて、私自身はいつ頃、何処で接種できるのか。私は、自力で行ける所になるでしょうね。

家族と家族幻想
P145～

河岸由里子

公認心理師・臨床心理士・北海道　かうんせりんぐるうむ　かかし　主宰

【同担拒否】子どもたちの人間関係の希薄さが心配になる今日この頃であるが、『同担拒否』という言葉を聞いたことがあるだろうか？10代20代の人は知っているかもしれない。ジャニーズ系など、アイド

ルグループがいくつもあるが、子どもたちは、好きなメンバーを決めている。嵐であれば、二宮さんとか、松本さんとか。好きなメンバーに対し、ファンは「担当」と呼ばれているそうだ。二宮さんのファンは「ニノさん担当」となる。筆者の時代であれば、好きなタレントやミュージシャン、或いは俳優などの話で盛り上がり、同じ趣味である者同士の繋がりというのが簡単にできた。「あの人良いよねえ！！」で始まって、会話が弾むのだ。ブロマイド写真の話、レコードの話、そこからコンサートに一緒に行くなど、関係性の発展もあった。つい 15 年くらい前までは同じだったように思う。ところが今は、同じ人が好きだとなると、お互いに拒否するのだそうだ。それを「同担拒否」というのだ。嫉妬心と競争心がないまぜになった心情なのだろうか。十代の子からこの話を聞いて、どうやって友達を作っていくのだろうと心配になった。担当が違えば仲良くなれるのだそうだ。韓国のグループも含め沢山のグループがある。グループの中で人気のある子はある程度決まるだろう。同担拒否に合わないために、敢えて主要なメンバーを好きにならないようにするということもあるそうだ。趣味とかファンの領域まで、そんなに人に気を遣って生きなければならないとは、なんとも息苦しい時代になったものだ。若者よ、もっと自由に、好きに生きろ！！

ああ、相談業務
P72～
先人の知恵から
P231～

岡崎正明

音楽や芸術に触れると、「しょせん言葉にできることなんてしれてる」と感じたりする。言葉によるコミュニケーションを頼りに仕事をしている者として、そういうわきまえは大事だと思っている。

でもやっぱり言葉に悩まされたり、逆に救われたり。そういうことは日々起こる。やっぱり言葉って、自分にとって大事な、欠かせないものだ。だから他者へ使う際も大切に扱いたいと思う。

4 月に職場が変わり、様々な環境の変化で正直ストレスフルな日々。そんな今よく浮かぶ言葉は、

「泣く子と地頭には勝てない」

「人生はクローズアップで見ると悲劇だが、ロングショットで見ると喜劇だ」

前者は「道理の通じない相手や権力者には勝てないから従うしかない」という、どちらかというと後ろ向きな言葉だが、私の中ではちょっと使い方が違っていて「勝てない相手とは喧嘩せず、他のやり方で向き合う」くらいの意味になっている。



後者はチャップリンの言葉。最近知り合いの SNS で見かけてとても腑に落ち、勇気をもらった言葉だ。言葉の持つ力や味わいへの理解が若い頃より断然深く広がったのを自覚するこの頃。おそらく良い事・悪い事、いろんな経験のおかげなんだろう。年を取るのも悪くないと思う。

役場の対人援助論
P123～

大谷多加志

4 月から職場が変わって、京都光華女子大学の心理学科に着任しました。同じタイミングで編集員の千葉さんも同じ大学の医療福祉学科に着任していて、前々職の同僚と新しい職場でもう一度同僚になるというめぐり合わせを面白く思っています。

2021 年 4 月 23 日、初めての試みとして、対人援助学マガジン読書会を Zoom で行いました。マガジンを読んだ感想を誰かと共有するという機会は意外と少なく、ましてやそれを執筆者の方とも共有できるなんて、本当に希少な機会です。編集部を含めて 11 名が集まり、刺激的な意見交換の場となりました。面白かったですし、ぜひ 2 回目も企画したいと思っています。

前回から始めた「マガジン執筆者訪問記」も、順調に 2 回目を迎えることができました。今回は「そうだ！ねこに聞いてみよう」を連載しておられる小池英梨子さんのところに寄せて頂きました。紙面でどのくらい伝わるものか不安ではありますが、やはり直接お会いして現場を見せて頂けることで気づくことは多く、早くも執筆者訪問にハマりつつある気がします。第 3 弾も企画中です。

発達検査と対人援助学
P132～
マガジン執筆者訪問記
P216～

馬渡徳子

社会人として長期履修登録をしている大学院も、とうとう最終年度となった。この季刊誌が掲載される頃は、論文提出まで、残された時間は、半年しかない。私の研究調査対象は、免疫アレルギー疾患とともに生きる人々にて、新型コロナ禍の影響を多大に受け、何度も研究デザインの変更を強いられた。

「わからない=実はわかっていない、という気付きを、率直に、素直に、認めることができ、確かめたいと思って主体的に調べる」という、わくわくするような「学ぶことの楽しみ」と、各指導教官よりのご指摘に、ゼミ修了後の復路で、泣きながら運転したことも何度もある。ゼミ中に頂いたコメントは、承認を経て、毎回録音しているので、「一日か二日置いて」復聴し、行き詰った時には、過去録音を聴きながら、キーワードを書き、正の字でカウントしながら、どんな傾向があるかをタイトルをつけて分類し、ふりかえり、前に進めてきた。

それでも、どうしてよいかわからない時には、博士後期過程の先輩方に、率直に、「あなたならば、こういう場合に、どのように次の一歩を踏んだか。どんなことをやってみたか。それによって、どんな事が変わったか。」について、懇談をお願いしてきた。

「学びの環境」は、本当に変化してきたなあと思う。私は子どもの頃から、行き詰まると図書館に籠ることで、リフレッシュしてきた。高校生までは、自分の身の回りで体験する「人間社会の理不尽さ」が赦せなくて、とにかく哲学・社会学系の本が好きで、地元にはない、大きな図書館と古本屋が沢山ある都会の大学に、どうしても行きたかった。　　。
駄菓子と貸本屋が一緒になっている店もあったが、蔵書が店により偏っていて、お金もかかるので、そうそう利用は叶わなか

った。

漫画家を目指していた友人たちとの憩いの時間や、彼氏とのデートは、もっぱら図書館の学習室だった。勉強の合間に、交換日記やメモのやり取りをして、次の人は、最後の文字から「しりとりゲーム」の様に書き始めるというルールをつくったりした。これが、意外と頭を使い、気分転換となるので面白かった。いろんな事情で、期限までに書けなかった時は、握手券、肩たたき券、鞄持ち券、おやつ券、愚痴を聴きます券・・といった「栞」にして、挟んでおくと、次の人がそれを使えるという「パスルール」もつくっていた。こんな提案をしてきた友人たちは、それぞれ多様な分野のクリエイターになっている。

その昔、図書館の「個人利用カード」と「蔵書検索カード」は、紙媒体だった。本の裏にポケットがついていて、「氏名・日時の履歴記載のカード」があり、これにわくわくした。校内でも話題の素敵な先輩や、尊敬する先生の履歴を見つけると、何故か嬉しくて、同じ嗜好やわあ♡と。(笑)

現在の大学図書館は、蔵書数に圧倒される。オンライン化されているので、外国も含めた蔵書や先行研究論文の検索やダウンロード、文献レビューの下地づくりに反映できたり、蔵書リクエストもできる。

すごい時代が来たなと思うとともに、研究者としての諸先輩方は、先行研究や新聞記事等のレビューに、どんなにご苦労されたのだろうかと、頭を垂れるばかりである。

さてと、気分転換は、終了(う)。嬉(う)れしくも、(う)んざりもする論文に、向き合う(ぞ)!!

次回の短信で、どなた様か、「ぞ」で始まっておられる方を発見できると、嬉しいなあ。(笑)

馬渡の眼
P196～

団士郎

3月22日、五人目の孫のおじいちゃんになった。残念ながらおばあちゃんはいないけれど。十月十日(とつきとうか)前を数えてみると、妻の末期癌が明らかになった時が重なる。

彼女は最後の仕事として、娘を母親にする決意をして、妊娠初期の娘が横浜から大津に見舞いに訪れることを禁じた。結局、臨終の床にも葬儀にも来させなかった。

不妊治療を経て、38歳の初産という事態を、誰よりも厳しいものだと考えて、運命の神様と取引をしたのだと思う。

私はそれを遺言だと思って振る舞ってきた。だから母子無事出産の報に触れたときが、この1年で一番安堵した。



願っても結果は支配できない。でもそれに向かってできる限りのことをすることは可能だ。結果とはそういうもののゴールだと思う。それを運が良かったと言うのだろう。遺影の前で、「やったね！」とガッツポーズをした。

Family history (4)
P53～

鶴谷　圭一

原稿「マスクと表情」を書いている最中に、2月に大坂の小学校グラウンドで持久走中に小5の生徒が亡くなっていたニュースを耳にした。(5/27)マスクを着用して走ったのかどうかは定かでは無いが、保健室に運ばれたときにはあごにマスクがかかっていたという。コロナ感染予防の影で痛ましい事故が起きていた。これからの季節、こんな事故が起こる確率が高まるので注意が必要だ。

保健所の濃厚接触者の特定が「マスクの有無」が多きナウエイトを占めるので、それを避けるために子どもにも徹底的にマスク着用を義務づける園もあると聞いている。

子どもの発達を考えたときに、どうなのかなあ、と思う。それでも変異株などが流行ってきたら、せざるを得ないし悩ましいところだ。

また今年もプール活動ができない学校や園が多くなるのだろうか。暑い夏にプールができないなんて、子どもたちが気の毒だ。

原町幼稚園 http://www.haramachi-ki.jp
メール　office@haramachi-ki.jp
インスタ　haramachi.k
ツイッター　haramachikinder

幼稚園の現場から
P60～

水野スウ

3 ヶ月に一度のマガジン原稿を書いてきて、丸 11 年たちました。続けよう、って思ったらきっと難しかったけど、締め切り月になるといつも目の前に書きたいこと、記録しておきたいことが降ってきて、そのおかげで書き続けてこれたのでしょう。基本的には同じことを書いている気もするけど、角度が少し違うだけでそこに必ず未知の発見があって、書いている時のきもちはいつも新しい。

今回は、「うたごえ」という市民活動の講師に呼ばれて、そこで見聞き、感じたことの報告記。全国にこういう運動をし続けている人たちがいることも、実際に行ってふれあうことがなかったらずっと知らないままだったろうな、と思います。

そうそう、今年の憲法記念日には、去年延期になった鹿児島へお話の出前に行ってきました。会場の人数を制限して、youtube で生配信。主催者さんがアーカイブに残してくれたので、帰ってきてから個人的に声をかけ、聞きたいという方にはURL をお伝えしています。

私が今とても伝えたい憲法の話、コロナ下で出前の機会が減っているけど、そうか、直播きでなくても、今はこんな方法で憲法の種まきができるんだった。90 分の長い話を聴いてくれる人の数が少しずつ増えていくのを喜びながら、そこに小さな希望を見つけている私です。

きもちは言葉をさがしている
P100～

見野　大介

もう梅雨入りしたんかな。湿気が高いとロクロ成形した器たちの乾燥が普段の3倍は時間がかかるんで、借り置きする棚

がすぐ埋まってしまいがち。乾燥がゆっくりになるのは、乾燥時に歪みにくくなって養生が楽になるのはメリットやねんけど、スペースの問題が。早く今より広い工房に引っ越したいと思う、今日この頃。

ハチドリの器

P4

脇野　千恵

コロナ禍になり、今まで以上に本を読むことが多くなりました。分野はきまっていませんが、ノンフィクションがほとんどです。思い出すのは、高校生のころです。ひとり図書館に籠り、ひたすら読書に専念しました。現実逃避の意味もあったと思います。小説、思想論、歴史物など、乱読といっていいでしょうか。結局、受験勉強は一切せず高校生活は終わりました。しかし、その時の読書によって積み上げられたものは、今までの生き方や物事の捉え方の基盤なっているなと感じています。今の時代を映すものだと思いますが、最近のノンフィクションは随分辛くなるものが多いなと。できれば心から安らげる言葉に出会えないものかと、本棚に向かい、ちょっと昔の本を手に取って開いたりしています。

こころ日記「ぼちぼち」part Ⅱ

P290～

中村正

4 月下旬、87 歳になる母親が硬膜下出血で救急搬送され手術を受けた。それは無事に終了したのだが、前回の判定から認知症の進行もみられ要介護度 4 となった。転院して地元の主治医のいる病院のリハビリ科に入院している。このマガジンが発行される頃にはいままでの在宅での介護サービスを利用しての独居暮らしは難しいのでどこかの施設に入所していることになるはずだ。要介護度が上がったので特別養護老人ホームの待機者リストに載る。が、待機者が多いのでそれまでのつなぎの施設を探した。運良く見つかったが、その過程でにわかにいろんな家族介護体験をすることになった。息子介護者問題（異性介護問題）をはじめとした体験だ。なかでもリロケーションストレスへの対応が苦慮するところだ。大きな病院への入院、地元病院でのリハビリ入院、老人福祉施設への入所とめまぐるしく続く環境の変化に認知症が深化していることもありついていくことができないというストレスだ。考えてみれば当然のことだろう。忍耐強く付き合いながら対話になりにくい対話を試みる。話をしながら、仏壇の心配と 87 年住んだ家の心配があること、そしてまだ自分で一人暮らしができ、自立しているという思いもあることが分かる。老いるということの意味を教えてくれているようでもある。地元は三重県の伊勢志摩なので遠距離介護体験ということもあり地元に住む弟夫婦らと協働している昨今だ。遠距離になるが授業や会議がオンラインでできることもありこの面では助かる。しかし病院も福祉施設もコロナ禍で面会ができないことがつらい。施設の入り口でタブレットを使ったデジタル面会がせいぜいだ。意思疎通がさらに困難になる。認知症の高齢者とオンラインで対話することになろうとは。話を進めようとしないことが大切だと分かる。弟夫婦の子どもが地元の市役所に勤務していてアドバイスもらったり、近所の付き合いに支えられたり、担当のケアマネジャーさんたちのネットワークに感心したり、地域医療に熱心な主治医の仕事に敬服したりしながら地域福祉の重要性を実感している。

臨床社会学の方法

P23～

中村　周平

先日、月一回の泌尿器科の受診に病院に行った際のお話です。GW 明けということもあり、待合にはかなりの人数の方が座られていました。しかも、その多くが 70 歳以上の高齢者の方であるように見受けられました。結局、予約していたにもかかわらず 2 時間待合に居座ることになり、1 分の診察を受けて帰ることになりました。また、高齢者の方もほとんどが 1 時間以上待たれていたように思います。「緊急事態宣言」が出ているさなか、いつクラスターが起きてもおかしくなかった状況だったと思います。システムを改善することで、罹患した際のリスクが高い高齢者や私のような障害者が、このような形で感染するリスクを少しでも軽減できないかと、改めて感じる機会となりました。

ノーサイド

P108～

千葉晃央

ご縁をいただき、ラジオに電話で出演しました。私が 20 年、毎月開催している「家族をテーマにした事例検討会」について関心を持ってくださいました。

番組は地元のラジオ局KBS京都さんの「笑福亭晃瓶のほっかほかラジオ」。秋田生まれ、大阪育ちの私は 24 歳から京都に住んで、京都を知らなくて、本当に苦労しました。地名が分からない。仕事でも悔しい思いも何度もしました。そのため、一人暮らしの時から地元ローカルのラジオ、テレビ、新聞に触れるように努力をしました。そのときにもKBSさんにはお世話になりました。企業からいただいたお仕事を障害者の方々が作業をして、その出荷でもよく車を運転しましたが、車内でもよく聴きました。



高校生の頃はまったのがパペポテレビ。上岡龍太郎さんと笑福亭鶴瓶さん 2 人番組はスタジオ観覧に行くほど毎回楽しみました。その番組内で鶴瓶さんの弟子として出演されていたのが晃瓶さんでした。漢字も私と一文字同じだし勝手に親近感もありました。

自分の業界ではない人に、自分がしていることを伝えるという作業は本当に難しい。それをここしばらく複数経験しています。今までとは違う表現が求められますし、「自分の業界にだけ発信していることは一番楽なんや」と言われることもあり、なかなか勉強になります。

2001 年から継続している家族をテーマにした事例検討会はオンライン化スピンオフして、コロナ期に継続中です。ジェノグラムを使った事例検討を、このコロナ期にどう取り組むのかが課題で、試行錯誤。オンラインでのやり方も複数経験し見えてきた感じがします。

京都光華女子大学で働くことになったこの 4 月ですが、自分が 25 年いた福祉業界をまた違う角度からみたり、関わったりす

る経験の連続で、またまた修行中。3 年連続 4 月に新しい仕事にチャレンジですが何とか肉体も持ちこたえています。

家族支援と対人援助　ちばっち

chibachi@f2.dion.ne.jp
090-9277-5049

障害者福祉援助論
P19～

サトウタツヤ

今回の原稿、前々号に投稿した原稿の続編で、すでにできあがっていたにもかかわらず、前号に投稿するのを忘れていました。〆切まで数ヶ月もある時に出すのがかっこ悪いというとらわれがあったおかげでかえって墓穴を掘った感じでした。かくいう今回も 25 日に出すのをわすれ、26 日に出しているという次第です。

総合心理学部長・人間科学研究科長になりましたが、緊急事態宣言によって学生・院生の皆さんとふれあうことができません。悶々としています。

対人援助学＆心理学の縦横無尽
P85～

鵜野祐介

今年6月に還暦を迎えます。あれよあれよという間の出来事なのだと実感しています。

うたとかたりの対人援助学
P236～

荒木晃子

前号を休載とした。対マガ創刊以来、2 回目？との記憶があるが、定かではない。齢 64 を迎え、忘れたり、間違えたりしてはいけないこと、もの、ひと、日にち、出来事（他にもあるかも）以外は、かなり無頓着になった気はする。しかし、“問題”との実感はなく、逆に、楽になった部分もあるほどだ。

まず、体力が落ちた。できないことが増えたので、やらないことにした。その結果、「そう、私は疲れやすくなったので、できなくてもいいんだ」と思え、何かと手を抜くことを覚えた。

次に、視力が落ちた。遠くのものが見えない、近くの文字が見えづらい時は、見ないことにした。その結果、見えるもの、見えやすいものだけを見るようになった。要は、見たいものだけを見ているだけなのだ。そりゃ、楽になったはずだ。

いくつになっても、気づきはあるものだと感心する今日この頃。ただし、いま、そしてこれから自分が大切にしたいこと、もの、ひと、仕事に支障がないことを祈るばかりではあるが。



日々、私を大切に思ってくれる仲間に思いを馳せ、感謝しつつ過ごしながら。

生殖医療と家族援助
P76～

山下桂永子

昨年度のゴールデンウィークは献血したら血圧が下がってぶっ倒れてしまい、看護師さんに家まで送っていただき、医療従事者の方にご迷惑をおかけしたことを心よりお詫びしておりました。今年のゴールデンウィークは引きこもっておりましたので何事もなく健康に過ごせてよかったなあと思っていたら、そのあと 3 日働いただけでぎっくり腰になり、梅雨入りの日には雨ですべってふくらはぎが肉離れを起こしました。昨年と今年のゴールデンウィークの教訓は運動不足は命にかかわるということです。

さて、「心理コーディネーターになるために」というテーマで書かせていただき 3 回目となりました。毎回お願いしている 10 年来の知り合いが描いてくださるイラストの新作を見てほしい気持ちでいっぱいです。いつも「こんな感じの描いてほしいんやけど～」ってものすごく抽象的な私のイメージを、私の想像をはるかに超える形で具体化してくださるのです。というわけで今回はイメージを具体化するって大事だなと思ったことについて触れています。読んでいただければ幸いです。

心理コーディネーターになるために
P207～

中島弘美

新年度がスタートした。カウンセリング関係の授業を担当していると新一年生の学生さんから「カウンセリングって費用がかかるものだとは知らなかった」「カウンセリングは友達にもできるのだと思っていた」「カウンセラーはウンウンときいているだけじゃないのですね」などの感想が寄せられた。学生さんたちの声が率直で新鮮なので、カウンセリングに対しての考えがどのように変化していくのかがとても興味深い。なかには、的確なアドバイスをする方法を教えてくれる科目だと思っていた、という、やや残念、的外れ的な感想もあり、カウンセリングに対する一般的な印象が見えてくる。

今年度から厚生労働省が心の不調に悩む人を支える「心のサポーター（ここサポ）」の養成を始めるという。心のケアやカウンセリングなどに関心のある人は多い。印象と実践のズレを埋めながら、支援の輪が広がり、コロナ禍を乗り越えていけたらと思う。

カウンセリングのお作法
P37～

竹中　尚文

ここのところ、毎週のようにお墓の相談をよくうける。「私が生きている内にお墓をなんとかしたいのですけど･･･」という相談が増えてきた。「ウチは女の子ばかりで、跡継ぎがいないので･･･」とか「息子は一人っ子で、その嫁さんも一人っ子で、両家のお墓をどうするのかと思うと、今のうちに、ウチのお墓はなくしたいのです」という話が多い。1970 年から 1990 年頃まで、ずいぶんとたくさんのお墓が建った。団塊の世代の親が亡くなるころであった。世の中は好景気である。自分が死んだら、子どもが困らなくてもいいようにと言って、お墓を建立する人が多かった。わずか半世紀の間に、「子どもが困るから」と言ってお墓を建て、「子どもが困るから」と言ってお墓を取り壊す。 ◆お墓の建立の目的は、「お墓参り」「お骨をいれる」といったところだろう。ところが、ほんとうにお墓参りをしているだろうか？お参りとは「仏という絶対的に善に相対峙して、自分を問う」ことだという。しかし、お墓でそのようなお参りを

する人は少ないと思う。多くの人は故人を偲ぶ場にしているように思う。しかし、現代人は忘れるのが早い。驚く程だ。5 年もすると思い出しもしない。10 年もすれば「そんな昔のこと」といいだす。お参りもしないし、故人を思い出すこともなければ、お墓はお骨を入れるだけの所になる。お骨を入れるだけなら、ずいぶんと費用のかかるお墓でなくても納骨所で十分だ。そんなわけで、近年、納骨所が流行る。 ◆どこであろうが、故人を思い出し、故人のご縁で仏に向き合い自らを問うようなことがなければ、納骨所も必要がなくなる。散骨する人も、火葬後にお骨を拾わない人もいる。また、お骨を拾わなくても、故人の思い出を大切にして、そのご縁で仏に向き合い自らにあう人もいる。跡継ぎでなくても、故人のおかげで仏に出遇う生き方をすることもできる。お墓って、要らない。

路上生活者の個人史
P111～

寺田　弘志

5月30日、大阪府 JR 吹田駅近くの大和大学で、第 2 種電気工事士の筆記試験を受けてきました。接骨院で紫外線除菌装置などの配線をおこなうためです。
「接骨院が廃業に追い込まれたら、エアコンの取り付けの仕事とかやってみてもいいかな」なんていう気持ちもちょっとあったりしますが・・・

それはさておき、紫外線除菌装置を作るためには、蛍光灯や足踏みスイッチ、赤外線センサーなどの配線をしなければなりません。



写真は最近追加した、手指の紫外線除菌装置です。手あれのひどい患者さんもいらっしゃるので作りました。手を入れると人感センサーが反応して10秒間紫外線が照射されます。青い部分に、紫外線が照射されています。

こういう電気装置の部材の取扱い説明書には「必ず電気工事士に工事してもらってください」という注意書きが付いています。私は違反しているのかもしれないという懸念があったので、それなら電気工事士の資格をとろうと思い立ちました。

還暦なので、まさに六十の手習いです。思い立ったのはいいのですが、年をとったせいか、テキストの内容がなかなか頭に入ってきませんでした。5月の連休明けからテキストを読み始めて、試験開始直前に2回目をギリギリ読み終えましたが、それで精一杯でした。過去問を解くような余裕はまったくありませんでした。記憶力の低下もひしひしと感じました。確か一度読んだはずなのに、2回目に読んでもまったく読んだ記憶がないページにたくさん出くわしました。

それと受験に関して、ひとつ教訓を学びました。年をとると、若いころよりもトイレが近くなります。私は、試験前にしっかり水分補給したのがあだとなり、見直しをするのをあきらめて、トイレに駆け込むはめになりました。
「年がいってから受験をするとき、直前の水分補給は控えめに」です。

さて、ネット上の解答速報による自己採点では、筆記試験のほうはどうにかクリアできたので、7月18日の実技試験をがんばります。法令違反していないかどうかも、テキストを読む中で確認が取れました。

屋内配線に直接接続する場合は、電気工事士の資格が必要ですが、移動できるコードをコンセントにつないで使う機械器具の配線については、資格がなくても違反にはならないようです。

でも、安全や事故防止のためには、電気の知識があるに越したことはありません。それと、電気の知識を学ぶまでは、電線とかおぼろげにしか見えていなかったのですが、「ここは電線が3本だ」とか「2本だ」とか、「今まで電線だと思っていたけど、これがメッセンジャワイヤだな」とか、「こんなところに信号用の電線管があるな」とか、「この通りは電線がないぞ」とか、いろんな電気工作物がくっきりはっきりと目に飛び込んでくるようになったのです。

電気に関わる方たちの仕事に、少し気がつけるようになったのも良かったことのひとつです。

接骨院に心理学を入れてみた
P249～

浦田　雅夫

いつものように月末、何人かの方からマガジンの締め切りじゃないですか、大丈夫ですかと連絡をいただきました。ありがとうございます。

編集長の団先生、千葉先生ほかの皆さんにはいつもご迷惑をおかけしています。

さて、今年の 3 月末をもって長らくお世話になった京都芸術大学（旧京都造形芸術大学）から大阪成蹊大学へ異動することになりました。自身、出身の大阪です。そして、亡き母の母校の学園。ご縁なんでしょうね。何とも不思議です。

新天地でも、保育士養成の社会的養護を中心に担当しています。引き続きよろしくお願いいたします。

社会的養護の新展開
P58～



＊こう書いた浦田さんは、今回久しぶりに締切り5月31日中に原稿をくれました。間に合ったからこそ、こんな風に書いている「浦田芸」ですね。今後も健闘を期待します。

＊

執筆者短信欄のここまでの方の原稿が、締切り内に到着しています。

この後のお二人が遅延でした。でも、小池さんは6月1日に到着。山口さんは4日の午前10時までにと連絡を頂いていました。遅れて夜着でしたが。

とにかく凄いと思いませんか、皆さんの律儀さ。毎回、月初めの通知一本で、これだけの原稿と短信が揃うことに感動しております。（編集長）＊

小池英梨子

住宅街でトラバサミに挟まれたノラ猫がいると相談が入り、その保護に奔走しました。

保護ができた後は、これを動物虐待事件としてなかなか取り扱おうとしてくれない警察とのやり取りにも骨を折りました。その事件がABC朝日放送のニュース「キャスト」で特集番組として放送されました。



YouTube で「キャスト　動物虐待」で検索すると出てくるので、良かったがご覧ください。

そうだ、猫に聞いてみよう
P210～

山口洋典

コロナ禍への対応が各方面で迫られ続ける中、いつから「ニュー」ではないノーマルになるのか、と考えることの多い今日この頃です。もちろん、かつてのノーマルに戻ること、あるいは戻すことが必要ではない、という前提です。そして、Apple での勤務経験がある上杉周作さんが Twitter にてイノベーションとは「未来にある普通のものを作ること」 」（ https://twitter.com/chibicode/status/3376933782736896 0） と記していたことを思い出しました。ちなみに、日本郵政公社が日本郵政グループへと民営化された 2007 年 10 月 1 日「あたらしいふつうをつくる。」をスローガンと掲げていたのも懐かしい記憶です。

とりわけ、地域参加学習を前提としたプログラムを担当してきている私は、2021 年度の春学期においては、2012 年度から神戸や新潟や東北に赴いてきた活動を断念し、基本的にはキャンパス周辺で可能な活動を通じたプログラムを新たに開発していくこととしました。

例えば絶滅寸前種の苗付けや水やり、キャンパス内の清掃補助、小学生の下校時の見守り活動などです。そうした中、仁和寺の清掃ボランティアを呼びかけたところ、30 名を超える受講生が名乗りを上げました。教室にさえ足を踏み入れることに制約が向けられる中、世界遺産の境内地で、草木と向き合いながら、改めて大学時代の仲間との出会いを楽しんでいる様子を目にし、それぞれにコロナ禍におけるダイナミックな学び方を身につけて欲しいと願っています。

PBLの風と土
P243～

障 害 者 福 祉 援 助 論

- これから現場に行くあなたに！ -

第３回

あたたかさの伝え方

千葉 晃央

ある方は、40 代の男性で父と二人暮らし。知的な障害をお持ちで、伝統工芸のある工程の仕事を任されてきました。その仕事での収入と障害者年金で暮らしていました。

ある時、同居していた父が亡くなりました。初めての一人暮らしになりました。そのタイミングで徐々に仕事も減ってきて、収入も厳しくなっていきました。40 代からの一般就労は難しく、生活のリズムをつけるためにも、そして人間関係を社会化するためにも初めて通所施設で働くことになりました。施設選びの中で、比較的工賃が高いところの方が経済的に助かるという理由から、ある施設に通うことになりました。

働いてきた誇り

これまで自宅で一人の仕事を長くされてきました。自分のタイミングで、仕事をして、休む。自分のペースで仕事をしてきた 40 代までの人生でした。そこからの大転換です。朝起きて公共の交通機関に乗って通い、そこで他の人と一緒に一日を過ごすことになりました。なおかつ納期がある仕事もあったり、自分より若い職員から作業の質についての要請もあったりという生活になりました。

支援する側としては、個人で仕事ができるぐらい手先も器用でベテランさんでしたので、その力を社会につながる仕事に活かすことで、これまで以上の喜びにならないかなと思っていました。

会話も数は少ないですが必要なことは伝えてくれます。「言語化」するのが一番大事なので、私たちも声を掛けますし、その方も少しずつですが言葉は返してくださいました。

一方でこれまで自分でやってきたという自負も持っておられるようにも感じました。施設に通うようになって１ケ月ぐらいたつと話しかけられるのが煩わしい様子も見られました。一人暮らしも初めてで、自宅にヘルパーも入っていました。それでも身だしなみのところで、洗濯やお風呂に入ることが定期的にできていない様子が見えてきました。夏に近づくと臭いもあり、衛生面での心配も出てきました。

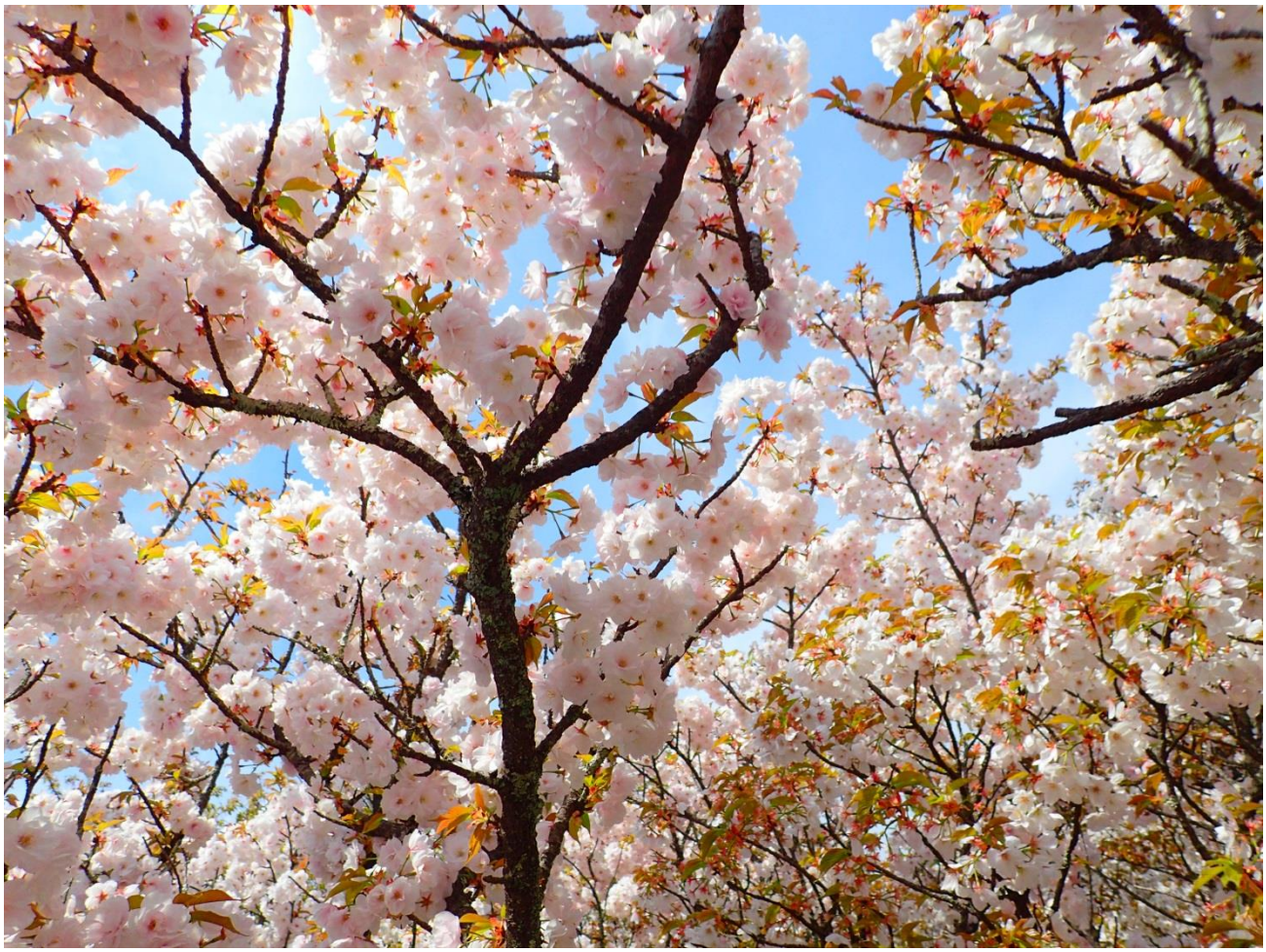
作業中、ご自身の作業が終わると、次の仕事の資材を自分の判断で取りに行き、どんどん進めているときがありました。実は、次の資材は限定商品でさっき作業をしていたものと微妙にデザインが違うものでした。それらが混ざってしまうことになりました。

ご本人が一番困っている

職員は普段から数の間違いを防止するために、切りの良い数の分だけ資材を作業台に持ってきます。みんなで作業をして、できた数も確認して、出荷用の箱に梱包をして片づけます。それから次の資材を作業台に出すという手順で作業をしていました。そのため、資材が混ざることは避けなければならないことでした。限定デザインで見分けがつきにくければ、なおさらです。そこでそのことを伝えると顔をプイと横に振り、立ち上がって、立ち去ってしまうことがありました。時にはそのような場面の後、いつの間にか早退をしていることもありました。そんな「行動化」が数回あり、職員との関係もあまりスムーズでない様子がありました。また、言葉も少なく、他の働く方との会話もあまりありませんでした。

そうこう過ごしているうちに、体調を崩して休むことがありました。電話が苦手のようで連絡もない時がありました。施設長が家をのぞきに行くと、自宅におられて、ほっとしたこともありました。進行性の持病もお持ちで、そのため定期通院も必要でした。その通院は滞りがちでしたが少しずつ進行している様子もみられて心配していました。ごきょうだいは弟さんが一人で、別の県にいました。気にはかけてくれていましたが、いかんせん遠方でできることに限りがありました。そのため体調の悪化はよくないと支援者たちは感じていました…。





こういう時、支援者チームはストイックに「自分たちのかかわりの影響が原因である」と捉えて考えます。その姿勢を失ってはいけません。つまり「身体化」という捉え方です。ご本人には思いがある。それを共有したり、伝えたりすることができず、体にも出てしまっている。だとすると、それはよくないことです。体に語らせてはいけません。「体がしんどい」というのは人として、一番苦しい時の表出です。百歩譲って、事実でないとしても、体調を理由にして発言をしないと認めてもらえないというのはやはり苦しい状況です。体のことを出せば話は通りやすいので最終の手段を選択しているわけです。支援者は「このままではいけない！」と思いました。

手が「あかぎれ」になる季節になりました。その方は栄養面、温度管理が難しいのか「あかぎれ」が目立ちました。ご自身の対策は指にテープを巻くというものでした。そのテープも変色していましたし、指についた粘着部分のところにゴミがつき、汚くなってしまっていました。時には医療用テープもないのか、セロハンテープを代用していることもありました。

給湯器の前で二人…

そこで、手を洗うことにしました。施設の温かいお湯で、職員がゆっくりこすって汚れを取ることにしてみました。年下の職員に手を洗われるのは嫌かな？とも思いました。はじめは戸惑っておられました。しかし、きれいになっていくと「…そんなにしてくれるんか？」とポツリ。洗っていると手の力を抜いて、身を任せてくれているよう

になっていきました。きれいになるまで洗い、タオルで拭きました。週に数回そんなことをしていると何回目からは、「ありがとう」とおっしゃったり、自分で給湯器のある台所で職員を持っていたりするようになりました。いつの間にか職員のことを「そんなことまでしてくれる人」と思ってくれるようになりました。手を洗いながらの会話も弾みました。「（職員の）〇〇さんは何人で住んでいるん？」「子どもはいる？」「大切にしないといけないよ」…そんなことを話すようになりました。他者への興味がわいてきたのです。

人生の門出を支えてきた功績

そこでの会話が進むと作業時間でも、以前よりコミュニケーションが増えました。その中で「できたから、次の資材とるよ？」とか、「これであっている？」など伝達もしてくれました。正確な作業を行うことで、みんなと協力してやり遂げることができていきました。ますます周囲からの信頼は厚くなり、作業場でも休み時間でも友人たちとやり取りが豊かになりました。作業に対する力も発揮されるようになりました。「これ、誰が使わはるんや？」「どこで売っているん？」と自分が作業したものがどう使われるのか？どこで売っているのか？にも興味をもってくれました。

もともとこの方がしていた作業は結納品の仕事でした。自分の仕事がどういう時に使われて、その場面が人生においてどういう大事な時期かを理解して自分の仕事にやりがいを感じてきたことが伺われました。

ここでは言語コミュニケーションではなく、一緒に手を洗うことが変化のきっかけになりました。洗いながら、おしゃべり（言語化）が弾みました。肌と肌との少しの触れ合いは言葉でのやり取りより、よほど安心なものと感じてくださったのかもしれません。その後、急な持病の進行もなく過ごされていきました。

前回の連載を受けて、身体化、行動化、言語化について事例を通して取り上げました。実際に支援でやるべきことが明確になり、支援者としてはとても助かる経験でした。

BACK ISSUES

「障害者福祉援助論」

1.福祉の独自性とは

対人援助学マガジン 43 号

2020 年 12 月

「援助職の未来 1～2」

対人援助学マガジン 41～42 号

2020 年 6 月～2020 年 9 月

「対談企画 教育と福祉の連携を模索する」

対人援助学マガジン 16 号

2014 年 3 月

「障害を持つ友達と過ごすとは？巻末座談会」

対人援助学マガジン 6 号

2011 年 9 月

「1 工程@1 円～知的障害者の労働現場 1～40」

対人援助学マガジン 1 号～40 号

2010 年 6 月～2020 年 3 月

臨床社会学の方法

（33） その「ナラティブ」は誰の言葉なのか
−沈黙という声、内なる他者の声、支配的な声−

中村 正

1. 問い−加害者臨床をしながら考えること

今号の内容は、『対人援助学マガジン』前々号（「臨床社会学の方法（31）男らしさを『聴く』-他者をとおして自己の欲望を実現させるコントロール行動の意識と態度-」第 43 号）と前号（「臨床社会学の方法(32) 怒りが暴力を振るわせるのか−感情を生起させる「憎悪・嫌悪」の構図とアンガーマネジメントの乗りこえ−」第 44 号）の続きである。

インタビュー、グループワークそしてセラピーあるいは何らかの自己についての語りで話されること（ナラティブ）はその人の言葉や声だろうかと加害者臨床では考えてしまうことが多い。例えば、殺人罪で起訴された被疑者の情状鑑定のために拘置所に通いながら、刑務所で性犯罪者の再犯防止プログラムのグループワークに参加しながら、児童相談所と連携した虐待親向けの男親塾で父親の出来事の説明を聞きながら、DV を振るう男性の言い分や、ハラスメント行為者の説明を聴きながら、そう考え込んでしまう。時には聴取されるからと枠もあるが、雄弁に加害者は言葉を発することがあるからだ。説明を求められる機会が多いともいえるだろう。その際の声や言葉はどこからでてくるのだろうか。どうしてそうしたことをしたのか、暴力を振るう行動で何かを表現してきた加害者は、転じて自ら説明する言葉をどこから調達してくるのだろうか。それについて前号では社会が抱く集合的意識としての「男らしさ」の観念から調達しているのではないかと考えてみた。それと同様の問いをもとにして別の視点から考えてみたい。

加害者臨床での声と言葉は暴力行動が先行し、説明としては事後的である。内発的に語るようにみえる動機の語彙はあくまでも社会的に用意されたものだとすると（通巻第 15 号、2013 年 12 月)、やはり声と言葉の出自は気になる。

2. 寺山修司「邪宗門」を手がかりに

このテーマは私のなかでは通奏低音のように響いている。少し回り道をしてみよう。寺山修司（1935 年- 1983 年）の戯曲「邪宗門」から考えてみたい。

「邪宗門」のテーマは、演劇を演劇のフレームから演劇的な手法を用いていかに解き放つことができるかだ。全体が矛盾しているテーマなので不条理劇のようでもある。

1971 年が初演とされているので、学園紛争の名残もある社会を背景にした歴史を感じる内容だ。主役は黒子である。真っ黒な

衣装を着て役者の演技を助ける人たちだ。始まる前から演劇が始まっている。たくさんの黒子たちが客席や舞台の間をいったりきたりしている。何かをしているのだ。すでにこの時点でおかしさを感じる。舞台が徐々に照らし出される。大道具の間をやはりせわしなく動き回る黒子たち（寺山の戯曲の台本には黒衣とされている)。開演までの間これが続く。黒子が観客に衣装を渡して合うかどうか確認しているようでもある。これは何なのか。舞台でも同じような光景。黒子が演劇の段取りをしているようにみえる。

その黒子たちが徐々に動きを一つにして何か「演技」をはじめていく。何かを引っ張っているようなのだ。この段階でも黒子が目立つ動きをしている。主役のように「操りー操られること」を「演じている」ようでもある。この演劇の主題を示唆するような独自な動きだ。普通の黒子ではない。役者を助ける存在の黒子が主役のようにみえると、先行きとても不安に駆られる。私は何を観てきたのだろうかとそれまでの虚構としての舞台だけでなく社会そのものの存在への不安が頭をよぎる。

さらに展開を予測する。その黒子たち、役者から自由になったら演劇や役者はどうなるのだろうか。ますます不安が昂じていく。しかし舞台はすすみ、普通に黒子を演じている時間も流れる。当然のようだが、役者の近くには必ず黒子がいて確かに演者の補助をしている動作もしている。

しかしどうみてもその黒子が彼や彼女を操っているようだ。通例の黒子のように役者を助けているとは思えない所作が頻出する。そのうち意図をもった黒子の存在に気付いた役者もいる。役者が黒子から逃れようと格闘しはじめる。黒子と役者の関係が混乱しはじめる。なかには黒子に打ち勝つ役者もいる。そうなると役者はどう演技を続ければいいのか。黒子がいるからこそ衣装を替えることができ、台本通りに演劇が進行するはずだ。その演劇のフレームがなくなるとどうなるのか不安にさせるような舞台が続く。

そして最後の場面。通例の演劇のように明るくなり、役者が挨拶をして舞台が「終わる」はずだ。しかし予定調和はこの時代の演劇にはない。「邪宗門」はここからが真骨頂だ。さらに演劇は続く。登場人物たちが終わり近く交わす一連の会話が続き、どうやらこの芝居が作り物（つまり虚構）である事を語っている。幕の終わり、その脇役のはずの黒子たちは衣装を脱いで人間と化す。「こんな黒い衣装なんか着ていられるか！」といわんばかりに脱ぎ捨てる。主役だったその黒子たちが何かに操られていると話し合っている。

黒子を操っているのは「言葉よ」と誰かが言う。「じゃあ、 その言葉を操っていたのは一体誰なんだ。」と問う。「それは、 作者よ。」と応える。しかしその作者を操っていたものがあるはずだ。「それは、夕暮れの憂鬱だの、遠い国の戦争だの、一服のたばこのけむりよ。」と続く。そしてさらにこれらを操っていたのは時の流れ。時の流れを操っていたのは、糸まき、歴史。いいえ、操っていたものの一番後にあるものを見る事なんか誰にも出来ない。たとえ、一言でも台詞を言った時から、逃れる事の出来ない芝居地獄。終わる事なんかない。どんな芝居でも終わる事なんかない。ただ、出し物が変わるだけ。さあみんな役割を変えましょう。衣裳を脱い

で出てきて頂戴。森崎偏陸さん、黒子の衣裳を脱いで出て来て頂戴！下馬二五七さん、シーザーさん、佐々木英明さん、書き割りの絵の後には渋谷公会堂のコンクリートの壁、そのうしろには、冬のさむい街が見える。

蘭妖子さん、・・・サルバドール・タリさん、・・・ヘンドリックさん、昭和精吾さん、・・・寺山修司さん、さあ、みんな出て来て頂戴！この声と共に地ひびきをたてて「邪宗門」の虚構、舞台装置はガラガラと崩れる。崩壊してゆく大道具の背後から、この劇の登場人物たち、続々と素顔で、じぶんの言葉で観客に向かってしゃべりはじめる。・・黒子ら口口にしゃべりながら、舞台を叩きこわす。目つぶしの照明の中で、アジるもの、叫ぶもの―すべては即興的で、しかも暴力的に、一時間持続してきた虚構をくつがえすのである（寺山 修司(著),/白石征・山口昌男 監修, 監修『寺山修司著作集』第 3 巻 戯曲、クインテッセンス出版、2009 年より）。

こうして劇場での芝居はもう終わりと、娼婦役の女優が登場人物の名前ではなく役者の名前を呼ぶ。「役を捨て、衣装を脱げ」と。役割から解放された役者たちが登場し、それまで演じていた演劇と舞台を破壊する。ひとりがマイクをとおして叫びはじめ、舞台を去って行く。「世界は劇だ。俺も劇だ。」、「劇は終わった。俺は町に出てゆく。」、「劇は終わった。このあとはきみたちの番だ。」、「たかが言葉で作った世界を言葉でこわすことがなぜできないのか。」、「ここには何もない。何もないのだ。」、「俳優を役柄から解放せよ。そして劇を劇場から解放せよ」と。残されたのは崩れた舞台と誰もいないステージ、そして観客。無残な姿で「終演」となる。演じられたことそのものに自己言及し、演劇のフレームが壊され、虚構が暴かれていく。

「邪宗門」の最後、いままで演じていた舞台の大道具が解体されていく。演劇のなかで演劇を支えていた基本の装置がなくなっていく。その過程をみせつけられる。しかしこれも「邪宗門」という演劇の一環であるという枠はなお残っているのだろうと思って観客はそこにいる。劇場が破壊され、役者が役と仮面を脱ぎ捨てた後にみえてくるのは何か。それは日常であり、市街である。唐十郎のテント芝居もよく観たが、大きな開放的な空間に設営された舞台が解放されて街が見えるようになっている。演劇が市街へと解放されていくと言う意味だ。

そこで問題は残された観客たちだ。演劇が解体されたのだから観客も解体されることになる。「こんな虚構を観ているお前たちは誰だ」と人間になった黒子や役者が挑発してくる。「観客であることを止めろ」という。

さてどうしたらよいのだろうか。このまま帰るべきなのだろうか。次々と襲いかかるようにして演劇という枠が演劇をとおして解体されていくと観客は何をなすべきなのか、虚構と現実とは何なのかと思考は混乱するように仕掛けられている。破壊は創造という体験だと言われても、いまこれからどうすればいいのか。

そのために頭を使えと寺山は言う。「どんな鳥だって、想像力よりも高く飛べない。」と。

この作品を直近、舞台で観たのは 2013 年の夏だった（演劇実験室◎万有引力・呪術音楽劇「邪宗門」。作：寺山修司、演出・音楽・美術：J・A・シーザー、共同演出：高田恵篤、脚本：白石征、出演：万有引力俳優陣、

岡庭秀之、渡辺敬彦、井内俊一、森祐介、曽田明宏、とりふね舞踏舎ほか、会場 座・高円寺)。

この年は寺山没後 30 周年であり、活発にいろいろな作品が上演されていた。初演当時と変わらないであろう案内文には、「革命の演劇ではなく、演劇の革命化を！登場人物を演じる俳優とそれを操る黒子、その黒子を操る作者、作者を操る夕暮れの憂鬱……一服の煙草の煙……。虚構と現実が入り交じる『邪宗門』は、演劇構造そのものを演劇を使って表現し、『演劇とは何か？』を問い続けた寺山の演劇論を舞台化した」と紹介されていた。1971 年ヨーロッパツアー、ベオグラード国際演劇祭グランプリ受賞とある。「アントナン・アルトーが劇場の暗黒にまき散らした演劇の毒を、市街にまでまき散らそうとする陰謀と評された幻の問題作である」とも記されている。「1972 年、一回限りの渋谷公会堂で伝説になった本作を、寺山修司没後 30 周年に再演します。」と。

「邪宗門」は 1970 年前後の時代状況に根ざしたものだが、2021 年現在で考えると、操られている事態はさらに展開し、AI などデジタルネットワークが背後に登場するのだろう。構図の基本はさらに巧妙になっているともいえる。

「私は本当に自由に言葉を発しているのだろうか」、「私の声と言葉は誰のものなのか」、「自分の声や言葉は独自にあるのだろうか」という冒頭からの問いは寺山の時代と変わらない。

これを加害者のナラティブへの問いと重ねていくと、男性たちの声は黒子に支配された声と言葉であるように思えてくる。その加害の陰にある黒子とは誰かを考えたくて男性性を象る声と言葉でもあると考えたことは前号で書いた。そこで元の文脈に戻り、少し広げてナラティブは誰の声なのかと考えてみる。

3. 多数派の声と言葉への懐疑と沈黙

こうしたことを考えているといろいろ関連したことを引き寄せる。『HIKIPOS』というひきこもり当事者たちの声を集めた雑誌に出会った。2018 年 6 月 18 日号に記されている次のような記述が本号の文脈では印象的だった。「私の母語は沈黙－ひきこもりとセクシャルマイノリティ②」と名付けられていた。部分的に引用しておく。
https://www.hikipos.info/entry/2018/06/18/060000（2021 年 5 月 20 日閲覧、下線は筆者による）

私はいわゆる「不登校」や「ひきこもり」の経験をしてきた。その中で、養育者（親）から「原因は何か」、「話してくれないとわからない」、「不満があるならもっと言ってきたらいいでしょ」など、自分の沈黙を責められてきた。私はたしかに語らず、――暴力や暴言のない「ひきこもり」というのは、行為としても沈黙的なことに思うけれど――ていねいに説明するなんていうことはできなかった。ただ反論めいた弁明をするなら、マジョリティの側にいた養育者たちも、聞くに値することはなにも語っていなかった。ガッコウや社会を避ける私に対して、たとえば自分たちの言葉で社会に出て行くだけの意義や喜びを語る、ということはしていない。

人間関係の中には、空気を読むとか察するとか、――時事的な言葉となった忖度（そんたく）とか――はっきりと言葉で伝えないコミュニケーショ

ンが多い。マジョリティの社会なら、進学や就労、結婚が当りまえのものとして、深く語られる必要もない。「なぜ就労したのか？」と問い詰められたり、「男女で結婚した原因は」なんて心理分析されたりしない。語らないという意味では、マジョリティだった養育者の側にも多量の沈黙がある。少なくとも、養育者にとって私の言動が腑に落ちるだけの「原因」や「理由」の言葉を聞かなかった程度に、私もまた社会に出るだけの「原因」や「理由」にあたる言葉を聞けなかった。それはたとえば性教育を語らずにすませることのような、表だって言葉にすることを控えるだけの、半分意図的な抑制がはたらいていたということはなかっただろうか。性被害を言葉にしないことのように、公開し分析するよりも、語らないことが最も都合の良い対処の仕方だったことはないか。私に固有の沈黙があったのではなく、養育者の側や、大きくは社会的な環境に沈黙があったのでは、と疑っている。私が沈黙的なことをし続けていたにしても、それは私だけの生存戦略ではなく、空気を読んで生き方まで決定されるような、深く大きな黙（もだ）のある環境に、私が住んでいたということではなかったか。（喜久井ヤシン）

多数派の声と言葉と対比して、少数派が「沈黙」へと追いやられていく固有の経過が理解できる。養育者という距離を置いた言い方だが、親たちの声と言葉は届かないどころか、こうして悩みながら、その声と言葉に懐疑的になり、黙して語らない当事者となっていく。暴力という行動化を選択しない多くのひきこもり当事者は沈黙する。そうするとそれがひきこもりの症状としてさらに上書きして記述されていく。しかしそこにはさらに大きな、語るけれどもそれは自らの声と言葉ではない社会の多数派が同調しているだけの、そうした言葉の羅列でしかないことを察知した当事者がいる。となるとそれに応答するわけにはいかない。世間の声と言葉を反復しているだけの、聴く力のない人たちに向かって話す必要はないと判断することになる。とはいえまだ当事者としての自らの声と言葉が醸成されていないジレンマもある。だからさしあたり沈黙とともに、行動としてひきこもるという選択をすることになる。

ここには、不登校、ひきこもり、薬物使用、病的ギャンブル、盗癖等、「逸脱行動」として烙印を押し、「問題」を語り、定義し、そこからの「解決」を支援や臨床と位置づける、一連の連続体（問題の定義、支援ニーズの確定、臨床化した対象設定、実践と技法の開発、エビデンスの構築、政策と制度への昇華等）が存在し、社会の支配的なナラティブ（物語化）として機能している事態が読み取れる。ここに宿る課題は、沈黙へと追いやる社会の無意識と聴く力の欠如の相乗作用である。それらとは別の声と言葉の展開による、また異なる連続体を再構築することの営為として当事者たちの発言がある。

4. 沈黙と暴力

この沈黙へと追いやる社会の側にはもっと野蛮な暴力性が原因となっている場合もある。そのことはこの連載で何度か取り上げてきた。例えば、DV、虐待、体罰などの暴力を「関係コントロール型暴力」として定義し、そこで起こることを「サイレンシング（沈黙化作用）−語られていないこと・語りえないものがあることへの配慮」と題

して紹介した（『対人援助学マガジン』通巻第 22 号）。沈黙を強いることは暴力そのものである。暴力はワードを喪失させていく。

さらに広く「沈黙」が生起する環境それ自体を考えると社会病理学や臨床社会学の多様なテーマがみえてくる。語ることができるのか、どのように語るのかということでもある。語られたことの外部にあるもの、排除の対象、ネグレクトされてきたこと、被差別対象等がそこには横たわる。沈黙へと追いやる多数派のなかで、臨床のセラピーであれ、学術的なインタビューであれ、何かの判断のための聴取であれ、自らの手記であれ、ナラティブはいかなる磁場のなかで生起するのかを考えておくことの配慮が必要だと考えるようになった。

特に加害のナラティブは、社会のなかに存在する暴力を肯定する多数派の声と言葉を濃縮して表出している面があり、社会のもつ暴力性を行動とその後の説明として顕現させているといえるだろう。多数派の声と言葉に他ならず、暴力を否定できない社会は同調する共犯的な関係に立つ。

発せられた声と言葉のナラティブはその一部を切り取ることでしかなく、語り得ないことがたくさんある。加害の語りを聴く側にそれは誰の声なのかを聴きわける力がないと巻き込まれる。自らの声と言葉としてのオーセンティック authentic（真正）なナラティブをささえるのはこの聴く力や聴くコミュニティの形成と相関している。

この課題を自らのライフストーリーに照らして社会の課題をクリアにした研究がある。石原真衣『＜沈黙＞の自伝的民族誌－サイレントアイヌの痛みと救済の物語』（北海道大学出版会、2021 年）である。

オートエスノグラフィーは、日本で始まったばかりの方法論です。「まだない」言葉の創造ともいうことができるでしょう。私はこれまで、アイヌの出自を持ちながら沈黙する人びとについて、家族史とオートエスノグラフィーによって明らかにしてきました。この研究によって、様々な「沈黙する人びと」とつながり、自分がいる場所のままで、これまでとは異なる世界がみえるようになりました。異文化というのは、遠くの地へ行かなくても、みなさんの周りに溢れているのかもしれません。沈黙に関する研究は、様々な領域、地域にわたり、知的好奇心に溢れた研究です。また、無理やりに沈黙を破らせるのではなく、沈黙を生む構造について明らかにしながら、その沈黙の周りにある痛みを癒す可能性を持っています。みなさんの足元の「異文化」について、深い知性と洞察によって、新たな言葉を創造していく仲間を求めています。

と本書の導入がなされている。石原さんの研究でダウンロードできる論文から、沈黙について関連するところを紹介しておこう。以下の引用は「『サイレント・アイヌ』を描く―〈沈黙〉を照らすオートエスノグラフィーの可能性―」（『北海道民族学』第 14 号、2018）からである。

私は、1982 年、札幌で、アイヌのハーフである母と、和人の父の間に生まれた。‥母はそのとき、「北海道の歴史を正しく理解する人にしか、アイヌの血を引いていることを言ってはいけない」と私に伝えた。私は、「北海道の歴史を正しく理解する」ということがどういうことなのかわからなかったため、「アイヌの血を引いていることを言ってはいけない」というメッセージのみを受け取った。アイヌの血を引くということを知ったところで、家族や親せきは、家庭の中においてですら、アイヌ

という言葉を絶対に語らない状況の中で、私は生きてきた。人に言ってはいけない秘密があるということがおぞましかったが、アイヌの血はみえるわけではないし、アイヌの血を引くということは、いつもリアリティがなかった。私の曾祖母は、唇の周りに入れ墨を施していたという。アイヌの伝統的な風習であったその入れ墨も、同化政策の下で禁止され、曾祖母が生きた時代には多くのアイヌが入れ墨を施さないという選択をしていた。曾祖母は、子どもの頃に無理やり大人たちによって入れ墨を施されてしまった。その入れ墨は、生涯ステイグマとなり、曾祖母がコタンから出て隣町に住む娘や孫に会いにいくときには、ほっかむりをして隠す他なかった。当時は、和人の子どもがアイヌの老を見ては、「あ、イヌがきた」と言ってからかう時代だったのだ。・・・そこで、就職して、社会的基盤も安定したころ、周囲の人々に自分がアイヌの血を引くことを伝えてみた。すると、「あなたがアイヌでも気にしない」とか、「アイヌも日本人と同じでしょう」と言われた。差別はされなかったが、対話の余地がなく、和人には自分の混乱や心情を、理解してもらえないのだと思い、アイヌの人々との出会いを求めた。しかし、アイヌの人に会って、知れば知るほど、共有するものがないことに気が付いた。アイヌ文化に関する集いはあるが、アイヌ文化に対して親近感を持てない私にとっては、その場が苦痛だった。・・・私は、アイヌと和人の両方の血を引くが、文化や経験といった背景は、そのどちらも有しておらず、私の足場はどこにもなかった。自己をアイヌとも和人とも同一化できないため、自分が何の当事者であるかもわからず、どのように語ればいいか、何を研究すればいいかもわからず、沈黙は深まるのだった。しかし、この〈沈黙〉は私一人のものではない。アイヌの出自を持つ人々の多くが沈黙しているのである。そうであれば、〈沈黙〉の所在を明らかにし、自己の存在を歴史化することで、「サイレント・アイヌ」が生きる世界の一端を明らかにする必要があるのではないかと考えた。

さらに石原さんはカミングアウト体験を語る（同論文)。「(カミングアウト後）すると、『あなたがアイヌでも気にしない』とか、『アイヌも日本人と同じでしょう』と言われた。差別はされなかったが、対話の余地がなく、和人には自分の混乱や心情を、理解してもらえないのだと思い、アイヌの人々との出会いを求めた。しかし、アイヌの人に会って、知れば知るほど、共有するものがないことに気が付いた。アイヌ文化に関する集いはあるが、アイヌ文化に対して親近感を持てない私にとっては、その場が苦痛だった」と記している。二重に重なる中空に浮かぶ様子がうかがえる。特に、他者の反応のなかにも共生を強いる同化的な反応への抵抗は重要だろう。そうした属性を気にしないこととして平等を語るべきではない。反差別の根拠をどこに求めるのかという点では大事な箇所だ。

こうして石原さんは、アイヌの血をひく家族の歴史を生きてきたことの意味の探求と、社会の課題、そして研究の有り様を重ねていく。石原さんは「〈沈黙〉を照らすオートエスノグラフィー」の必要性に至る。「従来の『研究する側/される側』という枠組みによるエスノグラフィー論の限界を提示し、近年発展している当事者研究を批判的に継承しながら、『サイレント・アイヌ』を照らし出すための方法論として、オートエスノグラフィー論を刷新したい」と結論づけられている。

沈黙は「隠す」のみならず、「言葉の不在」

や「第三項の排除」と関連している。この第三項とは多数から周辺へと排除されていく対象のことである。不可視化されていくという意味では当事者としても立ちあらわれにくい。その意味で第三項とされる。第三項を全体で排除する構造ができて初めて互いの承認が実現し、人びとは安定した「仲良し」状態とその社会的な秩序を楽しむことができるとされている（今村仁司『排除の構造―力の一般経済序説』ちくま学芸文庫、1992 年)。「社会的排除論」として現在でも有意義な視点だ。石原さんの研究はアイヌの家族の歴史のなかを生きることの意味の探求と重ねて社会を自分と家族の歴史に引き寄せていく。

沈黙との格闘から生成した知に感銘を受ける。沈黙を主題にしたここでの問いと重なるからだ。これをさらに加害のナラティブへと関連づけて考えてみたい。『教職研修』（教育開発研究所）という雑誌の 2021 年 6 月号に掲載の「学校での『差別』を考える」というコラムの原稿を引用しておく。これは何度か紹介してきたデラルド・ウィン・スー著『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション―人種、ジェンダー、性的指向：マイノリティに向けられる無意識の差別』マイクロアグレッション研究会訳、明石書店、2020 年）という翻訳を読んでくれた編集者から、簡単に紹介して欲しいという依頼のあったものだ。

マイクロアグレッションという言葉がある。有形力の行使としての身体的な暴行を加えるのではない三種類のマイクロアグレッションが整理されている。

第一は、攻撃である（micro assault)。言葉による脅しや相手を指弾して威嚇する等の意図的な攻撃行動である。環境に埋め込まれた侮蔑的サインや言語、行為による偏った態度や信念である。明示的な軽蔑を含み、特定個人に狙いを定めて暴力的な言動を行い、攻撃する。価値を貶める、避ける等の差別目的の行為もある。

第二は、相互行為に埋め込まれているもので、ステレオタイプや無礼さ、無神経さ等である（micro insult)。軽微な無視もある。加害者に自覚のないことが多い。気遣いのないコミュニケーションをとおして人種的出自や文化の価値を貶めることになる。女性の内科医が男性の患者から看護師と間違われる等の例が挙げられている。

第三は、有色人種、女性、LGBTQ といった特定のグループの人々の心の動きや感情、経験を無視したり、否定したり、無価値なものとして扱ったりする（micro invalidation)。マイノリティの心理状態や考え方、感情、経験を排除、否定、無化、侮蔑等して無価値化する行為である。一緒に訳した若い在日コリアンのメンバーが話題にしていた。「留学生ですか」「日本語うまいですね」「日本に何年居るのですか」と聞かれることが多いという。その瞬間、在日コリアンである存在が無化された感覚を持つと語る。

さらに厄介なことがある。こうしたことをしている側から謝意が示される場合である。その謝罪がマイクロアグレッションとなることがある。「あなたを傷つけてしまったならごめんなさい。」「気分を害したようなので謝ります。」等である。相手を傷つけた自己が立ち現れてこない。加害が内省され、自らの発言や行為がもつ差別性に向き合おうとする謝罪ではない。傷つきやすい被害者が話題になっている。「あなたの感受性、考え方、さらにいえば脆弱性に由来する傷つきなので、その点について謝罪します」と言わんばかりなのである。

こうしたことに気づきを与えてくれるマイクロ

アグレッションという言葉で身の回りを眺め直しておきたい。

先の石原さんの経験に重なると考え紹介した。内なる声と言葉のもつバイアスに気づくためにだ。

5. 多数派のなかにいることからの脱出

男性の加害者の多くはジェンダーとしては多数派の中を生きている。暴力加害者のナラティブはジェンダー秩序を反映している。沈黙のなかにいるのではなく、暴力行動が説明される。しかしそれは男らしさの声なので、自分の声と言葉ではないことほとんどだ。そうした加害を語る言葉からどのように脱していくのかは声と言葉を異なる連続体へと接続していく際に必要な視点だ。加害者との対話はまずは自らの多数派体験の気づきからという点で参考になるので紹介しておきたい。

小学生のころに、父の職場に胎児性（母胎内で有機水銀に侵され生まれたひと）の患者の方が遊びに来てたんですね。胎児性のひとたちとはずいぶん関わりが深くて、近所にたくさんいらしたし、親と同世代ということもあって、可愛がってもらいました。あるとき胎児性の患者の方が一人で歩いてきたのを見て、友だちがみんなで真似をはじめたんです。お前も真似せいやと言われて、真似をしたんですよね。真似しないということができたらよかったんですけど、私はその場で自分を守った。それが自分の、水俣病との最初の苦い思い出なんです。それからずっと、水俣病というと自分のなかにはそのことがあって。大人になってから、自分が外から差別を受けるという経験もしたんですけど、ひとに対しての加害というか、水俣病の原因をつくったということではない、別のところでの加害というものがありました。経済が発展して豊かになっていく過程で水俣という地域が置き去りにされ、踏まれていったその上にいまの私たちの暮らしがあるんですよね。そして、その延長上に私たちは生きている。認定を受けないひとたちとか、こぼれおちたひとたちを放置した、関心を持ってこなかった私がいる。この社会を構成している私たち一人ひとりが実は加害者なんだと思うと、自分も当事者になってしまう。被害者でなければ加害者だとは言い過ぎかもしれないですが、そういうつもりでいます。みんなが何かしらの当事者だと。

差別する側に同調していた体験の居心地の悪さを感じて水俣病患者の相談に携わる永野三智さんの取り組みである。多数派からの脱出のライフストーリーとして理解できる（ころから株式会社（2018/9/12）『みな、やっとの思いで坂をのぼる－水俣病患者相談のいま』水俣病センター相思社。2021年は水俣病公式確認の 1956 年から 65 年目となることもあり紹介した）。

加害の言葉を紡いでいくことはいかにして可能か、戦争体験をはじめとして加害のナラティブ研究と実践はこの課題をひきうけなければならない。

6. そして男たち

加害のなかの男性たちの声と言葉、それは語るけれども自分の声と言葉ではない。マイクロアグレッションに気づいたり、永野さんのような差別する側に同調していた体験からの脱出があったり、石原さんのような中空にいるなかでの沈黙を自覚したり

する、つまり自らを変容させていくような機会に暴力加害者として登場することで気づきへとつながっていくとよいと思いながら、加害者臨床や研究に取り組んでいる。できれば他者にも自己にも否定的な影響を与えてきた、支配的な声と言葉にまみれた男性性からの脱出をして欲しいと考えての対話で紡いでいきたい男性たちの声と言葉であるが、これが実に難しい。

ハームリダクション（有害性のある問題を除去していく制度）の政策と実践は、対人暴力の場合は脱暴力プログラムへの参加を指示する「受講命令制度」の構築としてアプローチできたとしても、そこにおける加害者臨床の組成と実践には相当な工夫が必要となる。支配的な声と言葉で反省や謝罪を語られても、変容にはつながっていかない。

支配的な声と言葉は男性的主体へと「呼びかける」。それに応答して生きてきたとすると長い間の主体化の歴史があるからだ。そうしたライフストーリーを相対化するのが脱暴力プログラムである。時間の逆戻しとなり、生きなおしを迫ることになる。自らを変容させる声と言葉の構成をめざす対話の必要性であり、借り物の支配的な声と言葉ではないものを創り出すことへの協働するナラティブとなる。

2021 年 5 月 30 日受理

社会病理学・臨床社会学
中村正

人を育てる会社の社長が
今考えていること
vol.10

「本当によくしてもらった」と感じる経験が、基礎になる

私はいくつかの会社を経営しているが、その中でもアソブロックは、特定の事業を持たず、“人の成長支援プラットホーム”をコンセプトに運営を続けている。

そのアソブロックで、若手を育てるのが難しくなってきたと思うことが増えた。それは単に気分的な危惧ではなく、実際に卒業生から社会にインパクトを残すような活躍を果たす人材が現れていないと思うからだ。

私としては、その現状は不本意なので、これをどのように改革すべきか、その前に、そうなった要因は何なのかを、ここしばらく考えてきた。しばらくといっても数日のレベルではなく、年単位である。

そしてようやく、ひとつの仮説にたどり着いた。今回はそれを書いてみようと思う。

＊＊＊

人が成長するには、「誰かにとてもよくしてもらった」という経験が必要不可欠だと、私は思う。それが人や社会を信頼することにつながり、利他的な振る舞いの基礎になるからだ。私は、金儲け上手を育てたいわけではなく、何かしら社会にインパクトを与える活躍ができる人を育てたいと思っているので、この点は重要だ。

アソブロックは、「人の成長支援プラットホーム」として機能するために、この「とても

よくしてもらった」を提供し続けてきた。会社の制度や仕組みをどう運用すれば、所属メンバーや関係者がそう感じるのかを最優先事項と捉え、動かしてきた。

その過程で、アソブロックの大きな特徴としてメディア露出も多い「年俸自己宣言制度」や「兼業必須」「出社義務なし」などが生まれてきた。

これらは人を倍速で育てる仕組みとしてとても有効だと私自身も実感し、その中でたくさんの優秀な卒業生を輩出してきた。ところが、どうやらここ最近は、この制度が足を引っ張っているのではないかと気が付いた。

その理由は、兼業・副業といったものが時代の流れに乗り、経済合理主義の仕組みに取り込まれてしまったことにある。

＊＊＊

例えば、10 年前のアソブロックにおいて、兼業しているメンバーは、一般労働者の中で明らかにマイノリティーだった。メンバーはクライアントや友人に「どうしてそんなことが認められるのか？」と問われ、不思議がられたり、うらやましがられたりした。一方で私は「そんなので会社が上手くいくのか？」と問われ続けた。

メンバーたちの立場に立つと、働き心地も良く、「会社が、自分たちにとてもよくしてくれている」という実感があった。私も、やってみたらそれで売り上げが落ちたり、問題が起こったりするわけではないと分かったので、何の問題もなかった。

私やメンバーたちは、世の中的には新しいこの仕組みがより上手く機能するように、それぞれがアイデアを出し合い、工夫を続けた。兼業必須を、成長合理主義に立った素晴らしい仕組みだと相互に認め合い、その上で、経済合理性を損ない過ぎないように、お互いに気を付け合ってきた。

経済合理性を著しく損なうと、兼業必須を自ら取り下げなければならなくなると分かっていたからだ。

しかし、現在において、兼業は「会社が用意しなければならない制度」になりつつある。「兼業を認めないと、優秀な人材が採れない」。そんな言い方をする人もいる。そこで一般企業の経営陣たちは、「経済合理主義の中にいかに兼業を取り込むか」を考えた。その結果蔓延しているのが、現在の兼業・副業ブームである。それらはやがて、労働者の「権利」

になっていくのだろう。

経営陣は権利付与と引き換えに、「キャリアは自分で作るもの」という常識を植え付けた。人材会社も、その考えに、マイナス面も分かった上で乗っかった部分がある。そうすることで、人材流動性が高まり、儲かるからだ。

その結果、企業は人材育成投資金額を削減することができた。日本の雇用システムの中では、段階的に人的整理（解雇）もしやすくなる方向だ。もちろん、経営陣は会社の経済的成長を止めるつもりがないため、厳密にいえば、人材育成は「できるやつだけに集中投資」をする方向に舵を切り替えているといえる。

兼業・副業を認めることで、非正規雇用の問題にも霞がかかる。兼業・副業を認めることで、より経済合理性が高まるバーターを成立させたのだ。その未来に何が待ち構えているかを、現経営陣の多くは、見て見ぬふりをしている。

＊＊＊

さて、話をアソブロックに戻そう。

世の中がそのような流れになる中においては、当然アソブロックに新しく参加するメンバーも、その影響を受ける。その結果起こったのが、兼業必須の権利化であり、「よくしてもらっていること」ではなくなるという変化だ。

問題は兼業の善悪ではない。アソブロックは、「人の成長支援プラットホーム」として機能するために、「とてもよくしてもらった」を提供しようと「兼業必須」や「年俸宣言制度」や「出社義務なし」を続けてきたのに、ある時からそれが機能しなくなったことである。これは、環境変化が主因であり、個人資質の問題ではない。

その結果、冒頭に述べた、利他的な振る舞いを基本行動としながら、何かしら社会にインパクトを与えるような活躍ができる人を育てることができない会社、に成り下がりつつあるのではないかと、私は思う。

これは、私からすると、とても残念な結果である。ただ、現実は直視しなければならない。改めて「人の成長支援プラットホーム」になるためには、果たしてどういった仕組みが必要なのか。

アソブロックは来年、20 期を迎える。人でいえば成人式だ。もう一歩、さらに踏み込んだ会社になるために、今は冗談ではなく、若年層に対しては「全寮制」の会社がいいのではないかと思っている。もちろん合宿所とかではなく、感じのいいシェアハウスで、若手は一緒に暮らす。そして、お互いに刺激を与えあいながら、遮二無二に働く。人生において、自らのキャパシティを広げる上で、寝食を忘れて働く時間が、私は必要だと思う。

もうひとつ、賃金のいい、ブルーカラー的な仕事を恒常的に用意しておくことの大切さも感じている。会社のメンバーが成長するに伴い、アソブロックでいえば、相談される案件が高度化していった。それは喜ばしいことだが、一方で、若手に手伝ってもらえる仕事が減っていくということでもあった。

次世代が、どんなことを通じて「あの会社には、あの人には、本当によくしてもらった」と思うのか、この焦点をずらすことなく考え続けることが大切だと、私は考えている。

文／だん・あそぶ
「人の成長に資する場づくり」をポリシーに、業態様々な 8 つの会社の経営に携わる一方で、「社会課題を創造的に解決する」をモットーに様々なプロジェクトを手がける。元は雑誌の編集者。立命館アジア太平洋大学では「街場のキャリア論」と題して、インターンシップを軸（実習）にそれぞれの人生のビジョンを考えるキャリアの授業を展開。独自の経営手法が、働き方改革の流れで注目され全国で講演も行う。
団遊の組織論；https://corp.netprotections.com/thinkabout/1536/
団遊の採用論；https://job.cinra.net/special/asoblock/
仕事を辞めたくなったときに；https://goo.gl/bFQdpC

カウンセリングのお作法　第二十七回

CONカウンセリンオフィス中島　中島(水鳥)弘美



話を聴き続けること～基本姿勢をふりかえる～

『カウンセリングのお作法』は、これからカウンセリングを学びたいという人や、まだ実践経験の少ない人を対象に、わかりやすいことばでイロハを伝えていくことができればと考えています

話を聴き続けること

今回は、クライエントの話を聴き続けることについてもう一度、基本をふりかえって話をします。

カウンセリングでは、クライエントの話を聴くことは重要で、理解している方も多いと思います。相談に来られた方が、不安と期待のなかで、その気持ちを語り、カウンセラーは話された内容を受けとめて、少しずつ信頼関係を築きます。

聴くことは、支援を必要としている人が、いまどういう状況の中でどんな心境なのか、何を望んでいるのか、深く理解するためには欠かせない基本姿勢の一つです

クライエントとの呼吸

ゆっくり

なかなか困りごとの思いを話すことができないクライエントさんがおられます。その場合は、ゆっくりとそのペースに合わせます。カウンセラーの態度は、待つです。クライエントとの間で呼吸合わせをしながら、クライエントさん自身のペースを守るようにします。

急いでいる

クライエントさんの話が、テンポが速い場合もあります。初対面で、お会いしたときから、途切れることなく、自分の思いを語る方がおられます。テンポの速い語りには、ときに極度の焦りや怒り、持ちこたえられないつらい思いなども考えられます。

カウンセラーは、できるだけそのテンポに合わせていきますが、話される内容を理解し共感して聴く必要があります。

視線

カウンセラーの態度のうち、視線に注目して考えましょう。

面接における視線の意味は、その人の関心の方向に一致すると考えられています。カウンセラーが途中で視線をはずすと、クライエントのその話はききたくないと思っているように受け取られるかもしれません。

また、カウンセラーの落ち着かない定まらない視線は不安になり話せなくなります。伏し目がちの視線は関心のなさが伝わります。

しっかりと受け止めていることを示しながら、話を聴き続けます。

話を聴き続けること

基本姿勢

落ちついて受けとめる





落ち着きのない態度



視線を途中ではずす

カウンセラーが途中で視線をはずすと、

クライエントのその話はききたくない

と思っているように受け取られるかもしれません

話を聴き続けること～基本姿勢をふりかえる～

あわてずに落ち着いて聴き続けること

落ち着いて話を聴く

クライエントさんの話すペースにカウンセラーがそっとついていくようなペースであれば、理解を深めながら徐々に受けとめることができますが、クライエントさんのペースがとても速く、じっくり受けとめる間もなく、話がどんどん進んでいくことがあります。

次のような具体的な場面を想定して、あわてずに落ち着いて聴く態度について考えてみましょう。

あなたは病院に勤務する相談員で、新人一年目です

A入院中の男性が面接室に来られました

「入院して三か月も経ちました、それなのに退院の話が全く出てきません、わ、わたしは、私は、ほんとうはがんなんじゃないですか！　もう手遅れなんじゃないですか、知っていることがあれば教えてください！」

B子育て中の女性がおひとりで相談に来られました

「**初めての**子育て中です、かわいいとは思うのですが、子どもが泣き止まないと腹が立って、バシバシたたくこともあります、なんで私をこんなにも苦しめるの！と思うのです」

さて、みなさんはこのような場面、いかがでしょうか　落ち着いて話を聴き続けることはできるでしょうか。

切羽詰まった感じで、クライエントさんは、抱えている思いをカウンセラーに話しました。思いをぶつけているようにも感じます。

話を聴いていて、その内容が、いきなり、命にかかわるような話や暴力の話が出てきました。

「そのような話はききたくない」

「そんな話をされても困る」

「この人心配しすぎ」

「なんてひどいことをするの」

というような気持ちがよぎったりしませんか？

もしも、そのような場合は、驚きや困惑からそれらが表情にあらわれ、非言語として残念ながらクライエントに伝わるかもしれません。

受け入れではなく、拒否的な態度に感じられるかもしれません。

すると、クライエントは話し続けられなくなるかもしれません。このような態度は、一瞬にして信頼関係を壊してしまうかもしれません。

次のような場面を想定して考えてみましょう
あなたは病院に勤務する相談員です



A　入院中の男性

「三か月たっても退院できません、
本当はがんなんじゃないですか？」



B　子育て中の女性

「子どもが泣き止まないと
腹が立って叩くこともあります」





命にかかわるような話や暴力の話を耳にすると
そのような話はききたくない、そんな話をされても困る～
その驚きや困惑の表情が非言語としてクライエントに伝わるかもしれません

話を聴き続けること～基本姿勢をふりかえる～

クライエントさんの話に少しあとからついていく

もうひとつ次の場面を考えてみましょう。

あなたは高校に勤務する新人のスクールカウンセラーです

ある高校生女子の相談です

「A子さんとは、小学生のときからずっといっしょにいます。けれど最近、いっしょにいるのがたまらなくいやになってきました。顔をみるのもいやで、頭が痛くなることもあります。いつも、心の中であっちに行ってよと思っています。」

この話を落ち着いて聴く態度について考えてみましょう。

「いや」「頭が痛くなる」「あっちに行ってよ」など、注目すべき言葉が出てきました。

話が一区切りついたところで、カウンセラーは、たとえば、

「小学生のときからずっといっしょにいるA子さん、最近、いっしょにいるのがいやで、顔を見るのもいやで、頭が痛くなることもあるのですね」

とクライエントの話で理解した内容を要約します

ここで、

「そうなんです」

と言葉が返ってくるか、さらに話が続くか、その流れはクライエントさんに合わせながら、話を聴き続けます。

大切なことは、

「なんでこうなったの?」

「そんなに嫌だったら一緒にいるのをやめたらどう?」

などと聴き手の考えや対策などに頭を働かせないように注意します。

おちついて、さらに聴き続けます。

他にも話したいことはないだろうか

この出来事をどのように感じているのだろうか

何を伝えたいと思っているのだろうか

それらのことを想像しながら、少しあとからついていくように話を聴き続けます。クライエントさんがカウンセラーに話しながら自らの発見があることで、次のステップに進むことが多くあります。

落ち着いて話を聴き続けることをつねに確認しましょう。

あなたは高校に勤務するスクールカウンセラーです

ある高校生が相談に来ました



「A子さんとは、小学生のときからずっといっしょにいます。

けれど最近、いっしょにいるのがたまらなくいやになって

きました。顔をみるのもいやで、頭が痛くなることもあります。

いつも、心の中であっちに行ってよと思っています。」

なんでこうなったのか？

そんなに嫌だったら一緒にいるのをやめたらいいなど、

対策などに頭を働かせることに気持ちが向いたりしませんか？



→

他にも話したいことはないだろうか、

何を伝えたいと思っているのかを想像しながら

少しあとからついていくように話を聴き続けます



CON子さん　心理カウンセラー

おちついて話を聴き続けることの大切さを再確認しましょう！

対人援助学との出会い（１）

－ Rehab －

藤　信子

対人援助学マガジン 45 号になって、初めて対人援助学の観点から自分の仕事を書いてみようと思っている。私は対人援助職なので、このマガジン創刊号から、あまり休載はせずに、仕事をめぐるエッセイを書いてきた。それは心理療法や、コミュニティ心理学、集団精神療法について、大学での講義では時間的制約があり、話しきれないことなどがあるという思いで書いていたものが多い。そしてそれは「内容」の問題だったと言える。今回は、私の実践や研究についての視点について振り返ってみようと思う。

対人援助学との出会いは、立命館大学大学院応用人間科学研究科初代研究科長の望月昭氏との出会いに始まると言えるだろう。2001 年に応用人間科学研究科に勤め始め，障害･行動分析クラスターに所属したので、毎週顔を合わせることになったけれど、望月さん（以後、この慣れた呼び方にする）は徹底的行動分析主義の人だった。動物実験をしたことも無かった私は、彼の話すことばの何パーセントかは全くのジャルゴンのようだと思うくらい、望月さんの話は分かりにくかった。ただ環境と個人の行動の相互作用に関心があったので、三項随伴性に関しては少し興味を持った。望月さんは私たちが 1994 年に出版した「Rehb-精神科リハビリテーション行動評価尺度 - 」(田原・藤・山下　1994) に関心を持ってくれていた。

1980 年代は､欧米では精神医療においては脱施設化が進んでおり、リハビリテーションの評価尺度が多く作成されていたが、日本では、脱施設化はなかなか進んでいなかった。それと関連して、チームで使用できる行動評価尺度もなかった｡1970 年代後半から精神科病院に勤務していた私にとっては、医療従事者のチームに共通言語が無いことに疑問をもっていた。今考えると、当時の日本の精神科医療では、医師の指示通りに動けばよいので、医師以外の人間が

患者をどのように見て、働きかけるかなど関係なかったのかも知れない。しかし保健所の PSW は「食事ができて、具合が悪いときに保健所や病院に電話を掛けることが出来るなら、地域で暮らせます」と言っていた。1980 年代は、病院に入院していること自体が、ホスピタリズムという問題が生じてしまうという意識がひろがっていっていた。

慢性精神病者のリハビリテーションを考える場合、症状の有無より、地域で暮らすために必要な技能があるかどうかが問題だった。そうなると、従来の医学モデルではなく、疾病の結果生じた障害を行動の用語でとらえなおす必要があった。障害を行動の用語で捉えるために、日常生活上の問題として把握できるようになり、患者（利用者）や家族などと問題を共有しやすくすると言える。専門用語で状態を表現するのではなく、具体的な行動上の目標、例えば一人で買い物ができる、など設定しやすくなる。

英国で 1983 年に Hall と Baker によって発行された Rehab の使用目的は、ⅰ）病棟や施設の特徴を把握し。退院可能群の抽出、活動のグループ分け、働きかけの目標設定などの集団の特徴を把握すること、ⅱ）グループワークの実践などの様々な活動の結果による集団の変化を見ること、ⅲ）他の施設と比較することで自施設の特徴を明らかにすること、ⅳ）個人の行動上の課題の把握、ⅴ）個人の行動上の変化の把握、など多目的である。他の精神科リハビリテーションの評価尺度と比べて Rehab の最も特徴的なところは、個人の行動評定を通して所属する病棟やデイケア等の施設の特徴が見えるようになっていることである。評定項目が 23 項目であり、それは自傷、独語・空笑・暴力等 7 項目の「逸脱行動」を見るパートⅠと「「病棟内交流」「余暇」「活動性」「言葉の意味」「身支度」「所持品の整理」「感染管理」等 16 項目の「全般的行動」を見るパートⅡから成立していた。23 項目に関して、1 週間の行動を観察し評定するのである。地域で暮らすことなどに必要なのはパートⅡの「全般的行動」に重点がおかれている。「全般的行動」の 16 項目は、「社会的活動性」「ことばのわかりやすさ」「セルフケア」「社会生活の技能」の 5 つの因子があった。

「全般的行動」の項目 21 は「この人は金銭の管理をどれくらいやりましたか？」であるが、金銭所持ができずにスタッフが管理する病棟の場合、評定のガイドに（お金を持っていないか、スタッフによって管理されている場合はここに評定する）とされている。そして、これは「最も障がいされた行動」となる。評定のトレーニングをする時に、スタッフから「この人はお金の管理はできるのですが、病棟の規則で預か

っているんです、だから障がいが重いのではないのですが、それでもここに評定するのですか？」という質問が時々あった。それに対しては「病棟の規則が、お金を使う機会を奪っているので、この人は障がいが重いと評定されるのです」ということになる。項目 22 は「この人は病院外での公共の交通機関を利用しましたか？」というものである。以前は精神科病院はあまり市街地の便利なところにあるとはとは限らない。Rehab の研修で聞いたある病院は 1 日に 3 便しかバスが来ない、というようなところもあった。だから公共のバスの便が無く、病院のバスで外出するために、この項目の評定が低くなるのである。項目 21 と 22 は「金銭管理」と「施設・機関の利用」に関して見ることで、「社会生活の技能を見る因子である。病院の規則、立地条件という環境が、利用者の行動を規定することになることを示している。環境が行動を作ると言える。Rehab の日本版を作成し。各地の病院に研修に出かけたことで、環境が行動に影響を及ぼす事例をいろいろ見ることが出来た。このことから私は個人の行動を環境との相互作用という観点から見ることに意識的になった。

文　献

Baker, R. ＆Hall, J.N. （1984）Rehabilitation Evaluation Hall and Baker, Vine Publishing, （田原明夫・藤信子・山下俊之（訳）（1994）Rehab-精神科リハビリテーション行動評価尺度、三輪書店）

ビジュアル系

子ども・家族の理解と支援

十二　寄木細工の臨床備忘録見立て（2）



家族援助あれこれ

四〇数年の間にあちこちで学んだ知識や技術をもとにした寄せ木細工の家族臨床その補修をかねて見立てと手立てを見直しています

前回の見立ては「家族の流儀」からでした。今回は、問題とされるものへの「家族の対処」からの見立てです。

いつものように、マンガは作者の団士郎氏の許諾を得て木陰の物語と家族の練習問題から転載しています。

ある出来事によって生活に支障をきたし、かつ長引いている場合、家族はそれを“問題”と呼んで不都合の元凶と名指しする、これはよくあることです。

”問題“ が生じたら、当事者も家族も解決にむけて努力します。その努力が報われないと苛立ちや怒りをつのらせますが、解決行動そのものは不思議と変えないものです。



頭の切り替えが難しいのは、その背後に”問題”を理解するストーリーを始めとする三点セットがあるからだと思います。



“問題”の背後の三点セット

① “問題”理解のストーリーへのこだわり

② 解決努力の効果に目がいかない

③ 解決行動における家族の役割の固定化

このセットを維持するエネルギーの供給元は、報われない努力・執拗な叱責・身勝手な回避・八つ当たりなどによるストレスがもたらす怒りです。

怒りが主役として居座ると、自ずと「怒りを活用するコミュニケーション」が飛び交うことになります。

役割の固定化



実際、怒りを使うと関係性とか場の支配は容易になります。怒りによる支配は、ある種の快感をももたらします。実際の葛藤や苦悩を曖昧にする働きもします。怒りには麻薬のような力があるため、その活用はクセになりやすいのです。



怒りの活用

一　関係や場を容易に支配できる

二　快感がある

三　かっとうや苦悩をあいまいにする

家族支援の目標は、なんとかしてこのセットの一角を崩すことです（続く）。



セット崩し

一　〝問題〟理解ストーリーの作り替え

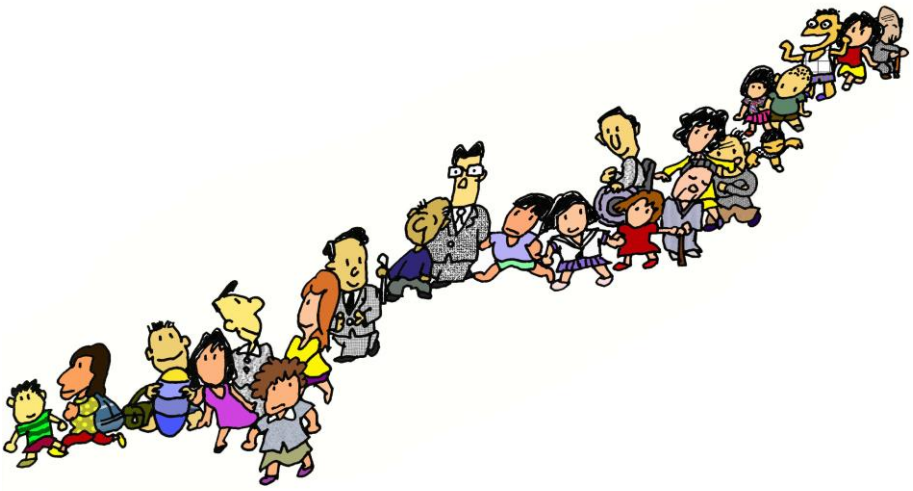
二　解決行動における家族の役割の変更

三　怒りを使わないコミュニケーションへのスキルアップ

Family History

（４）

団士郎／団いどむ



上の世代が亡くなり、新しい世代の誕生を迎える。この順繰りで世界は継続されてきた。我が家もその一部なので当然、そんな事態が発生する。

２０２０年８月、妻が亡くなった。七十歳だった。結婚して四十七年目のことだった。そして２０２１年３月、娘が女児を出産した。この一年の間に我がファミリーから女性が一人減り、一人増えた。ファミリー・ヒストリーはそんな事実にまつわる枝葉を、探し歩いているような作業だ。

妻の相続手続きのため、出生から亡くなるまでの戸籍謄本を準備しなければならなかった。本籍をずっと大昔のままにしてある人は、そこに郵送請求するか、取りに行けば良い。しかし私は誰も住まなくなった場所に本籍を留めておくことに違和感があった。そこで、転居の度に本籍を現住地に移してきた。パスポートの手続きなどには合理的だと思ってきた。

ところが今回、そのせいで、京都市（二カ所）、宇治市、福知山市を一日かけて戸籍謄本集めに巡る事になった。ついでに昔暮らしていた場所を同行の長男（遊）と久々に覗くことになった。子ども達が母親に慈しまれて育った場所を巡ったのだ。しかし当時、自分のことばかりで多忙にしていたので、それほどの感慨もなく、息子にあきれられた。そういうオヤジである。

母方祖父　信之

個人の記録ではあるが、社会的な立場、役職にあった人は公式記録が残っている。私の母の出身家族、藤竹家は藤竹信之（私にとって母方祖父）が日本陸軍の職業軍人であったために、そこに記録が残されることになった。

私にこの祖父の記憶はほとんどない。葬儀に出席したのが１番の記憶だが、京都市左京区下鴨のマクリン幼稚園の教会で行われた場で、牧師の言葉を受けて、大声で「ばんぐんの－、言うたぞ－」と繰り返したと父（五士郎）から笑い話にされたことだけ覚えている。よく意味が分からないが、父は何度も話題にした。その連想で、私は当時学齢前であったのだろうと思い込んでいたが、いどむ調査員作成の年表を見ると、１０歳、小学４年生であったらしい。なぜ、こんなにも記憶にないのだろうかと不思議な気がする。

教会での葬儀だったことも、ずっと後になって不思議な気がした。クリスチャン一家だったわけではなく、信之は歳をとってから自分１人洗礼を受けてクリスチャンになったと聞いた。理由は知らない。誰かが話しているのを聞いた記憶も無い。私の母が生きてるうちなら、その事情を知っていたかもしれないが、話題になった事はなかったと思う。

この話をいどむ調査員から当時の状況話と合わせて聞いていて思い出したことがある。日本社会において、歳をとってからクリスチャンになる人が増えた時期があった。なぜだったか、どんな状況の反映だったのか記憶にないが、そういう一人だったかもしれない。

近年、関心を持ち始めて取り寄せた兵籍簿。藤竹信之（母方祖父）のそれが強く気になりだした。出身は熊本の人である。

熊本の名門、旧制中学済々黌から陸軍士官学校を経て、陸軍大学校に入学している。陸軍大学校の在籍者名簿や、その後の事は日本陸軍の配属地ルートから調べると色々な事がわかるらしく、いどむが広範な資料を集めてきて、あれこれ話してくれた。

熊本・中学済々黌からは多くの陸軍士官学校入学者、陸軍大学校入学者を出している。そういうルートの名門校だったようだ。その中には陸軍大将、中将、少将等に名を連ねる人も多い。



藤竹信之は大正１５年（昭和元年）、四十九歳で少将・待命、予備役（所属は第六師団・熊本）となって京都に暮らし、銀行員になった。そこで六人の子どもを育てた。

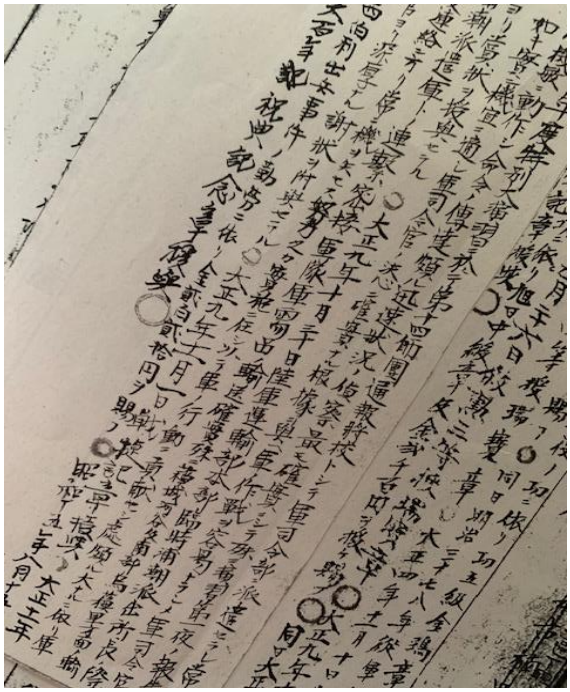
大正から昭和への時代の変わり目とも言える年に予備役（現役を退いた軍人が一定期間服する兵役のこと。普段は民間で生活を送るものの、必要があれば軍に呼び戻され、一定期間指定された職務につく役種をいう）になったことになる。

１９２０年前後（大正時代）の日本といえば、第一次世界大戦には連合国側の一員として参戦し、ロシア革命を経て樹立したソヴィエト連邦に対し、連合国と共に干渉戦争を仕掛けている。そこには同時に、大陸進出への野心も見え隠れしており、そのことが後の日中戦争、第二次世界大戦へと繋がるとも指摘されている。

兵籍簿によると信之はこの時期、運輸部に所属し、１９１９年９月、大陸への玄関口、臨時浦潮（=ウラジオストック）派出所長として赴任している。

その後、1921年には久留米配属となり、翌年に私の母・久子がこの地で誕生している。（久留米生まれの子で久子と名付けられた）。

また、シベリア出兵に伴う必要物資の輸送について、現地で連携を図り多大な貢献をおこなったとの事で、「1922年11月、西伯利（シベリア）出兵事件の勤労により、金貳百貳拾円を賜う」と兵籍簿には記録されている。



そして、1923年には野砲兵第二連隊長として仙台（第二師団）に赴任。全国を股にかけた家族での大移動。職業軍人とはこういうものなのだろう。

1925年（大正14）10月、仙台では陸軍特別大演習が行われ、その最終日には観兵式が行われた。

天皇臨席のこの式典には、遠く満州からは張作霖の右腕だった郭松齢がはるばるやって来ている。しかし予定より早く満州に呼び戻された郭は、方向性の違いにより張作霖と対立することとなり、直後の12月末に銃殺されることになる。

そして張作霖も、それから3年後の1928年（昭和3）には、関東軍によって爆殺されてしまう。

第一次世界大戦後の不況や束の間の平和到来、また大正デモクラシーなどの時代背景を受け、世界的な軍縮への動きが強まるなか、日本でも「軍の予算削減・人員削減」が政治の主要テーマとして浮上し、次第に軍人は肩身の狭い存在へとその地位を変えていく。

その突破口を開こうとしたのか、国内外ともに軍の行動は強引さを感じさせる事案が散見される様になっていくのが1920年代前後の特徴であった。

こうした時代背景のなか、信之は観兵式の翌年、1926年（大正15）3月末には予備役となっており、また同じ時期に仙台副連隊長も退役の記録が残っている。時代背景や軍縮の流れを勘案した上で、自らの軍人人生に区切りをつけたのであろうか。

信之はその後、少将の定年年齢である58歳（1935年）までは予備役として編入されていたものの、第二次世界大戦（1939－45）時には既に予備役も退役し、京都で勤め人として生活する一民間人であった。そのため終戦時には戦犯として追及される事はなかったのであろう、というのが私たちの推測である。

しかし年代的に、陸軍大学校23期と言えば、終戦時の参謀総長として戦艦ミズーリでの降伏文書調印式に出席した梅津美治郎や、陸軍統制派の頭領と目されていた永田鉄山と同期であるため（ただし年齢的には信之の方が5歳ほど年上）、もし早めの予備役編入となっていなければ、歴史の渦に巻き込まれていた可能性も十分にあると想像される。

そこであらためて引っかかってくるのが、藤竹家の跡継ぎである信之が、職業軍人歴を経て、なぜ高齢になってからクリスチャンになったのかということである。

そこは存命の孫であるMさん（私のいとこ）にお目にかかって話を聞きたいと思っているところだが、コロナ禍もあり、まだ実現できていない。

また、祖父信之の息子たち、信英、信雄（私の母の兄と弟）の兵籍簿はどうなっているのだろう。私にとっての伯父、叔父も共に職業軍人だった時期があったような記憶あるが確かではない。

信英伯父は跡取り長男として、下鴨の古い家を継いだ。そこで内科・小児科を開業し、後に下鴨本通りに転居して開業医として暮らし、息子(英樹・私のいと

こ)を跡取りの医師に育て、医院を継がせた。

母の弟、信雄叔父は原爆投下時の広島に軍務でいて、生き延びた人だった。結婚はしたが子はもうけず、京都の醍醐･石田団地で妻と二人、静かに暮らした。簡易保険局に勤務しながら、京都労演の事務局を手伝っていたので、舞台公演会場でしばしばお目にかかることがあった。

読書家でもあり、そんな話題で手紙の交流があり、親戚の叔父さんと言うより、大人になってからの同好の士といった感じだった。

亡くなったとき、団地の小集会場で行なった葬儀が印象に残っている。それまで私が経験していたのは、いわゆる葬儀社の会場で、多くの会葬者に対応し、挨拶する喪主のいるものだった。

しかし信雄叔父のそれは、叔父の兄弟姉妹（私の母）と数人の甥、姪だけの小さな儀式だった。そして、僧侶の経が終わったら、出席者皆で、故人の記憶を披露し合った。信英伯父は弟である故人との子ども時代の思い出を語った。この葬儀のイメージは、私の中にずっと生き続けた。

團家

「團の家は商売人やん。だったら公の記録に團家のことなんかあまり出てこないよね。同じルーツ探しでもずいぶん調べ方が違うことになるやろ？」

「團の家は士族の出やから･･･」という父方祖母・田鶴の口癖のとおり若狭小浜藩士であった規作は、43歳の時、明治維新を迎えた。侍の時代が続けば、跡取りとなっていたはずの長男・雄太郎はその時14歳。明治4年の廃藩置県で、小浜藩は小浜県となった。

侍の時代は終わった。このまま小浜にいても跡を継がせられるものではないと規作は考え、息子には自分で道を開けと家から離したのではないだろうか。

その後の息子の足跡に関する詳細は明らかではない。しかしながら、父・規作が1860年代には滋賀県高島郡で代官を務め、藩の交易に携わっていたこと、および、1880年代には長男・雄太郎が大津で運送業を営んでいる事から推測すると、何らかのツテを辿って、高島か大津へと出て行ったのではないかと考えられる。

そして1884年、大津で運送業を開始したとの記録がある。いきなり始められるものではないだろうから、その間、丁稚などで修行を積み、目途をつけた上で商売を興したのではないだろうか。その翌年には、商売が軌道に乗り始めたのか、引き続き小浜で県関係の仕事についていた父・規作を、大津に呼び寄せた記録が残っている。武家社会がなくなった後の文字通りの「武家の商法」である。

「そんなことがうかがい知れる書き付けはどこにあったの？」

「丸まって入っていた由緒書。過去帳とは別にあった。」

「大津に来てからの商売のことは？何で調べるの？」

「それはなかなか難しかった。詳しくは分かっていないんだけど、商売で世話になっていたらしい西利商店との繋がりから調べてみることにした。」

大津で西利商店を興した初代・西田利七さんの孫である西田善一さんは、戦後に大津市長を2期8年つとめた人物であるため、紳士録などには西田家初代からの記録が残されている。それらと我が家の由緒書とを照らし合わせ考えていくと、どの年代の誰が、團の家とどう絡んで来たのかが浮かび上がってくる。この時代の記録を調べたいのであれば、家に伝わる家系図や過去帳などが見当たらなくても、役所の公式記録である戸籍謄本を、本籍地をさかのぼって請求していけば、ある程度は記録が残っている。

近代戸籍のもとになっているのは、明治５年に制定された戸籍制度になる。それから現代に至るまで、何度かの法律改正に伴って様式が変更されながらも、現代まで脈々と続いている。現在の戸籍制度では１５０年間の保管義務があるものの、2010年（平成22）までは保存期間が80年だった。そのため1930年

（昭和5）以前のものは、自治体によっては既に廃棄されているケースもあるようだ。その保存状況は、そもそものデータの総量やデジタル化に伴う移行作業等によって、自治体によってまちまちである。各自治体に請求をした経験からいうと、概ね1900年前後くらいまでの記録は残されていることが多い。しかしながらこれらもそのうち、どんどん廃棄されていくのだろう。

興味がある方は一度、自身の先祖を辿ってみられるのも面白いのではないだろうか（基本的には郵送でも受付が可能。血縁者のみが請求可能である）。

一方、地元の図書館に行ってみると、どうでも良いようなものも含め、今は埋め立てられてしまった琵琶湖・浜大津湖岸の埋め立て前の昔の地図など、色々と資料が残っている。

そこで大津市立図書館と滋賀県立図書館に行って、運送業（屋号は團運送とか？）などの名簿や名鑑などが残っていないか探してみたものの、なかなかお目当てのものには巡り合わない。

そんな中、県立図書館の郷土史コーナーを隅から隅まで眺めていると、「滋賀県資産家一覧表」という明治後期に発刊された古い古い本に遭遇した。いわゆる当時の高額納税者名簿だ。パラパラと中をめくってみると、そのリストの中でなんと「團雄太郎」の名前を発見した。ここに居た。たしかに痕跡が残されていた。興奮した。

こういう本には、ネット検索ではなかなかたどり着けない。本の内容などの情報が全てネットに投げ込まれている訳ではないことを改めて実感する。ネットは便利だが、そこに載せきれていない情報もたくさん存在するのだ。

これは1910年（明治 43）の古い本であり、国会図書館のデータベース検索ではたどり着けなかったものだが、それが地元の県立図書館にはちゃんと並んでいる。

＊

そういう本があると分かっていたら探せるのだろう。しかし、知らないものがどこにあるかを探るのは難しい。

起きたことは調査したり研究されたりもしているが、起こらないで済んだことは、なかなか調べられない。皆の願っていた事についての記録はないが、あって欲しくはなかったことの記録は膨大に残されているのが社会である。

同様のことを家族面接していると感じる。被害の調査結果や記憶はあるが、上手くやっている人や、やり方の記録は少ない。事実としては沢山あったはずだが残されることは少ない。

大事件ばかりが列記された歴史を、後年、我々は目にすることになる。しかし実際は、事件と事件の間に、些細なことの連続する生活時間があったはずである。記録されないそれは、歴史にとってなかったことなのか、なくても良いものなのか。

記録する行為がそういうものなのだろう。更に、何を記録するかを決めるのは後の権力者である。大小を問わず勝利者の記録なのである。

市民社会にも歴史には残されない歴史がある。それをどう探すのかは、無茶苦茶難しい。しかしそれも合わせて歴史である。

記録を残す動機が弱い社会や、不都合なものは燃やしてしまう社会では記録は残らない。日本の近代歴史資料が日本国内になく、アメリカ公文書館にあるという事実は、それを物語っている。

＊

ファミリー・ヒストリーの連載を、次男の力を借りて書きながら理解を深めていくと、日本の近代史がとても生き生きと、身近なものとして感じ取れる。

その時、その人はどう思ってその道を歩み始めたのだろうか？未来の予測が立ってから行動に移していることは、今の時代よりずっと少ないだろう。

多くの情報に充たされて、可能性の吟味も済ませた上で、なお一歩を踏み出せずに不安を口にする現代人。だから、未来が開拓される可能性まで縮んでしまったのだと言えるかもしれない。

社会的養護の新展開 14

―親と離れて暮らす子どもたちの養育とその後２―

浦田　雅夫
大阪成蹊大学

事情があり、親と離れて暮らす子どもたち（ケアリーバー）について、施設や里親での養育が終わった（措置解除）後、社会にでて生活することは困難が大きい。ある自治体のケアリーバー向けの冊子の表紙は荒波のなかを一隻の小舟で航海しているイラストが描いてある。陸ではない大海原に、航海図も持たず、無知のまま船出することは命を落とすことと同じである。

さて、日本において私たちは昨年からのコロナウイルス感染症拡大以降、断続的にステイホームを求められている。頼れるホームのない若者は、この状況をどうとらえているのか。安全基地としての役割を果たすべき実家、寄港地がない彼らに、いま、どのように支援が必要か、彼らは何が必要としているのか。ケアリーバーの支援団体である IFCA のプロジェクト C では当事者も参画し、緊急のニーズ調査を行っており、その調査結果は、当事者からの重要なメッセージであるといえる。

https://www.ifca-projectc.org/

プロジェクト C の調査結果報告書（p7）のなかには、当事者の声として、次のような記述がある。

「コロナでも孤立、コロナでなくても孤立。コロナでも自粛生活、コロナでなくても自粛生活。普通の人があたりまえのように暮らしてる社会の輪の中に 10 年以上、疎外孤立。なんか、悲しくなる」　（30 代後半）

コロナという危機的な社会状況に関係なく、自身はいつでも危機的状況だということだろう。危機的社会状況は、弱い立場におかれた人たち、困難な状況におかれた人たちの状況をより困難にするだろう。

ＩＦＣＡプロジェクトＣの調査はウェッブを活用した迅速な調査である。
かれらは、この調査をもとに 6 つの提言を行っている。

1、「健全な」家族を前提とした支援から、一人一人の状況に即した支援へ
2、柔軟で継続的なつながりがもてる社会的養護を
3、逆境体験に対する精神的なケアの保障を
4、社会的養護を離れてからの支援に責任を
5、社会的養護措置解除後の実態把握を
6、社会的養護の当事者参画を

前回も紹介したが、いま、さまざまに人々がインターネット上で情報発信をする時代になり、当事者の情報発信も増加している。当然、そこには、否定的な見方をする人もいるだろう。一方、「児童虐待は保護されたら終わりじゃないよ」と訴える彼らの動画をみて、はじめて、ふと気付き、考える人も少なくない。問題は表層だけではない。知ってほしいというのが彼らのファーストステップである。

https://www.youtube.com/watch?v=doveVpimzIk

さて、2020 年度末には、日本ではじめてケアリーバーの実態把握に関する調査報告書が発表された。これまで、日本各地では、ケアリーバーの実態把握を行っている自治体もあったが全国的な調査は初となる。調査対象は、平成 27（2015）年 4 月～令和 2（2020）年 3 月に、中学卒業以降で措置解除となった人たちである。調査対象者数としては 20,690 人。本人の連絡先がわかり調査票を配布できたのが 7,385 件。回答は 2,980 件であった。この調査では、本人に記述してもらった調査のほか、施設職員や里親からの調査、自治体からの調査の 3 層から調査をとっている。

調査項目、「現在の暮らしの中で、困っていることや不安なこと、心配なこと」は何かという質問における自由記述として、「お金です。親がいないので困った時のお金の助け舟がないので、コロナの影響でほとんど収入がなくなったので今とても困っています。」というものがあった。
荒波にひとり小舟で航海する絵ではないが、転覆寸前、助けてくれる船がなければ、小舟もろともに沈没するだろう。
何れの調査も、依頼者に協力してもよいというケアリーバーは、何らかのサポ―ティブナつながりがある人だろう。したがって、調査に協力してくれなかった方々のことも考えていく必要がある。しかし、ともかくも日本でははじめての全国的な調査について、引き続き、丁寧に見ていきたい。

https://www.murc.jp/wp-content/uploads/2021/04/koukai_210430_1.pdf

45・マスクと表情

原町幼稚園園長　鶴谷主一（静岡県沼津市）

下に並んでいる写真は、3つの表情をしてもらって撮ったものです。
マスクの下で、左から同じ表情をしてもらっています。どんな表情をリクエストしたのかわかりますか？



ほとんど、同じに見える人もいますね。
常に子どもと接している保育者なので、表情は豊かなのですが・・・

「にこにこ」



「ぷんぷん」



「こまったなー」



という表情でした。

次にランダムに配置してみます。・・・ますますわかりにくいですねえ～



















思ったよりも表情は伝わらないのですね

◆マスク生活は必須となり、マスクをしていないとパンツを履き忘れたかのような危うい感覚にさえなってしまう昨今であります。幼稚園の現場でも、子どもたちは園庭で遊ぶときや暑いときは適宜外しつつ、みんなで集まるときや通園バスの中ではマスク着用は必須となっています。ただ、関わる大人は保育者も保護者も全員マスク着用です。ずいぶん慣れてはきましたが、マスクの影響はどんなところにあるのでしょうか？

◆幼稚園の保育者に聞いてみました

①マスクをしていることで困ったことや、やりにくいことはありますか？

▷そもそも声が通りにくい、聞き取りにくい。

▷マスクをしていると子どもたちが話を聞いてくれない（集中しない）ので、大切な話は距離をとってマスクを外して話します。

▷口の動きが見えないので、ガヤガヤしているときにクラス全体に声を掛けても誰もふり向かない。

▷ハンディキャップを持った子ども（ダウン症）と話すときはマスクを取らないと通じない。口の動きを見せ、表情を見せないと伝わらない。

▷子どもがマスクをしていると、子どもの表情を読み取りづらい。とくに表情が乏しい子ども、滑舌がはっきりしない年少児などは、感情が読めない。→ちょっとマスク外してみて～と言って笑っているのか困っているのか確認する。

▷数人の子どもが同時に話しかけてきても、口が見えないので誰が話しかけているのかわからない。→挙手をしてから話してもらう。

▷子どもが保育者の方を向いて話を聞いていても口元で言葉を読み取ってもらうことが出来ない。

原町幼稚園では、熱中症対策や表情を見せるという意味でマスク着用には柔軟に対応するようにしています。なので、息苦しさなどに関する困りごとは無く、言葉やコミュニケーションの面について多く聞かれました。

②工夫していること、気づいたことはありますか？

▷目元で表情を作るようにしている。

▷叱るときに『先生の顔を見てごらん！』って怒った顔を見せるために、その時だけマスクを下げます。

▷良くない時など、どうしても表情を子どもに伝えたいときには、マスクを一度外して表情を見せた後に再びマスクをして同じトーンで話すようにしている。

▷子どもが玩具をポイっとした時や、大きな声をだした際、保育者が困った顔や真剣な顔などをすると、子どもから保育者のマスクを外そうとすることが多くある。（逆に子どもを褒めたときも同様）
子ども自身も相手の表情を見て、状況を判断したり、確信に変えているのかなと感じました。

▷不安な顔をしている子どもには、マスクを取って笑顔を見せてあげると落ち着きます。

▷抱っこやぎゅーなど、触れ合って過ごす時間が多いので、距離が近い時にはマスクをしっかりと装着して、小さな声で話すようにしている。特に抱っこをしている時は面と向かって話をせずに耳元で小さな声で話をするか、一旦下におろしてから話をするようにしている。

▷新しい歌を覚えるときは、マスクを外して表情や口の動きも伝えている。子どもが覚えてくるとマスクごしでも上手に歌えるようになる。

▷絵本を読むときも内容によっては表情も使って読みたいのでマスク無しで読む。

▷絵本をプロジェクターに映して読むと対面にならないので、感染予防的には良いかもしれない。

▷年齢的にも初めて知る言葉が多く出てくるので、出来れば口元の動きも見せながら伝えられればいいなと思う。

幼稚園は、3歳以上の子どもたちが対象なのでそれぞれ対応の仕方も違ってきます。年中長児になると、ある程度言葉も発達していますが、０歳～３歳の子どもたちへの影響はもっと大きく、子ども自身からの困った様子も幼児ほど発出されないので、子どもの発達を考えると、保育者の読み取る力や配慮がより必要になると考えます。

◆NHK「チコちゃんに叱られる」

という番組で**「空気を読むって何しているの？」**というお題がありました。
答えは**「相手や周囲の人の0.2秒だけ見える本音の表情を見ている」**と“空気をよむを科学する研究所”の清水健二さんが言ってました。
　人は理性で表情をコントロールするのですが、反射的に感情が沸いてきたときに、無意識に出てしまうのが本音の表情、それが0.2～0.5秒だけ現れるそうです。その一瞬の表情を読み解くことが「空気を読む」ことだそうです。

　すると（僕の想像ですが）コロナ世代に乳幼児期を過ごして、表情を読み解く練習の機会を奪われた世代は「空気の読めない世代」となって仕事や人間関係に不利益を被ることがあるんじゃないだろうか？それは可哀想だー！
　だから、できるだけ表情を見せつつ保育していきたいと思うのです。
まてよ･･･もしかしたらこの世代は、声色を聞き取る力が発達して、「耳で空気を読める」ようになるんでしょうか？

そうは言ってもコロナの感染は予防しなければならず･･･全国のいろんな現場の工夫が共有されれば、とも思います。今回は疑問やモヤモヤを残しつつ終わります。(>_<)

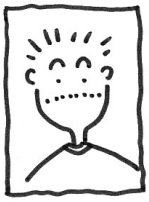







協力してくれた先生方ありがとう！豊かな表情でお互い向き合いたいですね！





原町幼稚園　園長　鶴谷主一（60歳）
ＨＰ：http://www.haramachi-ki.ed.jp/
MAIL：office@haramachi-ki.jp
Twitter：@haramachikinder
Instagram：haramachi.k

▶ご感想・ご意見ご質問等ありましたら
気軽に連絡ください。✉ office@haramachi-ki.jp

－ －

「幼稚園の現場から」ラインナップ

第１号　エピソード（2010.06）
第２号　園児募集の時期（2010.10）
第３号　幼保一体化第（2010.12）
第４号　障害児の入園について（2011.03）
第５号　幼稚園の求活（2011.06）
第６号　幼稚園の夏休み（2011.09）
第７号　怪我の対応（2011.12）
第８号　どうする保護者会？（2012.03）
第９号　おやこんぼ（2012.06）
第10号　これは、いじめ？（2012.09）
第11号　イブニング保育（2012.12）
第12号　ことばのカリキュラム（2013.03）
第13号　日除けの作り方（2013.06）
第14号　避難訓練（2013.09）
第15号　子ども子育て支援新制度を考える
第16号　教育実習について（2014.03）
第17号　自由参観（2014.06）
第18号　保護者アナログゲーム大会（2014.09）
第19号　こんな誕生会はいかが？（2014.12）
第20号　ＩＴと幼児教育（2015.03）
第21号　楽しく運動能力アップ（2015.06）
第22号　〔休載〕
第23号　大量に焼き芋を焼く（2015.12）2019
第24号　お話あそび会その１（発表会の意味）
第25号　お話あそび会その２（取り組み実践）
第26号　お話あそび会その３（保護者へ伝える）
第27号　おもちゃのかえっこ（2016.12）
第28号　月刊園便り「はらっぱ」（2017.03）
第29号　石ころギャラリー（2017.06）
第30号　幼稚園の音楽教育（その1・発表会）2017.09
第31号　幼稚園の音楽教育（その2・こどものうた）2017.12
第32号　幼稚園の音楽教育（その3・コード奏法）2018.03
第33号　〔休載〕（2018.06）
第34号　働き方改革・一つの指針（2018.09）
第35号　働き方改革って難しい（201812）
第36号　満3歳児保育について（2019.03）
第37号　満3歳児保育・その２（2019.06）
第38号　プールができなくなる！？（2019.09）
第39号　跳び箱（2019.12）
第40号　幼稚園にある便利な道具〈紙を切る〉（2020.03）
第41号　コロナ休園（2020.06）
第42号　コロナ休園から再開へ（2020.09）
第43号　ティーチャーチェンジ（2020.12）
第44号　除菌あれこれやってみた（2021.03）
第45号　マスクと表情（2021.06）

－ －

福祉系対人援助職養成の現場から㊺

西川　友理

ちゃんと生活出来ているから、大丈夫。

　ある児童養護施設にC君という男の子がいました。どちらかというと“どんくさい”男の子で、年上や同世代の子どもだけでなく、年下の子どもからでさえからかわれやすい男の子でした。からかわれると余計むきになって、つっかかっていき、さらにからかわれる、ということも時々ありました。C君の入所理由は父母の病気とこれに端を発した様々な理由による生活苦でした。

　ある夏休み、親御さん夫婦がC君の外泊のお迎えにいらっしゃいました。C君が出かける用意をしている間、誰もいない玄関で少し立ち話をしました。

「あの子、大丈夫でしょうか。成績もあんまりよくないし、気が小さいし、なんというか、全然器用じゃないし…」

ああ、心配されているんだ…確かに、C君は不器用だしね…と思っていた私の傍らから、職員のDさんがぬっと現われ、

「お父さん、お母さん、大丈夫。あの子は大丈夫ですよ」

と力強く言いました。
「あのね、いつも茶碗やどんぶりを洗う時に、C君は僕らが教えたことないのに、糸尻のほうまでしっかり洗うんです」
「それから、洗濯物をとても丁寧にたたむんです。あれくらいの年齢の子って大体みんな適当にたたむのに、すごく丁寧なんです」
私はDさんがそんなところまで見ていたことにとても驚きました。するとお母さんが
「ああ、確かに、それはそうかも…お家でも、私がゆっくりしているから、それを見てそんな感じになっちゃったのかもしれませんね…」
「そうですか！素晴らしい！！そういう生活が出来る奴ぁ、大丈夫です！お家で、きちんと親御さんがされてこられたからですね」
お母さんが涙ぐみました。

子どもに関わる先人と「生活」

「生活を、生活で、生活へ。」これは日本の幼児教育の父、倉橋惣三の有名な言葉です。
子どもたちの生活を、子どもたちが過ごすありのままの生活（さながらの生活）、実態のある生活の中で、充実したものにしていく。その営みこそ、幼児教育の真に大切な部分があると考えていました。子どもの生活、特に幼い子どもの生活は、もう全く「遊び」から出来ています。遊びが生活であり、生活が遊びであり、その中で周りの環境や大人や友達と相互にやり取りすることを通じて、様々なことを学んでいきます。
「今日までの幼稚園保育法の研究は、子供の能力に属する方面や、その教え方の細かい点において多く行われ、肝心の幼稚園生活ついては、行われなかった観があります」。1933年の「日本幼稚園協会保育講習会における講演の筆記」にこの一文があります。（『幼稚園真諦』より）。倉橋が何よりも生活を重視していたことや、いたずらに特定の能力だけを伸ばそうとして普段の生活をおろそかにすることへ危機感を持っていたことがよくわかります。

日本の児童福祉の父と言われる石井十次が明治時代に創設した「岡山孤児院」（現在でいう児童養護施設のような機能を果たす施設の事）には、一時期1200人もの子供たちが収容されていました。この孤児院の職員について、石井は「自分が幸せな子ども時代を送ったと思っている女性」を雇ったという話を聞いたことがあります。石井は、保育者自身が充実した生活経験を持っていることに強く価値を置いていたようです。

倉橋といい、石井といい、日常生活を大切に考えてきたということがわかります。
丁寧で、きちんとした、幸せな暮らし。それはいかにもいいものだろうなぁと思います。
が、その一方でそれはどんな暮らしなのか、と問われると、うーんと考え込んでしまいます。あまりにも抽象的で、「これが丁寧な、きちんとした、幸せな暮ら

しだ」という価値観は人によって違いすぎるのです。

「部屋をきれいにする」とは

どういうことか。

何年か前にあるラジオで、毎日放送のアナウンサーの西靖さんが、
「うちの奥さん、どうしても、スマホの充電器のケーブルをクリップに差しておくことを忘れるんです。もう何度も何度も『これはここに差しておいてね』って言っているのに…」
と愚痴っているのを聞いたことがあります。これに対し、思想家の内田樹さんが、
「あのね、夫婦のお部屋のクリーンさ具合については、これはもう、どこまで行ってもすり合わないものです。そういうものです」
とおっしゃっていたことがありました。
心当たりしかない！！と、深く頷きました。

「お掃除」とは、何をどうすることか。

私の生まれ育った家は自営業で客商売をしており、お店はともかく、居住スペースの片付け掃除は、はっきり言って不十分でした。繁忙期は朝に店に立ったら昼食やトイレもままならず、夕食まで椅子に座れないという時期もあるほどでした。
そんな生活において、仕事に関わること以外は、食事と睡眠がまず優先で、掃除は二の次、三の次という状態でした。
大人になって、生まれ育った家業とは違う仕事に就き、パートナーと暮らすようになったころ、きょうだい同士で掃除の話になったことがありました。
「掃除ってのは、汚れをきれいにするものじゃなくて、“汚れが汚れと分からないうちにきれいにするもの”なんだよね」
「そうそう、まさにそれ。そういう感覚、子どものころはあんまりなかったよねぇ」
「お店を毎日掃除するみたいに、寝室も台所も掃除するもんなんだねぇ」
「うんうん。頭ではわかっていたんだけどねぇ」
と、お互いパートナーから、お部屋掃除について指摘されていることが判明しました。
毎日毎日、一見汚れていなくても掃除する環境で育った人と、ゴミが目についていても時間がなければ掃除は後回しにするような環境で育った人では、掃除の概念が違いすぎる、ということを痛感しました。

職員なんだから

“きれい”に掃除しないと

私がこの感覚に初めて気づいたのは、児童養護施設の職員をしていた頃です。

どうやら自分の掃除のあり方が一般的に不十分だ、という自覚はありながらも、どうしても感覚が身についていないということも感じていました。自分のクリーンさ加減のハードルがおそらくとても低いので、入所している子どもたちに求める清潔さもあまり高くありません。何より、私の心の根底に、

「私がちゃんと掃除出来る人間じゃないのに、子どもに“掃除しろ”っていうのは、嘘やんか…」

という気持ちがありました。何人かに相談したところ、

「そりゃ、職員なんだから、きれいに掃除しないといけないでしょ」

「相手は子どもだよ。立場を考えたら、それは言わなきゃだめでしょ」

という答えが返ってきました。

でも、「きれいに掃除する」とは、どういう状態を指すのでしょうか。どういう状態を「きれいになった」と感じるか、「ぴかぴかになった」と見るか、そこには明確な基準があるわけではありません。人それぞれ、千差万別です。

「経験として知っている」

ということが大切

そんなある日、とある先輩が、私に言ってくださいました。

「でも、掃除がされた空間、は見たことあるよね」

「それは、もちろんあります。お店は掃除していたし、小学校や中学校は掃除していたし」

「うん。じゃあ、それでいいのよ。掃除をされた空間が日常生活の中で当たり前のようにあった、という経験として知っているということ大事なの。それがあれば、それをモデルにして、思い出せるでしょ」

「…そう、なんですかねぇ…？？？」

「子どもも一緒で。掃除された空間が身の回りにある、という経験があれば、いまは下手糞でも、いつか『ああ、あんなふうな部屋があったな』と思い出せるようになるからね。そうすると、到達イメージがわかるから。ね、ぼちぼちでいいから」

子どものころ、お店は毎日掃除をしていたということ。飲食店のアルバイトは、しつこい程の拭き掃除がマニュアル化されていたこと。児童養護施設の職員をしていた時に子どもから、先輩から、同僚から教えていただいたこと。パートナーとの生活で、家の細かい部分の掃除でちょっとしたケンカを繰り返したこと。それらの経験が積み重なって、今の私の「クリーンさ」の感覚が出来ています。

おかげさまで今私はそれなりにお掃除が好きです。週末にリビングのフローリングに雑巾がけをすると、ストレス発散になります。出来れば毎日家中の雑巾がけをしたいくらいです。

生活感覚が鈍い人は、

子どもに関われないのか

なるほど、子どもとかかわる人にとって、炊事洗濯掃除といった家事に代表されるような生活に携わることは、単にスキルの問題ではなく、生活の実感、もっと言えば手触り、温度、湿度、匂い、重さ…とでもいうようなものが、いかに「豊かに、リアルに、経験としてあるのか」ということが大切だということになります。

そこで一つ疑問が生まれます。豊かでリアルな生活経験がないまま大人になった人は子育てはできないのでしょうか。つまり、不適切なかかわりしかできず、親や保育者になれないのでしょうか。そのような人たちは、子どもとかかわること自体、不適切なのでしょうか。

私は、お掃除や環境構成のセンスが鈍い、私のような者であったとしても、子どもの生活に関わってはいけないとは思いません。満足にお掃除が出来ない私が言っても、言い訳のように聞こえるかもしれませんが、実際、子どもに関わる人は、様々な人がいてよいのではないでしょうか。むしろ、様々な人がいる方がいいのではないでしょうか。

専門職は、

枠組みではなくエッセンス

専門職というのは、何でもかんでも完璧な支援をする人ではなく、大切ないくつかの専門性を備えている人だと考えています。つまり「ある一つの専門職という枠にはまった人」のではなく「専門職として大切ないくつかのエッセンスを得ている人」ということなのではないかと思うのです。その職業として大切な、無くしてはいけないポイントさえ押さえておけば、あとは個々の特色があって当たり前です。それが援助のあり方の違いになり、その人らしい援助の個性につながると考えます。大切なことは、支援対象や支援の利用者が、多様な支援者に触れることが出来る環境があるということ、またその支援対象や支援の利用者それぞれが、多様な支援者の中から、自らと関わる人たちを選ぶことが出来るということだと思います。

というわけで、私はお掃除は下手ですが保育士をしていますし、片付けもうまく出来ませんが社会福祉士の有資格者であります。

考えてみれば、私は掃除整頓片付けのたぐいは本当に不得意でしたが、食べること、食に関することは大好きで、施設職員時代をはじめ、子どもとかかわる機会には、食にまつわる様々なかかわりをしました。

他の職員が採ろうとしない園庭のザクロを採って、子どもといっしょに食べました。柑橘類から作った柔らかいゼリーに牛乳をかけて混ぜると、ヨーグルトのようになる実験をして、不思議だねぇ、おいしいねぇと子どもたちと楽しみました。幼児と一緒に炒り卵を作った時には、「僕が作った！先生食べて！」と笑顔で私に「あーん」とスプーンを差し出してくれた男の子がいました。

そういえば、園庭の庭木の剪定や公用

車の洗車の際には、男性職員とともに子どもたちも見よう見まねで手伝っていました。S先生は子どもと一緒に施設の外の掃き掃除をしながら、「向こう三軒両隣」という言葉を子どもに教えてらっしゃいました。I先生は様々な工具を使って壊れたものを修理することが得意で、狭いベランダで黙々と作業している周りには、いつも男子が数名その姿を熱心に見つめていました。N先生はいつも静かに子どもの靴下やシャツの繕いなどの針仕事をされており、気づけばN先生の隣で大人顔負けの腕前で針仕事を手伝っている小学生、時には幼稚園児までもがいました。

職員は皆、出来ることや得意なことは違いましたが、多様な人がいて、多様なかかわり方をすることで、子どもを受け止めるネットのように重層的な生活支援になっていました。子どもたちは様々な大人に触れて、多様な生活経験を積み重ねていました。

福祉系専門職養成教育でも、

「生活を、生活で、生活へ」。

では、子どもとかかわる専門職、例えば保育者の養成教育においては、これらについて、どこまで養成校の中で行うことが出来るのでしょうか。

学生たちが養成校に入るまでに培ってきた生活経験は、個々バラバラです。家族の家事一切を担ってきた学生がいる一方、家庭科の時間以外で包丁を持ったことのない学生がいます。きちんと整理整頓ができる学生がいる一方、洗濯掃除を家でしたことがない学生がいます。これについて、何か働きかけることが必要ではないか、と感じます。その一方で、いや、そもそもそれは、養成校の教育という枠の中で行うには、あまりにも学生個々の人生や生活歴に深くかかわることではないか、と躊躇もします。専門職教育ごときが、どうのこうのと手出しや口出しをすべきところではないようにも思うのです。

専門職の養成教育の中でできることといえば「生活というものは大切なのだ」という感覚をいかに伝えるか、ということだと考えています。

学生は、掃除洗濯炊事などがうまく出来なくてもいいのです。その学生自身が「私はこの人生で生活の何を大切と教えられて生きてきたのか」つまり、生活の体験として、どんな学びをしてきたのか、それらを思い出し、振り返ることです。

保育士をはじめ、対人援助職の仕事の一番の道具は「自分の心と体」です。

変な癖がついていたら、直したいと思うかもしれません。一方で、その癖があるからこそ、味わいのある支援ができるからと、どんどんその癖を活かす支援をするかもしれません。その道具の癖を知り、矯正したり活かしたりと、どう付き合っていくのかを考えるためにも、自分の支援道具である心と体がたどってきた歴史、つまり「自分の生活の歴史」を振り返ることが、大切な学びになるのではないかと思います。

それがやがて支援者としてあらわれてくる支援の「個性」の裏付けになるのではないでしょうか。

学生の生活に影響を与える

人的環境としての養成校教員

ある保育者養成校で、書類を入れる箱をいくつか、作ることになりました。幸い、紙製の書類入れがいくつかありました。ボロボロの使い古しですが、多分使えます。何の書類の箱かわかるようにしておく必要があったので、箱の側面に分類名を書かなきゃいけないな‥‥と考えていると、F 先生が
「包装紙か何か、ありませんかね」
とおっしゃいました。倉庫を探すと、きれいな包装紙が少し残っていました。
F 先生はその包装紙を受け取ると、秘密の道具箱とでもいうようなところから、かわいい千代紙や折り紙、両面テープやシール、マスキングテープを次々取り出し、それらを駆使して、瞬く間に書類ケースを次々と可愛く美しく、補修していきました。
F 先生は、数か月前まで幼稚園の園長先生をなさっていた、新任の先生です。
「職業病です」
と笑いながらおっしゃっていました。
見やすく、使いやすく、可愛いデザインの書類ボックスがあっという間に 10 個ほど出来ました。

ほんの少しの手間で、書類入れをきれいな見栄えにする。私にはまったく気が回らない作業でした。もちろん、ただの書類入れなのですから、そんな飾りつけ等する必要はありません。必要はありませんが、保育者という、子どもが生活する環境を整える立場になる人たちを養成する場として、そのようなことに配慮された環境で生活するとしないとでは、何か「人が生活する環境」と向き合う姿勢の根幹に、大きく差ができるように感じるのです。
すごいなぁ、と素直に感動する一方で、私も私に出来ることを頑張ろう、と勇気づけられます。

養成校教員にもまたそれぞれ、F 先生のように現れる生活の営みへの姿勢があります。学生たちの学ぶ場は、学生たちが日々生活をする場でもあります。保育者が子どもたちにとっての大切な人的環境であるように、養成校教員もまた、学生たちの大切な人的環境であると自覚しつつ、この場に関わる人たちとともに場を作っていこうと思っています。

ああ、相談業務

～太一くんの話～

5

かうんせりんぐるうむ　かかし

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

太一くん家族

太一くん（以下本児）は中学 2 年生で、父親 40 歳との父子家庭であった。父親は日雇いのような仕事をしていて、低所得で生活困窮の状態であった。家は小さな平屋の貸家である。実母は本児が幼児期に失踪。父方祖父母、母方祖母とも遠方に住んでいて関係が薄く、本児を引き取ることはなく、父親が一人で育ててきた。当時は母子家庭と違って父子家庭への支援は少なかった。父親自身行政に頼ることは無かった。

相談が始まる

本児の相談が学校から上がってきたのは秋も深まりつつある時期の事だった。不登校である。中学校 1 年の時から、学校にほとんど来ていない子がいて、担任が家庭訪問するが、父親にも会えず、本児も出てこないため困っているので、相談員の方で関わってもらえないかということであった。担任が行っても会えない状況で、相談員が行って会えるのかという疑問が湧いたが、先ずは訪問をしてみることにした。

日中は本児だけのはず。平屋の小さな家の玄関は引き戸。玄関ベルを押すが反応がない。大体そういうものだ。電池が切れてから交換されないため、玄関ベルは鳴らない。引き戸を叩いて声を掛けてみるが反応がない。これは想定内の事。手紙をあらかじめ書いてきていたので、それを引き戸の隙間に挟んで帰る。手紙には自己紹介と、何かお手伝いできることがないかということ、連絡先、又尋ねる事などを書いてある。

あまりすぐに再訪しても嫌がられるので、こ

こは少し時間を取り、10 日後に又尋ねた。再び日中の時間帯に行く。夜行けばよいと思うかも知れないが、先ずは本児と繋がれるかを確認するために、前回より少し遅い夕方の時間帯に尋ね、同様の対応をして、手紙には今度は夜来ますと書いておいてくる。そして三度目は夜の時間帯。夜に尋ねる。もしかしたら父親がいるだろうし、暗くなってから行くと明かりで人がいるかどうかがわかる。

二度目の訪問からまた 10 日ほどたったある日の夜 7 時半ごろに行ってみると、奥の電気が点いているのが玄関越しに見える。玄関ベルが鳴らないのはわかっているので、最初から戸を叩き、声を掛ける。何度か「市の相談員の河岸です」と声を掛けていると、何度目かの声掛けで「はい」と返事がした。が、まだ戸は開けてくれない。訪問の事情を話し、本児の事で来ているとわかったからか父親が戸を開けてくれた、と言うより鍵はかかっておらず、「どうぞ」と言われた。

「失礼します」と戸を開けて入ると、玄関にはつっかけと、かかとを踏み潰した運動靴等数足が脱ぎ散らかされていた。綺麗とは言わないが、そこまで酷くもなく、まあ、男所帯ではこんなものかというレベルの玄関であった。

出迎えてくれた父親は無精ひげが少し出ている、浅黒い肌のほっそりした人で、薄いグレーの作業着姿であった。

挨拶をし、本児の不登校の事で学校から相談があったこと、出来れば本児との面談をしていきたいという話をした。また、家族のことなどを父親から聞き取った。父親の仕事も不安定であること、腰の調子が悪いという話も聞いた。父親自身、本児が学校に行けていないことは知っていたが、声は掛けているという。ただ本児が行きたがらないので仕方ないと思っていると話してくれた。本児との面談については、関わってもらって構わないということで、本児に声を掛けてくれた。本児はしぶしぶという感じで玄関まで出てきてくれた。細くて元気のない、大人しい感じの子であった。

本児に自己紹介し、家で何しているのかとか、簡単な質問をするが、余り答えず、首を少し降るくらいで反応が薄い。それでもまあまあご飯は食べていることや、テレビを観たり、漫画を読んだりしていることは分かった。初めて会ったのだから緊張しているのもあるだろう。何度か訪問して関係性を築く必要があると感じたので、又来るけど会ってくれるかなと聞くと、一応うなずいてくれたので、日時を決め、あまり長居をしても嫌がられるので、15 分ほど話して失礼した。

父親が本児と会わせてくれたのは予想外ではあった。大抵は本人と会えず、何回もトライすることになる。一回目で会えたのは良い傾向と思った。父親もきっと動かない息子に困っていたのだろうなどと思ったりしていた。

数日後、約束時間であった 13 時に尋ねた。出てきてくれるか心配だったが、待っていたのか、直ぐに出てきてくれた。これも想定外だった。大抵は約束しても、すっぽかされたり、居留守を使われたりするものだ。それも覚悟しての訪問だったので、余りにもすんなり行ってびっくりしたのだ。父親は留守だった。

前回は夜で薄暗かったこともあり、顔色なども良く見えなかったし、声もあまり聞けなかった。父親の前ではあまり話せなかったのか。今回は、日中でもあり、顔色もはっきり見えた。服はジャージなのか、パジャマなのかわからないものを着ていて、部屋の中にあげてくれた。ダイニングキッチンと思われる部屋は、少し雑然とはしていたが、物が少なく、寂しい感じであった。台所に昼を食べた後と思われるカップ

麺の殻が置かれていて、本児は座卓の所に筆者を導いてくれた。真向かいに座ったら緊張するだろうと思って 90 度横に座った。

本児の日々の生活や家族の事、学校や友人のことなどを一通り聞いた。ご飯は食べているが、カップ麺ばかりで、たまに弁当を買って来てくれるそうで、食べ盛り、成長期の本児にとっては栄養バランスが良くない。父親の食事も同じようなもので、虐待と言うほどではない。父親は毎晩お酒を飲むようで、酔うとあまり良い父親ではなく、本児に対して暴言を吐くそうで、本児はそれが嫌だと訴えていた。父親は仕事が長続きしない様で、経済的にも大変で、制服やジャージが小さくなっていたり、破れたりしても買い替えてもらう余裕はないこと、教材なども十分揃えてもらえず、酒代に消えてしまうこともあって、学校に行けなくなってしまったこと、学校に行きたいと思っていたが、もう最近では、勉強にもついて行けないだろうからどうでも良くなったと話してくれた。小学校時代からの友達はいて、時々遊びに来てくれるので、一緒に出掛けたりはするが、お金がないので食べたり飲んだりは出来ないから、公園で少ししゃべったりして帰って来ると言っていた。

こんなに話してもらえるとは思わなかったが、聞いたことに素直に答えてくれるので、これだけのことを聞き取れた。来年は修学旅行もある。行きたいか聞くと、行きたいとは思うがと。やはりお金のことが引っかかっているのだろう。でもそれは就学援助を受ければ何とかなる。その点については父親と話して行くことにして、他に困っていることはないか聞いてみると、後は特にないと。制服やジャージについては長を直せないか、ジャージは学校に聞いてみて、貸してもらえるものがないか聞いてみるし、就学援助を受けることで何とかなる物もあるかもしれないのでと伝えて、その結果の報告と、父親とその話をする上で又来ることを伝えて失礼した。本児との関係を作ることはできたので、次回の約束も取れた。本児も筆者が是が非でも学校に引っ張っていくわけではないと知り、少し元気になって、最後は少し笑顔も見えた。

生活困窮家庭で不登校になるケースは時々ある。父親が酒乱でお金がない、家が荒れているというケースもちょくちょく出会う。これを虐待で扱うのは中々難しい。DV があるとか、子どもに暴力をふるうとか、食事を与えないとか、暴言が酷いとか。確かに暴言はあるが、ご飯が与えられていないわけではない。それでもお酒を飲んで暴言を吐くということで、一応当時の児童相談所の福祉司に情報提供をしていた。

学校とも連携をとって、事情を理解してもらい、父親とも面談をして就学援助を受けられるようにし、学校の担任の努力もあって、少しずつ学校にも行けるようになっていた。父親に対しては生活保護受給の相談に繋いだ。順調に進んでいたので相談もその後何回か面会したのち終了とした。生活保護が受給されるまでには審査があり、時間が少しかかる。その間の生活費は、保証人さえ立てられれば、社会福祉協議会で借りることもできる。そこの話は生活保護の方でお願いしていた。ところが年が明けた 1 月末ごろのこと、父親が灯油を盗んで捕まった。お金がなかったために、近所の灯油タンクから抜き取ったのだ。冬の北海道では 1 月は一番寒い時期である。灯油が無かったら生きることさえ難しくなりかねない。生きる為とは言え、馬鹿なことをした。本児一人で暮らせるわけもないので、直ぐに一時保護をして、その後父親と児童相談所とも話し合い、本児は施設活用となった。1 年ちょっとで中学を卒業する。高校も施設から通える。生活を立て直せるまで父親は一人で暮らすこととなり、結局その後、本児は高校卒業まで施設活用となった。父親は、そ

の後執行猶予付きで釈放され生活保護受給となったが、体調不良が続いたようでしばらくして自死した。

まとめ

不登校ケースでは中々関われなくて、時間ばかりが経っていくことが多い。何回かの訪問で本人に会えるのはまれであり、その後の面談を続けられることも難しい。本ケースでは、本児が苦しい生活をしていたこともあって、介入した際に助けてとSOSを出すことが出来た。タイミングが良かったと言えるだろう。父親自身も困っていたことが介入を受け入れることに繋がった。この介入は、金銭的な問題を一部解決することに繋がったので、父親が受け入れやすかったことにもなる。今振り返ってみると、父親自身も精神的に参っていたのではと思われる。そこにまで気を配れなかったことが悔やまれる。

いつも思うのだが、支援、介入はタイミングの問題がある。焦って介入しようとしても中々上手く行かないが、タイミングが良いとすんなり入れる。こればかりは、運かもしれない。

本児を父親から放し、守ることはできた。学校も変り、学校に通うことも出来た。施設では兄弟のような存在も出来た。

しかし、大きな家族を得ても、彼の心が十分癒えたとは言えないかもしれない。本児にとっての父親はこの父親一人である。どんな虐待ケースでもそれは同じで、どんなに酷い親でも、親なのである。だからと言って、殴られたり蹴られたりしていて良いわけではない。そして、そういう親子と言う一番守られるべき関係性の中で傷つけられた子どもは、その傷をしっかり癒さないと、或いは信頼でき、守ってくれる大人との関係が築けないと、虐待の連鎖になってしまうことがある。そうならない為にも、子どもを親から離さねばならないし、再統合にも最善の注意を払わねばならない。

このケースでは父親が残念な結果になったが、本児はその後も施設と学校で頑張り、自信を持って強く元気に巣立っていくことが出来たのが、我々支援者にとっての希望となった。

対人援助学マガジン第 45 号

生殖医療と家族援助

～子どもの性の“揺らぎ”と“気づき”～

荒木晃子

振り返り

毎回、次号の執筆前には前号を読み直し、文章を続けるだけでなく、いま一度頭のなかを整理し、前号から気持ちをつなぐ作業を繰り返すことを心がけている。今回もしかり、前号を読み返し、大切な、「ひとは皆、この世に生まれ、誰かの手によって育まれる。成長過程、特に幼少期に於いては、人間はひとりで生き伸びることはできない」という基本概念を失念して記述していたことに気付いた。

前回（第 43 号）では、戸籍の性別の決定、それを強化する教育、性自認、好きになる性の方向など、生まれて以降、成長と共に性が可視化されることについて述べた。今号では、子どもの成長を見守り、その時々に寄り添い育む養育者の視点で、子どもの性の発達を再検証したい。

自分の性に“気付く”ということ

セクシュアルマイノリティ当事者であってもなくても、自身の性について自認、違和、方向性（異性に向かう、同性に向かう、異性と同性に向かう、誰にも向かない）などの気づきや自覚は、個人差はあるものの、一定の年齢に達するまでその確信を持つことが難しい。時として、成長過程で性に関する知識や情報に触発・誘発され、戸惑い、疑い、迷い、悩むこともあるだろう。しかし、いずれの体験も、それが“自身の性に気付く”契機となる可能性はあっても、必ずしも自覚につながるとは限らない。外部から入ってくる性に関する知識や情報は、自分以外の誰かのものであり、良くも悪くも子どもが受ける影響の一部分でしかありえないのだ。

では、自身の性に関する自覚はどのように形成されるのだろうか。一考してみよう。

幼少期以降、青年期までにセクシュアルマイノリティ当事者が経験する様々な違和感は、それまで習得した性に関する知識や情報、或いは子どもの育成に関わる、養育者を含む養育環境から受容する情報が一因となることが多いという。子どもの生育過程に於いては、育つ環境がその時期、子どもにとっての“社会の全て”であるため、その養育環境にある知識や情報、それを伝える人々が、情報源となり子どもに及ぼす影響力を持つためである。近年、幼稚園に入る前の幼児に、家庭で性教育を始めることが推奨されつつあるのも、その一例である。自分のプライベートパーツ、他者との境界線など、性の自覚を持たない子どもの性被害を防ごうと、小児科医、精神科医、教育者と共に養育者である（主に母）親たちが、その必要性を認識した学習機会となっている。

子どもは、環境から受容した知識や情報をもとに、自分は男の子・女の子、或いはお兄ちゃん・お姉ちゃん、さらには、「この人が自分のお父さん・お母さん」と認識する。彼らは

空腹を満たし、愛情を注ぎ、必要な時には心と体を丸ごと抱きしめてくれる人たちである（はずだ）。彼らの育みのなかで、小さな命は成長し、自我が目覚め、やがて家族の一員となるにつれ、信頼し身をゆだねることができる特別な人たちと認識する。血縁による繋がりだけが「家族」ではない。家族は、家族になろうとする人たちと日々かかわり、共に暮らす中で、つくられていくのである。

家族の意味もわからない幼少期には、常に自分を守り、育んでくれる人たちとの生活の場が自分の居場所であり、その空間で共に暮らすコミュニティの関係を、「家族」と呼ぶことを学ぶ。子どもの成長・発達の過程で経験する、家族との安定的な関係性の中で、自他を識別し、他者との関係性を学び、やがて「自分とは何者か」を確信する力が育つのであろう。子どもにとって、家族は、人生で最初の学びの場でもある。

肯定感

幼少期、子どもの衣食住の全ては養育環境、家庭では主に親、保育園では保育士などの養育者から提供される。男児には、男の子の服を着せ、男の子らしい立ち居振る舞い、用の足し方を教え、将来にために男の子にふさわしい躾を心がけるかもしれない。養育者の言動を疑うことを知らない時期、子どもはどんなことでも言われたことは守ろうとするだろう。言いつけを守るというより、言われたとおりに“その人を真似て”やってみようとする、が表現としてはふさわしいかもしれない。例え、すぐにはできなくても、言われたとおりにやろうと努力するはずだ。ほめて欲しい、認めて欲しい、嫌われたくないといった、承認欲求からくる行動である。生まれてから数年間は、公的、継続的に子どもの知能、情緒、視聴覚、空間認識など様々な発達検査を行い、子どもが成長し発達を遂げているかを科学的に確認する制度がある。同時期、子どもは家庭で、衣食住に必要な行動様式を養育者から学ぶこともあるだろう。日々繰り返す日常の営みの中で、子どもは養育者を含む家族への信頼感を獲得し、徐々に自己肯定感が芽生えていく。

自己肯定感とは、自分は愛され、守られており、ここで安全に暮らすことができる。いわば、“自分は生きていて良い存在なのだ”と、己を肯定的に受容する感覚/受容する力といえよう。子どもが成長し、人格が形成される過程で、自己肯定感は個の人格の中核を成す重要な発達課題の一つとなる。幼少期の養育者との安定的な信頼関係から、自己肯定感の基盤が形成されることで、“自分らしく生きる”ことができるようになるのである。

違和感

「ボクは男の子だよ」。

ある日、幼い我が娘（こ）にそう告げられたら、親として“あなた”はどう応えるだろう。もし、あなたが保育士ならば、どんな表情で、なんと声をかけるだろうか。

養育者の言動は、子どもに与える影響が大きい。その前提で応答するのであれば、「それは間違っている」、「そんなことを言ってはいけない」、「なんてことを言うの！」との返答は正しいとは言えない。ましてや、「この子、どこか“おかしい”のではないかしら？」、「大変だ。病院に連れて行こう」などと考えるのは、論外である。

養育者が、子どもの性に関する言動に違和を覚えたときは、まず否定しないことが大切

である。初めに、「そう、男の子なのね」と肯定的に返答する。その後、時間をかけ、日常生活の中で、なぜそう思うの、どうしてそう思ったの、いつから思っていたのなど、スキンシップやコミュニケーションをとりつつ、時間をかけ、やさしく尋ねることを心がけたい。その際、立て続けに質問攻めにして、子どもを追い詰めてしまうことには注意が必要である。

性に関する違和を言葉にする子どもは戸惑っている。女の子として生活し、女の子として接する家族に対して、「ボクは男の子だよ」と伝えることが大切だと思っている。信頼できる家族だから、きっと何を言っても大丈夫だと信じているから、伝えようと思うのである。もしかすると、子どもごころに、自分の中に生じた“違和感”を知ってほしい、或いは、自分は間違っていないか確かめたいと思い、伝えるのかもしれない。例え、それがどのような理由であっても、否定することだけは避けなければならない。そのことが、性に関する違和感を持つ子どもの“その後の人生”を、大きく左右することにつながる可能性が否定できないからだ。その子が“自分の性に違和感を持っていること”を疑わないことが重要である。結果として、違和があるのかないのかではなく、その子は間違いなく「性に関する違和を感じている」と“思っている”。実際を確認する前に、子どもの思いを疑うことだけは避けなくてはならない。

憤る

筆者がLGBTQ当事者のカウンセリングやコンサルテーションに対応する際、必ずと言っていいほど聴く語りがある。

ある当事者は言った。「自分の悩み・苦しみは、これまでに経験した様々な傷つき体験78が元になっている。それらは全て自分のセクシュアリティが原因なんです」。

確かに、セクシュアルマイノリティ当事者は、誰一人として“傷ついた体験を持たない者”はいない。また、当事者の大半は、傷ついたのは、“自分に原因があるから”と思っている。果たしてそうなのであろうか。“自分に原因があるから傷ついた”との語りを、にわかに信じられなかった。私が出会った当事者たちはみな、法に触れることは何もしておらず、誰も傷つけてはいなかった。ただ真剣に、自分らしく生きたいと願いつつ、その願いがかなわない人々であった。では、なぜ、自分のせいで親を苦しめた、自分のせいで家族が悲しい思いをした、と語るのだろうか。彼らに、そう語らせるものは何であろうか。確かに、彼らの人格の基盤を揺るがす“何か”があるのは間違いない。それは、彼らの内面だけでなく、彼らの家族と、我々が暮らす社会に潜在していることを確信している。

5

ドラマセラピーの実践・研究・手法

ドラマセラピーにおけるシンボル・メタファーの役割と意義

尾上 明代

先日、立命館大学人間科学研究科の合同ゼミで、「対人援助の文脈におけるシンボル・メタファーの役割」というテーマで、異分野の教員が鼎談するという機会をいただいた。自身の実践における象徴やメタファーについて、改めて考える良い機会になったので、今号に書き留めておきたいと思う。

異なるものをつなぐメタファー

まず、シンボルやメタファーの基本的な使い方―クライエントが意識的・無意識的に表現することば、物語、できごと等の中にシンボルやメタファーを見つけて理解しながらプロセスを進め、クライエントと共に新しいナラティブを作っていく―においては、ドラマセラピーも他の多くの心理療法と同じである。しかし、ドラマセラピーにおけるシンボルやメタファーの役割は特に重要であり、それらを使って治療的な価値を生み出すドラマセラピーの能力は、この手法の根本的な源泉なのである(Mann, 1996)。具体的には、ことばの表現、絵やイメージ・物語のような投影的なワーク、身体を使うパントマイム、ジェスチャー、声、音、動き、ドラマ・劇の役の演技などを使い（Swanepoel, 2012)、シンボルやメタファーを外在化すること（Externalization）と、身体化すること（Embodiment）がその特徴である。この Embodiment は、文脈によっては具現化や演技化と訳す場合もある。Milioni(2007)は、ことばによるメタファーは、その具象化が静的でイメージが不十分である場合が多く、ドラマセラピーにおける身体化・演技化したメタファーは、現実的な説得力が高いと説明している。

メタファーは一般的には隠喩と訳されるが、語源はギリシャ語で、渡すことを意味し、

ひとつの参照枠から別の参照枠へ運ぶ・移すということを暗示している。メタファーを使うと二つの別々の体験領域を関連づけることができ、そこに違う新しい意味付けへの道が開ける（Mann, 1996）。二つの体験領域とは、ドラマセラピーの場合で言えば、現実（の役）と想像上のドラマ（の役）である。これらが結びつけられ統合されると、セラピューティックなクリエイション（創造）が起こるのである。

ここで具体例を提示する。以前、このマガジンでも紹介した、カナダのセラピスト、Yehudit Silverman が出会った拒食症の少女のケースである。彼女は入院先で、すべての栄養、薬、セラピーを拒否していたので、医師たちは心臓の機能が持たずに生命の危機が迫っているのではないかと心配する状況だった。しかし、ドラマセラピーだけは病床で受け続けており、彼女がお気に入りの「オズの魔法使い」を何カ月間か Yehudit と演じていた。少女は、当初ドロシーの役を演じていた。「竜巻」は、まさに命を奪うような混沌のシンボルとしてそのドラマに存在していたと思うが、当時、彼女は自分が「拒食症」であるという現実を認識できず、直面することもできていなかった。ところが、あるとき「竜巻」の役を演じるときが来た。すると竜巻になったとたんに、一気に自分の状況に対する恐怖の感情が襲ってきたという。役から降りて「自分」に戻ったとき、自分が死の危機に直面していることがわかり、全身震えながら大泣きしたそうだ。このとき、想像の世界の竜巻＝自分（現実）である、という意味付けが彼女の中で繋がり、竜巻がメタファーとして理解されたのだと私は解釈している。

Jung によれば、シンボルは無意識の領域にある記号や表象であるが、Samuels はそれを元に、メタファーの概念を無意識と意識の中間領域にあるものとした（Samuels,1985 cited Cox and Theilgaard,1987）。つまり、上記の事例では、竜巻の役を演じることで、それが無意識領域のシンボルからメタファーへ変化し、意識化することで自分との関連づけができ、病気の認識に繋がったと言えるのかもしれない。 Yehudit（2020） も「登場人物を演じるプロセスで、ふだんアクセスできない自分の中の隠された自分と繋がることができる。」と説明しているが、身体性を伴う演技（embodiment）が無意識の領域で休眠していた自分を揺り起こすのが、メタファーなのではないだろうか。この後、少女は回復の道に転じて最終的には高校に復学した。二つの領域が結びつけられて統合されるというメタファーと、それが治療的に働くというダイナミズムが理解しやすい事例だと思う。まさに、この竜巻というメタファーがなかったら、今、彼女の命はなかったと言っても過言ではないだろう。

自己開示なしで豊かな探索へ

多くの場合、ドラマセラピーはグループで実施する。すると、他のメンバーへの自己開示が大きな抵抗となることが少なくない。このような理由においても、メタファーを使う

と役立つ。もちろん自己開示そのものを否定しているのではない。たとえば自助グループや治療共同体などにおけるミーティングや分かち合いでは、自己開示がとても意義深いものであることは間違いない。しかし、特に初めて出会った知らない人たちがいるグループで、自分の個人的な体験を語るということに抵抗があるのは当然でもあり、また抵抗がない場を創るのには時間もかかる。さらに個人的な体験をドラマ化するということにはいろいろな意味で危険性を伴う場合もある。そのような場合、私は（セラピーのプロセスで発生するシンボルやメタファーを待って拾いあげるだけではなく）扱うテーマを含む象徴的なおとぎ話などを、こちらから提案することがよくある。個人的な体験ではなく普遍的な物語を演じるということは、現実からの距離(dramatic distance または aesthetic distance)ができ、グループの誰もが、現実の体験や自分の問題・課題をいっさい開示せずして、皆で安全に、しかも豊かな探索ができるのである。さらに結果的には、より深い洞察が生まれることが圧倒的に多い。

さらに重要な利点と役割

しかし、シンボルやメタファーを使う利点は、単に自己開示をしなくてすむからという消極的な理由ばかりではない。もっと大事な点がいくつもある。

１．孤立している（ように思われた)自分の人生や体験を、他の人生と共に存在するものへと変えられる。Mann(1996)は、isolation から　inclusion へという表現を使っており、私の好きなキーワードである。孤立した思いが、他者のそれと融合することは、まさにグループセラピーの本質である。

２．具体的な現実を使うよりも、強力なツールになり得る。シンボルやメタファーの方が、本質や根本的な要素を引き出すことができる。

このことを示す例の一つとして、自分の人生を理解する目的で実施する、人生を劇場に喩えるドラマワークをあげる。劇場の名前を決め（自身のこれまでの人生を名付ける）、舞台では何という劇が上演されており、たくさんの登場人物たちは誰で、舞台上のどこにいて、リハーサル室にはどんな人がいて、演出家や劇場の支配人は誰で、観客は誰で・・などなどメタファーとしての劇場の絵を描き、その後実際の演者たちを登場させてドラマ化するというものである。その際、例えば１人１人の登場人物に、一つだけの象徴的な台詞を言ってもらう、一つの象徴的な体の動きをしてもらう、また誰かとの関係性を一つの象徴的なポーズにしてもらうなど、劇場を一緒に作っていくと、その人の人生に起きた実

際のできごとを一切話してもらうことなしで、ご本人もグループメンバーも、その人生がよく理解できるということが起きる。もし普通に、「あなたの人生はどのようなものか教えてください」と言語的な説明を求めたとすれば、一般的に言って、自己開示的な要素が多分に入ることになり、当然、話はある程度長くなり、また枝葉末節も含まれて、時間がかかる割にはメンバーにしっかりと中身が伝わらないこともありうるだろう。つまり、具体的な詳しい説明や現実状況を並べることで、かえってポイントがわかりづらくなることがあるのだ。象徴的な台詞や動きを提示することで、不要なものが削ぎ落とされて、エッセンスを凝縮することができるのだと考えている。

ここで読者の方々に、「象徴的な表現をすることで、本質が出てくる」ことを体感していただくために質問をしたい。

「ご自身を植物（花や木など）に喩えたら何ですか？」

例えば「道端に咲いているタンポポ」「真っ赤なバラ」「真っすぐ伸びている杉の木」など、人によりバラエティーに富んだ答えがあることと思う。ポイントは、「あなたはどういう人ですか」と聞かれて普通の説明をするよりも、上記のように聞かれた場合には、どうしても自分のパーソナリティーの本質を考えることになる、ということに気づいて欲しいという点にある。また「〇〇さんを動物に喩えたら何ですか？」「色で表したら何色ですか？」と他者を説明する場合も同様で、「〇〇さんはどういう方だと思いますか」と言われるよりも、必然的に、その人が感じている〇〇さんの根本的な要素が出てくるだろう。そしてそれは、長い説明より断然わかりやすいはずだ。

ある子どものグループで、毎回始める前に「今日はどんな気分？」と聞いていた。「ウーン、分かんない」とか「別に」などと言う子どもたちに、「じゃ、今日の気分はどんな色？」と質問してみると、例えば「真っ黒」などという答えが返ってくることがあった。さらに「真っ黒ってどういうこと？」と聞くと、例えば「今日、学校で嫌なことがあって・・」というような話に繋がるのだった。

シンボルやメタファーは、それがなければ表現できない内的世界を表現することができる、という言い方もできる。

自分の言葉で語れない、あるいは自分として語れないものを伝える手段になる。ときには言葉にさえ出来ないものを、身体的・物理的表現を使ったメタファーで可視化したり、解放することもできる。無意識を意識化したり、新しい視点を獲得できる。自己理解に繋がることはもちろん、他者理解にも大いに役立つ。援助者にとっては、非援助者をより豊かに理解でき、当然それが次の進展・変容に繋がり新しいオルタナティブな物語を創ることがより可能になる。

３．自由になれる。自発性、主体性が高まり大きなエネルギーを引き出す。

精神科のデイケアで実施した「シンデレラ」のドラマで、継母にすごくいじめられたシンデレラが、継母を赦すかどうか、皆でディスカッションしていた。シンデレラが「自分は結婚して幸せになったから、継母を赦しても良い」と言ったとき、突然私の隣に別の「シンデレラ」が現れ、「いや、あの継母は絶対に許さない！」と、強い感情を持って発言をしたので驚いたことがあった。と言うのは、その人はその日「今日、ちょっと体調悪くてドラマに出られません」と言って、同じ部屋で毛布をかぶって寝ていた人だったのだ。知らない間に私の隣に来てシンデレラになって上記のセリフを発言したのだった。

自分ではふだん意識していない、抑圧している感情等が、象徴的な物語を与えられたとき、「シンデレラ」と自分が関連づけられ、その人のメタファーとなったのではないかと考える。ただし、表面的にはシンデレラは自分のストーリーでないので、または目の前の他のメンバーのストーリーではないので、自由になれるのだ。自分の「現実」を題材にしていたら、この事例のようなことは起きにくい。このように、シンボルやメタファーを使わなかったら表現され得なかった感情、セリフ、深いディカッション、理解が生まれる（つまり、創造が生まれる）ということが、毎回のセッションで起きる。クライエントの自発性や主体性を高め、大きなエネルギーを引き出す力もあることを理解していただけたと思う。

４．強力なシンボルの感覚を一緒に体験、演技することで、セラピスト・クライエントの関係性が良くなり、深い治療同盟ができる(Swanepoel, 2012)。

自分の人生に大きな圧力を感じて、「自由に動きたい」と言うクライエントとのある個人セッションで、私たちはツバメになって部屋中を羽ばたき飛び回った。そのツバメがその人にとってメタファーとして作用し、自由に生きるということをシンボリックに体験してもらったことになる。仮に、現実での圧力を感じる場面で「自由に動く練習」をしようとしても、普段のパターンをなかなか抜けられなかったと思う。ツバメの場面は、それに比べると新たな創造（creation）である。この人は、飛翔がとても気持ちが良くて非常にインパクトを受けたと言った。心身ともに自発性が高まり、私と一緒にのびのびと動いていたのがわかった。

象徴的なアクションや演技は架空のものだが、自由に飛んだ、楽しかった、開放された、という感覚は現実的・具体的な体験だ。このような強力なシンボルの感覚を、クライエントと一緒に体験することのもう一つの意義は、お互いの関係性が良くなって、深い治療同盟ができることである。

今号では、ドラマセラピーにおけるシンボルやメタファーについて説明したが、まだ他にも多くの役割や意義がある。ドラマセラピーのメカニズムに関係する重要な部分なので、また機会があれば、さらなる解説を試みたい。

文　献

Cox, M. and Theilgaard, A. (1987). Mutative metaphors in psychotherapy: the Aeolian mode. London: Tavistock.

船津衛 (1977).ケネス・バークのドラマティズム.人文研究 : 大阪市立大学大学院文学研究科紀要 .29 巻 10 号. pp800-822

Mann,S. (1996). METAPHOR, SYMBOL AND THE HEALING PROCESS IN DRAMATHERAPY. Dramatherapy. Vol. 18, Issue 2. pp2-5

Milioni, D. (2007). Embodiment and Metaphor in Dramatherapy: A Discursive Approach to the Extra-Discursive. Dramatherapy. Vol. 29, Issue 3. pp3-8

大場有希子 (2018). 心理臨床学における象徴の概念とその機能について --象徴形成のプロセスに着目して-- . 京都大学大学院教育学研究科紀要. 64 号. pp235-247

Swanepoel, M. (2011). Meeting with the metaphor: the impact of the dramatic metaphor on the therapeutic relationship. Dramatherapy. Vol. 33, Issue 2. pp101-113

高森 淳一 (2002). 物語のメタファーからみた心理療法.天理大学学報. 53 巻 2 号. pp21-57

対人援助学＆心理学の縦横無尽（30）

ヤーンの古希を言祝ぐ：日本ならびに立命館大学における TEM とヤーンのネットワークの拡大（2）2009 年から

サトウタツヤ・木戸彩恵・土元哲平・安田裕子

目次

1　Valsiner 教授と日本の心理学
　1－1　はじめに
　1－2　ヤーンの考えを知る
　1－3　シンポジウム後のヤーンの感想と驚くべきオファー
　1－4　2004 年 1，2 月における日本の研究者との交流
2　始動するプロジェクト群　ICPシンポジウム・HSS 章の執筆
　2－1　「Historically Structured Sampling（HSS）」に関する理論的思考と執筆
　2－2　データ分析から生み出されたアイディア
　2－3　ヤーンのネットワークへの参入　ブートキャンプ
　2－4　ネットワークのさらなる拡大
以上　前稿（1）　15.pdf (humanservices.jp)

以下本稿

3　広がる文化心理学ネットワーク
　3－1　ネットワークの拡がり 2008 年以降
　3－2　大学院生たちのネットワーク
　3－3　Fukushima を訪問した海外の仲間たち
　3－4　立命館大学総合心理学部の設立、ヤーンが再び立命館大学客員教授に
4　TEA（複線径路等至性アプローチ）の未来へ向けて
　4－1　TEA の発展　国際 TEA 学会という未来
　4－2　日本質的心理学会がヤーンに学会貢献大賞を授賞する
　4－3　立命館大学とオールボー大学の連携
　4－4　結語：ヤーンの古希を寿ぐ

3 広がる文化心理学ネットワーク

3－1　ネットワークの拡がり 2008 年以降

第 1 著者・サトウタツヤは、2008 年にエストニアを訪問したのをきっかけに、以下のような国々を訪問し（表 1）、ヤーンの文化心理学ネットワークに参加することになる。私たちは多くの文化心理学者と知り合い、学術交流のみならず友情を育むことができた。また、そのうちの何人かを立命館大学の客員教授として招聘することができたし、こちらから様々な国を訪問することもできた。

表１　Tatsuya Sato の海外の文化心理学の仲間たちとの交流

年月	国	大学等	用務
2008			
12	エストニア	タリン大学	博士論文副査
2011			
01	イタリア	サレント 大学	TEA 講演
2012			
01	イタリア	サレント 大学　サレルノ大学	TEA 講演
02	ブラジル	バイア州立大学　サンパウロ大学	Cultural psychology
2013			
03	イタリア/デンマーク	サレント 大学　オールボー 大学,	
05	ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス: LSE	Idiographic Approach	
2014			
03	ブラジル	バイア州立大学　サンパウロ大学	Cultural psychology
04	デンマーク	オールボー 大学	Cultural psychology
08	デンマーク	コペンハーゲン 大学	サマースクール
11	スイス/ルクセンブルグ	ヌーシャテル 大学　ルクセンブルグ大学	TEA 講演
2016			
10	イタリア	ナポリ	Idiographic Approach to Health
11	ノルウェー	ノルウェイ科学技術大学（NTNU）	TEA 講演
2019			
03	イタリア/スイス	ローマ大学・サレント大学・ヌーシャテル大学	

これらの訪問はいずれも価値あるもので豊かな交流を作り出したが、中でもブラジルで２回にわたって行われた「文化心理学セミナー」は、参加した私たちにとってとりわけ感慨深いものがあった。なにせ、日本からみれば地球の裏側であり移動だけで 40 時間はかかる国なのである。これらのセミナーはバイア大学のアナ＝セシリア・バストス（Bastos）教授が主催したもので 2012 年が第 2 回文化心理学セミナー、2014 年が第 3 回文化心理学セミナーであった。いずれも海沿いの素敵なコテージでの開催であり、優雅なセミナーであった。

2012 年のセミナーにおいては、バイア大学の研究グループが「母性を巡る移行（transition）と未定性（uncertainty）」に関する研究を発表した。多くの研究で TEM（複線径路等至性モデリング）が使われており、第 1 著者はそれに対して研究法上のコメントを行った。この時、日本人の参加者は第 1 著者のみであったが、大変暖かい雰囲気で歓迎してもらった。



図 1　第 2 回文化心理学セミナー（2012 年；ブラジル・バイア）

2014 年の第 3 回会議は、“Conceptualizing Catalysis in Theory and Practice”というタイトルで開催された。立命館大学サトゼミ関係からは第 1・2・4 著者を含め 7 人が参加した。また、湘北短期大学（当時）の岡本依子も参加した。



図 2　第 3 回文化心理学セミナー（2014 年；ブラジル・バイア）

ヤーンはかつてアナ＝セシリアとその仲間を"TEM philia（テム愛好者／嗜癖者）"だと冗談めかして私に説明したことがある。褒めているのかけなしているのか微妙だが（笑）、確かにアナ＝セシリア・バストス教授と彼女の同僚や学生たちは TEM を愛してくれている。そもそも彼女たちは”Contexto e trajectórias de desenvolvimento（CONTRADES）”という文化心理学的な研究プロジェクトを永年にわたり行っていた。そして、TEM と出会ってからこの方法論を使っていくつもの研究成果を産出することが可能になったことを喜んでくれているのである。エルサ、ヴィヴィアン、タチアナ、マリア、アンジェラ、リヴィア。多くが大学の教授たちである。ブラジルにこんなにも多くの友人ができるとは誰が想像しただろうか？マリア・ライラこと Lyra ら（2018）の研究は、現代ブラジルの状況下で養子縁組を決めた二組の夫婦の分析を TEA（複線径路等至性アプローチ）によって行ったものである。

ブラジルの文化心理学セミナーには毎回でも参加したいのであるが、開催時期が 3 月ではなく 4 月になることもあって一年度始めの海外出張は難しいために一4 月開催の時は参加できなかった。2020 年は 3 月に開催される予定であったから第 1 著者と第 3 著者・土元哲平は参加する気満々であったが、コロナ禍により会そのものが中止となった。再びブラジルの地を踏むのはいつになるのだろうか？

なお、時間は前後するが、ヤーンは 2013 年にアメリカ・クラーク大学からデンマーク・オールボー大学に異動した（Niels Bohr 記念講座の教授）。3 月に記念の講義（Niels Bohr Lecture）が行われ、第 1 著者・第 2 著者・安田裕子・神崎真実が参加した。



図 3　2013 年の Niels Bohr Lecture（オールボー大学）

また第 1 著者は 2014 年 4 月にオールボー大学を訪問し主に PBL（プロジェクト・ベースト・ラーニング）について調査を行った。この時、同大学のモーンス（Mogens Jensen）が様々なアレンジをしてくれた。後に始まる（2019）両大学の学生交流のプログラム化の端緒であったかもしれない。この時の様子は「オールボー大学の PBL」として『対人援助学マガジン』に寄稿した。
17.pdf (humanservices.jp)



図 4　2014 年モーンスらと共に（オールボー大学）

2014 年についていえば、第 1 著者は８月には再びデンマークに舞い戻りコペンハーゲン大学のペニーラが企画を立てたサマースクールに講師陣の一員として参加した。1 年に 2 回もデンマークに行けた時が懐かしい。写真は、ヤーンを含む講師陣でエチオピア料理を食べに行ってきた時のショットである。左から、ブレィディ、ヤーン、タニア、ペニーラ、サトウタツヤである。


図 5　2014 年、エチオピア料理を食す（デンマークにて）

3−2　大学院生たちのネットワーク

第 1 著者だけではなく大学院生達も文化心理学のネットワークに積極的に参加した。また海外の文化心理学関係の研究者が日本に来るなど積極的な交流が行われた。

第 2〜4 著者はいずれも立命館大学の大学院生として過ごした時期がある。彼らとヤーンおよびそのネットワークとの関わりについて紹介していこう。

第 4 著者は 2004 年に立命館大学大学院応用人間科学研究科修士課程を修了し 4 月から文学研究科博士課程後期課程に進学した（その後中途退学）。彼女は修士論文のために収集したデータをもとに等至性（Equifinality）概念に依拠して論文の執筆に取りかかり、TEA が主題となった世界最初の論文となった(安田、2005)。そんな彼女が初めてヤーンに出会ったのは、北京で行われた国際心理学会（ICP）の時である。彼女はホテルのランチバイキングをごちそうになり、なんて素敵な先生なんだと感動したことをよく覚えている。その後、彼女はクラーク大学を 2 度にわたって訪問し、いずれも、クラーク大学近くにあるマンションに住まわせてもらった。宿泊のアレンジをはじめ、すぐに海外での生活を成り立たせることができるように、ヤーンは細々と取り計らってくれた。ヤーンの人間的な温かさは、グローバルに研究することの素晴らしさを、彼女に教えてくれた。2014 年にはブラジルで行われた第 3 回文化心理学セミナーに参加した。彼女はいま立命館大学総合心理学部で臨床心理学／質的研究法の教授として働いている。

第 2 著者・木戸彩恵は 2004 年に文化心理学シンポジウムが開催された時は学部生で、スタッフとして働いていたためヤーンと直接の接点はなかった。彼女は 2004 年 3 月に立命館大学を卒業して文学研究科博士課程前期課程に入学した。学部時代のテーマである化粧心理学の研究に TEM を用いることにして、第 4 著者と同じ時に ICP でヤーンと出会った。その後、彼女はクラーク大学に滞在して修士論文のためのインタビューを行ったり、国際会議や研究会、文化心理学のサマースクールなどで、文化心理学ネットワークと交流した。2014 年にはブラジルで行われた第 3 回文化心理学セミナーに参加した。彼女は文化心理学のネットワークを有効に活用したひとりであるが、特にスイスのタニア・ズウィットン（Tania Zittoun）教授のもとにも研究のために滞在し親交を深めた。そして、彼女は 2019 年には同教授を日本発達心理学会の集中セミナーのゲストとして日本に招聘した。彼女はいま関西大学文学部で文化心理学の准教授として働いている。

第 3 著者は鹿児島大学の学部・修士課程を経て 2017 年に立命館大学大学院文学研究科博士課程後期課程に入学した。彼がヤーンと初めて出会ったのは 2017 年 8 月であった。第 3 著者はゼミの先輩たちがヤーンのもとで学んでいるのを見聞きして、大学の資金を得てオールボーに滞在することを計画した。彼は幸運にも資金を獲得でき 2018 年 2 月に「The Niels Bohr Lectures 2018」に参加するためにデンマークを、次いでトランジションとライフコース論について学ぶためにスイスのタニアのもとを訪問した。その後も何度か海外を訪れるとともに、ヤーンが立命館大学の客員教授として来日した 2018，2019 年には、受講生（大学院生）とヤーンの橋渡し役として活躍した。21 年現在、彼は OIC 総合研究機構で PD として研究に勤しんでいる。

今回の著者以外にも、第 1 著者に関係する大学院生の多くがネットワークに参加しているが、特に滑田明暢、

日高友郎、神崎真実たちが濃厚な交流をしてきたと言える。

立命館大学大学院文学研究科博士課程後期課程在学（当時）滑田明暢の活動については前稿で紹介した。2014年にブラジルで行われた第3回文化心理学セミナーにも出席した。彼は現在、静岡大学専任講師を務めている。

2010年1月には、立命館大学大学院文学研究科博士課程後期課程在学（当時）の日高友郎がクラーク大学で2ヶ月を過ごした。この時はエストニアから来ていた大学院生のキリル・マズロフ（Kirill Maslov）と親しくなった。彼は現在、福島県立医科大学専任講師を務めている。

ヤーンと最も濃厚な交流をした大学院生のひとりが神崎真実であろう。神崎は2013年に立命館大学文学部を卒業して文学研究科博士課程前期／後期課程を経て2017年に博士号を取得した。卒業論文のタイトルは「通信制高校のマイクロ・エスノグラフィー」であるが、発生の三層モデルを組み込んだという意味で、TEA（複線径路等至性アプローチ）に関するものであった。彼女は一貫してマイクロ・エスノグラフィーに取り組み博士号を得て、2021年現在は立命館グローバル・イノベーション研究機構（R-GIRO）のPDとして勤務している。彼女は2013年のヤーン・ヴァルシナー教授着任記念講演（デンマーク）で初めてヤーンと出会った。2014年にはブラジルで行われた第3回文化心理学セミナーに参加した。2015年には2度にわたってデンマークを訪問し、文化心理学について学んだ。特に2015年8〜10月にかけて58日間にわたって滞在した。この時の交流をもとに2016年には横浜で行われた国際心理学会でモーンスと共にシンポジウムを行った。その成果は「Contextualized Understanding of and Transdisciplinary Approaches to School Dropout」という章として、『Cultural Psychology of Education』シリーズの『Educating Adolescents Around the Globe』に掲載された。2016年には第1著者と共にノルウェーに行き、The 18th Conference on Social Community Psychologyに参加した。ノルウェーではノルウェー科学技術大学（Norwegian University of Science and Technology; NTNU）のロアーことHroar Klempe教授にお世話になり自宅パーティにもご招待いただいた。



図6　2016年神崎真実がノルウェーを訪問（ロアーは左奥すみ）

2019年にはイタリアを訪問した。日本でのTransnational meeting on TEAの開催にあたっては常に裏方として運営スタッフをしてくれている。

2009年7月には、クラーク大学大学院生のザック・ベックステッド（Zack Beckstead）が立命館大学に短期留学を果たした。



図 7　2009 年に来日したザック（創思館にて MTG）

彼は翌 2010 年 7 月にも来日した。当時のサトゼミ 6 期生たちと交流していた姿が懐かしい。2009 年には博士号を取得したカトリン・クラセップも来日した。

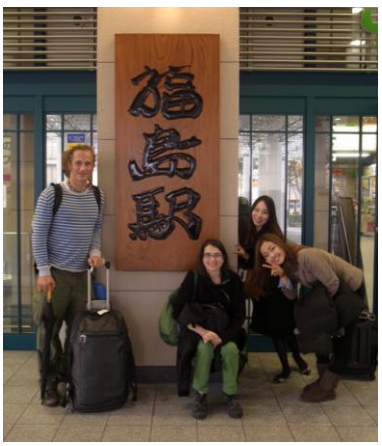
3－3　Fukushima を訪問した海外の仲間たち

東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故（2011）の余韻もさめやらぬ 2012 年 6 月にはエストニアから Katrin Kullasepp が来日し、広島大学・立命館大学で講演を行い、東日本大震災後の被災地・福島を訪問した。彼女はさくらんぼ種とばし大会に飛び入り参加し優勝した。第 1 著者、第 2 著者と共に、当時大学院生だった春日秀朗が同行した。彼は、2013 年 2～3 月にかけてエストニアを訪問し、彼の専門である青年の調査を行い、その結果は博士論文の一部を構成することになった。



図 9　2012 年に来日したカトリン（福島県飯舘村役場にて）

2013 年 11 月には立命館大学訪問教授になった Tania Zittoun が来日し（表 2 参照）、福島を訪問した。



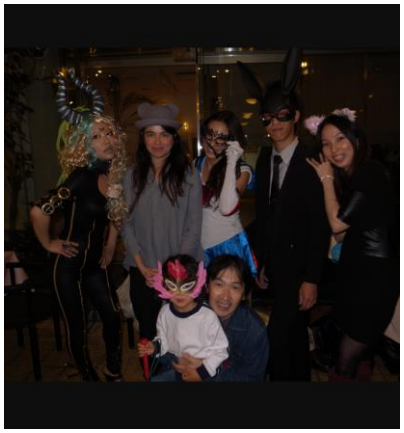


図 10　2013 年に来日したタニアの活動（福島訪問とハロウィンパーティ）

東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所事故から 3 年後の 2014 年 7 月 7 日、福島市にある浪江町からの避難者仮設住宅をブレディ・ワゴナー、エリック・ジェンセン、私の 3 人で訪問した。避難者のリーダーに話を聞いた後、避難者の S さんを紹介してもらい避難者仮設住宅にお邪魔させてもらった。



図 8　福島市の避難住宅での写真（2014 年）

私たちが部屋に入った時、壁に貼ってあった絵が私たちの目を捉えた。白いスーツに身を包んだ男たちが現場を歩いている写真である。私たちは津波に襲われて原発が爆発した後の救助活動に焦点を当てた写真ではないかと想像できた。このような場合、日本人は決して疑問を口にしない。質問自体が失礼なマナーとされているからである。しかし、「外国人」がこの写真は何か？という質問をしたとき、S さんの口から意外な言葉が出てきた。彼女はふるさとの写真を飾っているのだと言った。この意外な答えをどう理解すればいいのだろうか。それはデンマークの心理学者ルビン（1915）の「図と地」の反転のようなものだったのである。白い作業スーツを着た男たちは S さんにとっての図ではなくむしろ地（背景）であり、丘こそが S さんにとっての図であり、故郷を想起させるものであった。壁に貼られた写真は、彼女が避難生活を送っていた頃の故郷を想像させるものだったのである（Zittoun and Sato, 2018）。

S さんは別れ際に「来てくれてありがとう、福島の人たちを忘れないでいてくれてありがとう」という言葉で、自分の生活空間に侵入してくる突然の闖入者（奇妙なゲスト）に語りかけてくれた。

3－4　立命館大学総合心理学部の設立、ヤーンが再び立命館大学客員教授に

立命館大学における心理学の研究・教育体制も大きな変貌をとげた。立命館大学文学部心理学専攻は総合心理学部として独立し（2016）、学生定員 280 名、教員数 30 名（倍増）になり、場所も京都から大阪茨木市（OIC）に移転した。以降、シンポジウムなどのイベントは京都・衣笠ではなく OIC で開催されることになった。2016 年 7 月に行われた立命館大学総合心理学部設立記念のセミナー「文化心理学の新展開」には、ヤーンとセルジオこと Sergio・Salvatore 教授（イタリア）が出席し、それぞれ講演を行った。ヤーンは「TEA（複線径路等至性アプローチ）と文化心理学」という講演を行った。これは横浜で行われた国際心理学会（ICP）のために来日したヤーンの仲間達を立命館大学総合心理学部に招くという意図のもと行われたものである。佐藤隆夫学部長（当時）

も立命館大学総合心理学部における文化心理学の意義を理解してシンポジウムにも参加してくれた。



図 11　2016 年　総合心理学部創立記念セミナー「文化心理学の新展開」

2018 年には立命館大学に新しい博士課程（人間科学研究科）が発足し、ヤーンはその客員教授として 3 年間にわたり 5 月に集中講義を行った。また、総合心理学セミナーも行った。この新しい大学院には、TEA（複線径路等至性アプローチ）を学ぶという明確な目的をもった大学院生が多数入学してきた。彼／女らは看護・日本語教育・キャリア支援等の実践に TEA（複線径路等至性アプローチ）を活用する目的で博士課程後期課程に入学してきており、彼／女らがヤーンと直接出会う貴重な機会となった。ヤーンは 2019 年も来日を果たし集中講義を行ったが、2020 年度の講義（2021 年 1 月）はオンラインとなった。

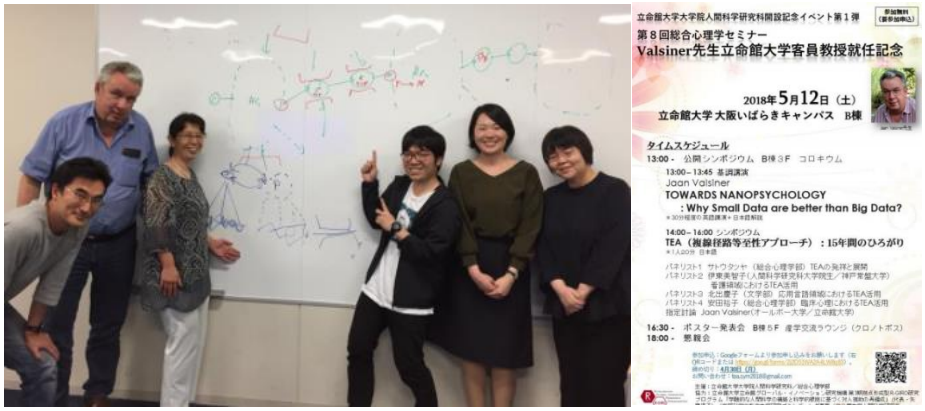


図 12　2018 年 5 月の Valsiner 教授集中講義とセミナーのポスター

2019 年 11 月 11 日にはそれぞれ別の目的で来日した文化心理学関係の仲間達の来日予定日程が偶然にも同じ時期になったため、3 人が同じ日に立命館大学 OIC に集まり、総合心理学部の授業「社会の中の心理学」におけるゲストトークを行い、また、専門家向けの「文化心理学セミナー：スペイン・スイス・ノルウェーの研究者を迎えて」を開催した。スイスからタニア（Tania Zittoun）、スペインからマリオ（MARIO CARRETERO）、ノルウェーからオルガ（Olga　Lehman）が同じ時期に来日したのである。また、日高友郎（福島県立医科大学）、滑田明暢（静岡大学）、神崎真実（立命館大学）なども集まった。第 2 著者は聴衆として参加した。

立命館大学はヤーンを中心とした文化心理学ネットワークの中で、必須通過点として認知されつつあると言っても過言ではない。



図 13　2019 年 11 月の文化心理学セミナー@立命館大学に集まった仲間達

4　TEA（複線径路等至性アプローチ）の未来へ向けて

4−1　TEA の発展　国際 TEA 学会という未来

私達とヤーンの関係の基盤の中心には、TEA（複線径路等至性アプローチ）がある。2016 年には英語版の書籍が出版された（Sato, Mori and Valsiner, 2016）。この本の目次が示すように、日本の研究者以外に、デンマーク、イギリス、エストニア、オランダ、ブラジル、ボリビア等から執筆者が参加しており、Transnational な雰囲気を醸し出している。

表 2　『Making of the future』の目次（Sato, Mori and Valsiner, 2016）

- Introduction: from TEM to TEA : the making of a new approach / Tatsuya Sato
- Imagining the past and remembering the future : how the unreal defines the real / Tania Zittoun and Jaan Valsiner
- The trajectory equifinality model (TEM) as a general tool for understanding human life course within irreversible time / Tatsuya Sato and Hitomi Tanimura
- Mapping trajectories of becoming a psychologist / Katrin Kullasepp
- How can the diversity of human lives be expressed using TEM? : depicting the experiences and choices of infertile women unable to conceive after infertility treatment / Yuko Yasuda
- Exploring the transgenerational transmission of trauma in a cultural life course perspective / Nina Dalgaard and Pernille Hviid
- Meaning construction and its transformation in narratives about music with a personal meaning : music therapy in group counseling for juvenile delinquents / Kakuko Matsumoto
- TEM and dialogical self theory : how to understand a marriage problem? / Hubert Hermans
- Composition-work and TEM : studying the self in irreversible time / Agnieszka Konopka and Wim van Beers
- A dialogical self : trajectory equifinality model for higher education persistence/abandoning of study / Mauricio Cortés
- Contribution of TEM to lifespan development psychology from life story / Masakuni Tagaki
- From the as if to the as is : the emergence of a research project / Eugenia Gouvedari
- TEM model and Brazilian research on developmental transitions / Ana Cecília Bastos
- Extending the trajectory equifinality model's conceptual and methodological toolkit to account for continuous development / Eric Jensen and Brady Wagoner.

この本において、ヤーンは（タニアと一緒に書いた原稿の中で）、何故彼自身が TEM のことを好きなのか、

その理由を 4 つ上げている（Zittoun and Valsiner, 2016）。
第一に、TEM はその全容が質的である。
第二に、TEM は単一の、独特な実例に基づいて一般化をする。
第三に、TEM は「測定」することができない。一方、心理学はその実用的な精緻化において、従来「測定」と呼ばれている操作に依存している。
第四に、TEM は、発達中のシステムの意味を理解する上での「最小のゲシュタルト（Minimal Gestalt）」である。それは、現象を要素論的なものとして捉えている私たちの基本的な前提に挑戦するものである。

なお、TEA は日本において、心理学を含む多くの学範（ディシプリン）で興味を持たれており、右肩上がりで公刊論文が増えている。

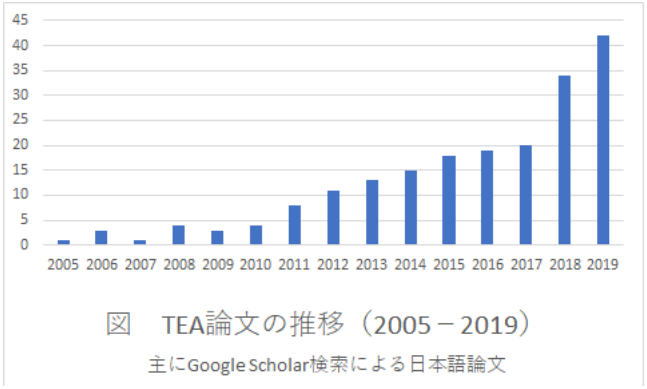


図 14　TEA を用いた文献数の推移（2005－2009）

こうした状況のもと 2019 年 3 月に TEA に関する Transnational Meeting(トランスナショナル・ミーティング)が開始された。同年 9 月にはヤーンが人間科学研究科で集中講義を行うのにあわせて第 2 回大会が日本で開催され、インドネシア・スラバヤ大学のアナンタ・ユディアルソ（Ananta Yudiarso）准教授が学生とともに参加した。



図 15　2019 年スラバヤ大学のユディアルソ准教授と共に

2020 年 3 月にはブラジル・バイアで第 3 回大会が行われる予定であったが、コロナ禍の影響でオンラインでの開催となった。だが TEA の国際展開の勢いは今後も続いていくだろう。

4－2　日本質的心理学会がヤーンに学会貢献大賞を授賞する

2019 年、ヤーンは何度目かの来日を果たした。そして、立命館大学での講義、日本心理学会での講演（13, Sep）、Trans-national Meeting on TEA（15, Sep）への参加、JAQP での講演、など、非常にエネルギッシュな日々を過ごした。

日本質的心理学会でヤーンは「REMAINING ELEGANT: Fifteen years of qualitative psychology in Japan」という講演を行った。以下に要旨を掲げる。

科学としての心理学は、20 世紀の大部分を除いて、質的な性質を持っている。心理学の現象の多くは、原則として定量化できないものであり、その性質上、定量化の実践は非科学的なものとなっている。2004 年に日本の心理学で質的な方向性が出てきたことは、複雑な心理学の形態とそのダイナミクスの本質が評価されてきたことを示している。サトウタツヤが開発した TEA（Trajectory Equifinality Approach）は、心理学が社会的に敏感に人間の幸福に貢献していることを示すとともに、新しい研究方法論をエレガントに増殖させたものである。 このエレガントな視点をさらに発展させるために、TEA の現場理論的拡張の可能性を概説する。

この講演の最後のスライドには「優雅さは１５年たっても続く（しかし、発達するには、自身の美しさを楽しむことをやめてしまわないことが必要である）」と記されていた。

この年、日本質的心理学会はヤーンに貢献賞を授与した。授賞理由は次の通りである。

ヴァルシナー教授は、1985 年に『Culture and Psychology』を創刊するなど、長きに渡って世界の質的研究の発展に大いに貢献してきた。日本質的心理学会においては、2004 年に開催された第 1 回大会で講演を行った（その内容は『質的心理学研究』第 4 号(2005)に公刊されている）。以来、常に日本の質的心理学に寄り添い、その質的向上はもとより、国際化にも尽力してきた。その長年の功績に敬意を表し、特別賞を贈ることとした。

授賞式で賞を授与したのは、同学会の理事長・サトウタツヤ（2019～2021 年）であった。両者の友情に基づく知的交流が公的にも認められた瞬間であるとも言える。



図 16　2019　日本質的心理学会学会貢献大賞を日本質的心理学会長から授与されるヤーン



図 17　2019　日本質的心理学会学会貢献大賞を受賞したヤーン
（浅井教授が、日本質的心理学会学会賞を受賞 ｜ 桜美林大学（obirin.ac.jp））

ヤーンはその 1 年後『質的心理学フォーラム』（vol.12）に、「学会受賞者のコメント」という記事を執筆した。

この賞を受賞してから約 1 年が経過した今、私は各国の質的方法論の議論がどのように機能しているのかをじっくりと考えているところです。日本の質的研究が、イデオロギー的なものではなく、現象に基づいた自律的なものであることは、とても嬉しいことです。対照的に欧米では、質的方法をめぐる言説はイデオロギー的に燃えさかっており、量的方法を敵視していることが多いものです。しかし、それは間違っています--そもそも量的方法を質的方法の下位分類として見る必要があるのです。量的な方法というのは、最小限の質的な違いである0と1の違いを数量として扱うことにほかならず、それは質的方法の下位分類でしかないのですから。

こうしたコメントからも、ヤーンが日本の質的研究の独自性を強く評価していることがわかる。

4−3　立命館大学とオールボー大学の連携

ヤーンがオールボー大学に異動し、立命館大学で総合心理学部が設立された（前述）ことで、２つの大学の交流が深化していくことになった。2016 年 7 月に行われた立命館大学総合心理学部設立記念の文化心理学セミナーには、ヤーンとセルジオ（Sergio Salvatore）が出席し、それぞれ講演を行った。ヤーンの講演タイトルは「TEA（複線径路等至性アプローチ）と文化心理学」であった。立命館大学から 2017 年には山口洋典（立命館大学共通教育機構）が、2019 年 4 月には第 4 著者が、それぞれサバティカルでオールボー大学に滞在した。

こうした関係を基盤に、2019 年には両大学は連携覚書（Memorandum）を締結した。学生交流のための単位互換制度の端緒が作られた。2020 年 3 月、第 1 著者が引率して立命館大学の学生 5 名がオールボー大学を訪問し、文化心理学を学びフィールドワークを行い学生と交流した。受け入れはモーンスこと Mogens Jensen 准教授、サ

ラこと Sarah Awad 助教とポーラこと Paula Cavada-Hrepich 助教の 3 名で、モーンスが中心になってアレンジしてくれた。立命館大学の学生が訪問したときの様子がオールボー大学のホームページで紹介されている。



図 18　2020 年　オールボー大学を訪問した立命館大学の学生たち
show（aau.dk）

2020 年 3 月 11 日夜、デンマーク政府が Covid19 の感染症拡大をうけて大学を閉鎖する決定を下したこともあり、プログラムは一日短縮で終了した。なお、第 1 著者が現時点（2021 年 5 月）で振り返るなら、悔しいというより安堵の気持ちが大きい。日程がもう少し遅く計画されていたなら全く実行できなかったかもしれないからである。実際、2020 年度のこの事業はオンライン交流会形式で行われた。

4−4　結語：ヤーンの古希を寿ぐ

2004 年に実質的に始まったヤーンと私たち日本人心理学者の交流は、文化心理学のネットワーク全体の活性化につながった。また私たちの交流の基盤には常に TEA（複線径路等至性アプローチ）があり、この TEA 自体の発展も著しいものがある。また、交流の範囲が大学院生のみならず、立命館大学とオールボー大学の学部生にまで拡がったことは最初期には想像できなかった展開であり、大きな意味があるだろう。

「最初期には想像できなかった」ということでいえば、立命館大学文学部の心理学専攻が総合心理学部という学部になる（becoming）ことも全く想像できなかったことであった。こうした偶発的出来事も追い風にしながらヤーンとの交流は長く続いてきたのである。

TEA（複線径路等至性アプローチ）の発展もとどまるところを知らない。TEM（複線径路等至性モデリング）に関するメーリングリストの登録者は日本国内で 700 名以上になっており、TEA 分析学会の設立が取り沙汰されている。また、フランスの哲学者・シモンドン（Gilbert Simondon, 1924-1989）が 1958 年に提出した博士論文が公刊された『個体化の哲学』（Simondon, 2013/2018）で言及されている展結（Transduction）という概念が TEA（複線径路等至性アプローチ）に新しい息吹を与える可能性がある。ヤーンと共に活発な議論が行われはじめたところである。

70 歳を祝うことを日本では「古希」という。古希は、70 歳まで生きることがいかに珍しいことかを表現した杜甫の有名な漢詩『曲江』に由来している。私たちは、世界中の多くの日本の心理学者や文化心理学者と一緒に彼の満 70 歳の誕生日を祝うことができて幸せである。

引用文献

Kanzaki, M., Jensen, M., Kawamata, T., & Onohara, A. (2020). Contextualised Understanding of and Transdisciplinary Approaches to School Dropout BT. In M. Watzlawik & A. Burkholder (Eds.), *Educating Adolescents Around the Globe: Becoming Who You Are in a World Full of Expectations* (pp. 265–282). Springer International Publishing. https://doi.org/10.1007/978-3-030-37900-1_14

Lyra, M. C., Valério, T. A. de M., & Wagoner, B. (2018). Pathways to life course changes: Introducing the concept of Avenues of Directive Meaning. Culture & Psychology, 24(4), 443–459. https://doi.org/10.1177/1354067X18779060

Sato, T., Mori, N., & Valsiner, J. (2016). Making of the future: The Trajectory Equifinality Approach in cultural psychology. Information Age Publishing.

Simondon, G. (2013). *L'Individuation à la lumière des notions de forme et d'information*. Millon. (藤井 千佳世, 監訳 (2018). 個体化の哲学：形相と情報の概念を手がかりに. 法政大学出版局.

安田裕子.（2005）. 不妊という経験を通じた自己の問い直し過程――治療では子どもが授からなかった当事者の選択岐路から. 質的心理学研究, 4, 201-226.

Zittoun, T., & Valsiner, J. (2016). Imagining the past and remembering the future: how the unreal defines the real. In T. Sato, N. Mori & J. Valsiner (Eds.), Making of the future: the trajectory equifinality approach in cultural psychology (pp. 3-19). Charlotte, NC: Information Age Publishing.

Zittoun, T., & Sato, T. (2018). Imagination in adults and the aging person: Possible futures and actual past. In *Handbook of imagination and culture*. (pp. 187–208). Oxford University Press.

参考ウェブサイト

Aalborg University　09.03.2020 “VISIT FROM RITSUMEIKAN UNIVERSITY”
https://www.ccp.aau.dk/news/show/visit-from-ritsumeikan-university.cid454007

Construction of Transnational Network for サトゼミ
https://sites.google.com/site/satozemiguest/

桜美林大学　2019/09/25（水）　浅井教授が、日本質的心理学会学会賞を受賞
https://www.obirin.ac.jp/info/year_2019/r11i8i000002z3qi.html

サトゼミ 研究者来訪記　ver.2（2012～）
https://sites.google.com/site/satozemiguest2/2013

対人援助学マガジンの関連サイト

2012 年 1 月イタリア、3 月ブラジル
http://www.humanservices.jp/magazine/vol8/16.pdf

2013 年 3 月イタリア、デンマーク、5 月イギリス
http://www.humanservices.jp/magazine/vol13/17.pdf

2014 年 3 月ブラジル、4 月デンマーク、８月オランダ、デンマーク
http://humanservices.jp/magazine/vol18/17.pdf

2016 年 7 月横浜 ICP、9 月ポーランド、10 月イタリア、11 月ノルウェー
https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol28/16.pdf

Jaan Valsiner 先生、2018 年５月の滞在記
https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol33/16.pdf

きもちは、言葉をさがしている

「紅茶の時間」とその周辺

第44話

水野　スウ

「うたごえ」のこと

「うたごえ」という市民の活動（うたごえ運動と呼ぶ人もいます）が全国にあります。単に、歌を歌うだけのグループではなくて、自分たちで歌詞を書き、曲もつくり、それを合唱し、その中には沖縄や福島の歌、原発や原爆の歌、平和や憲法の歌もたくさんあるらしいということを、以前から聞いてはいました。

私が実際にうたごえを体験したのは、今から数年前のこと。うたごえ祭典と呼ばれる全国大会が石川で開催された時、うたごえの人たちが大勢、全国からみえて、数々の私の知る歌、知らない歌、オリジナル曲を発表し、そのすばらしい歌声と見事な歌いっぷりに感動したものです。その際、友人から声をかけられ、思いがけず私もその日限りの石川大合唱団に混ざって、梅原司平さんの歌「折り鶴」を大きなステージで一緒に歌うという、貴重な経験をさせてもらいました。

うたごえに関して、それ以外ほぼ何も知らない私だというのに、どういうわけか、2021年度全国うたごえ創作講習会の講師のご指名を受けました。「うたごえ創作講習会」というのは、全国からうたごえ仲間が泊りがけで集まり、めいめいが作品を発表し、コメントやアドバイスを受け、その場でグループをつくって歌詞に曲をつけていく、という歌づくり合宿のこと。その中でお話の出前と、メンバーの作品への感想を言ってください、というご依頼です。

毎年、主催地を変えながら開かれていて、今年は福井に集まって2日間の合宿がおこなわれる予定だったところ、コロナの感染拡大真っ最中と時期が重なり、じかに顔を合わせての創作作業は難しくなってしまいました。

講習会の中心を担う、愛知の藤村記一郎さんはじめ創作部会の人たちは、それでも今できる最善のこと――ともに歌をつくることはできなくても、せめて講演会と作品発表と講評会だけでもしようと、急遽Zoomで2日にわけて講習会を開くことを決定。

それから2週間、創作部会と福井のうたごえメンバーたちは怒濤の日々を経て、必死の準備でぎりぎり当日にこぎつけたそうです。私も、どきどきしながら福井に行きました。今回のマガジン原稿は、そんなうたごえ創作講習会の報告記です。

中嶌哲演さん講演会

プログラム1日目は、小浜の古刹、明通寺ご住職である中嶌哲演さんの講演会。哲演さんは、志賀原発の反対集会でよく能登に来られていて、私も何度かお会いしているお坊さまです。私が福井に伺うのは2日目なので、この日は自宅から、Zoomでお話をお聞きしました。

哲演さんは、高野山の大学時代のご自身のことを、文学や哲学に惹かれ、戦争と平和には関心外の若者だった、とふりかえります。けれど、強引な友人に平和行進へと連れ出されたとき、一人の被爆者と出逢い、その方の地獄の体験を聴き続けたことから、被爆者の支援に関わるように。小浜在住の被爆者を探し訪ね歩いて、原爆症専門の医師につなげる活動をしながら、1994年に被爆者援護法ができるまでの26年間、小浜の一軒一軒を訪ねて托鉢を続けられました。

原発の反対運動と関わりだしたのは、小浜に原発建設の話が持ち上がった1971年から。そのときすでに福井には7基も建っていたのに、自分ごとになったのはわが町にできるかもと知ってからなんですよ、と哲演さんのお話はどこまでも謙虚です。固い信念をお持ちで、揺らがない。原発に対する抗議の断食はすでに8回にも及びます。

哲演さんたちが、美しい若狭を守ろう！と立ち上げた「原発設置反対小浜市民の会」の不断の努力もあって、小浜では原発の受けいれを断念させてきたけれど、その周辺、美浜にも高浜にも大飯にも原発が立ち並んでしまいました。福井県内の原発は、嶺南と呼ばれる地域にある若狭に集中して15基。福井市などのある嶺北と比べて4分の1弱の人口しかない嶺南に、原発が集中して建てられてきたのです。そして、そこでつくられる大量の電力を消費するのは、京阪神に住む都会の人々です。

2011年の福島原発事故の後、ようやく7基の廃炉が決まったものの、それでもまだ8基あります。しかも美浜3号、高浜1、2号は40年も動かしてきた老朽原発。一時は慎重姿勢を見せていた県知事と県議会でしたが、再稼働させるなら一発電所につき25億円の交付金、と国が強く動き出したとたん、ころっと態度をかえたそうです。

自他一如

哲演さんのお話の後半、特に心に残ったのはこんな言葉たちでした。

――核廃棄物の最終処分場の候補地に名乗りをあげている北海道の寿都町や神恵内村、なぜこういう危険物がとんでもなく遠く離れたところでだけ問題になるのか、それをよく考えてほしい。これら廃棄物を生み出したのは、これっぽっちもそこの人たちではない。地元の同意さえ得れば何でもできるという傲慢さは、半世紀前から全く変わっていませんね。大量生産、大量輸送、大量消費、大量廃棄、の思想、価値観が、あらゆる分野で幅をきかせている。原発はその最たるもの。大量の電力エネルギーを生み出し、施設は過疎に押し付け、大都市圏がそれを消費する。大量消費して出た廃棄物は、若狭だけでない過疎地の原発から生じたもの、これをすべて下北の六ヶ所村に押しつける。その構造のもとに、今の都市部の繁栄があるということです。

――自己と他者との関係を仏教では、「自他一如」という。自己と自分以外の他者とは切っても切れない、つながりあって支えられて、生きている、生かされている関係、という基本が根本にある。その他者を、単に個人対個人の関係でなく、私たちと社会との関係、人類を生かしめている地球環境との関係の中で見た時、自然全体の環境と私たち、人類社会が、どう調和して生きていくのかが求められている時代だと思うのです。

仏教ではこれを、生きとし生けるもの、といい

ますが、欧米の市民運動の中で、生態学的倫理=ecological ethics、地球倫理=global ethicsという言葉がでてきた。倫理は、これまでは人間中心主義の関係性の問題だったが、おお、ついに欧米の市民運動でもそうなってきたか、仏教者にとっては大昔から当たり前の、生きとし生けるものの発想になってきたのか、と思った。人間一人ひとり、生きていく上に備えておかなければならない倫理性の中に、ecological ethics、global ethicsが必要とされる時代になってきたのだな、と感じています。

この日は、哲演さんのお話の合間に2つの歌が歌われました。坂村真民(しんみん)さんの詩「あとからくる者のために」と哲演さんの詩「わが若狭よ」。どちらもうたごえのメンバーが曲をつけて歌にして、福井のうたごえの人たちがその場で歌って聞かせてくれました。

歌のもちより発表会

創作講習会2日目は、全国のうたごえメンバーさんたちの歌のもちより発表会と、私のお話の出前です。福井のうたごえメンバー、斉藤清巳(きよみ)さん宅リビングキッチンのスタジオに、参加者はわずか5名。ここから全国のうたごえ仲間をZoomでつなぎ、午前と午後にわたって26作品、計4時間におよぶ歌のもちより発表会をおこない、午前の部と午後の部の合間には私がお話をする、というプログラムです。

お一人でもお二人でも、同じ空間に耳を傾けてくれてる人がいる状態でお話しさせてもらえたら、という私のお願いを聞き入れてくださり、斉藤さん宅のリビングキッチンには、何本もの立派なマイクが並び、さながら機材をそろえた音楽スタジオ。そのスタジオの一角を透明なフィルムで仕切った場所が私の指定席になりました。きっとZoom越しからは、私が金魚鉢の中にいるように見えていたことでしょう。そんな状態で、歌のもちより発表会がスタートしました。

ある方は作詞の朗読、ある方は曲つきで歌い、曲があるものには一作ごと、創作部会の方がアドバイスをしていきます。日頃から曲づくりをしている方たちは歌詞からだけでも曲のイメージが浮かぶらしく、これにこんな曲をつけたいですね、とか、そこはこういう曲の構成にしたらどうでしょう、と具体的な指摘を次々に。

ここでの私の役割は、歌詞についてコメントすること。それを講評と呼ぶそうだけど、そういったことするのは生まれてはじめてです。歌詞集を読みながら、歌詞を書いた人がその場で朗読するのを聴き、即、感じたことを言っていく。歌詞のいいところ、ハッとする言葉、響いた言葉、ちょっと気になった言葉、などなど。

歌詞には、コロナあり、福島あり、辺野古の海に遺骨の混じる土砂をすてるな、の歌あり、介護施設におられるお母さんを想う歌があれば、亡き仲間を想う歌もあり。「キンメダイとサンマの恋」（詞：千葉の石塚早恵さん）は、福島の魚のかけあいのかたちをとりながら、トリチウムが流されようとしている福島の海の近未来が歌詞になっていました。現在進行中の社会、暮らし、怒りや祈り、平和への願いを反映する歌が次から次へと発表されていきます。

「ボクらのキンキュージタイ宣言」（詞：愛知の筒井佳子さん）は、コロナのドサクサを利用して、憲法に緊急事態条項をいれようとする政府のもくろみをあえて逆手にとって、「考え楽しむことがまるで悪のように／ボクらは権利をむしりとられる／ボクらは歌をむしりとられる」と今をリアルに表現します。政府が見せしめのようにあれこれと指示をするけど、いやいや、今のボクらの日常こそが緊急事態なんだぜ、と宣言しているところがとてもカッコいい。これにあったカッコいい曲がつくといいですね。

「アトムおばさん」（詞：福井の横井和子さん）は、40年を超えた原発の自分語りの歌。原発を再稼働させたい側はできるだけ“老朽原発”といいたくないらしいけど、原発本人からすれば、もう心臓バクバク、からだボロボロ、もう身を引きたいよ、と言っている。それを無理やり動かしたがるのは一部の人間たちの都合だと気づかせてくれます。

「共に歩く未来」（詞曲：福井の清水雅美さん）は、社会の問題を気にして不安を感じつつも、私一人動いたって何したって、と思っていたかつての自分がいて、だけど「人のつくったものが人の手には負えない」とはっきりした時、人の目がどうこうは吹っ飛んで、知らず知らず動いていた、気づいたら仲間もいた、ともに歌っていた、と。本当を知ること、人とつながることで自分がかわり、気づけばふだんの努力の12条していた、そんな歌にも聞こえました。

「老朽原発　うごかすな！」（詞：福井の山口直子さん　曲：山口さん、榊原昭裕さん）は、すごくダイレクトで、歌詞だけ見るときつそうに思えたけど、それにテンポのいい曲がついていて、「廃炉！廃炉！廃炉！」とたたみかけるコールが印象的。初めて聞く人もすぐ乗って一緒に声をあげたくなるような、勢いある集会ソングになっていました。歌詞をきいて原発の現状も学べるようにわざと硬い言葉を連ねた、という意図が生きている歌。それにしても、「はいろ！はいろ！」って言葉のくり返しが、金沢弁の「はいろ、ほやろ」（そうだろ、そうでしょ）にも聞こえて、石川県人の私には余計に愉快、痛快な歌でした。

「あたりまえの幸せ」（詞：岡山の石原みゆきさん　曲：真島優美子さん）には、「鍋を囲んで　友と語り合うこと／学校から　子どもたちの声が聞こえてくること／熱があるとき　診てもらえること／旅立つときさようならが言えること」の歌詞。どれも今、コロナで奪われていることごと。「木々がさざめくように／鳥がさえずるように」という歌詞もあって、歌を聴きながら、コロナの時代の「What a wonderful world」みたいと感じました。あの歌も実はベトナム戦争の時代に歌われていたのでしたよね。

長谷川義史さんの書いた「犬はえらい」（2021年5月2・9日号しんぶん赤旗日曜版に掲載）にインスパイアされて、同名の歌をつくった北海道の高畠賢さんにはもう、脱帽＆爆笑。人目を気にせず堂々とうんこする犬、かたや、狭い個室で鍵かけて、音まで忍ばせてうんこする自分のはずかしさ。犬もけんかするけど、武器なんか持たないし、銃で撃てと命令もしない、犬はえらい！えらいなぁ、と、ユーモアの中にどきっとする言葉が生きている歌でした。

まだまだまだたくさんの歌がありました。うたごえの人たちの創作の熱意に圧倒されます。例年ならこの続きを、創作グループに分かれて泊りがけで歌をしあげるところ、今回はここまでしかできないのがコロナ下の現実。今後はこの作品をもとに、うたごえの仲間同士が個別にZoomやYouTubeでやりとりしながら、歌を耕し育てていくのでしょう。苦労した分、完成した歌を合唱で聴ける日が来た時はどんなに胸がときめくでしょう。

それにしても日本各地で、こうして歌で自分を表現し、自分の作品をまな板に載せる勇気をもって講習会に参加し、教え教えられながら歌をつくり、歌で平和を希求する人たちが全国にいること、この会に呼んでもらわなかったらずっと知らずにいたと思います。70年あまりも続いている「うたごえ」は、一人ひとりの不断の努力で紡ぐ、壮大な平和運動でもあるのでした。

きもちは、言葉をさがしている

午前の部と午後の部の合間は、私のトークタイムです。38年前に「紅茶の時間」をはじめたわけや、誰もが身の丈の自分を認めてもらいたいという願いをもって生きているんだと、紅茶を続けながら気づいていったこと。つらさを抱えてやってきた、目の前の一人ひとりを大切にするにはどうしたらいい？と悩みながら私なりに見つけた3つの方法。

その1が、来た人にようこそとお茶をいれること。目の前のカップが空になったらお茶を注ぎます。

その2が、もしその人が胸のうちを話したいと思っているのなら、耳へんに十四の心、と書く「きく」で、その人を聴くこと。自分のきもちにフィットする言葉を、人はいつだってさがしたい、見つけたい、と思っているはず。話しだしてもそれをさえぎられたり、横取りされたり、否定されたりしたなら、きっとなかなか言葉はさがせない。なのでできるだけ、その人が安心できるきもちの受け皿を用意して、まっすぐな耳で聴こうと心がけています。

その3が、その人のいいところを見つけたら、言葉にして伝えること。私のいう「いいところ」は必ずしも、これこれができる、すごい、といった目に見えるDo的なことではなく、むしろその人の持っているBe的ないいところのこと。その人の誠実さ、まっすぐさ、自然体なところ、きもちと言葉があっているところ、なぜかその人といるとほっとするな、安心する、などなど。それらはみな、その人の身の丈をそのままよく見て、見つけて、伝えてきた言葉たちです。

近頃はともすれば、出した結果だけで人が評価されがちだけれど、それでは見えないものがある。人は数値化できるDoだけでできているんじゃなくて、その人が居る・在る、存在のBeもふくめた全体として、一人ひとりがいるのだから。そう思いながら紅茶を続けてきたのです。

そんな、いつものお話に加えて、この日は、ほかではあまりくわしく話さないような、うたづくりのこともお話ししました。

「ほかの誰とも　13条のうた」

15年ほど前からお話の出前先で、「あなたが言われてうれしかった言葉は何ですか」と尋ねて、その言葉を書いてもらうワークショップを何度も重ねてきました。自分にとってうれしかった、いわば身の丈のほめ言葉は、おそらく誰もが受け取っているはず、だけどふだんはそれを忘れていることが多いです。参加した方がようよう思い出して書いてくれたそれぞれのうれしい言葉が、およそ千も貯まった時、娘との協働作業で「ほめ言葉のシャワー」という小さな冊子をつくりました。今から13年前の2008年のこと。

その本づくりの過程で娘が発見したのは、「私が私であるというこの存在は、ほかの誰ともとりかえることができない」という、当たり前すぎて気づかずにいた、普遍でした。その発見を経て、憲法13条の「すべて国民は個人として尊重される」を知った娘が、これって憲法が「あなたはほかの誰ともとりかえがきかない」と私に言っているんだ、と13条を独自の視点で読み解き、その条文をやさしい言葉に訳して朗読してくれました。

わたしは　ほかの誰ともとりかえがきかない
わたしは　幸せを追い求めていい
わたしはわたしを大切　と思っていい
あなたもあなたを大切　と思っていい
その大切さは　行ったり来たり
でないと　平和は成り立たない

私はこの訳を初めて聞いた時、まるで詩のよう、歌にできたらいいな、と思いました。13条に誰もが「個人として尊重される」と書いてあること、言い換えればそれは、私もあなたもほかの誰ともとりかえのきかない存在だよ、と憲法が言っていること。そんな憲法のお話を1時間あまりした後、最後にエッセンスを凝縮したような歌で締めくくれたなら、言葉だけでは届かなかったものが、聴いている人の中に入っていくんじゃないか。そう思ったからです。

そして、彼女の訳にできるだけ添った言葉で歌詞を書き、思い浮かんだメロディをつけて「ほかの誰とも　13条のうた」という歌をつくりました。出前の最後にこの歌を歌うたび、不思議だけど毎回、語る時とは違うドアが開いてくれるのを実感しています。

「13条のうた」のCDブック

それから数年後、私はこの歌をCDにしました。CDを出すなんて、普通は歌がうまくて自信のある人がすること。私の歌声はささやくようで実に頼りないとわかっていたけど、この際、人の評価なんて気にしていられませんでした。どうしても今、CDにしなくちゃ、私にそう思わせた、ある人の発言があったのです。

そのある人というのは、2013年当時から今も変わらず副総理を続けている麻生さんのこと。「誰も気づかないうちにワイマール憲法がかわった時のように、ナチスの手口を学んだらどうか」、そうやって憲法をかえたらいいじゃないか、と仄(ほの)めかしたのです。

私はぞっとして危機感マックス、こうなったら出

前先で細々と歌っていたんじゃまにあわない、大急ぎで音楽をしている友人に頼み、伴奏と録音をしてもらって、エイヤ！の勢いでCDをつくりました。CDケースには16ページの歌詞カードが入れられると知り、そこに歌詞だけでなく、私が特に大切に思う条文についての短い文章を添えて、憲法のちいさな読み物つきCDブックに。お値段もかわいい300円。憲法ときいたら敬遠しそうな人でも、歌のCDなら受け取ってもらえることに気づき、以後このCDブックは私の「平和の名刺」となり、たくさんの人の手に渡っていきました。

Graduation

思い返すと、初めて歌に自分の言葉をつけたのは、映画「地球交響曲（ガイアシンフォニー）第三番」でBGMに流れていた「Graduation」。

歌っているスーザン・オズボーンさんの歌声もだけど、特にスーザンさんの書いた英語の歌詞がすばらしくて、何度も繰り返し聞いて歌詞を聞き取りました。そのメロディが実は、自分は好きになれなかった「仰げば尊し」だったと知った時の驚き。曲の出だしからの美しいアレンジのせいもあるでしょうが、私の知っていた歌とはまるで違った歌に聞こえたのです。

編曲と歌詞と歌声の力、子どもの頃から知っている歌の価値観をひっくり返してくれたスーザンさんの歌詞は、直訳するとこんなふうでした。

長い時の流れの先っぽにひっかかったまま、
私たちはいったい何者なんだろう、と
思い出している
この青い星は太陽のまわりをめぐり、回転する
静かな銀河をよこぎって　宇宙はひらいていく
地球という船は果てしない未知へと
宙（そら）の海を渡っていく

私たちの誰も、見知らぬ人であれ、友であれ、
敵ですらも　人生という旅の道づれ
生きること死ぬことを
終わりのないらせんのようにくりかえし、
進化していく
よろこびや悲しみ　笑い声や怖れを
ともにしながら
私たちは長い年月（としつき）、
このいのちの学校で学んでいる

私たちの内なる宇宙は　生けるすべてのものを
抱きしめる
見いだす真のやすらぎ、心の平和は、
私たちからこそ、贈るべきもの
私たちの生きるところは、ここ
私たちの生きるときは、いま
日がのぼり　日がしずむまで
わかちあった美しい日々　私は決して忘れない

なんて宇宙的なひろがりのある、深い意味のこめられた歌詞。School of life、いのちの学校、人生の学校、という言葉は、私にとってまるで紅茶の時間のことに思えて、日本語の歌詞をつけたい、と思ったのです。スーザンさんのもとの詞にできるだけ忠実に訳して、書いた歌詞がこれです。

わたしは誰なの 想いだしてる
青い星はまわるよ　太陽のぐるり
銀河をよこぎり　宇宙はひらく
果てしない未知へと　空を航（い）く船

旅する道づれ　他人（ひと）も　敵も　友も
生と死　くりかえす　終わらないらせん
よろこび　悲しみ　えがおや怖れ
わかちあう年月（としつき）いのちのまなびや

内なる宇宙は　いのち抱きしめ
こころの平和を　贈るよ　あなたへ
今　ここを生きる　ともに生きる
美しきこの日々　忘れはしない

自分で表現する

その後、スーザンさんに石川でお会いする機会があって、その時に訳詞のお許しを得て、2009年に

は金沢の「ピース9コンサート」で、紅茶仲間たちと歌うという大冒険までしました。

初めからそこまでしよう、なんて大それたきもちはもちろんありませんでしたよ。スーザンさんの歌詞があまりにすてきで、訳した歌詞を自分流に口ずさんでいた頃、たまたま紅茶にやってきた親しい友だちのサワコさんに、「ね、ね、この歌とってもすてきなんだよ」と小声で最初の方だけ歌ってきかせたのです。すると彼女がまっすぐに私を見て、「スウさん、自分の思いは自分で表現しなくちゃね、ピース9で歌おうよ、一緒に歌うから」と大真面目な顔で。

彼女は以前から、保育士さん仲間と歌のグループをつくり、自分たちで歌を創作したり、歌ったり、時には小さなコンサートをひらいたりもしている人でした。その日、紅茶に初めてつれてきてくれた京都の友人のジュンコさんも、やはり歌でつながっているお仲間の一人。ジュンコさんも即、「うん、ぜひ。私がピアノ伴奏するから」と言ってくれ、あれよあれよの間に、紅茶仲間たちとステージで本当に歌うことになったのでした。

この時からおつきあいのあったおかげで、「13条のうた」をつくった時にも、ジュンコさんが編曲と伴奏をしてくださり、彼女とつながる音楽仲間さんに録音を手助けしてもらって、無事「13条のうた」のCDをつくることができました。

歌のたねを蒔いたのは

ほんの数えるほどしかない私の歌づくり、けれどそのどれにも、表現したい、伝えたい、届けたい、という、強い「たい」があったこと、いつも必然があってのことだったなあと、この日、福井で語りながら何度も思い出していました。

そういう考え方のたねを私の中に蒔いてくれたのは、さかのぼればおそらく、草の根の人々の歌であるフォークソングを数多くつくり、長年歌い続けてきた笠木透さんだったのではないかと思うのです。

娘が未満児保育園を卒園する日、親たちが歌った「私の子どもたちへ」。その時は誰の歌かも知らず、でも大好きな歌になり、折にふれさまざまな場面で歌っていました。その歌詞を書いた笠木透さんにはじめて出逢えたのは、それから10年近くたった1994年のこと。

その年、笠木透さんとそのお仲間、雑花塾のコンサートが石川県内何ヶ所かでリレーするように開かれ、紅茶の時間もその一会場になりました。夏休み中ということもあり、当日は大人よりずっと多い、町内4つの小学校から子どもたちがいっぱいやって来て、わが家は150人のお客さんたちで満員御礼。

暮らしの歌、大地の歌、権力に抗う歌、憲法の歌、平和の歌を、一緒に声出して歌う楽しさはもちろん、思いを表現するために自分で歌をつくること、自分たちの歌を持つことの、大きな意味とちからを、私はきっとあの頃からうっすら感じていたのでしょう。

写真は、笠木透さんたちの紅茶コンサート「あなたが夜明けをつげる子どもたち」の一場面を、雑花塾メンバーの岩田健三郎さんがスケッチしたものです。ベランダにも階段にも台所のカウンターにも、子どもたち、大人たちのお客さんがびっしり。うちの犬もベランダで聴いています。



その後、私は、精神障がいの人たちの働く東京調布のレストラン、クッキングハウスと出逢っていくのですが、そこにもすでに笠木さんが歌のたねを蒔いていたことを知りました。この場所のテーマソングでもある「不思議なレストラン」は、笠木さんからクッキングハウスへプレゼントした歌だったのです。

クッキングハウスのメンバーやスタッフは、笠木さんや雑花塾メンバーから歌づくりを教えてもらい、今では何十曲もの作詞作曲オリジナルソングを持っています。自らの病を歌ったもの、クッキングハウスの日常を歌ったもの、仲間と働くよろこびを歌にしたもの、自分たちは平和のメッセンジャーだと歌う、平和の歌もあります。

クッキングハウスの記念コンサートでは毎回、十何曲もの歌が歌われますが、それらはすべてクッキングハウスのメンバー、スタッフたちが歌詞も曲もつくり、それを自分たちで表現する、誇らしい自前の歌たちです。

言葉を超えて共鳴しあう

トークタイムの最後は、「平和のひとかけら」の歌のことを。福島の原発事故の後すぐ、金沢へ自主避難し、以来、金沢で暮らしているご夫婦と知りあってほぼ10年。その方がある時ぽそりと、「ふるさと」の歌はもう歌えない、あの歌詞がつらすぎてね、と。その一言をきっかけに、「ふるさと」のメロディに「平和のひとかけら」という歌詞をつけてみました。

きもちいつも言葉に　あなたと語りあう
涙もえがおもわけあってきた
平和のたね　蒔きつつ

知らないことまなんで　平和のひとかけらに
心の自由もとめて　一歩まえへ　あなたと

つないだ手のぬくもり　今もわたし　はげます
平和の糸をつむいで　明日へわたす　ギフトに
平和のたね　蒔きつつ

紅茶の時間でこれまでしてきたことをイメージして書いた詞だけど、特に、平和のひとかけら、のフレーズは、私自身のこうでありたいという願いなので、この歌を歌うといつもきもちが少し強くなる気がします。

この歌のことを話し終えると同時に、リビングスタジオの斉藤さんが、「それ、今、歌いましょう」とギターで伴奏をひきはじめました。それにあわせて福井チームの人たちも、なじみのある「ふるさと」のメロディにのせて「平和のひとかけら」を口ずさんでくれます。私にとっては思いがけないサプライズだったけど、これが「うたごえ」の文化なのですね。

時に歌は、しゃべり言葉以上にひとの間で共鳴しあって、きもちときもちをつなぎます。長年、ゴリラの研究で知られる京大総長の山際寿一さんが「我々は進化の過程で信頼を作るのに言葉だけに依存しないできた。言葉を獲得するずっと以前から、きもちを伝えるのに一番いい装置は、人と人の間で共鳴しあう音楽だった」と。

長引くコロナの時代、生身のからだで共鳴しあう機会はたしかに減っているけど、ぶあつい雲で押しつぶされそうな閉塞感のその底で、今が今、あたらしい歌が生まれてくる。離れていても、ともに歌をつくり、歌いあう仲間がいる。歌は、私たち人間にとって、不要不急どころか、この息苦しい社会で自分らしく生きていくための、なくてはならない心の栄養と筋肉なのだ——その確かな実感が、この日の時間には満ちていました。



ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

（３５）

中村周平

「自分以外の事故当事者や家族の声を聴きたい」

同志社大学の大学院に入り、スポーツ事故の研究を始めたことで、改めて気づいた思いではありましたが、以前から事故当事者の声を把握し、そのネットワークを作る必要性については、調停でお世話になった弁護士の方から提案されていたことでした。

事故後、調停を申し立て、和解に至る経緯の中で、弁護士の方は私や私の家族を含め、他のスポーツ事故被災者の方にも会われてきました。事故や相手方に対する思い、その後の生活の大変さ、将来への不案。

・・・事故被災者それぞれが葛藤や不安を感じられていたそうです。様々な経験をされた事故当事者の方々とお会いする中で、弁護士の方が感じられたのは当事者同士のつながりの必要性でした。

事故当事者や家族は、事故を境に、これまでとは全く異なる生活を送ることになります。事故への対応や自宅と病院との往復、今後の生活に向けての不安などが積み重なり、身体的にも精神的にも追い込まれたものになっていきます。そんな中、事故直後もしくは早い段階で同じスポーツ事故に遭

った当事者とつながることができれば、事故当事者にとってその時に最も必要な情報を得ることができ、負担を軽減することができます。

事実、私が事故に遭ったときは、ピアカウンセラーと呼ばれる立場で同じ障害のある方が自宅まで足を運んで下さり、これからの生活のことや福祉制度の使い方について教えてもらうことができました。同じスポーツ事故に遭った当事者との出会いは、上記のピアカウンセラーから受けられる情報のみならず、スポーツ事故に付随する問題（学校やチームとの関係性、経済的支援の実情、病院でのリハビリテーションなど）についても助言を得ることができる可能性があります。

また、そういったつながりを続けていくことで、事故当事者同士のネットワークができ、相互に助け合うだけでなく、事故後の相手側の対応や経済的支援の有無、事故被災者や家族の生活の様子など、スポーツ事故を取り巻く様々な問題について把握するための窓口となるのではないか。実際にスポーツ事故被災者と会われ、共に調停を経験された弁護士の方からスポーツ事故の当事者ネットワーク、とりわけラグビー事故に関する当事者同士のつながりを持つ必要性を打診されていました。

そして、私の中でもそういったつながりやネットワークの存在意義を強く感じていました。その理由としては、実際にそういった活動を行っているいくつかの団体を目にしてきたからです。

一つは、「全国学校事故・事件を語る会」という団体でした。学校事故・事件被害者や遺族を中心に、2003 年 5 月に発足した団体であり、学校事故・事件被害者・遺族の支援とエンパワーメントをめざすことを目的に活動されています。2013 年 5 月の段階で、全国約 120 件の方々と連絡を取られるほどのネットワークを構築されています。

また二か月に一回、神戸を中心に集会を開かれ、学校事故・事件被害者や遺族の方々の相談に応じられています。さらに、一年に一回、全国からメンバーが集まられる大集会が行われ、学校事故・事件の様々な問題点を討議し、各方面に発信されています。この大集会には、弁護士や大学研究者の方も参加されています。私や私の父親も、この大集会に参加させて頂き、当事者

同士のつながりを持てただけでなく、スポーツを含む学校事故の現状の悲惨さを目の当たりにしました。

　そして、もう一つの団体は・・・

路上生活者の個人史

第３回

竹中尚文

Ⅰ

今回は路上生活者のインタビューを掲載することが出来なかった。これまで路上生活者の食糧支援等をおこなってから、聞き取りをさせてもらっていた。この約一年間はコロナ禍の中で「密閉・密集・密接」を避けることがその対策となってきた。長時間にわたるインタビューは密接になるため、控えてきた。これまでは以前に収録したものを編集して掲載してきたが、ついにその撮り溜めがなくなった。

そこで今回は、路上生活者を援助する側の私たちの概要を述べたい。まず、私は路上生活者から「ありがとう」と言われる。私も「ありがとう」と返答する。援助を受けてくれる人が来てくれるから、援助を提供できると思うから、「ありがとう」と返答をする。これは私の基本姿勢である。

Ⅱ

私たちは、大阪市北区にある扇町公園で路上生活者の食糧支援を一ヶ月に一回している。具体的には私が住職をしている専光寺で「いなり寿司」を作って扇町公園に運んで配布している。この扇町公園で路上生活者の支援をするボランティアは、個人の集まりである。この中に組織として参加するのは私たちだけである。多くのボランティアの人たちは月曜日ごとに活動している。

ボランティア活動の中心は食糧支援である。ここに並ぶ路上生活者は50人から100人ほどで、私たち専光寺は10キロ余りのお米を4〜500個の「いなり寿司」にして配布している。この「いなり寿司」を調理するのは、専光寺仏教婦人会の人々である。お寺に婦人会という組織があって、その活動の一つにしている。私たちが参加しない回は、ボランティアの人

たちが白米による「おにぎり」を作って配布している。このお米も毎回 10 キロ余りだから、月間 4 回で 4〜50 キロが必要になる。年間 500 キロほどのお米であるが、以前は廃棄するような粗悪米を使っていた。一年以上経過した古いお米で、その保管状態も悪いので、とても不味い「おにぎり」を提供していた。お米は私が調達することにした。

拙寺は年間 300 キロほどの「お仏飯（ぶっぱん）」(仏様にお供えするご飯)用のお米が集まる。仏様にお供えするには多すぎるお米の量なので、経済的困難の中で子育てをしている家庭に支援米として送ることにした。そうしたら、お寺の門信徒の方々は多くお米を持ってきてくれるようになった。いつの間にかお米は年間 600 キロほどになった。少しずつの厚意が倍のお米になった。それも美味しいお米が集まるようになった。こうした人々の厚意に触発された私は、お米専用の冷蔵庫を買った。冷蔵庫で保管するとお米は美味しい状態が保たれる。

冷蔵庫の収納量は約 1 トンであるから、子育て支援のお米も路上生活者用のお米もなんとか収納可能である。必要なお米は年間 1,200 キロ程であるが、毎月 100 キロ程のお米を消費するので、工夫をしてお米を消費していくと 1,000 キロ収納の冷蔵庫で問題はない。問題は、路上生活者の 500 キロほどのお米をどうするか、私には調達する見込みはなかった。

多くの人にお米の提供をお願いした。知り合いのお寺に声をかけるうちに、本願寺が全国の宗派内のお寺にその声を拡散してくれた。いろんな方の力で、それなりの量のお米が集まるようになった。この一年は、コロナ禍でどこのお寺も人が集まりにくくなったので、「これまでのようにお米を提供できない」という声を聞くようになった。どうしようと思っていたら、私が直接知らない人までもが「お米が余っていたら、専光寺に送ってやってくれ」と声をかけてくれた。何十キロも送ってくれる人もあれば、数キロを送ってくれる人もある。量の多少は問題ではない。いろんな人が無理をしない量のお米をくださるのがとっても嬉しい。

お米の他にも、不要になった固形石鹸や髭剃りもお願いしている。固形石鹸は、路上生活者には必須アイテムである。固形石鹸は身体も衣類も洗うことができる。その上、持ち運びに便利な物である。この一年余り

の間、旅行に出かける人がほとんどいなくなった。お土産だといって、宿で使わずに持ち帰った石鹸や髭剃りをいただくことがなくなった。

この読者で、お米が余っていたり、不要な固形石鹸や髭剃りがあったりする方は、専光寺に送っていただきたい。応じていただける方は、まずメールでご連絡をください。
(senkoji@leaf.ocn.ne.jp)

Ⅲ

私たちは食糧支援の活動を単独でやっているのではない。「扇町公園炊き出しの会」の活動に参加している。この会は、個人として参加している人たちが中心で、団体として参加しているのは、私たちだけである。

「扇町公園炊き出しの会」は毎週月曜日の 20 時から、扇町公園の東南の角で食糧支援などをおこなっている。基本的に第 4 月曜は私たちが「いなり寿司」を配布する。第 1 週から第 3 週の月曜は、「おにぎり」を配布している。食糧支援のほかに、衣類や寒冷期には寝袋の配布をしている。他に、石鹸やひげ剃りなどの日用品の配布もしている。月に一回程度、ボランティア医師による医療相談を受けつけている。行政書士が各種の申請についての相談に応じ、調理人がキッチンカーを横付けして温かい食事を振る舞うこともある。

この会は、それぞれの人が自分にできることをする。会長に申告して、何らかの援助活動をする。書面等で入会するようなことはなく、自分のやりたいことを会長に伝えて実践する。会長は私たちが平成 25(2013)年末に参加したときに、会長として紹介された。私はこの会長がどうやって決まったかも知らないし、この 8 年の間に会長選出の経緯も知らないし、知りたいとも思わなかった。この人が会長であることに特に不都合を感じたこともない。

この会の始まりは昭和 55(1980)年頃と聞いている。カソリックのシスターが大阪駅前で路上生活者に「おにぎり」を配り始めたようだ。それに賛同した人たちが手伝うようになり、シスターは教会の移動で大阪を離れられた。手伝っていた人たちがその活動を引き継いで、「おにぎり」を作り続けた。手伝いの人たちの多くはキリスト教徒であり、「おにぎり」を作る場所も教会が提供してきた。平成 29(2017)年に活動の場所を、大阪駅前から 1 ㎞あまり東の扇町公園に移した。平成 30(2018)年にはキリス

ト教徒の人たちが、高齢化を理由にボランティア活動から引退した。さらに令和元(2019)年 4 月には「おにぎり」を作る場所を提供していた教会で牧師不在になったので台所を使えなくなった。私たちの専光寺は、月に 1 回「いなり寿司」を作るだけであるが、月に 3 回「おにぎり」を作るキリスト教徒とその場所がなくなるのは「扇町公園炊き出しの会」としては大きな痛手だった。会長が奔走して調理場を貸していただける所をさがしてきた。

「扇町公園炊き出しの会」の活動においても、キリスト教徒の高齢化と宗教者の減少が顕著になった。これはキリスト教の衰退だけを表しているのではない。宗教そのものの衰退である。どの宗教も信者の高齢化と減少に直面している。それは経済力の減衰となり、専従の宗教者の減少となっている。宗教に無関心な人たちは、宗教に魅力がなくなったからだという。

日本でもアメリカでも宗教が社会の中で縮小している。それは、宗教を経済的に支えてきた中間層の減少によるものである。経済成長期には中間層も厚く、というより中間層が多数いることが経済成長の大きな要因でもあった。そして今、中間層の減少が宗教に大きな経済的打撃を与えている。

日本の場合、経済成長期は 20 世紀後半のことだった。第 2 次世界大戦以前は、中間層はあまり厚くなかった。19 世紀以前はもっと中間層は少なかったが、宗教はしっかり存在していた。それは、経済的強者、すなわち富める者による支えが大きかった。ノブレス・オブリージュ(noblesse oblige：高貴な者は義務をともなう、というような意)などというフランス語を持ち出さなくても、日本の社会には旦那がいた。裕福な者は、地域社会や宗教の経済的な支えをしたものだった。そういう人を旦那と呼んだ。旦那の語源は、ダーナ(dāna)というサンスクリット語･パーリ語である。「布施」とか「喜捨」という意味である。古代インドでは、富や徳を持つ者を長者と呼んだ。長者が布施(dāna)をするのである。日本では、そうした人を旦那と呼んだ。

今、旦那は少なくなり、幇間(ほうかん)ばかりが目につくようになった。

★★★★★★★★★★★★

★★★★★★★★★★★★

男は痛い！

國友万裕

第39回

『さくら』

1．スポーツ、学歴、東京

ボクシングを始めて半年が過ぎた。チケット会員なので、月に 1 回から 2 回だけのことだから、本格的にやっているわけではない。しかし、着々と上達はしている。トレーニングの時は最初に縄跳びをするのだが、連続して 127 回跳べるようになった。プロの人たちは無限にでも跳べるので自慢できる回数ではないが、最初の頃に比べれば上達している。ボクシングは 3 分と 30 秒刻みのデジタル時計に合わせて、練習をしていく。3 分間トレーニングをして 30 秒の休憩。そしてまた新たな 3 分が始まるのだ。もっとも俺の場合はただのエクササイズなので、途中大きく休憩をとりながら、やっていくことになるのだが、3 分は連続してやっていかなくてはならない。この 3 分が長く感じるのだった。しかし、多少はしんどい思いをしなければ成果は出ない。着々とステップは覚えてきて、どうにか練習についていけるようになった。インストラクターの若いお兄さんが、「先生、男前ですよ」と言いながら写真を撮ってくれた。彼が SNS にアップした写真を見ると確かによく撮れている。男前ではないが、アラ環のおじさんの割には精悍で、悪くない。

思えば、21 歳の頃から、水泳教室は 20 年くらい通って、泳ぎは普通の人よりもできる。若い頃は一眼見ただけで運動神経が鈍そうに見られたのだが、今はそうでもない。むしろ、ラグビーとか柔道ができそうな人に見られる。しかし、悲しいことに俺のスポーツコンプレックスはなかなか抜けない。若い時代に毎日刷り込まれた呪われたメッセージは、おそらく死ぬまで消えはしないのだ。

今の若い子達は、中学高校でクラブにいることを奨励されるらしく、運動部に入っている男子が多い。野球とサッカーが双璧みたいだ。うちの従妹の息子は高校でバレーボールをやっていたのだが、その彼が高校を 2 年間で辞めて通信制の高校に移ることを、先日母から知らされた。「あなたと

同じ道を歩むことになるのよ」と電話で母に言われ、やはり不登校になるのは血筋なのか、こんな血を継いだ自分を恨むなあーと思ったものだった。俺の母方の家系は繊細系が多いので、なかなか社会に適応できないのだ。しかも適応できないのは男子ばかり、男に生まれたことも貧乏くじである。

一方で、女性たちは強かに生きている。埼玉に住む従弟の娘もこの春から高校 3 年生なのだが、彼女は優等生で姉御肌。通っている高校も予備校のような進学校。それこそ最高峰のランクの大学に入ろうとしているらしい。来年の春には、早稲田に受かった、東工大に受かったと言っている姿が目に浮かぶ。その時に嫉妬に囚われないように今から心の準備を固めなくてはならない。俺だって女に生まれていたら、一生懸命勉強して最高ランクの大学に入ることはできたのかもしれない。しかし、俺は男であるが故にそれができなかった。男であるが故に傷ついて、勉強に熱中することができなかったのだ。これは言い訳にしか聞こえないだろうが、高校に行かなかった俺が、早稲田や東工大に入ることは至難の業なのだ。

「スポーツ」「学歴」「東京」、これが俺がこだわってきたことだった。俺の親父はある私立大学を 8 年かけて卒業している。なぜ、8 年かかったかというと親父はどうしても国立大学に行きたくて、何年も仮面浪人していたのだ。しかし、結局は受からずじまい。そして、その挫折感を一生消化できないまま亡くなった人だった。この親父から、俺は「学歴」へのこだわりという遺産を受け継いだ。俺の場合は国立大学というのではなく、東京の最高峰の私立大学という夢を子供の頃は描いていた。しかし、学校に適応できず、毎日憂鬱な気持ちで過ごしていた俺は、不登校になり、大学どころではなくなった。1 年、予備校に通ったがそれでは挽回できないハンデを背負ってしまったのだった。

世間の人は人の事情には鈍感だ。だから、高校生が一生懸命受験勉強するのは当たり前と思っているので、さまざまな事情があって勉強できなかったと言ってもわかってくれない。それは言い訳、みんな条件は一緒だと決めつけてしまっている。

とは言っても、それは昔の話だ。従弟妹の子供たちと俺とでは 40 歳も違っている。俺より 40 も年上の人となったら大正生まれだ。その時代に生まれた人と夢や価値観を分かち合うことは俺だってできなかったはずだ。時代が違っていることは歴然としていて、今の若い子と学歴のことを比較する俺が間違っている。

昔と今とでは不登校もわけが違っている。従妹の息子は先生たちからいっぱいサポートもしてもらい、理解してもらったものの、どうしても出席不足で単位をもらえない授業が 2 つほどあって、それで通信に移る。それまで取った単位は通信で認定してくれるので 1 年あれば卒業できるとのことだから結果的には変わらない。従妹の息子が学校を辞めることが決まった後、友達が泊まりに来たり、みんなで送別会をしてくれたりと決して昔みたいに白眼視されるような不登校ではない。彼は高校を辞めた後、寿司屋でバイトを始め、そのお金で大学に行くと言っているらしい。従って、ただ単に学校が嫌いというだけのことで、引きこもりというほどでもないのだった。

従妹はシングルマザーで、彼女の父親はとっくに亡くなり、母親もボケて入院中。頼る術がないので、何かあるとうちの母に頼ってくる、それが憂鬱だった。しかし、母は、「誰でも面倒見ておけば、いつか自分も面倒を見てもらえるのよ。あなたも貰い子でももてるようになればいいわね」と考えている。母は人の世話ばかりで生きてきたような人だが、考えてみると母は頼られるのが好きなのだろう。

俺が養子をもらう？？？　伊藤公雄さんの説では、「父になること」が男たちの悩みの解決策とのことである。実際の父でなくても、誰かの父がわりになることが、俺のトラウマを癒してくれるのだろうか。

確かに俺は父と息子の関係に憧れる。俺がアメリカ映画が好きなのはそれも一つの理由だ。アメ

リカ映画では、父親、もしくは父親的人物と若い男性の物語は枚挙にいとまがない。『セント・オブ・ウーマン』『ハスラー２』『フェイク』『モリー先生との火曜日』・・・これだけそういう話が出るのは、父息子の関係に憧れる男性がそれだけ多いからなのだろう。若い頃の俺は、当然のことながら、息子役の方に感情移入をして映画を見ていたものだった。しかし、考えてみるとこの頃は父親を憧憬することはない、年齢的に息子の方を憧憬する歳になってしまっている。

俺も、誰かに息子代わりになってもらうのがいいかもしれない。元教え子に野球ができる子がいるので、「今度、キャッチボールを教えてくれ」と話した。「了解です」と彼。しかし、その後、「野球ができんくらいがコンプレックスなんですか（笑)」とも言われた。子供の頃から難なくスポーツができた彼からしてみれば、それくらいのことをコンプレックスと思わなくてもと思っているのだろう。

人間千差万別、悩みは違っている、受け取る感受性も違っている、生きる時代や環境も違っている。人の悩みを公正に判断することなんて、誰にできるだろうか。

彼は礼儀正しい好青年で、偏見もなく、清潔感のあるいい子だ。彼とキャッチボールができるようになればスポーツコンプレックスがひとつ解消する上に、息子とキャッチボールをしているという理想的な構図が生まれる。その写真をインスタに出せば、親子と思ってくれる人もいるかもしれないのだ（笑)。

2. 天の父と繋がること

この春から教会にも通い始めた。プロテスタントの牧師さんとは 3 年ほど前からお付き合いしているのだが、その先生の教会は大阪である。日曜日毎に大阪まで行くのは流石にしんどい。昨年はコロナということもあって、1 年ほど礼拝にはいっていなかった。そんなおり、京都で絶好の教会が見つかったのだ。これから本格的にクリスチャンになりたいと思っていた俺には絶好のチャンスだ。

ただネックはお金だった。ネットで調べると十一の献金と書かれていて、キリスト教の信者の人は収入の１０分の１を献金するのだそうだ。それは流石に痛い！もちろん、それは強制ではない。むしりとるようなことをしたらそれこそ悪徳宗教である。牧師さんに尋ねたところ、真のクリスチャンの人はそれだけのものを信仰から得ていると感じているので、それを払うことも高いとは感じないとのことだ。それにしても痛いなあ〜しかし、京都の教会で話を聞いてみると、「そんなお金とりません」とのこと。他の牧師さんやクリスチャンの人たちにも尋ねたのだが、十一の献金をするのは特別な地位にいるような人で、普通はそんなお金は出さないのだそうだ。また教会によって開きがあるらしい。

確かに礼拝では何も献金のことは言われない。普通、日曜日の礼拝では袋が回され、そこに礼拝のためのお金を入れる。これはほんのわずかな額で構わないのだが、今はコロナ禍なので、袋を回すことができなくなっていて、いつでも好きな時に礼拝金も振り込みで払えばいいとのことだった。俺は 5 回ほど礼拝に出席したので、1 回千円と計算して 5000 円振り込んだ。早速、その後の礼拝で、「國友さん、ありがとうございました」とお礼を言われた。

礼拝で説教をしてくださる宣教師の人の中にはまだ若い大学院生の人もいて、彼とはすぐに Facebook でつながり、何か疑問がある時は彼にメッセンジャーで質問すれば返事が来る。週に 1 回１時間だけ。しかも日曜日の午前中だけというのも嬉しい。午後だとせっかくの日曜日が 1 日潰れてしまう。時間を有効に使えるのだ。

アメリカ人が父と息子にこだわるのは、おそらくキリスト教が理由である。キリスト教の場合は、父なる神とキリストという構図なので、それがさまざまな物語の原型になっている。アメリカに行

ったときにつくづく思ったものだ。アメリカは広い。これだけ空が広ければ、当然、空にいる神を身近に感じながら生活することになるのである。

3．女性嫌いは克服できるのか？

先日、ボクシングジムで、バーベキューパーティが行われ、他の会員の人たちとも交わる機会があった。昔だったら、こういう体育系の男性が圧倒的な席は苦手だった。しかし、今は同年代のおじさんとも若い男の練習生とも自然な形で交われる。「俺も男になったなあ」と思って、嬉しくなったものだ。

毎週家に来てくれるマッサージの人からは、ビンタ動画を撮りましょうよと言われた。軽く冗談でするのかと思い、顔を向けたら、バシっと目一杯のビンタが飛んできた。顔が赤くなった。俺がビンタされるところを彼がもう一方の手で録画していたのだが、音までバッチリ入っている。俺が「いてぇー」とのけぞるところまでバッチリ動画に収まった。それをインスタにあげたのだが、これが意外に好評で普段はいいね！をくれないような人からいいね！が来た。

そんなわけで、この頃自分の中の男がウズウズしている。これからは男の攻撃性を強めよう。俺は自分の中に男の本質が存在していることは自覚している。俺は男か女かわからないと言われるが、同一性障害ではないのだ。ただ、話が女の子の話に及ぶと居心地が悪い。俺は女性恐怖なので、その部分で他の男たちと経験を共有できないからなのである。

俺は何人ものカウンセラーについてきて、自分の女性恐怖の原因が生育と深く関わっているということはわかっている。俺は子供の頃、周りに同年代の男の子がいなかった。弟は歳が１０くらいはなれていたので遊び相手にはならなかった。学校でもスポーツができなかったため男の子のグループに入れない日々が続いた。そのことで俺は男のアイデンティティを築くことに失敗してしまったのだ。父は悪人ではなかったが、母に頼りっきりの人だった。育ったのは九州の地方都市でもろ男尊女卑。しかし、何度も言うように男尊女卑はむしろ男子にプレッシャーをかけるための装置であることを俺は感じ取っていた。俺は男に同一化したいという気持ちはあったものの、同一化できるタイプの男性が周りに存在せず、さらに男に同一化してしまったら、女性の術中にはめられるという抵抗もあって、ずっともがいて、15 歳で心が壊れたのだった。

最近、吉永小百合が若い頃に主演した『草を刈る娘』（西川克己監督・1961）という映画を見た。石坂洋次郎の原作ものである。ここでまだ生娘のヒロインがおばあさんに尋ねる。「男と女ってどっちが強いの？」「そら、男だね、、、」とおばあさんは一旦答えた後、しばらく間をおいて、「いや、本当は女の方が強いんだよ。だけど、そのことを男に気づかせちゃいけない。男の方が強いんだと見せかけて、女はグッと男の手綱を掴むんだよ。私は男みたいな子供が産めない生き物になんて、絶対なりたいとは思わないよ」と語る。

これは東北が舞台で、九州の話ではないが、俺が少年時代に目撃した九州の女性たちは少なからずこうだった。表向きは男性優位に見せかけて、実権は女性の方が握っていたのだ。「女は損、女は弱い、女は無力、だから何もできない、だから男の人頑張って、強くなって、、、」とプレッシャーをかけ、男をコントロールする。強かで、ずる賢い女たち。男は女たちに踊らされているのだが、ほとんどの男はそのことに気づいていないのだった。

俺は、中学で女子からの壮絶ないじめを受けた。高校には行けなくなり、やっと立ち直って、前向きな気持ちで大学に入学したのに、大学で受けた女子からの白眼視と甘え。女性嫌いは悪化した。俺はもう女性恐怖症を治すのは諦めようと開き直って、その後の 10 年くらいは引きこもって過ごした。30 近くになってやっと引きこもりから這い出し始めたので、それまでのトラウマを共有したくて男性運動の場に参加した。しかし、ここでは確

執が起きた。運動に絡んでいる男性たちは、フェミニストの影響を受けているため、普通の世界以上に女性を批判するようなことは口にできない。俺は女性からトラウマを負わされているのに、それに対して愚痴をこぼすこともできない、女性を批判するようなことを口にしようものなら、「それはあなたが女性を下位のものと見做しているから、女性から些細なことをされたことが許せないのだ」と男尊女卑の女性差別主義者のレッテルを貼られてしまう。これでは余計に鬱憤が溜まってしまう。

アメリカでは MGTOW という男性運動が起きていて、すでに何冊も本が出ている。これは、Men Going Their Own Way の頭文字をとったもので、結婚や恋愛など女性との付き合いは男性にとってマイナスだから、それを避ける、他のことにエネルギーを注ぐ男性たちのことである。「おー、俺と同類項の男たちはアメリカにはいたんだ！！！」と嬉しくなったものだ。ちなみにアメリカには女性と付き合えないために女性を憎悪する過激な集団インセルも存在している。日本でも、そこまで過激ではなくても女性と付き合えない男性は刻々と増えているとは言われている。俺は異常ではないのだ。

俺は漬物が食べられない。ただ、食べられないというだけではなく、近くに置かれるのも嫌なくらいに嫌いだ。子供の頃からなのだが、小学校の 6 年の時、家庭科の調理の時間に無理に食べようとして吐きかけたことがあった。それ以来、もう絶対に食べないし、食べる努力もしなくなってしまったのだ。

女性の場合もそうだ。俺は何度も女性から痛い目に遭わされ、トラウマを負わされている。それでいつの間にか女性と友人として付き合うのも嫌になっていき、女＝敵、女＝精気を吸い取る魔女という固定観念が頭にこびり付いてしまったのだった。そういう女ばかりではないことがわかっていても、人間ってそんなものなのではないか。

俺の周りには胸を取りたいという女性は何人もいる。それは恐らく、彼女たちの子供の頃のトラウマが原因しているのだろうと思う。おそらく女であることを憎んだような経験を彼女たちはしているはずだ。しかし、そのトラウマを治す治療法があるのだろうか。もちろん、カウンセリングを長年受けて、ほぐしていけば、いつか女性であることを受け入れられる日が来るのかもしれないが、そのためには莫大な時間とお金がかかる。必ず治るという保証もない。俺の女性嫌いもそうなのだ。治す方法がないからそのままの状態になってしまっている。

しかも、運命は皮肉だ。俺は、漬物が嫌いなのに京都に来てしまったが、女性が嫌いなのに英文科を選んでしまった。大学に入るまでは、先の先まで深くは考えなかったのだった。そのことが見事に裏目に出たのだった。なぜ、こんな運命を生きることになったのか・・・。これが俺の宿命、俺が神様から与えられた人生の宿題なのだろう。

これまで書いてきたことは何回もこの連載で訴えてきたことだが、俺はあえてそのことを繰り返し言うべきだと思っている。中島みゆきの歌と一緒だ。彼女の歌は全てテーマはワンパターン、夢は叶わない、男は自分を愛してくれない、心の傷は癒せない、それを歌い続けて 50 年近く人気をはくしている。俺は彼女のような伝説的なスターにはなれないが、しかし、長く繰り返し、同じテーマを語っていれば、きっと気づいてくれる人はいるはずなのだ。

もちろん、承認される日は遠いだろう。3 冊目の単著が出てからちょうど 1 ヶ月経ったが、まだ何も反響はない。今回は授業で使うためのテキストとして書いたので、一般向けではないし、ポリプロピレン加工で、横書きである。全て、省エネのための手段だ。これでどうにか俺の思いをわかってくれる人がいればいいのだけれど、おそらくほとんど誰も読まないだろう。

しかし、あえて、もう一度前向きになろう。♪ビリーブアゲイン、無くすものさえない今が、強くなるチャンスねー♪と昔、浅香唯が歌っていた。自分の全てを分析し尽くして万策尽きた今が自分

を変えるチャンスだ。

重大決心として、これからは規範から入ろうと思っている。これまでの俺は規範を全て脱構築したかった。しかし、それだと男になれない、女性との付き合いもできない。ジェンダーやセクシュアリティを脱構築してしまったら、おそらく全ての人は男でも女でもなく、同性愛でも異性愛でもなくなってしまうだろう。性は結局つくられるものなのだ。

これまで脱構築して何十年も生きてきたから、これからは構築して生きていこう。規範に沿って生きていこう。そうすれば、意外に新しい世界が見えてくるかもしれないのだ。幸い、春休みに受けたミニドッグの結果は悪くなかった。鍼灸の先生からも「國友さんの場合は、神経の昂りが問題なんです。体はそぜていないからまだバリバリに働けます」と言ってもらえた。鼠径ヘルニアも心なしかましになってきている。

まだまだ人生は長い。まだ人生があるうちに女性恐怖症にも何らかの解答を出すことはできるかもしれないのだ。

4.『さくら』(矢崎仁司監督・2020)

『さくら』という映画を見た。

これ、今人気絶頂の吉沢亮と北村匠海が兄弟役を演じている。二人とも俺の基準で見ればたいしてイケメンだとは思わない。「俺は、真剣佑はイケメンだと思うんだけど」と学生に話したら、「先生は男らしい顔の人をイケメンだと思っているんですよ。この頃は中性的な、男か女かわからないような顔の人が受けるんですよ（笑)」と言われた。

なるほど、確かにこの頃の俳優さんは昔みたいに男らしく、目的に挑むという顔はしていない。むしろ、ぼーっとしたような顔で写っている。世の中、先行き不透明だし、目的に向かってアグレッシブに生きるなんてことはできないのだ。ものの 30 年前は「24 時間、戦えますか」という CM が流れていたが、今はそんな CM 流したら、過労死が出るとクレームが来るだろう。

（ここからはネタバレ注意！！！）

この映画は大阪の住む家族を描いている。お父さん役が永瀬正敏、お母さん役が寺島しのぶ、妹役が小松菜奈。家族の中は良くて、理想的な郊外族の家族だ。そこで、吉沢が演じる兄はスポーツマンでイケメンのモテ男なのだが、ある日事故に遭って車椅子の生活となり、顔も半分が崩れてお岩さんのような顔になってしまう。家族からは変わらぬ愛を注いでもらえるのだが、人生に希望をなくした吉沢は自殺してしまう。

この部分はとても意味深だと思ったものだった。

体が不随になることは、昔から去勢のメタファーとされている。これから男としてやっていかれないという絶望のメタファーだろう。しかし、車椅子の人は世の中に大勢いるし、これだけだったら自殺とまではいかないような気もしなくはない。むしろ、イケメンの顔が崩れたことが自殺の引き金と言えるのではないか。

それまで女性からうっとりされるような綺麗な顔の男が突然目を背けられるくらいの顔になってしまうことは大きなショックであるに違いない。昔は、顔が崩れてショックを受けるのは女性だったけど、今は男だって顔は大事なのだ。観客の方も、吉沢のイケメン顔が崩れるところはこの映画で最もショッキングな部分である。

この映画、北村と吉沢が二人で自宅のお風呂で背中を流し合う場面も出てきて、BL みたいな雰囲気も漂っている。今は男も綺麗でなくてはならないのだ！

『さくら』では、北村扮する弟は、兄の死の後東京の大学に進むことになる。大阪の人は、普通は京阪神の大学に通う人が多いのだが、この映画では東京へ行くことが彼の新たな旅立ちになる。大勢の人がいるところで「一人ぼっちになりたい」というのが彼の希望である。大阪であってもたくさん人がいるのだが、東京はまた別のイメージがある。

『さくら』では登場人物たちが大阪弁を使う。

例えば、『僕は明日、昨日の君とデートする』は京都を舞台にしているにも関わらず、誰一人関西弁を喋らないのだが、この映画の場合は、あくまでも地方という空気を出すために関西弁を使っているように思える。東京弁は標準語だけど、大阪弁は関西に住んでいる人でないと話さないだろう。東京とは対照的に大阪は地方であることを物語る部分だ。

『ここは退屈迎えにきて』(廣木隆一監督・2018)は、地方都市（富山）を舞台にかつては東京で暮らしたこともあるけれど、地方に戻ってきた若者が、悶々と生きていく姿を描いている。この映画が強調するのは東京と地方の断絶である。『あのこは貴族』（岨手由貴子監督・2021）を見ると、東京は広い、貴族のような上流の人がいることに驚かされる。

俺だって、20 年ほど前、真剣に東京に行くことを考えたものだった。あの頃は生活が本当に苦しかったし、男性運動グループとも決裂した直後でトラウマ状態だったので、過去を全て精算して、東京でやり直したいと本気で思った。東京は、東京で暮らしているだけで東京という街を共有しているような気持ちになれる。故郷を捨てた人たちが、東京に集う。東京は様々なバックグラウンドの人を飲み込む街なのだ。俺は東京に行くたびにその思いを新たにして、今でもワクワクするのだった。

しかし、俺が今更、東京にうつるということはありえない。東京は今でも憧れるが、もう俺はかれこれ 38 年も京都で暮らしているので、京都に根が張ってしまっていて、仕事も人間関係も全て京都に固まってしまっている。俺が一番長く暮らした街は京都、正確には京都の中京区ということになるのだ。

校條剛さんの『にわか京都人宣言』という本を読んだ。これは東京で暮らしていた筆者が、京都の大学で仕事することになり、単身赴任となった際の京都観を語るエッセイである。

京都暮らしの長い俺にはこの本に書いてあることは本当によくわかる。「京都は街が狭い」「京都は共産党支持が強い」「タクシーや自転車がものすごいスピードで走る」「京都はレトロな飲食店が多いが、それほど美味しいわけでもない、レトロな雰囲気を味わうためのものだ」、なるほど当たっている。

ただクエスチョンマークだったのは、京都は、地方出身者で故郷に帰りたくない人がいつく、東京と似た一面を持っているという考察だった。うーん、俺はまさにそういうタイプだが、全体から見れば、京都にいつく地方人は少ないようにも思える。東京は 3 年も暮らせば東京人だろうが、京都は一代で京都人になるのは無理だと言われる。京都人にとっては先の戦争は応仁の乱なのだ。そもそも京都は就職先は少ないので、学生たちは卒業すると東京や大阪、名古屋などに散っていくように思うのだが、これは俺の偏見なのだろうか。

ただ、校條剛さんの場合は芸大である。京都は文化的な街なので、芸大系の学生だったら京都にいつくのかもしれない。あるいは大学に入る目的できた人ではなく、他の事情で流れ着いてきた人は京都にいつくのかもしれないのだ。京都はインテリ貧乏みたいな人が結構いるので、我が道を行く社会不適応者には住みやすい場所なのだろう。その意味では、俺にぴったりの街だ（笑）。

俺はこれからも京都で暮らすことになるだろう。かつては大阪の大学にも教えに行っていたが、今は全て京都の大学の仕事ばかりになった。大学や家の近所の飲食店の人たちとはすっかり顔馴染みだ。電気屋さんとは 30 年の付き合い。かつて通っていた水泳教室にはしばらく通っていないが、今でも古顔の先生は俺のことを覚えているだろう。通っている教会、心療内科、ボクシングジム、会員となっているミニシアター。何もかも京都だ。

東京を求めていた俺が、40 年近くたって京都に自分のアイデンティティを見つけようとしている。思えば、長い道のりだった。人生は短いようで長く、長いようで短い。「学歴」「スポーツ」「東京」に囚われてきた俺の人生は、当初の理想のままに

は行かなかったけど、どうにか形を変容させて、それと近いラインに届きつつあるのかもしれないのだった。今、俺の人生は起承転結の転の後半まで来ている。あとはエンディングをどう描くかである。

役場の対人援助論

（３７）

岡崎　正明

（広島市）

支援する側とされる側のあいだ

だからというんじゃないけれど･･･

採用面接で聞かれる定番といえば志望動機。
「どうして公務員に？」
「なぜ福祉職を目指したのですか？」

もちろん受ける側もその辺は心得ているので準備している。
ただ、もちろん嘘をつくわけではないだろうが、そこで答える建前的なことがすべてじゃなかったりするものだろう。

年齢を重ねて後輩や部下のような人と仕事をすることが増えたが、私はつい「どうして福祉の仕事をしようと？」と聞いてしまうタチだ。そんなことを聞かれたら私自身も正面切って堂々と答えにくかったりするくせに、である（迷惑！）。

別に素晴らしい動機や高尚な話を聞きたいわけではなく、相手がどんな思いで、どういう姿勢でこの仕事に向き合うつもりなのか。何に興味があり、どこを目指しているのかを単純に知りたいだけなのだが。だから別に「人と話すの好きだし、市役所なら転勤ないと思って…」「民間にいたけどやはり安定したところがいいかと…」でも全然納得。「なるほど。たしかにそうだよね」となる。

大抵の人は「そうですねえ…」と、戸惑いや迷いを含みつつ話してくれるが、たまに「人助けがしたくて！ボランティア活動が好きだったんです！！」と真っすぐな目で話してくれる人には、ちょっと気後れして目を逸らしてしまう（私なんか当時交際してた彼女のマネしてこの世界に入りました。ごめんなさい）。

「なぜ福祉を？対人援助を？」
自問自答すると、紆余曲折、いきおいや巡り合わせ、打算的なものから信念や興味、自分なりの理想的なものまで、かなりの振れ幅でいろんな要素が出てくる。
だからひと言で「私はコレで！福祉を目指しました！」（禁煙グッズの CM がよぎった人は昭和確定）などと言い切るのは簡単ではない。きっと誰もが多かれ少なかれ、そんな感じではなかろうか。

ただそうはいっても、決定的なファクターというものはそれぞれに存在するだろう。
私で言えば、生まれつき身体に障がいがあり、支援される側として生きてきた部分があるという部分が、今の職業選択に大きな影響を与えていることは間違いない。
若いときにはその反動で一定の距離を置いていた頃もあった。しかし就職活動に挫折し、大学での勉強もまったくしておらず（お父さんお母さんごめんなさい）、一般企業で夢や利潤を追求するということにもなぜだかピンとこなかった私が、改めて己が社会で生きていく上でのやりがいとか意味とかを考えたとき、結局残っていたのは最大のコンプレックスであった「障がい者という立場で生きてきたこと、見てきた視点」だった（もちろん彼女の影響もありましたけど（笑））。

それから数年して児童相談所勤務となったとき、母から「あなたが３歳頃、そこの療育施設に通っていたのよ。覚えてない？」と言われ、なんだか不思議な感覚になった。そういえばどことなく懐かしいような、古臭いけど落ち着くような…。それが気のせいなのか、それとも遠い記憶の断片なのかは、今も分からない。
およそ 20 年前、この建物の肢体不自由児通所施設に通う男児が、いずれここで曲がりなりにも支援者として働くことになるなんて―。当時の誰が予想できただろう。

そんな風に考えると、家族療法や家族支援がライフワークのようになったのも、無意識だったが私の原家族がステップファミリーであることと、どこかでつながっているのかもしれない。

かいつまんで書くと私の父は再婚で、幼い連れ子 2 人がいた（私の兄と姉）。母は初婚だったから、当時母の両親からかなり反対されたらしい。しかしそれを振り切って父母は結婚し、母はいきなり２児の母親となった。そして夫婦で借金して小さな飲食店をはじめ、数年後に生まれたのが障害のある末っ子の私。んー、なかなかハイリスク（笑）

そんな我が家だが、私はそのことを 20 歳くらいまでほとんど意識することなく育った。まあ私にとってはみんな血縁者だし、一番幼くて事情に疎かったのもあるのかもしれないが、うちはいたってフツーの家庭だった（と思う）。
年の離れた末っ子の私は、兄姉の奪い合いになるほど可愛がられた（数年限定）し、物心ついてからは喧嘩もよくした（とくに姉とはプリンの取り合いなど、食い物のことで）。クリスマスやお正月、運動会などにまつわる家族の思い出も、ソコソコ持ち合わせている。裕福ではなかったが、貧乏というほどでもない、いわゆる日本の中間層というヤツだ。家族に愛され、順調にぬくぬくと育ったように思う。
もちろんそんなフツーの生活が成り立つためには、父母の見えない努力や苦労がたくさんあったであろうということは、今なら少しは想像できるが。

そんな背景が関係しているのか、してないのか不明だが、私はケースでステップファミリーに関わるとき、リスクばかりでなく強みやマシについて、世の中にあるステレオタイプからわりと自由になって見つけられる気がしている。合っているかどうかはともかく、身近な経験に重ねてリアルにイメージできるのかもしれない。

進化論じゃないけれど

以前職場に実習生が来た際、その子がちょっとしたパニック発作のようになったことがあった。聞けば不登校や鬱の経験がある子で、自らの経験がきっかけで支援職を目指したとのことだった。現場にいるとそういう事例に時々出会うが、支援者の中にはそうした動機での職業選択に懐疑的な見方をする人も一定数いたりする。

確かに自分の中の課題があまりにも未処理なままで支援職を目指すことは、ときに治りきっていないカサブタを剝がしてしまうような経験になる。そこに向き合い、継続的に関わるには、それなりの覚悟や準備も必要だろう。

だが完璧に治りきってない状態でないとダメというのも、それはそれで厳しすぎるというか、生き物を知らない考えのように思えてしまう。

最近仕事で、こどもぴあの方々と関わりを持たせてもらった。こどもぴあとは、精神障害や疾患を抱えた親に養育された経験を持つ、子どもの立場のピアグループである。東京や大阪、福岡や沖縄などにグループが作られ、徐々に広がりを見せている活動だ。

今注目されているヤングケアラーだったり、虐待環境のサバイバーだったりする方々であり、複雑で厳しい環境の中で生き抜いた彼ら・彼女らの語りは、とても重みがあるとともに、人のレジリエンスやエンパワメントの可能性を感じさせてくれる。

対人援助に関わる者、特に子どもやその家族の支援に関わる人には、ぜひ一度耳を傾けてもらいたい語りである。その話には、普段私たちが関わっている子どもや親らの、言葉にできずにいる想いが表現されているように感じられてならない。

そのこどもぴあの方々の中には、看護師やソーシャルワーカー・介護職など、支援に携わる方が結構な割合でいたりする。職業選択の動機を聞くと「親の病気を理解したかったから」「医療や福祉が生活の身近にあって」といった答えが返ってきた。

２世タレントや世襲政治家が時に批判的に語られるが、ある意味それは自然なことなのかもしれないなあと、このとき思った。

動物が環境に適応していく進化論じゃないが、我々人間も生き物として環境の影響を受けずには生きられないわけで。だから支援の受け手やその周辺にいる者が、支援に関わる存在になるというのは、考えてみれば自然な流れと言えるのだろう。

そう考えると、支援する側とされる側の境界線は、けして動かせない山のようなものではなく、案外流動的で暫定的なものに過ぎないのかもしれない、と思った。

まるで体育の時間にグラウンドに引かれた石灰の白線のように、「とりあえず今はココからココまでー」くらいのもので、私たちも今はたまたまこちら側にいるが、いつ白線の反対側にいくかも知れない―。そんな存在なのではないだろうか。

流行りだからじゃないけれど

個人的にここ最近興味を持っている「支援者当事者研究」と「オープンダイアローグ」。
この２つも、ここまでの話にリンクする気がしてて。

支援者当事者研究は、北海道浦河のべてるの家の実践から生まれた当事者研究を、支援者自らも行ってみるという試み。
精神障がい者が、おのれの病気や生きづらさを専門家に診断されたり、命名されたりするのでなく、仲間とともに自ら研究し、そのメカニズムを究明して「自分で自分を助ける」方法を創造していくという当事者研究。いわば「自分で行う自分のトリセツづくり」であり、自分でやるだけにその納得感がスゴイ！
また、仲間の応援を受けながら、自分が自分の病気研究の主任研究員になるという、超主体的かつ客観性を伴う取り組みは、これまでの「治療や支援は専門家や支援者にしてもらうもの」という概念を吹き飛ばす、画期的な手法だ。

それを支援者もマネしてやってみよう？
もはや支援の主客とか考えることが意味を持たないような。なんだかカオスな香りが漂うところが魅力的である。

この活動は少しずつだが、全国各地の支援者の中で広がりを見せている。そのことは、支援者も「応援」や「正しく理解されること」が大切であるという、これまで見落とされてきた、人として当たり前の事実に気付かせてくれる証ではないかと思う。

オープンダイアローグの方は、最近医療や福祉などの分野で大きく注目を浴びているアプローチだ。
この手法でユニークなのは、これまで支援の中で定番とされてきた、助言・指導・説得的なことを回避し、とにかく対話を継続すること。第一人者である斎藤環氏によれば「治そうとしない」ことが大事だとか（笑）ほんとこの人、大人しそうな顔して、サラッとロックなことを言うからカッコいい。

オープンダイアローグでは医師や支援者という立場を捨て、一個人というフラットな立場から相手の話に耳を傾け、興味を持って当事者の話を聴いていく。
「僕らはあなたの経験や感覚が分かりません。だから教えて欲しい！」というスタンスで、違いを違いのまま大切にし、大事な話ばかりしようとせず、とにかく自由に語ってもらう。そしてそのことへのポジティブな感想を「リフレクティング」という、当事者の前で支援者側が話し合う形をとって見てもらう。それまで支援者のふるまいとして禁忌とされてきた個人的な感想や経験談も、どんどん出していいと言う。

これまでの支援でタブーとされていた「常識」に対して、改めて「ほんとにそう？」との根本的な問いかけをするオープンダイアローグ。
私たちが培ってきた、専門家としての態度やスタンスが、実は「支援する側」と「支援される側」の分断を生み、固定化した役割を演じることにつながっていやしないか？その結果、当事者の回復や解決が妨げられていないか？そんなメッセージすら感じてワクワクするとともに、やはりあちら側とこちら側に大した差はないんだな～と。

そんなことを考えていたら、高齢者支援をしていた頃に関わってた精神疾患のおじいさんのことを思い出した。

妄想で「兄貴がヘリコプターから俺を見張っている」と思い込んで、変装して買物に出るような人だったが、とてもやさしい人で、いつも私の体を気遣ってくれた。訪問しようとすると「あんたに来てもらうなんて申し訳ない！」と、全力で止めて自分が訪ねてくるし（笑）

結局家賃滞納とかで地域生活が難しくなり、親戚からの相談もあって施設入所をお手伝いしたが、あの人にとって、私は「支援してくれる人」に見えていたかどうか？

まあ物事の解決には、そんなことどっちでもいいのかも知れない。

臨床のきれはし

Sheet13

浅田 英輔

Top & Bottom

コロナ禍が長く続いている。コロナのイヤなところは重症化して入院した場合、命を落とさない場合でも治療が長くかかるところだ。そのため、病院のベッドにいる期間が長くなり、さらに新しい患者が増えるとすぐにベッドがいっぱいになってしまう。ワクチンがいきわたることが望まれるが、新規感染者が激減したとしても、病院のつらさはそのあと続くことと思われる。ほんとにいやらしい感染症であるなあ。とにかく早期収束を望む。密な居酒屋で、ツバ飛ばしながらくだらない話をして生ビール飲みたい！

さて、コロナ対策もそうだが物事を広くみんなで実行するには、「こうしよう！」ということを決めなければならない。その決まり方には、大きくわけるとトップダウンとボトムアップがある。

トップダウンとは、上からの指示で下々にいきわたらせること。小さな会社であれば、社長が「これやるぞ！」といえば、すぐ実行できるだろう。組織が大きくなれば隅々までいきわたるのに時間はかかるが、上層部の実行力や信頼感があるところなどは一気に浸透する。「あの社長がいうのだから、一緒に取り組もう」となるわけだ。法律なんかは、国会とかエライ人が決め、「公布」されると、その日からかわる。しかし、今の政府のように、上層部に対する信頼感などが全くない場合は、トップダウンで決まったものにしぶしぶ従わざるを得ないものの、不平不満が多く出てくることになる。

ボトムアップ（ボトム＝Bottom＝底、下）とは、下々の者の発案がもとになって、全体の制度などが変わること。「現場でやっていることがとてもよいので、みんなでそうしよう」と決めたりする場合がボトムアップである。明確に決めなくとも、なんとなくそうなっていくという場合もある。今はテレビやネットで広まる場合もあるからよりボトムアップは起きやすいのかもしれない。少し前に「保育園おちた日本しね」というツイートをしたことが反響を呼び、政府が待機児童解消に大きく（そんなでもないかも）

動いたということがあった。これはボトムアップといえるだろう。ツイートひとつで国が動く世の中である。

日本の制度は、基本的にトップダウンで決められる。ある程度一般人の意見は聞くシステムはあるものの、国会議員や国の役人やらが決めなければ制度にならない。そのため、「トップがその意識を持たなければ変わらない」というデメリットがある。残業をなくして成功している企業の例がたくさん上がっているけれど、社長が「残業ゼロにしよう！」という意識がなく、むしろ「残業する人こそが仕事している人だ」という意識のままであれば、その会社は残業奨励から抜け出せないだろう。行政機関などが時々やっているトップセミナー（自治体の首長などを対象に開催される）は、「〇〇の大切さについて、まずは首長に理解してもらおう」という目的のもと開催されている。県行政も、当然、知事の了解が得られなければ進まないことはたくさんある。物事をスムーズに進めるには、トップに理解してもらうのがとても大事なのである。

ただ、日本の社会は、トップダウンな面が強いような気がしている。国などが取り組まなければならないものはたくさんあるものの、「国がやらないから進まない」わけではないものも結構たくさんある。

例えば、学校の校則改正。検索してみたところ、おかしな校則があるものだ。

・ヘアゴムは黒のみ
・靴下は白のみ
・長ズボン禁止（南のほう）
・下着は白のみ
などの服装のことから
・部活中の水飲み禁止
・シャーペン禁止

今思うと、ふざけてるのかなと思えるレベルである。さっさと変えればいいのに。

こういった校則について、文部科学大臣が「全小中高の校則を見直せ」と号令をかけるのは確かにはやい。今の校則に疑問を持っていない校長センセも、見直しに取り組まなければならない。ただ、そうすると今度は「見直しのひな型を示せ」だとか「これは変えていいのか、こう変えていいのか」みたいな問い合わせがたくさんくることになるだろう。さらに、「市町村教育委員会の判断に任せます」などというと、「無責任だ」とか「そういわれても困る」などといった声も上がることだろう。トップダウンの問題点のひとつに、下々の者が自分のアタマで考えなくなるということがある。「上が決めるのだから、我々は従います。ただし、細かいところまで決めてください。」ということになる。正確にいうと、トップダウンの問題点というより、トップダウンありきの社会だということが問題であり、ボトムアップで物事を変えられるものだということを考えられなくなっている状態だといえる。

校則をなくしてうまくいっている学校の話などはたくさん出ているのに、自分のところの校則は変えようとしない。小学校ならまだしも、中高生が「自分たちで変えてみよう」と思えない。校則自体よりも、生徒たちが「自分で変えることができると考えられないこと」が問題なのではないか。

そもそも校則とは「児童生徒が安全安心に学校生活を送るための最低限のルール」というものだろう。それをベースにしっか

り考えて議論すると、それなりによさそうな項目が上がってきそうなものである。「校則を見直せ」というトップの指示のもと、先生や生徒それぞれがアタマを使ってよりよい形を作っていくことが望ましいトップダウンである。

日本はこれまで、「お国」がすべて決めてきた。全国一律のルールを作り、都会の人も田舎の人も同じルールのもと暮らしていくことが普通であった。そもそも戦前は知事も国家公務員であり、中央から派遣されていたくらいだ。その後に公選制が導入され、地方自治が進められてきたという歴史がある。平成５年からは地方分権改革が始まり、国の事務が都道府県に、都道府県の事務が市町村にと権限委譲されてきた。これは今も進んでおり、例えば３歳児健診は１５年くらい前まで児童相談所もかかわっていたが、今はほぼすべて市町村が行っている。介護保険は国がルールを決め、要介護認定された人にサービスを提供しているが、要支援と認定された人に対する総合事業というサービスは、市町村が（ある程度だが）自分たちで考えて実施していいことになっている。一応、国→都道府県→市町村と権限が下りてきているのだ。なのに、うまくいかない。これまでの「お国が決めてきた」歴史の中で、我々は自分で考えるのがへたくそになっているのではないだろうか。

最近目にしたものは、公認心理師のいわゆる医師の指示問題である。これについては、文科省、厚労省の連名で「うまくやってね」という指示（平成 30 年１月３１日付 29 文科初第 1391 号・障発 0131 第３号）が出た。「公認心理師の専門性や自律性を損なうことのないようにすることで」や「従前より行われている心理に関する支援の在り方を大きく変えることを想定したものではない」とあるし、「指示を文書で提供してもらうよう依頼することが望ましい」と書いてある。

「原則的には今までどおり仕事してくれていいよ。主治医の有無を確認して、必要な場合はちゃんと連携してね」と読むことができる。

でも、一般的な公認心理師の反応は「細かいやり方までちゃんと決めてくれればいいのに」といったものも多い。臨床心理士として外部機関にいる主治医とやりとりして支援してきた人にとって、医師と連携するのは至極当たり前の感覚なのだが、そうではない人にとっては、余計な手間を増やすのなら手順を決めろということなのかもしれない。これを一律に「指示箋を出してもらうこと」などとすると、クライエントにも主治医にも結構な負担になるだろう。「主治医がいることがわかったら、指示箋をもらってこないとカウンセリングしない」というところもあると聞く。

こここそ、公認心理師のウデの見せ所というか、多職種連携という言葉の出番である。むしろ一律な対応をされてはだめなのではないだろうか。クライエントに医師との連携の大切さを伝え、医師と連絡を取り合い、協力関係のもとクライエントの問題に取り組んでいかなければならない。

これはただの訴訟対策ではないのだ。よりよく役立つための手順なのである。面倒かもしれないが、そこに思考のリソースを使わなければならないのである。

医師の指示問題

公認心理師法第 42 条第２項

「心理に関する支援を要する者に当該支援に係る主治の医師があるときは、その指示を受けなければならない」

この条項については、心理職の国家資格化の長い歴史の中でずっと議論されてきたものである。心理はいわゆる「医療職」に分類されないが、病院のシステムの中にいることも多く、病院勤務でなくとも医療機関とかかわる機会は多い。病院職員であれば、医師の指示のもとにクライエントにかかわるのは当たり前だが、病院外の心理職も医師の指示に従わなければならないのか？そもそもカウンセリングは医療行為なのか否か？といったことが繰り返し議論されてきた。

この文面が入ることに強い抵抗を示した臨床心理士も多いと聞いている。

今回言いたいのは、「トップダウンはだめ、ボトムアップがいい」ということではない。大枠はトップが決め、細部は現場で判断する、という形は望ましいもののひとつと考える。現場でよい方法ができてきたら、それをトップが取り上げ、皆にいきわたらせるというのもよいと思う。

校則と公認心理師の医師の指示問題を例に挙げたが、我々はもっと「自分たちが変えていける力を持っている」「自分の行動を決める判断は、自分ができる」ということを大事にしなければならない。自分の行動を決める手順に対して頭を使っていかなければならない。

ワクチン接種等に対する一連の今の報道をみていると、「高齢者を優先しろ」「医療者になぜいきわたってないんだ」「市町村職員が打つのはどうなのか？」など、なんに対しても文句を言っているようにみえる。後から文句をつけるのは簡単だが、今の目的はなんなのか？というところである。「ワクチンをできるだけ多くの人にいきわたらせること」が目的ならば、あなた方がしていることは目的に反するのではないか？それは自分で考えていこうよ、という提案である。

もっと、自分の意見は自分で決めていこう。自分が変えられること、自分が決めていいことは、結構たくさんある。

発達検査と対人援助学

④ 駆け出し小児科心理士

大谷　多加志

4 月に所属が変わりましたが、最近は本務以外も色々と移ろっていて、昨年度からは大阪府下の小児科で非常勤心理士としても働くようになりました。地域にある個人クリニックですから、風邪をひいたり、熱を出したりした子どもとその家族が訪れます。そんな個人クリニックに時々お邪魔させて頂いて、子どもの心理面に関する相談を受けています。訪れるのは生後半年に満たない乳児さんから中学生で、そのご家族のご相談も含まれるので、対象者は幅広く、ご相談の内容も、発達のご心配から、不安、チック、抜毛症、不登校、親子関係など、とても多様です。心理士として仕事をし始めてからは 20 年弱ですが、小児科では駆け出し心理士として、学びの多い時間を過ごしています。

小児特定疾患カウンセリング

相談の中で、時に発達検査を実施したりすることもあるのですが、多くのご相談は「小児特定疾患カウンセリング」という枠の中でお受けしています。小児科医が子どものカウンセリングを行った際に診療報酬を得ることができるというものなのですが、2020 年の診療報酬改定によって、診察を行った医師の治療計画のもと、公認心理師が行うカウンセリングについても診療報酬が認められるようになりました。最低 20 分以上のカウンセリングを行うことが診療報酬の要件となっていますが、実際には 20 分でお話を聞くのはなかなか難しいです。現在は 30 分 1 枠として、2 時間で 4 組のご家族のご相談を受けています。これも、従来の心理相談の枠組から考えるととても短いようにも思えますが、小児科クリニックで医師が患者さんのお話を聞ける時間は長くても 5－10 分くらいでしょう。小児科の心理相談では、医師の診察だけでは拾いきれないご相談について、もう少し時間をかけて丁寧にお話をお聴きし、医師と連携しながら相談を進めていきます。

小児科の心理職を始めたきっかけは、知人の紹介です。大阪市内で心理士複数名を雇用して、院内での心理相談と地域支援を行う先駆的な取り組みを行っている個人クリニックがあり、知人から小児科現場の話を聞くうちに興味が湧き、2020 年から大阪府下の別の個人クリニックで働き始めることになりました。

主訴と背景

ご相談の内容はさまざまですが、来談理由（主訴）だけでなく、その背景になってい

る可能性がある要因にも目を配る必要があります。例えば登園（登校）渋りの背景に、園や学校での活動がよく理解できていないという、知的発達の問題が関与している場合もあります。何をしているかよくわからない、やり方もわからない、やってもうまくいかない…となれば、行こうという気持ちが薄れるのも無理はないことで、単に「頑張って！」と励ますのではなく、そのような不安や負担を軽減するための具体的な手立てを講じることが必要になってきます。

これまで私が相談業務に関わっていたのは、児童発達支援事業所でした。つまり、子どもの発達に関する相談であることが前提だったので、まず子どもの発達面の評価を行い、それに基づく支援計画を考えていくのがいわばルーティーンであったわけですが、小児科ではどちらかと言えば発達の問題は背景要因に沈んでいます。現場が変われば、視点も変わり、常識も変わります。当たり前ではあるのですが、自分にとっては新鮮なことで、これまでの経験を活かせたり、全然活かせなかったりしながら、日々の相談業務を行っています。

「地域」の利点

小児科の仕事を始めてみて、本当に多様な相談が舞い込むことに驚きました。心理相談についての情報は、クリニックのLINEを通じて発信されています。つまり、普段この小児科で診療を受けている、あるいは受けたことのある方の手元にたまに情報が届くくらいのものです。しかしながら、それなりに予約も入り、盛況です。

時にはこれまでなかなか相談につながりにくかったのでは、と思うようなご相談に出会うこともあります。地域密着で、子どもが小さいころからかかりつけにしている小児科だからこそ、ふとした機会（たまたま風邪をひいて来院、など）に心理相談のことを知って相談につながる、というケースもあるようです。地域支援や予防的な対応が重視されるようになってきている今、地域の小児科における心理相談には、ちょっと面白い展開の可能性があるのではないかなと思っています。

下手くそな面接

そんな中でちょっと気にかかっていることがありました。それは、不登校に関する相談について、なかなかうまくできている感覚を持てていないことです。非常勤心理士で、相談日の頻度も少なく、相談時間も30分んと限られているので、その難しさもあるのですが、それにしても“うまく機能できていない”感覚があり、少しずつ苦手意識が芽生えてきていました。

とりあえずこれは誰かに相談した方がよいかなと思い、千葉編集員に相談したところ、勧められたのはやはり「ジェノグラム面接」でした。普段から初回面接で家族情報は聞いてはいたのですが、目の前でジェノグラムを書いて、それに沿って家族構成などを尋ねていくというのは、したことがありませんでした。でもせっかく頂いたアドバイスです。ともかく一度トライしてみようという心持ちになりました。

一応、ジェノグラムに関する本を何冊か下読みし、千葉さんからコツと注意点もお聞きして面接に臨みました。「ジェノグラム面接」は、家族理解のための一つのツール（手法）です。道具を上手に使えなければ、

成果が見込めないのは当然です。実際にやってみましたが、自分でも呆れるほど下手くそな面接に、思わず笑えてきました。もちろん、その場では真剣に、全力で面接をしていますが（というか全力でする以外の余地がない）、常に自分の中のどこかが「いや、そこ違うやろ」「そこまで聞いて、祖父母のことは聞かへんのかい」等とツッコんでいる状態でした。

かつて、同じようなツッコみが頭に浮かんだ場面がありました。それは初めて発達検査を実施する人の、陪席をしていた場面です。初めて検査を実施する時は、ほとんどの人が余裕なく、必死です。用具の並べ方はこれで合っていたか、教示はこれで正しいか、この反応は通過か不通過か、次はどの課題をやるのか…、頭を懸命に巡らせている様子が伝わってきます。何とか無事に実施完了してほしいと、祈るような思いで検査を見守ります。そんな中で時々、“え、あの課題ができたのに、次はそっちいくの？”とか、“いや、さっきの様子からすると、その課題は完全に無理じゃない？”と思うような検査の流れになることもありました。その姿と、ジェノグラム面接で右往左往する自分の姿がぴったりと重なっているように感じました。

この“右往左往”は、ツールを使いこなせるようになっていくまでに必要なプロセスなのだと思います。40 歳を超えてから、新しい職場で新しいツールに向き合うのは、少しの気恥ずかしさもありますが、改めて新人に戻って学び直すような新鮮味を帯びていて、とても面白いです。

まだまだ学ぶことが多いと思えるのは、きっと恵まれていることなのだと思います。

講演会＆ライブな日々㉗

古川　秀明

『SC・SSW・養護教諭による新しい学校内対人援助システム物語』
第一話・久木山さんとの再会

今から３０年ほど前、京都の片隅の、丘の上にある研修センターで団士郎、早樫一男、両先生が講師を務める家族療法講座に参加した。

一緒に学んでいたのは、だいたい１０人くらいだったと記憶している。

今は立派な建物になっているが、当時は木造の古い建物で、家族療法講座は参加人数が少ないので、大きな研修室ではなく、図書室で行われていた。

ほとんどの参加者が児童相談所関係の人で、福祉施設からの参加は私ひとり、後は医療関係者だった。

その中に、団先生、早樫先生と同じ児童相談所で働いていた久木山さんが参加していた。

久木山さんは団先生、早樫先生と同世代で、私より一回り以上年上の大先輩。

帰り道の方向が同じだったので、道すがら、いろんな話をした。

児童相談所の現場で、いかに家族療法が役に立つかを教えてもらった。

私がその研修センターで家族療法を学ぶ動機は、臨床心理士の資格を取るために、何でもいいから受験資格の研修時間を稼ぎたいという、とても不純なものだった。

だから、久木山さんが児童相談所職員の奮闘ぶりや、児童虐待の現状とその解決方法に家族療法がいかに有効であるかを熱く語られる度に、なんだか不純な動機の自分が恥ずかしくなったのを覚えている。

しかし、不純な動機で参加した研修センターで、団士郎、早樫一男、千葉晃央という、私の人生に欠かせない人たちに出会えたのは、私の中の不純な動機も捨てたものではないなぁと、少なからず思う。

そして久木山さんもその一人になるとは、その時は思いもしなかった。

時は流れて、昭和から平成、そして令和の時代になった。

ちょっとしたご縁があり、奈良に近い京都の小学校にスクールカウンセラーとして赴任した。

そこの養護教諭の先生が、「うちの学校のスクールソーシャルワーカー（SSW）さんはとても有能な方で、いつもお世話になっている」という話を聞いた。

私はその話に興味が湧いた。

数年前から、学校内で、SSW、養護教諭との連携による、学校内オープンダイアローグ（家族療法の技法のひとつ）を試していて、とても効果があった。

この小学校でも是非実施したいと思っていた。

しかし、そのためにはベースとなる人材が必要だ。

今までの学校では、SSW や養護教諭に私の研修を受けてもらい、実施していた。

もちろんやる気も問われる。

この小学校の SSW がいくら有能でも、私のやり方に否定的であれば、無理強い

はできない。

その SSW さんの名前を聞くと、久木山さんと言う名前だった。

久木山という苗字は珍しい。

しかも、私が知っている久木山さんはたった一人しかいない。

もう 25 年も前、丘の上の研修センターで一緒に家族療法を学んでいた、あの久木山さんである。
しかし、同じ苗字の人だっているかも知れない。

養護教諭の先生に、その久木山さんに私のことを知っているかどうか聞いてみて欲しいとメールすると、翌日、よく知っているとの返信がきた。

間違いない。あの久木山さんだ。

初顔合わせの日、職員室に座っていたのは、まぎれもなくあの久木山さんだった。

私達は思わずハグしあった。

25 年の歳月は、お互いの風体を、まるで玉手箱を開けた後の浦島太郎のように変化させていたのだが、すぐに昔のように打ち解けた。

それと同時に、私がやりたかった学校内オープンダイアローグが一気に現実味を帯びた。

久木山さんなら、一緒に家族療法を学んだので、改めて家族療法をレクチャーする必要はない。

即、実践可能だ。

早速私の実践例を話し、ここの小学校でも SC と SSW が連携して家族療法を実施したいと持ちかけると、それは面白いなと言って、すぐに賛成してくれた。

久木山さんは児童相談所を定年退職後、社会福祉士の資格を取り、SSW として

勤務されていた。

つまり、児童相談所の経験と社会福祉士の知識を両方兼ね備えている。

知識だけを持っているのではなく、実践経験があるのは、現場では何物にも代えがたい。

何よりも私と久木山さんのベースが「家族療法」という共通の技法であることが大きい。

『なぜ、SC と SSW が一緒に同室で家族療法を実施するのか』

まず久木山さんが私に投げかけた質問は、なぜ SC と SSW が一緒に同室で家族療法を行うのか・・・というものだった。

その答えには、２つのキーワードがある。

①ワンウエィミラー
②オープンダイアローグ

＜①ワンウェイミラー＞
家族への支援は 1950 年代から同時多発的に出始めた。

Bateson が、Jackson・Haley・Weakland と共に統合失調症を家族コミュニケーションから説明したダブルバインド理論を提出したのが有名。

カリフォルニア州ではダブルバインド理論を提出したグループから Bateson が抜け、Jackson を中心に家族療法を行うようになり、この集まりを「MRI グループ」（コミュニケーション学派）と呼ぶ。

コミュニケーション学派の提出した概念は数多くあるが、物質的なところで言うと「ワンウェイミラー」「インターホン」「VTR（ビデオ）」が三種の神器と呼ばれている。

ワンウェイミラーとは、いわゆるマジックミラーのこと。

ワンウェイミラー自体は、コミュニケーション学派に限らず使われている。

実際に家族療法を行っているチームがいて、それをワンウェイミラー越しに見ている別チームがいる。

家族療法を行っているセラピストが行き詰まりを感じたときに、別チームに助言を求めるというもので、セラピストのトレーニングとしても活用されている。

ワンウェイミラーについてはこうした使われ方が、家族療法の中でされている。（別室でスタッフが観察していることは、最初に家族に告知してある）

実は私の家にもワンウエィミラーがある。

自宅で開業する時に、ガレージを改装し、早樫先生に監修してもらい、ワンウェイミラーとマイクを設置した。

これで面接室の様子を、隣室からワンウェイミラー越しに観察できて、音声も拾えるし、インターホンでこちらの声も届く。

天井にカメラを設置することも可能な配線にしてもらった。

工務店の人が「今までこんな設備をしたのはラブホテルくらいなもんや。おたく、いったいここで何しゃはりますのん？」と聞かれ、苦笑いしたのを思い出す。

ところが、ここでとんでもない壁に当った。

ワンウェイミラー、インターホン、VTR という設備は整ったが、バックスタッフがいない（笑）

セラピストは私なので、私がバックスタッフをするわけにはいかない。

そうかと言って、バックスタッフをお願いする経済的余裕もない。

頂いた相談料の中からバックスタッフの報酬を差し引くと、経営が成り立たたない。

それに、もしバックスタッフをお願いできたとしても、スケジュール管理が大変だ。

相談者の予定とバックスタッフの予定に、私の予定も合わせないといけない。

大きな組織の構造化された中で、報酬を気にせずワンウェイミラーを使い、訓練されたスタッフが仕事として配置されるのなら、なんの問題もない。

しかし、個人開業で、ワンウェイミラーを使った、複数のスタッフでのアプローチは、物理的にも経済的にも無理があった。

対マガスタッフの千葉くんにはボランティアでよく来てもらったが、彼も忙しいので、そうそう無理も言えない（この場を借りて、千葉君、あの時はありがとう）。

結果的に百万円近くかけて改装したガレージとワンウェイミラーの装置はほとんど使うことなく、現在も私の髭剃りや身だしなみを整える鏡以外の活用方法がない（笑）

この状況は個人開業に限らず起きている。

日本に家族療法が入ってきたころ、一時期家族へのアプローチとして急激に広まり、そのころ建てられた設備の中にはワンウェイミラーが残っているところがある。

しかし現在は別チームが控えるほどの人的余裕がある組織は無いに等しいので、使われるとしてもセラピストと子どもの関わりを保護者に見てもらうプレイセラピー等のために活用することがあるくらいだろう。

いずれにせよ、ワンウェイミラーを行動観察で使っているところはあっても、少数であることは間違いない。

このような現状の中、学校の中にワンウエィミラーを設置し、バックスタッフを置いて欲しいという要望を SC がしても、予算的にも通るわけがない。

ところが、この状況をオープンダイアローグが一変させた。

＜②オープンダイアローグとは＞

家族療法を学んでいる人には釈迦に説法だが、対マガ読者の方には知らない方もおられると思うので、簡単に説明する。

オープンダイアローグとは「開かれた対話」という意味で、フィンランドの西ラップランド地方で生まれた、家族療法が発展したアプローチのこと。
薬物を使わずに（あるいは少量しか使わずに）、「統合失調症が治る（よくなる）というふれこみで一躍広まった。

フィンランドでは、公費医療として無償で行われている。

急性期の統合失調症に対し、原則２４時間以内にチーム（家族療法のトレーニングを受けたスタッフから成る）が駆けつけ、危機が解消するまでの十数回、一回９０分以内のミーティングが毎日のように行われる。

ミーティングは、モノローグ（独語）にならずダイアローグ（対話）になるように行われ、今後に関する何らかの決定は、必ず患者当事者の目の前で話し合われる。

対象は統合失調症だけではなく、全ての精神疾患といわれている。

『オープンダイアローグが広がらない理由』

日本やアメリカで、オープンダイアローグをそのままの形で導入するのは不可能だと言われている。

オープンダイアローグが持つ、他にはない以下の４つの特長と強みが、そのまま今の日本（アメリカも同様）の医療制度では大きな壁になっているからだ。

①原則２４時間以内に対応。
②チーム（家族療法のトレーニングを受けたスタッフから成る）が駆けつける。
③危機が解消するまでの十数回実施。
④一回９０分以内のミーティングが毎日のように行われる。

児童相談所や病院でこんなことをしたら、即、労働基準法に触れる。

虐待の通告対応だけでも大変な児童相談所のワーカーに、さらに 24 時間体制で９０分の面接を毎日、よくなるまで十数回させれば、まちがいなく彼らはバーンアウトしてしまう。
医療機関でも、労働条件の問題と保険点数が付きにくい問題などがあり、精神科医の森川すいめいさん、斎藤環さんらの努力が続けられている。

世界的に見ても、オープンダイアローグが実施されているのは、フィンランドだけで、そのフィンランドの中でも、この西ラップランド地方のみである。

なぜそれが実現可能なのかというと、その町全体がオープンダイアローグに理解があり（住民に抵抗がない)、公費が支給されるからである。

日本でオープンダイアローグをそのままの形で実施するのは不可能とまでは言わないが、かなりのハードルがある。

だけど、この４つをクリアーすれば、純粋な意味での精神科医療における治療的関わりは出来なくても、その理論の核である「対話」と社会構成主義的な「つながりの構築」は実現できる。

なによりも家族療法との親和性が非常に高いのも私にとっては大きな魅力。

そして、もう一つの魅力を発見した。

それは家族療法のみならず、学校との親和性も高いということだ。

さっきの４つの問題を、それぞれ学校現場にあてはめて考えると、なんとなくそれぞれの解決の糸口が見えてきた。

①24 時間対応
さずがに学校で 24 時間対応は不可能だ。

しかし、登校時から放課後の時間までの時間であれば対応できる。

登校が午前８時、下校が午後４時としても８時間は対応できる。

オープンダイアローグの直接ターゲットは急性期の統合失調症だが、小中高の学校で急性期の統合失調症の対応はまずない。

多くは「不登校」「いじめ」「勉強」「友人関係」「家族関係」「発達障害」などである。

それらの問題が統合失調症よりも軽く扱われるべきだとは思わないが、まずは児童生徒が学校にいる８時間から始めてみる価値はある。

②チーム（家族療法のトレーニングを受けたスタッフから成る）で対応する。
学校内でのチーム作りは、文科省の指針でもある「チーム学校」の概念と一致する。

学校の中には、担任はもちろん、養護教諭、育成担当、生徒指導、SSW、とその人材に事欠かない。

家族療法については、職員研修会等の時に学んでもらう。

「対話」と「つながり」の効果を、自分の体験として理解してもらえれば、学ぶモチベーションも上げてもらえるだろう。

③危機が解消するまでの十数回実施。
教師も子どもも、毎日登校してくるので、わざわざ相談機関に出向く手間はかからない。

家族は校区内に住んでいるので、家族に学校に来てもらうのも便利。

スケジュールの調整や変更も教師と家庭のやり取りですぐにできる。

回数についても、スタッフはみんなちゃんと給料が支払われているので、料金が発生しないし、チームも相談室も使いたい放題。

④一回９０分以内のミーティングが毎日のように行われる。
さすがに毎日は無理だが、６０分以内で、学校のある月～金は毎日可能だ。

②の＜チームで実施＞することは、まさにワンウェイミラーの向こうにいるスタッフを同席させることと同じ意味だ。

これなら、面接室の隣の部屋も、ワンウエィミラーやマイク、VTR の設備もいらない。

つまり、新たな予算がかからない（これは大きい)。

もうこうなったらやってみるしかない。

いや、是非やってみたい。

そこで私は、自分が勤務している京都市で一番生徒数の多い K 中学で実施することにした。

ケースの数は半端なく多い・・・。

続きは次号の第二話・実践編にて

最後までお読みくださり、ありがとうございました。

家族と家族幻想６

坂口　伊都



夫婦になって、間もなく父母になった。子どもが生まれると、自分の時間が持てなくなった。ただひたすら、子どもを育てることに精一杯だった。夫は、母親程には子どものことを真剣に考えているように見えなくてイライラした。

子どもが巣立つ時期に入り、この人と一緒にやっていけるのか不安だった。

3 度目の緊急事態宣言が出されました。1 年前に初めて出された時のような人流の制限に至らず、5 月の末まで延長されました。6 月以降もどうなっていくか図るのは難しいです。80 歳代の母親のもとにワクチン接種のお知らせが届いたそうで、「1 回目はいいけど、2 回目に頭痛とか副反応が出るらしい」と接種に尻込みをして、「打たないとあかんかなぁ」と聞いてくるので、「打たないとあかんのやろねぇ。重症化は防げるみたいだからね」と話をしていたかと思えば、いざ高齢者のワクチン接種予約が始まるとなると、予約が取れないと嘆き、焦り、もう打てないかもと不安がります。母に時期が遅れても、ワクチンを打てるから大丈夫と説明しても耳に入らない様子で落ち着きません。ワクチン接種で、日本中の多くの高齢者がソワソワしているニュースが流れ、落ち着かない高齢者の周りにいる人のため息が聞こえてくるようです。

大学も新学期当初は、オンサイトでの授業が始ましたが、それも束の間、オンラインに切り替え

になりました。今年度から久しぶりに学部生の非常勤講師を引き受けたのですが、3 回目の授業からオンラインに変更になり、Zoom の経験があっても、授業でどう扱うのか勝手がわかりません。何とか、オンライン授業を開くことができても、資料が見られないと学生に言われ、何かもう一つ操作が必要だったのだとわかる始末。こんなスタートですが、オンラインで面白く授業する方法を見つけていこうと思っています。娘の大学では、資料の中にキーワードを入れて、その文字を繋げて課題として提出させる先生がいるそうです。クイズの懸賞みたいです。否応なしの変化に人々は適応しようとし、新たな発見をし、挑戦を繰り返しています。

コロナ禍の中ですが、緊急事態宣言が出る前に初めて夫婦で旅行をしました。新婚旅行も行かず、旅行と言えば必ず子どもや犬を連れてだったので、結婚 22 年目での初チャレンジとなりました。私達夫婦は、趣味や嗜好が呆れるほど合わず、寝起きの時間も全く違うので、夫婦で旅行に行って同じ時間を過ごせるのか、旅行先で不穏な空気になって終わるのではないかと危惧してしまい、なかなか一歩に踏み切れないでいました。大学生の娘を旅行に誘っても、乗り気でない様子が伝わってくるので、ここは夫婦の新たなステージを試すことをチャレンジしました。

お試しということもあり、近場の海鮮が美味しいところを目指すことにしました。よく家族でキャンプをしていたので、上げ膳据え膳も魅力的ですが宿は素泊まりにして、晩御飯は海鮮を入れたバーベキューにしました。旅行中、夫婦で何かすることがある方が、時間を持て余さなくて気が楽かなとも思ったのも大きな理由です。

旅行の日は、娘に犬と猫の世話をお願いして、出発しました。犬は置いていかれることが不服だったようで、しばらく遠吠えをしていたそうです。夫婦二人という身軽さで旅に出て、天候にも恵まれ、桜がお出迎えをしてくれました。遠くから桜が咲いているのが見え、向かってみると地域の人々が楽しそうに花見をしている公園をみつけました。夫婦で「いい所だね」と話ながら、夫は写真を撮り、私は散歩を楽しみました。夫婦旅でなければ、このような展開にならなかったと思います。いつもなら、子どもが喜びそうな場所を考え、選んでいたので、無意識に父母の気持ちは後回しにしていたのだと気づきました。

夕食のバーベキューも二人分なのですぐに終わり、波の音を聞きながら焚火を囲みました。家族旅行なら、焚火の周りには夫と子どもが囲んでいたので、私は早々に焚火から退散して別のことをしていることが多かったのですが、今回は私しかいません。たまには焚火に付き合ってみようかと思い、焚火の前に陣取ったのですが、煙の向きが頻繁に変わります。その煙から逃げ回りながら、夫に「焚火って、薪を燃やすことが楽しいの？」と尋ねたくなりました。夫によると、次はどこに薪をくべればいいかなと思いながら燃やしていくのが楽しいそうです。焚火を囲みながら、温かい飲み物を飲んでいるのも悪くはありませんが、私は夫のようにずっと外にいられず、部屋に退散しました。夫を見ていて、好きなことは苦にならないのだなと改めて感じます。

夫との旅行は、予想以上に穏やかに過ごせました。ここで、家族療法の「サブシステム」を思い出しました。夫の行動にイライラを感じやすかったのは、「両親サブシステム」が働いている時だったようです。私は母親という立場からか、自分の性分か、常に子どものことを気にかけながら生活を送り、何事も子どものことを優先的に考えることが当たり前になっていました。一方、夫の方は



自分の好きなことを優先して行動しているように見え、父親としてどうなの？と苛立ってしまいます。夫の行動が子どもに悪影響を与えているように映ると、私のイライラが止まらなくなりました。改めて私の怒りは、父親なのに自分勝手で無責任な行動をしていると認定しての結果だとわかりました。今改めて考えると、私の方は子どもから目を離すのが下手で、夫の方は子どもを注視することが下手だったのでしょう。お互いに下手な部分ばかりが目についていたようです。家族旅行に行っても、途中で険悪な雰囲気になっていた理由がわかりました。

この旅行では、「夫婦サブシステム」が働いていました。「美味しそうなお寿司があるから食べないか」と夫が提案すれば、「いいよ」とその提案に乗り、「ここで食べると 10%の消費税が取られるけど、持ち帰りなら８％の消費税なら車で食べる？」と私が持ちかけると、それを夫が了承して、どうせなら車の二列目にある備え付けのテーブルを使おうと夫が提案し、いつもは子どもが使っている車のテーブルを始めて自分達が使って、二人で子どものようになったような気分になり、思わず笑ってしまいました。子育てに追われ、親としての責任を背負い、両親サブシステムに比重が大きく置かれた期間、無意識に責任の押し付け合いをしていたのかも知れません。子育てとは、親に重責がかかるものなのでしょう。もちろん、まだ子どもに手がかかって、気楽とは言い切れませんが。

初めての夫婦旅は、気づきとこれからの夫婦の距離感も図ることができたように思います。頭で考えているよりも行動に移してみて、見えるものがあるのだと感じました。そして、両親サブシステムは、夫婦サブシステムを回していくことよりも子どもという第三者が介入して、そこに社会からの評価が繋がる部分が入り難しいのではないでしょうか。

里親になるということは、社会から里親としてできるのか、できないのかという暗黙の評価を意識させられる場面も増え、この両親サブシステムを異常に回していかなければならない状況に追いやられる行為なのではないかと感じます。パートナーの親役割にばかり焦点をあてて見えしまうと、常に採点や評価をする視点に偏ります。人の長所と短所は紙一重とよく言いますが、良さが隠されていっていたように思い出します。どのような眼差しをパートナーに向けられるかが大事なのでしょう。

親は子どもよりも多くの経験をしている。その分、失敗して後悔もしてきた。今なら、あんな失敗しなくて済むのにと感じることもある。

だから、子どもには失敗しないように教えたくなる。子どもからしたら、体験していないことの正解だと提示されても納得できない。その歴史は繰り返されていく。

旅行と言えば、子どもの頃に親からしてもらったことで嬉しかったエピソードは何かと尋ねて、〇〇へ旅行に連れて行ってもらったことがあると答える方がいます。エピソードと聞いているので旅行の中でも、吊り橋が怖くてなかなか進めなかったけど、母が手を引いてくれてゆっくりだけど渡れた等の一場面の答えを待っているのですが、旅行に行った事実だけで答えが終わります。まるで、旅行＝楽しいことという方程式があり、その

中で起きた家族間の関係を考えていませんでした。旅行中でも喧嘩が起きたり、笑いあうような場面があっただろうにと思いますが、出てきません。

旅行＝楽しいという感じは、日常の何気ない家族のやり取りを見ない、取り上げないようにしてやり過ごしているように映ります。そして、日々の生活の中ではできるだけ嬉しい、楽しい、悲しい、辛いというような情動を察知しないようにし、非日常というステージを用意し、強い刺激を与えて初めて起動しているように見えてきます。「特別な場面」という括りと自分の感情は別モノですが、感情を感じないようにしなければ、生きてこられなかったのかも知れません。

家族面接の場でも、家族の関係修復のための処方箋をもらえるのではないかと期待して来られる方がいます。「どうしたらいいですか？」という質問が投げかけられることは多く、そこに何らかの方法を伝えれば、「そうすれば必ず良くなりますか？」や「それをしても良くならなかったのです」



等が返答されるのでしょう。家族の関係を何とかしたいと藁をもつかむ気持ちなのはわかりますが、お任せしますという態度を取られると、家族としての責任を放棄しているように映ります。自分で考えることを止めてしまおうとしているのか、あるいは何か行動を起こして失敗することを恐れているのかも知れません。

大人達は子どもに、親や教師の言うことを聞くように求めます。大人の人生経験から失敗しない方向に導き、自分と同じような思いをさせたくないと先手を打ちたくなります。「大人の言うことを聞いていれば間違えがないから」や何か失敗すると「ほら、大人の言うとおりにしないから失敗するんだ」と言われることも多いでしょう。そこで、失敗を恐れるようになると自分から何か行動を起こすことを避けたくなる気持ちが勝るのでしょう。しかし、そういう大人も自身が生きてきた道のりしか体験していないのです。体験した以外の道のりは、知らないのです。自分の体験を補充するのなら、少しでもいい大学に行き、安定した職場に就職してくれれば一安心できるというところでしょうか。子どもが小さな頃ならいざ知れず、大人になろうとしている子どもの行動を親が導こうとしても上手くできるものでもないようです。

子どもが親と違う生き方を望むと、親にとってはわかりにくい、見えにくい世界で将来、子どもが安定した生活が送れる収入が得られるのか、世間から何を言われるかと不安に陥ります。その不安に駆られると、親から見てわかりやすい世界に子どもを引き戻したくなります。そこで、どのような方法で子どもを応援できるのか否かが、様々な家族の話を聞いていて、大きな分かれ道になるのだと感じさせられます。

何が何でも親の描く道を歩かせようと必死になるか、何を言っても言うことを聞かないからとお手上げ状態で放棄してしまうか、心配しながらも子どもを歩ませようとするか。子どもの自主性に任せているからと何もしないのは、自主性の尊重ではありません。親が、現実を見ないようにしているだけです。完璧な親をする必要はありません。子どもにとっても、完璧な親を演じられるのは隙がなくて助けてもらおうと思えなくなります。子どもと一緒に考え、悩む親の姿を見て育つ方が子どもは気楽なのではないでしょうか。いくつになっても、悩みはつきません。気楽に生きたいと願っていたはずが、日々の生活に変化を感じられな

くなると、どう時間をやり過ごそうかと悩みます。ある程度のストレスが必要だと聞きますし、ストレスと上手くつきあう方法を考えられる方が面白いのでしょう。

夫婦は、男女であり、父母であり、それぞれ違う役割を持ちながら生活をしている。男女の関係は終わっても、子どもの父母であることは変わらない。

子どもは、パートナーとしてではなく、子どもとして親に受け入れてもらいたいものなのです。

初めての夫婦旅行で、「両親サブシステム」と「夫婦サブシステム」の差を体感しました。サブシステムのことを頭の中で理解していたつもりでしたが、違いがクリアになりました。離婚すると、夫婦サブシステムは終結しますが、両親サブシステムは子どもが自立するまで続きます。対をなす相手と違うシステムを担うことは複雑な関係を担うということで、お互いに子どもを挟み関係を築くという複雑なことをしているのだとわかります。

女性側は養育することで、妻よりも母親の意識が強くなり、男性側は父親よりも夫でいることを望み、夫婦の関係が揺らぐという話はよく耳にします。夫婦の間で、どちらのサブシステムを優先させるかの打ち合わせがいるのかも知れません。両親サブシステムばかりを機能させていると、子どもの存在がいなくなることに不都合を感じ、いつまでも手元に置いておく必要が出てくるでしょう。両親のステージから夫婦サブシステムに移行し、老後に向けての夫婦間の関係構築に向き合う必要があるようです。

単身で子育てをしていたり、夫を頼りなく感じると、子どもに頼りたくなる気持ちはわかりますが、子どもに親のパートナーの役割を求めることを重荷になります。パートナーの役目を果たそうと必死になる子どもの姿を何回も目にしたことがあります。子どもは、親に自分を大好きでいてもらいたいのでしょう。自分を押し殺そう頑張ってしまうようです。夫婦や親としてのあり様を子どもに飛び火させないように心がけようと思います。



周辺からの記憶 31

チェルノブイリを訪ねる　2019 年 9 月

村本邦子（立命館大学）

蘭・小倉・今野（2021）『なぜ戦争体験を継承するのかーポスト体験時代の歴史実践』（みずき書林）がとても面白かった。広島の基町高校の原爆の絵の試みをはじめ、戦争の体験世代とポスト体験世代が出会い、協働しながら継承のための新たなプロダクトを作っていくさまに感銘を受けた。同時に、ここ十年から二十年の間に全国のあちこちに継承のためのミュージアムが生まれていることを知った。

ゴールデンウイークは緊急の要件があって鹿児島にいたので、リニューアルされた知覧特攻平和会館と、人吉海軍航空基地資料館、万世平和特攻祈念館を訪れた。知覧には何度も足を運んできたが、鹿児島には多くの陸海軍基地があったということは今回初めて認識した。吹上浜にみどり荘という秘湯旅館があり、特攻隊関連の資料が展示されているのだが、万世基地の接待宿だったからなのだと初めて結びついた。吹上浜海岸は比較的馴染みのあるところだが、ここに滑走路があったのだ。

こういった記念館は、地域の人々の歴史掘り起し運動から生まれている。国ではなく、地方自治体（もしくは民間）が設置するので、地域住民の視点が見える。ミュージアムは誰がどういう目的で設置するかによって展示内容も異なってくる。歴史から民衆の声が消されようとする時、かすかな声を聴き歴史を取り戻そうとする動きが生じるものだ。原発事故にしても、ホロコーストにしても、戦争にしても、そんな草の根からの揺り戻しの力に期待したい。福島にも複数の民間ミュージアムが立ち上がりつつある。近いうちに行ってみたい。



コミュタン福島の衝撃

昨年、福島県三春町にあるコミュタン福島（福島県環境創造センター交流棟）を訪れた。これは、2016 年にできた福島県の施設で、「県民の不安や疑問に答え、放射線や環境問題を理解し、環境の回復と創造への意識を深める」ことを目的にしている。入場無料であるにも関わらず、とても立派な建物で、中はまるでテーマパークのよう。これまで見てきた原発 PR センターに似ていた。

「子どもたちのメッセージ」のコーナーには、可愛いイラストとともに「とても楽しかったです」「コミュタン最高」「放射線とうまく関わっていきたいです」といった感想が並び、キーボードでメッセージを入れると壁面の巨大スクリーンにそれが映し出されるようになっている。

「未来へのメッセージ」にも、楽しかった、素晴らしいといった言葉がカラフルな文字で流れていた。試しに、「原発安全なの？」と打ってみると、「原発安全」と映しだされた。驚いていろいろ試してみたが、「怖い」や「不安」の語は消され、壁にはポジティブな言葉だけが並ぶ。どこかでモニタリングしているのか、そうこうしているうちにスタッフ数人が集まって、こちらを見ながらどこかに電話していた。あまりの衝撃に怖くなって、その場を立ち去った。「どうして書き込んだ文字が消されるんですか？」と尋ねるべきだった。回答に納得がいかなければそれに意見を言うという普通のことがどうしてできなかったのかと、自分が情けなく、後で落ち込んだ。

その後、福島大学の後藤忍先生を訪ねた。科学者として原発反対を言ってこなかったことに責任を感じ、放射線に関する教材や博物館展示などについての批判的研究を続けておられる方だ。博物館展示を比較分析し、チェルノブイリ博物館の展示は、原発事故を二度と起こしてはならないというメッセージを強く感じさせるものであるのに対し、コミュタン福島は、汚染の程度や被ばくによる人権侵害の状況について判断するのに必要な情報が少ないという。

「意見を言っても取り上げてもらえないことも多いが、言ったことで展示が変わったところもある」そうだ。そして、「チェルノブイリ・ミュージアムは長い時間を重ねながら、市民の努力があって、展示内容を変えてきた。福島のミュージアムも、時間をかけて私たちが変えていかなければならない」と言う。この言葉に刺激を受け、チェルノブイリに行こうと思った。





キエフへ

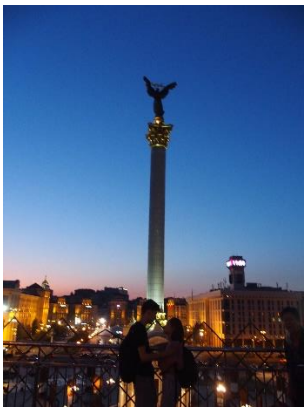
2019 年 9 月、アムステルダム経由でキエフに飛んだ。キエフはウクライナの首都、ドニプロ川の中流に位置する。東ヨーロッパにおける最古の都市で、キリスト教の聖地のひとつとなっている。街中には美しい教会が建ち並び、聖ソフィア大聖堂とキエフ洞窟大修道院は世界遺産である。宿を取ったホテルウクライナは、マイダン独立広場の上にあり、旧ソ連を感じさせる堂々とした佇まいで、部屋の窓からキエフの街を眺望することができた。

独立広場には、ユーロマイダン革命の青空展示のミュージアムがあった。これまでウクライナのことをほとんど知らなかったと思う。2014 年 2 月、ロシア寄りのヤヌコビッチ大統領が欧州連合（EU）と連合協定を結ぶ協議を打ち切ったことをきっかけに、政権の腐敗に異議を唱え、民主化を求める市民が立ち上がり、この独立広場を占拠して治安部隊が衝突した。

死者は百人を超えたが、新たな政権の発足や 2004 年憲法の復活、数ヶ月以内の臨時大統領選挙の成し遂げなど多くの成果をあげ、ウクライナに大きな変化をもたらした。しかし、結果的に、ロシアの猛反発を招き、軍を送ってウクライナ領クリミア半島を併合、東部各地で新政権支持派と反対派が対立し、国際的紛争の火種となってしまった。

ウクライナの街は非常に美しいが、眼を凝らすと、ウクライナが激動のさなかにあることを感じさせられる痕跡と出会う。









国立チェルノブイリ・ミュージアム

国立チェルノブイリ・ミュージアムへ





1986 年 4 月 26 日、ソビエト連邦（現ウクライナ）のチェルノブイリ原子力発電所 4 号機で、大規模な原子力事故が起こった。事故当時、4 基の原子炉が稼働しており、5 号機、6 号機の建築が進められていた。事故前日、4 号機では停電時の電力供給実験が予定されていたが、制御棒の設計ミスと操作ミスが重なり、メルトダウン。二度の水蒸気爆発が起き、炎が減速材に使われていた黒鉛に引火した。鎮火までの十日間、放射線物質が放出され、広範囲に拡散した。事故に対応した作業員 28 名が急性放射線障害で亡くなっている。

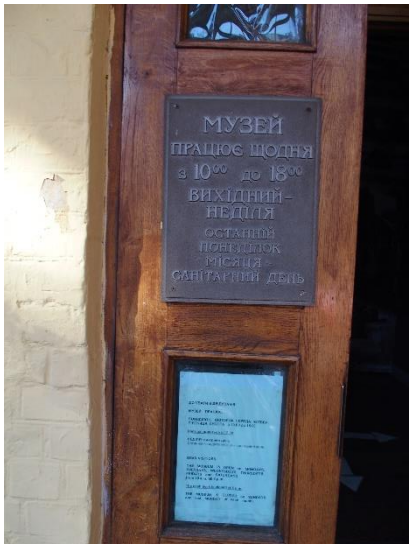
国立チェルノブイリ・ミュージアムは、原発事故 1 年後の 1987 年、事故現場の消火活動にあたった消防士たちをたたえる小さな写真展「勇気と栄光の記憶」から始まった。写真展示は消防のオフィスで行われたが、その隣の消防署が博物館にあてられた。

ソビエト政権下では、国威発揚のイデオロギーと結びつき、消防士は英雄扱いだったが、亡くなった原発関係者のことや移住や強制避難などの問題については公式に語られることがなかった。だんだんと国外の視察団も訪問するようになり、1992 年に博物館へと組織を拡充することになった。

1991 年、ソビエト連邦が崩壊し、ウクライナが独立すると、機密文書の公開が始まり、破棄を命じられていた多くの資料も展示されるようになった。開設当初は 200 点だった展示品も、現在では、総面積 1100 ㎡の三つの展示室に 7000 点以上が公開されている。機密文書の多くは、ここで最初に一般公開された。（コロレーヴスカ, A. 「責任はみなにある」東浩紀『チェルノブイリ・ダークツーリズム・ガイド』ゲンロン, p.94-97、2013）。

さっそくミュージアムに向かってみる。チェルノブイリ・ミュージアムは、事故地から約百キロ離れたキエフ市の中心部に位置する。アクセスは良いが、大きな看板があるわけでなく、博物館らしくない外観なので、注意しなければそれとわかりにくい。元消防署だったことを表すように細長い 2 階建ての建物で、玄関部分は、見張り台だったのか 3 階建ての塔のようになっている。元か

らではないのだろうが、現在は、全体が淡いクリーム色に白い縁取り、木製アーチ型の扉と窓で、洒落た印象を与える。玄関入り口に、キリル文字と英語で、「国立チェルノブイリ博物館」と書かれた地味な表札がかかっていた。玄関横には、樹木と祈りを捧げる女性の銅像がおかれた小さなスペースが作られていた。心安らぐスピリチュアルな雰囲気を感じさせる。なお、建物前の駐車場には、古めかしい感じの車両が並んでいたが、実は、これらが事故当時に使われていたものであることは後で知った。





玄関を入ると、受付がある。入場料は24UAH(フリヴニャ)、音声ガイド60UAH、写真撮影料48UAHで計132UAH、日本円に換算すると約600円である。音声ガイドは、英語、ドイツ語、日本語、フランス語、イタリア語、スペイン語、ロシア語、ウクライナ語の8ヶ国語が準備されていた。

ミュージアムの公式HPには日本語版もある(http://chornobylmuseum.kiev.ua/ja/)。それによれば、「ミュージアムは、事故処理作業員や事故の証人たち、犠牲者といった何千もの人々の運命を通して、この事故がどれほど大きなものだったかを理解してもらうため、人々の役に立つことが使命だと考えています。そして、文明と地球を危機にさらした科学技術と人間との共存はかけがえのないものであるということへの理解を促し、世界がチェルノブイリの教訓を忘れないよう、生活のあらゆる場面で事故の教訓を活かせるよう次世代に警告していきます。」とある。

言語のこと

私には、ウクライナ語とロシア語の識別が難しいことから、展示にどちらの言語が使われているのかわからず、後で調べてみた。基本的に、展示資料は旧ソ連時代のものであるため、ほとんどがロシア語であるが、展示解説はウクライナ語になっているようである。

ただし、ここには注釈が必要だ。2016年に訪れた人の話によれば、その時の展示解説はロシア語だったという。どこかの時点でロシア語からウクライナ語に書き換えられたのだと考えられるが、現地の日本語ガ

イドに問い合わせてみたところ、「チェルノブイリ博物館の展示の説明は、もちろんのことウクライナ語です。ウクライナ国によって創立された国立博物館なので、館内の展示品の説明看板上で使う言語も、博物館内の見学時のガイドさんたちが行う言語も、原則としてウクライナ語でなければなりません」とのことで、書き換えの時期ははっきりしなかった。

言語の問題は政治的である。ウクライナは、ソ連時代にロシア語化が進み、独立時にウクライナ語を唯一の公用語として指定した。政府機関ではウクライナ語のみが使われ、憲法・法律をはじめ、公的文書はすべてウクライナ語で記述され、学校教育は大半がウクライナ語で行われる。しかし、生活の現場でのロシア語の使用頻度は低下しておらず、西部を除いた地域においては、ロシア語は重要な言語となっている。

ウクライナはバイリンガル社会であり、ウクライナ住民の96%がある程度ロシア語が使えるという。社会学研究所による2000年のアンケートによると、「家庭では何語で話しますか」 の質問に対して、ウクライナ語のみと回答したものは39%、ロシア語のみと回答したものは36%、状況により使い分けると答えたものは 25%となっている。歴史的にポーランドなどの影響下にあった西部はウクライナ語が、東部や南部はロシア語が優勢である。(芳之内雄二「ウクライナの現代言語状況と言語問題」北九州市立大学文学部紀要 74 号、47-61 頁、2008)。既述したように、東部では、親ロシア派勢力が一部地域を 2014 年から実効支配し、政府軍とにらみ合いが続いている。

こういった政治状況と関わらず、ミュージアムの HP は、ウクライナ語、ロシア語、英語、日本語の 4 ヶ国語、音声ガイドは 8 ヶ国語になっている。そこには、チェルノブイリの教訓を世界に発信したいという強い意志がうかがえる。実際、この博物館は世界中の若者に愛され、近年ではデートスポットとしても人気を集めているとのことである。驚くべきことだ。

受付を済ませて展示室に足を踏み入れると、最初に眼に飛び込んできたのは、なんと福島原発事故の展示だった。



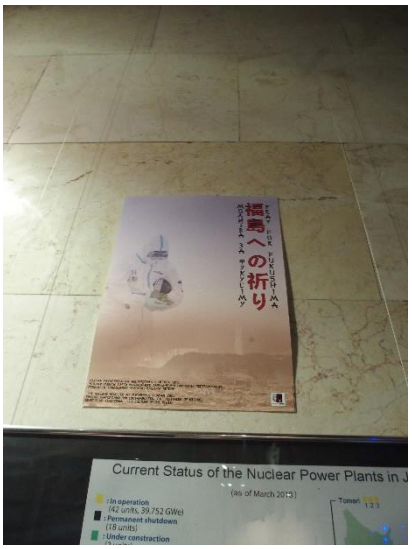
福島原発事故の展示

左手正面つきあたりには、福島原発事故の映像が映し出される液晶画面が、その両側に、ウクライナ語（左）と日本語（右）で書かれたメッセージが展示されていた。「桜の枝－煙の美女/この枝に歩み寄って、/優しく抱きしめる。/チェルノブリから/宜しくと伝えておく。/桜が息で返事をする。/全世界が悲しみに暮れ、/皆が心配になり/祈りが天国まで響く/その中に私たちの声：/私達はあなたと共にいる。/桜―私たちの姉妹。/傷が癒されるように/祈りを捧げてい

る。/諦めないで！/あなたの兄弟/キエフの栗の木より」。天井から、桜を背景に白い衣装を身に着け飛翔する女性のように見える人形が吊り下げられている。福島は女性で、チェルノブイリは男性で表象されているのだろうか。



左手正面に向かって右の壁には、「福島への祈り」と書かれたちらしが貼ってあった。2013年7月9日から開催されている特別展で、終わりの日付は書かれていない。ミュージアムの公式 HP によれば、これは、ウクライナ発の福島の写真と伝統工芸品の展示であり、注目すべき展示として、被災地の武士の志を引き継ぐ物語があり、千年以上続いていた相馬野馬追の写真に、避難者である野馬追の武者たちの勇敢な姿を見ることができる。ホール中央にあるその武者の姿とチェルノブイリ被災地の民族衣装を着た女性の絵は、原発事故の悲劇を克服する二つの民族のシンボルである。写真家、ジャーナリスト、被災者、ボランティアなど36の個人と団体が撮影した120枚の写真と、福島県内の被災地の文化や伝統工芸を伝える展示品、避難区域や放射汚染地域の地図、事故当時の様子がわかる新聞などを展示してあると説明されている。私たちが見た展示内容からすると、「福島の祈り」は内容をアップデイトしながら、常設化しつつあるのかもしれない。

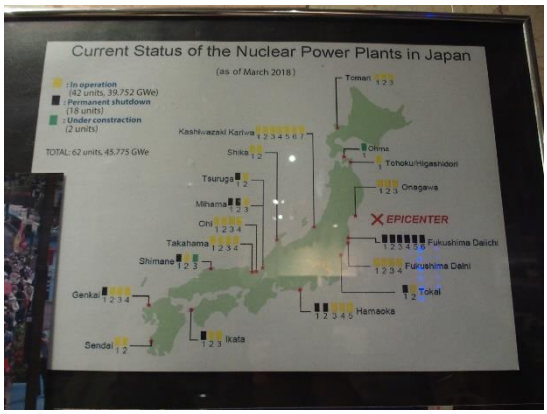


ちなみに、HP によれば、2017年3月11日から9月1日には「ウクライナから福島連帯の起き上がりこぼし展」が開催されている。福島県会津地方に古くから伝わる郷土玩具起き上がりこぼしは、東北人の七転び八起きの不屈の精神を表しているが、ウクライナにもこれに似たネバリャーイカというものがある。パリで活躍するデザイナー高田賢三が呼びかけ人となり、広島の平和公園に世界中から送られた折り鶴の再生紙を使って、会津で作られた無地の起き上がりこぼしに世界中のアーティストが絵付けしたものを展示するという企画だったそうだ。

ちらしの下にはパネルがあって、英語で

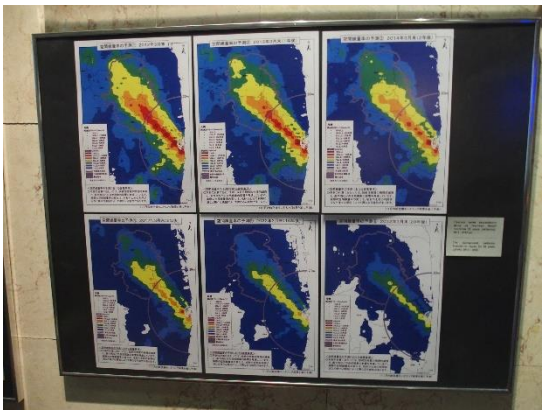
「日本における原発の現在の状況」と書かれた日本地図が示されていた。「2018 年 3 月現在」とあるので、毎年、更新されているのだろう。この時は、稼働中 42 基（”in operation”と表現されており、停止中のものも含まれているのではないかと思われる）、廃炉 18 基、建設中 2 基と表示されていた。その下には、2011 年 6 月 11 日と 2012 年 6 月 29 日の原発反対デモの写真と共同通信の記事が貼られていた。

その他、除染完了後の公園の写真（線量計は 1.685 μSv/h を示している）、放射線量の変移予測地図（2012 年、2013 年、2014 年、2017 年のものの他、2022 年、2032 年のものも含まれている）もあった。2032 年のものでは、たしかに赤い部分（100 μSv/h 以上）はほぼなくなっているが、黄（20-50 μSv/h）、緑（10-20 μSv/h）、青（5-10 μSv/h）は残っている。また、被災した自宅や仮設住宅などとともに避難家族の写真もあった。







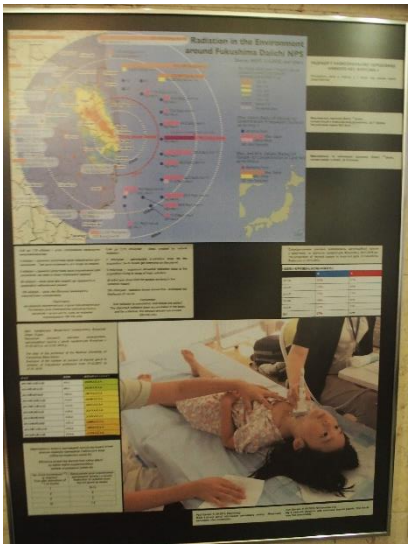




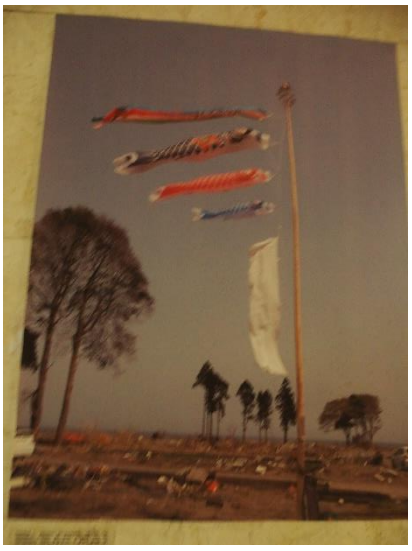



犠牲「万単位




Radiation in the Environment around Fukushima Daiichi NPS





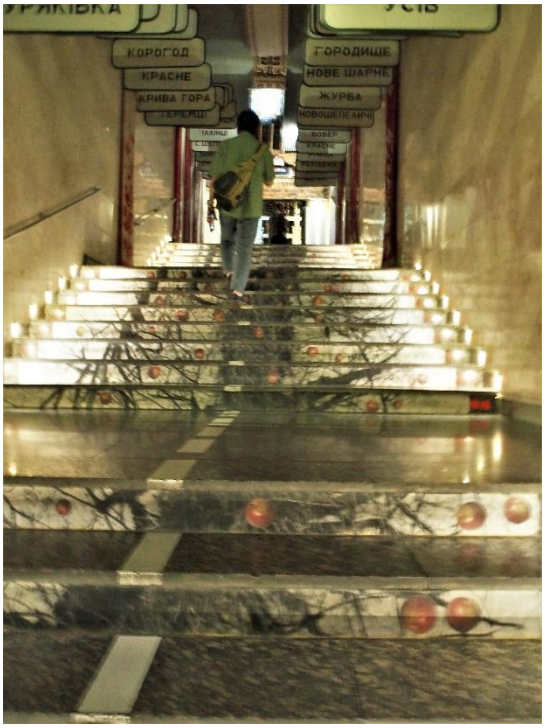


左側の壁には、双葉町の「原子力明るい未来のエネルギー」の看板や白い防護服を着た作業員、地震・津波被害の新聞記事、津波後の光景と鯉のぼり、原発サイト、甲状腺検査を受ける子ども、積み上げられた除染土、柿や桃など福島の農産物を含む風景の写真なども展示されていた。

なお、鯉のぼりの鯉は、実物が天井にも並んで展示されていた。これは、鯉のぼりを復興になぞらえた福島大学の「鯉のぼりプロジェクト」より寄贈されたものということだ。







チェルノブイリ原発事故の展示

1 階の展示スペースには、ウクライナの民族衣装を身に着けた小さな人形たちが展示されているが、天井には、原発事故によって消滅した村（強制避難区域）の標識とともに、鯉のぼりの鯉が吊られており、それらは右手の階段の天井に続いていく。詳細な説明はなかったが、チェルノブイリと福島のイメージを融合させ、原発事故を人類の普遍的テーマへと視覚化しているようにも感じられた。

階段の段には、大きなリンゴの木が描かれ、方々に細かく枝分かれし、たくさんのリンゴの実がなったり、落ちたりしているようだ。リンゴの木のイメージは、後の展示でも再現され、チェルノブイリのシンボルのようである。エデンの園の知恵の木を表しているのかもしれない。

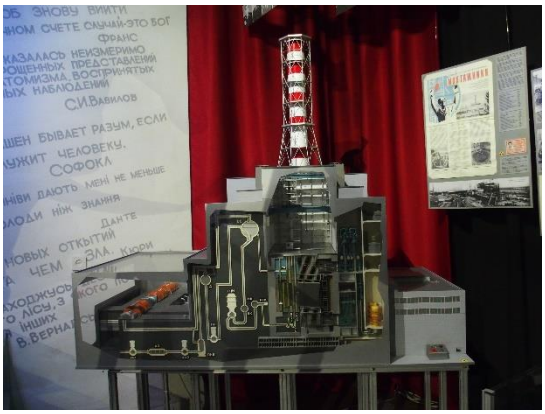
大きく伸びる枝が避難住民を、なった実が次世代の子どもたちを意味し、離散（ディアスポラ）のイメージという説明もある（東浩紀「チェルノブイリ博物館」東浩紀『チェルノブイリ・ダークツーリズム・ガイド』ゲンロン, p.44、2013）。

階段を上り、後を振り返ると、標識の村の名前にはすべて赤の斜線がひかれていた。事故で消滅した 76 の村である。

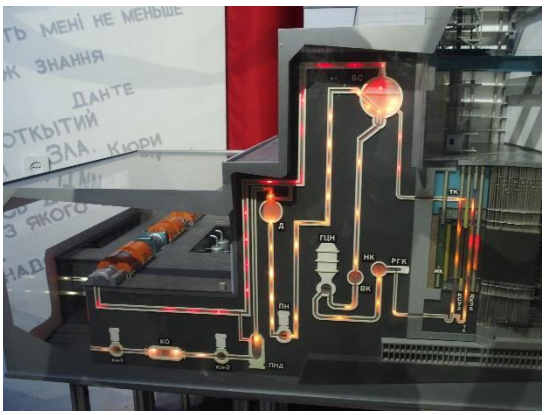








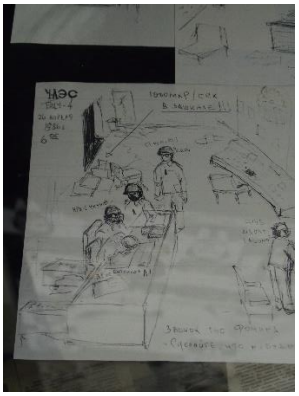
二階に上がると、左右の展示室（入口は別だが、奥でつながっている）と、正面に大きなホールがある。右側の展示室に入ると、薄暗い中に青いライトに照らされて、消防士や作業員たちの等身大人形と、事故で止まった 1 時 23 分を示す丸い時計が天井から吊るされており、一瞬、ぎょっとする。よく見ると、人形と一緒にたくさんの写真が並べられている。犠牲になった消防士たちだろう。ここは、「事故の夜」がテーマである。事故前、事故当時、事故後のチェルノブイリ発電所のジオラマもあった。



天井にも壁にも、ショーケースにも、所狭しと写真や資料、遺品などが展示されている。オーディオガイドや英語で読める説明からわかるのは、原発事故がどのように起こったのか、事故当時の原発内の様子、命がけで事故収束にあたった人々、当時のソビエト連邦政府が事実を隠蔽したために起きた悲劇、殉死した人々の人生の物語、責任をかぶせられて罪を問われ、最終的に名誉回復した人たちなどについての情報が展示されていた。

夥しい数の顔写真、関連のドキュメント、ID、勲章、衣服、眼鏡、手紙、日記などの遺品もある。殉死した人々には、放射線の危険を示すときに用いられる黄色と赤の小さなバッジがおかれている。英語の説明は限定されているが、展示を見れば、その人が消防士だったのか、作業員だったのか、看護師だったのか、どのような状況で事故収束と関わったのかが推測できるようになっているし、これまで公開されてきた書物やドキュメンタリー映像などで見聞して、誰と特定できる人々もいる。事故当日の指令室を描いた手書きの絵もあった。











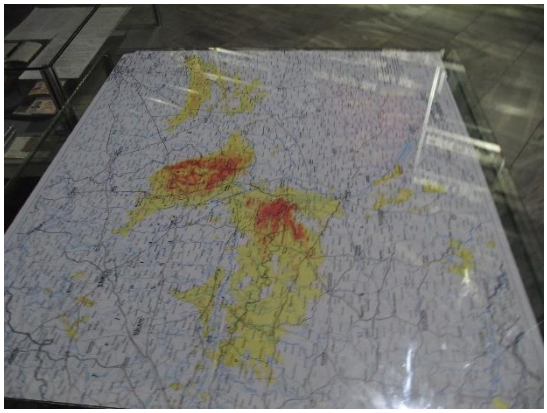
事故直後、火災を消火し、がれきを取り除き、汚染廃棄物を地下深くに埋める事故処理作業があった。遠隔操作のブルドーザーやロボットなどは電気回路が放射線で故障してしまうので、人間が直接作業にあたるしかなかった。旧ソ連は、この作業のため、現地に 600 万人を送り込んだ。これらの作業にあたった消防士、兵士、作業員、鉱夫たちは、「リクビダートル（ロシア語で後始末をする人の意味）」と呼ばれるが、それらの作業には、非常に高い放射能被爆（レントゲン撮影の約 1200 倍といわれる）が伴う。当然、それは致命的なもので、急性放射線障害で亡くなったり、後に癌を発症したり、病気や障害を抱える人々があった。爆発とともに、発電所内にいた 2 人が死亡し、急性放射線症候群と診断された救急隊員 134 人のうち、28 人が数カ月以内に亡くなった。その後も、少なくとも 19 人が死亡した（BBC NEWS JAPAN　2019 年 4 月 26 日）。

当初、旧ソ連はこの事故を隠し、事故から 2 日後の 4 月 28 日、スウェーデンの原子力発電所の職員の靴から高線量の放射線物質が検出されたことがきっかけとなって、西ヨーロッパで異変に気付かれることになる。スウェーデン政府の外交官がソ連政府に、原子力事故が発生した事実がないか問い合わせたが、ソ連政府はその可能性を否定、国際原子力機関（IAEA）に報告する意向を伝えると、一転してチェルノブイリ原発で事故が発生した事実を認めた。

1986 年にソ連政府が国際原子力機関に提出した報告書によれば、事故の原因は運転員の規則違反の積み重ねで起こったとされ、これに基づいて非公開裁判で 6 名が罪を被り、服役させられた。1991 年にソ連最高会議の要請で行なった再調査での報告書では、人的要因は濡れ衣で、原子炉の欠陥が原因であると結論を出した。

反対側の壁には、写真パネルが並べられ、「チェルノブイリ　怖れと悲しみ」「チェルノブイリ　悲劇」などとタイトルがついていた。たとえば、「チェルノブイリ　怖れと悲しみ」のパネルには、「私は究極の怖れと悲しみを感じる。人類は核を持つべきではない。ええ、たしかに、アートは人々の心を変える力があると思う」とメッセージが書かれており（これは英語で表記）、過去の企画展のものかもしれない。そのなかには、永井一和のメッセージが重ねられた原発の写真も展示されていた。「チェルノブイリ記念」と題されていて、「チェルノブイリ事故記念日に、“汝殺すなかれ”のポスター展から 2 枚のポスター写真をメールする。それを見て、命の大切さを心に刻んでもらえたら幸いである」という内容である。日付は入ってないが、おそらくは事故後比較的初期の記念日であろう。















入口に近い方はパーソナルな展示が主となっているが、奥の方に進むと、もう少し集合的な記録が扱われている。事故処理の現場を記録した映像とともに、防護服を身に着けた等身大の人間が置かれており、鎧のように、胸と性器の部分に放射能を遮るよう鉛のベストをあてている。放射線量があまりに高く、作業は 2 分が限界だったという。

その他、放射能測定器、汚染を表す地図なども展示されていた。チェルノブイリ原発

事故の報道に関する当時のソ連と世界各国の新聞記事が並べられ、比較できるようになった展示もあった。旧ソ連がいかに情報操作したかがよくわかる。







事故前後のプリチャピの街の様子、避難の様子、避難を拒む住民などの写真や映像もあった。放射性物質の探知機も低維持されていた。ウクライナでは、もともと毎時0.2μSvだった放射線量が、場所によっては、事故、15mSvにまで達していた。キエフ市内では、5月1日にメーデーのパレードがあって、住民たちは何も知らないまま参加していた。音声ガイドは、子どもの甲状腺癌が2010年時点で6,250例報告されていると言っていた。天井からは、赤や緑や青で彩られた大きな旗がたくさん吊られていて、事故処理に駆り出され、今は旧ソ連から独立した国の国旗なのかもしれない。一番奥には、事故のジオラマがあった。





奥からさらに進んでいくと（階段から左側にある展示室へとつながっている）、赤、青、緑、黄、紫と色を変えながら照明をあてられた大きなリンゴの木の造形があった。リンゴの木は、小さなベビーベッドと思われるものを突き抜け天井に向かって伸びていた。枯れているのか葉はついていない。地面には、地層のように、たくさんの家族写真や木製のフレームが重ねられ、所々に真赤なリンゴの実が落ちている。リンゴの木の枝にも家族写真が吊られ、木を囲む壁には、フレームに入った家族写真が飾られている。これらは、立ち入り禁止地区に残されていた写真だそうである。禁断の実を食べ、生命の木を枯らしてしまった人間の軌跡であろうか。おどろおどろしい雰囲気を感じる。



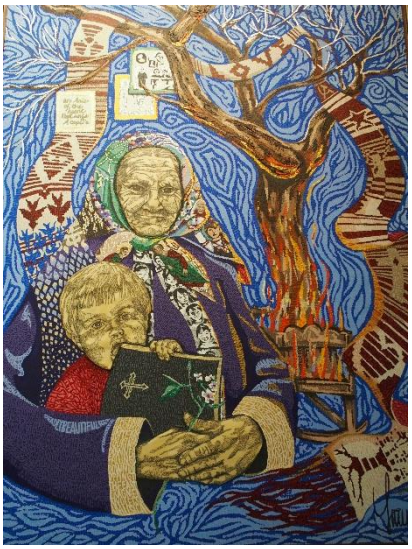








その隣には、チェルノブイリ周辺のジオラマや事故後の写真があったが、テレビかビデオの教育プログラムなのか、撮影中で、近づいての観覧はできなかった。プリチャピは、原発から 30 キロ圏内にあり、4 月 27 日に避難勧告が出て、たくさんのバスが出て、数時間の内に避難が完了したが、避難内容は知らされず多くがキエフに避難し、そのまま帰れなくなった。それ以外の地域の避難が決定し 6 日に完了、総数 11 万 6 千人が避難した。出口近くにも、今やゴーストタウンと化したプリチャピの写真がたくさん飾られていた。



それから世界のアーティストたちによる大きな絵画や刺しゅうなどの展示や、医療者や検査を受ける子どもたちの写真があり、松の木が放射線を吸収したためにキエフの被害が軽減されたという松の枝の標本があった。松の木はオレンジ色に変色し、「オレンジの森」と呼ばれるようになったという。









動物の奇形は 3 倍になったとのことで、頭がひとつ、胴体がふたつで生まれた子豚の標本と写真、研究論文のようなものが展示されていた。子豚は、放射線量が高かったジトミール州で、事故の 1 年後に生まれたものとのこと、恐ろしくて目を背けたくなる。

それから、子どもたちの診療に用いられた器具や白衣、診療の写真の展示があり、出口近くには、立入禁止区域内から避難する人や、事故処理にあたった作業員たちが使用していた放射線測定ゲートの実物が置かれていた。





最後は、広島、長崎に関する展示で、ガラスケースの中に、原爆の写真と新聞記事、原爆ドームの写真、被爆者の絵、日本で出版された関連の書籍や新聞、イベントちらし、折り鶴などがあった。また、ユニセフや赤十字、交流のあるさまざまな国の市民団体との関係を示す展示があり、子どもを守る国際的な連帯を表しているようだった。

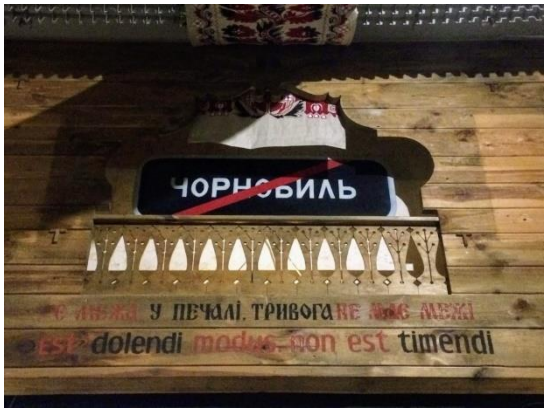






メインホール

左右展示室を出て、中央突きあたりのホール展示室の入口上の方には、またしても赤い斜線で消されたチェルノブイリの標識が飾ってある。木製のフレームは、立ち入り禁止となった教会のファサードである。“Est dolendi modus, non est timendi”というラテン語が書かれていて、これは、HP によれば、 “There is a limit of sadness, anxiety has no limits.”（悲しみには限りがあるが、不安には限りがない）という意味だそうである。

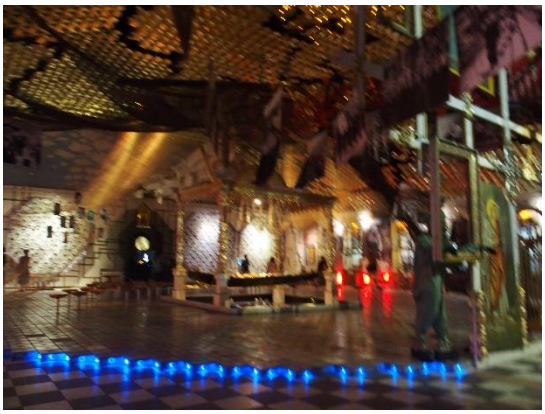


門をくぐると、広い空間が広がるが、全体はやはり暗く、赤や青でライトアップしてある。中央の床には、事故を起こした原子炉の屋根が実物大で再現されている。

象徴的表現で表されている空間の意味については、デザイナーに直接話を聞いたという東（2013）の説明を紹介する。最初に対面するのが、イコノスタシス（聖なる空間を区切る壁のようなもので、格子組のパネルにイコンがつけられている）であり、炉心の部分に入ると、左には聖ガブリエル、右には防護服で、防護服は、事故当時旧ソ連の書記長だったミハイル・ゴルバチョフの名前と聖ミカエルがつながり、ロシア正教のシンボルと原発事故のイメージが交差する仕組みだそうだ。



炉心中心部には、ゾーン内で拾得したという木船とたくさんのぬいぐるみ、まるでゆりかごかノアの箱舟のようにも見える。

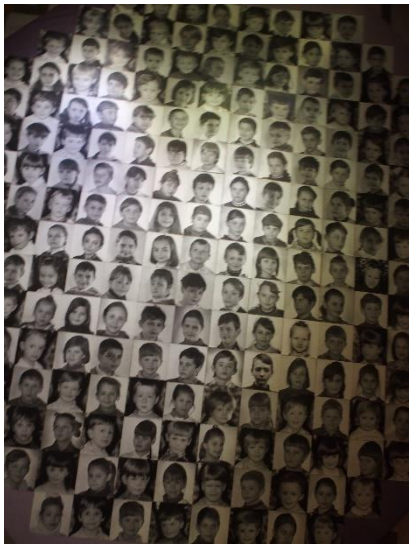




天井には原子炉素材で世界地図が描かれ、原発所在地にランプが灯る。

正面壁画、モニター背後には、4 号機原子炉の屋根と同じデザインで並べられたたくさんの子どもたちの顔写真がある。1986 年、1987 年に生まれたリクビダートルと避難者の子どもたちである。入館者は、被災した子どもたちに見つめられながら、ドキュメンタリー映画を鑑賞することになる。もう事故は起きないと安心して博物館を訪れる人々に、もう一度炉心のうえに立って考えてもらいたいという意図があるそうだ。





脇には、ガスマスクと防護服を着た 3 人の等身大人形が立っている。周囲には子どもたちや旧ソ連時代のウクライナの写真やおもちゃ、生活用品の展示、絵画。また、チェルノブイリ原発事故から、最初の 10 日間に、放射性物質を含んだ雲（プルーム）がどんなふうにどこまで流れていったかが、時間経過とともに動画で展示されていた。なお、これは、公式 HP でも見ることができる。







チェルノブイリ・ミュージアムの特徴

このミュージアムの特徴は、非常に抽象度の高いアートを使った展示が行われていることだろう。文化的背景をよく知らない者にも、それらの展示は、圧倒的力でもって情緒的な揺さぶりをかける。

このミュージアムをデザインしたアナトーリ・ハイダマカは、感情と象徴性を重視し、「詩を書くように展示する」のだという。同時に、問題提起を行う。たとえば原子力について、エネルギー問題は解決が難しい。リスクはあっても原子力なしではやっていけない。しかし、安全性を高めることはできたのではないか。「なぜ福島では、津波のことを考慮せず、海岸に原発を建ててしまったのでしょう。なぜチェルノブイリでは、3つの川の合流点に原発を建ててしまったのでしょうか。･･･展示を通して、こういうことを伝えていく」という。

彼の展示は、子どもの頃の記憶やおとぎ話、民俗的な慣習と結びついた象徴によるものなので、外国人にはわからないところがある。それでも、訪問客には確実に届いている手応えを感じるという。もちろん、資料とシンボルのバランスは必要で、書類や写真もある。メインホールにあるノアの箱舟のように見えるボートは、ボートも中のぬいぐるみも、いずれもゾーンから持ち運んできた立派な資料である。

展示のほとんどがロシア語もしくはウクライナ語になっており、訪問客は音声ガイドで説明を聞くことになる。2 時間ほどの内容で、かなりボリュームがあり、充実しているが、それを聞いていると、展示が狙う情緒的反応に注意を向けることが難しく、どちらかと言えば混乱するかもしれない。

副館長アンナ・コロレーヴスカによれば、この博物館では、子ども向けの特別なプログラムや大学生向けのシンポジウムや討論会を催している。キエフの中高教育機関の教員との協働プログラムで、生態学や生命の安全、気候などをテーマにしたり、元事故処理員の講演なども開催しているという。ウクライナには「生活の安全」という科目があって、学校教育の一環としての来館もある。たとえば、「エコロジーの授業」では、4つのテーマを立てたインタラクティブな体験学習があり、メインホールの原子炉を模したプレートの上に子どもたちが座り、話し合ったり、クイズ形式でゲームを行ったりする。

反応はとてもよい。原子力とは何か、さまざまなエネルギーを求めて生きた人間の軌跡を話たり、アニメーションを見せたりもする。ガイドは、「アトムおじさん」という博士の恰好をして、ゲーム感覚で会話をする。

展示品を管理するのは学芸員であるが、この博物館は文化省の管轄ではなく、事故処理に深くかかわった内務省の管轄であり、組織のトップは元事故処理インの警察官である。そのため、国家からの資金を獲得することができる。スタッフの給料は国によって支払われるが、それ以外の補助金はなく、展示拡張や個々のプロジェクトにはスポンサーを探すことになる。「この事故は人類への最後の警告であり、核軍縮や環境保全に対する戦いへの説得力ある最後のアピールとなるはずです。さらに、国際協力の発展において普遍的価値が優先されるべきことを教えています。」

この博物館は若者に愛されており、世界中の若者が何時間も滞在し、このミュージアムは開館から十年で 120 万人が訪れ、近年ではデートスポットとしても人気を集めているそうだ。その理由は、展示の 7 割がアーティスティックで哲学的な問いかけを行う手法にあるという。

なお、この節の上記情報は、東浩紀(2013)『チェルノブイリ・ダークツーリズム・ガイド』（ゲンロン）に依っている。



※チェルノブイリ・ミュージアムについては、公式 HP のバーチャル・ツアー
http://www.exhibitions.chornobylmuseum.kiev.ua
や YouTube などで観ることができるものが多くある。
National Museum Ch o rnobyl - YouTube - Bing video

チェルノブイリ立ち入り禁止区域（ゾーン）へのツアーに参加する

チェルノブイリツアーについて

ミュージアムの HP には、「キエフの国立チェルノブイリ博物館を訪問するだけでなく、悪化しているチェルノブイリ地区をご自身の目で見て、自然がどう人工物を乗り越えたかをご覧ください。」と博物館の「パートナーツアー会社」の紹介をしてある。

立ち入り禁止地区、通称ゾーンの見学は 1990 年代半ばに始まった。当初はジャーナリストや専門家を対象としていたが、徐々に一般観光客にも門戸を開き、2011 年からは観光地化が本格化していった。2019 年 6 月 10 日、式典に出席したゼレンスキー大統領は、ゾーンを一般向けに解放するとの大統領令に署名し、ここを観光施設として整備し、積極的に活用することを決定した。

折しも、2019 年 5 月から 6 月にかけ、アメリカのテレビドラマ「チェルノブイリ」5 回シリーズが人気を博し、2015 年には 8 千人だった観光客が 2019 年の訪問客数は、6 月段階で 10 万人と予測された。

Williams (2007)は、チェルノブイリ・ゾーンへのツアーにおいて、プリピャチの町はある意味で生きたミュージアムであり、不気味な歩く劇場であると言っている（Memorial Museum: Global Rush to Commemorate Atrocities. Berg)。

チェルノブイリはウクライナの首都キエフから約 110 キロ北部の都市プリピャチ近郊にある。ウクライナ政府がエリアを管理しており、政府に登録している公式旅行会社のツアーに申し込む必要がある。ネット

検索するといろいろなツアーが出てきたが、日本語通訳つきの日帰りツアーに申し込んだ。事前にパスポートでの参加登録が求められ、申し込みすると、「アミューズメント・パークのような行動をしてはいけない、警備装置の撮影禁止、地域内で物に触ってはいけない、皮膚の露出は最小限に、屋外で飲食しない」などの安全規則が送られてきた。緊張する。



ゾーンへ

朝、キエフ市内のホテルでピックアップしてもらい、車で約 2 時間、居住禁止区域のディチャートキ検問所に着いた。約 30 キロのチェックポイントだ。

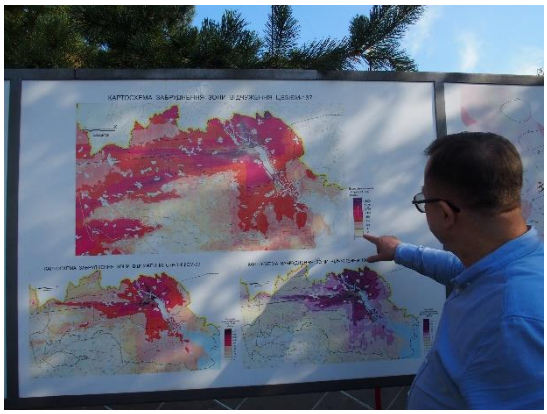
日本語ガイドのアレクセイさんは、事故の時、5 歳の男の子がいて、1 年間避難しなければならなかったという。子ども時代、日本の 4 つの島の名前が気に入って、この言語を勉強したいと思い、中学の時、本屋で日本語のテキストを買って、授業中、こっそり勉強していたそうだ。高校の頃、モスクワで日本語を学び、日本に一度来たことがある。現地ガイドのセルゲイさんは、事故処理に関わっていた。福島の 20 キロまで行ったことがある。十周年には、環境省からの招待で日本に来るという。

ゾーンから強制避難させられた人は約20万人で、最も多いのがプリピャチ市の約 5 万人。次がチェルノブイリ市の約 14,000 人である。事故によって、政府の命令ですべての人が避難したが、1 年で 1,500 人が戻った。公式には、帰ることは禁止されているが、サマショールとは、自ら決定して住むことにした人という意味である。みな高齢者だったため、今、生き残っているのは 113 人になった。ここに働く職員は 7,000 人いる。立ち入り禁止区域の森は、126,000 ヘクタールあり、全部で 12 の検問所がある。注意事項を示す看板もあったが、ツアー参加申し込みに伴い送られてきた「安全規則」と同じ内容だった。



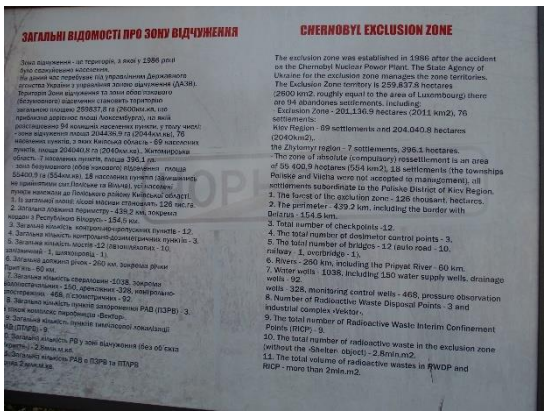












驚いたことに、検問所の手前には黄色い木製ボックスのみやげ店があり、ガスマスクや防護服、マグカップやTシャツなどが売られていた。アメリカ人らしきグループが複数いた。検問官の写真を撮ってはいけないとのこと。検問所で ID チェックを受け、カード式の線量計を受け取って首からぶら下げる。舗装された一本道をずっと走っていくが、途中途中に、ミュージアムで見たような村の名前の入った標識がある。

ところどころに観光スポットと言える場所があるようだ。チェルノブイリと書かれたモニュメントの前で、ガイドから「ここで記念撮影をします」と言われる。言われるまま集合写真を撮るものの、かなり複雑な気持ちになる。いったいどんな顔をして映っ

たらいいのか。もともと原発には名前がなく、事故後にチェルノブイリの名前がつけられたが、実際には、チェルノブイリになかにあるわけではなく、原発から 20 キロ離れている。事故後帰宅してきた人が今でも住んでいるそうだ。

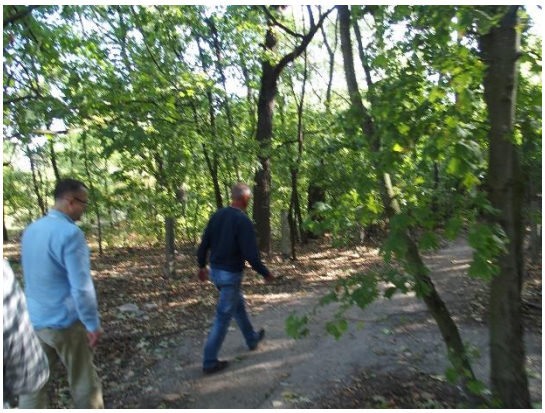






コパチ村で

さらに進むと、10 キロのチェックポイントがある。廃墟となったコパチ村で、ほとんどの建物は壊され土の中に埋められてしまったが、今なお残る幼稚園を見学する。車を止め、林の道を進む。道からはずれると林の中は放射線量が高いとのことで、ガイドが線量計をあてると 5.6μSv/h ほどある。レンガ造りの建物の中に入ると、荒れ果ててはいるが、子どもたちの昼寝用のベッドが並び、絵本やおもちゃなどが散乱していた。

















チェルノブイリ原発

コパチ村から林を抜け、さらに進むと、冷却水供給のために作られた人工湖があり、巨大な冷却塔と建築途中だった 5 号機と 6 号機が見えてくる。周囲には錆びついた大きなクレーン車が何台もそのままの姿で残されていた。

そこから 2 キロほどで事故のあった 4 号機とのことで、2016 年 6 月に完成したという新石棺が見えてくる。石棺とはチェルノブイリ原発 4 号機を封じ込めたコンクリートの建造物で、原子炉を遮へいするために事故後すぐに作られたが、老朽化による放射性物質漏れが懸念され、さらに大きなかまぼこ形の新シェルターで石棺を丸ごと覆ったものである。



周囲を回り、撮影ポイントとなっているモニュメントの前で車を降りる。新石棺の効果か、ここでは 0.56 μSv/h だった。

プリピャチへ

そこから車で 5 分ほど、もっとも原発に近いプリピャチの町へ行く。プリピャチは、1970 年、原発の建設と一緒に作られた人工都市で、原発関連の職員とその家族が住んでいた。模範的なソ連の都市とみなされており、15 の幼稚園、25 の商店、5 つの学校、カフェ、レストラン、病院、ホテル、河港、映画館、プールなど、充実したインフラを備え、事故前には 5 万人が住んでいたという。

原発事故をそうとは知らず、町の人々がそこから眺めていたという「死の橋」や線路などを通り過ぎ、ゴーストタウンとなった街中に車を止めて、散策する。レーニン大通りのポプラ並木を通り、団地やホテルがある。あちこちに伸びた草木が生い茂り、犬がいる。裏手には開園前で事故が起こり、一度も使われなかったという遊園地があり、観覧車、錆びついた回転ブランコ、ゴーカートなどがあった。

それから、文化施設が集まった建物があり、劇場、体育館、飛込台付きの大きなプールもあった。さぞかし立派な施設だったと思われるが、窓は破れ、むきだしの鉄骨は錆び、天井も床も壁も朽ちかけている。それから、小学校へ。黒板に白墨で名前と 1986 と年が書かれており、当時の小学生が戻ってきて書いたのだろうということだったが、机の上に置かれたガスマスクやピカチューの落書きは、観光客によるいたずらだという。プリピャチ川の船着き場にあるカフェを見る。ここも朽ちかけてはいるが、大きなステンドグラスの壁が残っており、洒落た場所だったのだろう。入口には古い自動販売機さえあった。





















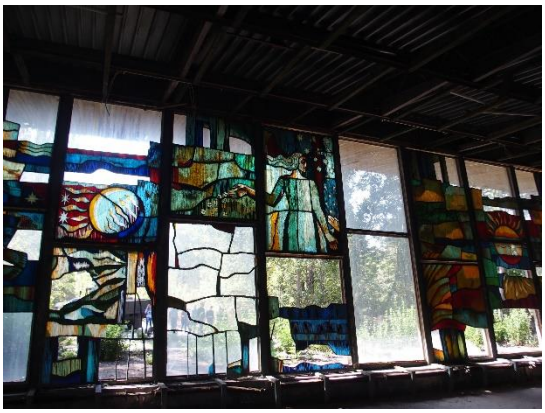

Комарчук
Сергей
6А 1986
THE PRESENT INDEFINITE TENSE
THEY LIKE MILK
THEY ... LIKE MILK.
HE WANT ... AN APPLE
HE ... WANT AN APPLE.


ПАМЯТЬ













それから、原発で働く職員用の食堂で昼食をとる。建物を入ったところに放射能測定器があり、全身をチェックしてから食堂に入ることができた。多くの職員と観光客が当たり前のように同じ場所で食事をしていた。チェルノブイリは、現在も送電施設および廃炉作業の拠点として機能しており、多くの職員が働いている。

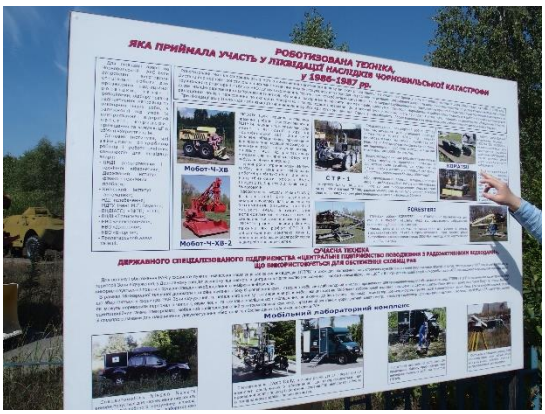




チェルノブイリ市へ

食事後、チェルノブイリ市の方へ戻り、重機を集めた広場へ。事故後、世界各国から寄付されたレスキューロボットだったが、放射線量が高すぎて、すぐにコンピューターが壊れてしまったそうだ。







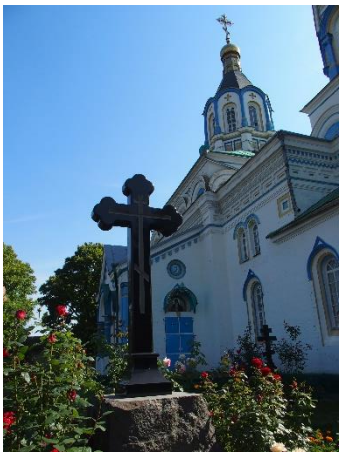
「世界を救った人々に捧ぐ」と書かれた消防士たちの記念碑。街の人が声をあげて寄付金を募り、事故から十年後の 1996 年に完成したが、資金不足でアマチュアが造ったものだという。







事故がおき、修理のために持ってこられたまま放置され、少しずつ朽ちて沈んでいく「船の墓場」と呼ばれる場所を訪問後、チェルノブイリ教会堂へ。唯一残っている教会ということで、色とりどりの花が咲き乱れ、ここはよく手入れされているように見えた。











ニガヨモギの星公園

それから、「ニガヨモギの星公園」へ行った。ここは、事故後 25 周年を記念して作られた公園で、博物館もある。公園入口には、ラッパを吹く大きな天使像がある。ヨハネの黙示録第 8 章 10 節に、「第三の天使・・・黒い天使はラッパを吹き鳴らす。それによりニガヨモギの星を川に落とし、地上の川の三分の一を毒にする」という文章があり、チェルノブイリの地名はウクライナ語でニガヨモギを意味するということで、事故を予言したものとされたそうだ。ちょっと不思議な話だ。

公園には村の標識がずらっと並ぶ「記憶の道」があり、進んでいくと、郵便広場と呼ばれるところに青い郵便ポストがあった。これは旧ソ連時代のポストで、失われた村の住所を書いて投函すると、村ごとの郵便受けに配達され、避難民同士が交流できるようになっているという。

















それから、「福島の記憶」と名づけられた広場に行く。赤と白の折り鶴や、”HIROSIMA”、”FUKUSIMA”という文字を象ったオブジェがあった。また、「ウクライナ国と日本国、両国が負った大きな心の傷が今後この地球上で二度と起きない事を願うと共に、ウクライナ国と日本国、両国のさらなる友好の証しに記念植樹をします。2012 年 4 月 26 日」と書かれた説明版があった。

ここには、福島の避難対象自治体の標識を追加する計画もあるという。

サマショール訪問

その後、私たちは、チェルノブイリの小さな商店で手土産を買い、車でサマショールの家を訪問した。クワポテ村（Kupovate）の農家のワシリさんとテチアさん（Lavrienko Vasili&Tetyana）だ。

強制避難先から最初に許可なく帰ってきたサマショールと呼ばれる自主帰還者は全部で 2,000 人程で、政府は対策をとろうとしたが、次第に目つぶるようになった。サマショールの現在の平均年齢は 80〜85 歳で、ウクライナ人としてはかなりの高齢になると聞いていたが、私たちが訪ねたのは、次世代と言うべきか、60代くらいのカップルで、ワシリさんはここの出身であり、テチアさんは父親がここの出身、キエフから移り住んで来て 1 年だと言う。そんな人たちもいるのだと知った。

かれらの家は、水色や緑のペンキで塗ったの小さな木造で、庭には花が咲き乱れ、メルヘンチックに見える。テーブルの上には、大量のご馳走が並んでおり、サーロと呼ばれる豚の脂身を塗ったパンや採れたての野菜、魚のフライ、そして自家製ウォッカ。もう一組の観光客とガイドと一緒になり、ご馳走になった。ガイドは、「世界最悪の町に来てくれて感謝する」と言い、サマショールのカップルは、「今日のお客さんは笑顔で喜んでくれて嬉しい」と言った。楽しそうな家族写真を見せてもらった。野菜、りんごや桃の木、たくさんのものが実る畑を案内してもらい、手作りウォッカやひまわり、野菜などたくさんの土産を頂いた。

この経験をどのように消化すればいいのかまったくわからない。

























ウクライナのホロコースト

オデッサのカタコンベ



キエフからオデッサへ飛ぶ。目的は、『地球の歩き方』に出ていた「パルチザン栄光の博物館」だった。私は、もともと人類の負の遺産をどのように扱うかに興味があり、原発事故関連ミュージアム以前に、ドイツやポーランドでホロコースト関連ミュージアムを何度も訪れてきた。プラハやブダペストなど、政権交代による展示内容の変化にはとくに興味がある。

ほとんど情報がないので、事前にいろいろ調べていたところ、ネット上にこのミュージアムに行った人たちの体験記がいくつか見つかった。オデッサは町の建築当時、千キロに及ぶ地下道を作り、その迷宮が後にナチス・ドイツに対するレジスタンスとして使われていた。その一部を博物館として公開しているという。ガイドブックには、個人では入れないので、広場のツアー売りに声をかけて申し込むか、宿でツアーを頼むようにと書かれていた。

宿のロビーに貼ってあった観光案内のカタコンベツアーに申し込む。フロントの人と話すが、どうも話がおかしく、このツアーが件のミュージアムかどうかわからない。出発まで時間があるので、とりあえず、ミュージアムの住所を打ち込み、UBER を呼ぶ。ドライバーがここはカタコンベではないというが、ほとんど言葉が通じず、30 分かけてその地へ。ネットで見たのと同じ入り口だったが、鍵がかかっていて中に入れない。





やむなく、またタクシーで町まで戻り、申し込んだツアーの集合場所へ行った。最初はロシア語ツアーだったが、少し待つと女の子の英語ガイドが来てくれ、予定より早くツアーが始まる。

このツアーは 7 年前に始まり、3 年前から盛んになった。それまではきちんと管理されていなかったので、自由に出入りでき、

落書きが多い。オデッサには巨大地下通路が張り巡らされており、3000 キロとも 6000 キロとも言われている。もともとは坑道で、黄色石灰石を掘って地上に家を建てた。そこはいろいろな目的で使われていて、女性囚人の収容所だったこともあり、ソビエト時代の核シェルターだったこともある。

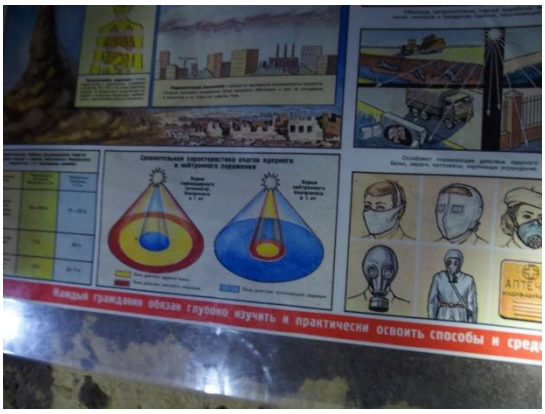
核爆弾が落とされてもこのようにしたら大丈夫というポスターが展示されている。ガスマスクは牛や馬など動物にも作られていたが、猫にはなく、猫はソビエトに役に立たないから差別されていたと言うが、冗談なのか本気なのかわからない。それから、船の美術館、後には坑夫たちが描いた船の絵。6 日交替で地下に滞在するため、頭がおかしくならないように絵を描いたのだという。タイタニックの絵もあった。タイタニックがオデッサ港に寄港したことはないが、オデッサ出身の裕福なユダヤ人宝石商が乗っていて、助かったので、記念に黄金のタイタニックのミニチュアを作った。政治的理由で脱出するとき持ち出せず、カタコンベに隠して地図を作った。本人は帰ってこれず、息子に託したが、見つけられないまま、黄金伝説となっているという話だった。

途中、暗闇実験だと言って、懐中電気を消して暗闇を体験する。一定時間が経つと幻覚が出てくるのだそう。それから、ろうそくを灯してのティータイム。お菓子と紅茶。

関心を持っていたパルチザン栄光の博物館のことを尋ねると、それはソ連のプロパガンダなのだという答えが返ってきた。彼女が曾祖母から聞いたという話を聞かせてくれる。ナチスが物と家を接収にきたが、赤ちゃんがいるから許してと頼んだら、何も取らずチョコレートバーをくれた。ソビエ







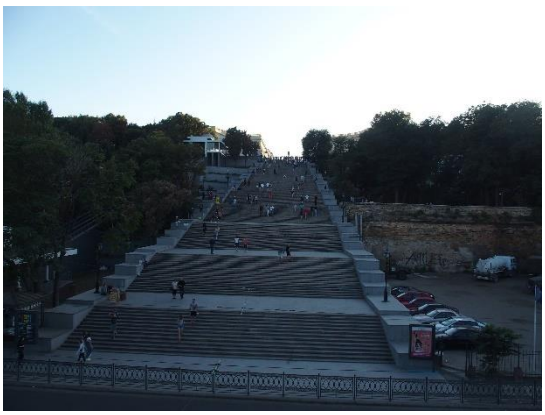












ト軍はレイプに略奪、殺人。思春期の子どもまでレイプされた。コルホーズ、ソホーズの話。祖母は農園で働いたが給料はもらえず、穀物少しだけ。工場で働いていた人も釘しかもらえなかった。その後、癌になって手術したばかりなのに労働させられそうになり、このことは誰にも言うなと言われた。英語を話す若者は、他国に行ってしまう。自分もなぜ行かないのかと言われるが、ここに大切な国があるのに、それを捨てたら後は誰が面倒を見るのか。今はみな自分のことばかりしか考えない。学校ではそのような歴史は教わらないが、ここで働くようになって、サークルに入って活動している。2014年の革命以来、変化はあるが、これからどうなるのかわからない。彼女は23歳なのだという。何と言っていいのかわからない。

　その後、公園まで行きブラブラしてポムチョキンの階段へ。途中、遊覧船のチケット（480円）を売っていたので乗ってみる。黒海だ。

バビヤールへ

帰国に向けてキエフに戻る。聖キリル修道院の近くに、ホロコースト記念地であるバビヤールがあると知り、夕刻に向かう。







1941 年 9 月 29 日から 30 日にかけて、ナチス・ドイツとウクライナ警察により、3 万 3771 人のユダヤ人市民がこの谷に連行され、殺害された。バビヤール大虐殺は、ホロコーストにおいて 1 件で最大の犠牲者を出した虐殺だという。その後も、数多の市民がバビヤールへ連行され、銃殺された。第二次世界大戦中、およそ 10 万人がバビヤールで殺害され、その大多数が市民であり、その多くがユダヤ人だったそうだ。

バビヤールの悲劇について、旧ソ連はユダヤ人虐殺という側面を強調することを嫌い、キエフ市民および旧ソ連に対する犯罪として扱った。バビヤールでは、ユダヤ人犠牲者を追悼する記念碑の建設が幾度か計画されたが、いずれも却下された。

1961 年、ロシアの詩人エフゲニー・エフトゥシェンコが『バビ・ヤール』を書き、これが、ショスタコーヴィチの交響曲第 13 番に使われたことは初めて知った。

1976 年、バビヤールで殺害されたソビエト市民の追悼碑が公式に建設され、1991 年のソ連崩壊後、ウクライナ政府はユダヤ人犠牲者のために新たに追悼碑を建設することを認めた。現在、バビヤール周辺には、さまざまな追悼碑が建てられている。






I WILL PUT MY BREATH INTO YOU
AND YOU SHALL LIVE AGAIN
THIS CORNERSTONE
OF THE JEWISH HERITAGE
COMMUNITY CENTER
WAS LAID
ON THE 80th ANNIVERSARY
OF THE BABI YAR MASSACRE


ПАМЯТЬ
ЗАРАДИ
МАЙБУТНЬОГО


ПЛАН-СХЕМА









今回の旅では、歴史的出来事を記憶し伝承するミュージアムや記念碑が、いかに国家の思惑によって左右されるものなのかを思い知ることになった。政治体制が変われば、その内容や位置づけも当然ながら大きく変わるものだ。

日本において、敗戦後、一夜にして価値観が 180 度転換したことが当時の人々にどれほど大きな影響を与えたかは聞いてきたが、それは自分の想像をはるかに超えるものだったのだろうと改めて思う。

ウクライナは今、その歴史的大転換のさなかにある。チェルノブイリ原発事故とその事故処理、歴史における意味づけは政治体制とともにあった。街中にはまだまだ旧体制の跡が残り、若者たちを含め、ウクライナの人々は命がけで民主化を勝ち取ろうとしている。

冷戦後、世界のあちこちで起こってきたことであるが、日本ではこのような命がけの民主化運動はあったのかは疑問である。たしかにごく一部の人々は闘ってきたが、それは民衆に支持されることなく弾圧されてきた。そう考えれば、日本は本当には独立国ではないのではないかと思えてくる。原発政策をやめられないのもその表れなのかもしれない。

コミュタン福島の衝撃から始まった旅だったが、ミュージアムを市民の手で良いものにすることは、政治的なことと切り離せないのだ。

つづく

対人支援点描（26）

「スピリチュアルについての研究ノート」

小林　茂（臨床心理士/牧師）

はじめに.

私が臨床心理を学び始めたとき、それ以前に宗教者という立場と、たまたま臨床心理や福祉を学び始める以前にユングの心理学に触れる機会があり、いわゆる深層心理学や無意識を前提とした心理学を自分の臨床心理の立場から距離を置くことをしていた。それは、宗教者が深層心理学に熱心になりすぎると、いかにも怪しげであるかの誤解があるように思えたからである。たとえば、怪しげな宗教者、怪しげな心理支援、といった具合である。

結果的に、私にとっての臨床心理は、深層心理学は理解のための学問であって、実践においてはロジャーズであり、認知行動療法であり、といったものを活用するようになった。基本的にベーシックなものであり、一応エビデンスのあるもの、というところに落ち着いたのであった。

しかし、しばらくして、看取りなど終末期への関心からスピリチュアリティという言葉を知るようになったり、認知行動療法の領域から、マインドフルネス、コンパッションという言葉を聞くようになった。

こうしたことから、どことなく心理療法が先祖返りの方向に向かっている感覚を感じるようになった。

今回は、その辺りのことを振りかえってみたい。

１．スピリチュアリティ

現代医療におけてスピリチュアリティに関心がもたれたのは、1998 年に WHO の健康の定義について、身体的、精神的、社会的の３つに加えて、「スピリチュアル」を追加しようという提案がされたことに始まる。この提案自体は、可決するには至らなかったのだが、現在の WHO の健康の定義が西洋主義中心のモノの見方から脱し切れていないこと、身体的・精神的・社会的という３側面だけでは人間の健康を測りきれないことがあったと考えられる。

WHO の健康の定義の見直しには至らなかったが、WHO から出されている『がんの痛みからの解放』、『がんの痛みからの解放とパリアティブ・ケア』というリーフレットには、QOL との関連でスピリチュアルケアの必要性が示されている。

だが、日本においては、スピリチュアリティ、霊的な、霊性、という言葉は、宗教的なものか、占いか、オカルトのような怪しい類の印象が強く定着しているようで、

なかなかスピリチュアルという言葉に距離をとって置かれているように思われる。

２．マインドフルネス

近年のマインドフルネスの流行は、1965 年にアメリカで移民国籍法が成立してアジアからの移民が増加したことを背景に、ドイツ生まれのスリランカ上座部仏教僧ニャナポニカ・テラやベトナム人の禅僧ティク･ナット･ハンといった僧侶たちがマインドフルネスに関する著作を多く書いたことに始まったとされる。医療分野におけるマインドフルネスは、アメリカ人分子生物学者であるジョン・カバット・ジンが禅を学び、1979 年にマサチューセッツ大学で宗教色を排したマインドフルネス・ストレス低減法（MBSR）を開発ことが始まりという。

ジョン・カバット・ジン自身は、自らの禅の立場を道元禅、つまり曹洞宗の禅を基にしているということである。

それゆえ、現在、世界各地で注目され、実施されているマインドフルネスは、日本から輸出され、アメリカで再開発され、世界に広まり、日本へと逆輸入されたものであるといえる。

３．コンパッション

コンパッションという言葉自体は、キリスト教の文脈ではイエスの受苦（自らも苦しむような深い共感。ほぼ仏教の慈悲に近い用語。）を示す。

心理療法の文脈では、イギリスの心理士ポール・ギルバートが開発したコンパッション・フォーカスド・セラピー、、アメリカのセルフ・コンパッション療法を開発したクリスティン・ネフといった比較的新しい心理療法の流れである。

しかし、両者に共通するのは、共に西洋キリスト教の文脈ではなく、仏教の影響や発想が基となっているということである。そこでは、「慈悲」という言葉を元に「許し」など自他の受容の問題を扱っているのである。

まとめ.

大まかではあるが、こうした現象を観ると、スピリチュアリティという大きな源流のなかに、マインドフルネス、コンパッションといった、近現代の西洋文化で欠落していったものを東洋の仏教に資源を見出した潮流と考えらる。

だが、キリスト教学を専攻した日本人からすれば、普通のこととしてキリスト教内にも同様の思想があり、西洋社会で顧みなくなったものを新しく流入してきた仏教に再発見したといえる。また、日本においては、しばしば日本思想や仏教思想の美徳が評価されたかの論述がみられるが、日本の伝統宗教からの乖離は甚だしい。真摯に仏教と向き合う門徒は少数なのではないか。

現代は、東西問わず、昔からある人間の健康的な側面であるスピリチュアルな側面への渇望が、現在の潮流をつくりだすことになっているのではないだろうか。

精神科医の思うこと㉑

「会食」

松村　奈奈子

まだまだコロナコロナな日々。

食べ歩きが大好きだったのですが、食事の形は大きく変わりました。お店で食べるよりちょっぴりお高いので敬遠していたウーバー・イーツを利用してみたり、いつものお店が新たに始めたテイクアウトを試してみたりと、思わぬ体験をしています。

で、「会食」はというと、夫と二人暮らしの私は、夫以外とは会食できなくなっちゃいました。職場の人や、友達家族との定期的な会食は楽しみだったのですが、今は我慢です。

そこで今回は、我慢が続いている「会食」について、仕事に関連した忘れられない思い出をふたつ

そのひとつは、若い頃、異動で他の病院に行くことが決まり、夕方ひとりで残務整理をしていた時の事です。ふらっと院長があらわれて「この後、何人かでご飯でもいくか？」と恥ずかしそうに「会食」に誘われました。当時、私の父親の年齢に近い院長とは、仕事以外の会話をほとんどしたことがなかったのですが、私もなんだか最後にお話をしたい気持ちになって、ご一緒しました。居酒屋では院長先生の横に座り、初めてゆっくり会話をしました。話しているうちに、実は面倒な経営会議には出席しなくていいように配慮してくれていたり、難しいケースはさりげなく気にかけていてくれたなど、私が働きやすいようにサポートしてくださっていた事がわかりました。血気盛んな若い私は、ただ仕事をガンガンこなす事に満足していただけで、恥ずかしい事に、守ってもらっていたのをわかっていませんでした。そして最後に「ちゃんと頑張っているのは知っていたよ」と娘のように頭を撫でてもらった時には、思わず涙がこぼれていました。仕事がハードだったので、ちょっぴりネガティブな思いもあった病院でしたが、すべてを忘れて「いい上司に恵まれてよかった」「ああ、この病院で働けてよかった」と思えた瞬間

でした。あの「会食」がなければ、恥ずかしがり屋の院長に父親のように守ってもらっていた事を、私は十分に知らずにお別れしていました。
「会食」のおかげで、私は大きな事を学んだと思います。

もうひとつ。それは２０年ほど前に精神病院に勤務していた頃のお話です。
病棟の看護師さんの企画で、年に１度、入院患者さんと日帰りで外出するリクリエーションがありました。担当看護師さんは若い方で、ちょっとしゃれた博物館に出かけるプランになっていました。「今回は先生の患者さんのグループリクリエーションなんで、先生も一緒にどうですか？」と誘ってもらって「はいはい、おもしろそうですね」と一緒にバスに乗って出かけることに。長期に入院している統合失調症の患者さんが多い病棟でした。晴天の青い空の下、貸し切りバスに乗り込んで出発です。躁病の患者さんが、バスの運転手さんと楽しそうに会話する以外は、みんな静かに座っています。そうそう、統合失調症の患者さんは、お話が得意ではない方が多いです。私も無理に話しかけることはせず、車窓の風景を楽しませてもらいました。博物館でも、みんな展示物をなんとなく眺めて、ささっと出口に向かいます。その日のランチも看護師さんのプランで、ちょっとしゃれた博物館に併設した、ちょっとしゃれたカフェでとる事になりました。カフェの「本日のランチ」はハンバーグでした。
実は患者さんと食事をとる事は、それが初めてでした。病棟の食堂ホールで食事をとっている姿を見たことがあるだけでした。病棟では、患者さんがほとんど会話することなく、静かに食事をとっている姿を見ていたので、私も黙々とハンバーグを食べ始めました。
すると隣の患者さんから「先生、ハンバーグ切って」と頼まれました。おしゃれカフェにはフォークとナイフだけが用意されていました。「はいはい」と隣の患者さんのハンバーグを切ると「俺も切って」「僕も切って」と周りの患者さんから次々リクエストが。見渡すとみんなフォークとナイフを前に、固まっていました。そして看護師さんもまた、みんなのハンバーグを切り始めていました。「あっ、そうか、病院の食事では、お箸しか使わないもんね」「病院食では、フォークとナイフは見たことないな」と気づいたと同時に「フォークとナイフの無い病院食を、長い時間食べてきたのか」「長い入院とはこうゆうことなのか」と複雑な思いがわいてきたのが忘れられません。
「このハンバーグおいしいね」と少し患者さんとお話をして、患者さんとの初めての「会食」は終わりました。看護師さんが頑張って企画したリクリエーションでしたが、おしゃれな博物館とカフェを患者さんは楽しめたかしら？とちょっぴり疑問も残りましたが、私には忘れられない「会食」でした。

「会食」の思い出はいくつもあり、「会食」を通して学んできた事の多さに改めて気づきます。カンファレンスや定例会議では得られない、何かがあるんですよね。研修医

の頃は、誰かが失敗して怒られると同期の仲間で食事に行くのが決まり事でした。逆に、ちょっとベテランになってからは、息切れしている後輩を食事に誘って話を聞いてみる事もよくありました。私はお酒を飲まないので「お酒」ではないんですよね。「一緒に楽しくご飯を食べる時間」というのが、心に大切なのかもしれません。

次の「会食」ができる日を、今はただ待っています。

馬渡の眼 5
「 名 前 」

馬渡 徳子

今年の母の日に、社会人になって初めての「手作りのプレゼント」を母と義母に贈った。　※写真

コロナ禍にて、お花のお稽古(フラワーアレンジメントと、ハーバリウム)が叶わなくなり、我流で続けてはいるが、やはり、先生と生徒同士での交流しながらの方が楽しいので、再開が待ち遠しい。

そんな時に、友人から「草木染めと織物」に誘われた。講師の先生とは、以前から仕事面でもお付き合いがあったので、「それはもう是非是非!」という感じで、4月より開始した。

そのプロセスは、正に、化学だ。先生による調合が終わり、染めの時間帯は、温度調整をしながら、大きなスープ鍋をずっとむらなくかき混ぜるのだが、魔女になった気分で、愉快だ。

乾燥の時間帯には、羊毛を解し、手繰り寄せたりといった作業も手伝わせていただく。

その傍らで、三台の織機がトントンと音を奏でていて、何とも心地よい。

さて、記念すべき第一作目は、何にしよう！と考えたところ、丁度一カ月目に母の日があり、2 人に共通しているのが、①ショール好き、②茜色と藤色が好き、ということ。そこで、茜色と藤色のショールと、お揃いのマスクを、染めることにした。

なかなかの出来で、自分を褒めてあげたい。(笑)　第二作目は、古着屋で 300 円で購入したカシュクールワンピースを、自分の丈にリフォームしたものの、ちょっと色が気に入らないので、アースカラーに染めるつもりだ。

さて、そろそろ、話を本題に戻そう。今回のタイトルは、「名前」だ。実は、この習い事に誘ってくれた友人のお一人は、

友人の友人で、私にとっては新しい友だちとなったのだが、「姓名占い」がお出来になる方だと、知るところとなる。その方が、「悪天候時の車送迎の御礼に、占っても良いですか?」と訊ねて下さり、私の名前を占って下さった。

　すると、それは、「とても嬉しい、今後の励みとなる内容」だった。
　私の名前の「徳子」は、初対面の方にはめったに「ノリコ」とは、読んで頂けない。大概が、「トクコ」だ。「いえ、ノリコです」と、訂正することが多々あるので、名札や名刺には、必ずフリガナを付けてきた。(笑)
　子どもの頃の学校の宿題で、「名前の由来」を聞いてくることがあり、その際に、母があっさりと、「それはね。平家の流れじゃけえ、『建礼門院徳子様』にちなんで、この家に最初に生まれた子どもには、代々、男女構わず『徳』をつける決まりがあるの。ほら、観てみ!」と仏間に飾ってある先祖代々の写真の名前を指さした。確かに!「えっ。お父さんとお母さんとで、付けたんでないの？」と聞き返すと、「本家という所は、そういう『しきたり』なの。脈々とね。平家の流れかどうかは、本当のところは知らんよ。(笑)」と無表情に、パスっと話を切られてしまった。
　そんなやり取りがあったことを、今も記憶している。
　宿題発表の日に、意外と「平家の流れ」と、自分の苗字や名前との関連性を発表した友だちが居たことも、覚えている。
　事実、「源氏に追われた平家が、海から逃げてきて、松に衣を掛けて干した。村人たちが農民の衣を渡し、かくまい、逃亡か定住を助けた」という謂れのある『衣かけ松』が、文化財として現存し、町名の「装束」の由来となっていて、小学校校歌の文脈にも入っている。

　そこで、今年の母の日のお手紙には、「お母さん、私に素敵な名前を、ありがとう。占いができる新しい友だちに、『とても素敵な名前』と褒めて貰い、もう、鼻高々!。お母さんの名前もね、『生涯を通して、弱い立場の人々を、温かく支える、心美しい非凡な人』だって。当たってるね。お母さんの人生そのものや。自慢やわ。」と、書いた。

　すると、母から、「プレゼント届いたよ。今までもらったもので、一番嬉しかった。



あの色、庭に丹精込めて育てていた薔薇のアーチと藤棚を、覚えててくれたんやね。定年を迎えた時のお手紙は、感慨深かった。今回のお手紙は、本当に嬉しかった。今までの苦労が報われた気がした。私がこの名前を付けてもらった時に、『困った人々に尽くしなさい』という願いがこもっとったんやね。なるほど、うっかりしとれんね。」と電話があった。

続けて、

「本当の事言うとね。長男の嫁だから、産後に実家に帰ることも叶わず、産院から直帰したら、もう、既に、おじいちゃんが、仏間に『命名　徳子』と書いて飾ってあった。お父さんは、その頃はもう、ずっと外国に居ったしね。異を唱える余地なし。お父さんと相談していた名前もあったんよ、宝塚俳優みたいなハイカラな名前。ちょっと腹も立ったけど、おじいちゃん、本当にええ人じゃったけえ、言えんだわ。いろんなことがあったけど、お父さんの代わりに、よく私の味方をしてくれたしね。何より、家事が楽になるように、町で最初に三種の神器(テレビ、洗濯機、冷蔵庫)も買ってきてくれた。炊飯器はガスやったね。掃除機も、早かったよ。カラーテレビも。

・・・じゃけど、読み間違えられることが多かったじゃろうし、画数も多いし、申し訳なかったね。

・・・じゃが、ほんまに良かったね。おじいちゃんもおばあちゃんも、お父さんも、天国で笑うとるわ。こんなこと言うてくれるお友だち、大事にせんなんよ。」という、告白があった。

別荘で暮らす義母からも、ソーシャルワーカーさんの計らいで、オンライン通話ができた。

「大阪に居た頃のお父さんのこさえた藤棚を思い出した。覚えていてくれて、ありがとね。大事にするね。これまでのプレゼントの中で、とびきりの一番。」とのことだった。

ちなみに、私は、「得られた知識を人々に知らしめる天命を持ち、それは祈りに似た行為になります。地に足が着いた堅実な実績が、世の中の光になります。」とあった。

→　生涯を通して、謙虚に学びを継続し、つながりをつくり、つないでいきましょう。ということ。

全国の『徳子』さん、

ともに、ファイトです!

絵と文・柳たかを

貧困２

1995 年 1 月 17 日の阪神淡路大震災被災地の惨状、火による被害が大きかった木造長屋密集地の神戸市長田区では漫画家の知人も被災した。
彼の家のすぐ近くまで火の手が迫ったが消防車は来ない、水道管が破裂して水は出ないという切羽詰まったなか、児童公園の砂場の砂をバケツリレーして壁や屋根にかけ続け、かろうじて迫る炎と火の粉からまぬがれたと聞いた。
お見舞いの帰り道、写真を撮りながら長田区から尼崎方面に向けて歩いた。三ノ宮ではアーケードのレンガの歩道があちこち割れ、段差を生じ波打って揺れのすごさを想像させた。
一階部分が完全につぶれ二階の屋根がその上にのっかっている唖然とする瓦礫（一階にいた人は助かったのか？）にはシャッターを押す指が震えた。

その頃から、近隣（大阪市内）の公園の植え込みにホームレスのブルーシートテントが増え始めた。
漫画家の僕は毎日目にする青いテント群に明日の自分がダブって見え、将来に言いようのない不安を感じるようになった。
「なぜホームレスに？本人の責任か社会のせいか…」彼らの生の声を直接聞いてみたいと思った。ぐうぜん東京台東区で NPO 法人が運営するホームレス支援活動に参加させてもらう機会を得た。

活動内容は隅田川沿いのテラスでテント生活をしている彼らに声かけをし、支援グループとの信頼関係を育（はぐく）んでもらい、それぞれの社会復帰の方法を一緒に探していこうというもの。
NPO 法人の “敬老室” は、シャワー設備やテレビ・将棋・囲碁を楽しめる畳スペースもある。
日曜日にはアウトリーチといって、我々ボランティアが数名ずつグループになって手作りのおにぎりを手土産にテントを訪問、余計な言葉をはさまずひたすら彼らの話に耳を傾け、テントの住人との信頼関係を深め、気が向いたらぜひ “敬老室” に来るよう勧め、続く彼らへの自立支援がスムーズに運ぶようその下地作りを目指していました。



● 隅田川テラスに並ぶホームレスの青いテントの群れ

（次号に続く）



● アウトリーチ活動、ひたすら彼らの話に耳を傾ける

やぶにらみ日記 (431)

東成区の昭和

（28）給食



やぶにらみ日記 (432)

東成区の昭和

（29）給食



やぶにらみ日記 (433)

東成区の昭和



（30）給食









やぶにらみ日記 (434)

東成区の昭和



（31）給食









やぶにらみ日記 (435)

東成区の昭和

(32) 給食



やぶにらみ日記 (436)

東成区の昭和

(33) 給食



やぶにらみ日記 (437)

東成区の昭和

(34) 給食









やぶにらみ日記 (438)

東成区の昭和

(35) 給食









やふにらみ日記 (439)

東成区の昭和

(36) 給食









やふにらみ日記 (440)

東成区の昭和

(37) 給食





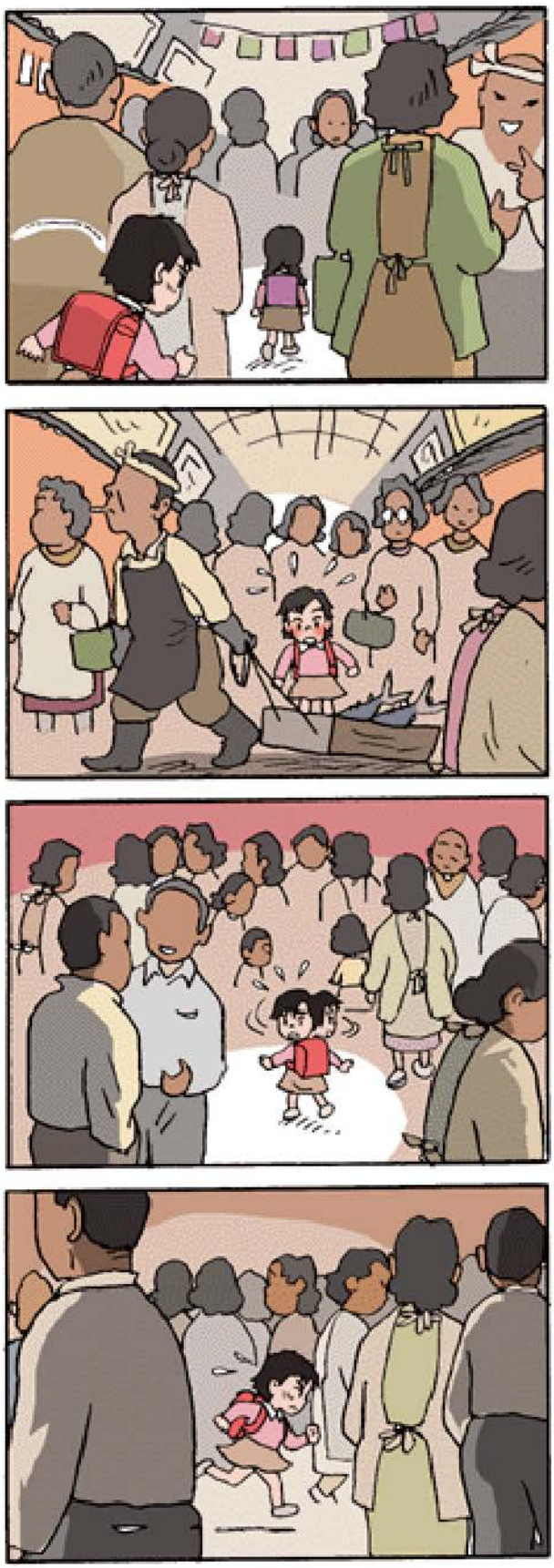




やぶにらみ日記 (441)

東成区の昭和

(38) 給食



やぶにらみ日記 (442)

東成区の昭和

(39) 給食



やぶにらみ日記 (443)

東成区の昭和



(40) 給食









やぶにらみ日記 (444)

東成区の昭和



(41) 給食









心理コーディネーターになるために Vol.3

山下桂永子

☆机と椅子と電話と PC



2013 年の 4 月、某市の教育センターで「心理指導員」という立場で働くことになり、それまでは事務所の端にある大き目の机と椅子を 4 人ほどの相談員が向かい合って共同で使っていたのだが、週 4 日勤務となったことで、事務机と椅子、ノートパソコン、そして電話機一台を自分専用として使わせていただけることとなった。

某市の教育センターで働くようになってはや 10 年近く。自分の机がもらえるということは、私がその職場の職員としてそこにいるんだなと周囲にも意識され、何かしらの役割を担う、ということである。その意義深さのようなことを私は他県のスクールカウンセラーをしながらとても感じていたので、その当時はその机がとても大きく感じ（今や整理のつかないメモやらなんやらで手狭に感じる状況だが）、うれしくも背筋の伸びる思いがした。



☆心理指導員ってなんや

この与えられた机と椅子、電話とノートパソコンを使って「心理指導員」という聞きなじみのない立場として何をすべきか。実のところ、それは誰一人知らず、何一つ決まってはいなかった。ちょっとありえない話である。

私の「心理指導員」としての役割を作って頂いた（予算を取ってきた）前年度の所長は異動になり、新しい上司は、「心理指導員」はおろか、教育相談が何をしているのか、どう活用していくものなのか、あまりイメージがあるようには見えなかった。今でこそスクールカウンセラーが中学校だけではなく小学校にも配置されるようになり、カウンセラーになじみのある先生方も多くなってきてはいるが、当時はスクールカウンセラーを配置する立場である教育委員会の先生にもカウンセラーと一緒に仕事をしたという経験のある方はかなり少なかった。スクールカウンセラーでさえそうなのだから、教育センターの相談員、しかもその年初めて降

ってわいた「心理指導員」なるものが何かなどわかるわけはない。そもそも本人だってわかっていない。

なんとなくわかっていたのは前年度所長が言った「教育相談員の取りまとめをしてほしい」というものすごく抽象的なオーダーのみ。「心理指導員」ってなんや。もうそこからのスタートである。



☆「心理」＋「指導員」＝？？

心理というからには、心理学を使って何かをするわけである。でも指導員？指導員ってなんや？聞いたことないな。同じ職場の人には教育委員会の中で「指導主事」という役割の人が多くいる。どうやら市の職員であるらしい。ん？先生って府の職員ちゃうの？市なの？もう何が何だかわからない。

しばらくたってわかったことは教育委員会には指導主事の他にも指導員という立場の先生もいるらしいということ、指導員の上が指導主事で、普段は学校と書類からなにからいろいろとやりとりをしながら学校の教育活動を支えているらしいということ。指導主事が教育委員会から学校現場に戻るときにはまた府の職員に戻るらしいということ（このあたりその自治体によってシステムがだいぶ違いますが当時の私は知りません）である。制度上、同じ指導員という名前がついているけれど、どうやら私が目指す心理指導員と教育委員会の指導員のイメージは現時点でだいぶ違うらしい。

そして「心理」という言葉と「指導」という言葉が一緒にあるとなんだかおさまりが悪く、二つの言葉のイメージがすごくなじまない気がしていた。教育相談員の取りまとめをするということ＝教育相談員への指導ではない。教育相談員の先生方は、心理士以外にも言語や発音専門の先生や元学校の管理職の先生もいる。指導なんておこがましい。



☆イメージがないなら作るしかないけれど

結局のところ、「心理指導員」に誰もイメージがないということは、一から作っていくしかないのだが、私自身にそのイメージがない。とりあえず「指導員」の方は予算を取ってくるために他と差別化するための役職名だということで置いておこう。「心理」の方を考える必要がある。「心理」が教育相談でできることを再考し、私がいいと思う教育相談をやっていく中で、それをきちんと説明できるようにならなければならない。

しかし、「教育相談をやっています。対象はこどもです。心理の立場か

らその取りまとめをやっています」で何が伝わるというのだろう。何をしているのか全然わからないじゃないか。あまりにも言葉足らずであいまいで抽象的すぎる。教育分野で心理学を使って教育相談を行う人はどういうことをやっているのか。



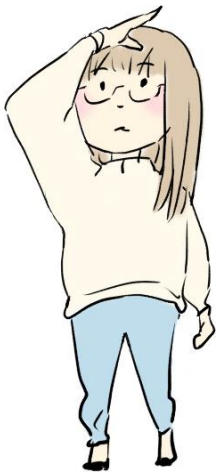
スクールカウンセラーならば数年間やってきているし、研修も書籍も探せばあるし、それを参考にある程度説明はできた。でも心理指導員はスクールカウンセラーではない。何が違うってそこが問題なのに、教育センターで教育相談を 10 年やってきて、自分の仕事が何をどうするものであるのか、その意義はなんであるのかまるで説明ができないことに愕然とした。これはまずい。今まで私はいったい何をやってきたんだろう。これで教育相談員の取りまとめなんてできるわけがない。

☆力量不足に助け舟

私が今ここで「心理指導員」として何をするのかを教えてくれる人はいない。最初は暗中模索五里霧中であった。

幸いだったのは当時の私には相談できる方、新しいことに理解をして一緒に取り組んでくださる方が心理士、教員問わずたくさんいたことだ。他県でスクールカウンセラーをしていることで、他の地域の教育相談の取り組みも参考にできた。そしてそれまでの医療や福祉、産業での経験からは、カウンセラーがどのようにその職域で活動しているのかということ、それが教育現場とは違うと知っていることも今となってはただの遠回りでなかったと思えるし、心理士になる前から教育相談に関わっていたことで、カウンセラーに対しての固定概念やイメージがあまりなかったことなども今になって思えば大いに役に立った。

☆説明できる教育相談を



教育相談はこうあるべきとか、カウンセラーのすることはここまでとかそんな枠は取っ払って考えよう。その数年前にあった、東北の大震災での支援活動に参加していた時に、あるスクールカウンセラーの先生に言われたことがある。「心理学的知見があれば、何をしてもそれは心理臨床だよ」と。その言葉は私の中で今も方向性に悩んだ時には支えとなっている。だからこそ、心理指導員がどうというよりは、良いと思うことはなんでもやってみよう。そしてそれを心理学的枠組みから言葉を尽くして説明できるようになろう。

というわけで心理指導員としてのミッションは、教育相談の言語化ということになったのである。



TNR 活動に伴う葛藤

TNR 活動（ノラ猫を一旦捕獲し、不妊手術をした上で元の場所に戻すこと）は、猫の殺処分やノラ猫によるトラブルを無くしていくための取り組みであり、全国に広がっていることはこれまでのマガジンでも触れてきました。今回は猫のためにと TNR 活動を始めた人がぶち当たる壁（と私は思っている、少なくとも私はぶち当った）について、いくつかの角度から考えてみたいと思います。最初にぶち当たる壁であり、活動を続けていく中でなくならない葛藤。それは、**妊娠しているノラ猫の堕胎手術**です。

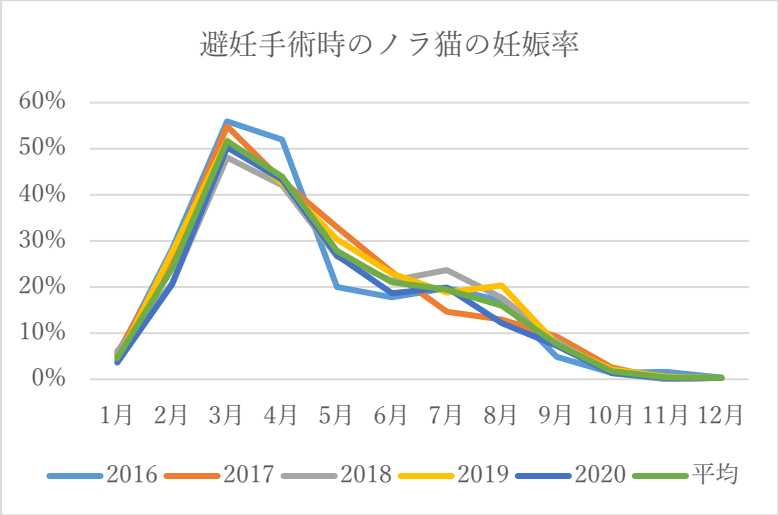
猫の殺処分を無くしたくて TNR 活動をしているのに、そのために母猫の中に宿っている命を堕胎（殺処分）するということは**大きな自己矛盾**であり、関わっている人に大きな葛藤や罪悪感を生みます。ただ、そうせざるをえない現状が今の社会の中にあることもまた事実です。正直このテーマについて深く考えることは私にとっても精神的にしんどいので、あまり触れたくないのですが、それもまた猫に対して失礼なことだと思うので、今回のマガジンで向き合ってみたいと思います。

客観的なデータから現状を把握

なぜ TNR の際に堕胎手術を避け難い現状があるのか、まずは感情論を除いて客観的なデータから猫の妊娠出産を把握したいと思います。

■猫の発情シーズン

「猫の発情期シーズン」で検索すると、だいたいどこのサイトや文献にも『**1～9月の期間が発情シーズンで、春と夏にピークを迎える。**』と書いてあることが多いです。ノラ猫に関しては実際のところどうなのか、ひと月に 700 匹ほどのノラ猫の不妊手術を実施している「のらねこさんの手術室」の過去 5 年間のデータを見せていただきました。手術を実施した 32,556 匹のうち、メス猫は 17,058 匹その妊娠率を表で見てみましょう。



	2016	2017	2018	2019	2020	平均
1月	5%	6%	6%	4%	4%	5%
2月	28%	27%	21%	28%	21%	24%
3月	56%	55%	48%	52%	50%	52%
4月	52%	43%	42%	43%	43%	44%
5月	20%	33%	27%	30%	27%	28%
6月	18%	23%	21%	23%	19%	21%
7月	20%	15%	24%	19%	20%	19%
8月	17%	13%	18%	20%	12%	16%
9月	5%	9%	8%	8%	7%	8%
10月	1%	3%	1%	2%	1%	2%
11月	2%	0%	0%	1%	0%	0%
12月	0%	0%	0%	0%	0%	0%

北摂ＴＮＲサポートのらねこさんの手術室　避妊手術データ（2016-2020）

妊娠率のグラフは５年間分がほぼ一致しています。２月から妊娠しているメス猫が急激に増えだし、３月がピークで 50%を超え、４月からは出産ラッシュを迎えますが、妊娠率も 44%とかなり高い値をキープし、５月から徐々に右肩下がりになり、10～12 月は限りなく０%に近いオフシーズンなるようです。年によっては、７月の妊娠率が６月を上回ることもあるようですが、平均してみると、６月よりも７月の妊娠率が低いようです。

ネットや文献に書いてある情報と比較すると、**『１～９月の期間が発情シーズン』**ということはほぼ合致しますが（10 月の妊娠率は低いので、**1～8 月**と書いた方が適切ですね)、**『春と夏にピークを迎える』**ということに関しては、一致しないようです。また、メスの発情は日照時間と関係があり、１日の日照時間が 14 時間を超えるようになると反応して発情を迎えると書いてあったりします。そこで、のらねこさんの手術室がある大阪の日照時間と比較してみたいと思います。

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	平均
大阪平均日照時間	146.5	140.6	172.2	192.6	203.7	154.3	184.0	222.4	161.6	166.1	152.6	152.1	170.7

気象庁ホームページより、大阪の平均日照時間：資料年数３０

https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/view/nml_sfc_ym.php?prec_no=62&block_no=47772　（2021.5.26 閲覧）

３月の妊娠率がピークで４月も高いということから考えると、発情のピークは２月ということになります。しかし、日照時間のデータで見ると２月の日照時間はかなり短いようです。日照時間のデータを今回初めて見たので、見方が違っている可能性もあるので、日照時間と発情関係は無いとまでは言い切れないのですが、日照時間だけではない何かも発情の大きな要因になっている可能性がありそうだなと思いました。夏が暖かいというレベルから死ぬほど暑いレベルに変わってきてしまっていることも猫の発情に影響を与えているのかもしれません。あるいは飼い猫とノラ猫で何か違いがあるのかもしれません。

余談ですが TNR は妊娠率がかなり低く、まだそんなに寒くない 10 月 11 月に頑張れたらこんなに悩む必要もないのにと思うのですが、どうしても行政機関から発行される助成金は 4 月から始まり年末には無くなってしまうことが多いです。そのためせっかく妊娠率の低い時期に TNR の実施率が上がらないというジレンマがあるように思います。助成金が有限であるならば、発行期間を絞ることも有効な策じゃないかなと思ったりします。あとは TNR をするなら暖かい時期にと考えて春先を選択する方も多いような気がします。でも春先は妊娠率が極めて高く、メス猫にとっては最も過酷な TNR 時期だといえます。

猫の妊娠期間と子猫の成長

猫は交尾から約２ヵ月で出産を迎え、妊娠前期の１ヵ月間は見た目ではあまり分かりません。妊娠後期になると見るからにお腹が大きいように見えてきます。猫は一回の出産で１～９匹の子猫を出産します。のらねこさんの手術室のデータを見ると、平均で４匹の子猫を出産する母猫さんが多いようでした。子猫は生後１週間ほどで目が開きはじめ、１ヵ月頃から徐々に離乳していきます。生後２～３ヵ月で親離れすることが多く、成熟の早いメス猫では生後４ヵ月で最初の発情期を迎えます。



ＴＮＲ病院では、早期不妊手術（8～16 週齢（２～４か月齢）の性成熟前（未発情の時期）に行われる手術のこと）を推奨している病院が多く、早くて生後２ヵ月半頃から避妊去勢手術が可能になります。日本では最初の発情期を過ぎてからという獣医さんも多いですが、猫の過剰頭数の問題に対する解決策として、アメリカでは１９９３年に米国獣医師会(AVMA）が、ほか動物病院協会(AAHA)、 Human Society of the United State などの団体もこの早期不妊去勢手術を支持・奨励しています。8~1６週齢という子猫に手術することについて、尿道の発達が未熟になるのではないかと仮説のリスクが心配されていましたが、複数の研究の結果、そういった副作用などが特に手術時期によって発生するものではないと報告されています。

選択肢と３つの難しさ

TNR をしようと計画をしている現場でお腹の大きい猫が居た場合、大きく分けて以下のような選択肢があります。

① 堕胎手術を病院に依頼する。
② 一旦 TNR を延期し、子猫が生後３ヵ月近くなったところで、母子共に TNR をする。
③ 出産し子猫がある程度育つまで外で見守り、離乳したところで子猫のみ保護し母猫は TNR する。
④ 母子共に保護をして保護環境下で出産子育てを見守り、母子ともに里親探しをする。

どの選択をするのか、次の３つの難しさを考慮して考えていく必要があります。

■事前の見極めの難しさ

３月～９月までの長期間に渡り発情と妊娠出産を繰り返しているノラ猫。妊娠前期の段階では見た目では判断がつきません。避妊手術を行ってはじめて妊娠していたことに気づくことも多くあります。飼い猫であれば、エコー検査をして判断することもできますが、生粋のノラ猫さんの場合、麻酔をかけずにエコーをすることは不可能に近いです。麻酔は体に負担が大きいので、気軽に何度もできるのもでははありません。妊婦さんであればなおさらです。

■捕獲の難しさ

もうひとつ忘れてはいけないのは、ノラ猫の捕獲の難しさです。１回目は捕獲器があればスムーズに捕まってくれることが多いですが、猫もバカではありませんので１度捕まったタイプの捕獲器には 50%の猫は二度と入らなくなります。そのため、捕獲できたタイミングが最初で最後の通院のチャンスになることも多いです。捕獲したものの「ちょっとお腹が大きい気がするからやっぱり放そう」と捕獲器から出してしまうと、捕獲器にはもう入らないけれども妊娠出産能力のあるノラ猫を作り上げてしまい後々苦労することもあります。

■保護・譲渡の難しさ

妊娠の可能性があるノラ猫を保護し、室内にて出産子育てを見守るという方法もあります。保護をするためにはまず次の４つの要素が必要です。①ノラ猫を保護できる環境（静かで、広すぎない隔離部屋または大型のケージ）、②触れないノラ猫のお世話をできる人員、③母子共に里親を見つけるまで関わる覚悟（見つからなければ飼い猫にする覚悟）、④長期的な飼育にかかる費用の捻出。揃えるのはなかなかハードルが高いですが、これを

妊婦猫さんの頭数分用意することができれば、保護も選択肢の一つとなります。また、全く人に慣れていないノラ猫さんの場合、室内に閉じ込められたストレスで出産した子猫を食べてしまうこともあります。保護ができれば必ずハッピーエンドになるわけではないところも難しいポイントです。

実際の現場で

ねこから目線。に寄せられる相談では、「自分がご飯をあげているノラ猫の TNR をしたい。でも堕胎手術はしたくない。」という内容がある一方で、「自分がご飯をあげているノラ猫のお腹が大きくなってきた。これ以上増えてしまうと困るので一刻も早く不妊手術をしたい。」という内容もあります。前者は自分の家のお庭にご飯を食べにくる２匹程度のノラ猫さんを責任もってお世話をしたいという依頼主さんであることが多く、後者は１０匹以上のノラ猫のお世話をしている依頼主さんであることが多いです。どちらの方も真剣にノラ猫と自分と地域のことを考えた結果の相談です。自分の目の前にいる数匹のことを考えているミクロな視点なのか、広く地域全体の沢山のノラ猫のことを考えているのか。判断の基準はその猫にメインで関わっている人が見ている視野に大きく影響を受けます。

お腹の中であってもすでに宿っている命であり、子猫の命もその子猫を必死に育てている母猫のことも尊重してあげたい。と思う反面で、ノラ猫を増やさないためのＴＮＲであり、将来の殺処分ゼロを達成するためには今は心を鬼にして効率重視で取り組まねばならないという現状があります。



私どうなのかといえば、今から 18 年ほど前に行った初めてのＴＮＲの時は臨月のノラ猫さんには産んでもらうという選択をしました。当時の猫の殺処分数は現在よりはるかに多く、年間 26 万頭にのぼっていました。しかし、当時の私の視野の中に収まっていたのは自分の家の近所に住むノラ猫３匹と、その子たちにご飯をあげてくれている老夫婦だけ。とてもミクロな視野だったいえるでしょう。堕胎手術をするのは嫌でした。１匹の母猫が産む子猫だけであれば里親さんを見つけきることができる自信もありました。そこで、老夫婦に懐いていた母猫はなるべく室内に入れてもらい、室内にて出産子育てを見守り、生まれた３匹の子猫は離乳したころに里親さんに譲渡しました。そして母猫の不妊手術を実施し一件落着となりました。お腹の子も含めて守ることができました。が・・実はそのあと１０年後の後日談があります。当時出産してもらった母猫は「たまこさん」と名づけられ出産を機にほぼ老夫婦の飼い猫になっていたのですが、１０年の間におばあちゃんが亡くなり、とうとうおじいちゃんも倒れ、保健所に収容されてしまいました。偶然たまこさんの子猫の里親になってくださったＮさんが別件で保健所に立ち寄った際に聞き覚

えのある名前の収容猫を見て、私に連絡をしてくださり事態が発覚しました。大阪にいた私はとりあえず新幹線に飛び乗って静岡に帰り、おじいちゃんに連絡を取って顛末を把握しました。そして、最終的にたまこさんはたまこさんの子猫２匹の里親さんになってくださったＡさんが里親にもなってくださることになり、なんとか事なきを得ました。当時の私はミクロな視野で先を見る視点もありませんでした。とはいえ当時の自分には最善の決断だったと思います。だれかに強制されるのでも背伸びをするのでもなく、自分ができる範囲で、自分ができることをできる時にする。それがボランティアの基本だと思います。



保健所に収容されていたたまこさん

では今の私はどう判断するかというと、自分がメインで関わっている現場であれば堕胎手術を選択します。年間の殺処分数が３万にまで縮小した現在ですが、それでもまだまだノラ猫は多く、私自身の活動範囲の拡大にともない、ひとつの現場で 30 匹くらいの猫がいることもあります。そうなると時期によっては５匹以上の妊娠猫さんがいることもあります。全頭を保護して対応する場所も、そのお世話をする時間的余裕も今の私にはありません。冷たいですが、守りながら殺し、殺しながら守っているような活動です。ねこから目線。のお仕事で関わるケースのようにメインで関わっている方が他にいらっしゃる場合は、その方の決断に従うようにしています。一度顔を上げて見てしまった社会問題という景色を、顔を伏せて見なかったことにすることは私にはできません。多くの猫たちとってそれは幸運なことかもしれませんが、私の身の回りにいる猫たちにとっては不運なことかもしれません。「よその猫ばかり見てないで自分をもっと見てよ」そう飼い猫に言われている気がすることが時々あります。

命に対する線をどこで引くのか。どれくらいのバランスで活動をするのか。きれいごとでは片づけることのできない生々しい決断を日々せまられています。

おわり



小池英梨子

活動：NPO 法人 FLC 安心とつながりのコミュニティづくりネットワーク
「人もねこも一緒に支援プロジェクト」　プロジェクト代表

仕事：猫専門のお手伝い屋さん「ねこから目線。」として開業。

マガジン執筆者訪問記（２）ねこから目線。

きっかけ

２月初旬、マガジン執筆者の小池英梨子さんの「ねこから目線。」の Facebook の記事が目にとまりました。トラバサミに前足をはさまれた猫が近所にいる、という連絡を受けて保護に向かったことや、その後の対応・経過が記されていました。その熱意と、本当に地道で根気強い取り組みの一端に感じ入り、記事の最後に“寄付は受け付けていませんが、こんなのはあります”と Amazon のほしいものリストのリンクがあり、猫を保護する際に使う資材や餌などがリストに掲載されていたので、ストック数が少なそうなものを見繕ってポチっとしておきました。実は Amazon に「欲しいものリスト」という機能があること自体、これまでほとんど認識しておらず、「これをポチっとすれば、なんか知らないけど小池さんのところに届くんだよね？」という感じで、誤って自分の家に届くことがないように、おじいちゃんのような手つきで注文をしました。



対人援助学マガジン 27 号「そうだ、猫に聞いてみよう」より

それから 2 週間ほどして、小池さんから連絡があり、「欲しいものリストは、誰が送ったのが相手にわかるシステムになっているんだ！」と、初めて知りました（笑）。ちょうどよい機会かもしれないと思い、“マガジン執筆者訪問記というのを始めていて、良ければ小池さんのところにも寄せてほしいと思っている”と伝えてみました。

返信があるまで、“素人が、物見遊山で！”と思われたりしないかなぁとドキドキしていましたが、数分もしないうちに「楽しそう！一緒に捕獲やりましょー！」と返信がきて、

一安心。第 2 回目の訪問記が実現することとなりました。

訪問日は 3 月。仕事は直近の 1 ～2 週で入る場合が多いとのことで、当日のスケジュールはこの時点では未定でした。

ねこから目線。

「ねこから目線。」のことは、詳しくは小池さんの連載（そうだ、ねこに聞いてみよう）を読んでいただくのが一番よいのですが、訪問記から読んでくださった方のために簡単にご紹介します。

	人ねこケア（NPO）	ねこから目線。（個人事業）
利用料	無料	有料
対象	福祉支援対象者の飼い猫	ノラ猫と保護猫
対象範囲	とても狭い	広い
活動資金の出どころ	自腹＋ご寄付	お客さん
安定具合	不安定	安定
位置づけ	ライフワーク	ライスワーク兼ライフワーク
ひと月当たりの稼働日	1～3 日程度	25～31 日程度
対応時間	仕事の合間	基本 24 時間対応

「ねこから目線。」は小池さんが行う個人事業の名称で、事業内容は「猫専門のお手伝いやさん」です。いわゆる便利屋さんの単価を参考にしたとのことで、有料で、猫に関するさまざまな依頼を引き受けておられます。

もう一つ、小池さんが手がけておられるのが、「人ねこケア」（人もねこも一緒に支援プロジェクト）。こちらは NPO として取り組んでおられる事業で、表にもある通り「ライフワーク」として非営利（というか、持ち出し）でやっておられるとのことです。

「ねこから目線。」の開業は 2019 年からですが、それ以前も含めた小池さんの略歴は以下の通り。

小池英梨子（こいけ　えりこ）さん



2015 年　立命館大学大学院応用人間科学研究科修了

2015 年　公益財団法人どうぶつ基金に所属

（マガジン 21 号から連載開始。23 号で一時休止）

2017 年　「ねこから目線。」としてフリーで活動

（マガジン 27 号から連載再開。のらねこ生活を自称）

2017 年　立命館大学大学院応用人間科学研究科実験・実習相談室勤務

（マガジン 29 号「のらねこ、飼いねこになる」）

2017 年　NPO 法人 FLC 安心とつながりのコミュニティづくりネットワーク」の中に、「人もねこも一緒に支援プロジェクト」が発足。

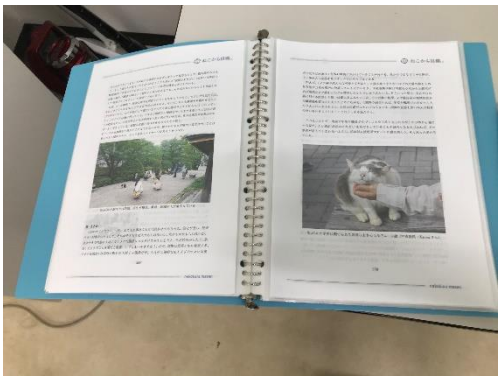
2018 年　個人事業「ねこから目線。」（猫専門のお手伝い屋さん）開業

訪問にむけて

「ねこから目線。」の活動は、2017 年の対人援助学会の研究会での小池さんの講義を聴講して以来、とても興味深く、ネットの記事やニュースの特集なども観てきました。いつかは訪問したいと思っていたのが、思いがけず早期に実現することになり、ちょっと興奮しました。

しかししかし、少し落ち着こう。前回の訪問記は、事後的に訪問記にすることを思いついたため、いささか準備が不足している面がありました。つまり、陶芸工房の見野さんのお話はめちゃくちゃ面白いのに、訪問者の力が足りていないので、原稿にしたときに、当日ライブで話してもらった時の面白さに行きついていないのです。学んだことは次に活かす。今回は、入念に準備をしなくては。

まずは、マガジンの『そうだ、猫に聞いてみよう』のバックナンバーをすべて見返してみました。ほとんど読んでいるつもりだったのですが、1/3 くらいは初見の原稿がありました。また、過去に読んだ原稿でも、改めて面白く、学ぶことが多いと感じました。さまざまな人や機関とつながり、資料や情報を有効に利用し地道に働きかけていく活動の緻密さもさることながら、現状の分析や関係者の思考・立場の理解、啓発を含めた社会への働きかけまで、“猫の殺処分ゼロ”に向けた活動の幅広さにただただ感嘆します。内容と重ねた回数の厚みを実感できるように、印刷してファイルにしておきました。





訪問後、小池さんから頂いた「ねこから目線。」ステッカーを貼りました

小池さんの連載を読み返すと、“そういえば、小さい頃は動物好きな子どもだったよなぁ”と、久しぶりに自分の幼少期を思い出したりもしました。我が家は男 3 人兄弟。兄と弟は鉄道好きで、家には時刻表や鉄道写真の本がいっぱいでしたが、私だけ生き物に関心があり、昆虫図鑑や動物の生態に関する本などを好んでいました。最初に買ってもらった絵本は「みにくいアヒルの子」。とにかく動物ものがよかったんでしょう。“犬を飼いたい”と思

っていた時期もあったのですが、最初は団地暮らしで無理で、戸建てに引っ越した後も「うちにはもう 3 匹（の悪ガキ）いるでしょ」と言われ、返す言葉もありませんでした。以来、動物の飼育を経験することはなく今に至ります。

そういえば、一度だけ道路に堕ちているコウモリを見つけて、家族に内緒で保護したことがありました。コウモリが何を食べるかも知らず、牛乳を持ってきて皿に入れると、ぺろぺろと飲み始めました。数日後、コウモリを手にのせ、牛乳をあげていたところ、指先にチクッと痛みが走りました。出血はしていませんが、噛まれました。痛みに驚いて手を動かすと、コウモリは飛び上がり、窓から空に消えていきました。無事（？）に保護は完了したものの、“コウモリに噛まれるって、大丈夫なの？”と、自分が吸血鬼になるかも、と子ども心に恐れながらその後数日を過ごすことになりました。

猫にとってのメリット

話を戻します。小池さんの連載を再読して、活動の内容や理念はある程度頭に入ったものの、そもそも猫をめぐる社会の現状について、自分が何も知らないことに気づきました。

Amazon で「ねこ」をキーワードの本を検索すると…出るわ出るわで、数えきれないほどです。『飼い猫の秘密』『保護猫カフェ』など猫の飼育や保護に関するものから、『ヤマネコはいつイエネコになったか』という文化人類学絡みのもの、『ニャンとかなる』という自己啓発本（？）まで本当に幅広い。少し思案して、６冊ほど図書館で借り、うち３冊ほどを熟読、残りは気になったところだけさっと目を通しておきました。

知らなかったことがたくさんあり、面白く読みましたが、とくに印象に残った記述が、「猫は都合がよいから、人と一緒にいる」という話。なんでも、猫は単独狩猟者、つまりハンターであるそうです。犬は、オオカミであった頃から、集団で狩りをします。その際、群れのボスに従って狩りを行い、自分たちより大きな獲物をしとめてそれを分け合います。そのため、犬のような社会を持つ動物は“ボス”に従うという習性があり、飼い犬の場合はそれが飼い主になるそうです。つまり、犬は“ボスについていく”という関係性のもと、人と生活を共にしていることになります。一方で、猫はネズミなど自分より小さな獲物を単独で仕留めます。つまり、ボスについていくという習性はありません。では、猫はなぜ人と一緒にいるか。それは“都合がよいから”だそうです。単純に言えば“コイツの側にいると食べ物には困らないから一緒にいてやるか”という感じだとか。

本当かどうか私には判断がつきませんが、人懐っこいけれど、一方で気ままで、気位の高さを感じたりもする猫の振舞いを見ていると、なるほどそうかもとも思わされます。そして何より、このことが「ねこから目線。」が仕事を引き受ける基準（何らかの形で猫にメリットがあること）ともつながるような気がして、勝手に面白く思いました。「それで、私にはどんなメリットがあるの？」は猫が人に尋ねてみたいと思っている点かもしれませんから。

訪問日

訪問日直前に小池さんと連絡を取り、当日は京都市内の駅前で待ち合わせることになりました。小池さんとお会いするのは、2019 年の年末の「対人援助学マガジン　執筆者と読者の集い」以来です（マガジン 40 号参照)。午前 10 時過ぎ、諸事情で少し遅れて到着された小池さんに拾って頂き、車で 1 件目の家庭訪問に向かいます。

訪問日のスケジュールは次の通りです。この日は NPO の「猫も人も一緒に支援プロジェクト」の仕事と、個人事業の「猫から目線。」の仕事がミックスされているということで、小池さんの活動を広く目の当たりにできる！と幸運に感謝しました。実は小池さんがそのように采配してくださったのかもしれません。

ちなみに、小池さんは朝 4 時から 1 件現場に出て、いったん帰宅し仮眠をとってから来られたとのことでした。すごすぎる…。

午前①：家庭訪問（多頭飼育のご家庭の経過伺い）@京都　（NPO）
午前②：手術のための猫の預かり＠京都　⇒　病院に＠大阪　（個人事業）
午後①：家庭訪問（多頭飼育のご家庭の経過伺い）＠大阪　（NPO）
午後②：家庭訪問（多頭飼育のご家庭の経過伺い）＠大阪　（NPO）
午後③：保護と不妊手術のための捕獲＠兵庫　（個人事業）

家庭訪問@京都

最初は、多頭飼育のお宅への家庭訪問から。マガジン 30 号、31 号でも紹介されているケースのお宅です。このケースが、NPO 設立のきっかけにもなったということで、活動の原点とも言える場所に行けることになり、内心浮足立ちました。

到着したのは、よくある団地が立ち並ぶ一帯。その中の一室で、77 頭もの猫が多頭飼育崩壊の状態にあったということです。どこにでもある風景の中で、支援が得られないまま生活していた猫と家族がおられたのだということが、私の中で重みを持って伝わってきました。NPO に届いた支援フードなどを手に訪ねると、ご家族と猫たちが出迎えてくれました。小池さんはバインダーを片手に、猫たちの健康状態や、頭数（新しく入ったり、亡くなったりした猫がいないか)、ご家族が気になっておられることなどを手早く、丁寧に聞き取っていかれます。

飼育されている猫は 30 頭超。前回の訪問から増減はなく、健康状態に問題を抱えた猫もいないようです。不妊手術が済んだ猫たちなので、家の外からの新たに入ってくることが

なければ、頭数は緩やかに減少していくわけです。『この子たちは私らが最後までみてやらんといかんからねぇ』とつぶやくお母さん。その過程に伴走する人がいることの意味を強く感じました。

ご家族から厚く信頼されていることが伝わってくる家庭訪問の現場。小池さんの横に立っていると誰だかは知らないけれど、猫に詳しいと思われるようです（当然です）。お父さんが「このブルーポイントの猫は…」、「ロシアンブルーのおじいちゃんがいて…」と色々話してくれるのですが、どっこい相手はズブの素人です。ブルーポイントというのがどの猫のことかもわからずキョロキョロする私を見て、察して下さった様子で小池さんとのお話に戻っていかれました。すみません…。

一方の猫たちは、新参者の私にも興味を示して、1頭また1頭と近づいてきてくれます。
“か、かわいい…”



１頭が近づくと周りも安心するのか、次々と近づいてきて、気づけば私の足に体をすりすりしている子もいます。
“これなら触っても大丈夫かな…”
と思い、予習してきた本のおぼろな知識を呼び起こしながら、背中をそっとなでてみました。毛にはつやがあり、サラリとした手触りで、素人の私にも健康的な状態であるように感じられました。この猫たちの人に対する信頼感は間違いなく飼い主さんとの間で築かれたもので、愛されて暮らしてきた子たちなんだなぁとしみじみ感じます。



そんな中でも一番の勢いだったのがO君。足元の猫たちをうっかり踏まないように（多分要らぬ心配だったでしょう）と棒立ちになる私を、スイスイと登って肩の上までやってきました。『こいつが一番の甘えたや！』とお父さん。『連れて帰ってもらうか？』と愛情たっぷりの冗談も飛び交う場で、ひとときほっこりとさせて頂きました。飼い主ご家族の猫たちに対する愛情を深く感じながら、一方でこれほど愛情深い飼育者がひとつ掛け違えると飼育崩壊の状態に陥るケースもあるのだということも実感しました。だからこそ、そのような時には家の外から、適切な支援が必要な分だけ成される必要があるのだと思いました。

のらねこさんの手術室

家庭訪問を終え、手術のために猫のお迎えに行ってから、次は大阪、池田市にある「のらねこさんの手術室」に向かいます。これまで小池さんの SNS で度々見ていた動物病院。その名の通り、のらねこの不妊去勢手術専門の動物病院です。のらねこを保護したいと思っているけれど捕獲できない方のために、自院で手術する猫については、捕獲のお手伝いを出張して行っておられたりもします。





元うどん屋さんで、その名残もある「のらねこさんの手術室」。駐車場の P のマークがかわいい。

のらねこさんの手術室について、ニュースで取り上げられた動画があります。

リンク　⇒　動画

とてもわかりやすくまとめられているので、ぜひご覧ください。

支えて・支えられて

今回の訪問で初めて理解したのですが、「ねこから目線。」の事務所はこの「のらねこさんの手術室」の 2 階になっているとのこと。私が Amazon から送った支援物資もここに到着していたそうです。

“どういう経緯でそんな風になったのか？”

疑問に思ったのでお聞きしてみました。要約すると、小池さんが「時給 100 円から好きな設定でいいので」というルールでお手伝いを始めたのがきっかけ。「のらねこさんの手術室」では受けられない依頼（例えば、自院での手術にはならないねこの捕獲のお手伝いなど）について、小池さんが個人的に引き受けるようになったとのことです（後からわかったのですが、マガジン 36 号にこの経緯が書いてありました）。これによって、「のらねこさんの手術室」は従来対応できない依頼も間接的にカバーできることになり、「ねこから

目線。」も動物病院を窓口にした仕事も請け負うことができるようになります。まさにWin-Win の関係です。

ねこを助けることが、ねこを支援したい人を助けることにもなり、それが小池さん自身を助けることにもつながる…。支援の輪が循環し「支えて―支えられて」の関係性のもと、横並びの関係性の中でとてもうまく連携が機能していると感じられました。

いつでも・どこでも

そんな「ねこから目線。」ですが、小池さんはほぼ事務所（動物病院の 2 階）にはいないので、仕事の依頼は携帯電話にかかってきます。初めて受けた電話で、まずは相談内容を聞き、受託できる依頼であれば概算の見積もりまでその場でこなしていかれます。時間当たりの単価だけならともかく、交通費は移動距離によっても異なりますし、「ねこから目線。」への依頼以外で必要になる費用（治療費）もあるのですが、それも含めてその場で計算して、おおよその総額を依頼主の方にお伝えしておられました。また、依頼主さんの居住地に応じて、関西圏で TNR 対応をしてくれる動物病院に関する情報提供などもされていて、すべての情報が頭に整理して格納されていることがうかがえました。本当に、プロの仕事です。

ねこ屋さん（家庭訪問@大阪）

午後からは大阪府下の多頭飼育の家庭訪問。同じ大阪府下とは言え、違う市であれば当然それなりの移動距離もあり、時間もかかります。帰宅後、GoogleMap で私が同行した部分のおおよその走行距離を概算してみましたが、それでも 200km はゆうに超えていそうです。

“こういう移動距離になるのは、よくありますか？”

と恐る恐る聞いてみましたが、この日は標準的な移動距離であったそうです。

2 件目の家庭訪問は市営住宅に。本当はペット飼育不可の物件らしく、支援物資もいかにもペットフードと見える包装ではないものを選びます。“ルール違反を助けるのか！”という無理解な声も飛んでくるかもしれませんが、そんなことを言っても、今は状況の改善に向かおうとしている飼い主さんの負担感を無為に増やす結果にしかなりません。現実的に、しかし本当に細やかに気遣いながら支援がなされていると感じます。

2 件目の家庭訪問でも、猫たちの頭数や健康状態について、手早く聞き取りを行っていきます。これまでの経過から体調に不安がある猫がいて、その記録も小池さんの手元にあります。今の状況を聞き取ると、大きく悪化はしていないようですが、楽観できるわけでもなさそうです。検査や治療には費用がかかるため、それをどう捻出するか、費用をどう抑えるか…。下手をすると 10 万円を超えてしまう可能性もあり、安易に治療を勧めるだけ

では事態は解決できませんが、放っておくことのリスクもあります。早めの対応を約束して、いったん持ち帰りとなりました。このあたりのやりとりも、本当にシビアなものがありましたが、飼い主さんを不安にさせることもなく、的確に情報を集め、放置もしない、ということがごく自然に行われていることに驚きました。

「今日はねこ屋さんが来るからって言って、玄関は片づけといたんです」

小池さんの家庭訪問に向けて、ご家族も出迎えの準備をしておられること、なにより「ねこ屋さん」ととても親しみを持って呼称されていたことに、「人ねこケア」がとても適切に機能していることが表れているように思いました。

その後、もう 1 件の家庭訪問に向かいます。同じく多頭飼育崩壊状態であったところから、市のケースワーカーさんの働きで、全頭一斉 TNR と家の片づけ・整理を行い、その後も定期的に訪問を続けておられるケースでした。小池さんは、このケースについて

『ケースワーカーさんの力が大きかった』

とおっしゃっていました。確かに、小池さんに連絡を取り、家の片づけボランティアを含めて采配されたのはケースワーカーさんで、とても力のある方だと思いました。一方で、このケースは「ねこ」という切り口なしに解決したのか？という疑問も浮かびました。例えば、“近所から悪臭がすると苦情が出ているから片付けてくれ”とか“できないなら行政代執行をする”というような話をしていたとしたら、この状況は改善しただろうか。答えはおそらくノーだと思います。3 件の家庭訪問を通して強く感じたのは、いずれのケースでもご家族はまぎれもなく「飼い主」であったということです。確かに、繁殖管理ができず一時適切な飼育ができなくなっていたことは事実です。しかし、だからといって飼い主としての資質や責任感のすべてが失われたわけでもないのです。TNR と、必要な分だけの支援によって、飼い主としての力が発揮される環境が整えられたことで、目の前の猫たちに最も深く愛情をそそぐ「飼い主」としての力が、適切に発揮されていました。

このケースでも、おそらく飼育崩壊状態にある猫たちのことは、飼い主さんは何とかしたいと願っていたのだと思います。ただ、助けを求めた結果、殺処分されるようなことは絶対に避けたかったと思いますし、それが助けを求めることを阻害していたかもしれません。全頭保護をして TNR を行うことが約束され、その後の生活・飼育環境を整えるための家の片づけ・整理であったからこそ、この支援を受け入れることができたのではないかと思うのです。まさに「人もねこも一緒に支援プロジェクト」の本領が発揮されたケースなんじゃないかな、と思いました。

猫の「保護」の限界　虐待対応との共通項

移動中の車内で、いくつか質問してみたいと思っていたことを小池さんに聞いてみました。訪問までに何冊か本を読んで、その中には猫の保護に関するものもあったのですが、

猫を保護して里親につなぐ活動を広げること（例えば、保護猫カフェを開き、猫を保護するキャパを広げ、保護費用を賄い、里親にマッチングしやすくする）に注力しており、飼育崩壊のケースについて、TNR をした後で元の飼育環境に戻すという取り組みはほとんど見られないように思いました。

理由について、小池さんは「一度関わった子の支援は最後まで自分の手で救ってあげたい」という思いからではないかとおっしゃっていました。この思いは小池さん自身にもあったとのことで、猫が好きであるからこそ湧いてくる感情であるのだとも思いました。劣悪な飼育環境から猫を救い出した時、猫好きであるからこそ、猫をケアしたい気持ちが全面に出て、その反動として、飼い主に対する配慮や意識が希薄になる（下手をすると“ひどい飼い主！”と怒りを覚えている）という場合もありそうです。一方で、「保護ありき」の発想は、2 つの限界を抱えているようにも見えます。ひとつは保護のキャパがすぐに埋まってしまうこと。そしてもう一つは、保護が本当に猫の幸せにつながっているか？という点です。小池さんから、『ニュースになったけど知っていますか？』と京都府八幡市での事件について聞かれました。私自身の居住地の近所なのに、まったく知りませんでした。以下のような事件です。

動物愛護ボランティアとして引き取った犬や猫を劣悪な環境で飼育し、餓死させるなどしたとして、京都府警生活保安課と八幡署は 19 日、動物愛護法違反（殺傷、虐待）の疑いで、パートの女（54）＝八幡市＝を逮捕した。女の自宅では犬猫の死骸が計 52 匹分見つかっており、府警は犬や猫が増えすぎて世話できなくなる「多頭飼育崩壊」を起こしたとみて調べる。

八幡署などによると、女は約25年にわたって行政の殺処分を免れるなどした犬猫を預かるボランティア活動を続けていた。病気や高齢で引き取り手のないケースでも多く受け入れ、関係者の間で「神様」と呼ばれていたという。

逮捕容疑は1～6月、八幡市にある一戸建ての自宅で、餌や水を与えず猫1匹を餓死させ、動物の排せつ物や死骸を放置した室内で犬25匹と猫4匹を飼育し、虐待した疑い。女は「汚物だらけの場所で飼っていたが、餌と水はやっていた」と容疑を一部否認しているという。

神戸市の動物愛護団体によると、女に預けた犬猫の行方が分からなくなるケースが続き、団体関係者が今年6月3日、女の自宅を訪れた。室内には動物の排せつ物やごみが高さ1.5メートルほど積み上がり、ミイラ化した死骸もあった。団体の通報を受けて府警が家宅捜索し、約16トンのごみを撤去したという。

府山城北保健所によると、昨年3月以降、近隣住民から「悪臭がする」「犬の鳴き声がする」と苦情が寄せられていたという。

引き取った犬と猫を餓死さす「神様」と呼ばれた愛護ボランティアを容疑で逮捕（2020 年 11 月 19 日　京都新聞）

猫を保護するには相応の環境と、相当の労力が必要になります。今でも年間数万頭の殺処分が行われている現状から考えれば、猫を救いたいという思いだけで保護を続けていけば、保護のキャパシティはすぐに埋まってしまうことは明らかです。また、とにかく保護の受け入れ先さえ見つかれば、「いつ事故に遭うかわからない野良よりマシ」「飼育崩壊していた飼い主宅よりマシ」という発想にもなり得ます。そういう意味では、この記事の猫ボランティアさんは、保護活動を続ける人にとって、とてもありがたい人であったと思われます。保護をいくらでも受け入れてくれる、善意の人であったわけですから。

対人援助職が最初に学習する事柄のひとつに「救世主願望」というものがあります。人を助けることや「ありがとう！」と感謝されることは人にとって大きな“快”のひとつであり、救世主願望とは、誰かを救う「救世主」になることを意識的・無意識的に志向してしまうことを指します。対人援助職者は自らのそのような欲望をまずは自覚し、意識的に抑制・解消していくことが必要となります。この猫ボランティアさんも、最初は本当に善意だけで猫を保護していたのでしょう。それが、いつしか自身の保護のキャパシティを超え、猫に適切な飼育環境を提供することができなくなっても、「受け入れて、感謝される」ことだけは止められなかったのではないかと想像します。

「ねこから目線。」では、その限界も把握したうえで、適切な環境が整っていない場合は捕獲を行わない、と決めておられます。ボランティアさんはあくまでも善意の人であり、専門職者ではありません。であればこそ、保護を受け入れる余地が本当にあるのかを確かめることは、結果的に猫を不適切な飼育環境の追いやることを防ぐものであり、善意の保護主が「救世主願望」のままに保護活動を続けることを予防することにもつながるのではないかと思いました。

この「保護」の問題について、私自身は児童虐待で生じていることとの共通項があるように感じていました。小池さんも同じようなことを考えているのでは、と思って尋ねてみましたが、「そういえば、そうかもしれませんねー」とあっさりとしたお答えでした（笑）。

虐待の凄惨さだけが報道され、養育者に対する非難と早急な保護を求める世間は、保護された後の子どもの環境や、養育者の事情・経緯・思いには無頓着です。一方で、児童の保護のキャパシティが飽和していることや、どんなに思いはあっても人的・物的・経済的事情により保護した後に必ずしも十分な環境が準備できていない場合があることも、世間は薄々気がついているでしょう。「元の家よりはマシでしょう」という声もあるでしょう。この声は、猫の保護の現場で聞かれる声と相似形であるように思えます。様々な事情により、養育の状況が崩れてしまっている家族について、それでも発揮されている養育者としての力がうまく機能するように、時には介入し、時には見守り、伴走し続ける、という支援の可能性は、検討してみる価値があるように思いました。

「人もねこも一緒に支援」の起源

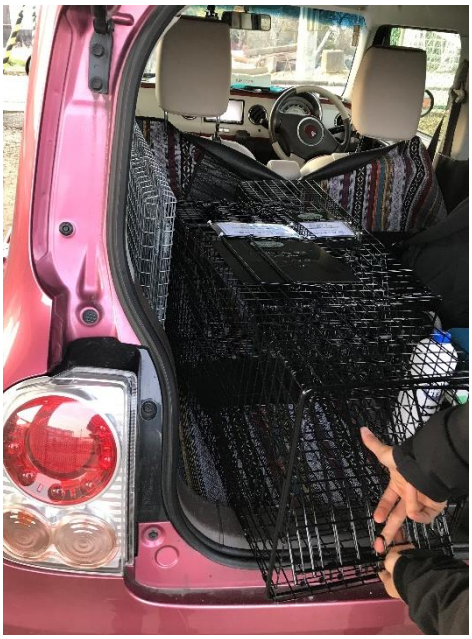
活動に同行させてもらい、「人とねこ」を「一緒に支援」することの意義を強く感じました。以前は、保護した場所に猫を手放すことができなかったと言う小池さん。どのようにして「人もねこの一緒に支援」にたどり着いたのかを聞いてみました。

小池さんが語られた内容は大きくわけて 2 つ。ひとつは育ったご家庭の要因。もう一つはその中での体験です。

小池さんのお母さんは、DV の被害を受けた女性の自立支援をされていたとのことで、緊急避難のため自宅に一泊保護して、その後、住宅確保や生活保護取得のサポート、フォローアップとしての家庭訪問などを行っていたそうです。「人ねこケア」の活動とも、ちょっと似ていますね。小池さんはこの家庭訪問に時々ついていっていたとのことで、そのご家庭に年の近い子どもがいたりすると、一緒に遊んだりもしていたそうです。ある時、動物を虐待する人に対して怒りを爆発させる小池さんに対して、お母さんは支援していたご家族のひとり、小池さんと年の近い女の子が、動物を虐待していたという事実を伝えます。この事実は、動物を虐待する人が極めて特異な、残忍な性質の人であるわけではなく、どんな人であれ、状況によっては同じことを起こしえるのだという現実を突きつけました。猫を救うためには人も助ける必要がある。あるいは、人を救うことが結果的に猫も救うことにつながる。この考えが生まれたことが「ひともねこも一緒に支援」の原点となっているのだと思いました。

最後は捕獲！

そして訪問日の夕方、この日唯一の捕獲の仕事がありました。捕獲対象は２頭で、１頭は以前この依頼主さんの依頼によって TNR をした猫。今回改めて保護飼育をするために捕獲したいということです。もう１頭は同じ餌場に姿を見せるようになったのら猫の TNR をするための捕獲です。一度は TNR をして、後になってやっぱり保護飼育したいというこのご希望。“よくあるんですか？”と尋ねてみると、比較的よくあるご依頼であるとのこと。続けて餌をあげているうちに、やっぱりウチで…という気持ちになったりするのかなぁと、ぼんやり想像しながら、車から捕獲器をおろし、依頼主さんと合流します。



餌場の下見をしながら、普段の様子や猫の性格などを聞き取り、準備を進めていく小池さん。依

頼主の方は TNR 済みの子の保護に切実な思いがあるようで、「一度捕まえた子は、（簡単には）捕まえられないんですよね！？」と心配そうです。小池さんによると、捕獲機で捕まったことのある猫に対しては捕獲機での捕獲が成功する確率は 50%くらいで、慎重な子だとなお難しい、とのことでした。小池さんは、まずは 50%に賭けて捕獲機の設置を考えていた様子でしたが、依頼主さんの様子も見て、捕獲機にかかった猫にも使える「罠」を設置することにします。以下、TNR 済みの子を A ちゃん、TNR 目的の捕獲の子を B くん（性別はよく知りませんが雰囲気で…）と呼称します。



小池さんが罠や捕獲機をセットする間、心配そうに猫のことを私に話してくださる依頼主さん。A ちゃんは、兄弟猫（昔から一緒なので、たぶん、とのこと）と一緒に姿を見せていたのですが、最近になって兄弟猫の姿が消えてしまい、ひとりになってしまったそうで、このことが保護に踏み切るきっかけになったようです。単に、情が移ったのかなぁ、くらいしか考えられなかった自分の想像力の貧困さを恥じ入りました。

依頼主さんにはいつも通り餌やりの時間に登場してもらうために一度戻って待機して頂き、その間小池さんと私で捕獲機と罠の様子を遠くで見守ります。



そんな折、小池さんが道具を取りに戻ったほんのわずかな時間に、なんと B くんの方が姿を見せ、罠の中に設置された餌をパクパクと食べ始めました。罠のロープは私から 5m くらいのところにあり、それを引けば罠は作動するはずですが、その是非が判断できない私は物音を殺しながら足早に小池さんを呼びに車に向かいます。小池さんの判断は、スルー。優先的に捕獲する必要があるのは A ちゃんの方で、罠は B くんには使いません。そこで、先に B くんを捕獲機で捕まえ、後の A ちゃんの捕獲に専念できるようにする方針に決まります。ところが B くん、捕獲機の途中まではすんなり入ったのにあと一歩で出てしまったり、捕獲機の周りをうろうろしたりと、なかなか捕獲できません。

少し離れて、物陰から捕獲機と B くんの様子をのぞいてると、不謹慎かもしれませんが、ちょっと気分が高揚してきます。塀から顔を半分だして様子をうかがって…なんて、子どもの頃に街中でケイドロをしていた時以来かもしれません。小池さんに率直に伝えると、「楽しいですよ」とひと言。しかし、「捕まえられないと帰り道はひたすらどんよりですけど。」とも。そうですよね、お仕事ですもんね…とやっぱりお気楽な自分を戒めつつ、観察を続けます。すると、どこからか A ちゃんも姿を現しました。B くん、A ちゃんが同時に登場し、徐々に現場が混沌としてきました…。

再度、罠の方に餌をセットしますが、中に入るのは B くん。しっかり 2 食目も完食です。A ちゃんは罠の近くまでは来るものの、中には入ろうとしません。ここで小池さんはいつも餌をあげている依頼主さんを呼び、罠に誘導してもらうことにします。

電話をかけて 1 分もしないうちに、依頼主さんが到着。きっとスタンバイしてくださっていたのでしょう。依頼主さんの姿が見えると、A ちゃんは一目散に駆け寄っていきます。猫ってあんな風に人に懐いたりするんだ…と初めて目の当たりにしました。依頼主さんが罠の中に誘導していくと、A ちゃんはいつもと違う様子に少し戸惑いも見せながらもすんなりと中に入り、餌を食べ始めます。捕獲の時が近づいています。小池さんは、罠が作動したら覆いをかけるための布をもってくるように私に指示して、罠のロープを握ります。身を潜めその時を待っていると、ガチャン！！と罠の作動する音がして、私は布を持って走り出しました。A ちゃんは無事、捕獲されていました。罠から捕獲機に A ちゃんを移動させ、無事捕獲完了です。よかった！！

A ちゃんはこの後、のらねこさんの手術室に移動し、ノミダニの駆除や予防接種、ウィルスのチェックなどを経て、明日には依頼主さんのところに戻って来られるそうです。

依頼主さんは B くんの捕獲にも気持ちが残っていましたが、この日は既に 2 食完食していることや、A ちゃんの捕獲を行ったばかりの現場なので、再度姿を見せる可能性は低いと判断し、この日の捕獲は終了となりました。姿を見せなくなった A ちゃんの兄弟猫についても、死んでしまったのか、よからぬ人に捕獲されたのか…と最後まで心配しておられた依頼主さん。姿を消した猫の行方は、基本的にはわからないそうです。「ほかの餌場で過ごしていることもあります。誰かに保護されたか、他の餌場にいるか、確認は実際には難しいです。無事に元気でいることを祈りましょう」と小池さん。こんな風に地域で見守られて日々を過ごしている猫たちがいるんだなぁとしみじみ思いました。

訪問を通して

この日、A ちゃんをのらねこさんの手術室に送ったのが 19 時頃。この時間にも小池さんの携帯は何度も鳴り、まだ仕事は続く様子でした（結局この後さらに 2 件仕事をされたそうです…！）。1 日同行させて頂いたお礼を伝え、帰路につきました。

とても濃厚な時間と体験でしたが、これが「ねこから目線。」の日常なのだとも思いました。世の中には不条理なことがたくさんありますが、それで諦めたり腐ったりするのではなく、自分にできる一歩を着実に重ねていけば拓けてくるものもあるのだということを実感しました。「ねこから目線。」の活動のキーワードはいくつかあると思っていて、

1. 継続性
   善意だけでは続かない。事業として継続できるように仕組みを設計する
2. 適切に機能する
   自らの仕事の前後で生じていることにも目を配り、その中で適切に機能する。自分の領分はちゃんと果たしています、という責任回避をしない。
3. つながる
   動物病院とつながる、過去の依頼主さんともつながる、自治体ともつながる、必要な時は警察や関係機関ともつながり、動かす。
4. 支援しすぎない、引き受け過ぎない
   必要なだけのサポートはするけれど、基本的には飼い主、保護主に委ね、主体的な動きを支える。それが結果的に、パターナリズムに陥いることを防ぎ、人の力を引き出すことにつながっている。

の４点が特に重要なのかなと思いました。

「ねこから目線。」は、まさに地域支援として機能していて、さまざまな対人援助職に共通する、対人援助本来のあり方や姿勢が体現されているように思いました。これを個人事業でされているって、本当にすごいなぁと感銘を受ける一方、自分自身も、もう少し自分の持ち場でできることを頑張ってみようと励まされました。

本当に貴重な機会を頂き、ありがとうございました！これからの「ねこから目線。」の活動も楽しみです！

（文：大谷多加志）

先人の知恵から
32

かうんせりんぐるうむ　かかし

河 岸　由 里 子

年間４回書いているので、32 回ということは８年過ぎたことになる。長い年月の中で私自身には何の変化が起きただろうか？確実に歳をとり、体力、気力の衰えは感じている。いま「さ行」と言う情況だが、何とか出来る所まで頑張ろう。今回は以下の８つ。

- **小事は大事**
- **小人閑居(かんきょ)して不善(ふぜん)を為す**
- **小人の勇**
- **上手な嘘より下手な実意**
- **少年老い易く学成り難し**
- **少年よ大志を抱け**
- **賞は厚くし罰は薄くすべし**
- **勝負は時の運**

＜小事は大事＞

小さいことから大事が起こる。小事だからと言って、おろそかにしてはいけないといういましめ。

小さいお子さんがいるお宅で時々聞くのだが、お子さんが１円玉等小銭を欲しがった時に、１つなら上げるとか１円玉だけとか、ちょっとだからとあげることがあると聞く。お小遣いも、小さいうちはあげない家もあれば、小さい時から 1000 円などとあげている家もある。お年玉の額などは小学生が数万円等、びっくりする。親戚が多ければそういうことになるのかもしれないが、小学校低学年のお年玉は 500 円で十分だろうと思うのはおかしいのだろうか？

お金のありがたみ、価値について、理解できないうちに多くのお金を小さい子が持っていると、子どもは簡単にお金を貰えるものと思ってしまうだろう。

また、ゲームの課金も同様で、一回の課金は小さくても、ちりも積もればで、勝手にさせていると大変な額になってしまうことがある。

最初は大したことでなくても、そこでしっかり対処しないと、大ごとになる。大事になってから嘆いても遅い。そういう意味で、保護者の方々にこの諺を伝えている。

＜小人閑居して不善を為す＞

小人は何もすることがなく暇でいると、良くないことを始めるということ。小人＝徳の無い人格の低い人間。閑居＝することがなくて暇でいる事。出典の原文では間居となっている。

出典　大学

この諺は様々なところで使う。働きバチが良いということではないが、人間余り暇をしているとろくなことにならない。それは大人も子どもも同じで、余計なことをしてしまったり、考えすぎたりとなる。何かすることがあって、していれば、悪いことを考えたり、したりすることも無い。引きこもり中の青少年たちは、ゲームをしたりYouTube を観たり、或いは寝たりすることで、暇を潰している。そうすることで不安な気持ち、引きこもっている苦しさを忘れようとしているのだろう。忙しくして居れば余計なことを悩まないで済む。

仕事を頼むときも忙しい人に頼めと言われる。忙しい人の方がてきぱきと片付けるし、能力も高いことが多いからであろう。

自分自身にもこの諺を使っている。暇な時間があると、ボーっとテレビを観てしまったりして生産性が下がる。忙しい時ほど物事が片付くものだ。所詮小人なので、閑居しないのが一番である。

英語では・・・

By doing nothing we learn to do ill.（何もしないでいると悪事を働くようになる。）

The devil tempts all, but the idle man tempts the devil.（悪魔はすべての人を誘惑するが、暇な人間は悪魔を誘惑する。）

＜小人の勇＞

思慮の浅い者の、血気に流行った前後の見境のない勇気の事。

出典　荀子

こういう勇気は時々見かける。勇気があるのは良いのだが、それだけではどうにもならないこともある。考える前に行動することも必要だが、行動する前に考えることも必要だろう。勇気だけでは解決できない処か、大きな失敗に繋がることもある。勇気はあるがと言うお子さんに出会うとこの諺を使い、よく考えてから行動しようと伝えている。

＜上手な嘘より下手な実意＞

うわべばかり飾って心がこもらない事より、たとえそれが手際が悪く下手でも、真心を込めてしたことは尊いということ。「上手な偽りより下手な誠」ともいう。

コミュニケーションが苦手な子によくみ

られるのだが、お世辞が言えない子がいる。思ってもいないことは言えないし、上手な言葉と言うのも探せない。或いはとても不器用な子もいるが、それでも一生懸命、真面目に物事に取り組んでいる子がいる時に、この諺を伝えている。

お世辞ではなく、良いところを探そう、好きなところを探してそれを伝えよう。不器用でも丁寧にゆっくり真面目にやって行けば、しっかりした結果を残せるものだと子どもたちを励ましている。勿論大人も同様である。自信のない母親にも同じように伝えられると思う。

＜少年老い易く学成り難し＞

若い時は、まだまだ先が長く慌てる必要はないと思っているが、月日の過ぎ去るのは速くてすぐに年をとってしまう。しかし学問は中々成就しないものである。だから、若いうちから寸暇を惜しんで学問に励まなければいけないということ。

出典　朱熹「偶成（ぐうせい）」

人生は昔よりは長くなっているので、この諺は今の時代にそぐわないのかもしれないと思うこともある。それでも子どもの時代がいつまでも続くわけではない。子どものうちにたくさん失敗し、色々な経験をすることはその後の人生にとって必ずプラスに働くだろう。しかし最近ゲームばかりで、外遊びもあまりしないという子も増えている。友達と揉めたり、喧嘩したり、相談したり、そういう学びもある。ただ勉強だけしていれば良いということでもないが、勉強も吸収率が高い時期に学校でしっかり学んでおけば、社会生活でほとんど困らないレベルの知識を得られる。

近頃、歳をとってから学ぶ人も増え、生涯学習や社会教育等、様々な活動が中高年の方たち向けに開催されている。歳をとっても学べることは素晴らしいし、そういう時は意欲も違うので学びが楽しい。学校教育の内容が子どもたちにとって楽しいものであるなら、もっと子どもたちは多くの事を吸収するのだろう。現代では、そんな意味合いで伝えるのも良いのではと思う。

英語では・・・

Art is long, life is short.（芸術は長く、人生は短し。）

The day is short, and work is much.（一日は短く仕事は多い。）

＜少年よ大志を抱け＞

若者よ、将来に対する雄大な抱負を持って飛躍せよという励ましの言葉。

ウィリアム・スミス・クラーク

この言葉はとても有名で、多くの人が知っている。特に北海道では使いやすい。夢を持たない、20 歳になったら死ぬなどといっている子が増えてきた中で、この言葉をいきなり使っても抵抗されるだけである。大志でなくても良いから、何かしら、夢や希望を持てたらよいなと思って、この言葉を出して「そこまで大きくなくても良いから何かしら持てるとよいね」と伝えている。将来に夢を持てなくしているのは大人の我々の責任でもある。何かやってみたいことを見つけられるように導ていける大人で

ありたいものだ。

英語では・・・

Boys be ambitious.　（少年よ大志を抱け）

‹賞は厚くし罰は薄くすべし›

善行や功労はどんなに小さくても大いに褒めて褒美を与え、罰するときは出来るだけ軽くせよということ。

出典　説苑（ぜいえん）

学校に入っていると様々な先生に出会う。授業参観をしてみているが、褒め上手な先生のクラスは子どもたちが明るい。反対に叱ってばかりのクラスでは子どもたちに元気がない。子どもたちが良い行動や頑張った時にしっかり褒めてあげる、認めてあげる事で、子どもたちは更に頑張ろうと思うだろう。しかし子どもたちも間違ったことをする。その時は短くはっきり叱ることが必要である。ダラダラと説得しようと話していても、子どもたちは最初の数行分しか話を聴けない。さっと叱って終わらせる方が入りやすいのである。それを分からない先生がいるのが残念だ。以前、恐怖政治の様に、上から怒鳴りつけて子どもたちを統制しようとしていた先生がいた。子どもたちは恐怖で確かにピシッとしていたかもしれないが、その翌年優しい先生が担任になったとたんに学級崩壊した。こんなことは予測できる話で、それを考えられないことが問題である。

学校だけではなく、家でも、褒める割合と叱る割合について説明するときに、この諺を伝え、先人の知恵に学んでもらう。

＜勝負は時の運＞

勝ち負けはその時その時の運・不運によって左右されるもので、必ずしも実力通りとは限らない。勝っておごることも、負けて落胆することも無いということ。敗者への慰めの言葉として用いられる。勝者にとっては自戒のことばになる。「勝敗は時の運」「勝つも負けるも時の運」ともいう。

ずっと勝ち続けることも無ければ、ずっと負け続けることも無いのが人生。運・不運は必ずある。勉強すれば必ず 100 点とれるわけではない。完璧に勉強したと思っていても、いざ試験になったら度忘れすることも、たまたま勉強しなかったところが出題されることも会う。大して勉強しなかったけど、たまたま勉強したところが出て、凄く良い点を取れた人もいて、これはもう運でしかない。

交通事故に遭う場合も、いつも通らないのにたまたまあそこを取ったら事故に遭ったという人もいるだろう。大事な日に熱を出してしまうことも、ケガをしてしまうこともある。これも運と言えるだろう。

運を引き寄せるのも力だという人もいるが、

勝負に負けても、それが運が悪かっただけと言われた方が、自分の力不足ばかりを言われるよりは負けた人にとって気持ちが楽になる。受験や勝負事で負けた人にはこの諺が良いだろう。

英語では・・・・

The chance of war is uncertain.（戦いに勝利する見込みは不確かなもの）

出典説明

大学・・・全三巻

中国古代の兵法書。周の太公望の著とも、また、前漢の張良が土橋の上で黄石公から授けられたとも伝えられるが、後世の偽作と言われる。上略・中略・下略の三巻から成り、老荘思想を基調とした治国平天下の大道から政略・戦略の道を論じている。同じ兵法書の『六韜』と併称され『六韜三略』ともいう。

荀子・・・全二十巻三十二編

中国、戦国時代の思想書。趙の思想家荀況（荀子は尊称）の著。孟子の性善説に対して性悪説を唱え、人間の性は本来悪であるから、礼によってこれを改め、善に導いて、社会秩序を維持すべきだと主張した。

朱熹（1130～1200）・・・

南宋の儒者。朱子学の創始者。字は仲晦・元晦。朱子と尊称される。十九歳で進士に合格し、長い間官界にありながら学問に励み、諸学説を統合して儒学を集大成した。著書に『資治通鑑綱目』『四書集註』『近思録』などがある。

「偶成」（たまたまできた詩の意）は朱熹の漢詩で、「少年易老學難成、一寸光陰不可軽、未覚池塘春草夢、階前梧葉已秋聲」（少年老い易く学成り難し、一寸の光陰軽んずべからず、未だ覚めず池塘春草の夢、階前の梧葉すでに秋聲）とある。意味は、「若者はあっという間に年を取ってしまい、学問は中々完成しにくい。だから、少しの時間でも軽々しく過ごしてはならない。池の堤の若草の上でまどろんだ春の日の夢が、まだ覚めないうちに、階段の前の青桐の葉には、もう秋風の音が効かれるように、月日は速やかに過ぎ去ってしまうものである。」ということである。

クラーク（1826～1886）・・・

William Smith Clark はアメリカ人教育者。化学、植物学、動物学の教師。能楽教育のリーダー。1876 年札幌農学校（現北海道大学）開校。初代教頭。同大学では専門の植物学だけではなく、自然科学一般を英語で教えた。このほか、学生たちに聖書を配り、キリスト教についても講じた。のちに学生たちは「イエスを信じる者の誓約」に次々と署名し、キリスト教の信仰に入る決心をした。札幌農学校 1 期生と別れる際に、北海道札幌郡月寒村島松駅逓所でクラークが発したという言葉が「Boys, be ambitious.」として知られていた。

うたとかたりの対人援助学

第 18 回　＜不条理＞と向き合うためのうたとかたり

鵜野　祐介

今年（2021 年）５月 30 日、日本教育学会関西支部のシンポジウム「『教育学のパトス論的転回』を読む」において、「＜不条理＞と向き合うためのうたとかたり―子ども人類学からの問題提起―」と題して話題提供を行った。その概要をご紹介したい。

１．はじめに ―「憶えておくといい話」―

2017 年３月８日、宮城県女川町女川小学校講堂で、地元の語り部・安倍ことみさんが全校児童約 200 名を前にして、次のようなお話を語られた。

[要旨]大阪出身で石巻にやってきた栄存（えいぞん）法印は、その高徳な人柄と卓越した指導力によって町の人びとからも領主の笹町但馬（たじま）からも厚い信頼を得たが、但馬の跡継ぎ息子の新左エ門はこれを快く思わず、父親が亡くなると計略によって法印を陥れ、無実の罪を着せて牡鹿半島の沖合にある江島（えのしま）へ島流しにした。江島での日々、法印は、昼間は江島の人びとに広い世の中のことを学んでほしいと読み書きを教えていたが、夜ごと両手の指に蝋燭の灯をともして岩の上に立ち、石巻の方を睨みつけていた。亡くなる前、鰹節一本を咥えたまま自分の体を逆さにして埋めるよう遺言するが、島の人びとが遠慮して逆さにしないで埋めると悪天候が続いたため、逆さにして埋め直すと嵐は収まった。

それから 50 年後、仙台・片平町の武家屋敷前で子守娘がその家の奥方の子どもを守りしていると見知らぬ僧侶が現われ、その子が誰の子であるのかを尋ねた。そしてその母親が新左エ門の娘であると聞くと「笹町の血を引く者がまだ生きていたか」と言い、地面に伏して呪文を唱えた。その途端、赤子はひきつけを起こし、子守娘があわてて屋敷の中に入ってみると奥方も倒れており母子ともに亡くなった。人びとは「栄存法印のたたり」と言い伝えたという。

「栄存法師のたたり」と呼ばれるこの伝説の前置きとして、ことみさんは「江島に伝わる三百年ほど前の話で、こわい話ですが、皆さんも憶えておくといい話だと思うので話します」とおっしゃった。

そして、ことみさんが語り終えた後、司会を務めておられた先生が、「皆さんも江島の人々のように広い世の中のことを学んでいってください」とコメントされた。

講堂の隅で参観していた私は、次のようなことを自問していた。毎週１回小学校を訪れ、１つのクラスに入って民話語りをしてこられたことみさんが、１年間の活動の最後にこの話を選んだのは何故か。「憶えておくといい話」とおっしゃった真意は何か。そして、司会の先生のコメントは、ことみさんの「憶えておくといい」という意味内容にふさわしいものだったのか、もしも自分が先生の立場だったら、どのようなコメントをしただろうか……？

あれから４年余りが経った今も、これらの問いへの答えは見出せないままでいる。無実の罪を着せられて命を落とした主人公が祟りをなして復讐するという、本話のような理不尽で不条理な物語に対して、子どもたちが向き合う機会を回避するよう、教師は

配慮し、もしくは取り繕ってきたのではないか。それは学校教育の本質的な属性と言うべきものであり、教育学における<パトス（受動性・感情・情熱・受苦 etc.）>の問題を考える上での重要な論点ともなるのではなかろうか。

2．物語の起源としての<不条理>甘受説　―人類学的物語論―

人は何故物語を生み出し、語り継いできたのかという、物語の起源論については諸説あるが、その一つに<不条理>甘受説とでも呼ぶべき系譜がある。

18 世紀英国の哲学者デイビッド・ヒュームは次のように言う。生老病死や天変地異をはじめ、因果律によっては決して解き明かし得ない<不条理>な事態に遭遇した時、その<恐怖>から逃れるために、また一縷の希望を与えてくれることを願って、人は〈神〉を誕生させ、そして〈神〉に祈った――。

19 世紀後半、ドイツのマックス・ミュラーや英国のジョージ・コックスといった比較神話学者たちは、「古代人」の太陽や月や星の運行や気象など大自然に対する<驚異>や<畏怖の念>が神話を創造させたと説いた。これを批判的に継承したエドワード・タイラー、アンドリュー・ラング、ジェームズ・フレイザーなど英国の人類学者たちは、こうした「古代人」の発想を、人類の進化における「未開」の段階にある人びとが共有する世界観であると捉え、森羅万象に共通する霊性（アニマ）を見出そうとする「未開人」の観念を「アニミズム」と呼んだ。つまり「未開人」のアニミズム的世界観が、自分たちを取り巻く大自然の諸現象や生老病死という生命にかかわる諸現象に対する<驚異>や<畏怖の念>と結びつくことによって、神々の物語すなわち「神話」が生まれ、そこから昔話や伝説などの民間説話が派生していったと見たのである。

20 世紀ドイツの哲学者ハンス・ブルーメンベルクは『神話の変奏』において、「現実によって論破されなかった物語が何千年も語り継がれてきたのは、圧倒的な現実に抗して生き抜くためだったに違いない」と主張した。すなわち、現実による絶対支配に対して、恐ろしいものに対抗するイメージを創り出すこと、つまり未知の対象に対抗する主体を想像力によって確保しようと試みて物語を創出し、これによって、現実による絶対支配を解体しようとしたと指摘する。すなわち、現実の<不条理>な事態において立ち現れる<不可視のもの>や<不可知のもの>、あるいは<漠然たるもの>に対する<恐怖>もしくは<驚愕>を払拭するために、人はこれらに名前を与え、この名前を使って物語を語ろうと試みてきた。そこに物語の根源的な意味を見たのである。

このように、<不条理>に向き合うため、もしくはこれに立ち向かうために、人は〈神〉を生み出し、神話をはじめとする物語を語るようになったとする<ホモ・ナランス（語るヒト）>としての人間存在論が展開されてきた。

3．日本の民間説話の中に刻まれた<不条理>

古来より、地震・津波、洪水、旱魃、飢饉、パンデミック、戦争等、<不条理>と呼ぶべき様々な災厄に人びとは翻弄されてきた。そしてその出来事を、うたやかたりの中に刻み込んできた。

日本の民間説話の中にも<不条理>を刻んだものが数多くある。例えば、宮城県気仙沼市には「みちびき地蔵」と呼ばれる地蔵にまつわる伝説がある。

昔、気仙沼の大島にあったこと。若いおかみさんがねえ、小さい男の子連れて働きにいったんだねえ。そすてほの、一生懸命働いて、夕焼け空もすみかけの頃ねえ、ひと暗がりになっとこ、そのお地蔵さんのある山を越えてねえ、帰ってきたんだと。

そすたらその地蔵さまの近くへきたら、なんだか、がやがや、がやがや、人が大勢でねえ、その地蔵さまを拝んでたって。あらぁ、見たらばどこそれのおばあさんもいれば、どこそこのこうゆう人もいれば、あら、こういうおんちゃんもいるってねえ、不思議で、子どもの口

もふさいで黙って見てたんだと。近所の人もくれば、知っている人がぞろぞろきて、その地蔵さんのとこさ拝んで、そすてほの人が飛ぶようにすていくと、別の人がまたきて、牛と馬も四頭もきたってねえ。で、みんな飛ぶようにいなくなってすまったんだと。

おっかなくておっかなくて、ほて(＝そして)うちさきてから、父っさんに話したんだってねえ。いやいや不思議なこと、でもめったなこと語られねえから人には語んなよってねえ、ゆってたら、二日、三日たったらねえ、大津波がきたんだってねえ。

そすてねえ、津波きてみんな逃げたんだけっども、逃げ遅れた人がひき波でみなさらわれて、そこでねえ、がやがや、がやがや、大勢きて拝んでいた人たちが、全部死んだんだと。牛と馬も四頭、みんないねくなって、それからみちびき地蔵と名前つけられたんだと。ほれ、死ぬ人をみんなみちびくって(松谷みよ子編著『女川・雄勝の民話　岩崎とし゛の語り』国土社 1987、168-169)。

みちびき地蔵は宮城県気仙沼市大島の田中浜に実在し、気仙沼出身の民俗学者・川島秀一によれば、いつごろから「みちびき地蔵」と呼ばれたかは不明だが、1770 年代に祀られた記録があり、昭和の時代にお堂が建て替えられたという。

2011 年3月の大震災による津波で地蔵堂は全壊し、地蔵も石仏6体と共に流失したが、地元住民と支援者たちの力により、新しいみちびき地蔵3体と石仏6体が制作され、2012 年 10 月地蔵堂も再建された 。2013 年7月、流失していた石仏3体が発見され、現在地蔵堂には、3体のみちびき地蔵と、発見されたものを含めて9体の石仏が祀られている。石仏を発見した地元の女性は「みちびき地蔵は霊を導き、石仏は地域を見守ってきた。がれきの中から出てきてくれたのは、島の復興を見守るためだろうか。みんなで末永く大切にしたい」と話したという。

また前述の川島は、「昔、大きな地震があったとき、逃げ惑う人々に指示を出した人がいました。この人の後を付いていって助かった人々が、お礼をしようと思って探しましたが、結局見つからず『あの人はお地蔵様だったんだ』と言われたそうです」という別の話があるとも語っている。

地蔵が津波や洪水を予告したり、その災厄を回避させてくれたりする話や、地蔵の予告を無視したために災厄に遭うという話は全国各地に伝わる。それは地蔵の功徳を説く「仏教唱導」の物語と解釈することもできるが、突然わが身に降りかかった＜不条理＞に対して、これを＜合理化＞し、自身を納得させることで＜不条理＞を甘受しようとしたものと見ることもできるのではなかろうか。

4．日英のわらべうたの中に刻まれた＜不条理＞

英国の手つなぎ輪遊びに歌われるわらべうた“Ring-a-ring O’ Roses”は、17 世紀のペスト大流行(パンデミック)を歌ったものとの説がある。

Ring-a-Ring O’ Roses,
A pocket full of posies,
A tishoo! A tishoo!
We all fall down.
バラの花輪だ 手をつなごうよ、
ポケットに 花束さして、
ハックション！ ハックション！
みいんな ころぼ。

「バラ」はペストの症状の赤い発疹、「花束」はペストを防ぐための薬草の束、くしゃみは病気の末期症状、そして最後にみんな死んでしまうと解釈されるのだという。この詞章が文献に登場するのは 19 世紀末（1881 年）のことであり学術的には疑わしいとされるが、英国ではよく知られた逸話である。

一方、岩手県遠野のお手玉唄「おっつうおひとつ」は、江戸時代宝暦・天明の飢饉による集団入水自殺を歌ったものとされる。

おっつう おひとつ おひとつ おひとつ
おふたつ おふたつ おみっつ
…
五朝(いつあさ) 五朝限り 五朝一緒にたんたん滝水(たきみず)

明日は蓮華の花盛り　友来い　ただ道来い

…

最後の二連は、朝一回のほんの少しの食事も五日限りで尽きてしまう、その時には「早池峰（はやちね）の御山の神様が迎えてくださるからみんなで行こう。滝へ入れば明日は極楽浄土だ」とうたったものだという（阿部ヤエ『人を育てる唄―遠野のわらべ唄の語り伝え―』エイデル研究所 1998：229）。

以上のような＜不条理＞な災厄の記憶を刻み込んだうたやかたりは、これを聴く子どもに対して、「生きるということは＜不条理＞と向き合うことだ」という人生観を伝達する機能を担っていたように思われる。だが学校教育において、そうした人生観は極力遠ざけられてきた。また教育学の主題となることも回避されてきたのではあるまいか。けれども、東日本大震災をはじめ相次ぐ自然災害を体験し、今また新型コロナウィルス感染症という新たな災厄を体験している子どもたちにとって、＜不条理＞と向き合うことの意義はきわめて大きいと思われる。

但し、そうした＜不条理＞によって不安や恐怖を募らせ、悲嘆や絶望に苛まれる事態へと子どもたちを陥らせてはならない。「それでも上を向いて」、彼らが一歩前に踏み出していこうとするための手立てを、同時に私たちは用意しておく必要があるだろう。

5．おわりに―教育学のパトス論的転回に向けて―

とはいえ、私自身、確信を持って提示できる「手立て」があるわけではない。今ここで言えるのは、＜不条理＞な唄や物語を子どもたちに（追）体験させているその間、子どもたちの傍に佇み、共に悩み苦しみつつ、彼らが＜狭き門をくぐる＞姿を見守ること、そして安直に答えを出さない／求めないことが肝心だと思われる、それだけだ。

いつか彼らが「人生の踏絵」（遠藤周作の言葉）に直面した時、＜不条理＞なうたやかたりを思い出すことがあるかもしれない。その時、こうしたうたやかたりは、「頑張ろう！」よりも「絆を大切に！」よりももっと深い拠り所として、子どもたちの人生を支えてくれるはずだ。ことみさんが「憶えておくといい」とおっしゃった真意とは、そういうことなのではないだろうか。

作家の上橋菜穂子が、ある講演会で次のように語っていたのが思い出される。―― 自分は子どもの時、祖母から恐ろしい話や残酷な話をいっぱい聞いたが、祖母の膝の上で聞いていたので、怖かったけれど安心だった。以前、講演の後で、「読み聞かせの中で、残酷な話を読んでいいと思いますか」という質問を受けたことがある。その時自分は、「それはその本の内容の問題ではなくて、誰が読むかが問題だと思います」と答えた。子どもにとって、母親や祖母の膝の上で、あるいは家族みんながいるところで、怖い話を聞いたり読んだりする時には、たとえその内容が引きつけを起こして泣く程怖いものであったとしても、それによってトラウマになったり心が歪んだりすることはない ――。

作家・森崎和江の、4 歳の娘との以下のような逸話も印象深い。――「あのね、ママ、死ぬのこわくない？」 そうささやきました。泣きじゃくりながら。私はどきりとしました。……ちいさな子の魂が、大人とすこしもちがわない大きさでそこにあるように思われて、私は息をのみました。……「あのね、みんな、こわいのよ。…でもね、元気よく生きるの。ママもずっとひびきといっしょにいるから。……ごめんね」。いいたいことは胸いっぱいにあるけれど、4歳の子に伝えることばも力も持っていないのです。……そのうち、子どもの方が先に落ち着いてきました。私の背へ、短い腕をのばして、なでながらいいました。「泣かないでね。もうこわいこと言わないから。大丈夫だから……」（森崎和江『大人の童話・死の話』弘文堂 1989 pp.46-47）。

＜不条理＞な世界に立ち向かう子どもたちの傍に佇み、時に涙を流し、時にオロオロ歩きながらそっと見守る＜デクノボー＞であろうとすること、そこに教育（学）の原点がある、そんな気がしている。

あぁ、結婚！

―婚活日記―

第18回

黒田長宏

＜2021年月2月13日＞

　44号の原稿を提出した。相変わらず新型コロナウイルスで困ったもんだ。これでは婚活もどうしていいかさらにわからない。

＜2月24日＞

　前回提出し終えた晩に、東日本大震災の余震だという震度5弱だと思う地震がきたが、発表では震度4だった。しかし震度4でもかなり5弱に近かったように思った。10年を経てもまだ余震だとは。

まだ10日ちょっとの間に、勤務先では私の YouTube をみてもらえないかと女性事務員さんの一人にドキドキしながら言ったらやんわり断られ、某マッチングアプリも進展がない。ただただ、結婚したい人は結婚できる社会へというアピールとみたテレビなどの感想を一日一つ続けている。登録者数は過去最高の33人。ユーチューバーとして社会的に独立できるように頑張る。そうした力があれば、私の願いも社会が叶えてくれるようになる。

＜3月29日＞

今回の茨城県の甲子園も相撲も終えた。私自身はユーチューブの登録者数が増加しなくなったが34人。減ってもいないのが幸い。私の夢というより希望は、ユーチューバー一本で暮らせることと再婚。どちらも不可能ではない時代に入ったと思う。

＜4月21日＞

日記ではなくて月記のペースだが、YouTube の登録者が現在40人。一番多い視聴者数の動画は、広告用のは別格の数字なので除いて、一つ1000視聴を超えたものが出てきたが、一体どうしてそうなるのかは不明。しかし日常何も変わらん。再婚は再就職や進学よりも私にとっては難しいことになってしまっている。対人援助と言ったところで自分自身が救われなければどうにもならない。などと、この学会に八つ当たりしてもどうしようもない。松本清張の『霧の旗』などはどうも八つ当たりが加害者でなくて弁護士に行ってしまったような話にも思う。

私もこの学会ではなくて女性一人の誰かに向き合わないと、八つ当たりに過ぎないだろう。そう思いながらいつまで続くのか。

いつまで続くのかと言えば新型コロナウイルスのワクチン接種が24日に一回目という予定になったが、そういうことは短信向きの話だろうか。しかし、結婚問題についてもコロナ禍だとさらに気が重くなるだろう。少子化もさらに進んでいるらしい。他力のような印象で一人の助け合える女性が現れてくれれば劇的に感じるが、自力的には告白もできず、YouTubeの回数を増やすのみが自力に近い一番の希望である。今日、シリーズとして番号をつけただけで300回になった。ただ、よく世界中で日に日に莫大に増える動画や文字を貯え続けられるものだと思う。そういうのは他力である。小学生からプログラミング学習をする時代のようだが、私は末端の YouTube 動画のアップロードが他力的な時代との遭遇である。こんな時代やツールが来るのだから、再婚相手だってまだわからないと思いたい。

＜5月15日＞

本当は明日、もっと良いならば明後日にでも書けば良いものを、上方演芸会をラジオで聴いたはずみもあり、もしかしたら明日は副反応でやる気を無くしてしまい、締切日までやる気を無くしてしまうと連載が途絶えてしまう危機感があって、今晩これを書き終えたら提出しまおうと思う。鋭い方々はお気づきだろうが、私は勤務先のおかげで、他の国民の皆様方よりも早く2回目の新型コロナのワクチンを接種し終えた。噂によると1回目よりも2回目のほうが副反応が強く出るらしいが、1回目は腕の痛みが接種翌日に出たくらいで、そのまた翌日にはかなり痛みは軽減していた。配慮のある人ならば明後日以降に提出して、2回目の副反応を書くであろうに、私というものは、なかなか再婚できないばかりに性格がいじけてしまい、教えてやるもんかと内心思ってしまい、提出しちゃおうという次第である。再婚さえ出来ていたならばとても親切で、2回目の副反応の参考事例を一足早く提示したものを。ですから皆様はご自分の体験で接種後の副反応がどうなるかを知っていただきたく思います。ですが、ネットに出ているように若い人のほうが副反応が特に2回目の翌日が比較的きつかったり、職場での噂もネットと同じようなものでした。なんだか気が引けてしまい、語尾がですます調に変化してしまった。どうしても良心が抜けきれない。だが良心があるだけでは再婚は出来ないのだ。再婚といったって、結婚は3日で出ていかれてしまい、裁判のほうが2年か3年か、一体あれはなんだったのだろうという出来事だった。しかしたしか47歳だったか48歳だったかその年齢では結婚できるにはできるのはわかった。

だが、こうしてあとわずかで54歳になるというのに、三浦知良選手のようにはいかないものである。とても難しい。そういうわけで、職場で通用しなくなった日

のために期待の希望のユーチューバー収入生活のための途中経過であるが、もちろん収入になる兆しは見えないものの、登録者数は現在４４人である。ありがとう。そしてさらに登録者数を増やすためにペンとパイナップルをくっつけてみたらどうだろうと考えているところである。次回こそ。

〔PBLの風と土　第17回〕

地に吹く風と土に寄せる波が境を越える

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構教授）

【前回までのおさらい】

筆者は2017年度にデンマークのオールボー大学（AAU）で学外研究の機会を得ました。AAUでは1974年の開学当初から全学でPBL（Problem-Based Learning）を導入していることで知られています。

連載1年目は現地報告を中心に、連載2年目はアイルランドで刊行されたPBLの書籍をもとにオールボー大学以外での知見を紐解きました。連載3年目からはサービス・ラーニングとの比較を重ねてきており、コロナ禍を経た連載4年目にはフィールドに赴くことが抑えられた影響を過去の受講生の語りを手がかりに検討しました。

1. コロナ禍における連載5年目にあたり

地域参加型学習の教育法の1つであるサービス・ラーニングを導入したカリキュラムの企画・開発・推進・評価に取り組んできた経験を踏まえ、より広い分野での参加型学習の手法として展開されてきたPBLについて比較研究から迫ることとしたのが2017年である。立命館大学の学外研究制度により、オールボー大学人文学部の心理学科にて客員研究員として、デンマークの北部のまちに1年間滞在する機会を得た。そうした中で執筆の機会を得た本連載では、1974年の開学から全ての学部でPBLを導入してきた歴史的側面、さらにはUNESCOのUNITWIN/チェアプログラムに選定されたことでPBLの普及と研究に取り組んできている社会的・文化的側面を紹介させていただくことができた。あれから4年、連載も5年目となるのが感慨深い。

前述のとおり、連載1年目はオールボー大学の滞在記という性格も重ね、文献の渉猟を通じたサービス・ラーニングとの比較だけでなく、現地で実施されているセミナーの様子や客員研究員の受入担当教員となっていただいた先生方と共に発表した国際学会（PBL2018）の様子も紹介した。連載2年目は、PBL2018にて出会ったアイルランドの研究者によるPBLに関するオンライン書籍を解題していくこととした。3年目は、改めてサービス・ラーニングとの比較を通じて、PBLの2つの性格、つまりProblem-Based　Learningとして社会課題への介入を通じて知識や態度を磨いていくものとProject-Based　Learningとして社会課題に介入していくもの、両者の観点の違いに関心を向けていった。そしてコロナ禍に見舞われた4年目は、コロナ禍によってサービス・ラーニング科目にどのような影響がもたらされたか、東日本大震災から10年という契機ということも相まって、一方で地域と大学とを頻繁に往復して知識・能力・態度を磨いた結果、どのような学びと成長がもたらされたのかについて4人の卒業生の現在から検討することとした。

長引くコロナ禍は、参加型学習の展開にも大きな影響をもたらしている。PBLであれば、Problem-BasedであってもProject-Basedであっても、オンラインでのコラボレーションを通じて、社会的・専門的な素養を磨いていくことができるだろう。一方で、ソーシャル・ディスタンシングとして、人との距離感を調整することが求められる環境におけるサービス・ラーニングでは、現場での実体験を直接的に重ねること困難である。無論、急激な環境変化に適応しなければならないからこそ、インターネットを介した対人援助が必要とされる部分があるものの、そうした実践を学習環境の整備と共に行うのは簡単なことではない。

そうした中、前回の結語にも示したとおり、よりよい学習環境の創造のためにはコロナ禍での経験を忘れ去ることなく過ごすことが重要と捉え、連載5年目はより深い学びの場づくりの設計概念を検討していく。今回は越境をキー

ワードとして取り上げたい。言うまでも無く、ソーシャル・ディスタンシングの上で改めて困難さと重要さが際だった観点である。具体的には、連載4年目において積極的に取り上げてきた復興支援活動を組み込んだサービス・ラーニングの受講生の語りを手がかりに、地域参加型の学習において他者との物理的・心理的な距離感をいかにして調整するか、という点に着目していく。

2. 第三者の介在による相互評価の促進

サービス・ラーニングのみならず、フィールドワークを伴う実践的な教育プログラムにおいては、教室・実験室等の大学内で完結するプログラムに比べ、評価の観点・指標は複雑なものとなる。山口・河井（2016）では、「活動や学生集団を画一的に捉え、典型的で機械的な学びと成長を想定する評価では、学習評価としても実践評価としても掬い取れない事態が数多くある」として、「学習評価にも実践評価にも、活動の多様性と学びのコミュニティとしての学習者集団における多様性を重視すること、学びにおいても実践においても典型性の束縛を緩め非典型性を受け入れること、さらに活動が進展していく中での学びと実践の双方において生じる柔軟性を価値あるものとして捉えることが必要になる」ことを明らかにした。その際にデータとして特に着目したのが、プログラムの終了直前に行う学生の相互評価シートであった。[1]謙虚で誠実に地域課題に向き合った学生が、場合によっては他の受講生に比して自己肯定感が低いように受け止められる際、一定期間にわたって学びのコミュニティの創出・維持・発展にあたってきた受講生どうしがコメントを重ねることによって、謙虚さと誠実さは携えつつ、成熟した市民としての素養を磨くことができたことに一定の自覚と、今後もそうした姿勢で地域社会に向き合っていく責任を喚起する契機となったことを確認したものである。

2021年5月23日、日本・サービス・ラーニング・ネットワーク（JSLN）の2021年度の全国フォーラムの第1分科会として「東日本大震災10年へのリフレクション～風の人から土の人となったサービス・ラーニング受講生と共に」が開催された。筆者がコーディネートとなり、本連載の14回目から16回目までに取り上げてきた立命館大学サービスラーニングセンター科目「シチズンシップ・スタディーズI」の減災×学びプロジェクト（以下「減災P」）の受講生、西﨑芽衣（一般社団法人ならはみらい）、森亮太（MOGRA/グラフィックデザイナー）、森雄一朗（一般社団法人ならはみらい）を報告者として招き、改めて実践と学習の成果を相互に語り合う機会としたのである。開催案内には、第15回で紹介したとおり、立命館大学校友会・立命館災害復興支援室作成が2020年に作成した映像（「そよ風届け隊」×「チャレンジ、ふくしま塾。」4人の校友が語る福島の復興）の事前視聴を促した。また、事前に名前は掲げなかったものの、この3人の報告者に加えて「ほか」という2文字を付して告知をしており、後述するように3名の語りに対して、分科会の終了直前に2名からコメントを寄せていただくこととした。

1時間半にわたるオンライン（Zoom）でのセッションでは、福島県楢葉町に居住する3人から簡単な自己紹介の上で受講のきっかけと印象的なエピソードを交えて何を学んだかについて語られた。まず、2012年に理工学部（機械工学科）の4年次において履修し、現在はフリーのグラフィックデザイナーという立場に加えて楢葉町の地域おこし協力隊や復興庁による実践型インターンシップのコーディネーターも務めている森亮太さんからは「現地に行って学ぶというプログラムに魅力を感じて受講した。何を学んだか、と言われると難しいけど、人との関わり方を学んだことは確かで、今、福島で暮らしている基本的なベースとなるものを、この授業で学んだ気がするけど、なかなか言語化できていない。」と示された。続いて、同じく2012年度に産業社会学部（メディア社会専攻）の1年次において受講し、同年に森亮太さんが立ち上げた「そよ風届け隊」の設立メンバーでもある西﨑芽衣さんは、「震災当時、報道を見て、自分も記者になりたいという夢を抱いて、入学したら何らかの形で地域の現状を見たいという機会を探しているとき、山口先生の大講義を受講したときに案内を見た。ボランティアサークルで現地に行くこともできたが、授業を通じて過去のその他の災害との比較をしながら学ぶということに魅力を感じて受講し、今、地

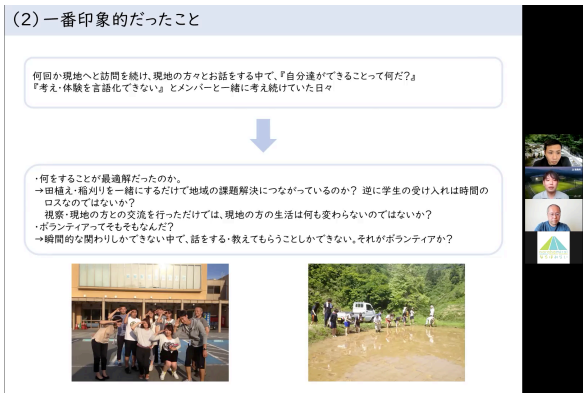


図1：JSLN第1分科会での話題提供の様子
（話題提供者のみZoomの「ピン止め」を用いて表示）

域で生きていく中で、社会で生きていく中で基本的に大切なことを学んだ。」と述べた。そして2015年に法学部（国際法務特修）の2年次で受講し、現在は楢葉町役場によって設立された一般社団法人ならはみらいで西﨑さんと共に勤務する森雄一朗さんは「群馬県大泉町出身で、一度、地元の銀行に就職したが、楢葉町のまちづくり会社に転職した。人見知りということもあったので大学1年次に、なかなか友達ができず、これからどうしていったらいいかと悩んでいるときに、議員インターンシップに行って、将来の夢を語る機会に向き合い、これから人と出会い、人と向き合っていくことが大事だと考えていた頃、ボランティア活動を組み込んだ授業があることに知った。」と語った上で、当時の志望理由を手元に残していたことに触れ「誇張もあるかもしれないが、生まれが阪神・淡路大震災の年など、過去の災害を引きつけて述べていた」ことを紹介した上で、「新潟県中越地震で大きな被害を受けた塩谷集落での田植えや、楢葉でのインタビュー活動などで、自分たちがやっていることってボランティアって言えるのか、地域の課題解決につながっているのか、ということを考え、むしろ現地の方の負担感や時間のロスになっていないか、と思い、受講生どうしで語ったこともある。」とエピソードが紹介された。

2順目の発言は、随時参加者から問いを受け付けていたこともあって寄せられた「授業で現地に行くことの意義」について応える形で、森亮太さんからの「既にあるボランティアサークルで活動していたら、今3人がここにいることはなかっただろう。」の回答に始まり、「授業をきっかけに原子力災害で双葉郡から避難している方々に直接触れて、現地の学生との出会いもあって「そよ風届け隊」という団体は立ち上がり、活動内容の組み立ては甘いところがあったのに、福島の方々はやさしくて「京都から来てくれるなら」と、多くの支えをいただいた。つながりのない中で多くの方と活動をつくっていった先に、今の私たちがあると思っている。」と述べた。続いて、西﨑さんは「その後、サークルでの活動と授業で現地に来る人たちが混ざり、授業によるオフィシャルなプログラム以外でも多くの人が現地に関わり続けることで、結果として地域に根ざすことの意義を見つめることができたと思っている。また「そよ風届け隊」のメンバーには大学を休学して現地に行くという選択をした人がいて、自分もその一人で2015年度に1年間「ならはみらい」の臨時職員として休学して働いたが、1年間住む中で、福島を取り上げるメディアに接する中で、その姿勢に疑問が強くなっていった。そして、メディア系への進路は断つことにした。」と語った。そして森雄一朗さんからは次のような回答が示された。「国際法務の中でも行政学が専門だった。豪雪地帯の集団移転というテーマでディベートを行ったりもした。そこで、ゼミの同級生が「コストがかかるんだから集団移転をしたらいいじゃん」と言っていたが、減災×学びプロジェクトで出会った人に「集団移転をしてもらう」ということは難しいと体感した。一方で、学問上、集団移転ということを扱い、学んでいる人が今後、行政で働いていくということを思うと、実体験を持っていることによって気づきを大事にしたい、と思った。」

こうして過去の活動と学習の体験が語られる中で、受講後にサークルを立ち上げ、またサークルで活動を続けていったことに関心が寄せられ、参加者からはなぜ、そうして丁寧に現地に関わり続けるのか、「当事者意識の醸成」について問いかけがなされた。それに対しては、「大事なことは自分たちの思いだろう。やりたい、ということをやるということ。授業でも先生が何も話さない場面が多く、最初は戸惑った。自分たちで何を大切にしていくか、ということを深く考える習慣を得た。」（西﨑さん）、「山口先生は常に見守る立場で、やる人

は支えるし、やらない人はそのまま、という感じだった。」（森亮太さん）と、主体性が喚起される要因として、教員の姿勢が大きかったことが示された。私見や私情を重ねることが許していただけるなら、教育者中心ではなく学習者が中心となる教育プログラムが展開されていたことを時を経て確認することができ、存外の喜びであった。

3. 現地に吹いた風は土となったか？

この連載のタイトルにも掲げているが、今回の対話のテーマでは「風」と「土」の存在や役割を対置して取り上げた。文字通り、風はある土地に外から吹き込んでくるものであり、風が吹き抜けていくことで土地の質に影響がもたらされる、という概念である。風土論と言えば哲学者の和辻哲郎による研究がよく知られていることは論を待たないだろう。和辻（1962）によれば、風土とは「ある土地の気候、気象、地質、地味、地形、景観などの総称」（p.7）とされ、「人間は単に風土に規定されるのみでない、逆に人間が風土に働きかけてそれを変化する」（p.18）という記述を見出すことができる。[2]もっとも、本連載および分科会では、風と土を人の振る舞いの比喩として捉えているのだが、分科会の後段は、参加者から「風の人と土の人という対比で言えば、どんな風を吹かせたか。そして、これからはどう振る舞っていくか？」という問いが投げかけられ、順に以下のような語りが重ねられた。

> 森亮太さん：正直言って、どんな風だったかわからないですね。地域の人に聞いてみるしかわからないと思っています。自分がいい風をもたらせたかはわからないものの、今、復興庁の地域実践型インターンシップのコーディネートをしていて、風のように学生が来るということは大事だと思っています。どうしても地域では人間関係が凝り固まるところがあるからです。サービス・ラーニングでは地域の活動に関わることで学生は学びがあるわけですが、地域にとっても新しい関わりを生み出すという面もあるでしょう。その点で、自分はまだ風かな、と思っています。なかなか土になれないですね。土になった、と言えるのは結婚したときぐらいしかないのかもしれません。そもそも骨をうずめます、と言っても嘘っぽいくなるでしょうし、結局はこの地域に関わっていく覚悟をするかしないか、そうした姿勢に表れるのではないでしょうか。ただ、なかなかそこまでは至っていません。
>
> 森雄一朗さん：自分からすると土になりかけているのではないかと思っているんですが、周りから見ればまだ風でしかないという自覚があります。楢葉町に学生時代から風としてやってきて、今までのあいだで地域に対して出来たことは思い出づくりだと思っています。それが日々の生活の上での張りになるのではないか、そしてこのことに意義があるのではないかと感じています。というのも、楢葉町が避難指示から解除されて1年を迎える2016年9月4日に住民の方々とバーベキューをしたのですが、お礼の色紙を作成して次の日にプレゼントとしてお渡ししたところ、それを今でも大事に壁に飾られて大事にしていただけているんです。部屋の模様替えをしても、ずっと掲げ続けていただいていて、お伺いするたびに当時のことが話題になります。その時は前年度の受講生の経験をもとに参加型学習を支援する教育サポーターと「そよ風届け隊」のメンバーという両方の立場がありましたが、現地の方にとっては1学生です。そして今、住んでいるまちで学生時代にそうした出来事に一緒に関わることができたのがありがたいなと思っています。
> 大学を卒業して、半年だけですが地元で就職して、その後で学生時代に多くの思い出をつくることができた楢葉に来たわけですが、私も正直、腹をくくって、楢葉に骨をうずめます、とは言えないと思っています。減災Pがきっかけで楢葉に住むことが予想できなかったように、たぶん、今後も予想できないことが出てくると思うので、なかなか断言は出来ません。ただ、逆に土になりすぎてしまうのもどうか、と考えるところもあります。というのも、地元の昔からの人間関係を考えなくても動けることが、「風」出身で土になりかけている上で自分の強みだと感じているからです。これからも、もう

少しそういう部分を出していけるといいなと思っています。ただ、まだもう少し楢葉で仕事をさせてもらいたいので、風として次どこに行くか、ということは考えていません。

西﨑芽衣さん：私も自分ではどんな風か、ということはわからないですね。ただ、その後来ている学生さんたちの動きを見ていると、何かのきっかけは作れていると思っています。先ほど亮太さんから「結婚くらいしか」という話が出ましたが、風か土か問われたら、今こちらで結婚したので、どちらかと言うと土かもしれない。実際、結婚したことでこの地域が地元になって、新たに親類となった方々の中には芽衣という私の名前を知らない人も出てきています。良い悪いという意味ではなく、奥さん、嫁さん、と呼ぶ人も出てきたことを考えると、土になってきた実感があります。
結婚して変わったのは周りからの名前の呼ばれ方だけではありません。今、育休中で、平日の昼間に家にいることが増えたのですが、そうすると畑仕事など、まちの暮らしを見る時間が増えました。それで、やっと楢葉に暮らしている感覚が芽生えてきた気がしています。また、結婚して「腰を据えてここに骨を埋める気ですか」など、言わば土の人になるんですか、と問われることも増えたものの、まだ風になる選択肢は持っていたいと家族で話をしています。

こうして話題提供者の3名からの語りに続いて、西﨑さんのパートナーの松本昌弘さんから、次のようなコメントが添えられた。[3]風か土かという問いに対して、改めて学生と地域、現場と地元といった関係性を問い直す新たな選択肢が提示されたと捉えられる。

松本昌弘：3人がもたらした風は何だったのか、ということを考えていたのですが、そもそも自分もこの場所で生まれ育ったから土か、というとそうではないと思っています。土でも風でもなく、できれば波みたいな存在になりたいと思っているんです。波に満ち引きがあるように、地域にうねりを作れるような感じで、ここで生活していきたい、ということです。
先ほど「まだ風になる選択肢」と芽衣が言いましたが、生活や仕事の場所を選択するの上では、ここに一生住む、といったものではなく、誰とどこで何をしていくか、ということが重要じゃないかと思っています。
実際、この3人が楢葉に関わり始めたのはサービス・ラーニングがきっかけだったかもしれませんが、森亮太くんが言ったとおり、学生が学んでいる姿や地域に関わる活動を通じて地元の人間も学ばせていただいている、という感覚がありました。ですので、学生だから、地元だから、風だから、土だから、ではなく、大事なのはそのメンバーで何をやっていきたいか、どういった活動をしてここにいた証をつくっていけるか、ということが重要だと思ってきました。
東日本大震災の原発事故により楢葉は地震発生の翌日から政府の避難指示により4年半にわたって誰も住むことができませんでした。森雄一朗くんから昔の一コマとして5年前のバーベキュー、その後の色紙、そしてそれを今も飾ってくれていること、それらが紹介されましたが、そうして関わっていった人がどんな風だったかということよりも、田舎のまちに若い人が来てくれて住んでいる人たちの人生の一コマになれたということの方が、町外からの受入を担当した者としてではなく、一緒に活動してきた仲間として重要だと思っています。

4. 共通体験が差異の顕在化をもたらす

今回、「風」と「土」との対比のもとで、サービス・ラーニングの受講から一定年数が経過した後に自らの経験を互いに語り合う場面を設けたことで明らかになったことは、風となって現地に赴いた人々は風を吹かせて土質を「変える」ことを意識しておらず、土の側で受け止めた人々は吹きついてきた風に必死に抗うのでも無抵抗に受け入れるのでもなかった、ということである。これは、積極的に問題解決を目的しないサービス・ラーニングという参加型学習の形態が奏功した点として位置づけられるのではなかろうか。むしろ、年齢・性別・居住地はもとより、それぞれが置かれた境遇の違いを尊重しながら出会い、混ざり合うことが重要であることが確認できる。少なくとも出会いがすれ違

いに終わらなかった3人の受講生は、頻繁に互いに生活圏・文化圏を越境し、結果として共に暮らす、働く、支え合う仲間どうしの信頼関係を築き上げてきてた。

青山学院大学の香川秀太先生は、看護の現場などの実践的研究をもとに、越境によって新たな知が創造されることを学習心理学の観点から接近している。例えば「6段階からなる越境過程モデル」（香川・青山, 2015, pp.59-60）では、まず互いの領域へと行き交うと「自文化の前提やそれまでの文化的振る舞いが揺さぶられる」が、そうした動揺や抵抗を経るからこそ、異文化を受け入れた上で新たなアイデアが生まれることを示している。そして、その段階を経ることにより、新たな知を自らのコミュニティや状況への浸透がもたらされると共に、その後も多様な人々との対話が拡がり、新たな越境への構えも整うと説いている。こうした構図のもと、「異なるコミュニティの人びとが出会い、交流し、互いの重なりや共有部分を創出する一方で、文化的、歴史的に生じた互いの差異を単純に解消すべき悪者とするのではなく、むしろ変化の重要な原動力として生かす実践」（香川・青山，2015，p.3）としての「越境的対話」が実現すると述べている。

今回、当時の担当教員である筆者と受講生、そして現場の受入担当となった方が、Zoomにより公開企画として対話したこともまた、越境的対話の機会として位置づけられるだろう。事実、今回の対話を通じて、風と土という二項に対して波という新たな観点を得ることができた。東北地方沿岸部で暮らす人々にとって、波という存在は、あの日あの時の津波を想起させるものもあっただろう。しかし波という比喩が過去の否定的経験ではなく、自らの仕事と暮らしを積極的に構想・設計する手がかりとされたことは、土の人という側面も意識しつつある話題提供者の3人にもまた、自らの立ち居振る舞いを考える手がかりになっただろう。

今回、当時の現場での実践がもたらした学びと成長へのインパクトについて、当事者の語りをもとに越境という観点から迫った。今回、参加者からの感想として「土の人とぶつかると風ほこりになってしまうという点で＜そよ風＞が大事」が寄せられたのだが、こうした言語表現は、教育実践の最中において得ることができると、活動と学習の双方を促進する要因となる。事実、そもそも直接的な体験を通じて学ぶサービス・ラーニングでは「豊かな言語表現が自己と他者に新たな世界を提示する」（山口，2020）という点で、体験の言語化が重視されている。そこで次回はいかに言語化を促すか、フィールドワークの充実のためのデスクワークにおける学びの場の設計概念に迫っていく。

（gucci@fc.ritsumei.ac.jp）

【引用文献】

香川秀太・青山征彦(編). 2015. 越境する対話と学び――異質な人・組織・コミュニティをつなぐ. 新曜社.
藤田正勝. 2003. 和辻哲郎「風土」論の可能性と問題性. 日本哲学史研究（京都大学大学院文学研究科日本哲学史研究室紀要）1, 1-15.
山口洋典・河井亨. 2016. サービス・ラーニングによる集団的な教育実践における学習評価と実践評価のあり方. 京都大学高等教育研究 22, 43-54.
山口洋典. 2020. 地域参加型学習において言語化を促進する意味とその方途. 立命館言語文化研究 31(3), 73-87.
和辻哲郎. 1962. 風土. 和辻哲郎全集〈第8巻〉風土,イタリア古寺巡礼（pp.1-256）. 岩波書店

【注】

1　シラバスで予め提示されていた到達目標に即して受講前と現在、そして今後の自らのあり方について記述するA3版の用紙で、山口・河井（2016）では、当該受講生の許可を得て、記入者の名前等に画像処理を付した上で紹介している。

2　和辻哲郎による風土論については、今回引用した全集第8刊の谷川徹三による解説はもとより、1986年に日本倫理学会の和辻賞を受賞している藤田（2003）の論考が参考になる。そこでは和辻哲郎が風土論を展開するきっかけがベルリン滞在中にハイデガーの『存在と時間』を手にしたことにあった点などに触れ、風土とは「人間が自分の外へと出、そこにおいて自己を見いだし、自己が何であるかを了解すること、あるいはそのことを可能にする場」（藤田, 2003, p.5）という解釈を提示している。

3　松本昌弘さんは本連載の第15回・第16回で触れた「そよ風届け隊」の現地での活動にあたり、槌葉町役場の復興推進課の担当として各種事業の調整役を担った。そのため、今回の話題提供者の3人がどのような風として地域に吹き抜けたかについてコメントできる立場にあることをここに記しておく。ただし、今回文字に起こした語りの内容からも明らかなように、分科会での発言は槌葉町役場の職員という立場としての見解ではなく、地元生まれ地元育ちの身として、町外から駆けつけた人々にどう向き合ったのかという観点からの率直な思いに基づくものとして捉えていただきたい。



防音工事のポイント

ＪＲ茨木駅近くの接骨院が、私の仕事場です。
執筆者@短信に書いたように、昨日まで電気工事士の勉強に追われていました。
対人援助学マガジンの締め切りまで一日しかないので（ごめんなさい）、すぐに書けそうな防音にまつわる話を、心理学的な見方も加えて書いてみます。

５月に接骨院で防音工事をしました。
とはいっても、連休を利用して、自分でできる狭い範囲の工事です。

当院の本院の２階を、昨年からある工務店さんにお貸ししています。近くのマンション建設の現場事務所にされているので、複数の人の出入りがあります。

電気治療のベッドが階段の下にあるため、階段の昇り降りは静かにしていただくという条件でお貸ししました。
でも、その条件を守ってくれない人がいます。

一度注意したのですが、「わざとじゃないの」と思えるくらいにドスドスと昇り降りされるのです。

こういう猜疑心がうまれることからも、単純に音だけの問題ではなく、騒音には、さまざまな心理的要因が影響しています。
患者さんにも「うるさくてすみません」と謝らなければならないので、昇り降りの音は私にとって、大きなストレスになっていました。

騒音トラブルから殺人事件がおこるのもわかります。
あと半年くらいの契約なのですが、放っておくとその間、患者さんにもご迷惑をかけるので、ゴールデンウイークに思い切って防音工事に取り組むことにしました。

初めはベッドを移動することや、防音カーテンをつるすこと、防音パネルを貼ることも考えたのですが、ネットで情報収集して、防音シートを階段まわりに貼って、その上から石膏ボードを貼る方法を考えました。

工事は次のような手順です。



1　必要な材料を算出し、ホームセンターに買いに行く。

2　既存のクロスと巾木をはがし、時計やカーテンレール、コンセントカバーなどをはずす。（左）



3　防音シートを切って、裏にボンドを塗り、タッカーでとめていく。（右）

４　石膏ボードを切って、裏にボンドを塗り、ビスで固定する。（右）



５　石膏ボードの隙間や、ビスの穴をシーラーまたはパテで埋めて平らにする。



６　クロス（のり付きタイプ）を切って、貼る。
巾木を貼って、タッカーでとめる。
時計やカーテンレール、コンセントカバーを元にもどす。（左）

ざっと、こんな感じで、８畳程度の部屋の４分の１くらいの壁面に施工をしました。完成まで、およそ３日かかりました。

材料費は２万円ほどでした。
防音工事はとても高いと聞いていましたが、この程度の工事を自分ですれば、驚くほど安くすみます。
しかも、想像以上に防音効果があり、あのドスドスという足音があまり気にならなくなりました。
測定していないのでわかりませんが、音の大きさは半分くらいになったと思います。

人が物音を、うるさいとか不快だとか感じるのは、５０デシベルくらいからと言われています。

それ以上になると、抹消血管の収縮、心拍出量の減少、瞳孔の散大、血圧の増大、胃の収縮、皮膚電気抵抗の減少と皮膚電位の減少など、さまざまな生理的な変化もあらわれるそうです。

完全に音を防ぐのは難しいです。遮音するとなると、それこそ何百万円もかけて工事をしなければなりません。

音はするけれど、不快ではないという程度まで音を下げることを、防音工事の目標にするのが現実的ではないかと思います。

私の場合、音が半分くらいの大きさになってから、心理的なストレスをあまり感じなくなりました。

心理的な音の感じ方は、聞こえる音の大きさに比例するのではなく、ある一定の限度を超えると急激に上昇する、あるいは不快スイッチが入るというモデルになっているのではないかと思われます。

さて防音効果を上げるポイントは、なんでしょうか。
それは重い材料を選ぶということにあるようです。
重い材料であるほど、空気の振動を伝えにくくなるのです。

防音材を壁の中に入れるとか、壁の隅をコーキングするとか、いろいろな方法や施工例がネット上にたくさん紹介されていますが、効果がなかったという感想もあげられています。
防音工事をしようとお考えの方は、無駄な工事をしないようにご注意ください。

防音シートは、想像していたよりもずっと重たいゴムでできていました。

石膏ボードは、薄いものもありましたが、あえて分厚くて重いボードを選びました。
さらに防音効果を高めたい方は、防音シートを 2 枚重ねられるといいでしょう。

入居中の工務店さんが退去された後、再び、2 階を賃貸に出すことがあれば、天井裏にも防音シートを貼ろうと思いました。平面なので、切って、置くだけでいいのではないでしょうか。

アイデアだけですが、防音工事士なんていう資格をつくると需要があるかもしれませんね。

この記事が、騒音トラブルでお困りの方の参考になれば幸いです。
ではまた。

現代社会を『関係性』という観点から考える

⑯　「見える」ことと「見えない」こと

更生保護官署職員（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

三浦　恵子

連載 14 で『「開く」ことと「閉じる」こと』について書かせていただきました。

その後，連載 15 では『つながりが支えるこころ』と題して，我意を通した結果「閉じる」生活となってしまった結果として社会的孤立に至り，心身状態の悪化を招いた高齢者（単身生活者）の事例を紹介しました。

今回は，この連載の流れの中で『「見える」ことと「見えない」こと』という切り口から，現代社会を関係性という観点から考えていきたいと思います。

１「飽食の時代に食事に事欠くような子どもがいるのか」

私は御縁をいただいて，あるエリアで子どもの居場所の運営を支える取組の端につながらせていただいています。「子ども食堂」だけではなく，勉強や遊びなどを行う居場所でもあり，地域に開かれた多世代交流の場を展開している団体や，高齢者などにも開かれたいわゆる「地域活動」の取組をしている団体もあります。

１つの団体だけではなく，エリア全体の様々な団体がネットワークを形成し，フードバンクなどともつながりながら，コロナ禍でも活動を続けています。様々な団体が多様な活動を展開していくにあたって，このネットワークの役割は大きく，ニーズと活動，間接的な支援者と実際に現場で活動する方々をつなぐ役割や，行政との連携などの役割を果たしています。

ある時，ネットワークの事務局長を務めておられる方のお話を実際に聞くことがありました。「小学校区に１つ，子ども食堂や子どもの居場所を作ろう」という機運が盛り上がってきた時，地域社会の方から

「この飽食の時代に食事に事欠くような子どもがいるのか」

「そのような子どもは私の地域で見ることはない」

という疑問の声が出たと聞きました。

私はこの言葉を聞いて，これがまさに現在の「貧困」や「生活困窮」の特徴だと感じました。

ごく一般の方が，目の前の人が困窮しているかどうかを判断しているのは，一目でわかるような出で立ち，つまり服装などの「目に見える情報」であると私は考えます。そして，その「目に見える情報」は，個々の「貧困」のイメージによって，「困窮しているかどうか」という判断基準ともなり得ます。

しかし，「貧困」「生活困窮」というイメージ

は，人それぞれ，もう少し乱暴な言い方をすれば，世代によって異なってくると私は考えます。例えば，戦中戦後の混乱期を経験されている方にとっては，「戦災孤児」のようないでたちがまさに「貧困」を具現化したイメージかもしれません。また，「昔はみんな貧しかった」「我々の子どもの頃はもっと苦労した」「それでも頑張ってきた」という自らの経験で，現代社会における貧困からくる生きづらさについて，「まだ頑張りが足りない」と捉える向きもあるのではないでしょうか。

ただ，現代の貧困の大きな特徴の 1 つとして「見えづらさ」があり，しかもこの「見えづらさ」には次のような 3 つの特徴があると私は考えています。

1 つ目は，まさに「目に見える情報」に反映されにくいということです。「こぎれいな身なりをしているから」「スマホを持っているから」という理由で「貧困ではない」と思われてしまう場合もあるということは，生活困窮者支援の現場では良く耳にすることです。しかし実際には，地域社会の中で少しでも「浮かない」よう，服装などはリサイクルショップなどで整えるなどして必死で工面している方は少なくないのが実情です。スマホも，日払いのアルバイトなどを見つけるツールとして必須のものとなっており，既に「贅沢品」「遊び道具」ではありません。

2 つ目は，地縁・血縁の希薄化等により，支援の窓口にたどり着くまでの情報を入手することができず，本当に困窮している人が困っている方が，どうやって支援の窓口にアクセスしてよいかわからず，そのまま地域で気づかれないまま埋もれていってしまうという現実があります。

3 つ目は，困った時に適切に援助を求めるという，いわば「援助希求能力」に関することです。「他人様に迷惑をかけない」「自己責任」という価値観が強すぎると，本当に支援が必要な状況であっても，周囲に「助けて」と言えない状況に追い込まれてしまい，事態が一層悪化してしまいます。また，何とか「助けて」と言えても，支援機関で自身の状況を適切に説明できず支援を受けられない，あるいは，適切な相手に相談できずさらにトラブルに巻き込まれてしまうということもあり得ると考えます。

現代の「貧困」「生きづらさ」を考える時，このような「見えづらさ」があるという特徴を持っておくことは非常に重要だと私は考えています。そして，その「見えづらさ」は，困窮している当事者だけではなく，地域社会の側にも原因があるのではないかと考えることが，息苦しい「自己責任論」から脱却する 1 つの方法ではないかと私は考えています。もう少し踏み込んでいえば「見えない貧困」は，「見ようとしない貧困」であるとも私は考えます。

ちなみに子ども食堂は，単に「食事に事欠く」状況を支えるだけの場所ではなく，子どもたちが安心できる居場所に身を置くことで，周囲に対して適切に支援を求めていくための力を蓄えていくための場所でもあると私は考えています。

そして，支援を必要としている子どもをはじめとして，困っている人々の姿が「見える」か「見えない」かは，「当事者が周囲の目につきやすい場所にいるかどうか」ではなく，「そうしたことが見える目を持っているか」，もう少し踏み込んでいえば，「社会情勢や地域の課題を意識して生活しているか」どうかが強く影響していると考えます。

各地で展開されている「子ども食堂」ですが，本当に必要な子どもたちやその保護者に情報が伝わっているのか，という点についてはまだ課題があると考えています。冒頭記載したネットワークでは，「支援が必要な子どもの情

報は学校や役所の窓口が一番把握している」という共通理解のもとに，学校や子どもや家庭に関する事業を所管する公的機関の窓口が，その地域の子ども食堂や居場所（中には地域食堂として高齢者の孤立を防ぐ活動をしていたり，多世代交流の活動をしていることもあります）の情報を把握し，ニーズのある子どもや家庭をそこにつなぐという取組をしています。もちろん個人情報の取扱いについては万全の注意が払われています。また，そうした場に出てくることができない事情を抱えている困窮家庭があることも念頭に置いて，当該家庭の意向を確認した上で食品や生活物資を届けながら安否を確認する活動も実施しています。当事者は多様なニーズがあることを念頭に置いたこうした活動を続けてこられたからこそ，コロナ禍でいわゆる「三密」を避けなければならない状況下においても，感染拡大防止に万全な配慮をしつつ，パントリーなどの活動を展開することができたのだと考えます。

2 「見えない」のか「敢えて見ないようにしている」のか

自分の生きる地域社会は「安全・安心」であり，周囲の人間関係は信頼に足るものであって欲しいと願うことはごく自然なことです。しかし，そうありたいと願うばかりに，地域社会に生きる一市民として，目の前にある課題を「敢えて見ないようにしている」ことはいかがなものでしょうか。これは有名な話なので御承知の方も少なくないと思いますが，首都圏のある地域では，児童相談所の設置について地元から強固な反対運動が発生しました。ブランドイメージのある地域にふさわしくないということもその理由の1つだそうですが，この反対運動の根底にあるものは，児童を取り巻く昨今の厳しい情勢を「敢えて見ないようにしている」ことと，「自分（の家庭）はそういった厳しい状況に置かれることはない」という，地域や社会の課題と自分を完全に切り離してしまう姿勢ではないでしょうか。

個人の主義主張に踏み込むなと言われてしまうかもしれませんが，そうした考え方をする方が増えていけば，地域社会全体の包摂力とでもいう力が痩せ細っていくように思われてなりません。人間は自分を守るための強固な鱗も牙もない，生物としては脆弱なものです。しかし，群れ（ムラ，今でいうところの地域社会）を形成し，互いに助け合って今日まで生き延びてきたという一面があるのではないでしょうか。仮に今は日常生活に支障がない状態であっても，思わぬ疾病や負傷によって生活に支障を伴うような心身の状態になる可能性は誰にでもありますし，それにより生活基盤を失ってしまうことも想定されます。そうした時に，「それは自己責任だから」と切り捨ててしまう厳しい社会を選ぶのか，生きづらさを抱えながらも居場所を見い出しうる包摂的な社会を選ぶのか，ということを改めて1人1人が考えていく必要があるのではないでしょうか。

3「一本の道」から「見える」もの

冒頭では，子ども食堂・子どもの居場所の運営を例に挙げて，支援を必要としている子どもを始め，困っている人々の姿が「見える」か「見えない」かは，「当事者が周囲の目につきやすい場所にいるかどうか」ではなく，「そうしたことが見える目を持っているか」，もう少し踏み込んでいえば，「社会情勢や地域の課題を意識して生活しているか」どうかが強く影響していると考えます。

と述べました。この点について，私の経験を踏まえて，もう少し掘り下げたいと思います。

国家公務員の中には転居を伴う転勤が重なる職種もあります。私自身は実母を実家で介

護していた時は広域の異動については配慮していただいていました。よって，実家がある地域，つまり自分が生まれ育った地域において，社会福祉協議会の福祉委員や苦情解決第三者委員などの活動をしていました。同級生やその親御さんのいる地域でもあり，多くの方の見守りと声掛けがあってこそ在宅介護が成り立っているという感謝の気持ちがありましたので，ささやかながら自分のできることで地域に恩返しをしたいと思ったのがきっかけです。そこでは，業務では得られない貴重な体験をさせていただき，小地域福祉活動の重要性を体感しました。

その後実母が施設入所となり，本格的な広域異動が始まりました。単身赴任も多く経験しています。遠距離介護をしながらの単身赴任でしたので，職場と官舎，ターミナル期に入った実母の療養型病床（当時），義父母の介護のための帰省先（配偶者の官舎）との 4 つの地点を往復するような生活は日々綱渡りのようで，どうしても自分の官舎周辺のことには目が向きづらくなりました。

しかし，ある時かなり大きな規模の自治会の理事を引き受けることになりました。

義実家の介護も重なっていた時期でしたし，財務関係の担当であり苦労も多かったのですが，自治会の理事を引き受けたことで，自分の官舎周辺の地域社会にも自然と目配りをするようになったことが大きな変化でした。自分の実家，配偶者の官舎，義実家の周辺の地域社会に対しては当然のように出来ていたことも，遠距離介護をしている私の単身赴任の官舎はどうしても「仮住まい」という感覚がぬぐえませんでした。いうなればそこは，職場に通勤するための拠点であり，業務や様々な執筆作業の準備をするための書斎であり，義実家や食事療法が必要な配偶者の料理をつくるための厨房に過ぎませんでした。私自身は子どもが好きだということもあり，お隣の世帯のお子さんには声掛けなどをし交流もありましたが，生活時間帯などのずれもあり，それも頻繁ではありませんでした。

ただ，自治会の理事を引き受け，地域課題を共有しそれを解決することを重ねるなかで，たとえば目の前の一本の道も「自分の通勤経路」から「子どもたちの通学路」だと考えるようになりました。

そうすると，「目に見える」情報の量も質も大きく異なってきました。私は疾病の影響で戸外では杖歩行をしていますし，長らく介護をしていた関係から，道路の安全性などには平素から目を配る方です。しかし自治会理事を経験するようになり，「ここ，植木が茂り過ぎていて子どもたちがひっかかると危ないな」「あ，電灯が切れているので，早く交換しない不用心だな」「害虫駆除の時期には，戸外で遊ぶ子どもや親御さんには声かけをしないといけないな」といった，より多くのことに目が向くようになりました。

つまり目の前の「一本の道」は同じであっても，私自身の地域社会の課題に対する向き合い方の変化によって，より多くのものが「見える」ようになったのです。

今回のテーマは，『「見える」ことと「見えない」こと』です。両者の差は，視覚によってどのような情報を捉えるかというだけではなく，どのような姿勢で地域社会の課題に向き合うのかということが大きく影響すると考えます。また，視覚として情報を捉えていても，敢えて「見えない」状態になることもあります。

その理由としては第 1 に「無関心」が挙げられるでしょう。第 2 には，自分や世代に特有の価値観や思い込みも多分に影響してくると考えます。前述したように，「飽食の時代に食事に事欠くような子どもはいない」と考えてしまうと，それでなくても可視化されにく

い子どもの貧困は見逃されてしまいます。第 3 には，関心を払いたけれどもそれどころではないという「忙しなさ（せわしなさ）」もあると考えます。

この時代にあって，より包摂的な社会を作っていくためには，まず地域住民 1 人 1 人にその自覚と責任が求められること，地域課題に向き合っていく姿勢を涵養していくことが必要だと考えます。

そのためには，できるだけ多くの人と「つながり」，その関係性の中で「日々消費されていくニュース」とは異なる，地に足の着いた経験を共有しながら，地域課題との向き合い方を折に触れて自己点検すること，家庭や職場以外の「第 3 の場」（つながることのできる場）を持つことが必要だと私は考えています。

マイクロ・アグレッションと私たち

～ 最 終 章 ～ 13

朴 希沙（Kisa Paku）

お久しぶりです。出産と育児にともない 2 回に渡って『対人援助学マガジン』への執筆をお休みしていましたが、今号から無事復帰できることとなりました。そして執筆をお休みしている間（2020 年 12 月）に、ここ数年間翻訳に取り組んでいた書籍『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション―人種、ジェンダー、性的指向：マイノリティに向けられる無意識の差別』（デラルド・ウィン・スー著、マイクロアグレッション研究会訳）を無事明石書店から出版することが出来ました。

この連載を始めた目的は、連載開始当時はあまり知られていなかったマイクロアグレッションについて、今回翻訳をした『Microaggressions in Everyday Life：Race, Gender, and Sexual Orientation』をもとに紹介していくことでした。これまで 12 回に渡り、マイクロアグレッションの概要やエピソードの紹介、乗り越え方・取り扱い方についての考察、Q&A 等を、間に緊急コロナ企画もはさみながら書いてきました。誰が読んでくれているのか分からぬまま、とにかく書き進めてきた連載でしたが、次第に「連載を読んでいます」「連載をもとにマイクロアグレッションの勉強会をしています」「マイクロアグレッションについて知りたくていくつか連載を読みました」というお声をいただくようになりました。私自身、書きながら改めてマイクロアグレッションについて整理したり、考えたりする大切な機

会をもらってきました。そういった中で無事翻訳書を出版でき、ほっと一安心、これからがむしろ始まりですが、ひとつの区切りがついたことを感じています。

そこで、当初の目的であったマイクロアグレッションの紹介は、今後は翻訳書に譲ることとし、今回は翻訳書を出版するまでの経緯や今後のマイクロアグレッション概念活用の可能性について述べ、連載を閉じたいと思います。新たに別のテーマで連載を始める予定ですので（詳しくは執筆者短信を御覧ください）、そちらもまた注目していただけたら嬉しいです。

● 翻訳を始めるまで

私が初めてマイクロアグレッションという概念を知ったのは、修士論文を執筆している最中でした。もともと、在日コリアンを始めとするマイノリティに対する心理支援に関心があり、人種・民族的マイノリティに対するメンタルサポートについて論文を調べていたのですが、日本語の論文が少なく、米国の論文を読んでいる際に「Microaggressions」という言葉に出会いました。

当時、私は在日コリアンメンバーと日本人メンバーとで行っていたサポートグループ（「それが一人のためだとしても（以下、してもの会）」）において、在日コリアンメンバーが抱える不安やストレス、怒りの背景に「差別」とまでは言い難いものの、日常にあふれるプレッシャーがあることを感じていました。それは、朝鮮半島に対して敵対的な報道や話題であったり、自分の出自や名前について説明することの困難さであったり、「日本人しかいない」という前提で進む会話等、まさに日常の親しい人間関係や職場、学校といったリアルな「現場」で日々直面しなければいけないある種の緊張感や疎外感のようなものでした。そのような感覚は、ひとつひとつは大きな問題にはなりませんが、積み重なることでその場にいる人々や環境への不信感につながったり、時には怒りのような形で他者や自分に向いたりするようなものでした。

上記のような、まさに日常の些細なやりとりの中で起こる、だからこそより言語化しづらい疎外感やストレスについて、心理社会的側面から捉え研究につなげている概念が「マイクロアグレッション」だったのです。私はもともと臨床心理士を志し、あくまで個人の支援と個人の心理に深い興味を抱いてきました。しかし同時に、個々人の心理が社会や歴史とどうリンクしているのか、丁寧に考える作業や研究を行いたいと思ってきました。そのような私の関心に、マイクロアグレッションはまさに“ヒット”したのだと思います。

当時、日本にはマイクロアグレッションに関する詳しい文献はありませんでした。私はもともと言語が好きだったので、ぜひこの本を翻訳し、日本

に紹介したいと思うようになりました。この気持は修士論文を書き終えた頃にはほぼかたまり、「してもの会（後に、在日コリアンカウンセリング＆コミュニティセンターにつながっていきます）」のメンバーや当時大学院で指導してくださっていた先生に相談をしながら、翻訳書の出版という初めての試みに挑戦することになりました。

● マイクロアグレッション研究会の紆余曲折

このように始まったマイクロアグレッションの翻訳会（マイクロアグレッション研究会）には、次第に関心のある方が集まってくるようになりました。そして、それぞれが関心のある章を訳しながら訳語について討論を重ねていきました。特に「マイクロアグレッション」をなんと訳すかについてはぴったりの言葉が見つからず、何度も何度も議論しました。例えばマイクロを「小さな」とか「微小な」と訳してしまうと、決して小さくはないその影響を伝えることが出来ません。かといって「曖昧な」とか「無意識の」と言うと取りこぼしてしまう内容があります…何度も話し合いを重ねた結果、マイクロには日常の、とかマクロでは捉えきれない、等様々な意味が複合的に込められていることから、（そしてぴったりの訳語を見つけることが出来なかったということからも…）そのまま「マイクロアグレッション」と訳すことになりました。

マイクロアグレッションについて興味があり集まった人々からなる研究会ですが、マイクロアグレッションは全ての場所で起こりえますし、誰もが無意識のうちにやってしまうことがその特徴です。そのため時には研究会の中ですら生じてしまうマイクロアグレッションについて、緊張をはらんだ話し合いがオンタイムで行われたり、対立的な状況になったりすることもありました。そんな紆余曲折を経ながら、最終的には監訳者を置かず、あくまでもグループで訳したことが伝わるように「マイクロアグレッション研究会」を翻訳者に置くことが決まりました。こういった意思決定や訳語の調整といったひとつひとつの紆余曲折にも根気強く付き合ってくださったメンバーの皆様、そして出版社の方には、心から感謝しています。

● 今後に向けて

このようにして日本で初めてマイクロアグレッションについて体系的に紹介する書物『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション』をなんとか無事翻訳、出版することができました。もちろん本の出版はゴールではなくスタートです。これから、マイクロアグレッションがどのように日本社会に浸透し、活用されていくかが大切です。

詳しくは書籍の「あとがき」にまとめられていますが、マイクロアグレッションはマジョリティ、マイノリティ双方にとって活用できる概念だと思います。もちろんほとんどの人はマジョリティ性とマイノリティ性の両方を併せ持っていますが、社会的属性やそのことで被る構造的な差別、不平等は存在し、そのため個々人は社会で異なる立場にあるという視点は忘れてはならないと思います。

翻訳書では、マイクロアグレッションを受けることによってマイノリティに生じる様々な影響が述べられている一方で、マイクロアグレッションに気づかず、マイクロアグレッションをし続けてしまうことによってマジョリティが失う豊かな可能性があることについても言及されています（第6章「マイクロアグレッションの加害者と抑圧―野獣の本性」）。マイクロアグレッションという概念がそれぞれのコミュニティに浸透し、議論が深まることによって、自分とは異なる立場の他者が日常生活においてすぐ隣に存在し、普段の何気ないやりとりの中でストレスやプレッシャーにさらされていることに改めて気づいたり、皆にとってより生きやすいコミュニティを作っていくための指針を考えたりすることにつながればと願っています。

約3年半に渡って、翻訳と同時に続けてきた連載ですが、マイクロアグレッションに関する内容は今号までとします（次号より新たな連載を始める予定です）。ここまで読んでくださった皆様、そしてこの機会をくださった対人援助学マガジン編集部の皆様に感謝しています。またどこかでお会いした時には、声をかけていただけたら嬉しいです。「対人援助学マガジン、よんでますよ～！」と^^ありがとうございました。

保育と社会福祉を漫画で学ぶ

迫　共（浜松学院大学）

⑬　あかちゃんのドレイ。

大久保ヒロミさんの『あかちゃんのドレイ。』(講談社 ①～⑥ 2006-2010)を紹介します。

衝撃的なタイトルは、作者ご自身の子育て体験をもとにつけられたようです。

「ドレイ兼漫画家」の母ピロミ、天然キャラで「戦力外」の父ピロキのもとに生まれた「2LDK の女王様」ヒヨ子。ピロミの語るセリフの「母」には、ときどき「ドレイ」とルビがついています。フィクションであることを忘れてしまうほどの説得力で、子育て家庭の楽しさと大変さを感じさせてくれる作品です。

24 時間のたうちまわるほどの強烈なつわりに襲われていたピロミのもとに、予定日を超えて生誕した身長 50cm、体重 3700g の女王様、ヒヨ子。生後 1 か月が経過すると身長は 55cm、体重は 4500g になっています。母乳だけでは体重不足と医師に言われたピロミ。相談した先輩ママたちは母乳が出すぎて困ったタイプばかりで、粉ミルクを足すことに。ピロミは粉ミルクでご満悦なヒヨ子を見て、初めて経験する「ものすごく悲しい気持ち」になってしまいます。「母乳には甘いもの、パン、洋食がダメ…」というピロミに、夫ピロキは満面の笑顔で返します。「じゃあ、外国人はどうしてるんだろうねぇ～？」。被害妄想傾向で自分を追いつめてしまうピロミは、気の抜けた夫のひと言に救われたのです。

育児中の大人は「正解」を求めたくなります。育児に失敗したくない、もし我が子に取り返しがつかないことが起こったらどうしよう…という気持ちです。周りの人の育児経験や育児書、ネットの情報などによって親たちは知らず知らず、追いつめられています。ピロミはつぶやきます。「ネットや本にどれだけ情報載っててもウチの子の情報なんてないんだもん…」。

生後 7 か月のヒヨ子は身長 67cm、体重 8000g。離乳食の初期から中期頃の様子が描かれています。初期、30 分煮込んだおかゆでも口から出してしまうヒヨ子。「味をつければ」と出したちりめんじゃこと野菜のトロトロ煮。ヒヨ子はできたてなら食べるものの、冷凍して解凍すると食べてくれません。それなのにお湯は一気飲みします。

母の工夫は理不尽にも退けられます。まるで嫁の食事が気に入らないといびりたおす「鬼姑」かのように、ヒヨ子から振り回されていると捉えてしまうピロミ。しかしヒヨ子が、なにかの空き袋をさわっているときにスプーンを口元にもっていくと、食べさせることに成功します。スプーンなどを持たせるとそちらに気を取られておもしろいほど食べることが分かります。

喜んだのもつかの間、テーブルつき椅子に座るヒヨ子は、スプーンを落としては取ってほしいと手振りをするようになります。「手元がおぼつかないのか」と思っていたピロミは、ヒヨ子がわざと落とす場面を見てしまいます。それでも拾おうとするピロミの髪をヒヨ子が掴みます。ふたたび「鬼姑」が脳裏をよぎったピロミ。我慢の限界から、別のスイッチが入ったようにヒヨ子の前で自ら離乳食を食べ、ついでにカニ缶を食べ、チャーハンを食べます。「大人だけがこの素敵な食事にありつけるのよ！」

拾っても拾ってもスプーンを落とし続けるヒヨ子の行動は、一種の探索活動だと思われます。外界のものごとに興味関心をもち、指さしたり確認したりして好奇心、探求心を育てていくものです。子どもにとっては大きな意味があるのですが、同じことの繰り返しを延々と求められたり、水やティッシュペーパーを出しっぱなしにされたりなど、大人が困る探索活動もたくさんあります。

大人は子どもの要求を否定せず、すべて受け入れなければならないのでしょうか。そんなことはありません。イギリスの精神分析家・小児科医のウィニコットによると、赤ちゃんの育ちにとっては「完璧な母親」より「ほどよい母親」である方が望ましいのです。赤ちゃんの要求に完全に答えられず、ときに間違い、すぐに対応できない生身の人間が行う育児によって、赤ちゃんは自分以外の人間がいる外の世界に気づいていくからです。

生後 10 か月のヒヨ子は身長 72cm、体重 8300g。つたい歩きを経てひとりで立つことができています。生後半年頃を境に母親から得た抗体が力を失っていくため、はじめての発熱が起こります。風邪と診断されたヒヨ子。数十分おきに水分を与えることになり、夜はうなされます。3 日後には熱が下がっていますが、安心したピロミにヒヨ子は泣き叫んで抱っこを求めます。「ちょっとでも降ろそうとしようものなら、大絶叫し、病人じゃないだろ…と思う力でよじ登ってきます」とナレーションがついていますが、看病生活に味を占めた赤ちゃんは、少し回復しても甘やかされることを求め続けるため、風邪の看病でも 1 週間つきっきりになってしまうのです。

退屈したヒヨ子は自分がくわえていたおしゃぶりをピロミの口に突っ込み、そこからピロミは風邪をうつされてしまいます。腹に据えかねて友人に愚痴の電話をかけるピロミ。すると「生まれてはじめての発熱だったわけでしょ？　しばらくは不安で甘えたくなるよー」「ピロミいちばん頼りにされてるんだねー」という返答が。我に返ったピロミはヒヨ子を抱きかかえます。「母（ドレイ）がそばにいるだけでいいんだもんね　しっかりいてあげなきゃ…」。

生後 11 か月のヒヨ子は身長 73cm、体重 8400g。女王として、ドレイの様子を語ります。「このドレイ、じぇんじぇんつかえなくてこまっているのでちゅ…」「女王のほちいものにきがついて “とってくれるのかちら”とおもっても　わざわざ高いところにあげたりするんでちゅよ…なんの冗談かちら？」

「そのうえドレイはたいまんで　朝じぇんじぇんおきないのでちゅ！」（朝 4 時半にたたき起こされます）

「今じゃ女王が洗たくちて　お料理もちて…」（洗濯物を散らかし、フライパンに手を伸ばします）

とりあえず整とんでも…と、ピロミのカバンの中にあったネックレスを触るヒヨ子。「コラー　返しなさい」というピロミに不機嫌なヒヨ子は「ひとのモノほちがるなんて　なんて強欲なドレイ！」　ピロキが他のおもちゃとの交換を求めたのに応じてネックレスを渡しますが、ヒヨ子は隙をついてガスレンジのグリルにネックレスを入れてしまいます。

ピロミがネックレスを見つけ、ピロキを責めます。「ちゃんと手の届かないとこ　置いてなかったんでしょ!」　ヒヨ子は悠然と「アラアラなに？　またケンカ？　まあ女王は広い心で見守ってあげるけど…」とすまし顔ですが、ピロミはヒヨ子にも怒ります。「ダメでしょ　あんなとこにモノ入れちゃ!」　ヒヨ子は驚いて「八ツ当たり!?　ケンカを許してやったというのに！」「もういいかげんにちなさい！　そんな態度ならばわたくちだってひとこと言わせてもらいまちゅよ！」　両親を前に、すわった眼でずんずんとやってくるヒヨ子。そのとき、こども番組の音楽が流れてきて、ヒヨ子はつられて踊り出してしまいます。その様子にこらえられず、ピロミとピロキは大笑い。ヒヨ子は「ほらやっぱりね…あたくちがいないとどうちようもないんだから…　まあこれからも女王がかわいがってあげまちゅよ」（抱っこされています）

このエピソードは、作者がヒヨ子を女王に見立ててセリフをつけているのですが、これは言葉によるコミュニケーションがうまくできない育児のストレスを和らげる、とても上手なやり方だと思われます。0 歳児や 1 歳児が相手だと、子どもの欲求や思いを十分に把握することが難しいからです。

相手を女王様だと考えられたなら、わがままや無理難題を言われることも受け入れざる

を得ません。『あかちゃんのドレイ。』というタイトルは、母親として育児の大変さを受け入れざるを得ない状況に適応するために、ある意味では戦略的に選ばれた状況把握の枠組みを表していたのかもしれません。

保育者の職務の中には、保護者に対する子育て支援が含まれます。子育て経験がない保育者にも、育児や家庭生活の悩みについて、保護者からの相談が寄せられる場合があります。

本作品をはじめとした育児漫画をいくつか読んでおくと、子育ての楽しさと大変さが具体的に想像できるようになるだろうと考えます。



大久保ヒロミ（2006）『あかちゃんのドレイ。①』講談社

※本エッセイで紹介した作品中のセリフなどは、読みやすくするために、意図を損なわない程度に改変している場合があります。

『余地』 ～相談業務を楽しむ方法 15～
＜読書会がもたらしたもの＞

杉江　太朗

～「読書会の案内」の案内～

年度が変わる頃、対人援助学マガジンの編集担当の方より連絡があり、新たな取り組みとして読書会を開催すること、その際に、私の連載を取り扱いたいという連絡が来た。私は、最初に見たときに、一部しか読んでいないこともあって、意味がわからなかった。さらにその方が大学で生徒らに授業をしていることを知っていたので、その中で利用する意味なのかと勝手に判断をしていた。もしそうだとしたら、ウェブ上に置かれたものであり、いつでも、誰でも読める状態であることが対人援助学マガジンであるので、わざわざ了解を得る必要もないのに・・・なんて考える始末であった。

ところが、よくよく読んでみると、なんとキチンと広報をした上で、読書会を開催し、その中で私の連載を取り上げたいということであり、なぜ私の連載なのか、誰が参加するのか、そもそも読者がいたのかなど疑問に思いつつ、特に断る理由もないので快諾した。

そして、連絡の中には、連載を取り上げることの確認以外にも、広報する際の私の紹介文の確認、さらに参加の依頼も含まれていた。

送られてきたプロフィール（執筆者の紹介）には以下のように書かれていた。

「児童相談所に勤務しながら、立命館大学大学院を修了し、現在も児童相談所で勤務を続けている。子どもの福祉を守るという使命、メディアからの圧力、様々な責任の擦り付けに耐えつつ、『余地』をテーマに連載を続けている」

本当に私はこんな人間なのだろうか。その紹介文を読んで、とても熱い、豪快な人間のように思えた。しかし、どこかが間違っているのかと言えば、そうではなさそうである。訂正すべきところもとくに思いつかなかった。そのまま SNS に流れたときの心配も頭に過りつつ、かといって訂正するまでもないと思いそのまま快諾をした。

そして、読書会への参加である。初回に取り上げられる経験は 1 度きりである。当然、参加したいと思った。しかし仕事柄、先の予定がわからない。そしてそれ

以上に、誰か参加するのか、もし児童相談所のことを良くないと思われている方が参加したらどうしようなどと不安な気持ちもあった。そんなことを考えながら、少し時間を置いてから、参加させていただきたいと連絡をすることにした。

～マガジン連載に込めた思い～

参加を決めてからというもの、常に自分の連載は何を意図しているのだろうかと自問自答していた。そして、改めて自分の連載を読み返した。

私は、『余地』を表題にして連載を続けていた。『余地』には、余裕、ゆとりという意味があり、さらに私の中では『糊代』というイメージが強い。糊代は全体の一分であり、糊代以外の部分がメインである。糊代だけの紙がもしあるとすれば、それはただの白紙である。糊代がメインであることはなく、糊をつけて貼り付けてしまうと、もはや見えない部分でもある。しかし、糊代がないと、紙と紙を貼りつけることは出来ず、なくてはならない部分でもある。

私の中では、仕事における『余地』も同様である。当然、仕事の中でメインになることはない。あくまでも一部であり、表立って目に見えるものではない。しかしその『余地』があるからこそ、日常の仕事が成り立っているのである。私はその『余地』に目を向けることが好きなのである。そしてその結果、今の仕事を続けることに繋がっている。

連載では、今や児童相談所の業務の中心になってしまった「虐待対応」はほとんど扱っていない。お金、ラーメン、ゲーム、ハガキ、漫画など一見仕事とは遠いものを媒介として、私の中の援助方法を扱っている。当然、理論として成り立つものではなく、私の体験を元にした、私の主観を扱ったものである。そのため、参考文献などもない。

一方で、『余地』だけが仕事なのかと言われるともちろんそうではない。私は児童福祉司であり、社会から求められている「虐待対応」を日々行っているという自負がある。だからこそ、その中にある『余地』を見つけることが出来ているのである。

『「余地」について書いていますが、当然、求められている仕事もやっていますよ。だから続けられています。何か問題でもありますか？』

というのが私の連載のテーマだと言えよう。

～想起されたことに想起される～

とは言っても、私の前回の連載は、『担当している子どもにハガキを送っている』というだけの話である。皆それを読んでどう思うのか。その不安は、冒頭に団編集長が発した『私が何をするか、私が決める』という言葉で全て吹き飛んだ。私の大切にしていることは、その一言に尽

きると思った。

そして、私がハガキを送っているだけというエピソードに対して、参加者の方は様々な内容に派生していった。

主体性、ハガキが持つ距離感、社会的養護の自立支援、人と人の繋がり、ハガキの１年とメールの１年の違い、孤立を防ぐ、専門性、人事異動・・・。そのように派生していく参加者の言葉を聞いていると、ハガキを送ることにそんな意味があったような気がしてくるから不思議である。もちろん、繋がりを大切にしていた部分はあるが、正直そこまでの深い意味は考えずに、やりたいからやっているというのが本音である。しかし、私が主体的にしていることに共感をしてもらい、そのことを言語化してフィードバックされる、さらにその意味付けをしてもらえる、そのような体験が今までにどのくらいあっただろうか。

例えば、「虐待のケースの対応大変なのに続けられて凄いですね」と言われても、正直何も感じない。そのことを生業としている以上、当たり前のことをしているだけなのでそのことを他者に扱われても何とも思わない。褒められようが、貶されようが知らない人間が勝手に言っているだけだと思い特に気になることはない。しかし、本来の生業以外のところで、主体的にしていることを扱われ、共感される体験は今までになかった。もちろん、共感をされたいが為に継続しているわけではない。何度も言うように、やりたいからやっているだけなのである。

しかし、本来の業務を続けるに当たって、この主体性のある『余地』は私にとっては必須である。その『余地』があるからこそ本来の業務の継続が可能となっている。そのことを読書会に参加して改めて感じた。

～今後の使命～

児童福祉司を2000人増やすという話が国から出され、どの児相もその真っ只中なのではないかと思う。その上、児童福祉司の国家資格化が議論され、児童福祉司の任用後研修などが義務化されるなど、「専門職」「人材育成」というキーワードをもとに制度などが変化しつつある。正直、そういった動向について、私自身は懐疑的な部分を持ち合わせており、信用していない。

児童福祉司の任用後研修については、制度としては確立しつつも、その運営については、各自治体に任されている部分があり、今まで各職場で実施していた研修の名前を読みかえて実施している自治地体もあるのではなかろうか。

国家資格化になるとして、誰がその内容を教えるのだろうか。そもそも専門性が低いと批判を受けて国家資格化の動きが出てきたのである。資格創設するだけで専門性は上がるのであろうか。そのことを教えられる人材がどれだけ存在する

のであろうか。教科書を読むだけであれば、今からでも教科書を配れば良いだけである。

読書会に参加したことで、今後も主体性を持ち『余地』のある活動を継続していくこと、さらにこの『余地』を扱おうとしない社会的な動向（児童福祉司の国家資格化、法的な縛りの強化など）に対して、意図して反発していくことを今後もテーマにして、やりたいことをやっていこうと強く決意した。その結果、この仕事が続けられているのであれば、そのことがどんな研修や資格よりも役立ったという根拠になる。

今回、参加者は遠いところではフランスというグローバルな集まりであった。この取り組みは物理的な距離を厭わず、多くの援助職者との出会いを可能にする。屋外に出られず、社会的距離を必要とする社会情勢があったからこそ、確立された新しい取り組みだと思った。そうした新しい『余地』に出会わせてもらった機会に感謝している。

お声掛けを頂いた編集者の方、参加して下さった皆さま、どうもありがとうございました。

♪♪♪♪♪♪♪♪

統合失調症を患う母とともに生きる子ども

～ゆりの日常～

春の風 ―15 歳―（後編）

♪♪♪

松岡園子

「行ってきます」

この言葉を 1 日に 2 つの場所で言う。仕事へ、学校へ。仕事へ、学校へ。

中学校を卒業してすぐに就職した給食会社の仕事にも、定時制高校にも慣れてきた。

与えられている時間でいえば、昼間の高校に行っている友達と同じ 1 日なのに、2 倍の時間を生きているような気になることがある。

同じ地域で、同じ年齢、同じ 1 日。でも、違う世界を生きている。ゆりは、少し開けた窓から見える六甲アイランドへ続く橋と空のコントラストを眺めた。赤とグレー。朝からずっと空は薄グレー色だ。もうすぐ梅雨入りするのかもしれない。窓から入ってくる生ぬるい風が、ゆりの熱を帯びた肩から背中をより一層じっとりとさせた。

「さぁ、ひと段落したな。あとは後片付けだけや。今日は金曜日やさかい、湯飲みを消毒しよか。やったことないやろ？」

職場で配置換えがあり、一人で製菓工場の食堂でのまかないを担当するようになって 2 週間ほどになる。1 時を過ぎて急にがらんとした食堂に、影山さんの声がエコーのように響く。

「影山さんの仕事の方はいいんですか？」

「あと階段掃除するだけやから、これ浸けてから行くわ」

ゆりと影山さんの共通点は、同じ製菓工場で同じ時間に委託業者として働いているということだけだ。所属会社も違うし、仕事の内容も違う。自分の仕事とは関係のない湯飲みの消毒をするなんて、余分な仕事のはずなのに。

影山さんは、四角いバケツのようなブルーの桶にお湯を張り始めた。足元には、キッチンハイターの大きなボトルが置いてある。

「ここの茶色うなっとんが、ハイターしたらきれいになるならなぁ」

影山さんのごつごつとした手に握られたハイターのボトルから、ちょろちょろと液体が桶に落ちていく。

「プラスチックは割れへんけど、これがあるからな」
　白い湯飲みの内側が茶色く変色してきているのは、ゆりも気づいていた。いつも洗う時に強くこすってみるが、茶色いままだった。でも、それがハイターできれいになるなんで、知らなかった。仕事をしながら１つひとつ新しいことを知っていく。仕事をしていると、お客さんや一緒に働いている人のために動き、考えることが多い。もちろん、お給料をもらっているのだから当たり前なのかもしれないけれど、影山さんがしてくれていることは、それ以上のものがある気がする。
「お母ちゃんはどうや？」
　影山さんは、桶の中で湯飲みが重ならないようにずらしながら沈めていく。
「……しんどいって言って落ち込んでる時もありますけど、作業所にも行ってて楽しそうな時もあります」
「お姉ちゃんが仕事を楽しそうにしてたら、お母ちゃんを安心させてあげれるんと違うか」
　ゆりはそれを聞いて、朝、仕事に出てくる前の夏子の目を思い出した。ゆりだって最近、家で「しんどい」と口にすることが増えている。毎日毎日、仕事と学校で求められることの繰り返しで、家にいる時に気が抜けて思わず口にしてしまう言葉だ。それを聞いた時の夏子の目は、ゆりの方を真っ直ぐに見ない。いや、見ることができないのかもしれない。泣き出しそうな、何か強いものに怯えているような目だ。
「お姉ちゃんの仕事は、ほんまに重労働や。でもお母ちゃんにしたら、自分のために重労働させてると思うのは、つらいで」
　確かにそうかもしれない。
　窓から吹き込んだ風が、ゆりの顔に勢いよく当たってくる。
「さ、全部浸かったな。風が強うなってきたし雨が降り出すかもしれへんから、掃除の続きをしてこよか。あと 30 分は浸けとくさかいな。お姉ちゃんが帰る前に取り出したら、ちょうどええわ。後でな」
　そう言って影山さんは食堂の勝手口に立てかけてある、ほうきとちり取りを片手で掴んだ。影山さんの体の横にあると、ほうきとちり取りは小さく見える。
　小さい頃から夏子には何でも言って甘えてきた。でも今も、しんどいと口にすることで何かが変わるのだろうか？　それを聞いたからといって、夏子の調子が良くなるわけではない。むしろ、自分のせいで子どもがしんどい思いをしていると、気分を沈ませてしまう。それなのになぜ、自分は思ったことをそのまま言ってしまうのだろう。お母さん……だからだろうか。でも、お母さんだからこそ言わない方が良いこともある。今は特に、そう感じる。
　窓の隙間から、湿った草の匂いが入ってきた。ゆりは給食鍋を洗う手を止めて、外を見た。六甲アイランドへ続く橋を通る車が、路上の水を弾いて走る音が聞こえてくる。時計を見ると、もうすぐ 3 時になるところだ。
「早くしないと」
　独り言のようにつぶやく。今日の 1 時間目は簿記の授業だから、遅れずに行きたい。ゆり

はこの間、教室の前を通りかかった時に見た、大人クラスの人達の授業への真剣な眼差しが忘れられなかった。大人になったら、勉強なんてしなくなるものだと思っていたのに。

高校の授業を終えて最寄の駅に帰り着くと、ホームの時刻表に挟まれた時計の針は10時前を指していた。改札まで小走りで駆ける。少し慌てた様子で、小さく畳んでいた折り畳み傘のスナップを外す。お母ちゃんは起きているだろうか？

家までの上り坂を早歩きしてきたゆりが玄関の門に手をかけると同時に、ドア横の窓からぼんやりと明かりが見えた。まだ起きているようだ。傘を畳んで4、5回振ると、そのまま外の壁に立てかけた。

「ただいまぁ」

自分の声がいつもと違う。

家でこんなに弾んだ声を出したのは、いつ以来だろうか。

靴を脱いで、荷物を持ったまま夏子の部屋へ向かう。引き戸を開けると、布団に入ろうとしていた夏子と目が合った。

「寝るところ？　はい、おみやげ」

駅前のコンビニで買ってきた四角いチーズケーキだ。

「明日にする？」

「ん、今食べる」

夏子の目が幼い少女のように光った。

ゆりは夏子の分をテーブルに置き、自分の分も袋から出した。昨日、やっとこたつ布団を片付けた。それまで覆われていたテーブルの足の部分が見えるようになると、何だか違う部屋のように見える。

「すっきりしたね」

少しだけ開けた窓の隙間からは、湿った風が糸のように入ってくる。体にまとわりつくような湿気を帯びた風は好きではないはずなのに、今日は気にならない。

「こたつ布団がなかったら、この部屋も結構広いんや。寒くない？」

毎年こたつ布団を出し入れしているのに、片付ける度にそう思う。

「寒くはないよ。もうすぐ6月やし。ごちそうさま。さっき、寝る前の薬飲んだから、もう寝るわね」

チーズケーキのパッケージを手のひらで真っ直ぐにならし、台所のごみ箱に運びながら夏子が言う。その後ろ姿も少女のように見えた。

ケーキの甘さが口の中で溶けていく。仕事をしていたのも、学校で授業を受けていたのも、もうずっと前の自分のように思えてくる。

明け方、目を覚ましたゆりが型板ガラス製の窓に目をやると、ブルーの空と光が広がっているように見えた。窓を開けると、思った通りの天気だった。吹き込んでくる空気を、鼻か

ら思いきり吸い込む。少し湿り気を帯びているが、力強い匂い。朝日に照らされた家や木々は、汚れを落とした洗濯物のように自信に溢れ、胸を張っているように見える。

日光と共に入ってくる風が、部屋の中の空気を躍動させる。「一緒に踊ろう」と誘い合っているんじゃないかと思うほど、床や天井を跳ね回る。

乾いた風、湿った風、強い風、優しい風、温かい風、冷たい風――。春には色々な風が吹く。受ける風が、気分まで変えていく。私はお母ちゃんにとって、風なんだろう。お母ちゃんも自分にとって、また風だ。風と風が影響し合って、つむじ風が起きたり、台風になったり、そよ風になったりする。

これからどんな風を創り出していくんだろう。

ゆりはもう一度、鼻の奥まで空気を吸い込んだ。

※この物語は実際の体験と、それを探求する虚構の物語をもとにしています。

実在の人物及び団体のプライバシーに配慮し、作中では架空の名称をあてています。

第１３回　「生体肝移植ドナーをめぐる物語」

――　「お母さんが好きだから」という想いの裏側　――

一宮茂子

はじめに

本稿では、臓器を提供する人をドナー、臓器をもらう人をレシピエントと表記しています。対人援助マガジン第 34 号 337-341 頁の「分析モデル」の図とその解説で紹介しましたように生体肝移植治療は、22 個の「ファクター」、17 人の「アクター」、3 つの「タイム」が時間軸にそって進行しながら複雑に絡み合って相互作用を及ぼします［一宮 2018.9］。その分析モデルは本稿の最終頁に再掲していますので参照してください。

本稿は「ドナー候補者」を家族内で相談するまえに、レシピエントがドナー候補者の意思を確認することなく、独断でドナーを名指しした事例です。本来ならこの時点でドナーの自発的意思を無視した母親からの強制により、倫理委員会の承認は得られず、移植は行われなかったはずです。

しかし、このような内容は移植医療関係者の知らないところでおこなわれていたことが数年以上経過した研究対象者の語りから明らかになりました。具体的な内容は 1 章で紹介します。この事例のように地元病院の医師からある程度の移植情報を得てドナーが決まっていたとしても、移植施設ではあらためて決められた手順で、インフォームド・コンセントを行い、ドナー候補者とレシピエントの同意のもとに正式にドナーが決まります。

このプロセスでドナーの意思確認や移植治療における説明を複数回受けて、ドナーもレシピエントもその内容を理解したうえで、書面による同意書の署名をその都度おこないます。また検査、治療、処置などにたいしても移植外科医師から説明を受けて理解したうえで、同意書に署名することになります。この事例では、移植前、移植後、社会復帰に向けた療養期間中に患者、家族、移植医療者との間で関係性の変容が見られましたので紹介いたします。

1　事例紹介

長女である愛さん（仮名：20 歳代、O 型）は、レシピエントである母親（50 歳代、B 型）と父親（50 歳代、A 型）と長男である弟（20 歳代、AB 型）の 4 人家族です。愛さんと父親は会社員であり、弟は大学生で下宿生活を送っていました。母親は C 型肝炎から肝硬変になり、その後、肝細胞癌になりました。さらに病状が悪化して食道静脈瘤が破裂して吐血しました。地元病院でその処置を受けましたが、この頃から母親の治療は地元病院では手に負えない状態になりました。そのため地元病院の医師から生体肝移植にかんする情報

提供を受けたことが、その後のドナーの語りからわかりました。2 章で紹介しますように、生体肝移植には生体ドナーが必須です。その特徴を押さえたうえで、3 章でドナー決定のプロセスを見ていきます。

2　生体肝移植治療の特徴

生体肝移植治療の特徴は、対人援助マガジンで何度も紹介しましたが、重要な内容ですので本稿でも提示します。対人援助マガジン第 33 号 352 頁で紹介しましたように、生体肝移植治療には 8 つの特徴があります。それは、(1)代替療法がない、(2)移植をしなければ患者は死亡する、(3)生体ドナーが必須、(4)生きた人間の身体の一部が医療資源となる［安藤 2002］、(5)他者には依頼しにくい、(6)ドナーの負担や犠牲は金銭や時間で分配できない、(7)ドナーは誰かひとりが全面的に担うしかない、(8)時間的制約がある、ということです［一宮 2016］。

このような生体ドナーを必須とする生体肝移植は、患者を助けるために、生きている人に本来なら必要でない肝臓の一部を摘出するというドナー手術によって犠牲と負担を強いることから残酷な治療だとも言えます。かといって何もしなければ患者が亡くなるのは確実です。家族によっては、救命可能な移植治療があることを知りながら、家族が犠牲となる移植治療を拒否する患者もいます。あるいは家族がドナーを拒否して衰弱していく患者を見まもる場合もあります。

愛さんがドナーとなった当時の日本では、脳死移植は少なく、順番も時期も不明でした。現在でも日本の脳死移植は欧米に比べると極端に少ないといえます。そのため日本では圧倒的に脳死移植よりも生体移植が多い現状が続いています。一方で移植を勧められたレシピエントの命は限られています。そのため移植で生きながらえる治療法を知り得たからには、後悔しないためにも生体肝移植治療を選択せざるを得ない家族がいた状況だったといえます。愛さんの場合も同様だったのです。

3　ドナーはどのように決まっていったのか？

1 章で紹介しましたように愛さんの母親は、肝硬変と肝細胞癌のため食道静脈瘤が破裂して吐血しました。地元病院で止血処置を受けても再度病状が悪化する可能性があります。当時はこの時点で残された治療法は生体肝移植以外になかったのです。

3-1　移植情報の提供には順番がある

生体移植という新たな治療法を患者に説明するには 2 章で述べた生体肝移植の特徴を説明する必要があります。地元病院の医師が患者や家族に最低限必要な説明としては、(1)生体ドナーが必須なため「誰がドナーになるのか」ということ、(2)ドナーとレシピエントの血液型、(3)治療費、(4)入院期間などです。とくに(1)と(2)の説明は不可欠です。

通常このような生命にかかわる重要な説明は、レシピエントになる患者も含めた家族に

移植施設の移植外科医が行います。しかし、この事例では、母親が地元病院に入院していた時期であったことから、地元病院の医師が入院中の母親に直接移植情報を提供したのです。そのときの母親の心情を愛さんが次のように語っています。

> 愛さん：「母が言うには『患者以外の人が移植の話を持ってきて、こういう話があるけれど、どうやろうってドナーを決めるのが普通なンやけど』…初めは地元病院の先生から（ドナーの）話が私にあって、弟はAB型で合わない（ためドナーは）…O型の私になった…『娘を傷つけても移植を受けたい』と母よりはっきり言われた…。お父さんは『自分たち（母と娘）で決めて』みたいな感じだったし私は当人同士が話をすることかなぁ～って正直思った」

この事例では移植の話を進める順序が逆転していました。本来はまず家族内で十分検討したうえで、ドナー候補者やドナーの適性についてある程度評価できた段階で医師がレシピエントに説明するという順番です［田中 1997］。なぜならば話の進めかたによってはこの事例のようにドナー候補者に圧力となるためです。愛さんの家族は、最初に母親が地元医師の説明を受けたことにより、家族全員の血液型が異なっていたことから、血液型のみがひとり歩きして、本人の意思とは全く関係なくO型の愛さんがドナー候補者としてほぼ決定されたのです。

このようにして移植情報を得た母親は「娘を傷つけても移植を受けたい」と生きながらえたい心情をダイレクトに愛さんに伝えたのです。母親の言葉は愛さんにとって「プレッシャー」になったと語っています。だからといって「ドナーはイヤ」という否定的な語りは見られませんでした。しかし、愛さんの心のどこかで「ドナーは私かな？」という思いがあったようです。こうして愛さんは自分の意思表示を明確にしないままドナーに決まっていったのです。

未婚の娘をドナーにして、身体に傷をつけることを申し訳なく思う家族がいる一方で［野間 2007］、「娘を傷つけても移植を受けたい」と母親から懇願されたら、子どもはドナーを拒否できるのでしょうか。母親は移植しないと亡くなるのは確実です。母親の本音は、娘にとっては逃げられない圧力になっていたと思われます。

この事例のようにドナーは移植施設に来る前に決まっていることもあります。そのため地元病院の医師が移植治療情報を提供するときは、ドナー指名は倫理的に問題があるため避けることと、現代では血液型不適合でも移植は可能であるため「誰がドナーになるのか」について家族員のそれぞれの心情を汲みとって家族全員が納得できるように話し合って決めることが重要である、ことの説明をお願いしたいと思います。

3-2　ドナーの倫理的条件――ドナー指名は倫理違反

ドナーの倫理的条件はこれまでに何度も記述してきましたが、重要であることから本稿でも取り上げておきます。Y 病院は 1990 年から生体肝移植が始まりました。当初は親から胆道閉鎖症の子へ血族 1 親等間の移植がほとんどでした。その後、成功事例数の増加とと

もにドナーの範囲は拡大していきました。成人事例が増加すると成人の子から親への血族 1 親等間、きょうだい間の血族 2 親等間、さらに、おじ、おば、甥、姪の血族 3 親等間および配偶者間へと拡大しましたが、ここには姻族（配偶者方の親族）は含まれていません。

さらにドナー年齢は 20 歳以上 60 歳未満を原則としていました。しかし、当時は移植施設によってドナーの年齢の範囲や親等の規定範囲は異なっていたのです。

当時のY病院のドナーの倫理的条件からみた母親のドナー候補者は、原則として血族3親等以内あるいは配偶者でした。したがって母親のドナー候補者は、血族1親等の子どもである娘と息子、配偶者である夫、血族2親等である母親の兄の4名となります。

日本移植学会倫理指針は 1994 年より施行されていましたが［日本移植学会 web］、その後必要に応じて改正されています。以下は生体臓器移植のドナーについて、その内容を一部抜粋したものです。

ドナー対象者は「親族に限定する」とし(注1)、「親族とは 6 親等内の血族、配偶者と 3 親等内の姻族である。親族に該当しない場合においては（他人でもドナーになれるという意味)、当該医療機関の倫理委員会において、症例ごとに個別に承認を受けるものとする。その際に留意すべき点としては、有償提供の回避策、任意性の担保などである。さらに、事前に日本移植学会倫理委員会に意見を求めなければならない」となっています。そして、提供は本人の自発的意思であり、報酬を目的としないこと。提供意思が他者からの強制ではないことを精神科医などの第三者が確認すること。また確認したことを診療録に記録し公的証明書の写しを添付することになりました。

しかし、この事例の倫理的な問題は、愛さん自身がドナーとして詳細な説明も受けていない状況で、ドナーとしての意思も明らかにしていない段階で、母親からドナー指名を受けたことです。このような強制は移植医療関係者が知らないところですでに行われていたのです。2006 年からドナーの「提供意思が他者からの強制ではないことを精神科医などの第三者が確認すること」になりましたが、愛さんの事例はそれ以前の移植であったため、そのような措置は受けていませんでした。

3-3　ドナーの医学的条件――血液型で決まったドナー

医学的条件とは、ドナーとしての適応可否にかんする医学的視点から見た条件です。それは、健康状態、年齢、血液型、体格、感染症の有無、組織適合性などです。血液型はレシピエントと一致しているか、適合とよばれる問題の少ない組み合わせが望ましいとされています(注2)。もちろん血液型が全く異なる不適合移植も可能です。当時の Y 病院は特別な処置や薬剤を使用して血液型不適合移植も行っていました(注3)。この場合、移植後の超急

(注1)　親族とは民法第 725 条に準じている。

(注2)　適合移植といいます。具体的にはドナーの血液型が O 型→レシピエントの血液型が A/B/AB 型、A/B/O 型→AB 型の移植です。

(注3)　血液型不適合移植とは、輸血できない血液型の組み合わせの移植です。具体的にはドナーからレシピエントへの血液型が A/B/AB 型→O 型、A 型→B 型、B 型→A 型、AB 型→A/B/O 型の移植です。近年の血液型不適合移植は、その後の進歩により経験をつんだ施設での成人症例の成功率が 80%にたっしているので禁忌にはならない

性の拒絶反応が起こる可能性があります。その拒絶反応を抑えるために大量の免疫抑制剤を使用することから感染症を合併しやすいといわれています［江川・上本 2007］。

ドナーの肝臓は、画像診断（CT 検査）によりその大きさが予め把握できるとされており、成人間移植の場合は、患者と同じくらいの体格の人が提供すると、移植肝臓の大きさとしては適しているとされています［田中監修，2004: 9］。

このような医学的条件をこの事例に反映すると次のようになります。(1)ドナー年齢、(2)体格差、この 2 つは問題ありません。(3)血液型は一致しているほうが術後経過は順調なのですが、全く血液型があわない場合でも移植は可能です。ただし特別な処置や薬剤の投与が必要です。この事例では、愛さんの血液型は O 型、母親は B 型で異なっています。しかし、O 型から B 型への移植は適合移植といって問題が少ない組み合わせのため移植は可能です。

そのためこの事例では医学的な問題はなかったといえます。

3-4　ジェンダー規範――「家事は女性が担う」という暗黙のルール

ドナーには倫理的条件や医学的条件以外にも規範があります。それは対人援助マガジン第 37 号 235 頁で紹介しましたジェンダー規範と家族規範です［一宮 2019.6］。

ジェンダー規範とは、江原由美子［2001］の「ジェンダー秩序」の論考を参考にして定義しました。「ジェンダー秩序」には、「状況」や「社会的場面」のいかんを問わず、「性別カテゴリー」と一定の「行動」「活動」を結びつけるパターンがあります。その秩序の成立は「性別分業」と「異性愛」からなります。「性別分業」とは「男は活動の主体」、「女は他者の活動を手助けする存在」という位置づけです。「異性愛」とは「男は性的欲望の主体」、「女は性的欲望の対象」として両性間の非対照的な力が重要な構造特性をもつと述べています。この説明を参考に、ジェンダー規範とは、女性は他者のサポート役、男性は活動主体であり、女性を性的対象とするような権力があることを指しています。

この事例では「家事は女性がするもの」というジェンダー規範がありました。そのため母親が病気がちで体調が悪かったときは、愛さんが「家事は全部していた…好きなことができないときは嫌やナと思ったけど…私は母が大好きなンで」と語っています。入院期間中や退院後の療養期間中は、愛さんが家事をしていたことがわかりました。母親と自分の 2 人分の家事は負担を感じなくても、「父親を含めて 3 人分の家事は負担が大きい」と語っています。しかし、そのことを家族内で話し合った語りは見られず、愛さんひとりが家事全般を抱え込んで担っていたことがわかりました。ただ移植前に母親の状態が悪くなったとき、父親は掃除などを手伝ってくれたこと、弟は心配して下宿から自宅に帰ってきたこともあったようです。

インタビューをとおして気づいたことですが、愛さんはネガティブなことの語りの後に「私は母が大好き…」とポジティブなフレーズをつけ加えます。このような語りが複数回あ

とされています［江川・上本 2007］。

りました。なぜあえて母親が好きだと言わなければいけないのでしょうか。考えられることは家事負担が愛さんに相当なストレスになっていて、思わず負の感情がポロリとこぼれたように感じました。しかし愛さんにとって母親は愛すべき大切な人であるため、肯定的に言い直す必要があったのかもしれないと思われました。さらにインタビュー当時の印象としては、愛さんはおとなしい性格で自分の本音を言えずに、周りに流されているように感じました。

3-5　家族規範――家族の責任

家族規範とは、家族としての責任を意味しており、家庭内の地位、就労の有無、収入の有無、ライフステージ、続柄などがかかわっています。さらに家族規範には優先順位があり、出生の順位、親等関係上の近さ、傍系より直系家族が優先するという順位があります。

肝臓の一部を提供するドナー手術は大手術であるうえに、ドナーにはなんのメリットもありません。ドナー手術で亡くなる可能性もゼロではありません。2003年、国内で初めてドナーが亡くなりました［日本肝移植研究会ドナー安全対策委員会 2004］。それまでは「国内で亡くなったドナーはいない」という移植外科の医師の言葉を、何よりも心の支えにしていた多くのドナーを私は臨床現場で見てきました。

ドナー手術は命がけの手術です。そのような危険な手術を伯父に依頼すること自体がはばかれたと思われます。さらに想定外の事態が起きれば伯父やその家族にたいして一生負い目を感じないといけないという心理は他の事例でも確認されています。誰がドナーになるのかという問題は、結局は家族内の問題として家族内で帰結することが多いと言えます。この事例では母親自身がドナーは娘と指名したことで帰結しました。しかし指名された娘の意思決定は何ら考慮されていない状況でした。

3-6　ドナーをめぐる葛藤――結局ドナーは近親家族

ドナーの犠牲と負担は大きなものです。そのため最終的にドナーとなるのはレシピエントにもっとも近しい直系の家族員になることが多いといえます。ただし同一家族員なら最悪の事態になっても責任が負えるということを意味しているのかというと、そうではないはずです。一応自分たちと共に居住している家族が、ドナーの極めて大きな手術侵襲を承知のうえで意思決定をした場合、その後に最悪の事態が起こったとしても、その家族が大きな苦悩や悲哀をいだいたとしても、その家族内で自己完結するものとみなしているといえます。

それ以外の、たとえば伯父は母親と同じ血液型です。だからといってドナーになってもらった場合、その配偶者や子どもにたいしては責任を負えないとみなし、また、そういったことを承知のうえでドナーを依頼することは、母親を含めた家族が困難とみなしているため、結局、傍系の血縁の遠い人は選択されず、直系の家族から選択するという家族規範に準拠してドナー候補者を選んだと思えます。

この事例では、愛さん自身は「ドナーは私かな？」と思ってはいても、Y病院のインフォームド・コンセントに同席した伯父は、ドナーは愛さんと既決しているように見えたよう

です。そのため伯父は「一保護者的な感じ」で同席しているように感じて「イヤだった」と不快な心情を語っています。

さらに愛さんが入院後に新たに得た情報が2つありました。1つは親子でも夫婦でも血液型不適合移植の人が多いと知ったこと。2つ目は父親のように脂肪肝であったとしても食事療法や運動療法で病状を改善してからドナーになる人もいるということでした。このような情報を知っていたら、ドナー候補者も替わったのではないかと考えて愛さんは葛藤していたのです。それでも愛さんは母親の移植治療を成功させるには、血液型不適合移植よりも成功率の高い血液型適合移植としてO型である愛さんがドナーを引き受けたと思われます。

インタビュー時になぜ愛さんがドナーになったのかを尋ねたとき「流れです」と即答したことを考えると、ドナー問題を家族内で解決するために愛さん自身が納得できる答えとして、知らず知らずのうちにドナーは愛さんに決まっていった過程のことを指していると思われました。

4　インフォームド・コンセント

インフォームド・コンセントの概要は対人援助マガジン第 36 号 294 頁を参照してください［一宮 2019.3］。さらに具体的な内容は対人援助マガジン第 37 号 254-255 頁を参照してください［一宮 2019.6］。

移植医療関係者の立ち位置から見たインフォームド・コンセントは大変重要な意味を持っています。しかしドナーやレシピエントにとっては、移植医療関係者が思っているほど重要でないことが先行研究で明らかです。［一宮 2012］。

愛さんは移植術を受ける 1 年くらい前に Y 病院で移植外科の医師からインフォームド・コンセントを受けています。その当時の心情を以下のように語っています。

> 愛さん：「インフォームド・コンセントの話を聞きに行ったときは、父と伯父と私の 3 人だった…自分がドナーになるだろうと思ってはいたけど、決まってはいなかった…そのような雰囲気のなかで、伯父は母と血液型が同じだったので、いちおう聞きにきてもらった、という感じはあるンですけど。でも、たぶん私かな？と思っていました。ドナーの話になったとき、私は『考えます』って言ったんですけど（移植外科の）先生はカルテに『ドナーは愛さん』と書いたンです。まだ…決まってはいないのに…押しつけられているように思いました…プレッシャーも感じた」

このインフォームド・コンセントの席上に母親は参加していません。たぶん体調が悪かったのだと思います。愛さんは母親にドナー指名された時点でも YES か NO か明らかな意思表示はしませんでした。黙認することは家族や親族の立ち位置から見ると YES と捉えられたようです。しかし愛さんの心の中ではドナーは決まっていない状態ですが、反面「私かな？」という思いもあったのです。

一方、地元病院の医師は Y 病院へ紹介状を送っているはずです。そこにはドナー候補者

は娘と明記していたようです。なぜならドナーの話になったとき愛さんは「考えます」と答えたにもかかわらず移植外科の医師は「ドナーは愛さん」とカルテに明記したからです。それを見た愛さんはこの場面でも「まだ決まっていない」と思いながら自分の思いを言語化しませんでした。

母親と同じ血液型の「伯父も聞きにきてもらい」ましたが、伯父は愛さん家族から依頼されて参加していたのです。だからこそ「伯父は一保護者的」な態度に見えて、愛さんは不快な感情を抱いたと思われます。こうして愛さんは腑に落ちない状態でありながら知らず知らずのうちになんとなくドナーに決まっていったといえます。

そしてインフォームド･コンセントの席上で聴いた高度で複雑で難解で多量は移植治療の説明内容は、愛さんにとって「よくわからない」内容だったと語っています。インタビュー時点で愛さんのインフォームド･コンセントの受けとめかたは「自分のことばかり考えていた」ことと「今後の生活については特に支障はない」と聞いたことが記憶として残っていたのです。

5　移植後の回復状態

手術後のドナーは、一般病棟へ収容されます。一方、レシピエントは手術室から直接 ICU（集中治療室）へ数日間収容され、全身状態の管理、処置、ケアを受け、病状が落ち着けば一般病棟の個室に収容されて経過観察を行い、その後、多床室に転室します。

現代では成人間のドナーの肝臓提供は、ドナーの負担を考えて右葉より小さい左葉の肝臓を提供するようになっているようです。しかし、愛さんの場合は当時、成人間で行われていた移植と同様に（対人援助マガジン第 33 号 348 頁の図 1 参照)、ドナーの肝臓切除は肝臓全体の 3 分の 2 にあたる右葉を切除して移植が行われていました［一宮 2018.6］。ただしレシピエントが小児の場合の肝臓移植は肝臓全体の 3 分の 1 にあたる左葉を切除して移植が行われることを附記しておきます。ドナーの負担は、小児事例の左葉肝提供よりも、成人事例の右葉肝提供のほうが身体的にも精神的にも社会的にも圧倒的に負担が大きいといえます。

5-1　ドナーの回復状態

愛さんはドナー手術を受けた後、順調な経過をたどり、予定通り術後 2 週間で退院となっています。その後は Y 病院近くのウィークリーマンションに滞在して、移植術を受けた母親の身の回りの世話のために毎日来院していました。その期間は約 3 ヶ月になります。

移植術後 2 年経過したころの愛さんは口渇と多尿が見られたため、Y 病院へ入院となりました。検査の結果、糖尿病と診断され、インスリン療法を受けるようになったのです。それはドナー手術の合併症ではなく、新たに発症した 2 型糖尿病ということでした。

5-2　レシピエントの回復状態

レシピエントである母親は術後約 4 ヶ月におよぶ入院となりました。その期間に術後合

併症として腹水があり、全身のむくみがひどくなりました。さらに肝生検で横隔膜を傷つけたため手術室で止血術（小開胸止血術）を受けました。また CT 検査で手術によって腹壁の弱い部分から内臓が腹膜に包まれたまま脱出する腹壁瘢痕ヘルニアが見つかりましたが、このときは経過観察となりました。愛さんは退院後に毎日母親に付添っていましたが、母親の病状が安定しないため「どうなるンだろう、本当によくなるンだろうか」と不安を感じていました。退院後の母親は、発熱、全身発疹、胸水などで何度も入退院を繰り返し、ヘルニアは移植術の 3 年後に手術によって根治されました。その後の母親は地元病院に定期的に通院しながら医療的なフォローを受けています。

6　さまざまな支援――医療的支援／人的支援／社会的支援

ドナーとレシピエント、家族の 2 人が同時に手術を受ける生体肝移植術は、身体的、心理的、経済的、社会的に、患者や家族に大きな負担や不安をもたらします。そのため移植前、移植後、移植後 1 年以上から終末期のタイムにおいて様々な支援が必要となります。その支援内容は、対人援助マガジン第 34 号で紹介しましたように、医療的支援、心理的支援、人的支援、経済的支援、社会的支援、代替療法（宗教など）があります［一宮 2016］。愛さんの語りから得た支援は、医療的支援、人的支援、社会的支援でしたので以下に紹介します。

6-1　医療的支援――移植外科医師の高度な専門知による対応に信頼感

愛さんの母親は移植術後 1 ヶ月半ごろに肝生検を受けたところ､横隔膜を傷つけたため、手術室で小開胸止血術を受けました。医師からは「胸の下の方を傷つけていた」という説明があり、それを聞いて納得したそうです。

さらに移植術後 2 ヶ月ごろから腹水がたまって浮腫がひどくなりました。その原因は肝臓の静脈が一部狭くなっているため、血流が悪くなっていることが原因でした。その改善策として狭くなっている箇所の血管に管（ステント）を入れる処置を受けたのです。母親の病状は愛さんの立ち位置から見ると「本当によくなるンだろうか？」という不安感が強かったようです。

医師の教育機関でもある大学病院という特殊性から、主治医は研修医とその指導医が担当します。研修医はさまざまな病棟を研修する必要性から、短期間で入れ替わります。愛さんによると 1 月に研修医と指導医が替わり、さらに担当ではない先生も診にきてくれて、「なぜ腹水が貯まっていくのかをものすごく具体的に説明してくれた」そうです。さらに「浮腫は何故おきるのか､その検査はどうで､次はこうしますとわかりやすい説明があり、安心した」と語っています。高度な専門知による医師の対応や説明によって、愛さんが医師を信頼していたことがうかがえます。

6-2　父親や娘による人的支援――安心感

人的支援とはもちろん文字どおり人手による支援ですが、もうひとつ大事なことが含意

されています。具体的には誰かが患者に付添うということは、精神的な安寧をもたらす効果が大きいため、人的支援という行為のなかに心理的支援が含まれているということです。

入院中のレシピエントである母親の身の回りのケアは看護師がしてくれたそうです。ただ看護師は洗濯や買い物まではおこないません。父親は自宅から通いで 2〜3 日付添って洗濯などをしてもらったそうです。

5-1 でも述べましたが、退院した愛さんは Y 病院近くのウィークリーマンションに滞在して、移植術を受けた母親の身の回りの世話のために毎日来院していました。その期間は約 3 ヶ月になります。一方で下宿生活をしている弟は、一度も病院には来なかったそうです。

家族が患者に付添って見まもるということは、患者と同じ時間と空間をともにするということであり、このこと自体が患者の心理的支援につながります。また付添っている家族も患者の状態を自ら確認することができることと、患者の心理的安寧になること、異常な徴候がみられた場合には医療者に速やかな連絡が可能というメリットもあります。しかし付添うデメリットとして身体的負担感、病室という狭い空間に居続けるという閉塞感、日常生活が制約される不自由感があります。

6-3　社会的支援——休暇取得／復職／給与保障

就業規則とは、常時 10 人以上の従業員を使用する使用者は、労働基準法（昭和二十二年法律第四十九号）第八十九条の規定により、就業規則を作成し、所轄の労働基準監督署長に届け出なければならないとされています。就業規則を変更する場合も同様です［厚生労働省 2013］。

ここでいう事業主の社会的支援とは、術後のドナーが、(1)ある一定期間の休養期間として休暇を取得できること、(2)もとの職場に復職できること、(3)その間の給与保障を受けられることを意味しています。

愛さんは移植前まで事務職の会社員として勤めていました。このたびは母親のドナーとしてドナー手術を受けるため入院が必要となりました。また退院後の療養期間も必要です。さらにレシピエントの母親が自分で身の回りのことができるようになるまで付添としてのケア期間も必要でした。それには会社の許可をえて休暇をとる必要があります。幸いにも愛さんの会社は、「有給休暇はなかったけれども会社がフォローしてくれて約 3 ヶ月の休暇と、基本給から税金を引いた給与はいただけた」との語りから、社会的支援が受けられたことがわかりました。

しかし小規模の会社ならこのような社会的支援は出来なかったと思われます。ある男性ドナーは長期間の休暇をとると翌月から給与がゼロになり賞与もなくなったと語っています。また別の女性ドナーは入院期間が予定より長くなり、それ以上の休暇が取れず退職になったドナーもいます。手術のために病気休暇が取れて、病休あけには元の職場に復帰して、その期間の給与も全額ではなくても授与された愛さんは恵まれていたといえます。

7　医療的フォロー体制

移植後のドナーである愛さんは、Y 病院に入院していた母親に付添っていたこともあり、術後 1 ヶ月と、術後 3 ヶ月のときには Y 病院のドナー外来を受診しています。術後 6 ヶ月と術後 1 年のドナー外来受診も遠方から Y 病院に来院してドナー外来を受診しています。健常者であっても年 1 回の健診を受けるのと同様に、その後のドナーは年 1 回の医療的フォローを受けるように勧めています。

移植後のレシピエントである母親は、ある一定期間は Y 病院、その後は地元病院で定期的な外来通院が必要です。なぜならば免疫抑制剤の微調整や検査結果によって異常の早期発見に努めるためです。そして、何か異常が見られたら移植コーディネーターを介して Y 病院と連絡をとり、その後の対応を相談します。

8　関係性の変容

生体肝移植治療は 22 個のファクター、17 人のアクター、3 つのタイムが、時間とともに複雑に絡み合って相互作用を及ぼします（資料の分析モデル参照)。その結果、ドナーになったことで、レシピエントである母親、父親、移植外科の医師、これまで勤めていた会社との関係性に変化が見られました。以下に紹介します。

8-1　ドナーとレシピエントの関係性――強制／逃避／期待／ひとり暮らし

この事例ではドナーである娘とレシピエントである母親との関係性が、移植前の時間軸から、移植後、移植後 1 年以上経過した時間軸で大きな関係性の変容が見られました。

まず移植前の時間軸では、母親が生き永らえる治療法として地元病院の医師から移植の話が持ち出されたとき、母親は O 型である娘を強制的にドナーとして指名しました。このときの愛さんは自分の意思さえ明確に言語化していません。「プレッシャー」を感じて困惑していたのです。本来なら 3.2 節で述べましたようにドナーの指名は倫理的に許されず、移植もできない状態です。一方ドナーを強制した話は Y 病院では把握できなかったのです。その後の愛さんは「それなら自分もドナー手術をした後はしたいことをしようと思った」と、一見「ドナーになる」ことを受け入れたように見えます。

ドナー手術後は順調に回復して愛さんは 2 週間で退院となりました。その後のドナーは療養が必要なのですが、愛さんは Y 病院に近いウィクリ―マンションに約 3 ヶ月近く滞在して、Y 病院へ毎日通って母親のこまごました身の回りのケアをしていたのです。しかし愛さん自身は「他の家族が朝食の準備をしている様子を見ると、自分は十分な世話はできていないと思った」と、自己不全感を語っています。しかし愛さんは、退院後は毎日、母親の世話に通っていたのだから十分な世話をしていたと私は思います。

母親は術後約 4 ヶ月後に退院となりましたが、身の回りのことや家事をひとりで担うにはまだ時間が必要です。手術前から母親の世話や家事は女性（愛さん）が担うというジェ

ンダー規範がありましたが、術後も同様でした。

愛さんは会社員として働きながら母親の面倒と家事を担っていたのです。母親の立ち位置から見れば、元気になるまで娘が親の面倒を見て家事をすることを期待していたに違いありません。実際に愛さんは会社に通勤しながら、母親と同居して家事や身の回りの世話もしています。しかし、母親が退院して約半年すぎたころの愛さんは、母親に「あてにされて…しんどかった」と精神的な負担を感じていたのです。そのため実家に近いところでひとり暮らしをするという家族変容が見られました。こうして母親と距離をとった愛さんですが、「お母さんが好きなので」頻繁に実家に帰って様子を見ていると語っています。

8-2　父親とドナーとレシピエントとの関係性――気遣い

移植の話が出たとき「母親は移植手術を受けたいとはっきり言って…父親は自分たち（母と娘）で決めてみたいな感じだった…私は当人同士が話をすることかなぁと思った」との愛さんの語りは、当然の疑問として頷けます。愛さん家族は生体肝移植術を簡単に捉えすぎです。本来なら家長である父親が家族の言い分を聞いて、家族内でよく話し合ってドナーを決める必要がありました。このインタビューで感じたのは、家長である父親としての存在感が非常に薄いことでした。父親が家族の調整役として家族で話し合っても、ドナーは愛さんに決まった可能性が高いのですが、その話し合いの過程で家族員が情報を共有すれば一致団結して移植治療に取り組めたのではないかと思います。

ドナーの語りから見えた父親は、移植術後に家から通いで 2～3 日付添ったことでした。このような気遣いは、せめてもの父親のできることだったのでしょう。レシピエントは看護師が医療的な世話をしますが、洗濯や買い物などはしません。身の回りの世話でなくても家族が様子を見に面会にきてくれることは患者に安心感をもたらします。ドナーは 2～3 日で身の回りのことが 1 人でできますが、洗濯やこまごましたケアは家族に頼みやすいし、なによりも安心感につながります。

私の立場から言わせてもらうと、父親には家族の調整役となって以下のようなことを話合ってほしかったと思います。

それは「重篤な母親の新たな治療法としては、移植をすれば助かると医師が言っている。それにはドナーになる人が必要になる。伯父は母親と同じ血液型だが、万が一の事態を考えたら頼みにくい。しかし家族 4 人の血液型はバラバラなため、O 型が一番手術の成功率が高いらしい。娘のおまえひとりに犠牲と負担をになわせて申し訳ないが、ドナーになって母親を助けてやってくれないか」と言えば、愛さんを含めた家族は納得して協力したのではないでしょうか。

さらにこの事例はドナーへ労いや感謝の言葉がありません。通常はレシピエントである母親が第一にドナーに「ありがとう」と言って欲しいと思いました。父親や弟からも「よくやった」「大切なことをしてくれた」など、ドナーに直接言葉をかけてあげてほしいと思います。そうすればドナーになってよかったとドナー自身がポジティブな心情になれることは先

行研究でも明らかにされています［一宮 2016］。

8-3　ドナーと移植外科の医師との関係性――信頼感／安心感

6-1 節でも述べましたが、愛さんは術後経過が思わしくないレシピエントである母親に付添っていました。腹水がたまって身体がむくんでいる母親の状態を見た愛さんは、これ以上悪化することなく良くなるのか、とても不安だったはずです。しかし、専門知が高い移植外科の医師たちから説明を受けたことから、安心するとともに納得したことで、信頼感や安心感がもてる人間関係が構築される関係性の変容が見られました。

おわりに

この事例で最も問題と思われたことは、レシピエントである母親から娘である愛さんへ倫理的には許されないドナー指名をしたことです。移植治療はとても繊細な内容を包摂した医療です。それは生体ドナーという犠牲と負担のうえに医療が成り立っているためです。そのため「誰がドナーになるのか」という問題は、どの事例でも何らかの葛藤をもたらします。

ドナーにとっては何のメリットもないドナー手術ですが、あえてベネフィットをあげるとすれば、従来の治療法なら助からなかった母親の肝細胞癌は、愛さんの肝臓の一部提供によって生き永らえたことです。今後は生体ドナーではなく脳死ドナーをといっても世界的にドナー不足は続いています。そのため iPS 細胞（多能性幹細胞）による再生医療の発展を期待したいと思います。

9　文　献

安藤泰至，2002，「臓器提供とはいかなる行為か？――その本当のコスト」『生命倫理』12(1): 161-167.

江川裕人・上本伸二, 2007,「生体肝移植ドナーに関する適応と諸問題」『移植』42(6): 501-506.

一宮茂子，1999，「生体肝移植ドナーの心の葛藤（第 1 報）――妹のドナーとなった姉の心理」『第 30 回日本看護学会集録（成人看護Ⅰ）』: 40-42.

一宮茂子，2012，「生体肝移植ドナーが経験したインフォームド・コンセント――ドナーインタビューの分析より」『Core Ethics』8: 53-62

一宮茂子，2016，『移植と家族――生体肝移植ドナーのその後』岩波書店.

江原由美子，2001，『ジェンダー秩序』勁草書房.

日本肝移植研究会ドナー安全対策委員会，2004，「生体肝移植ドナーが肝不全に陥った事例の検証と再発防止への提言」『移植』39(1): 47-55

野間俊一，2007，「生体肝移植医療における精神科のかかわり」『移植』，42(4): 323-328.

田中紘一，1997，「生体肝移植の現状と課題」『今日の移植』10(4): 511-514.

田中紘一監修，江川裕人・高田泰次ほか，2004，『いのちの贈りもの 肝臓移植のためのガ

イドブック』，京都大学医学部附属病院移植外科・臓器移植医療部.

10 オンライン文献

一宮茂子，2018.6,「生体肝移植ドナーをめぐる物語――生体肝移植の概観」『対人援助学マガジン33号』
（https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol33/55.pdf, 2021.5.24確認）
一宮茂子，2018.9,「生体肝移植ドナーをめぐる物語――先行研究／分析モデル」『対人援助学マガジン34号』
（https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol34/51.pdf, 2021.5.24確認）
一宮茂子，2019.3,「生体肝移植ドナーをめぐる物語――患者・家族・親族が一丸となって救った命」『対人援助学マガジン36号』
（https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol36/48.pdf, 2021.5.24確認）
一宮茂子，2019.6,「生体肝移植ドナーをめぐる物語――借金がもたらした人間模様」『対人援助学マガジン37号』
（https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol37/45.pdf, 2021.5.24確認）
日本移植学会，2014,「日本移植学会倫理指針」
（http://www.asas.or.jp/jst/news/doc/info_20151030_1.pdf，2021.5.24確認）
厚生労働省，1947年,「労働基準法」
（https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=73022000&dataType=0&pageNo=1, 2021.5.24確認）

11 資料 「分析モデル」

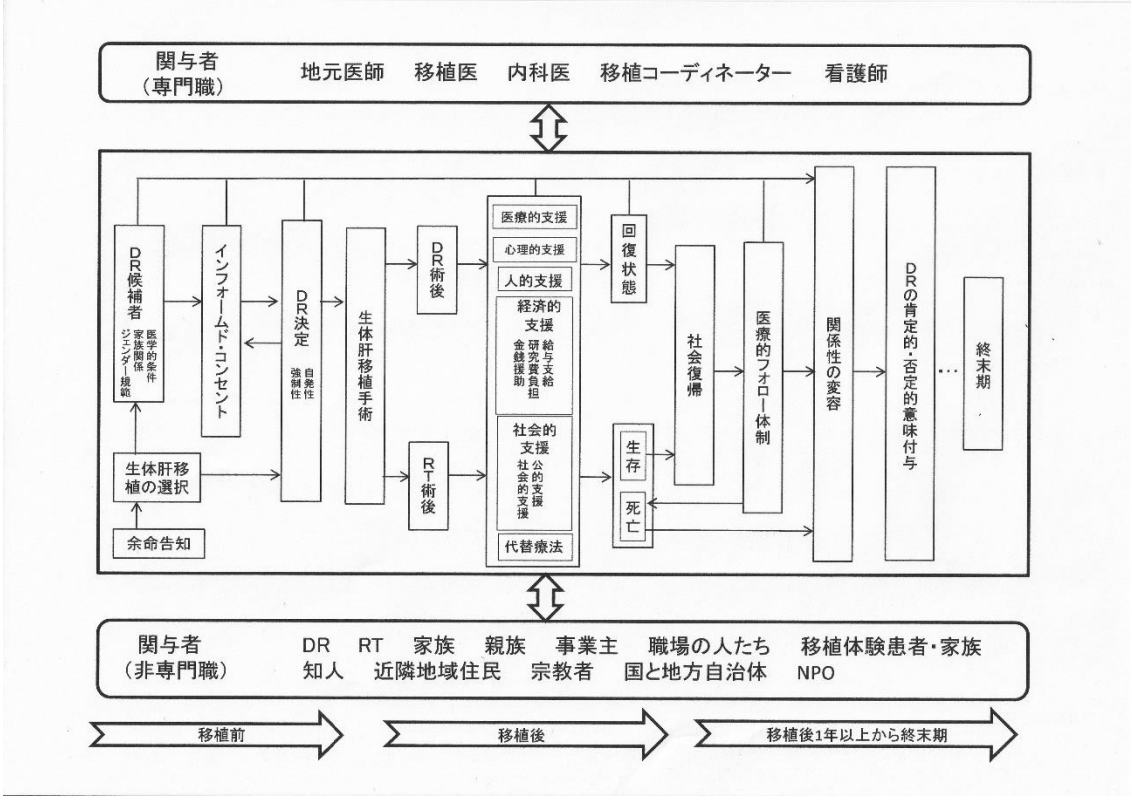


図 分析モデル

（DR：ドナーの略 RT：レシピエントの略）

こころ日記「ぼちぼち」その②

１０

脇野　千恵

思春期保健相談士

教員生活が長かったのですが、現役当時、もし教師以外の仕事を選ぶとしたら、どんなことができるだろうかと、よく考えていました。

職場の仲間と、「辞めたら何ができる？何がしたい？」という問いに、ほとんどの先生は「なんもできることない！なんもしたくないな…」という答えが返ってきました。

３年前、年齢のこともあり、もう教壇には立たないと決めた時、できることなら学校以外の場所で子どもたちを支援したいなと思っていました。教師をしながら、時間とお金を費やした「性と生」の研究と実践を活かした仕事がしたい。私にはそれしかないなと思いました。

それまで何の肩書きもない人間でしたが、たったーつですが、取得した資格があったことに気がつきました。それは「思春期保健相談士」。

「思春期保健相談士」ってどんな資格で、何をする仕事なの？とよく尋ねられます。私はこの資格が欲しくて研修を受けていたわけではなく、思春期の子どもたちのことを学びたいと思い研修に参加しているうちに、この資格がついてきたと言っていいでしょう。（まあ誰でも取得できるものですが。）

「思春期保健相談士」とは、一般社団法人日本家族計画協会が認可している資格です。「思春期の子どもたちに、専門的な知識や経験を積みながら適切に対応、支援する」資格を有する人のことです。

全国に約 9000 人が認可を受け、思春期保健推進のために活躍しています。私のような教員が取得する人は少なく、ほとんどは医師・保健師・看護師・助産師・養護

教諭・看護教員・少年補導員などの資格を持った人が併せ持つ資格のようです。

世の中には様々な資格があります。思春期専門と言っても、関心のある人は少なく、説明するのが面倒な時もありますが、一応専門的な知識として、思春期の心身の発達や、心理的なこと、思春期に起こりがちな問題などについて一通り学んでいます。

教員生活の中で、三分の二は中学校現場でしたので、思春期におこる様々な問題や課題については、数えきれないほどの事例に出会いました。今ようやくこの資格を活かせるときがきたと思っています。

外部講師として

大変なコロナ禍ですが、最近色々な中学校からの性教育講演の依頼が増えています。性教育への追い風と思いたいのですが、現状から言えば、性教育を包括的に系統立てて取り組んでいる学校がほとんどないというのが正直なところです。また、学校現場が、生徒指導上の思春期にありがちな問題を抱えて困っているから、という理由がほとんどです。

思春期の体と心については、唯一保健体育の授業で扱う程度。子こどもたちが知りたいこと、身に付けておくべきことが教えられていない現実に唖然とします。

学校は、外部講師を招聘しての教育活動をよく行います。例えば、安全教育、メディアリテラシー教育、人権教育などです。

日ごろの学習内容にさらに専門家からの知識や経験を聞くことで、視野を広げたり、感動したりすることもあり、教員の知識では学ばせられない内容がほとんどです。教育現場では伝えられないことを、外部講師によって補うと言っていいでしょうか。

現場にいた頃は、事前学習もしないで、外部講師の話で終わり！ということが多々あり、教師の怠慢ではない？本当に子どもたちに聞かせる意味があるの？これでいいの？などと思ったものです。

今自身が、「思春期保健相談士」として学校訪問をするようになり、立場が変わると色々なことが見えてきます。

学校の雰囲気や教師集団のまとまり、生徒たちの特徴など…。

今まで講演を依頼されると、体育館に100人以上の生徒を集めての講義形式でした。しかし、それではなかなか子どもたちの反応や表情もわからず、一方通行の知識伝達に過ぎないような気がして、これでいいのかなと思うことがしばしばありました。

「性と生」は、人権教育です。自分の命を守る話でもあるので、短い時間での出会いではあるけれど、ちゃんと伝えたいと思うようになりました。ちょっとハードですが、最近は各クラスの教室に入っての学習に取り組んでいます。９クラスあれば、同じことを９回講演します。

同じ内容の学習とはいえ、やはりクラスのカラーがあり、担任の個性もあり、話の流れを変えることもしばしば。生徒たちの反応も少しずつ違います。小集団での学習は、教員時代を思い出す場面でもありますが、何といっても生徒たちのつぶやきや、質問にきちんと答えられるのが嬉しいです。

生徒たちとのふれあい

性教育の講演の前に、必ず生徒たちへの事前アンケートをお願いしています。質問は学年によって違いますが、「中学生になって変化したと思う体や心のこと」「人を好きになったことがあるか？」「男女問わずつき合いたいと思うことがあるか？」など、思

春期に起こるであろう事柄についてです。
　今までにかなりのデーターを集めていますが、学校ごとの目だった特徴はなく、今の中学生が思う事、感じる事は、一様に同じだなと感じています。

　アンケートの目的は、まず生徒たちに「これから性教育の学習をするよ！」という意識づけのため。次に、教師が生徒たちの実態を知り、考察する機会とすることです。記述式のアンケートでは、たまに問題が発覚し、対応したという報告を受けることもあります。
　生徒たちのアンケート結果は、必ず学習の中で使用し、生徒たちに返します。思春期にいる子どもたちは、他人のことがとても気になります。自分だけじゃないんだと受けとめ、安心できる材料になればと思っています。
　また、学習後には、事後アンケートと感想（質問や疑問）もお願いしています。
　事後アンケートは、私自身の講演内容の評価でもあり、今後に活かせるものとなります。担当の先生たちには、アンケート集計など大変な仕事をさせているなと理解していますが、教員と共に学ぶ学習でありたいと思う私のわがままでしょうか。
　その代り、生徒の質問には、自筆で返事を書いて送っています。
　短時間の学習で直接話せなかった生徒でも、アンケートなどからその思いが伝わってくるのですから不思議です。

つづく

「母のものがたり①」

高名　祐美

今年 3 月、私は 61 歳になった。母親が亡くなった年齢である。この年齢になって、母親が娘の私にしてくれたたくさんのことを思う。

小学生の頃は、妹とおそろいでオーダーメードの洋服を着せてくれた。帽子、靴はデパートで買ったおしゃれなもの。近所にそんないでたちをしている子供はいなかった。私の嫁入り道具には、箪笥に布団に家電にたくさんの着物。私がお寺に嫁ぐことになったために、ことさらに着物や道具に力をいれたようだ。孫が生まれれば 7 段飾りのひな人形や孫の着物、大きな滑り台などなど。それらは私の孫にも使わせてもらっている。子供に費やすお金は、惜しまない、そんな母だった。

私にも娘が二人いるが、母がしてくれたようにはできていない。亡くなって 24 年になるが、母には今でも頭が下がる。61 年という長くなかった人生の中で、母は、「母」として「祖母」として偉大だった。同じ年になって強くそう思う。

この節目に、母を主人公にしてジェノグラムを読み解き、母の家族のものがたりをたどろうと思う。

母は、養女だった。子供に恵まれなかった養父母が、父親の弟夫婦から、次女として生まれた娘を生後間もないころもらいうけた。母は昭和 11 年生まれ。養父は戦死したために、あまり想い出はないらしい。養父の死後、理髪店をしていた養母は、なじみの客と再婚した。中学生だった母は、養母の再婚を受け入れられなかった。新しい父親（私の祖父）には、全くなじめず、養母（私の祖母）のことも、再婚を許せなかった。

経済的には恵まれていた。理髪店を営む母と、会社員の父親。そして一人娘。いわゆる「お嬢様」の生活だったと母を良く知る人から聞いたことがある。母の選んだ高校は、地元ではなく、電車で 1 時間かかる金沢の私立高校だった。兄弟姉妹はなく、両親の実の子ではないと知った母がしたことは、「家から少しでも離れて過ごす」だった。当時は一般的でなかった習い事をし、市外の私立高校へ通学し、両親にお金を使わせる。家にいる時間をできるだけ短くし、自分の意のまま過ごす。両親との会話は少なく、外との境界がゆるい家庭で母は育った。

母は、実の両親ともつながっていた。私が子供の頃、お盆になると父親の実家と母親の実家に必ず里帰りしていた。家にも祖父母がいた。「どうして私には 3 組の祖父母がいるのだろう」と疑問を母に問いかけ

たところ、母が養女だったと知らされた。母は実の姉弟とも付き合いをしていたが、あまり仲はよくなかった。母のすぐ下の妹は、養女となってお嬢様暮らしをしている母のことを相当うらやんでいたらしい。母の実母は美人で、二人はよく似ていた。
高校卒業後、県職の公務員となった母は、自宅近くの保健所に勤務。そして、お見合いをして結婚、婿養子を迎えた。養父母とは同居、母 22 歳、父 25 歳だった。

＜結婚の決定にまつわるエピソード＞

母と父が銀婚式を迎えたころ。まだ独身だった私は、母に結婚を決めたいきさつを聴いたことがある。

私：お父さんとはお見合い結婚なんだよね。
母：そう。
私：初めて会ったとき、お父さんのことをどう思ったの？
母：お父さんは体育の先生だから、姿勢がすごくよかったのよ。座っている姿から、背が高い人だなあって。
私：お父さん、そんなに背は高くないよ。
母：そうなのよ。立ちあがったら、意外に背が低くてね。つまり、胴長だったのよ。
私：ふふ、だまされた？
母：そうね。でもね、顔はけっこう男前だった。
私：そうだね、若いころの写真、松田優作に似ているよね。髪の毛もふさふさして。
母：いまじゃ、剥げてしまったけどね。
私：結婚しようと決めたのは何が決めてだったの？
母：初めて金沢でデートして、お寿司をごちそうになってね。食べている途中に蠅が私のお寿司にとまったのよ、そうしたらね、『それは汚いから、食べるのをやめなさい。』って言って、また新しく注文してくれたのよ。かっこつけてたんだわね、きっと。（笑い）でも、それがなんか素敵でね。男の人って、こんなふうにしてくれるのか、この人、頼れそうって思ったのよね。
私：へぇ～。そんなことがあったんだ。お父さんかっこいいね。
母：結婚してから、同じようなことがあってね。その時は、その蠅を手で追い払っただけ。新しい料理は注文してくれなかったけど。そんなものなのよね、結婚は。

そんなエピソードがあったことを聴いて、ほほえましく思った。養父母と距離をおいてきた母が、父のどこに魅力を感じたのか少しわかったような気がした。母はかなりわがままで、ヒステリックなところがあったが、父はそれを包み込む優しい人だった。結婚してからは、何事も夫に相談し、夫の決断にゆだねていたように思う。
一方の父は、美人でスタイルの良い母に一目ぼれだったらしい。（母から聞いた話）父は、9 人姉兄の末っ子で、一人娘だった母のところに婿養子にくるのが前提だった。結婚に迷いはなかったらしい。
銀婚式のときに父に、母親の魅力を聴いてみた。

私：お父さん、お母さんと結婚して 25 年だね。お母さんと出会ったとき、どう思った？
父：まあ、きれいな人だなと。
私：そう。おしゃれだしね。

父：お母さんは美人だぞ。悪いけど、おまえら（私と妹）よりもな。
私：あ、そう。私たちにはお父さんの血が混じっているからね。
父：まあ、そういうことだ。お母さんはダンスも歌もうまかったな。
私：私たちもお母さんに似ればよかったか。私はダンスもできないし、歌もうまくないわ。
父：まあ、仕方ないな。
私：では、銀婚式を迎えるにあたって、感想を一言どうぞ。
父：忍耐とあきらめの 25 年だった。
私：えっ！そうだったのか・・・

父の「忍耐とあきらめの 25 年」とは、意外な言葉でもあり、納得できるところもあったりした。それは私の名づけのエピソードからも推察できる。

母の原家族は、血のつながらない人の集まりだった。母は結婚して、子供ができて初めて「自分と血のつながる家族」をもった。しかし、長女の私が生まれたとき、養父は「この子は、自分のこどもだ。おまえの腹を借りて生まれてきただけだ。だから自分が名前をつける」と主張した。どんな話し合いがあったのか知る由もないが、結局、私の名前は祖父がつけた。そう聞いている。そして祖父は私を溺愛した。2 年後、妹が生まれたときは、名前は父がつけた。祖父は、私だけに高価なものを買ってくれたり、旅行に連れて行ってくれたりと明らかに私だけを可愛がっていた。妹にはあまり関心を示さなかった。そういう祖父の態度を、母は受け入れ、父は私よりも妹に目をむけていたように思う。

そんな家族関係だった日々。母が作った家族の幸せな生活は、私が交通事故にあったことで大きく変化した。私は 5 歳。幼稚園の年長組だった。その日は幼稚園の運動会。早くでかけたくて仕方のない私と妹は、母親の支度を待ち切れずに外へ飛び出した。家からほんの１０数メートルのところで、向こう側に渡ろうとした私はダンプカーにはねられた。私のあとについてきた妹は、寸前でまぬがれ、家に走って戻ったらしい。母はそのときのことを、私にこう教えてくれた。

母：10 月 13 日、金曜日だった。奈々がひとりで走って戻ってきて。「姉ちゃんが。車に。ひかれてしまった！」と言った。3 歳の子が言う事だからと思ったけれど、「ひかれてしまった」という言い方に、大変なことが起きてしまったのだと察したわ・・・・　あんまり祐美が「はやく、ママ。はやく運動会に行こう」と言うから、「そんなに行きたいのなら、勝手に行きなさい！」と言ってしまったのよね・・・・
　病院にいったら、足が包帯でぐるぐる巻きにされて泣いている祐美がいた・・「ママ、ごめんなさい、ごめんなさい」って、泣きながら・・・　ママの方がごめんなさいだったのに・・・

医師からは右足を切断しますと説明があったそうだ。しかし、母は「なんとかして、足を切らないようにしてやってください。」と何度も何度も医師に頼んだ。その結

果、私は切断をまぬがれた。しかし、かなりひどい怪我だったようだ。その後は中学を卒業するまでの間に 27 回も手術を受けることになった。小学校・中学校の長い休みは、ほとんど手術のための入院だった。そして、必ず母は私に付き添い、個室の病室で母は寝泊まりした。夕方になると、母の食事をもって父親が面会にやってくる。祖父母にまかせられた妹は、寂しい日々を送っていた。退院後のリハビリなどの通院は、祖父がバイクに乗せて送迎してくれた。病院の帰りにチョコレートパフェやラーメンを食べさせてもらったりした。妹はそんな私をうらやんでいた。母は、相当自分を責め、つらい日々を過ごしていたのではないかと思う。事故にあった日の運動会のお弁当は、私のリクエストでサンドイッチだった。母は、その後、二度とサンドイッチをつくらなかった。

母は、私の記憶にある限り病弱だった。しかし、母親が早くに亡くなるとは思ったことはなかった。病気のために、入院することも多くなり、仕事は 47 歳で早期退職した。母の退職は、私の就職と入れ替わりだった。私が大学卒業し、地元の公立病院に MSW として就職できた私を、母はとても喜んでくれた。4 年間の京都での大学生活を終え、私は両親と祖父母と再び生活することになった。

その後、私も妹も嫁ぎ、私には娘が二人、妹には息子が二人でき、母は 4 人の孫の祖母になった。母は孫を溺愛した。母は血のつながった家族が増えたことがことさら嬉しかったようだ。

私が次女を出産し、仕事に復帰したあとだった。母から「最近、具合が悪い」と相談を受けた。「手がこんななのよ」と、指先が冷たく紫色になっていた。「レイノー症状」だった。それに加えて微熱・関節痛が続くというので、私が勤務する病院に受診をすすめた。すると、「膠原病（悪性関節リウマチ）」だと診断された。その時、母は医師からどんなふうに説明を聞いたのだろうか。私は自分の勤務する病院だったので、主治医から説明を聴くことができた。母は私に「岸　洋子と同じ病気やね」と語った。この病気のことで、母とあまり詳しい話をすることはなかった。少し病気の知識がある私は、不安になった。難病のひとつ。まずは医療費公費負担となる手続きを進め、「働きながら治療を受けている人もたくさんいるよ」と母に伝えた。それは私自身が「母の病気はたいしたことがない」と自分への暗示でもあった。

しかし、悪性関節リウマチと診断されてから、7 年間で 13 回入院。発熱、関節痛、骨折、薬剤性肝炎、循環障害による指の皮膚潰瘍と痛み、腸閉塞、間質性肺炎など次々と様々な症状に苦しみ、母は平成 10 年 7 月 14 日、61 歳で亡くなった。母の闘病生活については、次回書こうと思う。



原田牧場 Note Page 6

原 田　希

昔は、栄養があるからどんどん飲みなさいと言われていた牛乳ですが、健康食品というよりは、嗜好品として好きな方が適量取り入れれば良いという考え方に賛成です。北海道は日本の食料庫として農場の大型化、機械化が進み、コロナ渦の直前まで、増産する農場向けの助成金が目に見えて増えたと感じていました。需要と供給のバランスは国や乳業メーカーが見てくれているから、どんどん増産すればいい＝大きな借金をしても大丈夫。その感覚が普通なのがこわいなと思っていたところ、コロナ渦で需要が落ち込みました。ちょっと待てよ、とみんなが慎重になりだし、内心ほっとしています。昨今では、牛が反芻する際のげっぷから発生するメタンガスが、地球温暖化に大きく影響していると言われ、牛肉や牛乳を摂取しすぎないことがＳＤＧs につながるとのこと。みんなの地球を間借りして生活を営んでいる一酪農家としてできることを真剣に考える時代と感じます。生産量は暮らせる分でいいな。もし余剰ができたなら、地域の酪農を後継してくれる人の応援に使いたいな。森や川や生物を守る植樹活動のボランティア。近場は電気自動車で。牛のふん尿からエネルギーをつくり出すバイオマスプラントは、設備費がもう少し安くなれば考えてみたいです。

私たち夫婦の会話の98％は仕事の話です。今しばらくはふたりの牧場、いつかどちらかひとりになった時の牧場の話もしています。私の体質の事情で子どもを持たなかったからわが子を見るような気持ちで牛一頭一頭を見ています。搾乳牛は100頭、活発な牛の一群、何産もしているおばあちゃん牛や、体の小さい初産牛、気性がおとなしくていじめられがちな痩せた牛を集めた二群（ケア群）にわけ、平等にもりもり食べられる牛舎です。
牛社会には序列があります。初めて群に入ってきた牛は全員から角突きを挑まれます。優劣順序を作ることで無益な争いを減らす習性で、負けっぱなしの牛はいつも残りものしか食べられません。早く並んだものがちで搾乳室へ入り、搾り終わった牛から餌場へ行けるのですが、最下層の牛が先頭に並んでいたとしても、自分の順列がわかっているから一番には入ってこず、結局最後まで立ちつくして待つのです。当然体格も大きくなれませんし、毛艶も悪い。牛が入れ替わっても永遠に弱い立場の牛が存在する、それをどう救いあげるかが我々の大事な任務といえます。

今日も最下層の牛をなるべく早い順番で搾ってやろうと思い、強いトップ牛をかきわけて呼び入れたけれど、居心地悪そうに下を向いて喧嘩を売られないようにしていました。牛社会のルールに人間が入ってきても困るんだよ、と言わんばかりでしたが、毎日続けて良い餌が食べられれば体格は大きくなり、順位はあがります。草食動物は、懐きはしませんが、アイコンタクトはできるようになります。今、恐いやつおれへんから、入っておいでや、っていう私の合図をちゃんと見ているのです。そしてついに自力で早い順番で搾りに来たときは、おっ！やったやん！と私も目だけで笑います。収益性でいえば、強い体格のいい牛を優先しておけばいいのでしょうが、産まれてきたからには、どの牛にも能力を最大限発揮してもらい最後まで健康に活躍してもらいたいのです。

同じにしてはいけないと思いつつも、人間社会も似たよう、縮図を見るようだなと感じますね。大いばりで喧嘩を売り続けていたトップ牛が、勝手に足を滑らせてびっこになった時に、全員から返り打ちにあっていたのには苦笑いしました。トップはトップで意地があるんでしょう。おばあちゃん牛でも、若い衆、お先にどうぞ、と余裕ある牛がいると思えば、年功序列よ！若い者は下がりなさい。と気高い牛もいます。昔の牛に比べ最近の牛はのんびり屋が多い気がしますし、性格のカラーも同期ごとに違います。観察すればするほど面白いです。

そんなこんなで15年、気になる牛を見続けていたら、自分のまわりの人に対しても同じような感覚になっていました。定年を越えて働いてくれているパートさんが10年前とは動きが変わってきたとき、新しく入った若いスタッフが判断を迷っているとき、道外からのお嫁さん仲間がなんか元気ないなあというときも、軽い冗談（だいたいは、関西人お得意の自虐）を交えて声をかけたり、さりげなくサポートができるようにしたい。就農したての時には、我が事でいっぱいで気づかなった感覚。牛から教えられました。

毎日がんばって牛乳を生産しているので、どんどん飲んでください、とキャンペーンみたいなことは言いません。現場を見ずに食品の背景をイメージするのは至難の技だと思いますが、どの牧場にも、どの牛にも、命の成長ドラマがあり、健やかな牛からおいしい牛乳ができています。乳製品を味わう時に、少し想像していただけると嬉しいです。隣の世界への想像がハッピーの礎。私もいつも心にとどめています。

筆者　　原田　希　ハラダ ノゾミ

1973年 大阪府吹田市生まれ
2006年 酪農家との結婚を機に北海道標茶町へ移住 自身も酪農家に
2017年 北海道農業士に認定
北海道指導農業士の夫とともに、新規就農者の支援や
女性の農業者向けの勉強会のお世話係を担当

かけだ詩⑤

そだちと臨床研究会
川畑（かわばた）　隆（たかし）

講義の思い出

構造は仕組みで
機能は働き
システムはつながりで
絶対的とは
必ずそうだってこと
相対的とは
比べるものによって違うから
そうかもしれないけど
そうじゃないかもしれない
ってこと

警視庁は
東京都警をそう呼んでいて
警察庁は
全国の警察のトップ
保育所は厚生労働省の管轄
保育に欠ける子の児童福祉施設
幼稚園は文部科学省
幼児教育を行う教育機関
児童とは
日常的には小学生のことだけど
児童福祉法では
赤ちゃんから十八歳になるまでをいう
犯罪少年とは
男の子だけのことじゃなくて
女の子も含めてそう呼ぶ
以上
本日の「福祉心理学」
一般教養コーナーでした！

三点セット

雨が降っている
扇風機の弱の風を受け
肌布団を一枚かけて横になっている
窓の外を眺めながら聴こえるのは雨音だけ
それは幼い頃の静かな平日の午前

テレビの大相撲を横目で観ながら
おやつは蒸(ふ)かしたサツマイモ
それに高菜の漬物はうってつけ
お茶は熱くないのがいい
小学校から帰った平日の午後の定番

夏は蚊帳(かや)を吊った
吊る前に襖に幻燈を映したこともあった
両親の激しい喧嘩を
そのころ同居していた叔母が必死でとめていた
布団を頭から被りその様子を震えながら聴いた

鹿児島は台風銀座
父があちこちの窓に板を打ち付ける
夕食のおかずはサバ缶と野菜を煮込んだもの
たしか台風料理と呼んでいた
雨風が激しくなって近くの防空壕跡に避難した

その鹿児島で三〇センチの雪が降った
家の前の田んぼで四つ上の兄とはしゃいだ
足がしもやけになって痛痒く
温かい部屋で食べたおじやが最高にうまかった
先にも後にもそれだけの雪は降らなかった

雨が降っている
今も
あの頃も

蚊帳…蚊を防ぐために吊り下げて寝床を覆う網のようなもの
幻燈…スライド映写のようなもの　昔話をよく観た

汽車が走っていた

引っ越しの日は嬉しかったのだろう
はしゃいで玄関の上り口から土間に落ちた
鹿児島から北九州の小倉へ
小学三年生に上がる前の春休み

街の外れにあった借家の縁側に座ると
日豊線の汽車が手の届くようなところで
太い汽笛に大きな図体をくねらせた
縁側の隅にたしか便所があった

母とよく汽車に乗って買い出しに出かけた
「腰ぎんちゃく」と昔から呼ばれていた
機関車の吐く煙が入らないように
トンネルの前で必ず窓を閉めた

鹿児島行きの夜行列車は空席ばかり

縁側からの観察でそれがわかる
でも乗ってわかった　みんな横になっていた
夏休みの家族での鹿児島帰省のハプニング

西鹿児島駅近くの市場の魚屋の
ハエ除け線香の入った熱い缶を掴んでしまった
アカンベエの舌を四つ上の兄が掌で覆ってくれた
後々その兄が就職祝いにコートを買ってくれた

六つ上の兄が背番号十四で甲子園に出た
父と次兄と三人で夜行列車で西宮まで応援に行った
背中の十四番はベンチ前の円陣で一番目立っていた
はじめての都会は父がいても心細く落ち着かなかった

大学に入り京都の八瀬(やせ)に下宿した
寮生活のような賑やかな時間の隙間で
川の流れる音ばかりが耳にへばりついた
「汽車が走らない」という歌を作った

四畳半

八瀬から修学院に下宿をかわった
母が決めた賄(まかない)付きの下宿から脱出した
うまいラーメン屋台が九時に店を出した
行きつけの一福食堂の夕食を我慢して九時を待った

お酒を飲み始めた　たくさん飲んだ
朝目覚めると自分の部屋の布団に寝ている
でも昨夜の記憶がない
黒いジャケットが赤茶色に汚れている

記憶をたどると　夢か現実か
タクシーの運転手さんから赤土に放り出される光景
それに残金から昨夜使った金額を知り頭を抱えた
二合炊きの炊飯器を買い食費を節約することにした

きょうは鰹節　きょうは梅干し　きょうは納豆
何といったって　炊き立ての白飯だけでご馳走だった
そんな生活を続けていると目の調子がちょっとおかしい
夕方になるとかすむのだ

夏休みに帰省し母に告げると
総合病院の眼科に連れて行かれた　すぐに内科にまわされ
ビタミンE不足による「鳥目」だと診断された
「哀れだ」と母が涙を浮かべた

哀れだといいながら母から送られてくるのは素麺ばかり
電熱器のある二階の部屋と一階の炊事場を往ったり復たり
ぬるい素麺でも早く食べたくて駆け上がる階段で躓いた
埃だらけの階段に散らばった麺をかき集める哀れ

殺風景な四畳半　近所の店のリポビタンDののぼりが飾った

一合飯のご飯茶碗は学食と同じものだった
その頃でも立派な犯罪
破目をはずしたユーチューバーの気持ちはわかる

「四畳半なんとか」などの日活ロマンポルノの全盛期
一乗寺の京一会館で午前零時からの女優たちの舞台挨拶
ごった返す場内の最後列で友だちと代り番この肩車と歓声
あのエネルギーがなつかしい

四十年以上が過ぎた

賄…食事が出されること
鳥目…夜盲症とも呼んだ

綱渡り～オンライン

虐待者はいかにも悪者（わるもの）
だから犯罪防止のように虐待防止
でも虐待をしない良者（よいもの）と
悪者の境目はどこにある
人生と子育ての大変さは
保護者のもっている運に左右される

虐待防止の速効で目に見える成果には
虐待する保護者と子どもとの分離が一番
でも分離して日常生活が取り上げられると
親子関係が積みあがりにくい
だから分離せずに家族支援
でもそれでは虐待が起きない保証はない

つまり綱渡りのようなもの
綱から落ちてしまうかもしれない
落ちたら虐待防止の失敗
最初から綱に乗らないことにもなりかねない
家族支援をとおして虐待を防止することからの撤退
それでいいのか

今はこの綱渡りを続け
綱から落ちない精度をどう高めるか
国民から励まされるべきはそこだ

原因

今回の少年事件の原因ですか
やはり子育ての失敗でしょうね

家族の問題が根本にあると思います

今回の少年事件の原因ですか
近所でも評判のよい家族らしいですね
少年の心の闇と申しましょうか

心の闇ってなんでしょう
：闇だから闇なんですよ
コメンテイターの苦し紛れの因果論

よい家族ってあるんだろうか
わるい家族ってあるんだろうか
家族はそれぞれじゃないんだろうか

うまくいかないことをいっぱい抱えた家族
うまくいかないことがそんなにいっぱいではない家族
分けたければそういう分け方もある

よいわるいと偉そうに品定めしている暇があったら
うまくいかないことの少しでもの援助を志せる
そこが味噌の分け方

でも原因がわからないと指導のしようがないでしょう
そうですよねと答えてしまいそうなフレーズ
原因を決めてしまいたいのは誰のどんなニードか

うまくいかないことばかりで駄目な私たち家族
いや　こんなふうにうまくいったことってありましたよね
粗(あら)よりもうまくいく芽をどう見つけるか

⑤了　二〇二〇年八月十五日

大学生時代に書いた歌詞

汽車が走らない

声をかけたら　立ち止まり振り返る
見知らぬその顔に　微笑みがよぎる
ほんのこの前までは　見慣れた人たちの中
新しい　懐かしい　その微笑みだった
だけど　夜になって　耳をすましてみるけれども
そこには　自分のつぶやきばかり
人が来ない　人が来ない
目の前に浮かぶから　手招きしても
人が来ない　想い出の

ドアを開けたら　少し暗い灯り
さっきの茶碗が　こたつの上にひとつ
ほんのこの前までの　賑やかな時間が
しだいに遠ざかってしまうが　また浮き上がる
窓に寄り添い　耳をすましてみるけれども
そこには　川の流れる音ばかり
汽車が走らない　汽車が走らない
ひと眠りして　目が覚めても
汽車が走らない　やっぱり

★https://fire.st/N5m2GHN に歌があります。

ブルーグレーの肖像

当事者から見たHSPの日常

天川　浩

第五回　The Fun and the Tired

皆さん、好奇心は強い方でしょうか？好奇心は生活の上で適度な刺激をあたえてくれる、いわば人生のスパイスのような存在です。子供は、好奇心を通して、知的欲求を満たし、これが知性の獲得や、精神的な成長につながっていきます。

好奇心が存在しているため、人類は自らの生活圏域を拡大することが可能になり、新たな食料の確保をすることができ、今までになかった問題の解決法を発見し、生活水準や安全性を向上させることを可能にしてきました。あるものは科学を進歩させ、あるものは病気の治療法を発見し、あるものは宇宙に生命体の存在する可能性を追及している。

適度な刺激は、生活にメリハリをつけてくれる。刺激がないと交感神経の働きが鈍り、自律神経系が乱れ、心身のリズムを失っていく。いわば、好奇心や刺激は人間にとって必要なものである。

そして、あらゆる人類に好奇心があり、私が今回までに述べてきた、奇異なる性質・HSP勢も好奇心を持ち合わせていることだろう。

しかし、HSP気質というのは、繊細で、慎重すぎる性質であり、あまり刺激をうけることに疲れてしまう厄介な性質であると、前回までに少しお話してきました。多くのHSPの人間が刺激を回避しようとする場合が多いのですが、それが当てはまらないHSPのタイプがあることがわかってきました。

High Sensation Seeking、『刺激を多いに求める者』と呼ばれるHSP性質があることがわかってきました。頭文字をとって、HSSと呼ばれています。このタイプのHSPの人を『HSS型HSP』や『HSS/HSP』などと表記され、分類されています。(どうでも良いことですが、研究者は分類することが好きなので、このような有様になっております、正直めんどくさい)

かく言う私も、このHSS/HSPであります。では、このHSSの性質を付与されたHSPの人はどのような特徴があるのでしょうか？

HSPは、内向的で、平穏な日常を望んでいます。だいたい、驚いたり、不安になったりしやすいため、著しい刺激はあまり求めにいきません。強い刺激の後に、気持ちが落ち着かなくなったり、元に戻すのに時間を要したりするからです。穏やかに、無事に、その日を終えるのに、強い刺激は必要ありません。できれば避けて通りたいところです。

しかし、HSSのサブ気質のサブ気質を持っている者は、積極的に刺激を求めていきます。刺激の探し方は人それぞれですが、人によっては、エクストリームスポーツ(スケートボードやスカイダイビングなど危険を伴うスポーツの総称)に興じたり、ショッキングな映像の出てくるサスペンス映画やホラー映画などの映像を好んで見る者もいる。休日に街中へ出かけて買い物などをして一日中、外出する者もいる。人と積極的に話をすることを好む者もいる。

そして彼らに対する、他社の印象は「活発で、エネルギッシュ、社交的な人」といった言葉で表される。しかし、彼らもまたHSP気質の人間なのだ。元々、刺激に対して過敏であり、先の先を見て不安を取り除こうと慎重に行動するタイプの人間であることがベースとしてある。

結果、どうなるのか？

まず、強い刺激を自ら受けるため、非常に疲れる。自律神経が乱れて、なかなか眠れなくなる。それは、HSP気質であるから当然である。怖いシーンが頭から離れない。映画の登場人物に感情移入し過ぎて、追体験のような状態になり放心状態になる。これも不安が強いHSP気質であれば、仕方のないことである。人に投げかけた言葉に対して、「あの言葉でよかったのだろうか？…」といつまでもクヨクヨと思い悩む。これも、繊細過ぎる性格ゆえに、ありがちなことである。

このように、刺激は求めるが、それに対する反動が大きいのがHSS型HSP気質の特徴なのである。いわば、相反する気質が相乗りしているので、矛盾した行動になっているのである。この状態は、よく「アクセルを踏みながら、ブレーキを踏んでいる状態」と表現される。

興味はあるが、その興味を追求していけばいくほど、刺激を晒され、疲労していく。その刺激はは、自らが求めて辿り着いたものなのに…。

このように、HSPには、矛盾した側面があるということを知っておいて頂きたい。

～HSPは可哀想なのか？～

少しこれを見てください。

刺激は求めるが ⇔ 外に出ると疲れる

やらなきゃわからないと思うが ⇔ いろいろ想像すると踏み出せない

やる気満々で物事に取り組んでも ⇔ 飽きやすくゴールにたどり着けない

はたから見ると元気で外向的で社交的 ⇔ 本当は違う

冷静に見えるが ⇔ じつはイライラドキドキひやひやしている

人とすぐに仲良くなるが ⇔ 少しすると距離ができる

ハイテンションなのに ⇔ 小さな発言にクヨクヨ悩む

自虐ネタを披露するのに ⇔ いじられると傷つく

大胆なくせに ⇔ 小さなミスを後悔する

好奇心が強いけど ⇔ 警戒心も非常に強い

自己肯定感は低いが ⇔ 心のどこかに自信もある

（※心理カウンセラーの時田氏が代表を務める「HSP／HSS LABO」サイトより抜粋し要約）

ボロカス…やと、私は思いますが…

もし、仮にHSS型HSPのことを全く知らない人がこれを見たら、きっと

「可哀想に…めんどくさい…ハンディキャップなのね…」

と誰もが思うでしょう。

それが、今現在の世界中のHSPに対する意識なのです。未知の性質に対して、「否定的な見方」が一般的なのです。

古代シルクロード交易の時代に、ローマから来た商人が、最果ての唐の住人を目の当たりにして思ったことは

「本当に、我々と同じ人間なのか？」と…。

髪の色、肌の色、目の細さ、どれをとっても、自分達とはかけ離れたものであり、それは驚愕すべき事実でありました。

一般の人間にすれば、(一般の人ってひどい表現ですよね、自分でも、どうかと思いますが…)HSPはシルクロードの果ての住人ですか？私は、あなた達と同じ、ソリッドな地上に暮らしている人間のつもりですよ。しかし、一般的な見解の人間が、HSPを言葉にしてみろ、と言われたら、こんな結果にしかなりません。

‘ HSPはマイナス要因のようだ’

しかし、考えて見れば、当然のことかもしれません理解できないものは、マイナスイメージになりやすいものなのですから。

しかし、そろそろ、その正常性バイアスとも、別れを告げなければならない時代になってきていませんか？

そもそも、必要なければ、何故、HSPは存在するのでしょう？

しかも、何故、全体の20%も存在するのでしょう？

もしも、一般の人(またもや、この表現だが…)のイメージ通りに、常に困難に苛まれ、弱く、劣った存在なら、どうして自然淘汰されて絶滅しなかったのでしょうか？

負け惜しみではありません。HSPの提唱者であるエレイン・アーロン博士によると、歴史的に功績のあった人物の行動や性格などを紐といてみると、HSPの特徴があった人物がいるそうです。

ジョージ・ワシントン

彼は桜の気を切り倒したことを正直に告げたという「フィクション」が創作されるほどの馬鹿正直な人物であったことで有名です。きっと、嘘をつき通すことができず、問題が大事になってきたので、敏感に空気を読み取り、その雰囲気の悪さに耐えかねて、先生に桜の木を切ったことを告白したのでしょう。それならわかります。十分にHSP気質であると言えます。

エイブラハム・リンカーン

彼はアーロン博士によると、HSS型HSPだったのではないかと推測されています。積極的に南北戦争の終結に尽力し、奴隷解放を実現し、国家分裂の危機を救ったことを思えば、それもうなづけます。奴隷と言う痛ましい身分が存在することすら彼には耐えられないことだったでしょうし、戦争、しかも国内でアメリカ国民同士が殺し合うものとなれば、HSPの彼には最も憂慮する事態だったのでしょう。HSSの要素により、積極的に行動し、世の中に重くのしかかる、雰囲気の悪さを、早く払拭して、ゆっくりと穏やかに生活したかったのでしょう。

二人しか出さずに大きな顔をするなと言いたいでしょうが、この二人のように、国家の運営、人民の運命を決定する事案でも、プレッシャーを感じながらも、それに打ち勝ち、任務を遂行する能力をHSPの人間は持っていることがお分かり頂けるのではないでしょうか。

非常に手前味噌な内容になってしまいましたが、次回は、この手前味噌の部分をさらに掘り下げて、これからの時代に非常に重要な役割を担う(筆者乱心しているのか？大きくでたな)HSPの能力、可能性について論じていきたいと思います。

応援、母ちゃん！

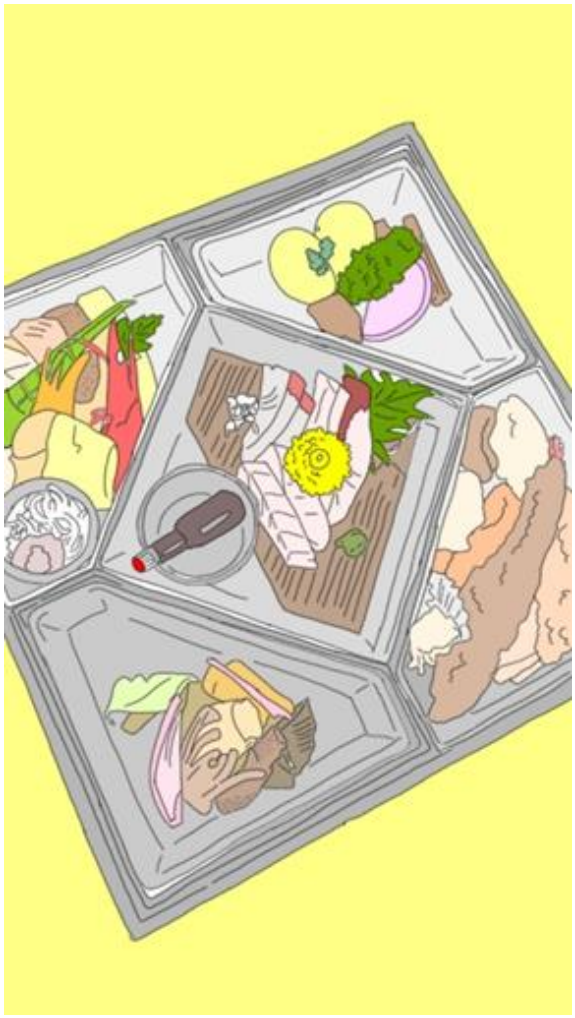
～子育てしながらはたらく母親たちの日常～

5

－　産休・出産編　－

たまむら　ふみ

玉村　文



わたしは 2021 年 3 月末までの勤務を終え、4 月から産休に入りました。産休前は、仕事と子育ての両立と妊婦生活を同時に送っていて、目まぐるしい日々でした。そのため、それまで手がまわっていなかった家事に着手することに。産休を有意義に使おうと、あれもしたいこれもしたいとリストを作成しました。と言っても「カーテンを洗う」「パンづくりをする」「映画館に行く」「美容院に行く」など、一つ一つはそんなに大きなことではありませんそして、このリストを消化する産休がスタートしました。

ところで、出産は予定日というものが決められます。これは最終月経開始日を 0 週 0 日として、40 周目つまり 280 日目が出産予定日となっています。予定日はあくまで目安ですが、妊娠 37 週～41 週の間の 5 週間の間にお産があることを「正期産」といいます。この時期に生まれると、

赤ちゃんは身体の各機能が十分に成熟し、出産後の母体の外での生活にもスムーズに適応できると言われています。この「正期産」でも 5 週間の期間があり、出産日を正確に予測することは困難です。

一方で、出産日を事前に決める「計画出産」というお産のやり方もあります。わたしは、第一子を帝王切開で出産したため、第二子も帝王切開で出産することになりました。そのため、出産日を産院と自分の希望で決めることができる、計画出産をすることになりました。コロナ禍ということもあり、事前に PCR 検査を求められていたので、検査のスケジュールも組み込んだ出産計画を立てました。

計画出産を立てる。

コロナ禍での出産で、わたしの場合は、第二子は予定帝王切開と早くから決まっていました。出産での入院中、2 歳前の上の子のお世話をどうするか、夫の仕事の都合や義理の母に手伝いに来てもらう調整などを事前に夫と相談し、かなり早い段階で出産、入院計画を立てていました。保育園が休みになるゴールデンウィークを有効活用するために、5 月 1 日に出産、ゴールデンウィーク中は入院し、その間に義母が父子 2 人の生活をサポートするという計画です。2 歳にも満たない息子は、初めて母親であるわたしと一週間離れて過ごすことになる。それでも安定して過ごせること、夫が仕事と両立できることを最優先で考えました。

ですので、まずは入院期間を確定し、そこから出産日を決定しました。出産日が決まると、PCR 検査をいつするのかを決めます。帝王切開出術のため夫が立ち会うことになり、夫も検査を済ませておく必要がありました。帝王切開手術日、つまり出産日の 2 週間前に夫のコロナ抗原検査、一週間前にわたしの PCR 検査をしておくように言われていました。ちなみに、妊婦の PCR 検査費用は自治体からの負担があり、検査費用の 2 万円は立て替えておいて後日請求し払い戻しされるという仕組みになっていました。

また、帝王切開手術にかかる保険医療については、健康保険を使えます。妊婦健診や自然分娩の場合は、自由診療となりますが、手術は違います。健康保険を使って自己負担は 3 割になります。しかしながら、手術は高額なので、自己負担の限度額までを支払うという高額医療費制度を活用して限度額適用認定証の申請をしました。限度額適用認定証は事前に協会けんぽで申請し交付してもらうことで、退院の際の諸々の費用の精算の際に、医療費は限度額以上の請求はありません。

事前に計画を立て、限度額認定証の申請も済ませ、あとは出産日までは計画的に検査を受けたり、家事を済ませたり、自分のやりたいことに時間を使うだけです。

計画通りには行かない出産。

計画を立てると出産日までに「産休中にやりたいことリスト」を消化していきました。カーテンを洗濯したり、パンづくりをしたり。産後１ヶ月は出かけられないので、散髪は出産の直前のほうが良いと判断し、美容院の予約だけしておきました。

しかし、結果的には産休入りしてたった３週間で出産することになりました。映画館に行くこと、美容院に行くことは叶わず。計画した日よりも一週間以上早い日に、緊急帝王切開にて出産することになってしまいました。もっと安静にしておけばよかったと、出産当日は自分の行動を後悔。PCR 検査の結果がわかる前に、手術は始まってしまいました。

一人目のときは出産予定日より遅れて、産休は８週間。かなりゆっくりできたのに、二人目は産休は３週間。出産は毎回違う、つまり前回と同じ経過をたどるとは限らないということを、身を以て感じる体験でした。

出産経過、備忘録。

４月 22 日（木）の朝、目覚めると出血していました。痛みはありませんでしたが、夜中にお腹の張りで何度か目覚めることが続いていました。検診の予定は先でしたが、出血が気になりその日の午前中の診察に行くことにしました。その前に、子どもを保育園に送り洗濯をし、読み終えた本を整理して処分する算段を整えたりと、まさかその日に出産になるとは思わずに「産休中にやりたいことリスト」を消化していました。緊急性が高いとは思わずに、診察も順番待ち。そんな状態で、医師から「このままでは危ないので、今日手術します」「緊急の帝王切開のために、医師が集まらず他の病院に転院することになるかもしれない」と言われました。動揺しました。そして、もっと安静にしておけばよかったと後悔しました。

急な計画変更にどうしようかと思考しているわたしを横目に、院長先生が LINE 電話をかけていました。「今日、急遽帝王切開をしたいのですが、来られませんか？」と医師集めをしてくれているのです。スピーカーがオンになっており、「あー、今日は無理ですね」などと相手の医師の返答も聞こえてきます。看護師さんが「丸聞こえでごめんなさいね」と謝ってくれました。医療機関にかかると、自分対医師、自分対看護師など１対１のやりとりをすることばかりだったので、医師同士のやりとりはとても新鮮で興味深いものです。医師同士のやりとりは、後の帝王切開手術中も聞くことができました。

結局、院長先生が医師を集めてくれ、無事に手術ができる体制が整いました。それを聞いてから、入院準備のため荷物

を取りに自宅に戻りました。一週間分の入院グッズを整えて、実母に車で送ってもらいながらも、出産が早まってしまうのは、日々慌ただしくしてしまった自分の行動のせいかもしれないと、後悔の念を消すことができませんでした。

帝王切開手術の場合、絶飲食になります。ですので、この日はいったん自宅に荷物を取りに帰ったときもお昼ごはんは食べず、午後は点滴をしてベッドで安静にするようにいわれました。手術は 20：30 から。それまで個室で点滴をしながら TV を見て、身内や親しい友人などに連絡をして過ごしました。その間もずっと上の子の心配ばかりをしていた記憶があります。

どんなふうに帝王切開手術は始まるのでしょう。わたしの場合は、手術着に着替え点滴をした状態で、歩いて手術室に向かいます。そして、手術台の上に登ると、看護師たちが手術着を脱がせ手足を固定するなど準備をします。寝かされた視界には、蜂の巣のようなライトが光っています。丸いライトを取り囲むステンレスの部分に反射して、自分の身体がぼんやりと見えます。レーシック手術で近眼を矯正し、視力を回復させたわたし目には、手術中の自分のお腹の様子をぼんやりとですが見ることができました。気分はブラックジャックのようで、自分のお腹の中を見られるなんてもうないかもしれないと、密かに興奮しました。

もう一つ興味深かったのは、医師たちのやりとりです。帝王切開手術は部分麻酔なので、手術中の様子は覚えています。看護師も交えて、「麻酔がうまくいった」や「テープはもっと丁寧に貼って」という手術に関係するやりとりだけではなく、医師たちの「一日一食にすると調子が良い」など自身の健康の話や、「うちの息子は△△病院にいて帰ってこない」など、家族の話をされていました。いわゆる雑談的な会話で、おもわずわたしも会話に加わりたくなるくらい、穏やかなやりとりがなされていました。

出産自体は、手術開始 15 分ほどでお腹から赤ちゃんを取り出して、そのままわたしに見せてくれました。すぐに泣いてくれたのと、早めに生まれたにしては 2800g ほど体重があったと伝えてもらえたため、安心しました。赤ちゃんの処置は別室で、手術はその後 2 時間以上続きます。その間、医師たちはお話しながら、わたしにも声をかけながら作業をされていました。穏やかな雰囲気とは異なり、実際にはなかなか出血が止まらずに輸血され、わたし自身も手術の後半は寒くてガタガタ震えていました。「寒いです」というと、手術室を温めてくれました。手術が終わり、ストレッチャーで個室に運ばれてベッドに寝かされたあとも、電気毛布などで身体を温めてもらいました。結局、1500ml ほど出血があり、出産時の出血量としては多量に分類されました。術後は輸血や、その後の貧血への処置をしてもらい、一日一日できることが増えていき身体は回復していきました。

入院中の過ごし方、備忘録。

コロナ禍での入院中は面会禁止でした。食事は個室に運ばれて個食になるなど、できるだけ他者と接触しないようになっていました。2019 年に一人目を出産したときは、産院の食堂で他の方たちと一緒に食事をしていましたが、今回は、個室食です。また PCR 検査では陰性であったにもかかわらず、看護師たちが個室に入室されるときは、わたし自身もマスク着用を求められました。授乳は授乳室で他の母親と一緒にしていましたが、その時ももちろんマスク着用です。

唯一、他の母親たちと交流ができたのが授乳室でした。わたしが入院中は、たまたま経産婦ばかりで､3 人目の出産をされた方や 4 人目という方もいて、交流はとても楽しかったです。授乳指導をする助産師さんたちも、他のお産が始まると授乳室から出て行き、「経験者ばかりだから、あとは自分たちでやってね」と安心感があったようです。授乳については上の子での経験が活きました。マッサージのやり方やこのくらいならまだ大丈夫、などと感覚的に見通しがもてるのです。

上の子の様子は、毎日夫から LINE で聞いていました。上の子なりに、母親がいない状況でも頑張って過ごしている様子でしたが、不安定になるときもあったようです。わたしも心配で涙が出ることもありました。退院したら寝られなくなると、夜は赤ちゃんを預けて寝るようにしていましたが、上の子が気になって早く退院したいという気持ちでいました。初めての父子生活で、夫も仕事を休み家事をすべて担うなど、相当頑張っていました。

退院して

退院の朝に、赤ちゃんの授乳や沐浴、医師のチェックを済ませます。母親であるわたしも退院前の内診を経て、個室の部屋の片付けを済ませ、外着に着替えます。入院中はずっとパジャマ姿で一歩も外に出ずに過ごしていたのに、久しぶりに化粧をして着替えて外に出ると、なんだか娑婆に帰ってきたなというような気持ちになります。気分がしゃんとします。

自宅に戻ると、上の子はちょうどお昼ごはんを食べていました。でも、わたしの姿を見ると驚いた表情のあと、泣き出しました。わたしも胸が詰まって上の子を抱きしめました。一週間ぶりの抱っこは、新生児の 3 キロ弱とは違って、ずっしりとした重さを感じました。

とうとう家族 4 人の生活が始まります。責任感とワクワクと疲労感などいろんな感情が押し寄せてきました。

HITOKOMART No.5

篠原ユキオ

1948年　東大阪市生まれ
京都教育大美術科卒
京都精華大学名誉教授
（公社）日本漫画家協会参与
FECO JAPAN 会長

タイタニックは船の能力の過信とわずかな油断から歴史的な大惨事に繋がった。
タイタニック映画には、幾つもの悲しい物語が描かれてきたが"あらためて言うまでもなくそこには乗船していた者全員の物語がある。
沈み行く船とともに海に沈んだ人たちにはそれを伝える事も出来なかった。

『お・も・て・な・し』や『復興』を旗印にスタートした東京五輪もコロナのために沈没寸前に見える。
タイタニック号の最期には多くの人たちが沈み行く船に残り、船と運命を共にしたのだが…東京都にもお国にもその覚悟はあるのだろうか。
私には、船が沈んでも自分だけ助かろうと目論む連中が沈没直前まで手招きをしているように見える。

船上の招き猫



A-2　変形



A-1

すくう！

宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』の中にサソリの灯の話がある。小さな虫を食べて生きてきたサソリがイタチに追われ、井戸に落ちてしまう話だ。井戸の中で溺れながら、こんな事ならイタチに食べられた方が良かったのにとサソリは悔やむのである。そしてサソリは神に願い、死んだ後、暗い宇宙を照らす赤い光となって輝き続ける。生あるものに『死』は必ず訪れる。

天寿を全うする幸せな一生もあるが、与えられた寿命とは関係なく、死が突然訪れることも多い。

1コマ漫画の定番に『ビル火災マンガ』がある。

ビルの窓から助けを求める避難者と地上で大きく布を広げて飛び降りる者を受け止めようとする消防隊の図である。

飛び降りるのが何者か、受け手はどんな人たちか、受ける道具は何なのか…

いずれにしても生きるか死ぬかの絶対絶命的な状況であることに変わりはなく、この緊張感の中に漫画家はいろんな新しい仕掛けを組み込んで救って見せる。

昔、桂枝雀さんが語っていた『緊張と緩和』の法則がここにもある。



王の間

A-1 変形

お辞儀



A-2 変形

躙口

（にじりぐち）

生まれて初めての海外旅行は45歳の時、エジプトだった。仕事でアブシンベル神殿を舞台にしたイラストを描く事になってその資料を眺めているうちに無性にピラミッドの中を見てみたいと思ったのだ。漫画家仲間を誘って1週間ほどのエジプトツアーに参加した。

そして入ったピラミッド。

王の間に続く大回廊の巨大さには圧倒されたが、王の間は予想に反してガランとした狭い空間に飾りの無い石棺が、ポツンと置かれているだけのものだった。

見上げるような大回廊の先にある小部屋には背を小さくかがめないと入る事が出来なかったので、まるで茶室の躙り口のようだと思ったものだ。

今はそこが王のミイラが納められた場所ではなかったという説に変わっているようだが当時はいかなる者も頭を下げて入るというのも同じだなと勝手に納得していた。



A-1

「お〜い、ハズキルーペ！」

眼鏡型拡大鏡

眼鏡をお尻の下に敷いても大丈夫！と叫ぶコマーシャルで大ブレークしたハズキルーペ。最近は全くテレビで見かけないがこれは最初からのメーカーのプラン通りだったらしい。期間を決めて集中的にCM展開。いささか下品な表現も渡辺謙らの好感度で何とか救われてよく売れた。眼鏡の上からかける事にストレスを感じて最近は使うことは減ったが、確かに目の衰えた中高年には便利な商品である。残念なのは価格ほどではない安っぽさとデザインだろう。世の一流眼鏡ブランドがこの商品を手掛けてくれないかナアと真剣に思っているのである。

小学校におけるキャリア教育:
「役割」を介したオートエスノグラフィックな発達

土元哲平(立命館大学 OIC 総合研究機構)

1. はじめに

小学校でのキャリア教育は、現場での充実や研究が期待されている。2017年改訂の小学校、中学校「学習指導要領」において、キャリア教育の充実が初めて明記され、2020年4月からポートフォリオ教材「キャリア・パスポート」の全国導入がなされるなど、注目を集めている。本稿では、「役割」という観点から小学校のキャリア教育の目標を整理する。そして、子どものキャリア発達を理解しより豊かにしていくために、「役割」を介したオートエスノグラフィックな発達という視点を提案する。

2. キャリア教育と役割経験

キャリア教育の大家であるスーパーによれば、キャリアは「生涯の過程を通じて、ある人によって演じられるいくつかの役割の組み合わせと連続」(Super, 1980)と定義される。ここでの「役割」には、子ども、生徒または学生、余暇人、市民、労働者、配偶者、主婦、親、年金受給者のように、ほとんどの人々によって共有されている、連想される期待をともなうポジションもあれば、犯罪者、改革者、恋人のようなあまり一般的でない役割が含まれる(Super, 1980)。本稿では、「役割」という概念から見たキャリア教育について考えていきたい。

スーパーによる「キャリア」の定義は、キャリア教育の分野ではかなり有名であり、文部科学省の定義にも、その影響が色濃く表れている。例えば、中教審(2011)の答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」(在り方答申)では、キャリアを次のように説明している。

> *人は、他者や社会とのかかわりの中で、職業人、家庭人、地域社会の一員等、様々な役割を担いながら生きている。これらの役割は、生涯という時間の流れの中で変化しつつ積み重なり、つながっていくものである。……人はこれらを含めた様々な役割の関係や価値を自ら判断し、取捨選択や創造を重ねながら取り組んでいる。……このように、人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ねが、「キャリア」の意味するところである。……学校教育では、社会人、職業人として自立していくために必要な基盤となる能力や態度を育成することを通じて、一人一人の発達を促していくことが必要である。(中教審, 2011)*

「役割」という用語からキャリアを考えると、「職業体験学習」「進学指導」だけがキャリア教育ではない、ということが明確になる。「就職」「進学」はキャリア発達にとっても重要な契機となり得るが、キャリア発達は必ずしもそうしたフォーマルな出来事のみがきっかけとなるわけではない。私たちは生涯にわたり、職業を含む様々な役割を経験し、積み重ね、成長していく。そうした役割経験の連続とその成長がキャリア発達にとって重要なのである。

3. 進路指導とキャリア教育

ここで、「進路指導」と「キャリア教育」との違いについて言及することには意義があるだろう。なぜなら、「役割」という概念が、両者の違いを明確にするからである。「進路指導」は、本来は生徒の生き方や自己実現を目指すものとして提起されたものであり、職業的な側面も強調するものの、その根底となる理念は、現在の「キャリア教育」に通じている。

> 進路指導とは、生徒の一人ひとりが、自分の将来の生き方への関心を深め、自分の能力・適性等の発見と開発に努め、進路の世界への知見を広くかつ深いものとし、やがて自分の将来への展望を持ち、進路の選択・計画をし、卒業後の生活によりよく適応し、社会的・職業的自己実現を達成していくことに必要な、生徒の自己指導能力の伸長を目指す、教師の計画的、組織的、継続的な指導・援助の過程（である。）
>
> （文部省, 1983; 文部科学省, 2011 より重引）

しかし、一方で「進路指導」という用語をめぐる問題もあった。それは、「職業指導」と同様に、「出口指導」に終始する現状があったこと、「進路指導は中学校や高等学校で行うもの」とされ、幼稚園から大学までの接続ができなかったことなどである(文部科学省, 2011)。こうした背景の中で、中央教育審議会（1999)の答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」(接続答申)において「キャリア教育」が登場した。この答申では、学校と社会および学校間の円滑な接続を図るための「キャリア教育」(望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育)を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要があるとの提言がなされた(中央教育審議会, 1999)。つまり、本来の「進路指導」の理念を引き継ぐ形で、児童生徒が自己理解を深め、将来の展望や他者・社会との関わりを身に着けるための「キャリア教育」が提唱されたのである。

4. 小学校でのキャリア教育と役割経験

「キャリア教育」と「進路指導」との大きな違いは、キャリア教育では小学校がその対象に含まれるという点である。新たに「キャリア教育」という言葉を用いたのは、一般的な意味での「進路指導」という用語は小学校になじまないが、小学校なら本来的な「進路指導」ができるという思いからだと言える(三村, 2004)。つまり、中学校や高校を中心に行われる卒業前の進路選択支援だけを指す狭義の「進路指導」のイメージではなく、職業観や勤労観の涵養、自己や社会への関心、将来の自己イメージの形成といった諸側面を学校教育に取り戻すことが、小学校をその対象に含むことによって強調されたのである。

それでは、小学校ではどのようなキャリア教育を目指しているのだろうか。表1に、文部科学省(2012)をもとに、小学校から高等学校までのキャリア教育の目標を整理した。小学校では、「自己及び他者への積極的関心の形成・発展」「身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上」「夢や希望，憧れる自己イメージの獲得」「勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の形成」という目標が示されている。中学校や高等学校でのキャリア教育の目標と比べると、実際的な進路選択というよりは自己や他者、身の回りの仕事や環境との関係性の構築により焦点が当てられているといえる。なお、この表における「進路」とい

う用語も、卒業後の進路に限らないという意味で、注意深く読む必要があるだろう。

表 1 小学校から高校までのキャリア発達の段階とキャリア教育の目標(文部科学省，2012 を一部変更)

注）この図の 1 列目については表記を一部変更している。2 行目は、「職業的(進路)発達」を「キャリア発達」に置き換えた。また、3 行目は、文部科学省(2009)の表記に基づき、「職業的(進路)発達課題」と表現されていた箇所を「キャリア教育の目標」に置き換えた。

	小学校	中学校	高等学校
キャリア発達の段階	進路の探索・選択にかかる基盤形成の時期	現実的探索と暫定的選択の時期 現実的探索	試行と社会的移行準備の時期
キャリア教育の目標	・自己及び他者への積極的関心の形成・発展 ・身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上 ・夢や希望，憧れる自己イメージの獲得 ・勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の形成	・肯定的自己理解と自己有用感の獲得 ・趣味・関心等に基づく職業観・勤労観の形成 ・進路計画の立案と暫定的選択 ・生き方や進路に関する現実的探索	・自己理解の深化と自己受容 ・選択基準としての職業観・勤労観の確立 ・将来設計の立案と社会的移行の準備 ・進路の現実吟味と試行的参加

表1をもとに、小学校でのキャリア発達と「役割」との関わりを見ていこう。小学校で経験される役割には、具体的には掃除や日直、グループ活動の司会や、プリント配布係、遊びの中での役割などがある。表1のキャリア教育の目標との関係でいえば、まず、こうした役割は、子ども達の身近にあり、学校生活に不可欠なものである点で、「身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上」「勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の形成」に関わっている。また、役割は必ずしもひとりでは達成できず、他者(教師や友人)との関係調整や協働が必要になるという点で、「自己及び他者への積極的関心の形成・発展」「夢や希望，憧れる自己イメージの獲得」に関わっているといえる。

このように、学校生活における「役割」という視点から見ると、キャリア発達は特定の教科内・活動を通してなされるのではなく、日々の学校生活において生じることが明らかになる。そう考えると、子ども達のキャリア発達を促すために、小学校には大きなメリットがある。そのメリットの一つは、小学校の6年間はじっくりと児童の成長を見つめることができ、多くの場合は卒業後の進路の選択決定に労力を割かれることもないので、本来の生き方の教育に取り組むことができるということである(三村, 2004)。中学校・高等学校よりも長い期間を掛け、子ども達の身近な役割に向き合える時期だからこそ、キャリア教育を積極的に位置づけていく意義があるといえる。

5. 「役割」を媒介としたオートエスノグラフィックな発達

ここで、やや唐突であるが、小学校のキャリア教育をオートエスノグラフィーの視点から考えてみたい[1]。なぜならオートエスノグラフィーの重要な特徴の一つは、「個人と文化を結びつける」(Ellis & Bochner, 2000/2006, p.135)ことにあり、この特徴はキャリア発達をより豊かに捉えていく上で重要だと思われるからである。次のようなストーリーを考えてみよう。

[1] オートエスノグラフィーについては、第 3 回を参照。

小学4年生の真人くんは、欠席した結衣さんの代わりに、数日間だけ生き物係をすることになった。これまで生き物には興味がなかったが、学級で飼っているメダカの餌やりを実際にやってみると、餌を食べるメダカの姿を見て、「こんな小さくても生きているんだ！」と感動した。次の学期には、自分から生き物係に立候補して、餌やりを進んでやるようになった。係活動の取り組みを日記に書いたところ、先生から「生き物博士だね」と褒められ、嬉しかった。自信を持つことができた真人君は、家でも進んでお手伝いをするようになった。

この例では、子どもの「生き物への関心」という個人的な経験が、係活動という役割への参与や、勤労観といった社会文化的な関心へと結びついている。このような、自己理解がより広く他者や文化へと広がっていくような発達を、「オートエスノグラフィックな発達」(autoethnographic development)と呼ぶ。オートエスノグラフィーは、研究アプローチとして提唱されたものであるが、Ellis & Bochner (2006/2000)は、それは学問という範囲に限らないものであると述べている。

「エスノグラフィーを学問的営みとのみ考えることをやめて、学問という範囲を超えてエスノグラフィーの意味を広げることで、得られるものは多いと思うんだ。サービス業や援助的な職業についている多くの人々の仕事は、エスノグラフィーとは、見なせないだろうか？自分の仕事をやりとげるために、そうした職種では、年齢、能力、人種、階層、エスニシティという点で多様な人々と、間主観的な理解を得る必要があるよね。･･･(中略)･･･彼らは、自己についてのエスノグラファーだよね」「その通り。また、よい教育というものにも、エスノグラフィーが必要だと思うわ」･･･(中略)･･･「未知であったり縁遠かったり自分とは違っていたりすることによる壁を乗り越えて、協同と相互理解の精神や経験と参加への準備に向かうために、私たちはいつも努力しているわよね。自分を自分自身や他者に開くことを学んだなら、自分とは違う意見への抵抗感をなくすのはむずかしくないと気づける。私は、そうしたことを、教室に求められる個人的で親密で共感的なエスノグラフィックな意識をめざす営みと、考えたいの」

(Ellis & Bochner, 2006/2000, 邦訳pp. 162-163)

上記のようなオートエスノグラフィックなプロセス――自己や他者の文化はどのようなものであり、そこに自分はどう関わるのかについての理解――は、子どもの学校生活でも生じている。役割を乗り越える上では、自分自身が得意なことやすべきことを理解するだけでなく、他者と協働し、相互理解し、(学校のような)社会の中に参加していく必要がある。この意味で「役割」は、社会と自己との媒介(橋渡し)となっている。さらに、真人君の例における「先生に褒められる」という箇所は、こうした自己省察のための教師の「足場かけ」(Wood et al., 1976)を示している(第1回参照)。「役割」を媒介とした子どものオートエスノグラフィックな発達は、子どもと教師、友達といった他者との協働的でも生じると考えられる。

最後に、キャリアは未来へ向けて前向きに構築 (pre-construction; Valsiner et al., 投稿中)されることも留意すべきだろう。私たちは非可逆的時間の流れを生きており、すべての経験は一回性のものである。教師からは「同じ間違いを繰り返している」ように見えても、発達主体である子どもは常に目前の未来に向けて新しい意味を構築しているのである。子どものオートエスノグラフィックな発達を理解するためには、彼らが目の前の「役割」を通してどのような未来の可能性が拓かれ、それによって自己・他者への理解がどのように変容していくのかというダイナミックな側面に目を向けることが重要だろう。

引用文献

文部省. (1983). 進路指導の手引：高等学校ホームルーム担任編. 日本進路指導協会.

文部科学省. (2009). 自分に気付き、未来を築くキャリア教育:小学校におけるキャリア教育推進のために.

文部科学省. (2011). 中学校キャリア教育の手引き.

文部科学省. (2012).小学校キャリア教育の手引き（改訂版）.

三村隆男. (2004). 図解 はじめる小学校キャリア教育. 実業之日本社.

Super, D. E. (1980). A Life-span, Life-space Approach to Career Development. *Journal of Vocational Behavior*, 16(3), 282–298.文部科学省. (2020). キャリア教育に関する総合的研究 第一次報告書.

中央教育審議会. (1999). 初等中等教育と高等教育との接続の改善について(答申). https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/30career_shiryoushu/2-4-1.pdf

中央教育審議会. (2011). 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申). https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/30career_shiryoushu/2-4-2.pdf

中央教育審議会. (2016). 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）. https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/30career_shiryoushu/1-1.pdf

Tsuchimoto, T. (2021). Transfer of Specific Moment to General Knowledge: Suggestions from Cultural Developmental Autoethnography and Autoethnographic Trajectory Equifinality Modeling. *Human Arenas*. https://doi.org/10.1007/s42087-021-00220-3 (Full text: https://rdcu.be/cjhvP)

Wood, D., Bruner, J. S., & Ross, G. (1976). The Role of Tutoring in Problem Solving. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, *17*(2), 89–100. https://doi.org/10.1111/j.1469-7610.1976.tb00381.x

Valsiner, J., Tsuchimoto, T., Ozawa, I., Chen, X., & Horie, K. (投稿中). The Inter-Modal Pre-Construction Method (IMPreC): Exploring Hyper-generalization.

バックナンバー

キャリアと文化の心理学(1) 教育・発達心理学とキャリア教育の接合. 土元哲平・サトウタツヤ. 対人援助学マガジン. 対人援助学会. 42. pp.288-303. 2020 年 9 月.
https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol41/16.pdf

キャリアと文化の心理学(2) 転機におけるキャリア支援のオートエスノグラフィー. 土元哲平. 対人援助学マガジン. 対人援助学会. 43. pp.287-299. 2020 年 12 月.
https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol43/52.pdf

キャリアと文化の心理学(3) オートエスノグラフィーの特徴と主流の方法論. 土元哲平. 対人援助学マガジン. 対人援助学会. 44. pp.261-263. 2020 年 3 月.
https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol44/51.pdf

フランスのソーシャルワーク 第 4 回

フランスの匿名出産、養子縁組、里親

「幸せな幼少時代を過ごし、開花していくために」子どもにどのように親を与えるか

安發明子(在パリ ライター/通訳)

フランスには自分で子どもを育てられない女性が安全に子どもを出産し、養子に出せる仕組みがある。それは病院で匿名さらに無料で出産でき、必要な治療を受けることができ、養子縁組の手続きまでをおこなう匿名出産だ。フランス革命後の 19 世紀から始まり、現在でも年間約 600 人の赤ちゃんがこの制度で生まれ養親のもとに託されている。社会的養護の子どもについても、親権者が期待されている役割を全うしているか確認し、必要に応じて養子縁組可能か検討する国の機関が 2016 年に設置され、年間約 200 人が養子縁組されている。

「幸せな幼少時代を過ごし、開花していくために」というのは児童福祉の現場でよく使われている表現である。この論文では、主にインタビュー調査で得た情報をもとにフランスで子どもに親を与えるためにどのような仕組みを作っているかについて記述したい。

1. 子どもに 2 人の親を与える 324

2. カップルの離別と子どもの居場所変更は必ず家庭裁判所を通す 327

3. 親になる前にケアを受けることができる、子どもが望まれて生まれて来ることができる(家族計画センター) 329

4. 匿名出産 333

出自情報の管理について 337

匿名出産について分かっていること、妊娠の否認について 339

お腹にいる子どもとの関係に悩みがあったら相談できる場所がある 344

妊娠初期面談 345

妊娠に悩みを抱えた女性専門の無料心理的社会的相談 347

社会的心理的困難を抱えた母親専門の産科 351
匿名出産まとめ 352
5. 養子縁組 354
パリ市養子縁組機関、養親になる道のり 356
養子へのインタビュー 360
養子縁組まとめ 361
6. 里親 362
里親か施設かではなく「親であることの支援」と「複数で子どもを育てる」という考え方 362
里親たちのプロフィール 366
里親になるまでの道のり 368
里親事務所のワーカーの役割 369
里親委託のプロセス 371
里親、元里子、里親事務所のワーカーの意見、筆者の観察結果 375
里親まとめ 377
調査先一覧 378
文献、資料 379
インタビュー資料 380
養親へのインタビュー、養子と初めて会ったときのこと 380

1. 子どもに 2 人の親を与える

インタビュー：児童保護専門の法律家 Sylvie Berdin 氏

まずはフランスには子どもに両親を与えるための工夫がある。

婚外子が日本で 2%であるのに対し 60%のフランスでは、妊娠中に父親による生前認知の届け出がおこなわれる。父親は妊娠がわかると区役所に行き認知届けを出す。(Code Civil 316)

認知主義なので、出産すると母親も認知しない場合は「国の子」(国家被後見子 pupilles de l'Etat 社会家族法 224-4)として手続きをすれば養子縁組可能になる。出生の記録は母親の書類にも子どもの書類にも残らない。

認知する場合は出生証明書に子どもと両親の名前と誕生年月日と場所が記載されるが、国の子の場合は母親もしくは医療関係者が仮につけた名前、国の子というステータス、そして誕生年月日と場所が記載される。
妊娠中父親が認知しない場合は母親は誕生を待たなければならないが、誕生したら母親は裁判所で父親の認知を求めることができる。裁判所は DNA 検査を求め、父親が出頭しない、DNA 検査を拒否した場合は男性が父親であると決定される。この制度があることで、男性にとっては避妊しないなど無責任なことができないようになっている。
認知をするのは遺伝上の父親でなくても構わない。母親にとって父親がわかっている場合は上記のように裁判所経由で認知を求めることができ、母親が子どもの父親が誰かわからない場合は子どもの認知を受け入れる他の男性に認知をしてもらうことができる。子どもの出産時に母親が子どもの父とは違う男性と付き合っていてその男性が認知を希望する場合や、出産後母親が出会った男性が子の父になることを希望する場合は遺伝的父親とは違う男性が認知することができる。母親がその男性と別れても認知は取り消せず、父親は子どもの 18 歳まで養育義務がある。
母親が父親の認知を求めるのは子どもが 18 歳になるまで可能だが、子どもが希望する場合は 28 歳まで認知を求めることができる。
母親が認知せず父親が認知する場合は父親が子どもを養育する。
子どもには親が二人いるのが良いとされているので、母親の心情ではなく、子どもに父親を与えるため、そして父親が子どもの養育費(pension alimentaire)を 18 歳まで払うためにソーシャルワーカーなども手続きを母親に勧める。しかし、どちらがより長期間養育している、どちらに離別の非があるなど関係なく、両親の子どもに対する親権は 50%ずつで両親ともに対等であるため、実際には子どもの父親としてふさわしくないと母親が判断する場合認知を求めないこともある。（Berdin, 2021[1]）

[1] この章の内容は児童福祉分野の法律家である Sylvie Berdin 氏へのインタビュー調査による。

子どもに２人の親を与える！

出生証明書に書いてあること：
名前(国の子どもの場合は仮)
両親の名前(or国の子ども)
誕生年月日と場所

妊娠発覚　父親生前認知
(結婚の際は区役所で家族法が読み上げられサインさせられる)

出産　母親の認知 or 国の子ども(養子縁組可能)
＊父親の認知を裁判所に請求できる(子の18才まで)
→DNA検査拒否した場合や出頭しない場合は男性が父親であると決定される
＊子どもと血のつながりがない父親でも認知できる
(母親と離別しても取り消せないので子の18才まで養育費支払い義務)

養育費の支払いと再会支援＝家族手当基金(家族手当、児童手当を担当する機関)のAripaというサイト
父親は母親と離別しても養育費の支払いは義務。
母親の代わりに父親に請求。拒否する場合は雇用主に手続きし給料から天引き。刑務所にいる間も数十円であっても受け取る。

18才成人　養育費請求の手続き中は家族手当基金が母親に養育費を代わりに払う。
父親との面会のオーガナイズと場所の提供もしている



28才　子どもが希望する場合、子の28歳まで認知してもらうことができる。

日本ではひとり親家庭、母子家庭への福祉政策がおこなわれているが、フランスにおいてはまず子どもに 2 人の親を与えることを優先して取り組んでいる。

筆者が日本で生活保護の担当をしていたとき、妊娠した女性たちが「妊娠したって言ったら別れられた」「LINE がブロックされてもう彼氏と連絡がとれなくなった、どこに住んでいるかもわからない」「俺の子じゃないんじゃないと言って結婚する気もないみたい」「子どもができたら離婚するから一緒に住もうねって言ってたのに」と話し悔しがったり泣いたりしていた。女性ばかりが妊娠に向き合い責任をとらなければならない現実をとても理不尽に思っていたため、フランスのこの制度を知ったときは嬉しく思った。

フランスの施設で出会った子どもも「認知してくれたのは私が幼少期のときの母の彼氏、彼には他に家庭があって、でも母と別れてからも最期まで私に会いに来たり気にかけてくれてパパとして接してくれて感謝している。認知しなかった本当の父親もそれなりの状況だったことは理解できるし、2 人のパパがいる」と話していて、母親しかいないよりは遺伝的ではない父親を与えるという方法は子どもにとって愛情を 2 倍受け取る可能性を作るのでいいのではないかと思った。

一方で、母親は認知しないこともできるのに父親は裁判所に DNA 検査を求められ、拒否すると父親として決定するというのは父親に対して厳しいという面もある。

2. カップルの離別と子どもの居場所変更は必ず家庭裁判所を通す

インタビュー：児童保護専門の法律家 Sylvie Berdin 氏
家族手当基金国際窓口：Leprince 氏

離別の際は結婚していてもしていなくても(同棲でも別居でも PACS(pacte civile de solidarité)という民事契約によるカップルでも親権者 2 人の子どもに対する義務は結婚と同じ)、滞在許可証がなかったとしても、別れる際は子どもがどこで過ごすのか家庭裁判所(JAF Juge des affaires familiales)のもとで決めることになっている。子どもが何歳であったとしても、カップル双方の合意がなされていても JAF を通さなければならない。「両親のどちらのところで過ごすのか JAF が保証人になる」という言い方がされる。

6 歳以上の場合は必ず子どもに会い、子どもに自分が裁判官に意見を言えること、弁護士をつけることができることを伝えることになっているが、この点については 100%実行されていない県もあるそうである。

> 筆者が調査した際は、離別したばかりの女性が裁判官に「父親が教育的すぎる行動をする、本人が嫌がっているのに勉強を押し付けたりするので父親と 1 週間ずつの養育ではなく、父親は 2 週に一回の週末だけにしてほしい」と希望を伝えていたケースがあった。すると家庭裁判所(JAF)の裁判官は子ども専門裁判所に連絡をとり、児童保護を担当する子ども専門裁判官が父親の心理判定と家族仲裁の専門家とのアポイントメントを命じた。その結果を待ち改めて子どもの養育を母親と父親でどのように担当するか JAF にて話し合われることになる。

また、数ヶ月以上親族や第三者に預ける際も JAF への届け出が必要である。

> 筆者が調査した施設ではこのようなケースがあった。親子喧嘩が耐えず、親が JAF に届け出することなく親戚宅や友人宅に 13 歳の子どもを預けてきたが、子どもが学校を欠席した際に JAF に届け出をしていなかったことがわかり「親権者が子どものために必要な手続きをしていない」ということで状況が確認できるまでの間子どもは施設で保護することになった。
>
> 日本の施設でも「親族のもとを転々としていた、学校には転校手続きがされず行かない期間もあった、親戚のところで嫌なめにあった」「親に宗教施設に入れられていて学校に行けなかった」という経験をしてきた子どもが複数いた。たとえ確実に子どもの安全を確認する機能があると言いきれなくても「誰のもとで子どもが暮らしているか届け出なければならない」というルールは一定の効果があるのではないかと考える。

誰が子どもを育てているか司法に届け出
子がいるカップルの離別と子どもの居場所変更は必ず家庭裁判所(JAF Juge des affaires familiales)を通す

- 子がいるカップルの離別の際必ずJAFを通す
- 離別の際**JAFが子どもが両親どちらのところでどのように過ごすのか保証人になる**
- 離別の際、6歳以上は常に子どもにも会い、子どもが両親のいないところで裁判官に直接意見を言う権利があること、弁護士を個人で頼む権利があることを伝えることになっている。調査を命じることもある。
- **親戚に預ける際**も、親権者以外が数ヶ月以上育てる際には必ずJAFへの**届け出が必要。**
- 養育について父と母と子で**意見に相違があるとき**も対応＝子どもの進路についてなど

→子どもが誰のもとにいるのか司法機関が確認している。
子どもの両親それぞれとの関係、希望する方と暮らしているか、子どもの様子を、知る機会になっている。
→ただ、学校や福祉機関と連携はされていない。子どもにも100%会っているとは限らない。

結婚していなくても離別した際は家族手当基金(CAF)が運営する Aripa というサイトを通じて相手方に養育費を請求したり再会支援を受けることができる。手続き期間中は Aripa が養育費の立て替え払いもおこなう。離別したパートナーに直接やりとりしなくていいことになっており、相手が養育費の支払いを拒否した場合は雇用主に連絡し給料から天引きする手続きがされるので、基本的には応じることが多いそうである。刑務所に入っていて月数百円であったとしても子どもの親権者として支払うことを求めている。(Berdin, 2021, Leprince, 2020)



(家族手当基金の離別したパートナーから養育費を受け取ったり面会手続きをするホームページ)

3. 親になる前にケアを受けることができる、子どもが望まれて生まれて来ることができる(家族計画センター)

インタビュー：CPEF パリ市責任者(婦人科医)
CPEF パートナー間アドバイザー
パリ市女性への暴力研究所

家族計画センター(CPEF Les centres de planification et d'éducation familiale)というのは周産期から 6 歳までの児童保護予防を担う妊産婦幼児保護ゼンター(PMI Protection Maternelle et Infantile 日本の保健所に役割が近い)の下部組織で、パリ市内にも公立私立含め 24 ヶ所センターを持っている。パリ市の北のセーヌ・サン・ドニ県には 121 ヶ所あり妊産婦幼児保護センターよりも多い。

専門職として婦人科医、看護師、心理士、パートナー間アドバイザーがいる。

パートナー間アドバイザーは恋愛やパートナーとの悩み相談を専門としている。専門職がいなかったとしたら、恋愛やパートナー、性の悩みについて相談先は親か同等の知識レベルの友人、信頼できるかわからない SNS などしかないかもしれない。そこを誰もが専門家に相談できるようにしている。

家族計画センター(CPEF)は性教育や匿名無料での診察、避妊、カウンセリング、中絶、暴力被害のケアなどを担当する機関である。中絶をおこなう病院はこのセンターを併設しなければならないと法律で定められている。パリ市の場合 10 ヶ所は民間が県の委託を受け実施しているが、もともと中絶に関する法律を推し進めてきたのも民間であり、国の妊娠 SOS 無料電話にも応答している。

13 歳から 49 歳までを対象にしていて保険証などは必要なく、近所でなくても行きやすいところを利用できる。

性教育は学校の先生ではなく専門の資格を持った人がすることになっているため、中学生のときに 10 人単位でこの機関に行き性教育を受ける。学校でおこなうのではなく、実際その場所に行く理由は、そのときは必要なくても、行ったことがあり誰がいるか知っていればあとあと必要になったときに行きやすいからだそうだ。性教育は Action d'éducation à la vie affective et sexuelle と言い、「愛と性のある人生についての教育」という意味だ。リスクや避妊を中心とした性教育ではなく、愛、相手を尊重するとは何かという入り口から性について学ぶ。

パリ市では 2020 年より新しく女性への暴力研究所(OPVF Opservatoire Parisien des violences faites aux femmes)[2]が設置され、性教育についても取り組み直している。パリ

[2] https://www.paris.fr/pages/violences-faites-aux-femmes-sortons-du-silence-7295

市の担当者は、中学生に調査したところ避妊よりも恋愛や関係性について関心があるという結果だったため、より関係性、合意に力を入れ、暴力のない関係が築けるように力を入れている。

性教育は義務で、対象は 13 歳とされている。その理由は、性交をしている割合は 10-15%とまだ低いものの関心にはなりやすい年齢だからである。
匿名出産をする女性の中には 12-13 歳もおり、その場合強姦や強制された関係によるものも多く、予防のためにも性と愛について議論する機会を持っておく、話せる相手がどこにいるか知っておくことが大事であるとされている。一度考える機会を持っておくと、実際機会があったときにまず自分で考え、そしてそれが難しいときは人に相談することができる。話す機会を持たないでおくことは「門戸が開かれたまま」にすることも同然であるとされている。
初めての性行為の前やその後に考えを整理しに CPEF に来るティーンエイジャーは多いと CPEF のパートナー間アドバイザーは言う。

子どもが望まれて生まれてくるように
親が自分のケアができてから親になれるように

家族計画センター(CPEF) = パリに24ヶ所 保健所の下部組織(民間も含まれる)

匿名無料で利用できる。最寄りでなくても良い。
専門職：婦人科医、看護師、心理士、パートナー間アドバイザー
対象：13-49歳

ミッション：
性教育、性についての相談
婦人科医の診察、検査
避妊具、処方箋の提供、緊急避妊薬の提供
中絶(薬による中絶の実施、医療の場合処方箋)
カップルの間の悩み、家族の悩みの相談、暴力被害のケア

性をケアのきっかけに！
最初は学校の性教育：専門の資格を持った人がする→必要になったときに来る流れを作る
避妊具の提供の際に必ず問診をする。
→虐待や暴力の被害にあったことのある女性は自尊心が低くなっているぶん望まない性にも応じてしまうようになるので、被害にあったことのある女性を見落とすことなくケアする＝**暴力被害のケア**
→**将来親になるかもしれない準備として、いいコンディションで子どもが迎えられるようケアしておく。**
→望まれたタイミングに生まれた子の方がリスクが少ないことがわかっているので、**子どもを迎えるタイミングを皆が選べるようサポートする**ことで、児童保護、予防を担っている

ここでは避妊具を 10 種類くらいのなかから好きなものを大半は無料でもらうことができる。そのときに必ず婦人科医の診察を受け暴力被害経験などないか確認し、ケアする機会とする。
フランスは未成年が受ける医療行為について親権者に知らせたくない場合は知らせる必要がないと法律で決められている。中絶であっても自分の選んだ成人に付き添いを頼めば良い。
中絶を受ける場合は必ずその前にパートナー間アドバイザーの面接を受けるよう定め

られている。そこで、理由を言う必要はないものの、情報提供を受けたり、アドバイザーは暴力の可能性があれば支援の提案ができるようにしている。
妊娠検査も中絶も無料で、薬による中絶の場合は家族計画センターで助産師の処方で受けられる。吸引の場合はセンターの医師による処方箋を持って医療機関に行き受ける。

家族計画センターのミッション：
性についての相談、避妊各種提供、中絶の実施、性病検査
婦人科無料検診、妊娠検査
中絶の手続きか実施
緊急避妊薬の提供
カップルや恋愛の悩み、家族の悩みの相談
暴力被害についての相談

避妊具をもらいに来る、性についての相談、親との喧嘩、パートナー間の喧嘩、中絶の希望などの際に必ず以下の問診をし、必要であればケアにつなげられるようにしている。
(パソコン画面上のカルテに表示される)
名前や生年月日、健康状態などに続き以下の情報が並ぶ。
「性生活、パートナー間の DV、暴力被害(過去の暴力、目にした暴力、心理的暴力の経験)、性暴力(望まないセックス)、女性器切除、過去の強制された結婚もしくは関係、売春、麻薬、危険を冒す傾向(知らない人との性交、複数での性交)、精神疾患や不調」聞き忘れ、聞きそびれを防げるようになっている。暴力を受けた経験を聞くと、そのときは詳細に語らなくても後日戻ってきて話す時間をとりたいという若者は多くいるそうである。早いうちにケアしておくことで将来親になったときの親子関係のリスクを減らすことができるとされている。

以下、少し長いがパリ市の家族計画センターの責任者の言葉を引用する。

暴力被害のケア
虐待や暴力の被害にあったことのある女性は自尊心が低くなっているぶん望まない性にも応じてしまうようになるので、被害にあったことのある女性を見落とすことなくケアすること。
暴力を見つけ出してきちんとケアして将来生まれてくる子どもへの虐待などのリスクを生まないよう予防します。暴力を受けたことのある若者は、暴力を受けたことのない若者よりも予防に関するメッセージに敏感でないことがわかっています。自尊心が低められてしまっているので「暴力を受けないように、望まない妊娠をしないように」と言われても身を守るために最善を尽くそうとはしないからです。
身を守ることに気をつけるのは自尊心がある人です。自分に価値がないと思う人は人任せにしたり流れに任せたり自分をコントロールすることを諦めることがあります。
お前なんて産まなければよかった、バカだと言われた経験がある人は、自ら危険に身を晒す人もいます。これらの「望まれていない」と感じた経験がある人をいかに察知して回収するかが福祉や医療についている人たちのミッションです。

なぜ暴力被害経験が重要かと言うと若い年齢で性交を始める人の多くが、暴力が背景としてあるからです。家族から暴力を受けたことがある、外で暴力を受けたことがある、性交そのものを強制されたという状況があるからです。暴力を受けたことがあると、自分が無力であるという感覚を身につけてしまうので、逆らえないと感じたり、恐怖に従ってしまったりします。自分を守ることに無防備になります。
体の不調を訴えていても、今病気があるわけではなくて、昔受けた暴力の作用として不調として表れていることもあります。ですからこのセンターでは、過去に受けた暴力を見つけ出すことは必要不可欠です。未成年でも成人でも同じです。女性の人生にとって大きな影響を与えるもので、生涯の健康に関わってくることだからです。特に、これまで自分が経験したつらいことを誰にも話すことができなかった人にとっては大きなインパクトを及ぼすものです。過去に暴力を受けた経験があるか、暴力行為をしたことがあるか、暴力を目にしたことがあるか。どれも同じくらい健康・予防面で重要な項目です。
女性が暴力について、過去の辛い経験について話すときに、聞いたその人自身がそのときにちゃんと聞く、受け取るということがとても大切です。心理士などを紹介し、その人が担当するというわけではありません。まず、単純に、話す機会のなかった経験について話すことができたとき、大きな安堵がある、ほっとする気持ちになります。皆「話せてよかった」と言います。多くの場合は、最初の診察でシステマティックに聞かれたときに、答えます。それがプロフェッショナルに話す最初の機会だったという人がほとんどです。そのことについて話す予定はなくても、話せてほんとうによかったと皆言います。最初の性交がほんとうに自分から望んだものではなかったこと、彼ののぞみで本当は望んでいないときも応じることがあること、そういった話についてそのことについて感じていることについて話し合い、フォローできる方法があることを伝えます。そのときは、引き続きフォローは必要としていないと答えたとしても、話せる場所があると認識することはできるので、話したいときに戻ってケアを受けることができます。また、現在も暴力を受ける可能性がある場合はソーシャルワーカーと一緒に解決できるよう動きます。過去の強姦だったらさかのぼって訴えられるように手続きを手伝います。過去の出来事だったとしても、それを認識し、言葉にし、理解し、整理することは Well-being にとって重要なことです。なので「私が聞くので話してください」というスタンスです。私は婦人科医ですが、助産師も皆この質問をします。ケアをする人(Soignant)は、診察をするときは、話を聞くことの用意もあるということが重要です。女性の健康にとってとても重要だからです。一回来たらリスクを割り出します、リスクがある場合はそのまま帰しません。

子どもとの関係、その女性の子どもにとっても、将来産むかもしれない子どもにとってもケアをしておくことがとても重要です。母へのケアも子へのケアも、次の世代も見据えてするものです。そうでなければ暴力は次の世代へと継承されていきます。親が子どもが来るタイミングを選ぶことができるようになるということは、子どもへの暴力の予防に大きく関係があります。望まれたタイミングに生まれた子の方が暴力のリスクは少ないです。全く望まないタイミングに生まれた子どもはリスクに近い場所にいることがわかっています。大人たちが皆子どもを迎えるタイミングを選べるようになるということをサポートすることは、児童保護、予防につながることなのです。

暴力経験と望まない妊娠との因果関係についてはさまざまな調査先で指摘を受けた。妊娠に悩みを抱えている女性専門の心理士も、過去に暴力を受けた経験のある女性が多いと話す。もっと早くケアを受けていれば、妊娠中に苦しまずにすんだと話す。

18 歳までの暴力の経験が性経験や子どもを持つ時期に影響するという研究もある。フランスで初交年齢の平均は17.5歳であるが、暴力被害経験のある女性は16歳でも 40%、性被害経験では 15 歳でも 40%と一般より早い。男性においても女性に比べると差は少ないが、被害経験のある男性の方が早く性生活に入る。子どもを持つ年齢についても、18 歳までに暴力被害経験のない女性は 28 歳で 40%の女性が子どもを持っているが、暴力被害経験のある女性は 26 歳で 40%、特に性暴力被害を受けた経験のある女性は 23 歳でも 30%が子育てをしている。(Charruault, 2021)

中学校までは学校内に看護師、心理士、相談員、ソーシャルワーカーなど様々な児童福祉の専門職がいて子どもたちを見守っているが、学校を出ても性をケアの機会として利用している。そして、親になる準備としてケアしている。そのような場は批判されたりしない場所、無料の場所である必要があるだろう。
親になる前にケアを受けることができる、望んだタイミングに子どもを迎えることができるということは将来生まれてくる子どもにとって大事であるように思う。

筆者自身中高生の頃、18 歳までに 3 回中絶した友人、援助交際をしていた友人、高校生で彼氏ができ妊娠して退学した友人がいた。皆家に居場所がなく、拠り所を求めた結果の出来事だった。フランスのようにシェルターや相談できる専門職が身のまわりにたくさんいて、自分の意思で全寮制の中高や若者用マンションに移ることができたら防げたことであったように思う。

日本で SNS で知り合った見知らぬ男性宅から救出される未成年や、家出しても自宅に戻されることからアパートつきの性産業に入る未成年がいることについても、フランスのこの仕組みがあればある程度防ぐことができるだろう。

4. 匿名出産

インタビュー：

最高裁判所判事 Marie-Christine Le Boursicot 氏
CNAOP 事務局長 Jean-Paul Bourély
パリ市立病院産科ソーシャルワーカー
パリ市立乳児院

匿名出産[3](市民法 341)とは女性が子どもの養育を望まない場合、フランス全ての公立私立の病院で匿名無料で出産し子どもを養子に出すことができるという制度である。毎年 600 人ほどの子ども(出生数の 0,08%)が生まれている。

母親の権利と子どもの権利を守るために「出自情報のアクセスに関する国家諮問委員会(CNAOP Conseil National d'accès aux origines personnelles[4])」が 2002 年の法律で設立されている。事務局長はインタビューで「常に一定数匿名出産の利用者がいるという事実は、経済的な問題がなくても、母子を支える福祉が整っていても、育てられないと判断する人が一定数いて、そういった母親と赤ちゃんを支える制度が必要であることの証明である」「公の機関が、合法で、秘密を守り、子を助ける方法を持つというのは大事なことだ。現実や事実に合わせ制度を用意している」と答えている。
そもそも出産する女性がいたら、一番近くの病院が受け入れるルールがあること、そして誰でも出産やそれにかかる入院費用が無料であることも日本と大きな違いである。

国のホームページ[5]にわかりやすく説明されており、郵便番号を入れると問い合わせ先も出て来る。法律 CASF222-6[6]に詳細が定められている。

[3] https://www.service-public.fr/particuliers/vosdroits/F3136
[4] 2002 年の Royal 法でできたもので、それ以前は匿名出産で生まれた子どもは出自に関する情報を得たいときに児童相談所や乳児院や産科にそれぞれ個別に問い合わせをする必要があった。
https://www.cnaop.gouv.fr/presentation-du-cnaop.html
[5] https://www.demarches.interieur.gouv.fr/particuliers/accouchement-x
[6] CASF 222-6 : Toute femme qui demande, lors de son accouchement, la préservation du secret de son admission et de son identité par un établissement de santé est informée des conséquences juridiques de cette demande et de l'importance pour toute personne de connaître ses origines et son histoire. Elle est donc invitée à laisser, si elle l'accepte, des renseignements sur sa santé et celle du père, les origines de l'enfant et les circonstances de la naissance ainsi que, sous pli fermé, son identité. Elle est informée de la possibilité qu'elle a de lever à tout moment le secret de son identité et, qu'à défaut, son identité ne pourra être communiquée que dans les conditions prévues à l'article L. 147-6. Elle est également informée qu'elle peut à tout moment donner son identité sous pli fermé ou compléter les renseignements qu'elle a donnés au moment de la naissance. Les prénoms donnés à l'enfant et, le cas échéant, mention du fait qu'ils l'ont été par la mère, ainsi que le sexe de l'enfant et la date, le lieu et l'heure de sa naissance sont mentionnés à l'extérieur de ce pli. Ces formalités sont accomplies par les personnes visées à l'article L. 223-7 avisées sous la responsabilité du directeur de l'établissement de santé. A défaut, elles sont accomplies sous la responsabilité de ce directeur.
Les frais d'hébergement et d'accouchement des femmes qui ont demandé, lors de leur admission dans un établissement public ou privé conventionné, à ce que le secret de leur identité soit préservé, sont pris en charge par le service de l'aide sociale à l'enfance du département siège de l'établissement.

匿名出産する女性は医療関係者より以下の情報提供を受ける：
子どもを放棄した場合に起こることについての説明
閉じたファイルの中に、自身の情報または、自身が特定されない情報を残す選択をすることができること(自身と父の健康に関する情報、子どもの出身地に関する情報、妊娠に至る経過に関する情報)。閉じたファイルは県の担当機関長によって保管され、子どもが 18 歳になり閲覧を希望した際も母親の同意を得ないと開くことはできない。
子どもを養育する場合に受けられる経済的支援
国の子の後見人制度
二ヶ月の猶予があるということ
子どもが児童相談所に託されると、調書が作成される。養子縁組への同意と、親の希望の場合、家族の健康に関する情報、子どもの出身、児童相談所に託された理由と状況について書かれる。調書ができた時点で親子関係は喪失する。子は国の子候補として 2 ヶ月間登録される。県知事により後見人が与えられる。
養親宅に託されるまでの期間乳児院や里親のところで過ごす。
母が二ヶ月の猶予期間のうちに子どもの引き取りを決断した場合、3 年間親子の支援をおこなう。子の身体的精神的成長と愛情関係の安定を保障するために関係機関が関わりを持つことができるためである。
子は成人すると出自に関する情報の開示を求めることができる。秘密に関しては母が開示の有無を決める。

手続きについては社会家族法の 224-5 に定められているが、補足としては、匿名出産を希望する女性は産科に来たら、産科では身分証の提示を求めたりアンケートをすることを禁止している。産科に必ず配置されているソーシャルワーカーが匿名出産の担当に各県 2 名ずつ任命されている CNAOP 担当ソーシャルワーカー(児童相談所もしくは妊産婦幼児保護センターの職員であることが多い)に連絡、その担当者が 24 時間以内に妊婦のもとにかけつける。
まずは子どもを育てたい場合には支援をする用意ができることを伝えることが任務であり法律にも書かれている。それでも匿名出産を希望する際は情報を残すことが子どもにとって大切であることを説明するとほとんどの女性は情報を残すと言う。
この情報は CNAOP 本部で管理し子どもが 18 歳以降に望んだ場合に開示する。個人情報が残されている場合には母親に同意を得た上で開示される。実際には匿名出産した子どもの 5%しか問い合わせをすることはないとされている(年間約 400 人でそのうち半分が母親と再会を果たし、半分の母親は秘密の開示を拒否している。母親と連絡が取れない場合、死亡している場合は個人情報が残されていても同意が取れないので開示され

Sur leur demande ou avec leur accord, les femmes mentionnées au premier alinéa bénéficient d'un accompagnement psychologique et social de la part du service de l'aide sociale à l'enfance.
Pour l'application des deux premiers alinéas, aucune pièce d'identité n'est exigée et il n'est procédé à aucune enquête.
Les frais d'hébergement et d'accouchement dans un établissement public ou privé conventionné des femmes qui, sans demander le secret de leur identité, confient leur enfant en vue d'adoption sont également pris en charge par le service de l'aide sociale à l'enfance du département, siège de l'établissement.

ない)。母親は常に CNAOP に情報を追加し残すことができるが、子どもからは問い合わせできても母親が子どもに関する情報を得ることはできない。CNAOP 担当者が国の子として出生届を出す。
わかっていることは、匿名出産で生まれた元国の子(18 歳を過ぎてから問い合わせできる)はただ出自に関する情報が知りたくて問い合わせるのではなく、その時解決したい問題があってその手がかりとして問い合わせをしているのでただ情報を渡せばいいわけではない。まず CNAOP の心理士が話を聞き、その上でなお情報が知りたい場合は心理士が閲覧や再会にも立ち会いサポートし、その手続きが元国の子にとってプラスの経験となるようにしている。
実親が望む場合は匿名出産後も児童相談所から精神的社会的サポートを得ることができる。
匿名出産を希望しても最初の 2 ヶ月は子どもを引き取ることができる。実際に 15%である約 100 人が実親に引き取られている。
2 ヶ月を超すと養親候補を探し、養親のところに委託し半年経過をみてから正式に養子縁組の裁判所による手続きがおこなわれる。

2 ヶ月の猶予期間は積極的な意味合いでとられている。専門職たちが子どもを手厚くケアし、子どものニーズを理解し、子どもに合った養親を選べるようにする。
養親のもとに託された日から養親が養子縁組休暇、子ども手当など養育者としての権利を享受するので、実親にとっても養親にとっても区切りが明確である。
実際には海外からの利用者は多くないことがわかっている。
匿名出産で生まれた子どもの 99%が国の子ではなくなっている。82%は養子縁組成立、15%強は実親が認知している。特別な事情のない子どもは約 2,7 ヶ月で養親のもとに移動、病気や障害のある子どもは 6,2 ヶ月と少し長くかかっており、病気や障害のある子どもの半数は他県で養親を見つけている[7]。

この制度については 2018 年厚生労働省による調査[8]が詳しいので、ここではこの制度の法律修正をおこなった法律家へのインタビューから得た情報を記述する。
最高裁判所の判事であり、匿名出産に関わる 2000 年以降の法改正の法文を書いてきた

[7] ONED rapport publié en décembre 2014 : La situa on des pupilles de l'État

[8] 平成 30 年子ども・子育て支援推進調査研究事業「妊娠を他者に知られたくない女性に対する海外の法・制度に関する調査研究報告書」

Marie-Christine Le Boursicot 氏は歴史と匿名出産の意義について以下のように話す。

最初に 17 世紀に Saint Vincent de Paul が匿名出産をホスピスで始めたときはカトリックがおこなっていました。
1793、フランス革命後に共和国協定(Convention républiquaine)ができて「秘密を守る産科(Maternité secrète)」ができました。そのときから病院が匿名出産を担うことになりました。共和国協定というだけあって、宗教性のない公の権利という性質のものになりました。公が主導権を持って扱うものになったのです。宗教と切り離し、国家が人々を助けるという概念に全て置き換えられました。国が政教分離したことによって匿名出産も政教分離します。国民を守るのは国の任務になったのです。
そのときから全国全ての公立私立の産科は女性がお金がなくても子どもを育てなくても産科は受け入れなければならないということになりました。そのときから、女性の健康を守るために、必要なだけ入院していて良いということも定められていました。子どもについても健康が第一で必要な治療は全て受けられました。
Saint-Vincent-de-Paul は施設の中で産まずに赤ちゃんを置きに来る人もいたのですが、その場合赤ちゃんだけでなく母親の健康も安全とは言えませんでした。赤ちゃんも母親も助けなければならないのにその仕組みでは不十分だったということです。赤ちゃんポストがあるドイツなどと比べても、他のどの妊婦とも同じように女性たちがケアを受けることができるということがフランスの特徴です。1793 年頃から女性の出自を聞かない、お金の支払いも求めないということは変わっていません。
産んだからといって育てなければならないという義務はありません。育てるか育てないか決めるのは自由、親子関係を結ぶかどうかは極めて個人的な選択で女性が決めること[9]です。女性は育てる選択をしない(renoncer)ということができます。それが自由というものです、自由があるというのはそういうことです。中絶や避妊も含め、女性は自分の体をどのように使うか主導権を持っていなければなりません。１つの流れです、避妊でき、中絶でき、産んでも育てない選択をすることができるのです。
17 世紀より以前でも遺棄はありませんでした、それは、洗礼を受けずに亡くなるのは最悪のことで、教会に託し洗礼さえ受けられれば赤ちゃんで亡くなっても天使にはなれる。もとから捨てるという選択肢はなかったのです。

出自情報の管理について

[9] Etablissement de la filiation est personelle, lié à la decision de la femme

出自情報のアクセスに関する国家諮問委員会(CNAOP Conseil National d'accès aux origines personnelles)
2002年Royal法から(以前は児相や産科や乳児院に個別に問い合わせしていたのを国で統括)

母と子ども両方の権利を守るため
1. 情報を得る、管理する　2. 出自情報を得たい子への支援
本部にいるのは心理士1人、法律家3人。

出自を問い合わせるのは**全体の5%**のみ。
18歳未満は親権者と一緒、18歳以降は自身で手続き。
まずは**心理士**が話を聞く。それはただ出自を知りたいわけではなく、自分の中に解決したい問題を抱えてアクセスしてくる場合が多いから。事務的に情報を渡せばいいわけではない。閲覧も一緒にしてこの手続きが本人にとってプラスの経験となるようサポートする。

公立私立全ての産科は匿名出産受け入れ義務。どこで産んでも同じサービスが受けられることが重要。
各県に2人いる**CNAOP委員が24時間以内にかけつける。**匿名出産を希望する場合は情報を収集してCNAOP本部に送り、保管
CNAOP委員は現職の児相か妊産婦幼児保護センターの専門職が各県2人任命され、本部で研修を受け、CNAOPの各県での役割を遂行する。年に二回本部で継続研修を受ける。

年間400人の子から問い合わせがあり、400人の母親に問い合わせをしている。半分は少なくとも片方の親の情報を得た。半分は秘密の維持を希望する。

匿名出産をする女性がいた際の流れ

出自情報のアクセスに関する国家諮問委員会CNAOP
(全ての情報を管理、ここにアクセスすれば病院や乳児院や児相の情報を集め提供してくれる)

CNAOP担当各県2人
(児相のワーカーや妊産婦幼
児保護センターのワーカー)

- 子どもを育てたい場合に環境を用意することを伝えるのがまず任務であり法律にも書かれている。
- 情報の必要性を説明したらほぼ全員情報を残す
- 申告制
- 子どもが将来親に会いたいときは情報がなくても産科などの記録から探すことができる。

- 病院に24時間以内に行く
- 自分で育てる際**利用できるサービス**の説明
- 必要情報を集めて本部に送る
- 国の子として出生届を出す

健康情報
出身
誕生に関する状況
閉じたファイル=個人情報

母は情報をいつでも追加できるが、子から情報の問い合わせはできても**母から子どもに関する問いあわせはできない。**

匿名出産についての映画







『Pupille』 2018 (英 In Safe Hands)

女性が匿名出産し、CNAOP 担当が手続きし、児童相談所のワーカーが赤ちゃんを里親に委託し、養親候補を選び、養親に託されるまでを描いている。

『Wonder Boy』2019

フランスのファッションブランド「バルマン」のクリエイティブ・ディレクターを 25 歳のときから務めているデザイナーのオリビエ・ルスタンのドキュメンタリー映画。タイトルは「誰も成功することなど想像しなかった子ども」という意味で本人がつけたが、成功するにつれなぜ匿名出産で生まれたのか、「実親を知りたい」「会いたいけど拒絶されるのが怖い」という葛藤の中 CNAOP に問い合わせをし、出自に関する資料を閲覧する。「産んでくれたおかげで存在することができ感謝している」と述べている。

匿名出産について分かっていること、妊娠の否認について

インタビュー：

妊産婦幼児保護センター責任者
パリ市立病院産科ソーシャルワーカー
妊娠に悩みを抱えた女性専門心理相談所
パリ市立乳児院

匿名出産に関わるどの機関の専門職も口をそろえるのは「妊娠の否認(déni de grossesse)」が匿名出産と大きく関わっているということである。彼女たちは妊娠 8 ヶ月くらいまで自分でも妊娠に気づかないか、あるいは一度検査して妊娠していることに気づいてもそのことについて考えないまま出産直前もしくは出産時、出産直後に各窓口を訪れている。

調査先では以下のような説明をしている

> 妊娠に悩みを抱える女性専門心理相談：
> 匿名出産をする女性は妊娠に気づくのがとても遅い人が多い。妊娠を頭の中で拒絶しているので、胎児も背中側にへばりついていてお腹が膨らんでいない、体重も増加しない、不整出血が続いていて生理が来ていないことに気づいていない。
> 産科ソーシャルワーカー：
> 匿名出産をする女性の多くは妊娠を否認しているので、妊娠を他者に知られたくないというよりは、女性自身が妊娠後期まで妊娠した事実に気付かないことが多い。匿名出産を選択する要因は社会的経済的理由ではなく、頭の中で子どもを迎える準備ができているかどうか。
> 最高裁判所判事：
> 私は CNAOP 事務局長だったので再会支援を望む元国の子の依頼で多くの匿名出産をした母親たちと電話で話しました。かなりの割合の女性が妊娠の否認があったと言います。出産の否認「私は産んではいない」という認識の人もいます。物理的にそのときは育てることが無理だった、1 人だった、子どもの父親が反対した、婚外子だった、さまざまですが、理由は聞かないことになっています、それは彼女たちに育てない権利があるからです。理由などなくていいのです。16 歳 17 歳でもお金がなくても育てたかったら育てる支援が受けられます。育てる方法があることは情報提供されますが、それでも育てないと選択する女性がいます。育てられるけど、今は簡単ではないという判断をするということがあるのです。

調査先の市立病院産科に最近来たというケースではこのようなものがあった。

> 1.19 歳学生。自宅で突然出産、妊娠に気づいていなかった。自分で救急車を呼んで母子ともに運ばれてきた。同居している両親も妊娠には気づいていなかった。父母が帰宅する前に家を片付けたいと 3 時間で病院を後にし、後日匿名出産に必要な手続きをしに来た。
> 2.40 歳大企業の管理職、3 人子どもがいる。妊娠直前に気づいたが夫には気づかれていない。午前中仕事をし、午後休をとって出産し、夕方子どものお迎えに行った。

妊娠を否認していた場合、出産直前や出産と同時に知るもしくは自覚することになるの

で、10 ヶ月間の赤ちゃんを迎えるための準備期間がないことになる。本人が気づいていない場合周りの人も知らないので赤ちゃんを社会的に迎える準備も当然できていない。また、パニックで手放すことがあることもあり、2 ヶ月の猶予期間が必要という根拠になっている。

INED と CNAOP は 835 人の匿名出産をした女性への調査[10]をおこなっている。その結果、女性たちのあげた理由は以下である。

43% 子の父との関係によるもの(離別、拒否、暴力)
28% 経済的社会的困難
19% 準備できていないこと
11% 家族の不理解(この場合、本人の想像より家族は拒否しないことが多く引き取りケースが多い)
5% 学業・キャリアの不安

ただし、対面調査であるため、他人に個人的な事情やパートナーとの複雑な関係については話しにくく、当たり障りのない経済的社会的困難を挙げた人が多いことが推測できると注意書きしている。経済的にも社会的にも実際に幅広いプロフィールの人が該当する。

10 人中 7 人が中絶が認められている 16 週を過ぎてから妊娠に気づいた。
10 人中 4 人は妊娠 7 ヶ月以降に気づいた。
平均年齢は26歳。一般の出産年齢より4歳若い。
18歳未満(未成年)は10%、50%が25歳未満。
73%は父とは同居していない。
50%は子どもがいない。
フランス国籍がない人は10%未満。(海外からフランスに来て匿名出産を希望する者がいるという意見があるが実際にはごく少数である)
40%は実家暮らし。10%は友人宅や不安定住居。
32%が学生。28%が仕事をしている、10%が求職中、11%が低所得労働、18%が社会的活動なし(NEAT,主婦)、22%が高卒専門卒以上、9%が大学二年以上の学歴。
10%が健康問題あり。
調査結果によると、匿名出産をする母に特有の傾向は見られない。それゆえ、予防策も考えにくい。しかし、カップルの間の問題や経済的な問題が大きいほど妊娠の発見が遅れ中絶に間に合わないということが言える。

筆者の調査先での共通の意見は、妊娠の否認は、様々なプロフィールの女性に生じるが、ある程度共通している部分があるのは、女性が幼少期に父親や両親、もしくは世話をし

[10] INED, CNAOP, 2011《 Les femmes qui accouchent sous le secret en France, 2007-2009 》, *Population*, 66 (1), p. 135-170.

てくれる近しい関係の人間から拒絶されたと感じる経験があり、妊娠を否認する女性は、人と距離を置き、心理的に孤立し、パートナー間でもコミュニケーションが少ないとする。悩みが頭をしめていて妊娠や生まれて来る子どもについて考えるスペースがない、もっと早くケアを受けることができていれば、と話す。

Simmat-Durand ら(2015)は、「出産」と「誕生」を区別し、「出産」は物理的に胎児が母体の外に生きて出てくることとされ、「誕生」は物理的な分娩だけでなく社会的なプロセスを指すものとされている。母親やコミュニティに受け入れられて初めて、子どもは社会的な存在としてのスタート、つまり誕生することができる。そしてそのためには、関係性の絆、生まれてくる子どもを守り、迎え、母を支えるという社会的な下地が必要であるとしている。

また共通した見解であるのが、母親の意思を尊重することである。母親が希望しないのにまわりの圧力で子どもを引き取るとかえって母子ともに苦しむことにもなると言う。

> パリ市立乳児院：
> 生まれて数ヶ月、数年経ってから乳児院に来る子どもは、母親が出産時に本当は育てることを躊躇していたが、誰かに反対され不本意に子育てすることになり、結局うまくいかなかった場合が多い。母親との関係性がうまく築けないまま育った子どもはダメージを受けている分リカバリーに時間がかかる。母親の意思が尊重されることで、辛い人生のスタートを強いられる子どもを防ぐことができる。
> セーヌ・サン・ドニ県児童相談所：
> 国の子ではなく実親が認知しているものの産後赤ちゃんを自宅に連れて帰らず、そのままずっと病院や乳児院にいる子どもの方が匿名出産の 600 人よりずっと多く、先が見通せないので赤ちゃんたちはもっと苦しんでいる。
> 産科のソーシャルワーカーが「母親はアルコール依存症だが、頑張りたいと言っているので大丈夫だろう」と言って母子を家に帰した。子どもは半年後に保護されたが、とても悪い状態だった。子どもは小さければ小さいほど弱く、悪い環境やネグレクトの影響を受けやすい。精神的にも成長が遅れていたし、脳科学的にも遅れていた。

リスクがあるのは、支えてもらえたことも、誰かを頼れたこともなかったのでそれらを期待せず、話し合いをすることを学ぶ機会もない状況のようである。そうなってしまった人を見つけ出すのは難しい。そうなる前に、相談できる人がいることを知る機会を作ることが大事である。

予防としては若いうちからケアし赤ちゃんを迎えられる準備をすることだ。フランスでは 3 つのステップを用意している。

1. まずは幼少期から大人になるまでの一貫した心理面のサポート。日本の保健所に近

い、妊娠中から子どもの 6 歳まで無料で育児相談や診察に通う妊産婦幼児保護センターにも保育園にも幼稚園小学校中学校と心理士が配置され、子どもたちに声かけをしている。

2. 次にティーンエイジャー以降、パートナー間の悩みについての相談、避妊や性に関する相談ができる場を設け、希望するタイミングに子どもを迎えられるよう支援している。若者向けの仕事を探せる場所やシェルターにも心理職が配置されている。若いうちから心理面のケアをすることでその人が親になった時に子どもとよりよく関わることができると考えられている。

3. そして不妊治療をするときは不妊治療を専門とする精神科医の面談を経てからスタートし、女性に負荷がかかりすぎないよう、女性が適宜ケアをうけられるよう配慮されている。妊娠中も産科にも妊産婦幼児保護センターにも心理士がいて妊娠中からケアをする。

> 筆者がフランスの施設に措置されている子どものプロフィールで複数見つけたのが、母が恋人をつなぎとめるために妊娠するよう計画し、妊娠を機に結婚にこぎつけたというケース。もしくは、母が妊娠し、夫婦が結婚せざるを得なかったケース。つまり、母にとっては、夫とうまくいかないとき、「この子がいるせいで」「この子がいい子にしていないから」と何かとその子供だけが虐待の対象になり、夫にとっても、「この子ができたせいで今の不本意な結婚生活を受け入れざるを得なかった」と子どもを虐待していた。他に兄弟がいても、夫婦にとって特別な意味合いがあるのは 1 人なので、1 人だけ虐待されていた。また、母が妊娠をきっかけに学業や恋人を失ったケースもあった。つまり、子どもを迎えることを目的としていない妊娠(他の打算があるケース)もしくは、妊娠によって母が望んでいない事態が起きてしまったケースは子どもが難しい役割を担わされるリスクが高い。妊娠中に相談できる場所が十分利用されることが必要であろう。

匿名出産はどのような社会的経済的状況の人でも利用しており、利用する女性たちの多くは出産の直前まで妊娠に気づかないもしくは自覚していない妊娠否認の状況にあり、その背景に精神的なケアが十分受けられておらず乗り越えられていない経験があることがわかっている。また、周りの人が無理に女性に養育を押し付け、その後母子ともに苦しむ赤ちゃんもいるので、女性の意思の尊重、育てられない場合は養子縁組にした方が赤ちゃんにとっては負担が少ない。いずれにしても女性にも赤ちゃんにも継続的なケアが必要とされている。

お腹にいる子どもとの関係に悩みがあったら相談できる場所がある

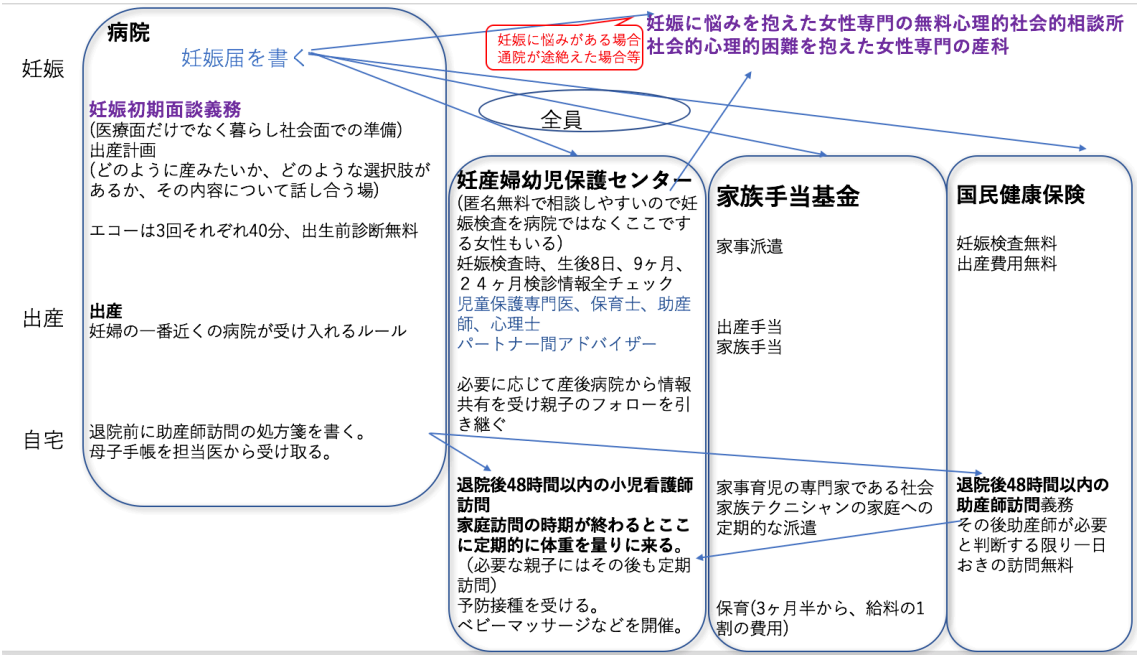
先の章で、女性の意思を尊重することが重要であると述べた。実際にそれを可能にするためにフランスでは 3 つの相談先が役割を担っている。

① 妊娠初期面談(全員義務。Entretien prenatal précoce[11]))
産科で妊娠 4 ヶ月の頃におこなうことになっている。医療面だけでなく心理面社会面での赤ちゃんの受け入れ準備を確認する目的で「予防」として義務化された。妊娠中、産後にどのような支援を希望するか女性から聞き取る機会であると健康保険のホームページには書かれている。
② 妊娠に悩みを抱えた女性専門の無料心理的社会的相談所
(1996 年の Mattei 法で、臨産婦に必要なのは物理的支援だけでなく、社会的精神的支援なので、児童相談所が妊娠中の女性の社会的精神的支援もするよう義務づけた[12]。CASF222-5 にも妊婦の支援は児童相談所の役割と書かれている。パリ市は民間団体に委託し独立した形で運営している無料心理的社会的相談所がある)
③ 社会的心理的困難を抱えた女性専門の産科
また、病院の産科には母子を丁寧に見守れるよう助産師を多く配置した専門フロアをもうけているところもある。

全員妊娠初期面談を受け、妊娠中から妊産婦幼児保護センター(日本の保健所に近い)による心理ケアや家族手当基金(家族手当などを担当している機関)による家事派遣、産科のソーシャルワーカーによる社会的支援も受けることができる。産科は妊婦の受診が途絶えたときなどもチェックし専門的なケアができる機関につなぐ。パリ市とパリ郊外の病院は共通システムなので、受診が途絶えた女性について警告をアップすると情報共有することができている。地方の場合は行きそうな先があればその県に警告を送る。

図:妊娠に悩みがある女性を専門機関につなぐ流れ

[11] https://www.ameli.fr/assure/sante/themes/grossesse/preparation-parentalite
[12] La loi dite *Mattéi* (n° 96-604 du 5 juillet 1996) a ainsi prévu qu'il leur serait proposé ou qu'elles pourraient demander à **bénéficier d'un accompagnement psychologique et social** de la part du service de l'aide sociale à l'enfance.
https://www.senat.fr/rap/r01-065/r01-0652.html



妊娠初期面談

妊娠初期面談は義務である(L'entretien prenatal précoce[13])。2007 年の児童保護改正により予防に力が入れられ、この妊娠初期面談が第一の予防のステップとなった。妊婦の医療面だけではなく、社会的精神的状況を確認することを目的としている。しかしどの専門職が担当するかの指示はないので、産科によっては助産師が担当し、そこまで社会的精神的チェックを受けたと感じなかったと答える妊婦もいる。

産科には専属のソーシャルワーカーが例えばパリ市立 Port-Royal 病院には 5 人、心理士が 4 人いる。ソーシャルワーカーによると、フォローする妊婦の 5 割は滞在許可がなく、滞在許可、身分証、健康保険、住居など幅広い支援を連携先と一緒におこなう。

ここでは筆者が受けた妊娠初期面談について記載する。

> 産科で医師が妊娠の診断をすると妊娠届を医師が書き、その内容は妊産婦幼児保護センター、国民健康保険、家族手当基金に共有される。妊婦自身が移動し届けを出したり母子手帳をもらいに行く必要はない。妊娠中の検診と出産費用は無料になる。
> 筆者は医師の診察後に妊娠初期面談が義務であるから診察室で待つようにと言われ、

13 https://www.ameli.fr/assure/actualites/lentretien-prenatal-precoce-un-accompagnement-desormais-obligatoire-pour-les-futurs-parents

医師と入れ替わりでソーシャルワーカーが来た。そこでソーシャルワーカーに家族がフランスにいるか、夫の働き方やどれくらい家事育児を期待できるかなどを質問された。そして移民夫婦で家族が近くにおらず、夫がサービス業で夜間や土日、長期休暇期間不在であることは 1 人で子どもをみる時間が長く簡単なことではないのでサービスを利用するようにと助言をもらった。健康保険の範囲で、家事育児の支援を定期的に受けることができることなど教えてもらった。出産後の暮らしについて考えたことがなかったし、自分が普通よりも困難が予想されるとは自分では思い至らなかっただろう。サービスがあることを知らなければ調べることもしなかったと思う。自分では思い至らなかったことを複数指摘されたので、ソーシャルワーカーへの信頼感が芽生え、今後も何かあったら相談してみようと思える機会になった。その後も、妊娠中に絶対安静の診断をされたり、早産の危険性が医師に指摘される度、妊娠中の入院、退院の度に医師と入れ替わりでソーシャルワーカーが現れ、自分がしたこともない心配をしてくれた。

このようにして親になる準備が妊娠発覚時からされ、「複数で子どもを育てる」ことが推奨され、専門職の存在を知らされる。他にも、出産時に子どもの病気を知らされ母親が泣き崩れたケースや産後 2 週間産休があるはずの父親が不在がちだったケースなどは特に手厚く産後の家庭訪問がおこなわれている。専門職たちが何度も親に会う機会をつくり、相談できるようにすることで「親になること」と子育てを専門職が見守り支えうようとしている。

また産科のソーシャルワーカーは匿名出産の際も重要な役割を果たす。

ソーシャルワーカーへのインタビュー：
匿名出産を希望する女性には妊娠中の検査の際、決してエコー画面を女性に見せない、けれど元気かどうかは伝え安心させるなど配慮が必要ですが、思い至らない助産師もいるのでソーシャルワーカーが先回りして準備します。
匿名出産の女性には、産前も産後も赤ちゃんの泣き声が聞こえないように入院ベッドを配慮します。妊娠中は医療的なケアを要する女性たちと同じフロアにし、産後は赤ちゃんは小児科で預かり、女性は産前と同じフロアのベッドを使います。
匿名出産の場合は、帝王切開にならないように最大限努力しますので、60 人近くみてきたなかで一人しか帝王切開していません。女性に傷跡が残らないようにということと、なるべくすぐに社会生活に復帰できるためです。また新しいパートナーができたときに、一度も出産経験がないように見えよるようにしなければならないので帝王切開はしません。医療チームも普通より多い 4 人体制でお腹を押して赤ちゃんを出します。
不思議なことに、ほとんどの場合、赤ちゃんは元気です。未熟児や、病気や障害を持って生まれる子はまれです。だいたい 3,2kg くらいと通常と同じくらい元気に生まれます。出産もとてもスムーズで 2 時間くらいで済んで病院を出てしまう女性が多いのも特徴です。ちょうど出産予定日くらいに生まれることが多いのも特徴です。

妊娠に悩みを抱えた女性専門の無料心理的社会的相談



パリ市は民間団体に委託して独立した妊娠中に悩みを抱えた女性専門の無料心理的社会的相談所をもうけている。2018 年には 88 件相談があり、63 件は出産し、13 件は匿名出産、10 件は匿名出産を撤回した。利用者は 14-43 歳と幅広く平均 25 歳。相談者の半数は移民出身か移民だが、匿名出産は 1 人もおらず、経済的な理由と匿名出産は結びつかない、匿名出産はむしろ経済的社会的に安定した状況の人が多いとする。

心理士兼ソーシャルワーカーへのインタビュー

目的：

私たちの役割は彼女のかかえているものを軽くすることです。生まれてくる子どもが、感情的な負荷を担って出て来ることのないようにすることです。
自分が妊娠したということをとても苦しく思っている人はいます。望んだ妊娠だったとしてもです、自分の意思とは裏腹にです。だからといって虐待をするわけではありませんが、ケアをしたら女性も苦しみを解放でき、赤ちゃんの負担も減らせます。
きちんとケアを受け病院で安全に生まれた子どもを良いコンディションで送り出すことができるのは社会にとってとてもプラスなことです。
匿名出産の場合は子どもが母のもとを離れる準備ができた上で送り出すことができるということが重要です。ですから、私たちが送り出した子どもは調子がいいと乳児院に言われます。
匿名出産とケアがあることで、出産費用 30 万円が国にかかったとしても、母が苦しむ、十分ケアされない子どもが育つ、稀に遺棄や虐待リスクがあるよりは社会全体にとってずっといいのではないでしょうか。この制度があることで女性にも子どもにもそれぞれにケアをして社会に送り出すことができるのです。

匿名出産を希望する女性たちの特徴：

人と距離をおく人、孤独であると感じている人が多い。想像の中で本人がそのように現実を受け取っている。閉じている人が多い。

匿名出産を希望する理由：

母親になることを受け入れられない個人的な感覚があることは確かですが「実際状況的にはなぜ今ではダメなのか」というのは私たちにはわからないままです。社会的に難しい状況にいる女性より、パートナーがいて、経済的にも恵まれている方が多いです。なので、状況や社会的経済的な理由ではなく、精神的に今子どもを持つというこ

とが受け入れられないということを感じます。

背景：
幼少期に断絶を経験していて、その断絶を乗り越えられていなかったために、大人になってからの恋人との別れというような断絶を他の人よりも乗り越えるのが困難なのです。なので、誰かを頼るとまた断絶を乗り越えにくいことをわかっているので、そもそも人と距離を置き、頼らないのです。
幼少期の断絶の経験は実の親や祖母などその子のケアを主にしていた人との間のことです。親友が裏切ったとか、恋人に捨てられたといったことを女性が話したとしても、裏に幼少期の経験がありあります。妊娠拒否は親からも拒否されているということでもあります。
何年も不妊治療をして、妊娠を希望していても、いざ妊娠すると泣きながらここに来る人はいます。
研究でわかっているのは、人間というのは嫌なことは意識の裏に追いやってしまうのですが、妊娠すると追いやっていたことが意識の中に戻ってくるのです。辛い経験がたくさんある女性にとっては、それらが全て蘇る時期なのです[14]。
トラウマというのは、一度受けるとその後忘れていてもまた突然現れることがあります。現在の出来事自体がショックなのではなく、幼少期のトラウマ経験があるから現在の出来事についてショックを受けるということです。
匿名出産をした人は子ども時代の関係性に問題がある場合がほとんどです。子ども時代からひっかかっている経験があり、妊娠を受け入れることができないという現在につながっているということです。何かが残っているために、成熟することができず、子どもを受け入れる準備もできないのです。精神的に、踏むべきステップのいくつか、踏めていないものがあったと感じます。
子ども時代にもっとケアをしていればこんなに悩まずに済んだと思います。

周囲の人に話さない理由：
少なくともここに来る人は全員、望んだ妊娠だったとしても今は妊娠していることを苦しく感じていて、どんなに親しい友人がいても妊娠していることを誰にも話していません。それは、重要な決断であるということがわかっているからこそ、そのことについて話をした人の意見に影響を受けたくない、自分の決断を左右されたくないと思うからなのだそうです。
その考えは間違いではないと思います。なぜかと言うと、結局家族やパートナーの一人にでも話した人は結果的に 100%その子供を引き取っているからです。自分が望んでいなくてもそのような結果にならざるを得なかったのです。家族に言ったばかりに自分の意思とは違い子どもを引き取ることになった女性の場合は心配です。あとあとまで子どもとの関係性について相談に来ます。匿名出産は、一人で考える女性に寄り添うプロフェッショナルの存在が必須です。大きな決断を一人でするという先々までの負荷をやわらげ、自分で判断することを支えるためです。
こういう結果を見てきているので、誰にも言わない理由はよくわかります。身近な人には誰にも言わないということが、自分で決断する上で重要な点です。
匿名出産を本当にする人のほとんどが、子の父は妊娠さえも知らされていません。カップルだったとしても、パートナーに知らせていません。
妊娠を苦しく感じていることに罪悪感があるので公的機関は苦手です。

[14] Monique Bydlowski “La transparence psychique” https://www.cairn.info/revue-devenir-2001-2-page-41.htm

ここでしていること：
妊娠を苦にしている人にとって、妊娠の話をすると二度と来ないでしょう。苦しみを取り除けるものから取り除くことが何よりも大事です。
トラウマを言葉にし、ケアして、あとで女性と子どもがいい状態で産まれるようにすることです。
育てるだけのエネルギーがないとしたら、何をすることができるか。自身をどれだけケアできるか、話せることを話して生まれて来る子どもの負担を減らせるか。手紙を書くことはできるか。
私たちが聞かなくても、子ども時代の親との関係だったり、女性らちは辛かったことをここで話し、泣いて、また違う話をします。来た時には「なんで自分が不調なのかわからない」という状態です。「こういう理由で妊娠を喜んでいない」と妊娠を喜ぶことができない理由を整理して説明できる人はいません。話す内容が多すぎて出産までに妊娠や出産の話にはたどり着かないことも多いです。
タブーがあって、妊娠していることの苦しみを話すことができず、ケアも受けられないとしたら悲劇的なことです。
例えば妊娠否認をしていて、出産直前や、出産のときに初めて妊娠に気づいて、短期間に「どうするの？どうするの？どうするの？」と追い立てられた場合です。特に産科には親は子どもを抱っこすれば愛着がわくと考えているような助産師がたくさんいます。「とりあえず抱っこしてみて」「お母さんの声を聞いたら安心する」などと言って混乱させます。急に子どもを迎えて 10 年経っても子どもとの関係性が難しいという女性も戻って来ています。
子どもの将来にとって、よく理解し整理され、離れるとわかって親元を別れ、新たな家族のもとに行くのは大切なことです。母も私たちのサポートのもと、産科で子どもに直接説明します。子どもが乳児院に行って、そのあと新しい家族に行くと説明します。ここで支援している女性たちは全員産科にいる間、子どものケアもします。子どもに説明をして温かい言葉をかけたり手紙を書いたり子どものことを想った行動をします。それを感じた子どもは、感じられなかった子どもとそれから先の人生で大きな違いがあると思います。

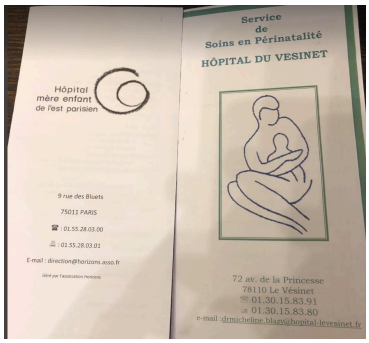
匿名出産の意義：
ここに来る女性たちはほんとうに悩みが深くて、妊娠を機に全て噴出したけれど、そもそもかなり精神的に孤立の深い状態で生きていたり、大きなトラウマを抱えていたり、知り合いが一人もいなかったりしている人たちです。とても自力で妊娠検査に定期的に通うことなどできない状態ですが、それでもフォローがあるおかげで皆病院で赤ちゃんを産み、母親として手を尽くして送り出しています。
妊娠をなかったことにできる、子どもと別々の人生を歩むこともできる、その可能性が許されていると知ることで、今自分の身にせまっている出産と子どもの誕生を一時的にでも距離を置いて考えることができたかもしれません。精神的に、この選択肢が全くないのとあるのでは、あった方が柔軟さ、精神的ゆとりをもたらしてくれると思います。利用する人がごく一部であったとしてもそういう意味でも大きな意味があります。選択肢があるということが重要なのです。「妊娠をなかったことにするということも認められている」というのは心理的負担として違うものです。「どうしてもできなかったら誰かにお願いしていいんだ」と思えたら悩みの中でも少しは息つぎができると思いませんか？「自分で育てるしかない、でもできそうにない」という気持ちで産まれてくる子どもに出会うのと、「お願いもできたけれどやっぱり自分で育てたい」と思うのとでは、同じ引き取るということでも気持ちが全く違います。
「私はこの子どもは育てられない」ということもありうるし、許されていいことだと

思います。子どもを想ってのことだからです。
Mattei 法という法律で妊娠中の女性を精神的にサポートする窓口を作っても、匿名出産の数は増えたことはありません。福祉サービスが充実するにつれ減る一方です。実際ここでも 63 人妊娠を苦にする女性が訪れ、ケアされる中で少なくとも 10 人は匿名出産希望だったのを撤回し育てることを決断し、他の 40 人も匿名出産の選択肢を知りながら、最初に来たときより良いコンディションで子どもを迎えました。
パリには妊娠中の女性専門の病院が２箇所もあるので、精神的な負担がとくに大きくて眠れないなどの問題がある女性はそこに紹介します。

産科のソーシャルワーカーへのインタビュー
院内に心理士は 4 人いますが、女性には外部にある専門の社会的心理的相談室に行くように言います。大晦日の夜 21 時でも出産を迎える女性がいたら病院に来ましたし、週末も携帯電話に誰かしら答えます。産後 10 年間毎年子どもの誕生日に手放した子どもについて話に来る女性もいるそうです。病院の心理士にはそのような対応はできません。
最初は紹介しても積極的な女性はいません。妊娠や出産について考えたくないからです。けれど、私は女性の前で電話をかけて女性のことを紹介しよろしくねと頼みます。女性には「一回行って気に入らなかったら二回行かなければいい」と言います。なのに、ほとんどの女性はその後毎週行きます。二ヶ月に 8 回も行くのです。
匿名出産の記録にも大切な役割を担ってくれます。準備していないと CNAOP の聞き取りに率直に「学生で金がなく、妊娠中ドラッグもやっていたし複数の男と寝たから誰が父親かわからない」と答える人がいます。けれど、心理士の手助けがあると、将来子どもが見たときのことなどを一緒に考えるので、もっと言葉を選べるようになります。同じ人が「良い家族に恵まれ、教育熱心な両親で、今学生であることも考え」と自分の違った面を子どもに残そうと考えるようになるのです。両方真実であったとしても、子どもにとっては全く違った母親のイメージを持ち、それから先を生きることになります。専門のサポートを得て一緒に書類に書くこと、子どもへの手紙の内容を考え、出産時赤ちゃんに話すときのこと、使う言葉も一緒に選びます。心理的社会的相談室のサポートなしに匿名出産という制度は完成しない、匿名出産を補完しているのが彼女たちだと思います。

親としての準備を支える機関があり、養子縁組を希望したとしても、母親と子どもそれぞれがより良いスタートが切れるよう支えている。匿名出産と女性の心理的社会的サポートはセットで存在する必要があることが伺える。

社会的心理的困難を抱えた母親専門の産科



日本では精神科と産科を一緒にケアすることのできる病院が多くないことが課題とされているが、フランスの産科は心理士を配置しており、精神科も同時にかかれる病院もある。

また、産後退院すると 48 時間以内に助産師か小児看護師が家庭訪問することになっており、出産時の医師がその処方箋を書く。その後も必要な限り隔日家庭訪問をおこなう。それをおこなう小児看護師か助産師が母子の状況が落ち着き、妊産婦幼児保護センターへの引き継ぎが良いと判断した時点からそちらに定期的に通うようになる。筆者の場合は、帝王切開の抜糸を自宅で助産師がおこない、赤ちゃんの体重増加が安定した時点で引き継ぎを提案された。妊産婦幼児保護センターには小児看護師、児童保護専門医、助産師、心理士などがおり、予約不要、無料で診察を受けたり育児に関する相談ができる。「定期的に赤ちゃんの体重を量る必要がある」というのが口実だが、実際には広い待合室で心理士が話しかけてきたり赤ちゃんと遊んだり、親子の状況を確認している。

妊娠中から切れ目なく、専門職が親子の状況を確認し well-being を守ることをミッションとして配置されている。親が望む限りは実親が親としての役割を果たすことができるように専門職たちが見守っている。

経済的社会的状況に左右されず親が望めば子どもを産み育てられる、養子に出すこともできる。

- 匿名無料で診察を受けたり相談できる公的機関が身近にある
- 経済的な事情で子どもを諦めなくていいような仕組みがある
- 無料で妊娠検査、出産でき、健康保険で家事育児のサポートが頼め、保育は収入の1割で夜間や週末に対応した保育アシスタント制度もある。週末だけ里親といった方法もある
- 収入が少ない場合は基本的に無料で大学、大学院も卒業できる
- 母子施設も夫婦で住めたり、施設内に保育園があって仕事や学校に行ける
- 匿名出産することができる
- 妊娠中に悩みがある場合は、ケアを受けることで親も子どももより良い状況で次のステップに進むことができる。
- 育てたいかどうかという母親の意思を尊重することが大事で、無理に押し付けても母親も子どもも苦しむことになると言われている。

しかし、実際パリの住環境は飽和状態なので、市内に住むことは競争率が高く、施設や公的住宅は郊外のことが多い。希望する条件ではないところを転々としながらいいところを待ったり、郊外の住居を与えられては都心に戻って「住居がない」という訴えを繰り返す人もいて、誰もが望む住環境を公的機関に与えてもらえるわけではないのが現実である。

匿名出産まとめ

匿名で産み養子に出し、子に受け入れる用意のある親を与えることができる

妊娠中に専門職のサポートを得て準備して親になることができる

- 母親も子どもを認知するかどうか決めることができる。「避妊でき、中絶でき、産んでも育てない選択をすることができる」
- 父親は遺伝上の父親ではない人も子どもを認知することができる。子どもに 2 人の親を与えることが重視されている。
- 両親が親権を維持し、離別後も養育に携われるよう必ず家庭裁判所に子どもがどこで過ごすか届け出ることが求められている。養育費の請求や面会は家族手当基金が仲介することができる。
- 匿名無料で診察、避妊具の提供、中絶を受けることができる家族計画センターがある。パートナー間や恋愛の相談にも専門家が応じる。将来親になる若者のケアを目的としていて特に暴力被害経験がないかチェックし、あった場合はケアする。赤ちゃんが望まれたタイミングで生まれてくることでリスクを軽減しようとしている。
- **妊娠の際は医療面だけでなく社会面心理面でも支援が必要ないか確認**するための妊娠初期面談が全員義務づけられている。
- 妊娠に困難を抱えている女性のケアを専門とした無料社会的心理的相談室や、精神面も同時にみることのできる病院がある。
- **産んでも育てられない状況がある、ということを認め**、そのための仕組みがある。仕組みがあることで、妊娠中に困難を抱えている女性にとっては追い詰められずに考えることを可能にしている。
- まわりの人が本人の意思に反し子どもを引き取る決断をさせたとき、お母さんも赤ちゃんも苦しむことがある。周りの人に言うと引き取ることになるため、迷いがある場合は周りに相談せず専門職に相談し自分自身の答えを出すことが重要である。
- 社会的支援が充実し、経済的な心配があっても希望すれば子どもを育てられる制度があっても、毎年安定して 600 人程度が匿名出産で生まれている。匿名出産をする

女性は経済的社会的に困難な状況にある女性よりも、心理的な困難を抱えつつもケアを受けられなかったため、赤ちゃんを迎えられる状況にない女性と言うことができる。若い時からケアを受けることができていれば防げたのではないかと考えられている。

- 匿名出産は女性と子どもを救済するための制度で公衆衛生として存在する。公立私立全ての病院で受け入れ義務がある。
- インターネット検索をすると一番最初にわかりやすい国のホームページが出て、郵便番号を入力すると近くにあるどこに連絡すればいいか容易にアクセスできるようになっている。
- 合法な制度が存在することで遺棄することは違法であると線引きすることができる。
- 匿名出産を希望する女性にも必ず自分が育てたい場合は社会的支援が受けられることが伝えられる。
- **匿名出産と、女性の心理的社会的支援はセット**で必要である。パリ市は心理士とソーシャルワーカー両方の資格を持った専門職が女性をケアし、女性も子どももケアされて社会に送り出されるように支援している。心理的社会的支援を経て送り出された赤ちゃんは乳児院でも調子良く過ごすことができている。
- 赤ちゃんに真実を説明すれば赤ちゃんが不安になったり疑問を感じたまま引っかかりを持って生きずに済むので、誕生時から赤ちゃんに関わる大事なことは全て赤ちゃんに説明される。言葉を適切に選べる心理士がサポートする。
- 妊娠中の女性も児童相談所に支援義務があり、母子施設に入所することができる。
- 各県に匿名出産について訓練された担当者がいて、匿名出産をする女性に直接制度の説明をし、子どものために情報収集することが実施にあたって重要な点である。彼らは医療機関への制度の理解や手続き方法の周知も担う。
- 匿名出産後 2 ヶ月は猶予期間がある。妊娠していると認識するのが出産直前だったり出産時である「妊娠否認」をしている女性が多いので、出産時は準備できていない、パニック状態ということも見受けられる。実際 15%もの女性が 2 ヶ月以内に引き取りに来ているため、この猶予期間は重要であると考えられている。2 ヶ月と決まっていることで、子どもに対する権利が実親にある期間と、養親にある期間が明確に線引きすることができる。
- 妊娠否認の背景、匿名出産をする女性の多くは、幼少期の辛い経験がケアされてきていないことが多いということがわかっている。予防として家族計画センターでは

「性」「避妊」の相談や診察をケア実現の機会にしている。

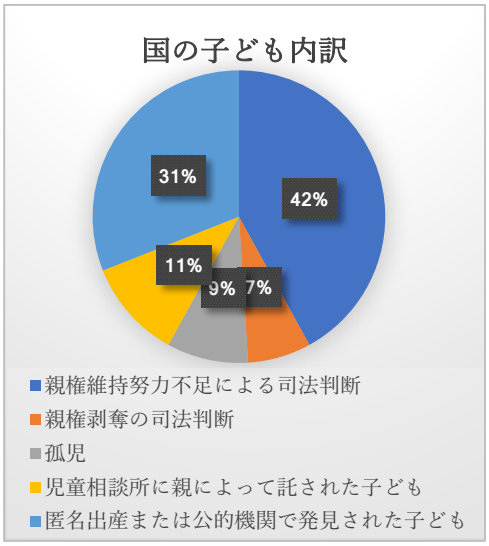
- 18 歳までの暴力被害経験が初交年齢を早めること、子どもを迎える年齢を早めることが研究で明らかになっており、ケアすることで望まない性に応じないで済むようになると考えられている。
- 2 ヶ月の猶予期間は子どもにとっても有意義であると考えられている。それは、専門職のそろった乳児院などで手厚いケアを受け、赤ちゃんのニーズを十分理解した上で赤ちゃんに一番適した養親を選ぶことができるからである。
- 出自を知りたい子どものために国が情報整理をする機関を用意している。そのことで、匿名出産をする女性と子ども双方の権利が守られ、利益が調整できるようにしている。
- 出自に関して問い合わせをするのは養子の 5%にすぎない。情報がただ欲しいのではなく、現在抱えている問題を解決するために情報へのアクセスを求めているので、**心理士が問題の解決を支える**ことが重要である。

5. 養子縁組

養子縁組[15]可能な子どもは明確にわかるようになっている。1章から紹介しているように親権者がいない子どもは「国の子(Pupilles de l'Etat国家被後見子とも訳される)」(社会家族法224-4)というステータスになり国が後見人となるためである。
匿名出産の子どもは国の子としての期間は短い。82%が平均2,7ヶ月養子縁組候補の家庭のもとへ委託され半年後に養子縁組、15%強は2ヶ月以内に実親によって引き取られる。
国の子は2017年には3888人いたが、半分は社会的養護出身の子どもである。9割が司法判断で施設や里親宅に措置されているため、半年か1年ごとに裁判がおこなわれ、親が養育する意欲があるのか見極める機会になる。さらに2016年の法律で1年以上親と連絡がとれない、親が面会や裁判に来なかったり子どもの必要としていることに応えない場合に、親権を剥奪し養子縁組できるよう準備する専門機関ができた。「児童相談所に委託された子どもの状況を調査検討する学際的、複数機関横断的委員会CESSEC(La Commission d'Evaluation de la situation et du statut des enfants confiés, 社会家族法

[15] 日本と同じように実親の履歴は残らない完全養子縁組(Adoption plénière)と、実親の履歴が残る単純養子縁組(Adoption simple)があるがここでは前者のみを扱う。

Art.L.223-1[16])」と言う。2年ごとに社会的養護の子どもの状況を確認する。



(ONPE, 2019 をもとに筆者作成)

グラフの 42%「親権維持努力不足によって司法判断で国の子になった子ども」はまさに CESSEC の調査の結果司法判断があったケースである。7%は父親が母親を殺し、父親が親権剥奪になるなどのケースで、他の親戚が後見人にならなかった場合である。

2017 年に 3888 人の国の子がいる中で、新規に国の子になったのが 1260 人、養子縁組・成人等で国の子でなくなったのが 952 人で 34%にあたる。国の子は平均 6 歳で 1 歳未満は 19%である。養子縁組されていない子どもたちは 80%が里親宅、他は寮などにいる。
親権維持努力不足によって司法判断で国の子になった子ども(42%)が増えている分、すぐに養子縁組を望むとは限らない子どもが増えている。約半数が特別なケアを 1 つ以上必要としている子どもである(年齢が高い、兄妹がいる、病気や障害など)(ONPE,2019)。

> 現国の子へのインタビュー(13 歳男)生まれてからずっと里親宅に暮らしている。
> 「お母さんとは連絡があることもある。妹は国の子ではない。なぜかはわからない。他にも妹がいるけど遠くの県にいて会ったことはない。いつ自分が国の子になったかも覚えていない。お母さんはずっと精神病で入院したり、違う県に住んだり、連絡が何年もとれなくなったり、自分のことをいらないと言ったり、けど会いたいと言ったこともあったと思う。妹には会っていると思うけど、自分はもう 3 年は会っていない。これまでも養子縁組に行きたいと思ったことはないし、これからもないと思う」

[16] CASF Art. D. 223-26.-La commission pluridisciplinaire et pluri-institutionnelle mentionnée à l'article L. 223-1 est dénommée commission d'examen de la situation et du statut des enfants confiés. (Décret n° 2016-1639 du 30 novembre 2016 relatif à la commission pluridisciplinaire et pluri-institutionnelle d'examen de la situation des enfants confiés à l'aide sociale à l'enfance prévue à l'article L. 223-1 du code de l'action sociale et des familles)

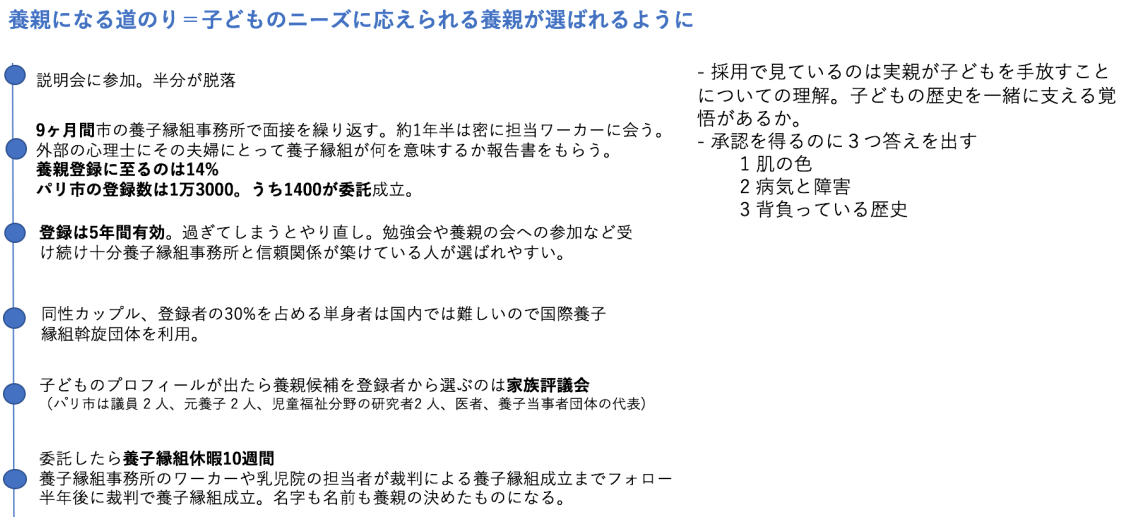
国際養子縁組 421 件(2019 年)(滞在費など約 130 万円)
国内養子縁組＝匿名出産 500 人、社会的養護出身 100 人

養親候補の承認は公的機関のみでおこなっており、民間機関で養子縁組をする際も公的機関の承認を経る必要がある。1 つの県で承認を得ると全国で有効で、国際養子縁組にも必要とされ、有効期限は 5 年間である。国内の養子縁組斡旋団体は年間 10 件しか成立せず、ほぼないに等しい。(パリ市養子縁組機関より)
全国で 1 万 3000 件、承認を得て養子を待っているカップルまたは単身者がいる。国際養子縁組を担う AFA は 35 カ国と提携しており、6338 件のフランスの承認済み養親が登録している。2018 年には 160 組の縁組を成立させ、フランスの養子縁組の 26%を占める。養子の 34,7%は病気の治療を必要としていて、76,7%は 1 つ以上の特別な支援を必要とする子どもである。(EPA, 2019)

パリ市養子縁組機関、養親になる道のり
職員は 35 人、うちソーシャルワーカー9 人、心理士 3 人、他は事務員。非常勤の児童精神科医。
職務内容：国の子の受け入れ手続き、CNAOP 担当の 2 名は病院や乳児院とやりとり、養親候補と約 1 年半毎月面談(承認を得るのに平均 9 ヶ月かかる)、勉強会や講習会の開催、国の子と養親候補との引き合わせ、委託後裁判まで半年間のフォロー。
パリ市の登録養親候補数(承認済み)は 551 件(2018 年 12 月 31 日時点、カップル、単身者)。2018 年に新しく養親として説明会に参加し承認までのプロセスを始めたのは 431 件、うち 9 ヶ月の最終ステップまで進め承認希望を出したのが 130 件、うち承認が得られたのが 121 件である。(EPA, 2019)
赤ちゃんの養親には 45 歳未満しか選ばれない。
子どもを託される養親の平均年齢は 41 歳（EPA 職員より）

パリ市の国の子は 40 人(2018)、うち匿名出産は 22 人。
6 人は実親が国の子のステータスを撤回させ、4 人が児童相談所に継続して委託、2 人が引き取り。
16 人は養子縁組目的で養親のもとに委託された。
他に国際養子縁組で 21 人の子どもがフランスに来た。

出自に関する問い合わせは 22 件あった。(EPA, 2019)



養子縁組可能な子どもがいる際に養親候補を決めるのは家族評議会(Conseil de Famille, CASF Art L224-2)という、養子縁組機関とは別の組織であることが重要なポイントである。養親候補を継続支援するソーシャルワーカーは養親に選ぶ権限があるわけではないので支援に徹することができる。家族評議会のメンバーはパリ市の場合、議員 2 人、元養子 2 人、児童福祉分野の研究者 2 人、医者、養子当事者団体の代表から構成されていて毎月候補の国の子に一番適した養親を選ぶ会議を開いている。

登録の手続き開始から承認まで約 9 ヶ月かかる。最低 1 年半はほぼ毎月養親候補は担当ソーシャルワーカーに会い、その後も勉強会や講習、養親の集まりに参加している。その方が事務所のワーカーたちと信頼関係が形成され、選ばれる確率が高くなる。

パリ市養子縁組事務所責任者

養親承認まで
経済状況や健康、住居は基準がある項目があるわけではありません。犯罪歴は調べます。
一番重視しているのは実親が自分で育てられないということの意味を理解しようとしているかという点です。子どもの歴史も含め支えることができるか。子どもに合わせられる養親でなければなりません。ワーカーは複数いるので、面接の中で夫婦についてどう感じたかグループで検討します。外部の心理士にも会いに行かせ、その心理士からみてそのカップルにとって養子縁組が何を意味するか報告書を書いてもらいます。本や映画のリストを渡し、読んだ内容について話し合ったり、講演会に参加してもらい感想を聞いたりします。

却下されるケースとしては夫婦で望む子供のプロフィールに誤差があること、養子であることを子に言うつもりがないかもしれないこと。孤立していて親しい家族がいないから新しい家族を迎えようとしていること。家庭内に秘密があって解決していないこと。弱さを感じ、うめてくれるものを探していると感じるときです。一度 6 ヶ月間休んでもらってから、半年後に来るように言うこともあります。養親の会には必ず参加してもらいます。自分の子どもの代わりの理想の子ども、できれば赤ちゃんを望んでいた状態から、子どもを理解し支えられる親になれるかどうかを 9 ヶ月間で見ます。一度登録が済んでからも小さいグループで勉強会をします。後見人や乳児院のスタッフを招いて、今乳児院にいる子供のケースについて話し合ったり、映画を見たりして、子供たちの抱えている問題の難しさについて情報交換をしたり、養子縁組み後の難しさについて話します。そのような会に多く参加している人ほど養親として選ばれる機会は多いです。一般的には赤ちゃんを迎えるのに夫婦には 10 ヶ月の準備期間があります。養子縁組は短くて 3 年、平均 4-5 年養親候補が準備してから子どもを受け入れます。私は 26 年間働いていますが、養親のもとに子どもを委託し観察期間中に不適合と判断して連れて帰ったのは 2 件のみでした。

養子について：

産科にワーカーが行き、実親が育てられないけど養親が迎えに来ること、それまで乳児院で待つことを説明し、乳児院にも通い、養親候補に会ってからもフォローします。子どもにきちんと説明すること、透明性があることは子どもの well-being のために重要です。ちゃんと説明していれば赤ちゃんは相手を信頼し受け入れます。ワーカーも生まれた日から裁判まで継続して同じ人が赤ちゃんに会いに行きます。2 ヶ月間で赤ちゃん 1 人に担当は 5 人つきます。小児看護師、心理士、保育士、作業療法士、それらをコーディネートする担当です。赤ちゃんをよく知り、一番適した養親を選ぶことができるためです。アルコール中毒の症状がある、障害がある赤ちゃんの場合も養親希望はいますが、それぞれの専門医に会って十分理解してから受け入れたいか決めてもらいます。

養親へのインタビュー　34 歳。4 年間で匿名出産の新生児と養子縁組成立。

最初に養子縁組事務所に行くまで夫は養子縁組に反対でした。けれど、考えが完全に変わりました。養親たちの週末お泊まりイベントに参加したらかえって彼の方が積極的になりました。
養子縁組関係で働く人たちがあまりに素晴らしくて、そこで養子を迎えたいと 2 人で話し合いました。フランスの養子縁組の赤ちゃんは最初からたくさん愛をもらって支えられてきているとわかって、安心感がありました。最初に養子縁組事務所を訪れたときから、赤ちゃんが匿名出産のあと本当にいい環境で丁寧に育てられていることを知ったから、信頼していた、そこで数ヶ月育った赤ちゃんなら大丈夫という信頼感がありました。私たちが迎えてもうまくいくだろうと思えました。
ただ、承認を得るまでは疑問が次々と湧いて、向き合う、取り組む時間を要するものでもありました。思いついて数ヶ月後に子どもを迎えられるようなものではないと思います。親も家族みんなも十分準備している必要があることです。私は口には出しては言わなかったのですが黒人の子どもを迎えることを恐れているだろう両親と映画を観て話し合ったり、承認を得るまで 1 年半かかったけど、実際最低でもそれだけの間準備を要することだったと思います。
３つ自分で決めなければならない項目があります。私たちはこのように答えました。
1. 肌の色 origine：何色でも問題ない
2. 病気障害 santé：将来自立できる可能性のある範囲なら OK

3. 背負っている歴史 histoire：妊娠中の薬物アルコール以外 OK
けれど、妊娠中の薬物とアルコール摂取も受け入れられるか考え直すために専門医にアポイントメントを入れて待っていました。
（文末に養子と初めて会ったときの様子についてのインタビューあり）

パリ市の場合、匿名出産の子どもは養親に会うまでの期間を乳児院で過ごす。それは専門職が揃っているため手厚いケアをして赤ちゃんのニーズを知ることができるためである。匿名出産後養親のもとに託されるまでの約 2 ヶ月半、赤ちゃん 1 人に担当者が 5 人つく形でケアがおこなわれる。小児看護師、心理士、保育士、作業療法士、それらをコーディネートする担当である。乳児院でも赤ちゃんは 3 人から 5 人の年齢差のあるグループ単位の部屋で過ごしており、赤ちゃん 25 人に職員が 50 人いる。

パリ市立乳児院の小児看護師へのインタビュー

入所中

きちんと説明していれば赤ちゃんは退所後に心配にならないで、いろいろ疑問を抱えないで済みます。ただ、赤ちゃんにその状況について説明することが許可されているのは心理士など繊細な言葉を選ぶことができる人のみです。赤ちゃんにとって個人的な話は誰でも口にできるわけではありません。
職員は赤ちゃんに「誰かとアタッチメントを形成していい」ということを学ばせながらも、養親のところに行くときに離れられないことがないよう、とても丁寧に距離をはかっています。

引き渡し

精神分析の立場を重視しているので、最初は養親は自己紹介のみです。突然だっこしたりしません。オムツをかえる、ミルクを飲ませるというのは段階が進んで十分知り合ってからです。赤ちゃんが許可する、養親を受け入れるのを待ちます。関係形成というのは少しずつ、赤ちゃんが決めて進めるものです。

養子縁組について、特にパリでは養親候補は白人、養子は白人以外の方が多い。国際養子縁組みに至っては自国内で養親が見つからない場合に認められているので特別なケアが必要な子どもが 68%と多い(年齢が高い、兄弟一緒、病気 20%)(EPA, 2018)。フランス人は養子縁組についてどのような感覚でいるのか養子縁組関連の 2000 年以降の法改正を担当した最高裁判所判事に尋ねた[17]。

最高裁判所判事 Le Boursicot 氏へのインタビュー
第二次世界大戦でフランス人にとっての哲学の土台ができました。「後天的に習得した

[17] Le Boursicot 氏は最高裁判所の判事を務めながら政治家に法案を企画して提案し、法律の文言を作成している。CNAOP に関する 2002 年の法律を作ったのち自身が作った CNAOP の初代事務局長も務めた。

ものが生まれながらのものに勝る(L’acquis est supérieur à l’inné)」ということはフランスに広く共有されている哲学です。人を作り上げるのは遺伝ではなく教育、文化です。ドイツが 600 万人も殺し、重要なのは血統ではないということは十分証明してくれました。大戦後、血統など口に出すフランス人はいません。子どもの将来を決めるのは血筋ではなく生まれてからの環境や教育であるということは様々な分野の研究でも証明されています。少なくとも 1945-1985 年は子どもにどういう教育をするかという方が大事だと、私たちはそう教えられて育ちました。

筆者：養親の承認までの研修の目的、本や映画について話すことについて教えてください。

L: 養親を研修によって養成するためです。自分の子どもではない子どもを育てるということがどういうことか十分理解しないと養親の承認は得られません。養子縁組は子どものためであって養親のためではありません。養親の育って来た人生と大きくかけ離れた生き方への違いを受け入れられなければならないからです。
養子縁組というのは「違いを愛する」「違いと縁組みする」ということです。結婚や出産とは根本的に考え方が違います。障害がある、病気がある、精神病がある、とても辛い過去を経験してきているというのは、もっと大きな違いがあるということです。利他的なアプローチです(altruiste 愛他的。自己愛の反対)。フランスでは特別な必要性がある子どもでも養親が見つからないということはありません。
児童保護の専門機関が担当するということは、ソーシャルワーカー、心理士だけでなく、小児看護師、児童保護専門医なども関わっているということです。さまざまな専門職の目で養子も養親も見ています。子どもの教育と成長に関する専門家チームです。

国の子にとって最適な養親を選ぶために丁寧な養親の養成と選択のステップを用意している。実際に匿名出産の子どもで養子縁組がうまくいかないケースはとても稀だそうだが、児童保護施設で養子がうまくいかず保護された背景のある子どもに会ったので彼女の意見を紹介したい。

養子へのインタビュー

養子へのインタビュー （20 歳。4 歳のときに国際養子縁組でフランスに来たが一年半で児童相談所に保護された)

子どもが養親に会ったときに子どもにもよく話をして同意しているか確認すること、養親のところに来てから子どもが気持ちよく過ごせているかをよくよく確認してほしい。児童相談所の人と 1 日か 2 日一緒で出かけて「家でどう過ごしてる？幸せ？嫌なことがある？」と本当に養子が幸せに暮らしているか確認しほしい。
私は保護されたあと里親のところでは確認があったのに、養親のところにいたときは誰に言えばいいかわからなかった。誰かいたらすぐに「悪いことは全部私のせいにされる、私は幸せじゃない、ここに愛はない」と言ったと思う。
里親はプロフェッショナルだから厳しく見られているし、里親について里子が児童相談所に困っていることを言うこともできるけど、養親は素人でしょ。里親よりももっとチェックしなきゃいけないのに。養親も里親も家でしょ、家で居心地よくないとどうやって調子よく人生過ごすことができるの、どうして学校で頑張ることができる？里親だったら辞めさせられて無職になるけど、養親だったら「合わなかった」

じゃ済まないでしょ、私はもうあの母親以外に選択肢はないんだから。
あと養子縁組には絶対にお金が介在するべきではないと思う(注：国内養子縁組は行政機関がおこなうので手数料は無料だが、国際養子縁組の場合は受け入れ機関等から手数料を求められることがある)。手数料であったとしても、私はずっと「お金を払ってまで引き取ってなんで養親は私をあんなめにあわせたのだろう」と思っていたし、自分の存在するものの根本の一部にお金があるということがずっと引っかかっている。体外受精や不妊治療にお金を使うのとは話が違う。「お金で買われた子ども」というのはどんな理由があったとしても事実としては変わらないでしょ？それが土台にある人生ってどう思う？嫌じゃない？でも変えることができない事実でしょ、あとからそう思ったって。どんなに実親が貧しくてお金を必要としていて、子どもを産むのとかお金がかかってたとしても、お金を払わないで、子どもを育てたいという気持ちだけで受け取っていたら、全く違った土台になってた。実親がお金を受け取ったかもしれない、あの孤児院がお金を受け取ったかもしれない、私の人生と引き換えになったお金が何かに使われている、おかしいと思う。

養子縁組まとめ

- 「国の子」の制度によって**養子縁組可能な子どもが明確**である。
- 「児童相談所に委託された子どもの状況を調査検討する学際的、複数機関横断的委員会」が親が面会や裁判に来なかったり子どもの必要としていることに応えない場合に、**親権を剥奪し養子縁組できるよう準備する専門機関**である。国の子の 42%はこの決定により国の子になっている。
- そもそも里親や施設措置されている子どもの 90%が司法判断によるものなので、**半年または一年ごとに状況を確認**している。

子どものニーズに応えられる親が選ばれる仕組み

- **公的機関が統括して養親育成と登録**をおこなう
- 養親は最短で 9 ヶ月と時間をかけて社会的養護の子どもを育てることについて養成される。祖父母も養親の会に参加したり映画上映会に参加するなどして準備する→最初から赤ちゃんには説明される。承認が得られても有効期間は 5 年間である。
- パリ市は 2018 年に承認済み 551 件、新規申し込み 431 件、承認 121 件、養子縁組を前提とした委託 16 人、国際養子縁組 21 人。養子を迎えた養親の平均年齢 41 歳。出自に関する問い合わせ 21 件。
- **家族評議会**が子どもにふさわしい養親を選ぶことで、養子縁組事務所の養親担当エデュケーターが決定するわけではない。担当エデュケーターは養親候補の支援に徹することができ、養親候補も率直に相談をすることができる。

6. 里親

調査先：
パリ市児童相談所
パリ市里親事務所(ケース会議参加、里親宅訪問同行、里親たちへのインタビュー)
民間里親事務所グランシェ団体(ケース会議参加)
社会的親縁組サービス Parrain par mille
セーヌ・サン・ドニ県児童相談所
セーヌ・サン・ドニ県里親たちの自助団体、里親たち
セーヌ・サン・ドニ県元里子

里親か施設かではなく「親であることの支援」と「複数で子どもを育てる」という考え方

2007 年の法改正で「虐待」という言葉を「**心配**」に置き換え、新しい判断基準とした。そのことで、「子どもが授業中に落ち着きがない」「朝食を食べないで来ることがある」など専門職が「心配」を感じたら早期に集中的に家庭に関わることを可能にした。心配があると各県にある「心配な情報統括部局」に誰もが連絡しなければいけないと法律で定めている。その基準は「子どもの健康、安全、精神面が危険やリスクにさらされていたり、子どもの教育的・身体的・情緒的・知的・社会的発達状況が危険やリスクにさらされている場合」(市民法 375[18])であり、連絡しない場合は罰則がある。例えば「学校が親と連絡が取りづらく、子どもは学校で笑いを取りにいきがちで、遅刻が多い」などといった心配な状況が伝達され、調査兼サポート提案の担当者が任命され「サポートの提案」という形で家庭に派遣される。

日本の児童相談所にあたる「子ども専門ソーシャルサービス」が児童保護を担うが、支援は「予防」と「保護」に分かれている。保護は暴力や大きなリスクがある場合、短期的に施設などに措置し家庭も同時並行でケアすること、予防は産科や保健所、学校や地域の子どもに関わる専門職が心配と感じたり、親から相談があったときに専門職が家庭に定期的に通う形で実施することである。予防と「親であることの支援」はセットであり、「親であるというのは簡単なことではないから」というメッセージが打ち出され「親であることの支援国家戦略」もたてられている。

例として、親が機嫌がいいと子どもは安心して過ごすことができるが、機嫌が悪い親か

[18] Code Civil 375: Si la santé, la sécurité ou la moralité d'un mineur non émancipé sont en danger, ou si les conditions de son éducation ou de son développement physique, affectif, intellectuel et social sont gravement compromises, des mesures d'assistance éducative peuvent être ordonnées par justice à la requête des père et mère conjointement, ou de l'un d'eux, de la personne ou du service à qui l'enfant a été confié ou du tuteur, du mineur lui-même ou du ministère public.

ら中学校に送り出された子どもは気を引こうといたずらをしたり悪循環を起こしかねない。ソーシャルワーカー養成学校では「人は皆そのとき考えられる最善の行動を常にとっている」と繰り返し学ぶ。機嫌が悪い状況を生んだ状況として、親が何に困っているのか、望んでいることと現実にどのようなギャップを感じているのか一緒に取り組む。家族それぞれをケアすることで保護の必要性や心配が大きくなることを防ごうとしている。

予防の目的は、親がよりよく自分の望む子育てを実現でき、家族のメンバーそれぞれが幸せに暮らせることを目指している。予防を強化することで保護が必要ないようにすることが将来像とされている。

連帯・保健省内社会的団結部「家族と親であることデスク」が担当部署で、その報告書[19]においても、「親であることの支援」は優先的に予算を割くべき分野であり、調査の結果 93%の親が「0 歳から 3 歳の子どもを育てるのが難しいと感じるときがある」、半数以上が「親であることが難しいと感じている」と回答している(2020)。パリ市の担当者は「親が良くない、良い対応ができなかったと考えるのではなく、親自身が困難を抱えているからそういう状況になってしまっている、他の方法をとることができなかった。親をいかにサポートするかという視点が世の中の共通認識になることを目指している」と言う。

親に悩みが多く心配がある場合はまず「在宅教育支援」が提案される。それは、県の予算で民間団体が実施しており、半年ごとの更新である。パリ市で年間 4000 人の未成年が対象になっており、未成年人口の 1%に相当する。家庭の希望に応じて、国家資格を持った専門職が毎朝母親と一緒に子どもを起こして朝食を食べさせ学校に連れて行ったり、毎夕宿題をする時間に通ったり、家族と一緒に旅行に行ったりと家族と時間を共有し、親の書類の整理から近所との関係、家の修理に至るまで包括的に支援する。さらに、子どもの習い事や親学校など**さまざまな支援をコーディネート**することで、家族のメンバーそれぞれが幸せに暮らせることを目的としている。担当者でなくても、親も子どももどこかに相談できる人を見つけられることを目指している。「子どもを複数の大人で育てる」という表現をする。

支援でも介入でもなく「一緒に行く(accompagnement)」という言葉が使われていて、それは、指導や指示ではなく、対象者の歩みを一部一緒にすること、協働に近い。

[19] Ministère des solidarités et de la santé, Les 1000 premiers jours, Là où tout commence, Rapport de la commission des 1000 premiers jours, Septembre 2020.

「**保護**」は暴力や大きなリスクや親からの依頼がない限り「予防のための支援を全て試してダメだった」という証拠を積んでから子ども専門裁判官に判断を仰ぎ、その決定があった際に初めておこなう。施設や里親宅に保護されている子どもの 9 割が司法判断によるものである。半年から 1 年ごとの裁判なので、そもそも**短期措置しかない。**つまり、里親宅に保護されたとしても、親権者宅に返すための準備期間なので毎週末親権者宅に帰るなど行き来が多い。
2018 年は 17 万 7000 人が措置されているが、一定時点の措置数は 6 万 5000 人(ONPE, 2017)と短期措置が多いことがわかる。同時並行で親への支援をして早期に家庭に戻れるようにして在宅教育支援で引き継ぐ。

6 歳未満では里親が選ばれることが多い。施設にも 5 人単位くらいでさまざまな専門職がいるメリットがあり、また子どもが里親を希望するとも限らないので、里親は選択肢としてあったほうがいいけれど施設よりいいと考えられているわけではない。以前は里親がメインだったものを戦後に専門性の高いさまざまな施設をつくり 5 人単位くらいで見る方向になり、現在は 16 歳以上はアパートでルームシェアなどさまざまな形態のケアが出て来ている。里親は措置全体の約半分(48,9%)だが県によって 13%から 86%と開きがあり[20](ONPE, 2018)、子どもに合う方法の選択肢があればいいとされている。措置の 9 割が裁判所による判断(1 割は親権者が措置に同意)なので、里親に反対するということはない。
パリ市の調査先で 7 歳以上で里親に託されていた子どもの人物像としては、本人が施設を見学したのち里親を希望する場合、過保護で育った子ども、病気や障害がある子どもや、施設が合わなかった子ども、グループが苦手な子、繊細な子、いじめにあった経験のある子ども、施設で勉強に集中できない、まわりに影響されやすい子、そして自殺未遂で入院していた子どももいた。家族の文化が強いアフリカ系の子どもは里親になじみやすいが、フランスの家庭で虐待されてきた子ども、親戚との関係も希薄だったような子どもは大人数家族の空気が苦手なことも多く里親家庭になじまないこともあるそうである。
調査先の実親の人物像としては、父か母が精神病を患っている、刑務所にいる、住居不定、片親家庭で子どもが 5 人いて全員みることが難しい、母が DV 被害から回復し生活を立て直すまでの期間などであった。

[20] 2016 年 12 月 31 日時点で 48, 9%が里親宅、施設が 37, 6%、アパート 5, 3%、他の形態 8, 2%(ONPE, 2018)

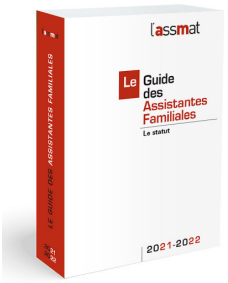
里親の割合は 10 年前に比べ 10%ほど減っている。児童相談所のワーカーがあげる理由としては、16 歳以上の子どもは一人暮らしやルームシェアのアパート生活で自立の準備をするようになったこと、全寮制の学校(公立で小学校からある)への入学を希望したり、小規模な施設を希望する子どもが多いことなどがあるそうである。

措置費用は施設の方が高く、一人の子供に施設では年 69900euro(月 5825euro 70 万円)、里親では 28100euro (月 2341euro 28 万円)かかる。(セーヌ・サン・ドニ県)

里親委託は **6 歳未満**か特別な必要がある場合
里親平均年齢 52, 3 歳　(養親 41 歳)
定年 65 歳、3 歳未満は 49 歳まで、新規委託は 61 歳まで、55 歳を超えると 10 代のみ。
「おじさん」「おばさん」と呼ばせる
週半分実家と里親行き来などの方法がとられることもある。
乳幼児は各種専門家のいる乳児院
幼少期は里親
未成年母子も里親(母親と子ども両方のケアが必要であるため)
7-16 歳は 3-5 人単位の施設(常に職員が交代でいる)
16-21 歳は 3 人単位のシェアハウス(職員が決まった時間に通う)
パリ市の場合は里親は郊外にあることが多い
里親の給料　パリ市 **1 人 17 万円、2 人 28 万円**＋食費交通費洋服代子どものおこづかい等
(給料明細は里親の給料と子どもの経費の 2 つに分けられている)
年 46 日有給休暇 を消化しないと日給の 1.5 倍が給料として支払い(バカンス 5 週間)
子どもと旅行に行く場合は子どもの旅行代も実費で出る

＝両親も同時に支援して、両親のもとでより良い形で再び暮らせるよう目指す
＋他にもさまざまなサービスを提案し、複数の大人で子どもを育てられるように

里親事務所と契約するときに渡されるガイドブック[21]。ルールや法律に関する記述。576 ページもある。



[21] https://www.lassmat.fr/editions-lassmat/le-guide-des-assistantes-familiales

里親たちのプロフィール

里親はフランス語では assistante familiale「家庭アシスタント」と言う。子どもだけを対象にするものではなく、高齢者や障害者にも利用されている。

パリ市では子ども対象の里親はほぼ 100%育児経験者が就いていた。保育アシスタント[22](assistante maternelle)出身が一番多い。フランスでは生後 3 ヶ月半から世帯収入の 1 割で保育に出すことができるが、3 通りの保育の選択肢がある。保育園か、保育アシスタントかベビーシッターである。保育アシスタントは、自宅で 4 人までの子どもを預かるもので、時間や曜日に融通が利く、近所である、少人数保育、健康面でデリケートな子どもにも対応してもらえるなどの利点がある。里親への調査では、保育アシスタントをしていた人が自分の子どもが大きくなったときに生活スタイルが合うように里親に切り替えるというパターンが複数見られた。
14 歳から取得できる対人援助の資格がいくつもあるので、その資格で他のサービスで働いてから里親になる人もいた。
筆者がインタビューした里親には、高齢者を 2 人自宅でみていたが、相次いで亡くなり、子どもも高校を卒業して家にいる時間が減り、また高齢者を受け入れるよりは違うことがしたいと同じ民間団体内で子どもを担当する里親に異動した。
パリ市と、パリの北にあるセーヌ・サン・ドニ県では圧倒的にマグレブ系の里親が多い。特にアルジェリア、他にチュニジア、モロッコ、エジプト出身が多い。女性が外に出て働かない文化に馴染むという点を挙げる人もいるが、児童相談所のソーシャルワーカーによると家族の概念が広く、自分の子どもと分け隔てなく接する、里子の親がどんな人であっても受け入れ親戚のように接することを評価していた。フランス人の里親の中には憐れみの気持ちを持っている人がいることがあり、それは子どもに伝わってしまうので好ましくないと里親事務所のワーカー[23]は言う。

---

[22] 保育アシスタントになるには資格は不要で承認を得たのち研修を受ける。CAP petite enfance という資格でなる人もいる。

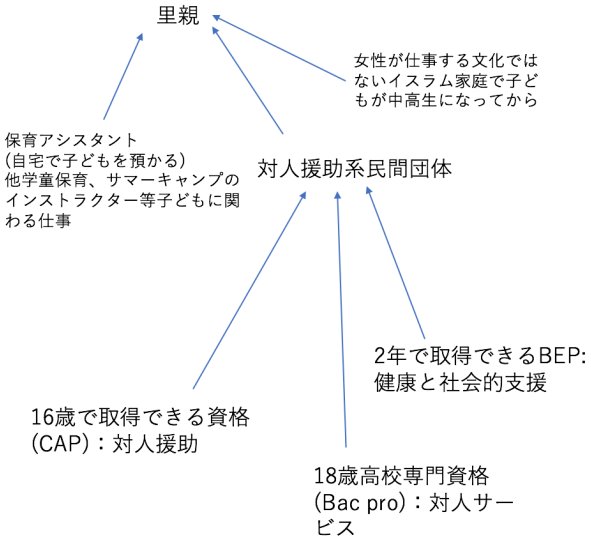
[23] 里親事務所で働くワーカーはエデュケーター資格もしくはソーシャルワーカー資格で、心理士もいる。ワーカーたちには事務(秘書)がついている。
エデュケーター(éducateur spécialisé):国家資格。3 年間専門学校で学ぶ。理論に 1450 時間、研修に 2100 時間、合計 4 ヶ所の研修先から合格をもらわなければ卒業できない。児童保護、障害、アルコール依存や路上生活者の支援を学ぶ。児童養護施設、路上エデュケーター、在宅教育支援など児童福祉の現場で働く。社会的教育者として、不適応を起こしている子どもやティーンエイジャーの教育を専門とする。身体的精神的困難を抱える成人の自立支援もおこなう。
ソーシャルワーカー(DEASS Diplôme d'État d'Assistant de Service Social):国家資格。大学卒業と同じレベルで高校卒業後 3 年間を要する。理論に 1749 時間、研修に 1820 時間、合計 4 ヶ所の研修先から合格をもらわなければ卒業することができない。

セーヌ・サン・ドニ県児童相談所ワーカー：

子どもの両親がどんな人たちであっても敬意を持って接していて、いい関係を築けること。実親に積極的に会い、子どもの教育について実親に相談する里親にお願いする。父がテロリストで、殺され、母が刑務所に入っているケースでは、里親が子どもたちを毎週刑務所に母親に会いに連れて行き、学校の様子についていちいち伝え、親族からは断続状態だったのに里親が子どもたちを親族とも電話したり会う機会を作った。そういうところをワーカーは見ている。
麻薬中毒の実親に何回も怒鳴られ、嫌がらせをされ、罵られていても、入院したと聞いたらすぐに電話をかけ、体調を気にかけ、預かっている子どもがお父さんと電話で話をしたりお見舞いができるようにしている里親もいる。そういった気持ちで接することのできる里親を優先する。

里親をしている間に、専門性が高い研修を重ね、特定の病気や障害をみれるなど専門性の高い里親にシフトしていく人が多いという。
他の仕事をしていても問題はなく、ある里親は父が労働裁判所の裁判官、母が会計士で 5 人の子どもを預かり、実子が 3 人もいる大世帯だった。これまで 27 人の里子を預かってきたので、バカンスの度に別荘には 10 人くらい子どもたちが休暇を過ごしに来ると話していた。

どのように里親の職業にいきつくか



高齢者も障害者も里親という選択肢がある



筆者作成。写真は高齢者用里親民間団体ホームページより

里親になるまでの道のり

里親になるにはまず日本の保健所にあたる妊産婦幼児保護センターによる家庭訪問を受け承認を受けなければならない。主に家の様子を確認する。パリ市の場合は子どもに 1 人部屋はなくてもいいが、子ども部屋はある必要がある。承認は 4 ヶ月間有効なのでその間に市の里親事務所か民間団体に応募する。民間の方が採用まで早く、給料がいいと言われている。パリ市の場合事務所に 1 時間以内で行き来できることが条件である。その後係長や心理士が面談をしてから家庭訪問して父や子どもたちなど同居家族全員と面談をおこなう。片親家庭も多い。

初回訪問時、食事のとりかたとその時間、週末にもし 8 歳の子どもが来たらどのように過ごすことができるか、一緒に遊ぶとしたら何を提案できるか、6 週間学校に行くごとに 2 週間のバカンス、夏は 2 ヶ月のバカンスがあるが、どのような過ごし方を提供できるか(親戚の家に行く、他の里親とキャンプ等)、里親自身自分の気分転換の方法と時間をどれくらいとっているか、宿題をどれくらいみることができるか、禁止しても応じないときどのような方法をとるか、家賃はいくら払っているかなどについて聞いていた。

合格すると、その月から月約 6 万 6000 円の基本給料が出て 60 時間の研修を受ける。パリ市の研修は「親と親をサポートする専門職のための学校(EPE)」という全国組織の民間団体に委託している。研修が修了するまでに半分以上の里親がやめるという。

研修終了後に委託が開始されるが、最初は問題が大きくなく短期の子どもを預かり、里親事務所のワーカーと密にやりとりをしていた。調査中には、片親家庭の母親が出産する間 1 週間子どもを預かるというケースだった。4 ヶ月間委託がないと登録解除になるので、幅広いプロフィールに対応できる方が有利である。登録解除になると同じ事務所にはしばらく再応募できず、他の事務所や民間団体に応募することになる。1 人目の委託が開始してから 240 時間の研修が始まり、順調にいけば 2 年間で国家資格を受験することができる。里親国家資格は DEAF(Diplôme d'Etat d'Assistante Familiale)という名称で、家庭アシスタント国家資格という意味である。国家資格を得なくても研修を全て受ければ契約している里親事務所の職員として里親としての職業を続けることができるが、5 年ごとに研修を受け更新する手続きが必要であり、他の事務所に転職する際は研修を受け直す可能性がある。国家資格を得ていると、一生資格を維持し他の事務所に応募することも容易になる。

最初は家事育児支援の専門職(TISF[24])を毎週土日に派遣して里親業をサポートしたり

[24]社会家族支援員(TISF Le Technicien de l'Intervention Sociale et Familiale):国家資格。1 年半から 2 年で理論に 950

もしている。

子どもは司法判断で来ることが多いので、半年または一年後の裁判に向け報告書を里親も作成する。

里親になる道のり

- 妊産婦幼児保護センター(保健所)による家庭訪問で
  4ヶ月有効の承認が出る＝全国で申し込みできる
- 市の事務所か民間団体に応募(民間の方が採用まで早い、給料もいい。事務所に1時間以内で行き来できることが条件)
  係長が面談→心理士が面談→係長と心理士が家庭訪問し他の同居家族全員の話を聞く→所長が合否を出す
- 正社員として**月6万6000円の基本給**が出て**60時間研修**を受ける。その途中や研修後にやめる里親が半分以上いる。
- 子どもが委託される。**2ヶ月は試用期間**で即日解雇できる。
  最初は緊急入所を担当して仕事に慣れることが多い。
  障害や病気や特別なニーズがある場合受け入れ前に特別研修を受ける。
  4ヶ月間委託がないと登録解除＝幅広いプロフィールに対応できる方が有利
- 最初の子どもを受け入れてから**240時間の研修。国家資格は約2年で受験**できる。
  その後は2年に一回1週間の研修が義務。県で年中ケース検討会など開催されている。
- 子どもの委託が終了しても基本給は出るが、4ヶ月委託がないと登録解除になる
  途中緊急でも受け入れられれば4ヶ月は更新される。解除の場合他の市か民間団体を受ける

- 子どもは里親1人1-3人、夫婦でしている場合6人まで。
- 子育て経験ある人が99%。単身女性も多い。
  実子は中高生以上が多い。
- 採用するポイントは**違いを受け入れられ、尊重できる人物かどうか。実親といい関係を築けるか。**
- 仕事はしていて問題ない。
- 一人部屋でなくても子ども部屋があればいい。
- 研修は外部の特別機関がおこなう(パリ市は親学校)

里親事務所のワーカーの役割

パリ市里親事務所　　裁判所　＝措置決定最初6ヶ月、継続の場合1年ごと

パリ市児童相談所
措置費支払い、報告書チェック
実親担当ワーカー

パリ市パリ市児童相談所里親事務所は
8つの場所に里親事務所を持っている

パリ市児童相談所里親事務所
パリ支部　里親里子担当ワーカー
里親採用担当、心理士
子ども87人、里親55人

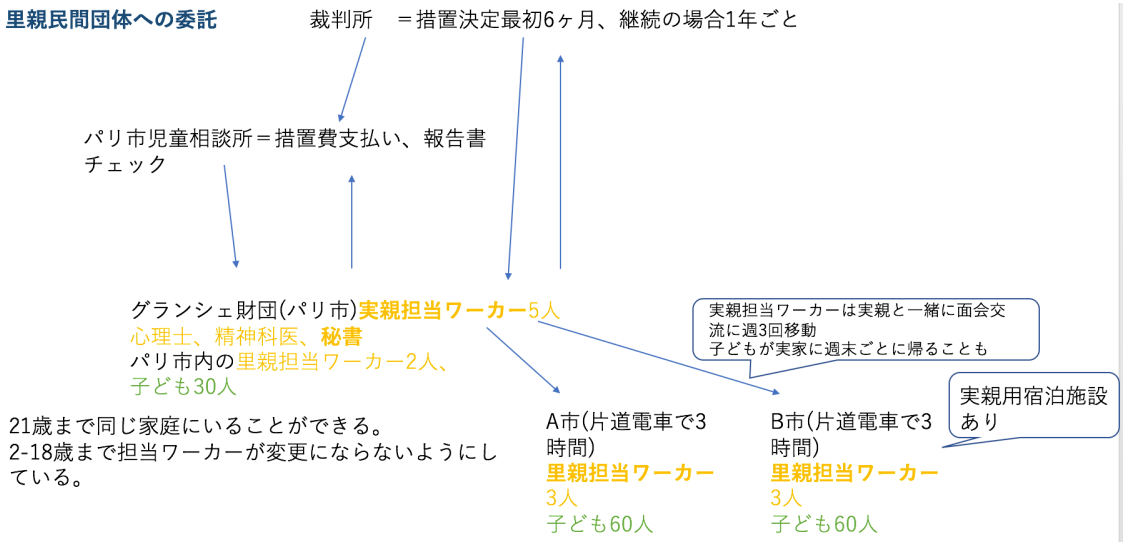
パリ市児童相談所里親事務所
A県支部
里親里子担当ワーカー
里親採用担当、心理士
子ども200人

ワーカーは一人20人担当。
週末に丸一日子どもと一緒に過ごすような形の訪問が多い。

時間、研修に 1155 時間。高校卒業程度。家庭を特定の目的達成のため毎週複数時間訪れる。目的とは、生活リズムを整えることや子どもの年齢に応じた必要なケアや習慣を身につけられることなどで、親子とともに取り組む。

パリ市の場合は市内に里親が多くないため、パリ市内は 8 つ支部がある中の 1 つのみ、残りの 7 つの事務所は他県にあり、他県に措置される子どもの方が多い。実親は児童相談所のワーカーが担うことが多い。

以前は里親事務所がなく、児童相談所のワーカーが直接里親を選び子どもを委託していた。それまではワーカーが権限を持っているように感じたが、里親事務所ができてからは、里親事務所は里親側についてくれるし、ワーカーたちとプロフェッショナル同士として対等に仕事ができるようになったと里親たちは話している。



民間団体に委託する場合も、他県の里親のもとに委託される子どもの方が多い。実親担当ワーカーは実親と一緒に子どもがいる県に行って面会、その往復の車内を実親とのやりとりの時間にしていた。民間団体の方が寄付金があり実親と子どもとワーカーで旅行に行ったりどちらかと言えば手厚く、また長期化が予想される家庭環境の子どもが多いようであった。

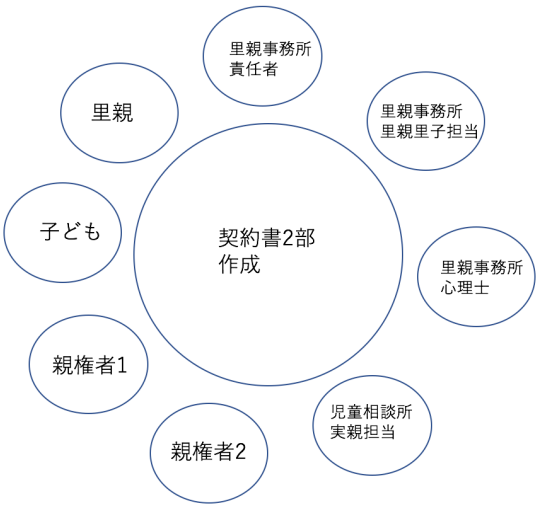
例えば、あるケース片親で子どもが 5 人おり、上の 3 人が同じ里親宅にいる。母親は DV 被害の経験が長く、まだ回復が十分ではなく、月に一回子どもたちに会いに行ってもずっと自分の悩みばかりワーカーに話し続けていて子どもたちには関心を示していない。半年以上子どもに会いに行かず裁判官に親権がなくなる可能性を指摘され親権維持のためだけに通っているが母親は子どもに関心を示す余裕はないとワーカーは話す。また、住居を転々として連絡がとれない期間が続いたり、とても攻撃的なこともあってワーカーたちは心配が大きいということであった。

里親事務所のワーカーたちは里親や実親に、すぐ近くにいると感じてもらえるように連絡があったらすぐに反応して安心してもらうこと、相談したら聞いてもらえると思ってもらえること、スムーズなやりとりが重要だと感じているとパリ市もセーヌ・サン・ドニ県でも話していた。パリ市や調査した民間団体では里親が話しやすいように担当ワーカー2 人に心理士の合計 3 人相談相手となる専門職をつけている。ワーカーも 2 人いるほうが「この話はこの人にしやすい」という幅ができていいそうである。
パリ市の里親事務所は週に一回里親たちの朝食会を開き、インフォーマルな形で里親たちがワーカーや心理士や他の里親たちと話せる機会を作り、里親たち同士の協力関係も促している。また、学校がない毎週水曜午後はおやつ会を開き、ワーカーがゲームなどを一緒にして子どもたちの様子を観察する機会にしている。
ワーカーは子どもたちと一対一でも過ごせる時間を作っていて、週末丸一日子どもが行きたいところにワーカーが連れて行ったり、実親も一緒に出かけたりして子どもがワーカーにも話しやすい機会にしている。
ワーカーは里親が休めるように子どもをバカンス期間中に 1 週間単位のキャンプに申し込みしたりして里親の負担を減らすことも気を使い、なるべく里親が年間 5 週間は子ども抜きで過ごせるようにしていると話していた。

里親委託のプロセス

まず子どもが一時保護所から里親宅に通い 1 ヶ月ほどかけて慣らし、子どもと里親ともに同意してから委託の手続きをする。以下の図のように一同に集まり、契約書を皆で作成する。まずは里親事務所の責任者が裁判の結果が書かれている A4 2 ページほどの書類を読み上げる。詳細に里親措置の目的が書いてあることもあれば、観察期間をとりその間により良い親子関係を築けるようにといった内容のこともある。
以下のケースは 12 歳の少女に教育に関する過度なプレッシャーが与えられている可能性があるという件だった。裁判結果には子どもが回復するまで里親のもとで新しい環境で過ごし、親権者は家族セラピーを受けて子育てについて考え直す機会を持つことと、裁判所指定の精神科医に通うことを義務づけ、しばらくはエデュケーター同席の面会を週一回しか認めないというものだった。それぞれ次の裁判までの半年間に何を目標に何をするかを子ども、親権者、関係者の順に話し最後に皆がサインする。子どももサインするのは、子どもも参加した決定(里親措置期間)であることの表象的な意味合いであると言う。

里親委託シーン = それぞれがこれからの6ヶ月に望むこと、することを書きだす



- １ヶ月ほど慣らし、里子も里親も同意してから委託
- 裁判官の決定と半年間に取り組むべき内容の読み上げ
- 子ども12歳：「勉強頑張りたい、お父さんお母さんと喧嘩しないで話せるようになりたい」
- 親権者：「家族セラピーを受けてどのようによりよく親としての役割を担えるか考え直したい。週一回の面会で喧嘩せず子どもと話し合えるようにしたい」
- 里親：「子どもが来て1ヶ月、何も言わなくても自分で片付けも勉強もして安心しています。感情の起伏があるので支えられるようにしたい」
- 里親里子担当：「学校の担任にも会いましたが学校は順調。ただ、子どもは里親に勉強が終わらなくて眠れないと言うことがあり、親からのプレッシャーがトラウマとして残っていることをしっかり認識して親はセラピーを受けてください。子どもは成長していきますが親が変わらない限り家には帰れません」
- 実親担当：「裁判所指定の精神科医は親を4回診療して、夫婦での話し合いができてきていると報告している。ただし、親が自分の価値観を子どもに押し付けすぎている面がある。子どもはそれに応えられなければゼロ、意味がないとさえ思っている。セラピーを受けて今後変わっていくことを求めます」
- 子どももサインするのは、子どもも参加した決定であることの表象的なもの。

その他里親制度

里親リーダー(Référent)

追加で給料をもらい他の里親を支える役割を担っている。

当番里親

地区内で各曜日緊急時の対応がとれる里親を決めており、子どもを病院に連れて行く必要があったり、お迎えに行けない子どもがいたりするときに助け合えるようにしている。

里親団体(各都市)

週一回午後集まる。里親の権利を守り地位向上を目指す。県によって里親の給料は違うので自分の県の里親の権利を自分たちで守ろうとしている。月一回は児相のワーカーも会議に参加し、より良い里親の運営のために話し合う。新型コロナウイルスによる休校期間中も社会的養護の子どもは優先的に学校に通えたが、さらに地域の学校の校庭を里親や施設にいる子どもたちに解放してもらい児童館の職員が子どもたちをみれるようにしたり、学童保育の職員が里親宅で里子たちの勉強をみれるようにした。

セーヌ・サン・ドニ県は里親が 560 人、里子は 1400 人おり、里親たちの互助団体がとても強い。里親たちが結束して自分たちの職業の向上を目指そうとしている姿勢を感じた。

緊急受け入れ里親

暴力被害などのリスクがあるケース。2 週間以内に裁判がおこなわれないといけないのでワーカーと密にコンタクトをとり 10 日以内に里親、ワーカー、心理士、学校の報告書を裁判所に送る。

他にも親の入院中、逮捕されて状況がわかるまでの期間中、親戚が亡くなってお葬式をするまでの期間なども緊急受け入れ里親が使われる。

特別ケア里親

障害、精神疾患、医療的な配慮が必要な子どもを受け入れる。

匿名出産専門里親(セーヌ・サン・ドニ県)

母子専門里親

パリ市の場合は民間団体に母子専門里親事務所がある。主に 14-21 歳の母親とその子どもを一緒に受け入れる。心理士の配置がワーカーよりも多い。

自立支援

16 歳から県の自立支援ワーカーが里子を個別フォロー(セーヌ・サン・ドニ県 Autonomie des jeunes) 16 歳から県の自立支援担当のエデュケーターがつき一連のプログラムがある。料理アトリエ、住宅を借りる管理する、仕事を始める準備、健康管理と健康保険と医療等。

補完的サービス

社会的親縁組サービス

こちらは里親のところに委託されている子どもたちに利用されているサービスである。県や家族手当基金の予算で民間団体が運営し、ボランティアが子どもたちを受け入れる。「複数の大人で子どもを育てる」という観点から、施設や里親、片親家庭の子どもたちに利用されている。社会的文化的、社会的学習支援的、社会的自立支援的と 3 つのコースがある。小さい子どもにとっては、里親宅には複数子どもがいることの方が多いので、週末に自分 1 人を連れ出してもらえ、バカンスに連れて行ってもらうなどの目的で利用されている。放課後に勉強をみてもらう子どももいる。16-21 歳になると社会的養護の

退所者支援に活用されており、就職活動の準備や仕事を始めてから毎週仕事の話を聞いてもらい支えてもらう子どももいる。
里親だけで子どもをみるのではなく、家事育児の専門職に来てもらったり、地域の習い事や学習塾に子どもが通ったり、子どものニーズに合わせ子どもの気が合う複数の大人で子どもを育てる方法が良いとされている。





写真は Parrain par mille より

近年里親に関しては改善されてきているとワーカーや里親たちは指摘している。それは、当事者たちがテレビに出たり声をあげる機会が多くなっていることが大きい。特に 2016 年に自叙伝を出した Lyes Louffok は現在児童保護国家委員会のメンバーに選ばれ児童保護大臣と討論番組に出たりと影響力が大きい。彼が幼少期にいた里親家庭との関係が維持できず傷を残したと話したことから、現在では小さいときの里親措置であったとしても、実親宅に戻ってからも子どもが望めば里親宅で週末を過ごすなどの配慮をする児童相談所のワーカーが多くなっていると里親たちは言う。



2017 年に出た「措置された子どもの歩む道」という映画は里親が定年退職し、新しい里親宅に行く現実をとても難しく生きる子どもを追ったドキュメンタリーである。新しい里親が元の里親宅に連れて行ったり、学校帰りにスカイプで元の里親と話すなどとても強い絆があり、それが保たれて行く様子が描かれている。





里親、元里子、里親事務所のワーカーの意見、筆者の観察結果

里親の意見

- 施設の子どもと比べて**就職が有利**。里親たちがネットワークを使ってなんとかいい学歴、いい就職をさせたいと頑張るので医学部や司法試験を受ける子どもなどは施設より多い。全体では **18 歳で経済的自立が多い**が、それも施設より多い。
- 小さい子どもの場合は毎日でも学校の先生とやりとりして**勉強をみることができる**。児相出身で勉強ができないと厳しいが、勉強ができると学校でも堂々と過ごせるし、いい給料がもらえると将来のリスクも軽減される。施設は 3-5 人子どもがいるので行き届くとは限らない。
- ワーカーとの信頼関係は、子どもを委託する前にどれだけしっかり情報を集め

て共有してくれるか、何かあったときにどれだけ迅速に動いてくれるか。
- 状況が改善したのには**児相出身者たちが声をあげた**ことがとても大きかった。国として対応が変わったのを感じている。
- 精神疾患や心理的に問題がある場合、他の子どもへの影響が大きいので専門的な施設を充実させるべき。
- 判断を下すのは**子ども専門裁判官**なので、適切な人材が育てられ、**質を保てること**が要の 1 つ。

元里子の意見
- **親代わり**に大人になってからも真っ先に電話できる相手が元里親で何人かいるのはとても貴重。妊娠したときの相談や家探しの相談や、仕事や福祉で嫌なめにあったとか、まず電話したのは元里親だった。
- **自分の子どもと差別**する人がいる。自分の子どもには正規品なのに里子にはお徳用しか買わない、肉も違うパッケージから出す、一緒に食べないで里子だけ別に食べさせる。けれど拒否して次がいいところとも限らないから我慢してしまう。
- **ワーカー**の中には、里親に委託したら「よかったね」というかんじで連絡もそこまでしない人がいるし、電話くらいだとあまり言いたいことも言えない。委託してからの数ヶ月間は週末丸一日一緒に過ごすなど、十分話しにくいことも話せるだけの時間を共有して、**本当に子どもが居心地よく過ごせているか確認してほしい**。里親は生活支援、**継続的な経過の支援はワーカー**だと思うから、どのような措置期間になるかはワーカー次第でもあると思う。

ワーカーが指摘する良さと難しさ
- **一般の価値観に近い**。施設の子どもはお小遣いや毎月の美容院代と洋服代をすぐ使い切るが、里親のところにいる子どもの方が買うかどうか里親に相談したりする。何かをしてもらったり、してあげたり、食べ物の価値を学んで「まずい」と文句を言うようなことがない。大事な話もしやすい。グループの影響を受けない。子どもが問題があるとき発見が早い。
- 家庭それぞれのルールがあるので、ワーカーは里親と里子の間を取り持つことが主な業務になる。里親が突然やめると言うと困るのでワーカーも強く言えないときがある。40-50 代ですでに大きい子どもを育てあげていたりすると 20 代のワーカーの言うことを尊重しないこともある。
- 月一回里親全員を集めて会議をしてもいつも言い訳を作って参加しない人もいる。
- 里親はマグレブの人がほとんどだが、マグレブ文化や食事になじめない子どももいる。
- 子どものプライベートを守らない人がいる。
- 子どもの抱える難しさを理解せず、強い言葉を言ったり脅したりする里親への対応の難しさ。子どもの様子が里親の評価だと思い焦る人がいる。
- 子どもは**里親についての悩みを言いにくい**。里親について子どもが匿名で評価

できるシステムが必要。
- 障害や病気がある子どもが多いので、加算が出たとしても、学校や習い事とは別に言語療法士や精神運動訓練士、小児精神科医に週 4 回通院に連れて行くなど**負担が大きい**。

筆者が観察して印象に残ったこと
- 子どもについて毎週のようにとても丁寧なやりとりがワーカー – 心理士 – 里親 – 学校間でされている。
- ワーカーが直接子どもと里親に会う機会も毎週ある(朝食会、おやつ会)
- 里子への支援のきめ細やかさ。措置するだけではない。
  例) 親が公園や文化的な活動をさせていなかったことで刺激と補強目的の措置
  →私立の個別指導校、クリエイティブな学校に通わせる。「認められている、評価されていると感じられる学校や場所を選んでいる」
  →8 歳の子どもでも「才能があるので将来手を使った仕事につく可能性もある」と本人の希望する限り 3 つ 4 つ習い事をさせている。
  →「友達の家にたくさん呼んでもらえるようにたくさん子どもの友達を家に呼んでください」と里親に要求
- 月一度くらいワーカーと子どもと実親で一緒に出かけたり、ワーカーが子どものしたいことを一緒にしている。
- 実親との良い関係性作りが仕事の 1 つとして求められている。
- 子どもの元里親との交流を積極的にサポートしている

里親担当ワーカーがいることで里親のサポートをし、実親担当が実親の支援もしている。ワーカーたちに秘書がいることも、ワーカーたちが人と過ごすことに時間を使える理由の 1 つ。

里親まとめ
- **予防**に力をいれ、親であることも支援する在宅教育支援を早期におこない親子分離のない未来を目指している。
- **短期措置しかないことになっている。**措置(親子分離)は親の希望でない限り 9 割が司法判断で行われているため、半年か一年ごとの裁判で状況が再検討される。実親への支援も同時におこなっている。
- 里親は選択肢としてあった方が良いが最優先とはされていない。施設も小規模である。
- 里親は国家資格がある。
- 里親は育児経験者である場合が多い。
- 高齢者や障害者の里親もおり、子どもだけに限ったものではない。
- 一人の子供に施設では月 70 万円、里親では月 28 万円かかる。
- 里親の給料　パリ市**1 人 17 万円、2 人 28 万円**＋食費交通費洋服代おこづかい等(給料明細は里親の給料と子どもの経費の 2 つに分けられている)年 46 日有給休暇 を消化しないと日給の 1.5 倍が給料として支払い
- 採用されると研修期間や子どもを受け入れていない期間も約 6 万 6000 円の基本給が支払われるが、4 ヶ月間委託がないと契約打ち切りになる。

- 里親が団体組織を持っていて県の担当者と問題について話し合い、里親たちの権利を守ろうとしている。
- 家事育児の専門職が里親を週末に手伝いに来たり、社会的親のところで子どもが週末や長期休暇を過ごしたり、里親に負担が集中することなく複数の大人で子どもを育てられるようにしている。
- 現場出身者たちが発言力を高め、近年状況が改善している。自宅に戻っても子どもが希望すれば里親に定期的に会いに行けるよう児童相談所職員がフォローしたりしている。
-

「複数の大人で子どもを育てる」という考えが一貫してとられている。
全ての子どもの状況を国が専門職を通して常に確認している。

＊図は全て調査をもとに安發作成

調査先一覧

注：筆者はパリ市とセーヌ・サン・ドニ県で調査をした。他県、他団体では運用面で違いがあることがある。

健康連帯省社会連帯部家族親であることデスク DGCS Direction Générale de la Cohesion Sociale, Service des politiques sociales et medico-sociale, Bureau des familles et de la parentalité. M.Pierre-Yves Manchon
児童福祉専門法律家 Mme Sylvia Berdin (2021)
パリ市最高裁判所判事 Mme Marie-Christine Le Boursicot(2021)
家族手当基金 CNAF Caisse Nationale des Allocations Familiales Mme.Frédérique Leprince (2020)
出自情報へのアクセスに関する国家諮問委員会 CNAOP Conseil National d'Accès aux Origines Personnelles 事務局長 M.Jean-Paul Bourély
パリ市養子縁組窓口 Espace Paris Adoption
パリ市児童相談所 ASE Aide Sociale à l'enfance
パリ市乳児院 Pouponnière
パリ市立病院産科ソーシャルワーカー AP-HP Maternité
パリ市里親事務所 SAFD Service d'Accueil Familial Départemental de Paris (ケース会議参加、里親宅訪問同行、里親へのインタビュー)
パリ市母子保護施設 Centre Maternel
パリ市子どもを持つ孤立した母を支援する専門部署 ADEMIE
パリ市妊産婦幼児保護センター PMI Protection Maternelle et Infantile
パリ市家族計画センター CPEF Centre de Planification et d'Education Familiale
パリ市女性への暴力研究所 OPVF Opservatoire Parisien des violences faites aux femmes
民間里親事務所(Fondation Grancher、パリ市)
民間妊娠に悩みを抱えた女性専門の心理的社会的相談窓口（MOISE、パリ市）

民間社会的親縁組サービス(Parrains par Mille、パリ市)
パリ市養親(匿名出産、国際養子縁組)
セーヌ・サン・ドニ県児童相談所
セーヌ・サン・ドニ県里親たちの自助団体、里親たち
セーヌ・サン・ドニ県元養子、元里子、現国の子

文献、資料

【 暴力被害経験とリスク 】
Charruault Amélie, 2021, L'empreinte des violences familiales sur l'entrée dans la vie adulte des jeunes, INJEP rapport, Avril 2021.

【 匿名出産 】
厚生労働省 平成 30 年度子ども・子育て支援推進調査事業「妊娠を他者に知られたくない女性に対する海外の法・制度に関する調査研究報告書」
INED, CNAOP, 2011, « Les femmes qui accouchent sous le secret en France, 2007-2009 », *Population*, 66 (1), 2011, p. 135-170.
ONPE, 2019, "La situation des pupilles de l'Etat" Enquête au 31 décembre 2017, Juillet 2019.
CNAOP, 2018 Rapport d'activité 活動内容報告書
匿名出産を希望する妊婦に対する情報収集について
http://www.cnaop.gouv.fr/le-pli-ferme.html
http://www.cnaop.gouv.fr/IMG/pdf/Projet_de_fiche_sur_le_pli_ferme_pour_le_site_internet__2_.pdf
Sénat Projet de loi relatif à l'accès aux origines des personnes adoptées et pupilles de l'Etat : Accès aux origines. Rapport d'information sur le projet de loi relatif à l'accès aux origines des personnes adoptées et pupilles de l'Etat
https://www.senat.fr/rap/r01-065/r01-065_mono.html
Rosset, 2013, « La consultation postadoption à l'espace Paris Adoption et la recherche des origines », Enfances&Psy 2013/2, p.134-143. ERES.
Rosset, Faudot, Dumaret, 1993, « Les enfants confiés en vue d'adoption par l'aide sociale à l'enfance de Paris », Perspectives psychiatriques, 32e année, N.38/III (Nouvelle Série).
Gokalp, 2011, « Les femmes qui accouchent sous le secret en France, 2007-2009 », *Population*, 66 (1), 2011, p. 135-170.

【 妊娠の否認 】
Deni de grossesse
https://www.yapaka.be/contenu?type=video&field_thematique_tid=340&field_category_tid=All&field_referenced_auteur_nid=All
Simmat-Durand, 2015, « Accoucher sans donner naissance : Les néonaticides, des histoires tues ».

【 養子縁組 】
栗林佳代、2015、フランスの養子縁組制度、佐賀大学経済論集 第 47 巻第 6 号
菊池緑、2014、フランスの養子縁組あっせん制度と実務に関する調査研究、2014 年度厚生労働科研研究海外調査報告
Bureau des Droits de l'Enfant et de l'Adoption, EPA Espace Paris Adoption, 2019, « L'adoption à Paris en 2018 », Direction de l'Action sociale, de l'Enfance et de la Santé, Sous-direction de la Prévention et de la Protection de l'Enfance.
Guide des bonnes pratiques en adoption : https://www.adoption.gouv.fr/
IGAS, 2019, Contrôle des procédures d'adoption dans le département de Seine Maritime, Rapport

définitif. (国の監査機関による報告書。フランス全体の状況について詳しい)
Ministère des solidarités et de la cohesion sociale, Adopter un enfant, Guide à l'usage des futurs adoptants : https://www.adoption.gouv.fr/IMG/pdf/pdf_guide-adoptant.pdf
Monique Limon et Corinne Imbert, 2019, « Vers une éthique de l'adoption – Donner une famille à un enfant, Rapport sur l'adoption », Remis au Premier Ministre et au secrétaire d'Etat auprès de la ministère des solidarité et de la Santé chargé de la protection de l'enface, Octobre 2019.

【 里親 】
David Myriam, 2004, Le placement familial, De la pratique à la théorie, Dunod.
Chapon Nathalie 里親と里子について著書多数
ONPE, 2018, La population des enfants suivis en protection de l'enfance au 31/12/2016.

インタビュー資料

養親へのインタビュー、養子と初めて会ったときのこと

初めて会ったときのこと
乳児院内に広いアパートがあって、自宅のようにリビングでゴロゴロしたりしながら 1 日を一緒に過ごした。キッチンもあって、赤ちゃんベッドもオムツかえの台もあって、丸一日過ごせる快適な場所だった。夫婦でご飯も食べ、ラナ(仮名)も一緒に昼寝もした。夫婦とラナ以外その空間に一緒にいるのはラナをずっと見てきた担当小児看護師だけで、たくさん彼女とおしゃべりしてラナは安心して過ごせたと思う。小児看護師はラナがストレスを感じていないかなど見守ってミルクを持ってきてくれたりしたけど、私たちは監視されている感じもせず居心地よく一緒に過ごした。まずは広いリビングのカーペットに横になってラナを抱っこしたり話しかけたりするように言われた。緊張していたが、横になるとすぐにリラックスできた。
あまりにラナのまわりの人たちが温かくてとにかく感動した。スタッフは誰もラナを私たちの前で抱かなかった、それは私たちへの配慮だったと思う。この通い期間中も「夜中でもいつでも話したいことあったら電話してね」と毎日言ってくれた。
月曜日から通って木曜日の夜ラナはうちに泊まりに来て、金曜の朝には乳児院内にラナの門出を祝うパーティーが開かれた。ラナの小児科医や心理士などみんなに囲まれてとても感動的な時間だった。みんながラナに言葉を贈っていて感動した。
初日に、まずはラナについていた名前を呼んで、それから彼女が私たちに慣れた頃に私たちが考えた名前を彼女に説明するように言われた。担当小児看護師が見守る中「ラナと呼びます、なんでラナという名前にしたか」を説明した。
こんなに幸せな人たちに囲まれて乳児院で過ごして、私たちに出会えて、私たちに出会える前も本当にいい時間を過ごしてきたということを知っているからかわいそうという気持ちは全くない。私にとっても乳児院はいい思い出ばかりだから、ラナにも話してあげたい。美しい愛のチェーンの中で育って、信頼関係に包まれていて、港まで送り出してもらった。あとは私たち次第だと思う。

「幾度となく会い、語りあうことの意味」

（第３回）

退院支援研究会　代表　本間　毅

【はじめに】

今回は「高齢者の経口摂取」について考えます。対象はふたりの男性で、ひとりは時期が来たら自然に最期を迎えたいＳさん、もうひとりは周囲に迷惑をかけたくないので頑張り続けるＡさんで、ともに年齢は80代半ばです。

個人情報は倫理的配慮に基づいて修正し、利益相反事項はありません。

【高齢者の嚥下機能と栄養管理、そして経口摂取について】

終末期が近づいても、自宅で家族の手により経口摂取を続ける方がいる一方、機材やスタッフを備えた病院で、早くから経口摂取が禁止されることがあります。自分の家族ならどうするかと問われても、介護の場が自宅か病院や介護施設か、優先するのは安全管理か本人の意向か、容易には解答できない問題だと思います。

私の父は元看護師である母の介護を受け、10年間自宅で寝たきりの生活を過ごし、認知症がすすみ、慢性気管支炎でむせ易いのに、夜半に意識障害を起こす初夏の夕食まで、旬の酒肴を欠かしませんでした。「この頃は刺身を口に当て、酒の薫りを嗅ぐ程度なのに、ほんに面倒くさい」と言いながら、救急搬送された病院で経管栄養が始まると、母は安堵したものの、生き甲斐をなくしたように見えました。父を見舞いに行った母は、刺身の「飾り笹」を物言わぬ父の唇に貼付けて「おしまい」にしてきました。偶然にも母が帰路についた直後に父を見舞った私の妻は、その光景にたいそう驚きながら笑いをこらえることができなかったそうです。女性や下戸の男性が季節の果物や甘いものに口をつけ、莞爾として最期を迎えた話をご家族や訪問スタッフから聞き、基礎疾患の再燃や合併症の発生を危惧した食事制限がある患者さんが、「死んでも良いので好きなものを食べたい」と言うことは珍しくありません。「真剣に患者さんのことを考えているのに」と憤慨する医療者の気持

ちも分らなくもないのですが、あらためてクライエントの「食べ物の物語」について考えてみましょう。

「織り姫も、たずねきてみよ、田のなかの、療養病棟かざる笹の葉」

【S さんが入院していた療養病棟とコロナ禍】

S さんの入院先は、「短信」で堀部安兵衛の故郷として紹介した新発田にある当院の療養病棟です。療養病棟に入院している患者さんのご家族の中には、コロナ禍まで毎日のように病棟を訪れ、昼食の介助をして下さる方がいました。面会禁止になり、ご家族の介助でなければ食事をとりたくないと、「昼食だけのハンガーストライキ」を企てる患者さんや、入院前にスタートした経管栄養を年余にわたり続けながら、アドバンスケアプラン(以下、ACP)の具体的な確認をせず時間が過ぎていた物言わぬ患者さんもいました。

【S さんの生活歴と経過】

80 代半ばの男性 S さんは、農業「改良普及員」を引退してから 78 歳まで業界新聞の記者をしていました。2004 年に「専門技術員」と一元化され、「普及指導員」に名称変更された「改良普及員」は、農家への技術指導や経営相談、制度の啓発・周知、新しい農業についての情報提供など幅広い支援を行なう国家資格者[1)] でした。S さんは、仕事の傍ら自宅で介護を続けていた奥さんを看取ってから、既往のうつ病が悪化し、何をして良いのか分らなくなり、自傷行為をするに至りました。自ら志願した精神科病棟への入院後も無為・好褥の傾向は変わらず、さらに認知症と誤嚥性肺炎と診断され、半年後に当院の療養病棟へ転院しました。

誤嚥の精査のため転院後に行なった嚥下造影では、明らかな誤嚥はないものの、喉の奥の感覚が低下し、気管の手前に食物が残留する傾向が見られました。救急カートや吸引器などを準備した安全な環境で、消化器検査用の造影剤を加えた各種形態の食品を患者さんに少量ずつ摂食してもらい、レントゲンの透視画像で咀嚼嚥下の動態を観察する検査を「嚥下造影」、医療機関では VF (Video-fluorography) と言います。S さん自身が、食物の残留を経験的に理解しており、食事の際には一口の量と速度を調整し、自分で咳払いをするよう心がけていました。S さんは「家内の葬儀の席で、私は延命措置をして欲しくないとみんなに言いました。心臓や呼吸が止まっても (蘇生は) 何もしないで下さい。家族も了承しています」と自らの ACP を述べ、むせても形のある食事がよいと「全粥と極刻み食」を希望しました。

S さんは相手によってひと言も返事を返さないことがあり、私の受けた印象は「うつ病と認知症」より、気がつけば自分の居場所を見失い、取り返しのつかなさ感に苛まれる「内因性(エンドン)メランコリー」[2] に傾きました。最愛の奥さんを失い、S さんは「絶望」へと誘われたのでしょう。キーパーソンの娘さんも「私たち家族も経管栄養は希望しません。父の好きな水羊羹を持参します。体調が良いときに少しでよいので食べさせて下さい。父が積極的な延命を希望していないことは家族で承知しています」と応えました。

ある日の夕方、S さんが「先生、窓から西を見て下さい。夕日が綺麗ですね。あの真ん中あたりで、家内がそろそろこちらへ来ませんかと私を呼んでおります。いくらなんでも先生にはお頼みできないことだと思いますが、あちらに行くのが私の一番の願いです」と言いました。承元の法難による親鸞上人越後配流の影響と、わけても雨上がりの夕まずめどき、海面に投げ拡げられる大きな網のように沈みゆく日の入りを見るにつけ、阿弥陀如来を救い主とする「西方浄土」の思想が地勢に裏うたれ、当地に深く根付いたことに得心が行きます。私がカンファレンスでこのエピソードを紹介すると、「先生、話し盛りすぎ」という思いを押し殺しながら沈黙するスタッフの中で、ただ一人深い共感を示していたのは、S さんが全幅の信頼をよせていた言語聴覚士 K さんでした。S さんは一貫して経管栄養と再検査を希望せず、点滴を中心にした「看取りケア」に移行してひと月後、安らかに他界されました。

【総合考察　S さんの経口摂取】

近年、「口から食べる楽しみ」について言及される機会が増えています。しかし実際には、「体調と覚醒が良い日は経口摂取を図る」と指示した医師が、スタッフの求めに応じて「経口摂取は全面禁止」と指示を書き換えることがあります。何しろ主治医とは言え、365 日、終日患者さんのケアをするわけではありませんし、ひとたび事故が起これば医療者に免責はなく、誤嚥の防止策としては経口摂取の全面禁止が有効なことは確かです。でも、クライエントの意向を尊重することと、医療的な安全管理は本当に両立できないものなのでしょうか。

上田[3] は ICF（国際生活機能分類）を運用するときの「過剰還元」（ある事象を、それを構成する要素に分け、それらひとつひとつの要素を理解できれば、元の事象まで全て理解できるとする考え）を危惧し、対象の「分析」に加え、情報の「解釈」と「再統合」の重要性を強調しました。「心身機能」と「身体構造」を科学的に評価すれば、クライエントの「活動」や「参加」が決まり、おのずと他の選択肢は排除されると思うのは膚浅なる考えで、咀嚼嚥下の「機能や構造」と「活動（経口摂取や経管栄養の自己管理）と参加(会食や家族による介助)」もまた例外ではありません。嚥下造影の分野で高名な武原は「特殊な条件下で行なわれる造影検査の結果は、必ずしも患者の通常の状態を表しているとは限ら

ない」[4] と注意を喚起しました。私たちはいつでも変わりうる、S さんと家族の ACP を聞き落として、勝手な思い込みや決めつけをしないように気をつけました。

近年は「聴診」を可視化する電子聴診器が開発されるなど、医療者が判断を下す根拠は視覚に頼るものが大半を占めるようになりました。でもメルロ・ポンティではありませんが、生きられてきたクライエントの体に触れ、それをくぐり抜け出る声を聴くことにも重きを置くべきです。ユング派の分析家グッケンビュール[5] は「合理的ではないが納得できることさえも、全て数理的に判定できると信じる人は、思考と行為との間にある矛盾に憤慨する。しかしこのような矛盾がない方が、病的な一面性の疑いがある（著者要約）」と述べています。クライエントが死亡退院という形でも、穏やかな気持ちで「家庭と社会に復帰する」[6] ためには、医学的な思考と患者さんの体力や医療的スキルの限界の間に存在するさまざまな要素を容認する姿勢が求められます。

以上が、S さんが教えてくれた経口摂取の物語でした。次は、S さんと同じように生真面目で家族に愛されている A さんが、栄養管理と経口摂取の撞着を乗り越える上で有用な知見、「共通感覚」について教えてくれます。

【A さんの生活歴と経過】

奥さんの他界をきっかけに独居を始めた 80 代の男性 A さんは、認知機能が良く、飲酒・喫煙をせず、血圧は自分で測定し、服薬・水分・塩分摂取の「自己管理」を続けていました。「要支援 1」の認定をうけていますが、介護サービスは利用しておらず、買物とゴミ出しを近所に住む娘さんが手伝い、毎日散歩をしていました。この情報から想像すると、A さんはまことに健康的で自立した生活を送っているような印象を受けますが、持病の心不全の再燃を繰り返し、何度か担当医である B 病院の O 医師のもとへ救急搬送されていました。「心不全」とは、「心臓のポンプ機能が低下し、効率よく血液を送り出すことができず、全身に血液がうっ滞した状態」のことです。心不全の症状は、原因や重症度により異なりますが、動悸や息切れ、倦怠感、体のむくみなどがあります。今回の入院当初、A さんは 50 代の頃に生死の境をさまよった心筋梗塞の発作を思い出すくらい強い胸部苦を感じ、恐怖に全身が固まったそうです。でもそれではいけないと思い、闘病への再スタート[7] を切りました。ほかにも大動脈弁狭窄症、狭心症、高血圧、慢性腎臓病など、心臓に負担がかかる既往（昔、かかった病気）と基礎疾患（今も抱えている病気）がありますが、酸素吸入と利尿剤（うっ滞した血流を改善し、心臓の負担を軽減します）などの薬物療法が奏功し、入院して 3 日目に病室内の歩行が可能になりました。担当の O 医師と B 病院のスタッフは、A さんがしっかりした患者さんだからこそ、心不全に対する理解、服薬と水分・塩分摂取の管理状況、運動強度と生活面のサポート体制を確認し、指導し直す必要があると判断しま

した。

A さんは、普段から水分摂取の上限を 1 日 1000ml に定め、毎日一食は宅配の減塩食を食べていました。しかしよく聞いてみると、ラーメンはスープまで一滴も残さず完食し（塩分は約 6 グラム前後)、気が向けば回転寿司を 13 皿平らげ、料理にはよく醤油をかけていたそうです。この健啖ぶりは、健康に不安がなければ（背景が変われば）賞賛に値します。成人の塩分摂取は 1 日約 6 グラム未満が望ましいとされていますが、醤油大さじ 1 杯 18 グラムに濃口で 2.6、薄口なら 2.9 グラムの塩分が含まれますので、表面積が大きい食品に醤油をザーッとかけると 2～3 グラムの塩分が追加されることがあります。使用量を微調整できる「粉末醤油」もありますが、普段から使い慣れた味に近いものを探すのが大変だという声を耳にします。管理栄養士が、患者さんやご家族に食事指導をする前に、「念のため 1 週間に食べた物の一覧を持参して下さい」と伝えても、追加した調味料や常備の副菜（A さんはタラコと漬物も好物でした）は記録されず、飲酒とおやつの量は過少申告されることが多いようです。A さんは、血圧だけでなく体重も毎日測定し、2kg 増えたら心不全が悪化していると考え、必ず主治医を受診するよう指導されました。そして水分と塩分を厳密に測定して、宅配減塩食の頻度を増やし、毎日続けていた散歩は体調が悪い日は積極的に休むことになりました。サプリメントの CM や市民公開講座で、「摂取カロリーと塩分の過多」ならびに「運動不足」は国民的な課題として取り上げられます。しかし、怪我でたまたま入院した高齢者に低栄養や低ナトリウム血症が見られ、体重のかかる股・膝・足関節などの軟骨が摩耗し、過度の負担をかけない方がよい状況にあることも少なくありません。

退院後は、娘さんが受診に付き添い、家事援助サービスを受けることが決まり、A さんの生活は軌道に乗りそうでした。しかしこれらの指導を守ることは、何事も「人任せ」ですむ入院や入所生活に比べ、独居生活の A さんには大変です。本当にこれで「より良い生活」がもたらされるのか検証した方がよいと O 医師と B 病院のスタッフは考えました。自分たちの言うことを聞かないクライエントは、「ノン・コンプライアンス（決まり事を守れないダメな人)」と切り捨てる医療者がいる中で、A さんと娘さんの心中は穏やかになったと思います。

人は、意図せず神が与ええぬ苦しみを人に与え、贈りえぬ喜びを贈ります。

【総合考察　A さんの好物と「共通感覚」】

A さんの深層心理を探るのは、今回の目的ではありません。でも A さんに限らず、認知機能が良く真面目な患者さんに見られる、「辻褄が合わない生活」の意味（vouloir dire）を探ってみる必要はあります。

霜山[8)]は、「我々が飲食するものは、その時の状況や生活史的連関を有し、味感覚に意味を付与する」と述べています。また「甘い香り」が漂い、「内角低めの甘いカーブ」を打ち込

まれ、「詰めの甘さ」が露呈した時、本来は味覚のひとつである「甘み」は、その状況を的確に教えてくれます。寿司やラーメンがハレの日の食べ物であった時代はさほど昔のことではなく、今やファストフードの代表格といえる「回転寿司」にも、A さんにとって大切な思い出があったのかも知れません。「食品成分表」を開いて摂取カロリーや塩分の計算方法を教える手を休め、クライエントが食べてきたものの意味や、それまでの生活史に耳を傾けると、指導する側とされる側の距離は近づき、食事指導は実りあるものになります。

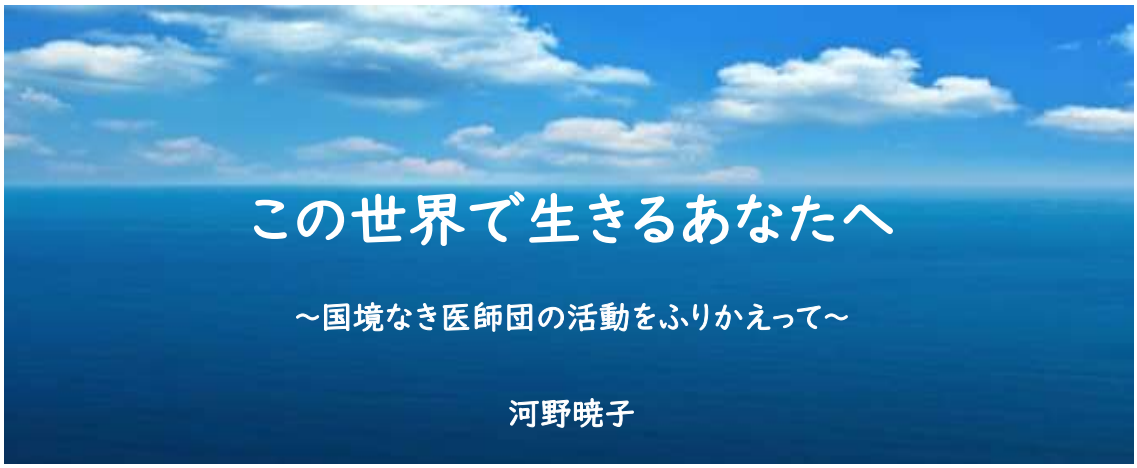
人間の五感の根底には「共通感覚（視・聴・嗅・味・触覚に通底し、統合する感覚）」[9]があり、時に我々を思い出の時間や場所へ連れてゆきます。さらに、視覚を通して鑑賞する絵画は、油彩だけでなく浮世絵やリトグラフでさえ「作者特有のタッチ（触覚）がある」と表現されます。私見ですが、セザンヌの果実やゴッホの自画像や糸杉には、実際に対象を触ることで、自らの表現に力強い動機づけをしたのではないかと思わせるものがあります。「共通感覚」は、「世界」と「個人」の両方に関わりながら、その間を自在に往還する何ものかなのでしょう。カーステンセンの「社会情動的選択理論」[10]では、「人生の残り時間を意識すると、人は過去の好ましい情動体験を追想する」とされていますが、同じような状況で、過去が輝きを失い、パセティックな思いに囚われる人もいます。紅茶に浸したマドレーヌを口に含んだ時、幼少期に過ごした町が立ち現れることもあれば、戦時中の食糧難を思い出すので、芋や茄子は絶対に食べたくない（見たくもない）と言い口を結ぶ高齢者もいる。私に限って言えば、そんなときに思う物語は「今」か「過去」で、けして「未来」ではありません。おそらく我々にとって身近になった、結末を先取りして時間が逆行するリスク社会の「物語」[11]とは異質な、何ものかが支配する領域なのでしょう。「未来」は**なるものであり、あるものではない**。

話を戻します。医療的な指導においては、生命を長らえることを至上の目的とはせず、たまたま患者や家族と呼ばれることになった人の現存在(Dasein)[12]を軸に派生する、個別性・偶然さえ尊重する姿勢が求められます。栄養をとらなければ生きてゆけませんが、指導や治療をする側が疾病に囚われ、食べ物を味わう人を忘れていては栄養をとってもらう意味はなくなります。さらに強調したいのは、顔の中の口はものを食べる器官でありながら、同時に意思を伝える器官でもあるということです。手話が巧みな人が作り出す、非手指動作による表情はとても豊かで、見る者の心に忽ち響きます。高齢者の心不全はさらに増加する[13][14]と予想されていますが、心に響いてしかるべき高齢者やその家族のサインを「感じ損なわない」ようにしたいものです。

S さんへの気持ちを盛り込んだパラレルチャート[15]を供覧してくれた言語聴覚士 K さんと、A さんへの指導と振り返りの詳細を提示してくれた O 医師ならびに B 病院のスタッフに深謝しこの稿を終えます。

【参考資料と引用文献】

1. 農林水産省ホームページ(maff.go.jp)（2021）:「普及指導員資格について」.
2. テレンバッハ,H 著 木村敏訳（2013）:『メランコリー』.みすず書房,PP139-174,P296.
3. 上田敏（2009）:『ICF の理解と活用 人が「生きること」「生きることの困難（障害）」をどう捉えるか』.萌文社,きょうされん,P40-43.
4. 武原格（2020）:「嚥下造影検査」.第 57 回日本リハビリテーション医学会学術集会 摂食嚥下ワークショップ抄録より,京都.
5. グッケンビュール・クレイグ,A 著 山中康裕ほか訳（2007）:『老愚者考』.新曜社,PP84-87,173-175.
6. 臼井正樹（2019）:『介護福祉をめぐる断章～対人援助と親密圏～』.退院支援研究会年次大会特別講演.
7. ヤング,A 著 中井久夫ほか訳（2018）:外傷的記憶の構造.『PTSD の医療人類学』.みすず書房.PP179-191.
8. 霜山徳爾（2001）:『現存在分析と現象学』. 学樹書院,P144.
9. 中村裕二郎（2019）:『共通感覚論 諸感覚の体性感覚的統合』.岩波現代文庫,PP117-129.
10. FUNG,HH. AND CARSTENSEN,LL.（2006）:「GOALS CHANGE WHEN LIFE'S FRAGILITY IS PRIMED:LESSONS LEARNED FROM OLDER ADULTS,THE SEPTEMBER Ⅱ ATTACKS,AND SARS」SOCIAL COGNITION,VOL24,P248-78.
11. 野口裕二（2020）:『ナラティヴと共同性（リスク社会のナラティヴ）』. 青土社,PP59-63
12. ゲルヴェン,M 長谷川西涯訳（1970）:『ハイデッガー「存在と時間」註解』.ちくま学芸文庫, PP59-61.
13. 日本生活習慣病予防協会（2021）:主な生活習慣病 (SEIKATSUSYUKANBYO.COM).
14. 厚生労働省 HP（2018）:「循環器病に関する統計（参考資料 2）」.
15. リタ・シャロン著 齋藤清二 岸本寛史ほか訳（2011）:『ナラティブ・メディスン 物語能力が医療を変える』,医学書院,PP216-220.



この世界で生きるあなたへ

～国境なき医師団の活動をふりかえって～

河野暁子

C さん、ご無事でいるでしょうか。イエメンのニュースを聞くたびに、あなたがどうしているのか心配になります。難民キャンプにいるのでしょうか。それともイエメンのどこかにいるのでしょうか。あるいは戦火を逃れて、イエメンを離れたでしょうか。でも、あなたは成人するかしないかの年齢なので、どこにいても苦労されているのではないかと思っています。10 年以上前、孤児となった男の子が、誰も知り合いのいない国で生きていくことは、どれほど過酷なことだったでしょう。あなたの過ごしてきた年月を思うと、胸が痛みます。

C さん、あなたの母国ソマリアは、長い間無政府状態が続いていましたね。対立する集団が武装し、人々は暴力に巻き込まれていると聞いていました。内戦の続くソマリアや干ばつで仕事のないエチオピア等、アフリカ大陸から少しでも良い環境を求める人々が、密航船に乗りアデン湾を越えてイエメンに逃げてきていました。当時のイエメンは、今のような内戦状態ではありませんでしたね。世界の最貧国にあたるイエメンは、国自体にまったく余裕のない中、アフリカからの難民を大勢受け入れていました。

私が派遣されたのは、イエメン南部の大都市アデンから東へ約 100 ㎞にあるアフワという小さな漁村でした。といっても、実は私はアフワがどんな所なのかよくわかっていません。イエメンでは、女性は黒い装束で両目以外の身体をすべて隠し、一人で外を歩くことはあまりありません。特にアフワのような田舎では、外国人の女性はとても目立ちます。治安の状況を考えると、私の行動範囲はかなり限られ、高い塀に囲まれた国境なき医師団の事務所兼住まいの中にいるか、活動のために難民登録センターへ行くかのどちらかしかありませんでした。約1ヶ月間事務所から出なかったこともあります。今でも思い出すのは、砂漠の気候のため、昼間はとにかく暑いこと。夜になると少し冷え、満天の星空が見えること。蚊がとても多いこと。そして、夜明けとともに、ロバの鳴き声が聞こえることです。

アフワでの私たちの活動は、アフリカから密航船に乗って逃げてきた人たちの心身のケアで、他の支援団体と連携しながら行われていました。まず、密航船がイエメンへ到着した後、海岸に座り込ん

でいる人や自力で歩きだしている人を発見しなければなりません。でも、200 ㎞にわたる海岸の活動範囲の中で、どこに密航船が到着するのかはまったくわかりません。そのため、地元の方々から情報をもらうようにしていました。密航ですので、船が港に到着するわけでもなく、地元の人は、イエメン人じゃない人たちがいるのを見て、どうやら密航船が来たらしいと推測し、私たちへ連絡をくれていました。私たちのチームにはソマリア人もエチオピア人もいて、当然ソマリア語とエチオピア語を使えます。イエメンへ到着した人たちへ、彼らの母国語で話しかけることがとても重要でした。「ここはイエメンです。あなたは安全な場所にいます。これから国連の運営する難民登録センターへ行き、そこで休むことができます。私たち国境なき医師団は、みなさんに心身のケアを提供します」と。

難民登録センターは、砂漠の真ん中に建てられた簡易収容施設です。密航船に乗ってきた人たちは、ここへたどり着くまでにかなりの暴力を受けてきて疲れ切っています。中には怪我をしている人や感染症にかかっている人もいます。ここで着替えや食料が提供され、シャワーを浴び、横になって眠り、心身のケアを受けることは、たとえそれがわずかな時間であっても、次の場所へ進む前の充電となります。C さん、私は孤児になったあなたと、この難民登録センターで出会いました。



イエメンの海岸



難民登録センター内の
国境なき医師団のクリニック

密航船での航海は想像を絶する暴力だと聞いていました。小さな漁船に 100 人を超える人がぎゅうぎゅうに押し込められ、船底に入れられた人の中には窒息して死んでしまう人もいました。人々は膝を抱えたままの姿勢で、およそ 3 日間の航海を耐えないといけません。食料もトイレもありません。エンジンが故障すれば、海の上を何日も漂流することになります。密航業者はとても残忍です。銃で撃たれる、海へ投げ捨てられるなどの殺人に至ることもありました。数々の暴力が横行するところでは、当然ながら性暴力も発生しました。密航を選んだ人たちは、これほどの暴力をふるわれることを予期してはいなかったでしょうし、ともかく無事にイエメンに着くことだけを願って、小さな船の上で恐怖を耐え抜こうとしていたでしょう。そうして、イエメンらしき海岸が見えた時、密航業者から海へ飛び込むように追い立てられます。大勢の人たちが一斉に立ち上がることで、小舟がバランスを崩し転覆してしまうこともあります。その時は、大勢の遺体が海岸へ打ち上げられました。C さん、あなたは無事にイエメンの海岸へ到着することができましたが、一緒に密航船に乗ったお母さんは亡くなってしまいましたね。こうして、あなたは見知らぬ土地で独りになったのでした。

難民登録センターでのあなたは、よく食べ、よく眠り、食事を提供する NGO で働くソマリア人スタッフと仲良くサッカーをしていましたね。私たちもたくさん話しました。あなたは、笑いながらソマリアの絵を描いたりもしていましたね。武装勢力が乗る車の絵でした。C さん、あなたがあまりに楽しそうに難民登録センターで過ごしていたので、自身が置かれた状況を理解しているのか、私はソマリア人のチームメイトと話しました。彼はこう答えてくれました。「もちろん母親が死んだことはわかっているさ。ソマリアでは、親が目の前で殺されることは珍しくないからね。C みたいな子はいっぱいいるよ」。

その後、私はあなたが次の場所で安全に過ごせるように、国連や他の NGO と連絡を取り合いました。アデンからさらに離れた所に、難民キャンプがあります。あなたはそこへ行き、支援を受けながら生きていくことになりました。あなたのような孤児に対しては、国連が責任を持って受け入れると約束してくれました。その難民キャンプでは、私のチームメイトも暮らしていて、あなたを見守ることができるとのことで、ひとまず、私はホッとしました。 C さん、難民登録センターで、あなたは誰とでも仲良くなっていましたね。そんなふうに、周囲の人たちとつながりながら生きていってほしいと願いつつ、あなたと別れました。

イエメンでの私の活動をふり返ると、圧倒的な暴力の前では、できることなど微々たるものでした。それでも、私が外国人で女性であることはよかったように思うのです。ソマリアから密航船に乗って逃げてきた人たちは、私を見かけることで、安全な場所にいると感じられたのではないでしょうか。でも C さん、あなたたちにとって、それが最善なことではないですよね。一時的にせよ、安全が確保されることはとても大事なのですが、ソマリア国内での内戦が終わらなければ、見知らぬ国で難民として暮らしていくことになり、とても多くの不便を強いられます。それを選択せざるほえないほど、ソマリアの状況が酷かったのですね。

イエメンは 2015 年から内戦状態となり、現在では世界最悪の人道危機とまでいわれる状態になっています。私が派遣されていたアフワのプログラムも、とうの昔に閉じました。私のチームメイトの中には、国外へ出た人たちもいます。国外へ出られない人たちはどうしているでしょうか。C さん、あなたはどこでどう生きているでしょうか。無事を祈ることしかできないのが、とてももどかしく悔しいです。

＊個人が特定されないよう、C さんについては省略、改変してあります。

川下の風景②
～人生は川の流れのように～

米津　達也

【老いては子に従え】

老いては子に従え、という

歳を重ねたら、何事も子の言う通りにしておくのが良い、という意味らしいが、それが良いのかどうか、あと３０年程歳を重ねてみないと私には分からない。

逆に高齢福祉の現場で長く相談援助の仕事をしていると、老いても我が道を行き過ぎ、子の悩みの種を作る高齢者は沢山見てきた。老いたる馬は道を忘れず、とも言うが、介護者である子の気持ちも分かるし、何事も経験豊かな高齢者の判断も尊重されるべきとも思うし、如何とも悩ましい。

ここ数年、高齢福祉分野においては「自立支援」や「自己決定」を盛んに謳うようになってきた。尊厳の保持やストレングスという視点以上に、少子高齢化、社会保障費逼迫の 2025 年に向けて、どちらかと言えば「自己責任」を匂わせる雰囲気がある。介護保険制度は、2000 年にスタート、措置から契約へ、多様なサービスをニーズに合わせて選べる、というメリットを打ち出し、今年で 21 年目を迎える。行政や社会福祉法人だけでなく、民間企業にも広く門戸を開放した結果、福祉業以外の異業種の参入が相次ぎ、創意工夫の中で期待通りの多様なサービスの展開が見られたが、一方で「福祉ビジネス」としてのモデルを確立するに至った。私も福祉ビジネスの世界で生きてきた人間なので、それが良いか悪いかはさておいて、ここにきて介護保険制度は広げ過ぎた大風呂敷を急速に畳む作業を始めている。社会保障という制度下で仕事をしていると、いつの間にか梯子を外された、ということは多々あるが、それは高齢者にとっても同じだろう。21 年間、介護保険制度は介護が必要な高齢者や家族をサービス漬けにしておいて、ここにきて急速に「自立」や「決定」というフレーズで抑制しようとしている感覚は現場に立つ身として否めないと感じている。

「自立支援」や「自己決定」を蔑ろにしているわけではなく、十分な説明と権利・責任について語られることなく突き進むことに違和感がある。老いては子に従う、それは子が自らの意図を十分に汲み取り、子を信頼してこそ語られる親心だろう。

【凛として】

凛とした姿勢、というのが相応しい７０代後半の女性に出会った。若い頃から華道の道を歩み、この年代では極みの境地に入ったと言っても過言ではない。複数の教室を持ち、たくさんの教え子たちを抱え、「先生」と慕われている。

「すべては夫のおかげなのよ。私に好き勝手させてくれたから」と言って、仏壇の方を見ると、そこには亡き夫の写真と共に、如何にもこの方の生き方を示す生け花が、まさに凛として飾ってある。華道の事などちっとも知らない素人が見ても、はっとさせられる、そんな花々の立ち姿である。

「さぞかしお高い花でしょうねぇ」

「知りませんよ。お花屋さんが見繕って届けて頂きますから。まぁ、お高いでしょうねぇ」

そんな花の話に囲まれて、その仏間には家族の写真や華展の折の写真がたくさん掲げてある。

「それは立派な人でしたよ」と自慢げに亡き夫の事を語り、そっと仏壇に供えられたお菓子を、一緒に食べましょう、と差し出してくれる。

「もう召し上がったでしょうから」
そんな仕草や言葉の端々に、長年の夫婦関係を垣間見る。教育熱心だった夫のもとで育った子供たちは、高学歴で卒業し、都会でバリバリ仕事をしている。夫亡きあと、女性は独り暮らしとなり、静かに老いを享受しているように思える。以前に比べると予定を忘れることが多くなり、稽古の時間も集中力が途切れるようになり、台所も荒れるようになってきた。病気、加齢、活動力の低下、そして気力の落ち込み。多くの複合的要因が絡み合い、老いは誰にでも平等にやってくる。その過程は違っても。
いよいよ独り暮らしに支障をきたしはじめ、介護サービス等を活用していきましょうか、という話になった。都会から子供たちが駆け付けてくれた。折しも新型コロナウイルスの感染拡大に伴う緊急事態宣言下ではあったが、母に何かあれば次の瞬間には新幹線に乗ってやって来る頼もしい子供たちである。こういう子の対応や接し方を見ていると、親が子にどのように接してきたかが良く見える。少なくとも、この親子には深い愛情関係があり、その意味では凛とした姿勢は、凛とした母親像でもあった。
仏間での話し合いの折、当の本人は参加しなかった。
「お忙しいのに申し訳ないですねぁ。お茶にしますか？珈琲を淹れましょうか？これは子供たちが買って来てくれたお土産なんですよ」といつもと変わらず仏壇に供えられたお菓子を差し出してくれる。きちんと夫に手を合わせてから。
今の生活の現状。その課題背景。今後の方向性について。自分自身のことなのに、彼女は一切立ち入らない。すべては子供たちに任せておきますから、と語るように。おそらく、ここに至るまでに親子でそのような会話があったのだろう。

【歩んだ道を想う】
老いたる馬が道を忘れず、歩んで来た道を終末期で想う家族もいる。
間質性肺炎を患い、在宅酸素を活用しても呼吸苦に苦しむ７０代男性がいる。ベッドから立ち上がるだけでも苦しく、今はトイレに立つこともできず、食事をするだけでも苦しくて、食事の量が著しく低下し、飾られている写真の頃に比べると、とても痩せてしまっている。夫婦二人暮らし。子供たちもそれぞれ家庭を持ち、独立している。夫婦の仲の良さなのか、妻には弱音や愚痴も漏れる。夜中に苦しい、眠れない、と言っては妻の手を取り二人が寝不足に陥る日々。急速に病状が悪化しているというよりは、少しずつ病状は悪化し、身体機能を低下させている。入退院を繰り返すものの、昔のように簡単には長期療養入院が許されるわけもなく、また、ここにも新型コロナの影響が及んでいる。病状は徐々に悪化、積極的な治療は意味がない、延命治療を望むか否か。退院カンファレンスで突きつけられる家族にとって辛い現実の前で、「もう早く死にたい」「これ以上、家族に迷惑を掛けてどうする」と本人は泣き崩れ、妻もまた病苦に苛まれる夫の姿に口惜しさと悲しみを訴える。
「こんな病気になるとは思ってなかった」
「ずっと健康な人だったのに」
これまで歩んで来た誇り高き人生と、思い描いてきた老後の人生とのギャップに苦しむ。そして、子供たちもそんな親の姿を見つめている。
子供たちはどんな思いで見つめるのだろうか。心配、不安は当然だが、如何に自分たちの人生がこの親、この家族の下で育まれてきたのか、歩んで来た道を知る機会になっているのかも知れない。強い父親像が、今、強さだけでなく弱さも、情けなさも、悔しさも、様々な感情を抱える一人の存在として受け止められている。

2021.5.16　米津達也



miho Hatanaka,

私が携わっている区役所の母子保健事業の中で、また性教育の授業の中で、赤ちゃんに（実際に目の前にして、あるいは妊婦であれば母胎内に、あるいは沐浴実習用の新生児人形として）触れる機会がある。
今回は、保健指導の場での赤ちゃんに纏わる一コマと、一編の詩を。

【第２話　赤ちゃんのいる静寂】

　ある区役所での事業のひとつに、生後６か月までの乳児とその親を対象としたクラスがある。コロナ禍にあっては参加者を制限した予約制である。昨年度は開催されなかった時期もあったので、「ようこそおいでくださいました」と心の中で思いつつ参加者をお迎えする。大人は感染症対策のため入り口で検温と手指の消毒、顔にはもちろん、大きなマスクである。参加する方たちはそれで済むが、開催者側の者はさらに、フェイスシールドをつけるようにと指示がある。私はメガネをかけているのでマスクだけでも曇って困るが、シールドをつけると自覚的にはまるで頭に金魚鉢でもかぶっているよう！　話している最中にメガネを直そうとすればシールドに手をぶつけ、結局ずり下がったまま話し続けることになって参加者の方たちにほほえましく見守ってもらっているような具合である。
　以前、参加された父親との立ち話でマスクの話になり、「この子たちは産まれた時から周囲の大人たちの顔は半分見えないのが当たり前の中で育つので、お父さん

とお母さんはいっぱい、いい笑顔で、大きな口を見せてあげてくださいね」と言うと、「ああ！　ほんとですね！　わかりました、いっぱい顔を見せます！」と言ってくださった。目を合わせることはもちろん大切、でもやはり、口の端がにゅーっと持ち上がって笑顔がつくられるのは、すてきなのである、それが大好きな人であればなおのこと。

さてそんなこんなで始まったある日、当日のキャンセルも１組あって４組の母親と赤ちゃんの参加であった。あかるく、陽のたっぷりと入る部屋で、赤ちゃんたちだけはマスクなし。ふくふくと美しい顔。少し大きな子は持参したおもちゃをしっかりと握り、かじりついたり引っ張ったり。ほぼ同じ月齢であったがやはりこの時期の一か月の差は大きく、体の大小だけではない発達の違いが見て取れて興味深い。赤ちゃんは皆、４人とも穏やかでおっとりと、表情がとてもよい。うれしくなる。
たとえ途中で泣いたとしても、私の方は全く気にならないのである、話をしていれば話し続けるだけである。ただそれでも、やはり赤ちゃんがぐずり出すと母親はおろおろとする。「大丈夫ですよ～」と他のスタッフがあやしても、母親としてはなかなかそのように思えないものだということは理解できる。だから１時間ほどの間、我が子がぐずることなく過ごせるということは、日ごろの生活を離れた“ソーシャルな場”での自信や、母親をほっとさせるものであるようだ。しかしもしぐずったとしても、実際は“なんてことはない”ということも知ってもらえたらいいなぁと思う。立ち上がってもいい、抱っこしてあやして、うろうろしても少し部屋を出てもいい、そういった“その子”に適したやり方を母親はそれぞれに徐々に身につけていっているはずで、そのことを家ではない場でも“やってみる”練習だと思って堂々としていてもらえたらと思うのだ。この日も、「気になさらずに、その場でおっぱいをあげてもらってもいいですからね」と言いながら話を始めた。
…と！
即答するかのように、『ぶりぶりっ』！　おお、なんと立派な音よ！　ひとりの赤ちゃんが悠々と“お応えあそばして”、その場は笑いで一気に和んだ。ありがとう、赤ちゃん。あなたはすばらしい人よ！　赤ちゃんは偉いのである。

その後、一通りの話を終えて赤ちゃんとともに行うリラクセーションのヨーガをした。終始おだやかな空気が流れ、最後の短いメディテーションでは、一瞬ぴたりと、何もかもの動きが止まったような静寂。不思議と、このクラスでは毎回、このような時間が訪れる。マタニティのヨーガなど大人だけで行う場合でも稀で貴重なこと、このような時は願っても与えられず、“ただ訪れる”ものである。終了後、ある方がこの時の感じを、「スーっと心が楽になる感じでした」と述べてくださって、「あぁ、よかった」と心動かされた。「お母さんやお父さんたちのこれからの日々の、一日のうちのほんの短い時間でも、心の中にどうぞこのような静けさを持てますように」と願う。「この一瞬のために」とも思えるような、よい日であった。

【あかちゃんはえらい】

あかちゃんはえらい。

産まれてきてすぐ、
だれも教えていないのに、
おっぱいの飲み方を知っている。

あかちゃんはえらい。

ちいさな手をぎゅっと握りしめて、
何かをいっしょうけんめいに　つかもうとしている。
ちいさな目をぱちぱちと開いて、
新しい世界をいっしょうけんめいに　見ようとしている。

抱っこしてほしいとき、おなかが空いたとき、ねむたい時、
あかちゃんは泣きます。そうやって大人に知らせることを　赤ちゃんは知っている。

あかちゃんはえらい。

やがて泣き止んで　「ふんふんふん」　と小さく鼻を鳴らし、
大きな腕の中で静かに眠ります。



Liquid

福祉教育への挑戦(2)

教科「福祉」と向き合う

髙井裕二

現場を分かる教員に近づけるか

地域包括支援センターで勤務していた時に介護職員から「現場を知らないくせに！」とか「あなたは現場のことをわかってない」と言われることがありました。この「現場」というのは非常に厄介な言葉で、言われていた私も経営者に対して「現場のことをわかっていない」と考えるようなことがありました。果たして現場とはどこでしょうか。結局、自分の持ち場(勤務している部署)を範囲として、受け入れがたい対応や状況に出会うと「『現場』をわかっていない」というフレーズを使うことが多くなるのではないでしょうか。

また、「現場を『わかっていない』」に焦点を当てると、「自分が今担っている業務経験を対象者が持っていない、あるいは乏しい」という視点も考えられます。私は相談援助職としての経験はありますが、介護職員としての経験が全くありません。ソーシャルワークとケアワークは共通する価値や知識はあるものの、どちらも異なる専門性があり、上下の関係にあるものではないと考えています。

このような議論も補助線にしながら、今回は教科「福祉」に向き合う社会福祉士にスポットを当ててみます。

教科「福祉」に求められる知識、経験

教科「福祉」は 1999 年 3 月の高等学校学習指導要領改訂時に創設された比較的新しい職業に関する専門教科です。2009 年の高等学校学習指導要領の改訂時に科目名称の変更があり、現在の科目は表 1 の通りです。科目の新設や科目名の変更には、2007 年に介護福祉士の養成課程が見直されたことが背景にあり、「社会福祉」から「介護」にウェイトが置かれていることがお分かりいただけると思います。この改定内容については「介護偏重」とも呼ばれ、問題点も指摘されていますが、多くの学校で介護系の資格を取得できます。例えば、私が非常勤で勤めている高等専修学

校は在学中に介護職員初任者研修(かつてのホームヘルパー2 級に相当)を取得でき、特例高校等の指定を受けていた学年は、卒業後に 9 カ月以上介護職としての実務経験を積めば介護福祉士の受験資格を得ることができます。生徒たちに学校を選んだ理由を尋ねると「資格が取れるから」という声をよく耳にしますので、メリットとして機能している部分があることが確認できます。

表 1　教科福祉の科目

2009 年改訂(9 科目)	改定前(7 科目)
社会福祉基礎	社会福祉基礎、社会福祉基礎
介護福祉基礎	基礎介護
コミュニケーション技術	社会福祉援助技術
生活支援技術	
介護過程	
介護総合演習	社会福祉演習
介護実習	社会福祉実習
こころとからだの理解	
福祉情報活用	福祉情報処理

教科「福祉」の教員免許は社会福祉士(ソーシャルワーカー)の養成校で取得できることが多いです。社会福祉士取得のために、福祉施設や機関に実習には行きますが、全ての人が高齢者施設に実習に行くわけではありませんし、最近では社会福祉士としての実習を重視するので、介護等の経験をする機会は減っています。つまり全く介護の経験がなく、介護系の科目を教えることになる教員がいることになります。先述のように、私も地域包括支援センターの社会福祉士として相談援助業務経験しかないため、日々悩みながら授業展開しています。

私が学校から任され、担当経験がある科目はコミュニケーション技術と生活支援技術で、現在は生活支援技術のみ担当しています。介護過程や介護総合演習といった高度(担当している科目の価値が低いわけではありません)な介護知識・技術・教

授法が求められ科目は介護福祉士を取得されている経験豊富な教員が担当しています。とはいえ、生活支援技術も適切な介護技術を用いて安全に援助できる知識や技術について習得させることをねらいとする科目ですから、演習などを通して体験的に学べるような授業をすることが求められます。

生活支援技術を教えるために

生活支援技術は、国際生活機能分類(ICF)の考え方に基づいたアセスメント、多職種連携の知識を活用する内容があり、介護未経験でも社会福祉士の視点と共通するものがあり、これまでの相談事例を盛り込みながら話をすることができます。しかし、体位変換、移乗、身支度、入浴・清潔保持、食事介助などはどうでしょうか。介護実践の根拠となる介護の原理や原則に繋げながら話をするのですが、事前学習として教科書や資料を読んでも実感を伴った言葉を出すことができません。

学生はそれなりに満足してくれているようですが、「私ではなく介護経験豊富な教員に指導を受けていたら、もっと学生たちの知識・技術は深められるのではないか」という不安を抱きつつ教壇に立っています。そのため、少しでも中身のある授業ができるように、2 つのことに取り組んでいます。１つ目は、社会福祉士のネットワークを活かして、介護経験が豊富な仲間から事例や介護技術などを教えてもらい、地に足の着いた言葉を使うことができるよう心がけています。2 つ目は、昨年の 12 月から介護職員初任者研修を受講し、今年の 4 月に無事修了しました。介護に関する基礎的なことを一から学ぶことに加え、「どうやって分かりやすく伝えているか」と講師の説明や授業展開などを観察することを通して自分の授業に活かすことを考えました。

もちろん、それだけで介護職の現場を理解できたとは思っていませんし、生活支援技術以外科目と連動させた指導なども十分に実施できていませんので、これからも自己研鑽して取り組んでいきます。加えて、私のような介護未経験の教員に必要な対する研修や環境整備などについても研究をしていきたいと考えています。次回は、学生とのやり取りから授業内容を深めることができたシーンを取り上げたいと思います。

「対人援助実践をリブートするこの一冊」

第１回：第１章–その１–

かくも，対人援助の理想と理念は現実につぶされる

渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

あの日を告白する

恥を忍んで，告白する。もう四半世紀前となる，あの日のことを。

私、渡辺修宏はその時，仕事中にもかかわらず，思わず涙がこぼれてきてしまったので，右手にもっていたシャワーノズルを自分の顔にむけた。ちょうどよい温度のお湯が，私の顔にかかり，そのまま全身を濡らした。

「ああ，手元がずれちゃって…。あはははは…」

私はそうつぶやき，わざとらしさを隠しきれないまま，濡れた全身をなんとかするために入浴介護の続きを同僚に任せて，逃げるように別室に移動した。不自然な笑い方を整える余裕はなかった。とにかく１秒でも早く，その場から離れたかったのだ。なぜならば，私の泣き顔を，震えるほどみじめ弱い自分を，誰にも見せたくなかったからだ。

当時，私は，今でいう「障害者支援施設」のソーシャルワーカー（以下，援助者）であり，主に重度の重複障害者（知的障害，身体障害，精神障害者等）の生活援助全般を業務としていた。そして，この頃の私は，職場の同僚とまったく理解しあえていなかった。なによりも，まず私自身が，同僚を理解できない/理解したくないと，頑なに成っていたのであった。

当時，私の職場では，利用者の「背中や腕をはたく」，「頬をビンタする」という援助者の行為が，日常茶飯事のように起きていた。時には，プロレス技である「ローリングソバット（いわゆる後ろ回し蹴り）」や「ジャイアントスイング」が，まさに私の目の前で繰り広げられていた。

「やめてー！！」

「いやいやー！！」

「死んじゃうー！！」



プロレス技：ジャイアントスイング

普段の日常において，プロレス技をかけられた利用者たちの悲鳴が，頻繁に，あたり一面に響いていた。

同僚X（6 つ年上の先輩）は，そんな利用者の声に心を動かされることなく，「てめー，こんな時ばっかり，素直になるな！」とか，「なんで言うこと，わかんねぇんだよ？」とか，「何度言えばわかるんだよ！」と声を荒げて，技をかけ続けていた。そんなXと利用者のやりとりを目の当たりにして，私は，黙ったまま，胸の内で突っ込んだ。

「(言ってわかるくらいだったら，利用者たちは施設に入所してくるわけないじゃん…。)」

私が，なぜ，Xにそんな突っ込みを明言しなかったのか？

それはすでに，その行為が逆効果であることを体験していたからであった。

というのも，私が初めて，Xによる「殴る」「蹴る」を目の当たりにした時，私は咄嗟に，そのXの振りかぶった右のこぶしが再び利用者の肩に落ちる前に，私の両手でそれを止めてしまったのだ。つまり，私の両手が，Xの右腕をつかんだのである。

Xは，そしてXの目の前で腰を抜かして座り込んでいる利用者ももちろん，さらに，少し遠くにいた他の職員もまた，突然の私の行為にびっくりして固まってしまった。一瞬にして皆が私に注目した。そんな彼らの挙動に気づいた私は，何をどう言えばこの事態が丸く収まるのかを必死に考えて，できるだけ冷静な表情をつくり，Xに次のように発した。

「殴らなくても…，なんか，他の方法で指導すれば，いいんじゃないっすかね…？」

私としては，「Xの立場ややり方を尊重した上での発言」という体裁を，それこそ全力で作ったつもりであった。しかしXは，一瞬，ぽかんと口を開けて間を作った後，急に強面な厳しい表情を見せ，私を怒号した。

「なんだ！ナベ（「渡辺」の略，つまり私のこと）！なんで仕事の邪魔をするんだ！俺が必

死になってこいつを指導しているのがわからないのか！」

それからＸは，端を切ったように，私の態度があまりにも無礼で，生意気で，失礼で，お門違いで，常識はずれであるかと指摘してきた。私は，その迫力に圧倒され，両足をすくませつつも，「(…ここで怖気ついてしまっては，伝わるものも伝わらない)」と，石にかじりつくような思いで相手の目を見て，同時に，それがにらみになってないように気を付けつつ，言葉を選んだ。

「…ええと，暴力ではないカタチで，生活指導を行うのがベストだと思って…」

かすかな声で，必死に絞り出して，なんとか冷静さを保ちつつ，Ｘに投げかけた。

しかし，結果的にそれは大失敗となった。すぐさまＸは，他の職員を集めつつ，大きな声で反論した。

「暴力じゃねぇよ！『愛の鞭』だろうが。こいつら（利用者）が可愛いから，愛情をもって接しているだろうが！ナベにはそれがわかんねーのかよ！お前には愛情がねぇのかよ！」

私は絶句した。想定しなかった言葉が怒涛のように押し寄せてきて，自分の脳が空回りする音を聞いた。

「(「愛の鞭」。「愛の鞭」だと？これが「愛の鞭」と言えるのか…？)」

へらへら笑いながら，時におびえる利用者の姿や悲鳴を喜んでいるようにもみえたＸが放った言葉は，少なくても私が 20 年強，生きてきて，学んできた「愛の鞭」が意味するところと，あまりにも大きく異なっていたからだ。

愛の鞭。

それは，相手への愛情と，期待と，願いが深いがゆえに強いがゆえに，あえて心を殺して厳しいかかわりをすること。時にそれを行使する方も傷つき，その切なさに耐えながら，心の中で涙を流しながらも強い処遇を行うこと。愛の鞭とは，それを行う者も受ける者も，どちらも痛みを背負いながらも何か大切で尊い未来にむけて進もうとすることであると，私は子供の時に体験し，学んできた。親や，小中学校の先生たちの姿から，「愛の鞭」をみてきていた。

それが今，自分たちより幼く，知的障害や肢体不自由を有する若者を正座させ，およそ５キロもあるブロックをその両膝に上に置かせ，災害避難用のヘルメットをかぶらせて，そのヘルメットめがけて「後ろ回し蹴り」をする援助者が，「愛の鞭」を語ったのであった。

信じられなかった。

奇声，雄たけびをあげる利用者が必死になって逃げようとしつつも，その行為を威圧的な態度と言動で防ぎ，笑いながら「蹴り」を入れる「職業」援助者が，今，私の目の前にいることが。そんな援助者が「愛の鞭」を主張することが。

あまりのショックで，何をどう伝えるべきか，まったく言葉がでてこなかった。呆然としてしまった。

ただ，そのショックは，タイプは違えども，Ｘにおいても同じようであった。おそらく，X は次のようにショックだったに違いない。

「(…面と向かって自分の仕事を邪魔された，文句を言われた，否定された)」
「(…しかもその相手は，つい先日，社会人になったばかりの新人)」
「(…しかもその相手は，自分の仕事に対して『暴力だ』といちゃもんをつけてきた)」」
おそらくこのようなショックやひっかかりによって，X はひどく不機嫌になったのだろう。Xは，他の職員に声をかけて，私を別室に呼び出した。
それから私は，いわゆる生活指導員室で，Xをはじめ同僚３人に囲まれた。部屋は一気に，非常に険悪なムードを漂わせた。そして，そこで私が，その３人から注意された内容は，おおむね次のような内容であった。
１）知的障害があっても「だめなことはだめ」と，利用者に教えなければならない。それが保護であり，更生指導であり，援助である。
２）知的障害者，特に重度知的障害者に対して，いくらきれいごと，やさしい言葉を並べても伝わらない（時が少なくない)。
３）本当に大事なことを知的障害者に教えるためには，体で教えなければいけない。

以上が，つまるところ彼ら３人が私に伝えてきたことであった。
その３点に対して，私は，直ちにそれが誤っているとは思わなかった。つまり，ある意味で納得したのである。
「ダメなことはダメ」。例えば，刃物を持ち出して自他を傷つけるような行為とか，自分の汚物をあたり一面にまき散らすような行為に対しては，ただちに変容させる必要があると普段から考えていたからだ。そして，知的障害を有する一部の方々には，いくらやさしい言葉を並べて，ゆっくり話しても，耳元でささやいても，結局なにも言わんとすることが伝わらないことなぞ，毎日経験していた。そしてそんな時は，体を使って，身振り手振りを駆使したり，相手の手や足を持って，一緒になって行動したりして，その場面，文脈，状況でしてほしいこと/わかってほしいことを伝えていたからだ。つまり，彼らが言っていることは基本的に，私も常日頃考えていることとそう大差ないことであった。
だがしかし。
だからといって。
「殴る」,「蹴る」,「ビンタする」,「ローリングソバットする」,「ジャイアントスイングする」ということが，肯定されることにはならない。
その一点で。
その一点が，私と彼らの違いを明確にする，とてつもなく大きな違いであった。
しかし，私にとってはあまりにも大きな違いであっても，彼らからすると，「渡辺はまだ，世間をしらない『おぼっちゃん』だから」の一言で片付く問題だったらしい。
「ナベ…。おめーもよぉ…これから社会経験を積めば，そのうちわかるよ…」
私の主張は，私にとっての問題は，彼らに一蹴されてしまった。
そんな些末な違いより，彼らからすると，「(社会人経験が乏しい新人の渡辺が，なぜ，こ

うも先輩にかみつくのか，楯突くのか，ありえない…)」ということのほうがが，大きな問題であったようだ。
「なんて生意気なんだ…」
「人のメンツをつぶしやがって…」
「世間知らずのぼんぼんが…」
「人の苦労も知らずに好き勝手言いやがって…」
「んじゃ，てめーは，あの利用者の問題行動をとめられんのかよ？」
思いもよらなかった言葉を三方から浴びせられて，私は本当に，呼吸もできなくなるくらい息苦しさを感じた。とにかく，全身でひしひし感じたことは，私が言わんとする「暴力で援助を展開してはいけない」という，私にとっての「当たり前」の発想が，彼らと私で全く共有化されていないということであった。
空気を吸うことも，吐くこともままならず，私は彼らから説教を受けた。
おそらくたかだが５−10 分程度の時間であったろうが，私は１時間も２時間にもわたってその場で立ち尽くしたような感覚に襲われた。そして，ふっと，さきほど奇声，雄叫びをあげ，涙する利用者の姿を思い出した。
「死ぬ―，死ぬ―。死んじゃう，死んじゃう…」。
「死ぬ―，死ぬ―。死んじゃう，死んじゃう…」。
「死ぬ―，死ぬ―。死んじゃう，死んじゃう…」。
利用者の声が，私の頭の中でこだました。
なんどもリフレンした。
すると私は，「(ここで先輩らに言うべきことを伝えないと，この職場はこのまま変わらなくなってしまう，それだけはまずい…)」という危機感をもち，意を決して，反論を試みようとした。そのためにまず，大きな息を吸って，吐き出した。
そして，いざ，言うべきことを言えようと思った瞬間，
「…おめーは本当に生意気だな！！人を馬鹿にしてんのかよ！！なんなんだ，その態度は！！」
思いもよらない，この日一番大きな怒声が，あたりに響いた。
「(…馬鹿にしている？何を言っているのだ？)」
私は最初，彼らの怒りがなぜ急に増したのか，その理由にまったく気が付かなった。それがゆえに，そのようなキョトンとした私の態度もまた，彼らの怒りに油を注いだようだった。以降，もう今では思い出せないくらい，つまり，記憶に残らないくらい，厳しい言葉を浴び続けた。
浴び続けたような気がする。
正確には覚えてない。
頭が真っ白になってしまったらしい。
私のかすかな記憶に基づくならば，中学生くらいの年齢のいじめっ子がいじめられっ子

に浴びせるような，実にこどもっぽい表現ばかりが，果てしなく続く雪崩のように，爆音となって続いたような気がする。

「(…30 歳近くになる，大の大人になっても，人にそんな言葉を投げかける人がいるんだなぁ…)」

唯一はっきり覚えていることは，そんなふうに，まるで他人事のように感じたこと，驚いたことはだけだった。なぜかそれだけ，はっきりと覚えている。

その後，どうなったかよく覚えていないが，勤務明け後，一人で帰路に就いたとき，彼らの怒りの起爆剤が一体なんであったのかについて，急に気づいた。

私が意を決して息を吸い，吐き出したその一連の所作が，

それが彼らには，

「渡辺，先輩である俺らにむかってため息つきやがった。『上から目線』で見降ろしやがった」と受け止められたということに。

新人，つぶされる

その「生活指導員室での出来事」があった次の日からの仕事は，まさにストレスフルにまみれた。

朝，職場に着いて，自分の靴箱をみると，あからさまにゴミが入っていたり，インナーシューズそのものが更衣室に放り出されていることなどが起きるようになった。

生活指導員室に入室すると，同僚たちから小さな声で，「ナベは，おぼっちゃん…」とか，「ぼんぼんが・・・」と何度もささやかれた。やがて施設内ですれちがうたびに，何人もの同僚から「まじめ」「くそまじめ」「かたぶつ」とささやかれることが，日常化した。

上司に相談したら，「あいつらも悪い気があるわけじゃないから」と言われた。

他の職員に相談したら「でも，『愛の鞭』がなかったらどう援助すればいいのか…。渡辺さんのいうこともわかるけど，理想じゃ援助はできないよ」と言われた。

…理想？

理想？

理想だって？

私が言っていること，思っていることは単なる理想で，現実的ではないということなのだろうか？

もちろん，そういう面もあるのかもしれない。

障害を有する者とそうでない者がどうやってわかりあうことができるか，あの時も，あの時からすでに四半世紀だった今も，よくわからないままである。だからこそ，理想は時に非現実的であると，理解している。理解できている。そう感じている。

しかし，その問題と，「殴る」，「後ろ回し蹴り」といった援助方法が必要不可欠な理由，

そのような援助を行使するのが致し方ない理由は，まったくつながらない。プロレス技を用いたかかわりを正当化する理由は，何一つ見つからなかった。

仕事中だろうが，休みの日だろうが，朝だろうが昼だろうが夜だろうが，1 日中だろうが，どれほど考えても，いやほど考えても，何一つ見つからなかった。

また，上司，他部署（栄養士など）から，「渡辺君の協調性の問題じゃないか？」とか，「渡辺がチームの和を乱している」と言われた。

そして上司，同僚らは，「渡辺が，ちょっと大人になって，成長すれば，それで問題解決となるんじゃないか」と話し合ってくれた。

誰一人，私の主張を受け止めようとする者は，少なくなくても表面上は，本当に誰一人といなかった。

私は，生まれて初めて「皆無」という言葉をつかって，自分の状況を口にした。

皆無だった。

私の理解者も協力者も。

私は，職場で，孤独となった。

ちゃんと援助するってなんだ？

…そして，

だから，

冒頭で述べたように，私は入浴介護中に，思わず耐えきれなくて涙したのであった。

きっかけは，同じく入浴介護を担っていた同僚Ｙが，その日プライベートで何か嫌なことがあったらしく，ひどくストレスフルがゆえか，まるで八つ当たりをするように利用者にかかわっていたことであった。

私が素直に感じたままを言えば，Ｙはヒステリックになっていた。

自力では入浴できない重度知的障害者に対して，Ｙは甲高い声で叱責を浴びせていた。あまりにもＹがキーキー叫ぶので，利用者たちはかなり動揺し，恐怖し，おののき，普段よりまして，浴室での彼らの行動はスムーズにいかなかった。そんな折，彼らの行動が円滑にすすまないのは私の存在のためと感じたのか，Ｙは私にむかって，ヒステリックな声をあげた「ナベ！，ちゃんとやんなさいよ！」

私はその時，なるたけＹに注目しないように，つまり，目の前の利用者の洗身介助に集中していた。いや，集中しているふりをしていた。

私の手はひと時も休まず動いていた。

私の口は，Ｙの声に殺されないように，利用者にむけて穏やかな声かけを発し続けていた。

か細く，ひ弱で，情けない，必死の，私の抵抗であった。

もしかしたら，そんなみじめな有り様は，Ｙと同類かもしれないと思いつつ。

しかし，そのような私の，自責心，戸惑い，切なさを吹き飛ばすように，Ｙは何度も「ナベ，あんた，ちゃんとやってんの！？」と繰り返し叫んでいた。

その叫びに返答するより前に，私の頭に中では，自問自答が飛び交った。

「(ちゃんと？)」

「(俺のほうがあなたよりちゃんとやっているよ？)」

「(ちゃんと？)」

「(これ以上どうすれば，ちゃんと，できるんだ？)」

「(ちゃんと？)」

「(ちゃんとってなんだ？この利用者たちを，嫌がろうとも浴槽に放り込むことがちゃんとなのか？)」」

そんな答えのでない/みつからない思考が，あの涙を招いたのであった。

怒り，悲しみ，厭きれ，憎しみ，情けなさ，弱さ…。

把握しきれないほどの感情がとめどめなくあふれてきた。私のふたつの目が一気に潤んで，涙がこぼれてきた。

だから私は，とっさにシャワーノズルを自分の顔にむけたのであった。

一体全体，何をどのようにすればいいのか，どう仕事をすればいいのか，まったくみえなくなってしまった。

これらはすべて，共著者である小幡知史氏，二階堂哲氏と出会う，10 年以上前の出来事であった。

もし，この時，あるいはこの頃，この２人と出会えていたのならば，かくもここまでは，対人援助の理想と理念が現実につぶされることはなかっただろうに。

- つづく -

「対人援助実践をリブートするこの一冊」

第２回：第１章–その２–

対人援助実践で行き詰り，本と出会う

渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

何をしたらいいのか，どこにいったらいいのか，わからず

私（渡辺）の職場で日常化した，援助者による「殴る」，「蹴る」。

時に，「おめぇ（お前）」とか，「バカ」とか，「死ね」という言葉をも，伴った。

もちろんその相手は利用者であり，全員に知的障害ないし肢体不自由があった。

つまり，福祉施設の中で，援助者による援助の実態の１つが，なんらかの援助を要するがゆえにそこに入所利用する利用者への身体的，あるいは，心理的虐待であったのだ。少なくても，私にはそう見えた。私以外の同僚は，それを「愛の鞭」と呼んでいたが。

虐待か，「愛の鞭」か，どちらが正しいか，…ということより，そもそも，仕事に対する意識や考え方において共有化できない現実に，私は，もがき苦しんだ。

上司や同僚と，仕事に対する意識や考え方をわかちあえず，なにをどうすればいいのかわからない状態に陥っていた。

前に進むことも，逃げることもできない，恐ろしい泥沼にすっぽりはまったかのような，そんな日々を過ごさざるをえなかった。

職場にいる時はもちろん，自宅に帰っても，どこに行っても，気分が晴れることはなく，そもそも，どこにいっても，自分が「存在している実感」すら感じられず，四六時中，どこに行けばいいのかと自問自答するようになっていた。

ある日の夜勤明け後，その時も，私はそのまま自宅に帰ることできず，ただ，街を徘徊するように自車を運転していた。

気分は重く沈み，仕事に対するもやもや感に浸りながら，田畑が広がる郊外を見渡しながら，ロボットみたいに無感情にハンドルを操作して，ただ時間をつぶすように，運転していた。

そんな時，たまたま走っている地域が，学生時代にボランティア活動で一緒だった先輩，I さんの自宅近郊であることに気が付いた。車で 2〜3 分のところに，I さんのご自宅があったのである。ふと，ハンドルを握る感触が意識に戻ってきて，アクセルを踏む足の力が弱まった。

I さんは，私にとって，尊敬できる先輩の一人であった。

「絵にかいたような真面目で，何事にも一生懸命な好青年」，それが，私にとってのIさんであった。

妙ななつかしさに駆られて，私は，Iさんの家に車を走らせた。

当時，Iさんは地元の行政機関で働いていたので，夜勤明けの私が彼に会えるわけもないと思いつつも，それでも暇をつぶすように，私はIさんの自宅を訪問した。

そして，本当にたまたま，運が良いというか偶然にも，Iさんは自宅に居て，私は彼と久方ぶりに再会した。

学生時代以来の再会を喜んでくれたIさんは，気持ちよく私を彼の自宅に迎い入れてくれて，私は誘われるままに彼の部屋に入り，お茶をごちそうになった。

おいしいお茶を飲み，彼のさわやかな笑顔を見て，私はこらえきれなくなった。

まるで啖呵を切ったように，土砂崩れを起こしたかのように，私はIさんに話し始めてしまった。

「…Iさん，ちょっと話，聞いてくれませんか？俺…辛いんです。」

するとIさんは，さっきまでの笑顔を横に置き，腰をじっくりすえなおし，まるでお地蔵様だかお釈迦様みたいな，やわらかでしっかりとした物腰と態度で，私の話に静かに耳を傾けてくれた。

私は，吐き出すように仕事の悩みを吐露した。おそらく，5-6時間もの間，Iさんは，ずっと私の話しにつき合ってくれた。

私のまとまりのない話が一段落するとき，すでに外は暗くなっていた。

Iさんは本当に真摯に，私の話につきあってくれた。時折，頷いたり，考え込んだりはするものの，1度も私の話を遮ったり，まして，否定・批判することはなかった。

そんなIさんの態度に私は，じわじわと驚きと感動を覚えた。

「(…なんだって，ここまで私の話を聞いてくださるのだろう)」，と。

話につき合ってくださるという感謝はもちろんだが，そんな有難みよりも，やがて，そこまで徹底傾聴できるIさんのお人柄への驚き，あるいは不思議さのほうが強まっていった。

窓の外の暗さに気づいた頃，私は自分の職場の話から，Iさん自身への質問に，話題を変えた。

「ねぇ，Iさん，なんでIさんはそんなに優しく，根気強く，私の話につきあってくれるんですか？そのIさんの強さというか，大きさというか…，Iさんのその人間性は，どうやって生まれたんですか？どこから来たのですか？」

こんな機会はないとばかりに，私は忌憚なく，躊躇いをかなぐりすて，非礼を飛び越えて質問した。

するとIさんは，そんな話題変更にちょっとためらいながらも，顕著な態度を示しながら

しばし考え，突然，部屋の奥から一冊の本を持ち出した。

I さんが手に取った本は，森信三（1989）著の「修身教授録」であった。

おそらく I さんは，何度もその本を読んだのだろう。読み込んだのだろう。読み尽くしたのだろう。本はかなりボロボロで，あちこちが手垢にまみれていた。出版されてまだ数年なのに，まるで数十年も保管されているような雰囲気すらあった。

「この本が僕を育ててくれたんだよ。」

I さんはまた，実にさわやかな笑顔で，その本を私に手渡してくれた。

私は，両手でその本を受け取って，しばし，表紙を凝視した。

I を育てた「修身教授録」

その本は，大阪天王寺師範学校（現・大阪教育大学）本科での森信三先生の講義をまとめた「修身教授録」（全 5 巻，昭和 14 年刊）の中から，昭和 12 年 3 月~昭和 14 年 3 月までの 2 年間の講義を編集しなおしたものであった。

> *「学者にあらず，宗教家にあらず，はたまた教育者にあらず，ただ宿縁に導かれて，国民教育者の友としてこの世の『生』を終えむ。……私の内面には，常に全国 50 万の国民教育者の姿が消えたことはない」*

I さんによると，「国民教育の師父」と謳われ，不世出の哲学者と呼ばれる森信三先生は，1 万回以上にも及ぶ全国行脚の旅を通し，学校経営や教師自身の生き方を説き続けたという。

教師を目指す学生に向けた講義にもかかわらず，「死生の問題」，「人生二度なし」など，本質的かつ簡潔に人生の要諦を解き明かした教えは，年齢，性別，職業を超え，万人の心を打つ不滅の輝きを放ち，いまなお，その人となりや教えを慕う人々の数は増え続けているという。また，SBI ホールディングス社長の北尾吉孝氏，経営コンサルタントの小宮一慶氏，リブセンス社長の村上太一氏など，森先生の著書を愛読書として挙げる経営者やビジネスマンは少なくないという。

> *「人生の意義とは，たとえて申せば，ここに一本のローソクがあるとして，そのローソクを燃やし尽くすことだとも言える。つまり半分燃やしただけで，残りの燃せさしをそのままにしておいたんでは，ローソクを作った意味に叶わないわけです。ローソクは，すべてを燃やし尽くすことによって，初めてその作られた意味も果たせるというもの…」*

森先生曰く，「自分という一本のローソクをどう燃やし尽くすのか。」

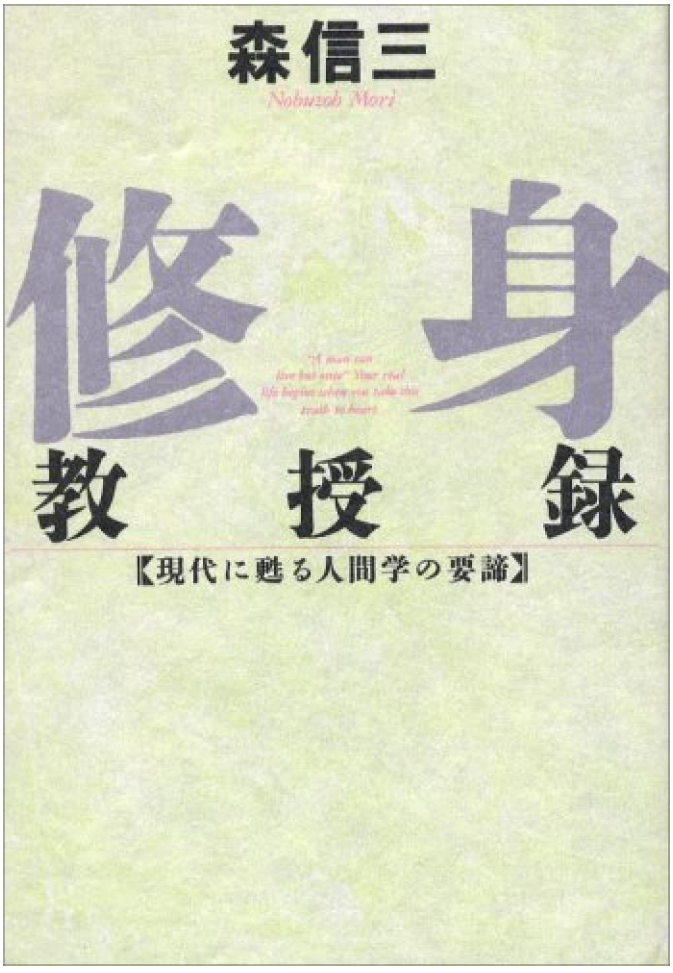
未来を担う若者を前にして，厳壁に刻むかのような気迫と情熱を持って発せられたという森先生の言葉の数々が， 真摯に人生に向き合おうとするすべての人々に，進むべき道を指し示すという…。

そんなエッセンスが詰まった一冊が，「修身教授録」だったのだ。

私はその場で，その本をお借りできないかと，懇願した。

その本を読めば何かがわかるような気がして。

I さんは，これまた実にさわやかな笑顔で，「もちろん，ぜひ読んでくれ。きっと修宏君にとって，いい学びがあるよ」と，快諾してくれた。



森信三（1989），致知出版社

対人援助実践の樹海で迷い，一冊の本と出会う

「修身教授録」は，一見，対人援助臨床をかかわりのない本であった。

ただ，人として，社会の中で，どう生きるか，という問いを，時代や文化に振り回されることなく，とめどめなく投げかけてくる内容で満ちていた。

私は自宅，自室で，この本を読み漁った。

時に，横になって本を広げた

時に，バックに忍ばせて街を歩いた。

時に，助手席に本を置いて，ドライブした。

頭の中では，他愛もない疑問が降っては湧いてきた。

なぜＩさんは，私にこの本を貸してくれたのだろう？（私が頼んだにしても）

Ｉさんは私に，この本から何を感じてほしかったのだろう？

Ｉさんは私に，何を伝えようとしてくれているのだろう？

私は，あの職場でどう在ればいいのだろう？

私は，これからどうやって生きていけばいいのだろう？

・・・おそらく毎日，そんな問いを空に投げかけてながら，私は生活した。

私は，「仕事を辞める，この職場を去る」ということを，選びたくなかった。

なんというか，それは単なる「逃げ」になると思ったからだ。

「愛の鞭」を「虐待」と言い放った者の誤りが認められるような気がして，絶対にやめるわけにはいかないと思っていた。「愛の鞭」の前に，敗北したくなかったのだ。

しかもそれは，私一人の，小さな信念の敗北のみならず，わが国（の，ある地方の，たった１つの小さな福祉施設内における）の社会福祉の衰退の一歩にすらなるだろうと，実に大げさに，実に自分勝手に考えていたのだ。

実に生意気で，増上慢で，大げさであると，おそらく読者は失笑されるだろう。

だが，若かった私は当時，「ルーサーキング牧師や，マザーテレサや，マハトマ・ガンジー，糸賀一雄なら，絶対辞めないだろうから，私も辞められない」と思っていた。

そんな思いで，自分の内側から湧き出る恐怖や不安や無気力と向き合っていた。

崖っぷちに立たされて，いつ倒れて，いつ崖から落ちて死ぬのか，というような，薄氷の上を歩く心境だったのだ。

そんな心持ちで，「修身教授録」を紐解いた。

どこかで，「Ｉさんだったら，今，どうする？」と，尊敬する先輩の姿を想像した。

森先生の名言が心に染み込んでいった。

名言は道を拓くというが，まさにそんな，道を切り開く音が脳内で響く様に，ゆっくりとしっかりと，ページをめくっていったのだった。

・・・やがて，１つの答えが，私の内側から芽生えてきた上司，同僚に，「今の自分の気持ちをわかってもらう，受け止めてもらう」という解決を求めることは，必ずしもベストではない，ということに気がついた。

それは，上司，同僚に「変わってもらう」という他力本願であれば，なおさらであろう，と。

自分にできることは，「自分が変わること」である。
もちろん，それは，妥協とか，黙認黙殺とか，見て見ぬふりという意味ではない。
自分自身の変化によって，自分が苦しいと感じる局面・事態の変化の兆しを，産み出すことであろうということだ。

もし，「自分は間違っていない」と，自分自身の変化を拒否するのならば，一番変化させたい目の前の状況は，ずっと変わらないままだろう。まず，自分自身が変わる勇気を持たなければならない。それはつまるところ，まず自分が，もっと学んで，もっと成長して，もっと強くなって，もっと高いレベルに至ることなのだろう。

そのような気づきを得て初めて，私は，かつて X から，あるいは，上司や同僚から指摘された，「渡辺がちょっと大人になって，成長しなければ問題は解決されない」という言葉を，ようやく受け止められるようになった。

彼らの指摘は間違っていなかった。

私は盲目していたのだ。

私は，自分は間違っていないとだけ，頑固に考えすぎていた。

私にできることと，すべきことは，私自身を変えることであった。

反省の念が生まれて，頭が下がった。

感動が湧き出て，心が晴れてきた。

自分がやるべきことをやろうという気持ちが定まった。

やるべきことをやることが，自分自身の内側からあふれてくる苦しい感情を唯一払拭できることであり，また，援助者として，利用者のために遂行すべきことだと思った。

対人援助実践をリブートするために

はっと気付くと，「修身教授録」を読んで，２年，あるいは３年が過ぎていた。いつの間にか，X も Y も職場から消えていた。

「愛の鞭」という名の暴力が，職場から完全に消えたわけではなかったが，すでに世の中では，「虐待は良くない」という声が以前より大きくなってきていた。社会福祉基礎構造改革なる文言が，あちこちで飛び交い始めていた。

さらに数年たつと，介護保険制度が開始され，従来の措置制度は利用契約制度に変わった。支援費支給制度，障害者自立支援法，障害者総合支援法・・・次々と法律が変わり，伴って，障害者支援領域のあり方は見直されていった。必ずしも順調に，と，いうわけではなかったが，「古き体質は改善しよう」という方向性だけは，一貫していたように思う。

時代はどんどん変わるが，私はいつでも，相も変わらず，対人援助とは何か？という問いを持ち続けていたようであった。

あれこれ学ぼうとしているうちに，職場の内外でいろいろな出会いを得た。

そこで気づいたことは，対人援助臨床で迷い，悩み，苦しんでいるのは，私一人ではない

ということだった。

数えきれない援助者たちが，その中身や程度はバラバラなれど，皆，真摯に，そして利他的に，対人援助とは何かと，悩み苦しんでいた。

魅力的な援助者，力量が高い援助者ほど，大なり小なり，もがいているように，もがきやすいようにみえた（そうみえたのは，もしかしたらたまたま，そして私だけかもしれないが）。

例えば，障害児支援領域で療育に携わる小幡知史氏は，援助における科学性と，それに基づく援助の効果について深く思索されていた。まるで，答えのない問いに挑み続けるような冒険者のようであった。

例えば，特別支援教育領域で教育に携わる二階堂哲先生は，障害を持つ児童のひとりひとりにあった教育的かかわりが，いかにその児童の発達と可能性を左右するか，人生を大きく変えるのかについて，実に真摯に向き合っていられていた。彼の，児童を思うまなざしは，慈しみに満ちた聖者のようであった。

そして小幡氏も二階堂先生も，実に，勉強熱心であった。

そう，かつての渡辺に道を照らしてくれたIさんのように，小幡氏も，二階堂先生も，臨床で額の汗をぬぐいながら，片手に本をもち，時にその本を開き，本から得た学びを臨床にむすびつけていたのであった。

歩みながら学び，学びながら歩む。そのような彼らのひたむきさは，常にご自身の実践をリブートし続けるような生き様そのものであった。

リブート（reboot）。意味は再起動。再始動。

対人援助臨床で行き詰ったら，そう，リブートを試みる。

そんなリブートのスイッチは，私にとっての「修身教授録」のように，もしかしたら良書なのかもしれない。

2020年秋季，小幡氏，二階堂先生，そして渡辺の３名は，対人援助学会年次大会で，企画ワークショップを開催した。

そのワークショップのタイトルは以下の通り。

「対人援助実践をリブートするこの１冊」

- つづく -

中国のセクシャルマイノリティ支援　―Ⅰ

劉　強（リュウ　キョウ）
立命館大学大学院　　人間科学研究科

自己紹介

私は現在、立命館大学大学院人間科学研究科の博士課程後期課程に在学しております。新型コロナウイルスの影響により、研究調査がうまくいかず、現在は在学を延長しながら、さまざまな方法を探り、論文作成を頑張っています。私の出身は中国の東北地方にあるハルビンと呼ばれる街が管轄する田舎です。私は二十歳までそこで勉強し、大学では日本語を専攻していました。家族の関係で、2014 年に来日留学し、新潟、京都、大阪に住み、現在は関西にある大学に通いながら、東京に住んでいます。修士も現在と同じく、立命館大学大学院で研究し、中国の家庭内暴力事情について研究を行いました。現在はテーマを変え、中国人男性同性愛者の家族へのカミングアウトを中心に研究を取り組んでいます。

なぜ、カミングアウトについて研究を行うのか？

セクシャルマイノリティにとって、異性愛規範であるこの社会の中で、自分のセクシャリティを打ち明けることは悩ましい。打ち明けるとしたら、誰に、どこまで打ち明けるのか、打ち明けてしまうと何か不都合が起きるだろうかと不安はつきません。私もそのうちの一人でした。そこで、セクシャルマイノリティが自身について打ち明けるカミングアウトやその苦悩について研究したいと考えました。

また、中国は現在、セクシャルマイノリティの理解も少なく、カミングアウトのハードルが高いのが現状です。さらに、長年実施された一人っ子政策がそれに拍車をかけます。その政策、中国固有の価値観や文化が影響し、一人っ子であるがゆえに、家族に自分のセクシャルマイノリティを打ち明けることは自ずと困難になりました。もちろん、一人っ子であっても家族に自分のセクシャリティを告白し、家族から理解を得、自分が贈りたい生活を送れている人がいますが、誰にも言えず異性と結婚したり、一人で抱え込み、苦しんだ挙句、自殺を図った人も多くいます。また、家族にカミングアウトした結果、理解を得られず、転向治療を強いられ、残念なことに、精神科病院に送り出される

ケースもあります。このように中国では、依然として異性愛者でないことは、「罪」であるという認識が多分に残る社会です。中国でのセクシャルマイノリティへの理解を進めることはもちろん、彼ら彼女らは中国人家族の中でどのような存在で、その存在は何を意味するのか、カミングアウトに対する理解・受容は中国人家族においてどのように親子間の相互作用を通じて生じたのか、私は知りたいと思い研究を続けています。

なぜこの連載を書きたいと思うのか？

博士論文の研究調査を進めていくうちに、多様な経験やバックグラウンドを持つ方と出会えました。そのなかに、かつて転向治療を強いられましたが、現在はセクシャルマイノリティの権利のため、法的サポートを提供する人、同じ背景を持つセクシャルマイノリティに対してカウンセリング支援を提供する臨床心理士、セクシャルマイノリティに関する研究を行う学生と研究者、地域に根ざしてレズビアンやトランスジェンダーなどへ支援を行う女性たち、子どものカミングアウトのショックを乗り越え、現在はボランティアとして活躍される親、全国規模のセクシャルマイノリティ支援団体を創建し、その運営に力を尽くす主宰者、スタッフなど、多様な背景を持つ人がいます。さらに、彼/彼女らとの交流の中から、カミングアウトだけではなく、同性婚、代理母出産、偽装結婚、転向治療、同妻（トンチー）・同夫（トンフー）（結婚相手に非異性愛者であることを伝えられず結婚された女性/男性のことを指す）、エイズ、不特定多数の交際・性交渉など、いくつかの非常にデリケートなテーマが浮かび上がりました。今日、各国でさまざまな運動のおかげで、セクシャルマイノリティコミュニテーが徐々に理解されつつありますが、国・地域によっては温度差があり、同じ国とはいえ、地方と都会の間にも認識や理解に差があります。このような多様なテーマや問題点を抱えるコミュニティのことについて少しでも発信できればと思い、連載を始めました。私たちは国籍や宗教が違っていても、同じ青空の下で生活を営むセクシャルマイノリティとして、他国の事情を知ることによって自分の中にも新たな気づきも生まれます。そして、バイリンガルとして、外国の方に自国の状況を紹介できることは国際交流にもつながると思います。また、ここでの発信は博士論文の作成や今後の研究などに役に立つと感じています。

今後は、どのような内容を発信するのか？

タイトルで述べたように、今後は中国のセクシャルマイノリティ支援について、中国本土を中心に、マカオ、香港、台湾での支援状況をも紹介していきたいです。

実は、中国本土では、全国規模の支援団体があれば、ローカライズされた支援団体もあり、トータルで１００以上の支援団体が

活動しています。これら１００の団体を全て紹介することは難しいですが、個人的に繋がりのある団体を中心に、そこに所属するボランティアが家族内部で起きたカミングアウトに対して実際にどのような支援を提供しているのか、支援を提供する際のハプニングやストーリーなどを紹介する予定です。また、こちらの団体はどのように行政機関と連携をとり、研修会や研究会を行ったのか、日々はどのような活動を行なったのかをも紹介したいです。

次回は、私は現在、博士論文のご協力をしてくださった団体の成立、歴史、仕組み、活動内容について紹介する予定です。（続く）

島根の中山間地から Work as Life

第１回　ラポール

野中 浩一

ラポールの源泉　～祖母と田舎の憧憬～

昨年の 12 月、私の母方の祖母が亡くなった。94 歳だった。亡くなる 2 週間前まで、木々と田畑に囲まれた中山間地域の一軒家で、同じく 94 歳の祖父と 2 人で生活していた。日本昔ばなしに出てきそうな、田舎の、腰の曲がった、優しい笑顔の祖母であった。



祖父母宅

私は、父の全国転勤により様々な土地で暮らしてきた。高校卒業後は愛知で大学生活を送り、東京での社会人生活を経て、そして 15 年前に祖父母のいる島根県に妻とともに移住した。

移住後は毎月のように祖父母宅を訪ねていたが、私は祖母のことをほとんど知らない。何度か尋ねたことはある。しかし祖母はあまり語りたがらなかった。私が唯一知っていることは、10 代で看

護師を目指して上京するも、すぐに挫折して島根に戻ったことであった。このことも祖母からではなく祖父か母から聞いたように思う。

祖母は家から出ようとしなかった。私が知る限り、この 15 年間で 2 回、出かけたとの話を聞いた。夏バテと風邪が重なったのか 1 週間ほど食事がほとんど取れず周囲の強い勧めで近所の病院に行った時、私の母が大病を患って入院した時、その 2 回しか私は知らない。以前はもう少しは出ていたようであるが、私の幼少時より、祖母がどこかに出かけている記憶、一緒に出かけた記憶はない。

30〜40 年前、私が子どもの頃、祖父母宅は私の住む家から地理的に遠く、4 年に 1 度訪ねるくらいであった。その時から、そして私が島根に移住して毎月通うようになってからもずっと変わらず、私たち家族が祖父母の家を訪ねると外まで出てきて出迎え、祖父が普段買い物する商店よりちょっと遠くて大きいスーパーで買ってきたお寿司やお肉と、自家製野菜で作った数々のお惣菜でもてなしてくれた。祖母はよく「(料理が) 何もなくてつまらんねえ」「それで足りるの？」と食べきれないほどの食事を前に何度もご飯をおかわりするよう催促してくれた。「もう腹一杯だわ」と返す私は、その毎回のやりとりがやや面倒でもあり、嬉しくもあった。そして帰る時になると家の外まで見送り、去っていく私たち家族の車に向かって手を振っていた。

台所に立ち、昼食、お茶とお菓子、夕食を用意し、寝床をこしらえ、たまに座椅子で休んでテレビを見て、時折畑をかまい、毎日日記を付けていた祖母。そんな家の敷地から出ない祖母に、94 歳にして街中へ引っ越す話が持ち上がった。私の叔父である長男が、街中に住宅を借りて一緒に住もうと持ちかけたのだ。祖父は自分たちがいつまで元気でいられるか分からないからと賛同したが、祖母ははっきり嫌と言わないかわりに首を縦にも振らなかった。その後半年、移住に向けた調整は進んでいった。祖母は次第に食が細り、転居予定の 1 週間前に入院となり、そこからはあっという間に亡くなった。私は祖母を亡くした悲しさとともに、祖母らしい最期だと感心した。

心理学に「ラポール（rapport)」という概念がある。フランス語源で「橋を架ける」という意味を持つこの言葉は、17 世紀中頃から英語に派生して「信頼関係」の意を持つ。腰が曲がった小さな祖母の存在とその暖かな笑顔は、私の内のラポール感覚の源泉であろうと思う。

教育現場における、個のラポール、場のラポール

フリースクールを運営して、4 月で 10 周年を迎えた。社会起業というほどの志を持って始めた記憶はない。身近な人に対して、自分の手の届く範囲のことを、一緒にやっていく。それだけを続けてきたつもりだ。高校と連携しているため高校卒業ができ、授業や教科学習も行うが、学校というより生活共同体のイメージでこれまでやってきた。

私が運営するフリースクール兼通信制高校サポート校には 35 名の高校生が在籍しており、生徒たちは週 3〜5 日で登校をしている（年により小・中学生や大学生が通うこともある）。そのため、私は月曜から土曜までの週 6 日間、10 時〜16 時くらいの間、1 日あたり（多年齢や多学年が混ざり合った）18 人前後の生徒たちと私も含め 5 名程度の職員とで、会話や勉強や遊びや活動（軽運動、音楽、料理・お菓子づくり、海・山・公園・街中の散策等）をしながら過ごしている。



スペース①



スペース②



スペース③

フリースクールという空間は、私にとって興味深いコミュニティである。その多くが小・中学時代に不登校の経験を持つ。中には、心療内科に通い服薬をしている、非行傾向があり更生施設に入った経験がある、診断名があり中学時は支援学級で過ごしていた、などの生徒もいる。そうでなくても、不安感が強く情緒の波が強い、友人関係でのトラブルが多い、集団の中で萎縮したり、強い違和感や居心地の悪さがある、家庭環境が複雑で情緒面または経済面等で不安定である、ある学習

や課題遂行において難が生じる、など目に見えにくい事情を複合的にもつ生徒は多い。全日制の学校では分離され個別対応をされがちな生徒たちが、フリースクールで一緒に集い、活動し、次第に人や場所に馴染み、それなりに過ごす。そんな面白みを感じながら 10 年間過ごしてきた。

先日、高校 3 年生のある女子生徒に、同じく 3 年生の男子生徒がふらっと近づき、話しかけ、笑いあっていた。大げさに言えば、私にとってそれは感慨深い瞬間だった。

さかのぼること 2 年前、この 2 人の生徒はまだお互いに友人がいない状態で出会い、なんとなく声を掛け合って（友人として）遊ぶようになった。そんな中で夏祭りの日に 2 人でショッピングモールに行き、女子生徒は自分の見たい化粧品などのコーナーを見て回り、男子生徒はその間退屈し、女子生徒の「居たくないなら帰ったら」という言葉をきっかけに家に帰った。男子生徒は女子生徒の身勝手に憤慨し、一緒に来たのに自分のやりたいことばかりで自分はほったらかされたと、怒った調子で私に訴えてきた。一方の女子生徒は、一緒に遊ぶ約束で行動していたのに勝手に帰ったと男子生徒を責め、退屈していたなら言って欲しかったと、怒り、泣いて私に訴えた。

それから 2 人は一切口をきかなくなり、学校生活を別の友人と過ごしてきた。しかし 2 人ともその後も友人関係でトラブルが続き、1 年時と 2 年時は短期間で友人と決別することがあった。しかし 2 年の途中頃から変化が見られ、2 人とも次第に人づきあいが広がり、長く続くようになってきた。そんな中での、約 2 年ぶりの会話と笑顔であった。

この 2 人の経緯のように、人と人との関係性は思い通りにいくことばかりではなく、折り合いがつきにくいことがある。そんな中でも一緒に居続けてきたこと、そしてお互いの成長に伴って関係に自己修復が働いたことの理由の 1 つとして、個のラポールと場のラポールの作用があると考えている。

私にとっての心理臨床におけるラポールに関する一番の拠り所は、ロジャーズ選集にある「カウンセリング関係の質～具体的には、セラピストの一致性（純粋性）、無条件の肯定的配慮（尊重、受容、信頼）、および共感（クライエントの観点から理解すること）～の方が、セラピストの用いる特定の技術よりも、セラピー的変化にとって重要な要因である、と考えるようになった。」という一文である。

フリースクールのような教育現場においても、心理臨床の現場のように個と個のラポール形成は重要である。加えて、個のラポールを築くとともに、次第にその範囲を小集団に広げ、「場のラポール」を築くことが有効であると感じている。その際、上記の一致性、肯定的配慮、共感に加え、①初期不安を和らげる集団内の「安全感」の保障、②その集団における「相互理解」の醸成、③その集団成員の「公平感と納得感」の形成の 3 点が、場のラポールを形成する上で重要であると経験上仮定している。そしてこれら 3 点を実現するための構造的配慮を日々考え、工夫することが私の仕事の 1 つである。

語句注釈

※ Work as Life

西洋的にワークとライフを二分法で分けるのではなく、日本人が旧来から文化としてきた生活の中に労働を含み、「無理なく続けられることを、生活の中に入れ込み複数行う」考え方。百姓。東洋的であり、オンとオフの区別をつけない、「仕事の中にいながら生きている」「それがストレスなく生活と一致している」こと。メディアアーティストで、タレント、大学准教授でもある落合陽一氏が著書の中で提唱。この言葉を、著者が目指す生き方の方向性としてタイトルに据えた。

※ ラポール

小川（2019）は、斯波・佐野（2002）の言葉を引用し，ラポールの概念を定める際にどこまでをラポールと考えるかという範囲の問題、ラポールという言葉が臨床技法別に個別に解釈されて利用されてきたという背景の問題、歴史的にラポールの語義すら変遷しているという問題があり、普遍的なラポールの定義がないという問題があると言及している。そのためラポールの概念・語義が記されている辞典からその共通性に着目し、実際の臨床場面に即した、学派に捉われない広義の定義として、ラポールの語義を暫定的に「心理療法場面の初期に形成され、全過程を通して存在し続ける、相互的・共感的・受容的な関係性のことであり、面接を継続し、クライアントが防衛を解いて話したり自己の内面を見つめることができるようになるために必要な関係性である。」としている(斯波・佐野 , 2002, p.60)。

小川 瑛（2019)「心理臨床家の経験知に基づくラポールの定義について」Rikkyo Clinical Psychology Research 2019, Vol. 13, 15-24

斯波 涼介・佐野 秀樹（2002)『ラポール形成』に関する研究の展望 教育相談研究, 40, 61- 66.

※ロジャーズ選集(上・下)

H.カーシェンバウム／V.L.ヘンダーソン=編，伊東博・村山正治=監訳（2001）誠信書房

夫の腎臓と、笑うわたし

両角　晴香

わたしの体内には、腎臓が３つあります。３つのうちの２つは、生まれながらに背中についている自己腎です。もう一つは、３年前に夫からもらった移植腎です。これはおへその下の右腹にくっついています。

わたしは、中学１年生の時に IgA 腎症という難病患者になりました。数十年かけてゆるやかに腎臓病は悪化し、36 歳で末期腎不全に至りました。その２年後に、夫から腎臓を一つわけてもらう腎臓移植手術を受け、私は 25 年ぶりに、重い荷物をおろし、ぐっすり眠ることができました。結婚 11 年目の出来事でした。

手術前の夫の腎機能は90 %ありました。それを夫婦で、はんぶんこ。
現在は、45%×２の腎機能を保ちながら、夫婦で楽しく暮らしています。
夫はわたしの一部であり、わたしは夫の一部です。

夫からもらった腎臓は、大きめのアボカドサイズほどあります。だから、わたしのお腹はふっくらしていて、「おめでたじゃない？」と声に出して聞かれたことが一度や二度ではありません（しかも全員男性にです。恥ずかしい～）。自粛期間中に、少し食べすぎたかな。わたしは、腎移植から丸３年が経過した 2021 年春に、市民ランナーの夫にくっついてジョギングをはじめました。

これが、ちょっとした感動体験だったので、よかったら聞いてください。

かつての腎臓病患者には、厳しい運動制限が強いられていました。
「とにかく安静にしてね」というのが医師のスタンダードのアドバイスで、医師の言いつけを守ったわたしは、運動も体を動かすのも大の苦手になりました。最後にジョギングをしたのはいつだっけ。28歳の時だっけ。
さあ、いざ走り始めると、なんじゃこりゃ、と。筋肉はふにゃふにゃだし、膝は痛いし、ものの数分で呼吸が荒くなりました。
自分の体にがっかりしながら走っていると、夫がスマホを取り出して加山雄三&谷村新司の名曲「サライ」をかけてくれました。「24時間テレビ」の感動シーンを再現するという“ボケ”です。

人通りのある歩道で、サライを流しながら小太りのおばさんが体を揺らして走ってるなんて、みっともないですよね。笑うしかない！　だから開き直って走る、走る、走る。さらに、走る、走る、走る。足のバネでぐんと体が跳ねる。大きく手を振って空気を切る。風に髪がなびいて、気持ちいいーー！

サライの歌詞に誘われたのか、上機嫌になったわたしは、ふっと思い出しました。

病気になる前の小学生のわたしは、走るのが大好きでした。取り柄なんてなかったけど、走力と体力だけは自信がありました。
「将来の夢はスプリンター」
と言って、クラスメイトに笑われたことも、ついでに思い出しました。胸が熱くなりました。

腎移植とは、人を再生させる医療だとわたしは思っています。単に体を治すだけでなく、本来の自分を取り戻してくれる医療なのです。

そんなわたしのフィルターを通して腎移植という医療を知る友人・知人は、腎

移植というものを好意的に受け止めてくれるように思います。

旦那さんが大好きな 30 代女性 A ちゃんは、「不謹慎かもしれないけど、うらやましい。わたしもダンナの腎臓がほしい」と言いました。

この春、娘さんが大学に進学されたという 40 代男性 B さんは、「必要とする人がいるなら他人にあげてもいいよ、ぼくの腎臓。だって腎臓 1 つでも生きていけるんでしょ」と言いました。

10 年ぶりに再会した幼なじみのお母さんは、「はるちゃん、ダンナさんから腎臓もらったんやろ？　そんなやさしい男性がこの世におるんやねえ」と言いました。おばちゃんは、数年前から認知症を患っています。ほんの 10 分前のことは記憶できないけど、「はるちゃんの腎臓の話は忘れんっちゃんね」と幼なじみが教えてくれました。

日本には透析患者さんが 34 万人いらっしゃいます。それに対して、腎移植は年間 2000 件程度しかおこなわれていません。腎移植はまだまだレアなのだと思っています。

だから、わたしはこのコラムを通して、体験者の日常を綴っていきます。医学書や日本移植学会が発行するファクトブックには書いていない、つかみどころのない話になると思います。

最後に、わたしの拙い文章にお付き合いくださったすべての方に感謝します。

2021 年 5 月　もろずみはるか



対人援助学マガジン読書会報告

対人援助学マガジン読書会（第１回）実施報告

2021 年 4 月 23 日、初めての試みとして、「対人援助学マガジン読書会」をオンライン（Zoom ミーティング）で開催しました。

マガジンの連載の中から、指定図書をひとつ定め、参加者には読書会までに指定図書の最新号（加えて、可能な範囲でバックナンバーも）を読んできてもらい、当日それぞれの感想を持ち寄り、意見交換を行いました。

初回の指定図書は、杉江太朗氏の「余地　－相談業務を楽しむ方法－」で、編集部を含め 9 名の読者と、執筆者の杉江さんがご参加くださいました。遠くは北海道やフランスからの参加者もあり、このメンバーが集まれたのはオンラインならではのことだなと感じました。マガジンを読んでも、その感想を共有する機会は少ないのですが、読書会では各々の視点から思い思いの感想や意見が出て、執筆者への質問もあってと、2 時間いっぱい、活発な意見交換の場を持つことができました。引き続き、第 2 回も開催予定です。詳しくは次頁を参照ください。

今後に向けて

オンライン機能を使えば、さらに様々な企画が可能であるようにも考えています。執筆者へのインタビューや対談、トークライブなどもできそうです。編集部でも随時企画し、ご案内していこうと考えていますが、読者からのご要望についてもぜひお聞きできればと思っておりますので、ぜひご意見をお寄せください（メール：takashi_otani7929@yahoo.co.jp まで）。

開催情報などは、Facebook や Twitter などの SNS も活用して発信していく予定です。

◆マガジン公式 Facebook
https://www.facebook.com/taijinenjyogakumagazine

◆マガジン公式 Twitter
https://twitter.com/taimagahenshubu

◆第２回読書会のご案内◆

対人援助学マガジン第 2 回読書会を下記の要領にて開催いたします。

読書会では、指定図書を事前に読んだ参加者が集まり、読書を通して得た気づきや感想、意見を共有することで、より深く、より広く、マガジンを楽しむことができればと考えています。

期日：2021 年 7 月 23 日（金）　21 時から 23 時

定員：10 名程度（先着順）

指定図書：「心理コーディネーターになるために」（最新 45 号 3 回連載中）

※可能な範囲でバックナンバーおよび前の連載も読んでみてください。

執筆者：山下桂永子氏

執筆者紹介：（執筆者短信等から抜粋）



市の教育委員会での教育相談をはじめ、フリースクールのスタッフやスクールカウンセラー、保健所・クリニック・産業分野での業務、看護学校のピンポイント講師など、多方面で心理専門職として活動。
個人的な活動として、町家合宿を 10 年以上継続している。（「町家合宿 in 京都」を参照。マガジン 27 号から 41 号まで 14 回連載）

申込方法：メール（takashi_otani7929@yahoo.co.jp まで）にて、参加希望をお知らせください。件名を「読書会参加希望」として頂けるとわかりやすくて助かります。開催期日が近づきましたら、Zoom ミーティングに参加するための情報をお送りいたします。

編集部：大谷多加志

編集後記

編集長（ダン　シロウ）

ムムム、４００ページ越えだ。このところの新連載ラッシュ。それが目的ではないが、なんと凄いことだと編集長は喝采！

前号Ｎｏ．４４がアップされたのを、いつものように印刷して一冊だけのマガジンを作ろうとした。ところがプリンターが不具合を起こして叶わないことになった。

３００ページ超えの雑誌は、いつも両面印刷設定にして完成させているが、もう一台の安いプリンターは両面印刷に手間がかかる。そこで最近まで印刷版は作らずにいた。その結果起きたのは、マガジンを目にする機会の減少。

プリントして製本した厚い冊子を身の回りに置いていると、何時というわけではないが手にとってパラパラ見ていたようだ。だから全文は読めてはいなくても、おおよそ了解している中味になっていたのだろう。そんなわけで第４４号は、私にとって馴染みの薄い一冊になっていたようだ。

今号の編集にかかろうかという今になって、新しいプリンターを手に入れ、印刷・製本して４４号に目を通し始めることになったのだが、なかなか読み応えがある。

編集直後の時期には、料理を作った後の主婦／主夫みたいに、ちょっと食欲がないのかもしれない。しばらく置いてから味わってみるととても美味しい。そんな経験をした今回だった。

＊

今号も新連載が四本ある。そのうちの一本、渡辺原稿は第一回と第二回の一挙掲載である。前号開始予定で超早めに原稿を受け取っていたのを見落としてしまっていたのである。申し訳ないことだ。そこでこういうことになった。

編集員（チバ　アキオ）

京都市右京区内で移動することが多くなった。京都市は東に左京区、西に右京区がある。左京区は電車の路線も、有名寺院も多く、観光をはじめ、にぎやかである。対をなす右京区は河川が多く、水害の歴史が多かった。現在、社会福祉士の実習を送り出すときには福祉施設がある地域の防災ハザードマップを学生と共有している。阪神淡路大震災を経験し、東日本大震災の被災地、大川小学校を訪れたものとしてすべきことと考えている。

右京区を自転車で動いていると本当に川や水路が多い。京都に住んで 20 年以上になるが地域の理解のために川は欠かせない。川や、水路、川に蓋をして道路になった暗渠（あんきょ）も知ると更に深まる。京都には「〇〇川通り」という川由来の道が複数あるし、調べると住民が自ら勤労奉仕で川を付け替えた歴史にも出会う。

川は海に通じる。山の恵みを平地に、そして海まで運ぶ。対人援助学マガジンも、現場から社会に様々な豊かなものを運ぶ。時には氾濫し、時には水が少ない時もあっていい。鴨長明さんの「ゆく川の流れは絶えずしてしかも、もとの水にあらず」という言葉を思い出した。川の水の流れは絶えることなく続いているように見えるが、それは決して同じ水ではなく、移り変わっている。一見不変にみえるがそうではない川の姿に、世の中の変わらないものはないという意味であるのは皆様ご存じの通り。対人援助学マガジンにも、今のご時世にもピッタリな言葉だなぁと思う。川のようなマガジンでありたい。

編集員（オオタニ　タカシ）

短信にも書いたのですが、4 月から所属が変わりました。所属が変わったため、新しく取り組むこともあります。臨床心理士の資格を取って 15 年くらい経ちますが、ここにきて「臨床心理学」に関する授業を初めて担当することになったりしました。やったこともないので、毎回準備に追われますが、どうせやるならやっつけ仕事ではなく面白く仕上げたい。苦手な精神医学の部分をどうしたものか…と思案して、ふと思い出してマガジンのバックナンバーから必要な資料を見つけ、授業内容をまとめました。「あ、マガジン見てみよ」。

この発想が選択肢にあるか無いかが、かなり大きくなってきた気がします。

一方で、変わらないこともあります。実感としては、変わらないものの方が多い気がします。このマガジンの執筆と編集もそうです。また、マガジン執筆者訪問記は順調に 2 回目を迎え、対人援助学マガジン読書会もスタートしました。変わらず続けていくことの中にも、自分にできる範囲で何らかの“よい変化”を付け加えていきたいです。そして、そんな営みを一緒に続ける多くの執筆者の皆さんがいることを本当に心強く思い、いつも励まされています。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町４３８

ランブラス二条御幸町４０２　仕事場 D・A・N

対人援助学マガジン

通巻45号

第12巻　第1号

２０２１年６月１５日発行

http://humanservices.jp/

第46号は2021年9月15日
発刊の予定です。
原稿締切2021年8月25日！

執筆者募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。

自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

ページ制限なしの連載誌です。必要な回数も、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。 現在非会員で書いていただく事になった方には、対人援助学会への入会をお願いしています。

対人援助学会事務局

540-0021
大阪市中央区大手通2-4-1
リファレンス内
TEL&fAX学会専用　06-6910-0103

表紙の言葉

保護者と学校の連絡ノート。ずいぶん昔だが、我が家でもしばしば活躍した。当時の我が家は、学校優先ではなく、家族行動優先で夫婦は一致していた。

だから冬には毎年、一家揃って北海道にスキー旅行をしていた。一年一度の贅沢だった。当然週末だけではカバーできないので、学校を休むことになった。親が仕事の休暇を取っているのだから、子どももそれでいいとは私の言い分。

でも、多くの子ども達も親の頭にも、皆勤賞がまだ存在した。そんな中、学校は他にすることがないときに行けば良いと思っていた私は、子ども達にも押しつけの強い迷惑な親だったかもしれない。

楽しいことをさせるのが一番と確信を持って、その主張を延々と書かれた連絡ノートを受け取った先生達も迷惑なことだったろう。教師によって個人差の大きいノートへの回答だったと思う。

中には登校した日、その間の実施課題を休み時間中に仕上げろと命じた、意地の悪い先生もいた。　　団士郎

（２０２１／０６／１５）